漱石全集
第四巻

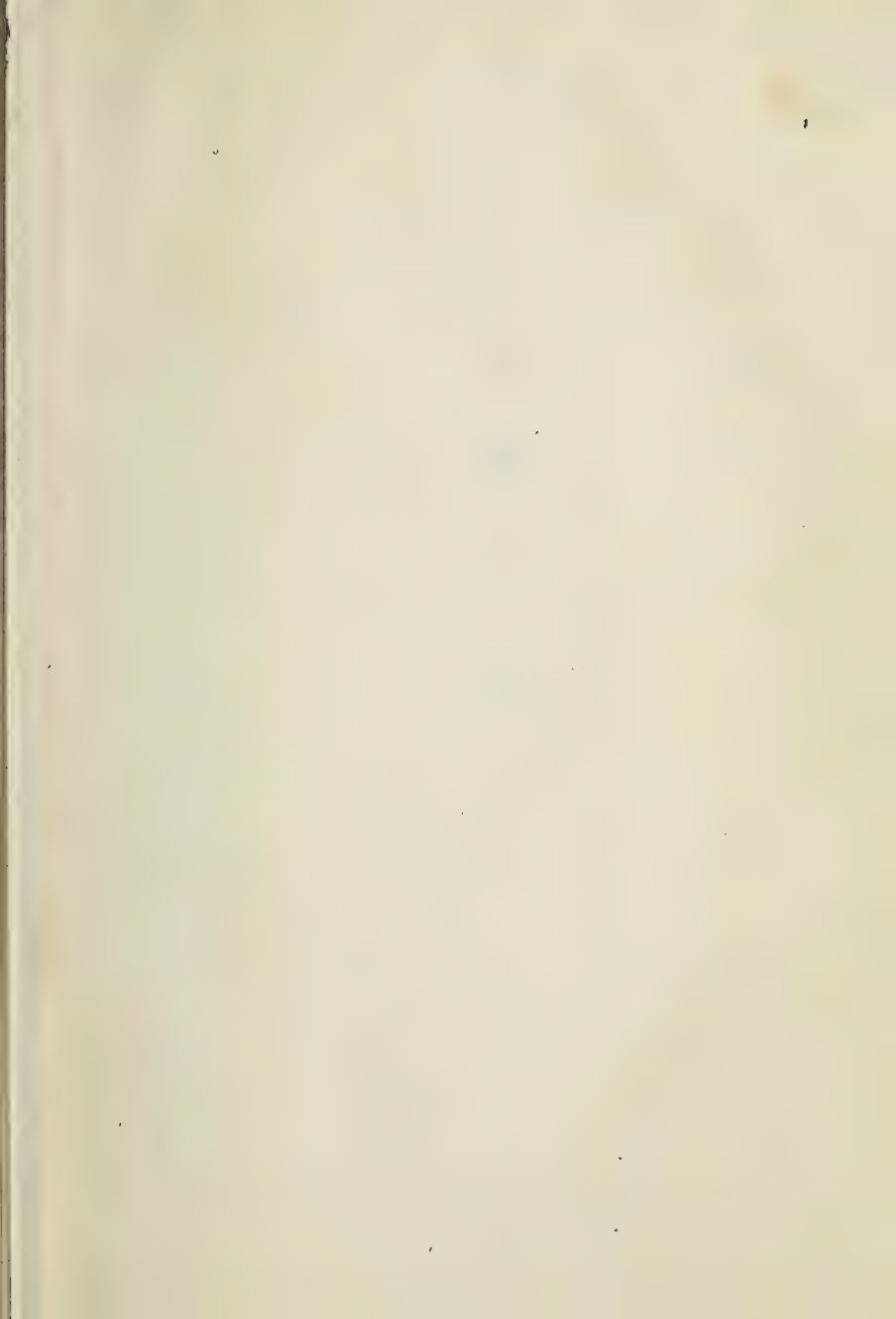
虞美人艸 坑夫

明治四十年五月撮影

目次

虞美人草　三
坑夫　三七五

虞美人草

四〇、六、二三——四〇、一〇、二九

「隨分遠いね。元來何所から登るのだ。」
と一人が手巾で額を拭きながら立ち留つた。
「何所か己にも判然せんがね。何所から登つたつて、同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから」
と顔も體軀も四角に出來上つた男が無雜作に答へた。
反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔らかき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。
「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、
「あんなに見えるんだから、譯はない」と今度は叡山を輕蔑した樣な事を云ふ。
「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ來て叡山が見えなくなつちや大變だ」
「だから見えてるから、好いぢやないか。余計な事を云はずに歩行いて居れば自然と山の上へ出るさ」
細長い男は返事もせずに、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮ぎられて、菜の花を染め出す春の強い日を受けぬ廣き額丈は目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ、さあ早く行かう」
相手は汗ばんだ額を、思ふ儘春風に曝して、粘り着いた黒髪の、逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云はず、顏とも云はず、頸窩の盡くるあたり迄、苦茶々々に掻き廻した。促がされた事には頓着する氣色もなく、
「君はあの山を頑固だと云つたね」と聞く。
「うむ、動かばこそと云つた樣な按排ぢやないか。かう云ふ風に。」と四角な肩をいとゞ四角にして、空いた方の手に栄螺の親類をつくりながら、聊か我も動かばこその姿勢を見せる。
「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう」と細長い眼の角から斜めに相手を見下した。
「さうさ、」
「あの山は動けるかい」
「アハ、、又始まつた。君は余計な事を云ひに生れて來た男だ。さあ行くぜ」と太い櫻の洋杖を、ひゆうと鳴らさぬ計りに、肩の上迄上げるや否や、歩行き出した。瘠せた男も手巾を袂に收めて歩行き出す。
「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端になる許りだ。元來頂上迄何里あるのかい」
「頂上迄一里半だ」
「どこから」

「どこからか分るものか、高の知れた京都の山だ」
瘠せた男は何にも云はずににや／＼と笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。
「君の樣に計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいい迷惑だ」
「君の樣に無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、何處から登つて、何處を見て、何處へ下りるのか見當がつかんぢやないか」
「なんの、是しきの事に計畫も何も入つたものか、高があの山ぢやないか」
「あの山でもいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つてるかい」
「知るものかね。そんな下らん事を。——君知つてるのか」
「僕も知らんがね」
「それ見るがいゝ」
「何もそんなに威張らなくてもいゝ。君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かゝる位は多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない」
「進行しなければ遣り直す丈だ。君の樣に余計な事を考へてるうちには何遍でも遣り直しが出來るよ」
と猶さつさと行く。瘠せた男は無言の儘あとに後れて仕舞ふ。
春はものゝ句になり易き京の町を、七條から一條迄横に貫ぬいて、烟る柳の間から、温き水打つ白き布

を、高野川の磧に數へ盡くして、長々と北にうねる路を、大方は二里餘りも來たら、山は自から左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れる程に曲る程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ殘る雪に寒からうと、見上げる峯の裾を縫ふて 暗き陰に走る一條の路に、爪上りなる向ふから大原女が來る。牛が來る。京の春は牛の尿の盡きざる程に、長く且つ靜かである。

「おゝい」と後れた男は立ち留りながら、先きなる友を呼んだ。おゝいと云ふ聲が白く光る路を、春風に送られながら、のそり閑と行き盡して、萱許りなる突き當りの山に打突つた時、一丁先きに動いて居た四角な影はたと留つた。瘠せた男は、長い手を肩より高く伸して、返れ々々と二度程搖つて見せる。櫻の杖が暖かき日を受けて、又ぴかりと肩の先に光つたと思ふ間もなく、彼は歸つて來た。

「何だい」

「何だいぢやない。此所から登るんだ」

「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木橋を渡るのは妙だぜ」

「君見た樣に無暗に步行いて居ると若狹の國へ出て仕舞ふよ」

「若狹へ出ても構はんが、一體君は地理を心得て居るのか」

「今大原女に聽いて見た。此橋を渡つて、あの細い道を向へ一里上がると出るさうだ」

「出るとは何處へ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上の何處へ出るだらう」
「そりや知らない。登つて見なければ分らないさ」
「ハヽヽ、君の樣な計畫好きでも其所迄は聞かなかつたと見えるね。千慮の一失か。それぢや、仰せに從つて渡るとするかな。君愈登りだぜ。どうだ、歩行けるか」
「歩行けないたつて、仕方がない」
「成程哲學者丈あらあ。それで、もう少し判然すると一人前だがな」
「何でも好いから、先へ行くが好い」
「あとから尾いて來るかい」
「いゝから行くが好ゝ」
「尾いて來る氣なら行くさ」
溪川に危うく渡せる一本橋を前後して横切つた二人の影は、草山の草繁き中を、辛うじて一縷の細き力に頂きへ拔ける小徑のなかに隱れた。草は固より去年の霜を持ち越した儘立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を透して眞上から射し込む日影に蒸し返されて、兩頰のほてる許りに暖かい。
「おい、君、甲野さん」と振り返る。甲野さんは細い山道に適當した細い體軀を眞直に立てた儘、下を向いて
「うん」と答へた。
「そろ／＼降參しかけたな。弱い男だ。あの下を見給へ」と例の櫻の杖を左から右へかけて一振りに振

り廻す。

振り廻した杖の先の盡くる、遙か向ふには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

「なる程好い景色だ」と甲野さんは例の長身を捩ぢ向けて、際どく六十度の勾配に擦り落ちもせず立ち留つて居る。

「いつの間に、こんなに高く登つたんだらう。早いものだな」と宗近君が云ふ。宗近君は四角な男の名である。

「知らぬ間に墮落したり、知らぬ間に悟つたりするのと同じ樣なものだらう」

「晝が夜になつたり、春が夏になつたり、若いものが年寄りになつたり、するのと同じ事かな。それなら、おれも疾くに心得て居る」

「ハヽヽ、夫で君は幾歳だつたかな」

「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

「僕は分かつてるさ」

「僕だつて分かつてるさ」

「ハヽヽ、矢つ張り隱す了見だと見える」

「隱すものか、ちやんと分つてるよ」

「だから、幾歳なんだよ」

「君から先へ云へ」と宗近君は中々動じない。
「僕は二十七さ」と甲野君は雑作もなく言つて退ける。
「さうか、それぢや、僕も二十八だ」
「大分年を取つたものだね」
「冗談を言ふな。たつた一つしか違はんぢやないか」
「だから御互にさ。御互に年を取つたと云ふんだ」
「うん御互にか、御互なら勘辨するが、おれ丈ぢや……」
「聞き捨てにならんか。さう氣にする丈まだ若い所もある樣だ」
「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」
「そら、坂の途中で邪魔になる。ちよつと退いて遣れ」
百折れ千折れ、五間とは直に續かぬ坂道を、呑氣な顔の女が、御免やすと下りて來る。身の丈に餘る粗朶の大束を、緑り洩る濃き髪の上に壓へ付けて、手も懸けずに戴きながら、宗近君の横を擦り拔ける。生ひ茂る立ち枯れの萱をごそつかせた後ろ姿の眼につくは、目暗縞の黒きが中を斜に拔けた赤襷である。一里を隔てゝも、そこと指す指の先に、引つ着いて見える程の藁葺は、この女の家でもあらう。天武天皇の落ち玉へる昔の儘に、棚引く霞は長しへに八瀬の山里を封じて長閑である。
「此邊の女はみんな奇麗だな。感心だ。何だか畫の樣だ」と宗近君が云ふ。
「あれが大原女なんだらう」

「なに八瀬女だ」
「八瀬女と云ふのは聞いた事がないぜ」
「なくつても八瀬の女に違ない。嘘だと思ふなら今度逢つたら聞いて見様」
「誰も嘘だと云やしない。然しあんな女を総稱して大原女と云ふんだらうぢやないか」
「屹度さうか、受合ふか」
「さうする方が詩的でいゝ。何となく雅でいゝ」
「ぢや當分雅號として用ゐてやるかな」
「雅號は好いよ。世の中には色々な雅號があるからな。立憲政體だの、萬有神教だの、忠、信、孝、悌、だのつて樣々な奴があるから」
「なる程、蕎麥屋に藪が澤山出來て、牛肉屋がみんないろはになるのも其格だね」
「さうさ、御互に學士を名乘つてるのも同じ事だ」
「詰らない。そんな事に歸着するなら雅號は廢せばよかつた」
「是から君は外交官の雅號を取るんだらう」
「ハヽヽ、あの雅號は中々取れない。試驗官に雅味のある奴が居ない所爲だな」
「もう何遍落第したかね。三遍か」
「馬鹿を申せ」
「ぢや二遍か」

「なんだ、ちやんと知つてる癖に。憚りながら落第は是でたつた一遍だ」
「一度受けて一遍なんだから、是からさき……」
「何遍やるか分らないとなると、おれも少々心細い。ハヽヽヽ。時に僕の雅號はそれでいゝが、君は全體何をするんだい」
「僕か。僕は叡山へ登るのさ。――おい君、さう後足で石を轉がしてはいかん。後から尾いて行くものが劍呑だ。――あゝ隨分草臥た。僕はこゝで休むよ」と甲野さんは、がさりと音を立てゝ枯薄の中へ仰向けに倒れた。
「おやもう落第か。口でこそ色々な雅號を唱へるが、山登りはから駄目だね」と宗近君は例の櫻の杖で、甲野さんの寐て居る頭の先をこつ／＼敲く。敲く度に杖の先が薄を薙ぎ倒してがさ／＼音を立てる。
「さあ起きた。もう少しで頂上だ。どうせ休むなら及第してから、緩つくり休まう。さあ起きろ」
「うん」
「うんか、おや／＼」
「反吐が出さうだ」
「反吐を吐いて落第するのか、おや／＼。ぢや仕方がない。おれも一と休息仕らう」
甲野さんは黒い頭を、黄ばんだ草の間に押し込んで、帽子も傘も坂道に轉がした儘、仰向けに空を眺めてゐる。蒼白く面高に削り成せる彼の顏と、無邊際に浮き出す薄き雲の翛然と消えて入る大いなる天上界の間には、一塵の眼を遮ぎるものもない。反吐は地面の上へ吐くものである。大空に向ふ彼の眼中には、

地を離れ、俗を離れ、古今の世を離れて萬里の天があるのみである。
宗近君は米澤絣の羽織を脱いで、袖疊みにして一寸肩の上へ乘せたが、又思ひ返して、今度は胸の中から兩手をむづと出して、うんと云ふ間に諸肌を脱いだ。下から袖無が露はれる。袖無の裏から、もぢやもぢやした狐の皮が食み出してゐる。是は支那へ行つた友人の贈り物として君が大事の袖無である。千羊の皮は一狐の腋にしかずと云つて、君はいつでも此袖無を一着して居る。其癖裏に着けた狐の皮は斑にほうけて、無暗に脱落する所を以て見ると、何でも余程性の惡い野良狐に違ない。
「御山へ御登りやすのどすか、案内しまほうか、ホヽ、妙な所に寐てゐやはる」と又目暗縞が下りて來る。
「おい、甲野さん。妙な所に寐て居やはるとさ。女に迄馬鹿にされるぜ。好い加減に起きてあるかうぢやないか」
「女は人を馬鹿にするもんだ」
と甲野さんは依然として天を眺めて居る。
「さう泰然と尻を据ゑちや困るな。まだ反吐を吐きさうかい」
「動けば吐く」
「厄介だなあ」
「凡ての反吐は動くから吐くのだよ。俗界萬斛の反吐皆動の一字より來る」
「何だ本當に吐く積りぢやないのか。つまらない。僕は又愈となつたら、君を擔いで麓迄下りなけり

やならんかと思つて、内心少々辟易して居たんだ」
「余計な御世話だ。誰も頼みもしないのに」
「君は愛嬌のない男だね」
「君は愛嬌の定義を知つてるかい」
「何の蚊のと云つて、一分でも余計動かずに居様と云ふ算段だな。怪しからん男だ」
「愛嬌と云ふのはね、――自分より強いものを斃す柔かい武器だよ」
「夫ぢや無愛想は自分より弱いものを、扱き使ふ鋭利なる武器だらう」
「そんな論理があるものか。動かうとすればこそ愛嬌も必要になる。動けば反吐を吐くと知つた人間に愛嬌が入るものか」
「いやに詭辯を弄するね。そんなら僕は御先へ御免蒙るぜ。いゝか」
「勝手にするがいゝ」と甲野さんは矢つ張り空を眺めて居る。
宗近君は脱いだ両袖をぐる〳〵と腰へ巻き付けると共に、毛脛に纏はる竪縞の裾をぐいと端折つて、同じく白縮緬の周囲に畳み込む。最前袖畳にした羽織を櫻の杖の先へ引き懸けるが早いか「一劍天下を行く」と遠慮のない聲を出しながら、十歩に盡くる岨路を飄然として左へ折れたぎり見えなくなつた。
あとは靜である。靜かなる事定つて、靜かなるうちに、わが一脈の命を托すると知つた時、此大乾坤のいづくにか通ふ、わが血潮は、粛々と動くにも拘はらず、音なくして寂定裏の形骸を土木視して、しかも依稀たる活氣を帯ぶ。生きてあらん程の自覺に、生きて受くべき有耶無耶の累を捨てたるは、雲の岫を出

で、空の朝な夕なを變はると同じく、凡ての拘泥を超絕したる活氣である。古今來を空しうして、東西位を盡くしたる世界の外なる世界に片足を踏み込んでこそ――それでなければ化石になりたい。赤も吸ひ、青も吸ひ、黃も紫も吸ひ盡くして、元の五彩に還す事を知らぬ眞黑な化石になりたい。それでなければ死んで見たい。死は萬事の終である。又萬事の始めである。時を積んで日となすとも、日を積んで月となすとも、月を積んで年となすとも、詮ずるに凡てを積んで墓となすに過ぎぬ。墓の此方側なる凡てのいさくさは、肉一重の垣に隔てられた因果に、枯れ果てたる骸骨に入らぬ情けの油を注して、要なき屍に長夜の踊をおどらしむる滑稽である。遐なる心を持てるものは、遐なる國をこそ慕へ。

　考へるともなく考へた甲野君は漸くに身を起した。又歩行かねばならぬ。見たくもない叡山を見て、入らざる豆の數々に、役にも立たぬ登山の痕迹を、二三日が程は、苦しき記念と殘さねばならぬ。苦しき記念が必要ならば數へて白頭に至つて盡きぬ程ある。裂いて髓に入つて消えぬ程ある。いたづらに足の底に膨れ上る豆の十や二十――と切り石の鋭どき上に半ば掛けたる編み上げの踵を見下ろす途端、石はきりゝと面を更へて、乘せかけた足をすはと云ふ間に二尺程滑べらした。甲野さんは

「萬里の道を見ず」

と小聲に吟じながら、傘を力に、細道を登り詰めると、急に折れた胸突坂が、下から來る人を天に誘ふ風情で帽に逼つて立つて居る。甲野さんは眞廂を煽つて坂の下から眞一文字に坂の盡きる頂きを見上げた。坂の盡きた頂きから、淡きうちに限りなき春の色を漲ぎらしたる果もなき空を見上げた。甲野さんは此時

「只萬里の天を見る」

と第二の句を、同じく小聲に歌つた。
草山を登り詰めて、雜木の間を四五段上ると、急に肩から暗くなつて、踏む靴の底が、濕つぽく思はれる。路は山の脊を、西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失するとすぐ森に移つたのである。近江の空を深く色どる此森の、動かねば、その上の幹と、その上の枝が、幾重幾里に連なりて、昔しながらの翠りを年毎に黑く疊むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の惡僧を埋めて、猶余りある葉裏に、三藐三菩提の佛達を埋め盡くして、森々と半空に聳ゆるは、傳教大師以來の杉である。甲野さんは只一人此杉の下を通る。

右よりし左よりして、行く人を兩手に遮ぎる杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地磐に食ひ入るのみか、餘る力に、跳ね返して暗き道を、二寸の高さに段々と横切つて居る。登らんとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地よき幾級の階を、山靈の賜と甲野さんは息を切らして上つて行く。

行く路の杉に逼つて、暗きより洩るゝが如く這ひ出づる日影蔓の、足に纏はる程に繁きを越せば、引かれたる蔓の長きを傳はつて、手も屆かぬに、朽ちかゝる齒朶の、風なき晝をふら〳〵と搖く。

「此所だ、此所だ」

と宗近君が急に頭の上で天狗の樣な聲を出す。朽草の土となる迄積み古るしたる上を、踏めば深靴を隱す程に踏み答へもなきに、甲野さんは漸くの思で、蝙蝠傘を力に、天狗の座迄、登つて行く。

「善哉々々、われ汝を待つ事こゝに久しだ。全體何を愚圖々々して居たのだ」

甲野さんは只あゝと云つた許りで、いきなり蝙蝠傘を放り出すと、其上へどさりと尻持を突いた。

「又反吐か、反吐を吐く前に、一寸あの景色を見なさい。あれを見ると折角の反吐も殘念ながら收まつちまふ」

と例の櫻の杖で、杉の間を指す。天を封ずる老幹の亭々と行儀よく竝ぶ隙間に、的皪と近江の湖が光つた。

「成程」と甲野さんは眸を凝らす。

鏡を延べたと許りでは飽き足らぬ。琵琶の銘ある鏡の明かなるを忌んで、叡山の天狗共が、宵に偸んだ神酒の醉に乘じて、曇れる氣息を一面に吹き掛けた樣に――光るものの底に沈んだ上には、野と山にはびこる陽炎を巨人の繪の具皿にあつめて、只一刷に抹り付けた、瀲灔たる春色が、十里の外に糢糊と棚引いて居る。

「成程」と甲野さんは又繰り返した。

「成程丈か。君は何を見せてやつても嬉しがらない男だね」

「見せてやるなんて、自分が作つたものぢやあるまいし」

「さう云ふ恩知らずは、得て哲學者にあるもんだ。親不孝な學問をして、日々人間と御無沙汰になつて……」

「誠に濟みません。――親不孝な學問か、ハヽヽヽ。君白い帆が見える。そら、あの島の青い山を背にして――丸で動かんぜ。何時迄見て居ても動かんぜ」

「退屈な帆だな。判然しない所が君に似て居らあ。然し奇麗だ。おや、此方にも居るぜ」

「あの、ずつと向ふの紫色の岸の方にもある」

「うん、ある、ある。退屈だらけだ。べた一面だ」
「丸で夢の樣だ」
「何が」
「何がつて、眼前の景色がさ」
「うんさうか。僕は又君が何か思ひ出したのかと思つた。ものは君、さつさと片付けるに限るね。夢の如しだつて懐手をしてるちや、駄目だよ」
「何を云つてるんだい」
「おれの云ふ事も矢つ張り夢の如しか。アハヽヽ、時に將門が氣燄を吐いたのは何所いらだらう」
「何でも向ふ側だ。京都を瞰下したんだから。こつちぢやない。あいつも馬鹿だなあ」
「將門か。うん、氣燄を吐くより、反吐でも吐く方が哲學者らしいね」
「哲學者がそんなものを吐くものか」
「本當の哲學者になると、頭ばかりになつて、只考へる丈か、丸で達磨だね」
「あの烟る樣な島は何だらう」
「あの島か、いやに縹緲としてるね。大方竹生島だらう」
「本當かい」
「なあに、好い加減さ。雅號なんさ、どうだつて、質さへ慥かなら構はない主義だ」
「そんな慥かなものが世の中にあるものか、だから雅號が必要なんだ」

「人間萬事夢の如しか。やれ〳〵」
「只死と云ふ事丈が眞だよ」
「いやだぜ」
「死に突き當らなくつちや、人間の浮氣は中々已まないものだ」
「已まなくつても好いから、突き當るのは眞つ平御免だ」
「御免だつて今に來る。來た時にあゝさうかと思ひ當るんだね」
「誰が」
「小刀細工の好な人間がさ」
山を下りて近江の野に入れば宗近君の世界である。高い、暗い、日のあたらぬ所から、うらゝかな春の世を、寄り付けぬ遠くに眺めて居るのが甲野さんの世界である。

二

紅を彌生に包む晝酣なるに、春を抽んずる紫の濃き一點を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴たらしたるが如き女である。夢の世を夢よりも艷に眺めしむる黑髮を、亂るゝなと疊める鬢の上には、玉虫貝を冴々と菫に刻んで、細き金脚にはつしと打ち込んでゐる。靜かなる晝の、遠き世に心を奪ひ去らんとするを、黑き眸のさと動けば、見る人は、あなやと我に歸る。半滴のひろがりに、一瞬の短かきを偸んで、疾風の威を作すは、春に居て春を制する深き眼である。此瞳を遡つて、魔力の境を窮むるとき、桃源に骨

を白うして、再び塵寰に歸するを得ず。只の夢ではない。糢糊たる夢の大いなるうちに、燦たる一點の妖星が、死ぬる迄我を見よと、紫色の、眉近く逼るのである。女は紫色の着物を着て居る。

靜かなる晝を、靜かに栞を抽いて、箔に重き一卷を、女は膝の上に讀む。

「墓の前に跪づいて云ふ。此手にて――此手にて君を埋め參らせしを、今は此手も自由ならず。捕はれて遠き國に、行く程もあらねば、此手にて君が墓を掃ひ、此手にて香を焚くべき折々の、長しへに盡きたりと思ひ給へ。生ける時は、莫耶も我等を割き難きに、死こそ無慘なれ。羅馬の君は埃及に葬むられ、埃及なるわれは、君が羅馬に埋められんとす。君が羅馬は――わが思ふ程の恩を、憂きわれに拒める、君が羅馬は、つれなき君が羅馬なり。去れど、情だにあらば、羅馬の神は、よも生きながらの辱に、市に引かるゝわれを、雲の上より餘所に見給はざるべし。君が仇なる人の勝利を飾るわれを。埃及の神に見離されたるわれを。君が片身と殘し給へるわが命こそ仇なれ。情ある羅馬の神に祈る。――われを隱し給へ。恥見えぬ墓の底に、君とわれを永劫に隱し給へ。」

女は顏を上げた。蒼白き頰の締れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、餘れる何物かを藏せるが如く、藏せるものを見極はめんとあせる男は悉く虜となる。男は眩げに半ば口元を動かした。口の居住の崩るゝ時、此人の意志は既に相手の餌食とならねばならぬ。下唇のわざとらしく色めいて、然も判然と口を切らぬ瞬間に、切り付けられたものは、必ず受け損ふ。

女は唯隼の空を搏つが如くちらと眸を動かしたのみである。男はにや／＼と笑つた。勝負は既に付いた。舌を腭頭に飛ばして、泡吹く蟹と、烏鷺を爭ふは策の尤も拙なきものである。風勵鼓行して、已むな

く城下の誓をなさしむるは策の尤も凡なるものである。蜜を含んで針を吹き、酒を強ひて毒を盛るは策の未だ至らざるものである。最上の戰には一語をも交ふる事を許さぬ。拈華の一拶は、此を去る八千里ならざるも、遂に不言にして又不語である。只躊躇する事刹那なるに、虛をうつ惡魔は、思ふ坪に迷と書き、惑と書き、失はれたる人の子、と書いて、すはと云ふ間に引き上げる。下界萬丈の鬼火に、腥さき青燐を筆の穗に吹いて、會釋もなく描き出せる文字は、白髮をたわしにして洗つても容易くは消えぬ。笑つたが最後、男は此笑を引き戾す譯には行くまい。

「小野さん」と女が呼びかけた。

「え？」とすぐ應じた男は、崩れた口元を立て直す暇もない。唇に笑を帶びたのは、半ば無意識にあらはれたる、心の波を、手持無沙汰に草書に崩した迄であつて、崩したものゝ盡きんとする間際に、崩すべき第二の波の來ぬのを煩つて居た折であるから、渡りに船の「え？」は心安く咽喉を滑り出たのである。女は固より曲者である。「え？」と云はせた儘、しばらくは何にも云はぬ。

「何ですか」と男は二の句を繼いだ。繼がねば折角の呼吸が合はぬ。呼吸が合はねば不安である。相手を眼中に置くものは、王侯と雖ども常に此感を起す。況んや今、紫の女の外に、何ものも映らぬ男の眼には、二の句は固より愚かである。

女はまだ何にも言はぬ。床に懸けた容齋の、小松に交る稚子髷の、太刀持こそ、昔しから長閑である。狩衣に、鹿毛なる駒の主人は、事なきに慣れし殿上人の常か、動く景色も見えぬ。只男丈は氣が氣でない。一の矢はあだに落ちた、二の矢の中つた所は判然せぬ。是が外れゝば、又繼がねばならぬ。男は氣息を凝

らして女の顔を見詰めて居る。肉の足らぬ細面に豫期の情を漲らして、重きに過ぐる唇の、奇か偶かを疑がひつゝも、手答のあれかしと念ずる樣子である。

「まだ、そこに入らしつたんですか」と女は落ち付いた調子で云ふ。是は意外な手答である。天に向つて彎ける弓の、危うくも吾が頭の上に、瓢箪羽を舞ひ戻した樣なものである。男の我を忘れて、相手を見守るに引き反へて、女は始めより、わが前に坐はれる人の存在を、膝に開ける一冊のうちに見失つてゐたと見える。其癖、女は此書物を、箔美しと見付けた時、今携へたる男の手から捥ぎ取る樣にして、讀み始めたのである。

男は「えゝ」と申したぎりであつた。

「此女は羅馬へ行く積なんでせうか」

女は腑に落ちぬ不快の面持で男の顔を見た。小野さんは「クレオパトラ」の行爲に對して責任を持たねばならぬ。

「行きはしませんよ。行きはしませんよ」と縁もない女王を辯護した樣な事を云ふ。

「行かないの？ 私だつて行かないわ」と女は漸く納得する。小野さんは暗い隧道を辛うじて拔け出した。

「沙翁の書いたものを見ると其女の性格が非常によく現はれて居ますよ」

小野さんは隧道を出るや否や、すぐ自轉車に乘つて馳け出さうとする。魚は淵に躍る、鳶は空に舞ふ。小野さんは詩の國に住む人である。

稜錐塔の空を燬く所、獅身女の砂を抱く所、長河の鰐魚を藏する所、二千年の昔妖姫クレオパトラの安圖尼と相擁して、駝鳥の翣箑に輕く玉肌を拂へる所、は好畫題である又好詩料である。小野さんの本領である。

「沙翁の描いたクレオパトラを見ると一種妙な心持ちになります」

「どんな心持ちに？」

「古い穴の中へ引き込まれて、出る事が出來なくなつて、ぼんやりしてゐるうちに、紫色のクレオパトラが眼の前に鮮やかに映て來ます。剝げかゝつた錦繪のなかゝら、たつた一人がぱつと紫に燃えて浮き出して來ます」

「紫？よく紫と仰やるのね。何故紫なんです」

「何故つて、さう云ふ感じがするのです」

「ぢや、斯んな色ですか」と女は青き疊の上に半ば敷ける、長き袖を、さつと捌いて、小野さんの鼻の先に飜へす。小野さんの眉間の奥で、急にクレオパトラの臭がぷんとした。

「え？」と小野さんは俄然として我に歸る。空を掠める子規の、胸も及ばぬに、降る雨の底を突き通して過ぎたる如く、ちらと動ける異しき色は、疾く收まつて、美くしい手は膝頭に乘つてゐる。脈打つとさへ思へぬ程に靜かに乘つてゐる。

ぷんとしたクレオパトラの臭は、次第に鼻の奥から逃げて行く。二千年の昔から不意に呼び出された影の、戀々と遠のく後を追ふて、小野さんの心は杳窕の境に誘はれて、二千年のかなたに引き寄せらるゝ。

「そよと吹く風の戀や、涙の戀や、嘆息の戀ぢやありません。暴風雨の戀、暦にも錄て居ない大暴雨の戀、九寸五分の戀です」と小野さんが云ふ。

「九寸五分の戀が紫なんですか」

「九寸五分の戀が紫なんぢやない、紫の戀が九寸五分なんです」

「戀を斬ると紫色の血が出るといふのですか」

「戀が怒ると九寸五分が紫色に閃ると云ふのです」

「沙翁がそんな事を書いてゐるんですか」

「沙翁が描いた所を私が評したのです。――安圖尼が羅馬でオクテヸアと結婚した時に――使のものが結婚の報道を持つて來た時に――クレオパトラの……」

「紫が嫉妬で濃く染まつたんでせう」

「紫が埃及の日で焦げると、冷たい短刀が光ります」

「此位の濃さ加減なら大丈夫ですか」と言ふ間もなく長い袖が再び閃いた。小野さんは一寸話の腰を折られた。相手に求むる所がある時でさへ、腰を折らねば承知をせぬ女である。毒氣を拔いた女は得意に男の顏を眺めてゐる。

「そこでクレオパトラがどうしました」と抑へた女は再び手綱を緩める。小野さんは馳け出さなければならぬ。

「オクテヸヤの事を根堀り葉堀り、使のものに尋ねるんです。其尋ね方が、詰り方が、性格を活動させ

てるから面白い。オクテヰヤは自分の樣に脊が高いかの、髮の毛はどんな色だの、顏が丸いかの、聲が低いかの、年はいくつだの、何所迄も使者を追窮します。……」

「全體追窮する人の年はいくつなんです」

「クレオパトラは三十許りでせう」

「夫ぢや私に似て大分御婆さんね」

女は首を傾けてホヽと笑つた。男は怪しき靨のなかに捲き込まれた儘一寸途方に暮れてゐる。肯定すれば僞りになる。唯否定するのは、あまりに平凡である。皓い歯に交る一筋の金の耀いて又消えんとする間際迄、男は何の返事も出なかつた。女の年は二十四である。小野さんは、自分と三つ違である事を疾うから知つてゐる

美しき女の二十を越えて夫なく、空しく一二三を數へて、二十四の今日迄嫁がぬは不思議である。春院徒らに更けて、花影欄に闌なるを、遲日早く盡きんとする風情と見て、琴を抱いて恨み顏なるは、嫁ぎ後れたる世の常の女の習なるに、麈尾に拂ふ折々の空音に、琵琶らしき響を琴柱に聽いて、本來ならぬ音色を興あり氣に樂しむは愈不思議である。仔細は固より分らぬ。此男と此女の、互に語る言葉の影から、時々に覗き込んで、入らざる臆測に、有耶無耶なる戀の八卦をひそかに占なふ許りである。

「年を取ると嫉妬が增して來るものでせうか」と女は改たまつて、小野さんに聞いた。

小野さんは又面喰ふ。詩人は人間を知らねばならん。女の質問には當然答ふべき義務がある。けれども知らぬ事は答へられる譯がない。中年の人の嫉妬を見た事のない男は、いくら詩人でも文士でも致し方が

ない。小野さんは文字に堪能なる文學者である。
「さうですね。矢つ張り人に因るでせう」
角を立てない代りに挨拶は濁つて居る。夫で濟ます女ではない。
「私がそんな御婆さんになつたら――今でも御婆さんでしたつけね。ホヽ――然しその位な年になつたら、どうでせう」
「あなたが――あなたに嫉妬なんて、そんなものは、今だつて……」
「有りますよ」
女の聲は靜かなる春風をひやりと斬つた。詩の國に遊んでゐた男は、急に足を外して下界に落ちた。落ちて見れば只の人である。相手は寄り付けぬ高い崖の上から、此方を見下してゐる。自分をこんな所に蹴落したのは誰だと考へる暇もない。
「淸姬が蛇になつたのは何歲でせう」
「左樣、矢つ張り十代にしないと芝居になりませんね。大方十八九でせう」
「安珍は」
「安珍は二十五位がよくはないでせうか」
「小野さん」
「えゝ」
「あなたは御何歲でしたかね」

「私ですか――私はと……」
「考へないと分らないんですか」
「いえ、なに――慥か甲野君と御同い年でした」
「さう〳〵兄と御同い年ですね。然し兄の方が餘つ程老けて見えますよ」
「なに、さうでも有りません」
「本當よ」
「何か奢りませうか」
「えゝ、奢つて頂戴。然し、あなたのは顔が若いのぢやない。氣が若いんですよ」
「そんなに見えますか」
「丸で坊つちやんの樣ですよ」
「可愛想に」
「可愛らしいんですよ」

女の二十四は男の三十にあたる。理も知らぬ、非も知らぬ、世の中が何故廻轉して、何故落ち付くかは無論知らぬ。大いなる古今の舞臺の極まりなく發展するうちに、自己は如何なる地位を占めて、如何なる役割を演じつゝあるかは固より知らぬ。只口丈は巧者である。天下を相手にする事も、國家を向ふへ廻す事も、一團の群衆を眼前に、事を處する事も、女には出來ぬ。女は只一人を相手にする藝當を心得て居る。一人と一人と戰ふ時、勝つものは必ず女である。男は必ず負ける。具象の籠の中に飼はれて、個體の粟を

啄んでは嬉しげに羽搏するものは女である。籠の中の小天地で女と鳴く音を競ふものは必ず斃れる。小野さんは詩人である。詩人だから、此籠の中に半分首を突き込んでゐる。小野さんは美事に鳴き損ねた。

「可愛らしいんですよ。丁度安珍の樣なの」

「安珍は苛い」

許せと云はぬばかりに、今度は受け留めた。

「御不服なの」と女は眼元丈で笑ふ。

「だつて……」

「だつて、何が御厭なの」

「私は安珍の樣に逃げやしません」

是を逃げ損ねの受太刀と云ふ。坊つちやんは機を見て奇麗に引き上げる事を知らぬ。

「ホヽ、私は清姫の樣に追つ懸けますよ」

男は默つてゐる。

「蛇になるには、少し年が老け過ぎてゐますかしら」

時ならぬ春の稻妻は、女を出でゝ男の胸をするりと透した。色は紫である。

「藤尾さん」

「何です」

呼んだ男と呼ばれた女は、面と向つて對座して居る。六疊の座敷は緑り濃き植込に隔てられて、往來に

鳴る車の響さへ幽かである。寂寞たる浮世のうちに、只二人のみ、生きてゐる。茶縁の疊を境に、二尺を隔てゝ互に顔を見合した時、社會は彼等の傍を遠く立ち退いた。救世軍は此時太鼓を敲いて市中を練り歩るいて居る。病院では腹膜炎で患者が虫の氣息を引き取らうとして居る。露西亜では虚無黨が爆裂彈を投げてゐる。停車場では掏摸が捕まつてゐる。火事がある。赤子が生れかゝつてゐる。練兵場で新兵が叱られてゐる。身を投げてゐる。人を殺してゐる。藤尾の兄さんと宗近君は叡山に登つてゐる。

花の香さへ重きに過ぐる深き巷に、呼び交はしたる男と女の姿が、死の底に減り込む春の影の上に、明らかに躍りあがる。宇宙は二人の宇宙である。脈々三千條の血管を越す、若き血潮の、寄せ來る心臓の扉は、戀と開き戀と閉ぢて、動かざる男女を、躍然と大空裏に描き出してゐる。二人の運命は此危うき刹那に定まる。東か西か、微塵だに體を動かせばそれ限りである。呼ぶは只事ではない、呼ばれるのも只事ではない。生死以上の難關を互の間に控へて、驀然たる爆發物が抛げ出されるか、抛げ出すか、動かざる二人の身體は二塊の焔である。

「御歸りいつ」と云ふ聲が玄關に響くと、砂利を軋る車輪がはたと行き留まつた。襖を開ける音がする。小走りに廊下を傳ふ足音がする。張り詰めた二人の姿勢は崩れた。

「母が歸つて來たのです」と女は座つた儘、何氣なく云ふ。

「あゝ、さうですか」と男も何氣なく答へる。心を判然と外に露はさぬうちは罪にはならん。取り返しのつく謎は、法庭の證據としては薄弱である。何氣なく、もてなして居る二人は、互に何氣のあつた事を默許しながら、何氣なく安心してゐる。天下は太平である。何人も後指を指す事は出來ぬ。出來れば向ふ

が悪るい。天下は飽く迄も太平である。
「御母さんは、何處へか行らしつたんですか」
「えゝ、一寸買物に出掛けました」
「大分御邪魔をしました」と立ち懸ける前に居住を一寸繕ろひ直す。洋袴の襞の崩れるのを氣にして、常は出來る丈樂に坐る男である。いざと云へば、突つかい棒に、尻を擧げる爲めの、膝頭に揃へた兩手は、雪の樣なカフスに甲迄蔽はれて、くすんだ鼠縞の袖の下から、七寶の夫婦釦が、きらりと顏を出してゐる。
「まあ御緩くりなさい。母が歸つても別に用事はないんですから」と女は歸つた人を迎へる氣色もない。男はもとより尻を上げるのは厭である。
「然し」と云ひながら、隱袋の中を搜ぐつて、太い卷烟草を一本取り出した。烟草の烟は大抵のものを紛らす。況んや是は金の吸口の着いた埃及産である。輪に吹き、山に吹き、雲に吹く濃き色のうちには、立ち掛けた腰を据ゑ直して、クレオパトラと自分の間隔を少しでも詰める便が出來んとも限らぬ。薄い烟りの、黒い口髭を越して、ゆたかに流れ出した時、クレオパトラは果然、
「まあ、御坐り遊ばせ」と叮嚀な命令を下した。
男は無言の儘再び膝を崩す。御互に春の日は永い。
「近頃は女許りで淋しくつていけません」
「甲野君は何時頃御歸りですか」
「何時頃歸りますか、ちつとも分りません」

「御音信が有りますか」
「いゝえ」
「時候が好いから京都は面白いでせう」
「あなたも一所に御出になれば宜かつたのに」
「私は……」と小野さんは後を暈かして仕舞ふ。
「何故行らつしやらなかつたの」
「別に譯はないんです」
「だつて、古い御馴染ぢやありませんか」
「え？」
小野さんは、烟草の灰を疊の上に無遠慮に落す。「え？」と云ふ時、不要意に手が動いたのである。
「京都には長い事、居らしつたんぢやありませんか」
「それで御馴染なんですか」
「えゝ」
「あんまり古い馴染だから、もう行く氣にならんのです」
「隨分不人情ね」
「なに、そんな事はないです」と小野さんは比較的眞面目になつて、埃及烟草を肺の中迄吸ひ込んだ。
「藤尾、藤尾」と向ふの座敷で呼ぶ聲がする。

「御母さんでせう」と小野さんが聞く。

「えゝ」

「私はもう歸ります」

「何故です」

「でも何か御用が御在りになるんでせう」

「あつたつて構はないぢやありませんか。先生ぢやありませんか。先生が敎へに來てゐるんだから、誰が歸つたつて構はないぢやありませんか」

「然しあんまり敎へないんだから」

「敎はつて居ますとも、是丈敎はつてゐれば澤山ですわ」

「さうでせうか」

「クレオパトラや、何か澤山敎はつてるぢやありませんか」

「クレオパトラ位で好ければ、いくらでもあります」

「藤尾、藤尾」と御母さんは頻りに呼ぶ。

「失禮ですが一寸御免蒙ります。――なにまだ伺ひたい事があるから待つてゐて下さい」

藤尾は立つた。男は六疊の座敷に取り殘される。平床に据ゑた古薩摩の香爐に、何時燒き殘したる烟の迹か、こぼれた灰の、灰の儘に崩れもせず、藤尾の部屋は昨日も今日も靜かである。敷き棄てた八反の坐布團に、主を待つ間の溫氣は、輕く拂ふ春風に、ひつそり閑と吹かれてゐる。

小野さんは默然と香爐を見て、又默然と布團を見た。崩し格子の、疊から浮く角に、何やら光るものが奧に挾まつてゐる。小野さんは少し首を横にして輝やくものを物色して考へた。どうも時計らしい。今迄は頓と氣がつかなかつた。藤尾の立つ時に、絹障のしなやかに、布團が擦れて、隱したものが出掛つたのかも知れぬ。然し布團の下に時計を隱す必要はあるまい。小野さんは再び布團の下を覗いて見た。松葉形に繋ぎ合せた鎖の折れ曲つて、表に向いて居る方が、細く光線を射返す奧に、盛り上がる七子の縁が幽かに浮いて居る。慥かに時計に違ない。小野さんは首を傾けた。

金は色の純にして濃きものである。富貴を愛するものは必ず此色を好む。榮譽を冀ふものは必ず此色を擇む。盛名を致すものは必ず此色を飾る。磁石の鐵を吸ふ如く、此色は凡ての黑き頭を吸ふ。此色の前に平身せざるものは、彈力なき護謨である。一個の人として世間に通用せぬ。小野さんはいゝ色だと思つた。

折柄向ふ座敷の方角から、絹のさわつく音が、曲がり椽を傳はつて近付いて來る。小野さんは覗き込んだ眼を急に外らして、素知らぬ顏で、容齋の軸を眞正面に眺めて居ると、二人の影が敷居口にあらはれた。

黑縮緬の三つ紋を撫で肩に着こなして、くすんだ半襟に、髷許りを古風につや〳〵と光らして居る。

「おや入らつしやい」と御母さんは輕く會釋して、椽に近く座を占める。鶯も鳴かぬ代りに、目に立つ程の塵もなく掃除の行き屆いた庭に、長過ぎる程の松が、わが物顏に一本控へてゐる。此松と此御母さんは、何となく同一體の樣に思はれる。

「藤尾が始終御厄介になりまして――嘸我儘ばかり申す事で御座いませう。丸で小供で御座いますから――さあ、どうぞ御樂に――いつも御挨拶を申さねばならん筈で御座いますが、つい年を取つて居るもの

で御座いますから、失禮のみ致します。――どうも實に赤兒で、困り切ります、駄々ばかり捏ねまして―
―でも英語丈は御蔭さまで大變好きな模樣で――近頃では大分六づかしいものが讀めるさうで、自分丈は
中々得意で居ります。――何兒が居るので御座いますから、教へて貰へば好いので御座いますが――どう
も、その、――矢つ張り兄弟は行かんものと見えまして――」
御母さんの辯舌は滾々として美事である。小野さんは一字の間投詞を挾む遑まなく、口車に乘つて馳け
て行く。行く先は固より判然せぬ。藤尾は默つて最前小野さんから借りた書物を開いて續を讀んでゐる。
「花を墓に、墓に口を接吻して、憂きわれを、ひたふるに嘆きたる女王は、浴湯をこそと召す。浴みし
たる後は夕餉をこそと召す。此時賤しき厠卒ありて小さき籃に無花果を盛りて參らす。女王の該撒に送れ
る文に云ふ。願はくは安闘尼と同じ墓にわれを埋め給へと。無花果の繁れる青き葉陰にはナイルの泥に焔
の舌を冷やしたる毒蛇を、そつと忍ばせたり。該撒の使は走る。闥を排して眼を射れば――黄金の寢臺に、
位高き裝を今日と凝らして、女王の屍は是非なく横はる。アイリスと呼ぶは女王の足のあたりに此世を
捨てぬ。チャーミオンと名づけたるは、女王の頭のあたりに、月黑き夜の露をあつめて、千顆の珠を鑄た
る冠の、今落ちんとするを力なく支ふ。闥を排したる該撒の使はこは如何にと云ふ。埃及の御代しろし召
す人の最後ぞ、斯くありてこそと、チャーミオンは言ひ終つて、倒れながらに目を瞑る」
埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、斯くありてこそと云ふ最後の一句は、焚き罩むる錬香の盡きなんと
して幽かなる尾を虛冥に曳く如く、全き頁が淡く霞んで見える。
「藤尾」と知らぬ御母さんは呼ぶ。

男はやつと寛容な姿で、呼ばれた方へ視線を向ける。呼ばれた當人は俯向てゐる。

「藤尾」と御母さんは呼び直す。

女の眼は漸くに頁を離れた。波を打つ廂髪の、白い額に接く下から、骨張らぬ細い鼻を承けて、紅を寸に織る唇が――唇をそと滑つて、頰の末としつくり落ち合ふ腮が――腮を棄てゝなよやかに退いて行く咽喉が――次第と現實世界に競り出して來る。

「なに?」と藤尾は答へた。晝と夜の間に立つ人の、晝と夜の間の返事である。

「おや氣樂な人だ事。そんなに面白い御本なのかい。――あとで御覽なさいな。失禮ぢやないか。――此通り世間見ずの我儘もので、まことに困り切ります。――その御本は小野さんから拜借したのかい。大變奇麗な――汚さない様になさいよ。本なぞは大事にしないと――」

「大事にして居ますわ」

「それぢや、好ゝけれども、又此間の様に……」

「だつて、ありや兄さんが惡いんですもの」

「甲野君が如何かしたんですか」と小野さんは始めて口らしい口を開いた。

「いえ、あなた、どうも我儘者の寄り合ひだもんで御座んすから、始終、小供の様に喧嘩ばかり致しまして――此間も兄の本を……」と御母さんは藤尾の方を見て、言はうか、言ふまいかと云ふ態度を取る。同情のある恐喝手段は長者の好んで年少に對して用ゐる遊戯である。

「甲野君の書物をどうなすつたんです」と小野さんは恐る〳〵聞きたがる。

「言ひませうか」と老人は半ば笑ひながら、控へてゐる。玩具の九寸五分を突き付けた樣な氣合である。
「兄の本を庭へ抛げたんですよ」と藤尾は母を差し置いて、鋭どい返事を小野さんの眉間へ向けて抛げつけた。御母さんは苦笑ひをする。小野さんは口を開く。
「これの兄も御存じの通り隨分變人ですから」と御母さんは遠廻しに棄鉢になつた娘の御機嫌をとる。
「甲野さんは未だ御歸りにならんさうですね」と小野さんは、うまい所で話頭を轉換した。
「丸であなた鐵砲玉の樣で――あれも、始終身體が惡いとか申して、愚圖々々して居りますから、夫ならば、ちと旅行でもして判然したら宜からうと申しましてね――でも、まだ、何だ蚊だと駄々を捏ねて、動かないのを、漸く宗近に賴んで連れ出して貰ひました。所が丸で鐵砲玉で。若いものと申すものは……」
「若いつて兄さんは特別ですよ。哲學で超絕してゐるんだから特別ですよ」
「さうかね、御母さんには何だか分らないけれども――それにあなた、あの宗近と云ふのが大の呑氣屋で、あれこそ本當の鐵砲玉で、隨分の困りものでしてね」
「アハヽ、快活な面白い人ですな」
「宗近と云へば、御前さつきのものは何處にあるのかい」と御母さんは、きりゝとした眼を上げて部屋のうちを見廻はす。
「此所です」と藤尾は、輕く諸膝を斜めに立てて、青疊の上に、八反の座布團をさらりと滑べらせる。富貴の色は蜷局を三重に卷いた鎖の中に、堆く七子の蓋を盛り上げてゐる。
右手を伸べて、輝くものを戞然と鳴らすよと思ふ間に、掌より滑る鎖が、やをら疊に落ちんとして、

一尺の長さに喰ひ留められると、餘る力を横に拔いて、端につけた柘榴石の飾りと共に、長いものがふらりふらりと二三度搖れる。第一の波は紅の珠に女の白き腕を打つ。第二の波は觀世に動いて、輕く袖口にあたる。第三の波の將に靜まらんとするとき、女は衝と立ち上がつた。

奇麗な色が、二色、三色入り亂れて、疾く動く景色を、茫然と眺めてゐた小野さんの前へぴたりと坐つた藤尾は

「御母さん」と後を顧みながら、

「かうすると引き立ちますよ」と云つて故の席に返る。小野さんの胴衣の胸には松葉形に組んだ金の鎖が、釦の穴を左右に拔けて、黒ずんだメルトン地を背景に燦爛と耀やいてゐる。

「どうです」と藤尾が云ふ。

「成程善く似合ひますね」と御母さんが云ふ。

「全體どうしたんです」と小野さんは烟に卷かれながら聞く。御母さんはホヽヽと笑ふ。

「上げましやうか」と藤尾は流し目に聞いた。小野さんは默つてゐる。

「ぢや、まあ、止しませう」と藤尾は再び立つて小野さんの胸から金時計を外して仕舞つた。

三

柳彈れて條々の烟を欄に吹き込む程の雨の日である。衣桁に懸けた紺の背廣の暗く下がるしたに、黒い靴足袋が三分一裏返しに丸く蹲踞て居る。違棚の狹い上に、偉大な頭陀袋を据ゑて、締括りのない紐をだ

らだらと頰も垂らした傍らに、煉歯粉と白楊枝が御早うと挨拶してゐる。立て切つた障子の硝子を通して白い雨の糸が細長く光る。

「京都といふ所は、いやに寒い所だな」と宗近君は貸浴衣の上に銘仙の丹前を重ねて、床柱の松の木を脊負て、傲然と箕坐をかいた儘、外を覗きながら、甲野さんに話しかけた。

甲野さんは駱駝の膝掛を腰から下へ掛けて、空氣枕の上で黑い頭をぶくつかせてゐたが

「寒いより眠い所だ」

と云ひながら一寸顏の向を換へると、櫛を入れたての濡れた頭が、空氣の彈力で、脫ぎ棄てた靴足袋と一所になる。

「寐てばかり居るね。丸で君は京都へ寐に來た樣なものだ」

「うん。實に氣樂な所だ」

「氣樂になつて、まあ結構だ。御母さんが心配して居たぜ」

「ふん」

「ふんは御挨拶だね。是でも君を氣樂にさせるに就ては、人の知らない苦勞をしてゐるんだぜ」

「君あの額の字が讀めるかい」

「成程妙だね。瀞雨愁風か。見た事がないな。何でも人扁だから、人がどうかするんだらう。入らざる字を書きやがる。元來何者だい」

「分らんね」

「分からんでもいゝや。夫より此襖が面白いよ。一面に金紙を張り付けた所は豪勢だが、所々に皺が寄つてるには驚ろいたね。丸で緞帳芝居の道具立見た樣だ。そこへ持つて來て、筍を三本、景氣に描いたのは、どう云ふ了見だらう。なあ甲野さん、これは謎だぜ」
「何と云ふ謎だい」
「夫は知らんがね。意味が分からないものが描いてあるんだから謎だらう」
「意味が分からないものは謎にはならんぢやないか。意味があるから謎なんだ」
「所が哲學者なんてものは意味がないものを謎だと思つて、一生懸命に考へてるぜ。氣狂の發明した詰將棋の手を、靑筋を立てゝ硏究して居る樣なものだ」
「ぢや此筍も氣違の畫工が描いたんだらう」
「ハヽヽ。其位事理が分つたら煩悶もなからう」
「世の中と筍と一所になるものか」
「君、昔話しにゴーヂアン、ノットと云ふのがあるぢやないか。知つてるかい」
「人を中學生だと思つてる」
「思つてるなくつても、まあ聞いて見るんだ。知つてるなら云つて見ろ」
「うるさいな、知つてるよ」
「だから云つて御覽なさいよ。哲學者なんてものは、よく胡魔化すもので、何を聞いても知らないと白狀の出來ない執念深い人間だから、……」

「どつちが執念深いか分りやしない」
「どつちでも、いゝから、云つて御覽」
「ゴーヂアン、ノツトと云ふのはアレキサンダー時代の話しさ」
「うん、知つてるね。夫で」
「ゴーヂアスと云ふ百姓がジュピターの神へ車を奉納した所が……」
「おや／＼、少し待つた。そんな事があるのかい。夫から」
「そんな事があるのかつて、君、知らないのか」
「そこ迄は知らなかつた」
「何だ。自分こそ知らない癖に」
「ハヽヽ、學校で習つた時は教師が其所迄は教へなかつた。あの教師も其所迄は屹度知らないに違ない」
「所が其百姓が、車の轅と横木を蔓で結ひた結目を誰がどうしても解く事が出來ない」
「なある程、夫をゴーヂアン、ノツトと云ふんだね。さうか。其結目をアレキサンダーが面倒臭いつて、刀を拔いて切つちまつたんだね。うん、さうか」
「アレキサンダーは面倒臭いとも何とも云やあしない」
「夫りやどうでもいゝ」
「此結目を解いたものは東方の帝たらんと云ふ神託を聞いたとき、アレキサンダーがそれなら、かうする許りだと云つて……」

「そこは知つてるんだ。そこは學校の先生に教はつた所だ」
「それぢや、夫でいゝぢやないか」
「いゝがね、人間は、それなら斯うする許りだと云ふ了見がなくつちや駄目だと思ふんだね」
「それも宜からう」
「それも宜からうぢや張り合がないな。ゴーヂアン、ノツトはいくら考へたつて解けつこ無いんだもの」
「切れば解けるのかい」
「切れば――解けなくつても、まあ都合がいゝやね」
「都合か。世の中に都合程卑怯なものはない」
「するとアレキサンダーは大變な卑怯な男になる譯だ」
「アレキサンダーなんか、そんなに豪いと思つてるのか」
會話は一寸切れた。甲野さんは寐返りを打つ。宗近君は胡坐の儘旅行案内をひろげる。雨は斜めに降る。古い京をいやが上に寂びよと降る糠雨が、赤い腹を空に見せて衝いと行く乙鳥の脊に應へる程繁くなつたとき、下京も上京もしめやかに濡れて、三十六峯の翠りの底に、音は友禪の紅を溶いて、菜の花に注ぐ流のみである。「御前川上、わしや川下で……」と芹を洗ふ門口に、眉をかくす手拭の重きを脱げば、「大文字」が見える。「松虫」も「鈴虫」も幾代の春を苔蒸して、鶯の鳴くべき藪に、墓ばかりは殘つてる。鬼の出る羅生門に、鬼が來ずなつてから、門もいつの代にか取り毀たれた。綱が捥ぎとつた腕の行末は誰にも分からぬ。只昔しながらの春雨が降る。寺町では寺に降り、三條では橋に降り、祇園では櫻に降り、

金閣寺では松に降る。宿の二階では甲野さんと宗近君に降つて居る。

甲野さんは寐ながら日記を記けだした。横綴の茶の表布の少しは汗に汚された角を、折る樣にあけて、二三枚めくると、一頁の三が一ほど白い所が出て來た。甲野さんは此所から書き始める。鉛筆を執つて景氣よく、

「一奩樓角雨、閑殺古今人」

と書いて暫らく考へて居る。轉結を添へて絕句にする氣と見える。

旅行案內を放り出した宗近君はずしんと疊を威嚇して椽側へ出る。椽側には御誂向に一脚の籐の椅子が、人待ち顔に、しめつぽく据ゑてある。連翹の疎なる花の間から隣家の座敷が見える。障子は立て切つてある。中では琴の音がする。

「忽聽彈琴響、垂楊惹恨新」

と甲野さんは別行に書いたが、氣に入らぬと見えて、すぐ樣棒を引いた。あとは普通の文章になる。

「宇宙は謎である。謎を解くは人々の勝手である。勝手に解いて、勝手に落ち付くものは幸福である。疑へば親さへ謎である、兄弟さへ謎である。妻も子も、かく觀ずる自分さへも謎である。此世に生まれるのは解けぬ謎を、押し付けられて、白頭に儃佪し、中夜に煩悶する爲めに生まれるのである。親の謎を解く爲めには、自分が親と同體にならねばならぬ。妻の謎を解く爲めには妻と同心にならねばならぬ。宇宙の謎を解く爲めには宇宙と同心同體にならねばならぬ。これが出來ねば、親も妻も宇宙も疑である。解けぬ謎である、苦痛である。親兄弟と云ふ解けぬ謎のある矢先に、妻と云ふ新しき謎を好んで貰ふのは、自

分の財産の所置に窮してる上に、他人の金錢を預かると一般である。妻と云ふ新らしき謎を貰ふのみか、新らしき謎に、又新らしき謎を生ませて苦しむのは、預かつた金錢に利子が積んで、他人の所得をみづからと持ち扱ふ樣なものであらう。……凡ての疑は身を捨てゝ始めて解決が出來る。只如何身を捨てるかゞ問題である。死？死とはあまりに無能である」

宗近君は籐の椅子に横平な腰を据ゑて先つきから隣りの琴を聽いてゐる。御室の御所の春寒に、銘を給はる琵琶の風流は知る筈がない。十三絃を南部の菖蒲形に張つて、象牙に置いた蒔繪の舌を氣高しと思ふ數奇も有たぬ。宗近君は只漫然と聽いてゐる許りである。

滴々と垣を蔽ふ連翹の黄な向ふは業平竹の一叢に、苔の多い御影の突く這ひを添へて、三坪に足らぬ小庭には、一面に叡山苔を這はしてゐる。琴の音は此庭から出る。

雨は一つである。冬は合羽が凍る。秋は燈心が細る。夏は褌を洗ふ。春は――平打の銀簪を疊の上に落した儘、貝合せの貝の裏が朱と金と藍に光る傍に、ころりんと搔き鳴らし、又ころりんと搔き亂す。宗近君の聽いてゐるのは正に此ころりんである。

「眼に見るは形である」と甲野さんは又別行に書き出した。

「耳に聽くは聲である。形と聲は物の本體ではない。物の本體を證得しないものには形も聲も無意義である。何物かを此奥に捕へたる時、形も聲も悉く新らしき形と聲になる。是が象徴である。象徴とは本來空の不可思議を眼に見、耳に聽く爲めの方便である。……」

琴の手は次第に繁くなる。雨滴の絶間を縫ふて、白い爪が幾度か駒の上を飛ぶと見えて、濃かなる調べ

は、太き糸の音と細き糸の音を綯り合せて、代る〳〵に亂れ打つ樣に思はれる。甲野さんが「無絃の琴を聽いて始めて序破急の意義を悟る」と書き終つた時、椅子に靠れて隣家許りを瞰下して居た宗近君は

「おい、甲野さん、理窟ばかり云はずと、ちとあの琴でも聽くがいゝ。中々旨いぜ」

と椽側から部屋の中へ聲を掛けた。

「うん、先つきから拜聽してゐる」と甲野さんは日記をぱたりと伏せた。

「寐ながら拜聽する法はないよ。一寸椽迄出張を命ずるから出て來なさい」

「なに、此所で結構だ。構つて呉れるな」と甲野さんは空氣枕を傾けた儘起き上がる氣色がない。

「おい、どうも東山が奇麗に見えるぜ」

「さうか」

「おや、鴨川を渉る奴がある。實に詩的だな。おい川を渉る奴があるよ」

「渉つてもいゝよ」

「君、布團着て寐たる姿やとか何とか云ふが、どこに布團を着て居る譯かな。一寸此所迄來て敎へて呉れんかな」

「いやだよ」

「君、さうかうして居るうちに加茂の水嵩が增して來たぜ。いやあ大變だ。橋が落ちさうだ。おい橋が落ちるよ」

「落ちても差し支なしだ」

「落ちても差し支なしだ？晩に都踊が見られなくつても差し支なしかな」

「なし、なし」と甲野さんは面倒臭くなつたと見えて、寐返りを打つて、例の金襖の筍を横に眺め始めた。

「さう落ち付いて居ちや仕方がない。こつちで降參するより外に名案もなくなつた」と宗近さんは、とうとう我を折つて部屋の中へ這入つて來る。

「おい、おい」

「何だ、うるさい男だね」

「あの琴を聽いたらう」

「聽いたと云つたぢやないか」

「ありや、君、女だぜ」

「當り前さ」

「幾何だと思ふ」

「幾歲だかね」

「さう冷淡ぢや張り合がない。敎へて吳れなら、敎へて吳れと判然云ふがいゝ」

「誰が云ふものか」

「云はない？云はなければ此方で云ふ許りだ。ありや、島田だよ」

「座敷でも開いてるのかい」

「なに座敷はぴたりと締つてる」

「それぢや又例の通り好加減な雅號なんだらう」
「雅號にして本名なるものだね。僕はあの女を見たんだよ」
「どうして」
「そら聽き度なつた」
「何聽かなくつてもいゝさ。そんな事を聞くより此筍を研究して居る方が餘つ程面白い。此筍を寐てゐて横に見ると、脊が低く見えるがどう云ふものだらう」
「大方君の眼が横に着いてゐる所爲だらう」
「二枚の唐紙に三本描いたのは、どう云ふ因縁だらう」
「あんまり下手だから一本負けた積りだらう」
「筍の眞青なのは何故だらう」
「食ふと中毒ると云ふ謎なんだらう」
「矢つ張り謎か。君だつて謎を釋くぢやないか」
「ハ、、、。時々は釋いて見るね。時に僕がさつきから島田の謎を解いてやらうと云ふのに、一向釋かせないのは哲學者にも似合はん不熱心な事だと思ふがね」
「釋きたければ釋くさ。さう勿體振つたつて、頭を下げる様な哲學者ぢやない」
「それぢや、一先づ安つぽく釋いて仕舞つて、後から頭を下げさせる事に仕様。――あのね、あの琴の主はね」

「うん」
「僕が見たんだよ」
「そりや今聽いた」
「さうか。それぢや別に話す事もない」
「なければ、いゝさ」
「いや好くない。それぢや話す。昨日ね、僕が湯から上がつて、椽側で肌を拔いで涼んで居ると――聽きたいだらう――僕が何氣なく鴨東の景色を見廻はして、あゝ好い心持ちだと不圖眼を落して隣家を見下すと、あの娘が障子を半分開けて、開けた障子に靠たれかゝつて庭を見て居たのさ」
「別嬪かね」
「あゝ別嬪だよ。藤尾さんよりわるいが糸公より好い樣だ」
「さうかい」
「夫つきりぢや、餘まり他愛が無さ過ぎる。夫りや殘念な事をした、僕も見れば宜かつた位義理にも云ふがいゝ」
「夫りや殘念な事をした、僕も見れば宜かつた」
「ハヽヽ、だから見せてやるから椽側迄出て來いと云ふのに」
「だつて障子は締つてるんぢやないか」
「其うち開くかも知れないさ」

「ハヽヽ小野なら障子の開く迄待つてるかも知れない」
「さうだね。小野を連れて來て見せてやれば好かつた」
「京都はあゝ云ふ人間が住むに好い所だ」
「うん全く小野的だ。大將、來いと云ふのに何んの蚊のと云つて、とう〳〵來ない」
「春休みに勉强しやうと云ふんだらう」
「春休みに勉强が出來るものか」
「あんな風ぢや何時だつて勉强が出來やしない。一體文學者は輕いからいけない」
「少々耳が痛いね。此方も餘まり重くはない方だからね」
「いえ、單なる文學者と云ふものは霞に醉つてほうつとして居る許りで、霞を披て本體を見付け樣としないから性根がないよ」
「霞の醉つ拂か。哲學者は余計な事を考へ込んで苦い顏をするから、鹽水の醉つ拂だらう」
「君見た樣に叡山へ登るのに、若狹迄突き貫ける男は白雨の醉つ拂だよ」
「ハヽヽ夫れぞれ醉つ拂つてるから妙だ」
甲野さんの黑い頭は此時漸く枕を離れた。光澤のある髮で濕つぽく壓し付けられて居た空氣が、彈力で膨れ上がると、枕の位置が疊の上で一寸廻つた。同時に駱駝の膝掛が擦り落ちながら、裏を返して半分に折れる。下から、だらしなく腰に捲き付けた平絎の細帶があらはれる。
「成程醉つ拂ひに違ない」と枕元に畏まつた宗近君は、卽座に品評を加へた。相手は瘦せた體軀を持ち

上げた肱を二段に伸して、手の平に胴を支へた儘、自分で自分の腰のあたりを睨め廻して居たが
「慥かに醉つ拂つてる樣だ。君は又珍らしく畏まつてるぢやないか」と一重瞼の長く切れた間から、宗近君をぢろりと見た。
「おれは、是で正氣なんだからね」
「居住丈は正氣だ」
「精神も正氣だからさ」
「いゝ、どてらを着て跪坐てるのは、醉つ拂つてゐながら、異狀がないと得意になる樣なものだ。猶可笑しいよ。醉つ拂ひは醉拂らしくするがいゝ」
「さうか、夫れぢや御免蒙らう」と宗近君はすぐさま胡坐をかく。
「君は感心に愚を主張しないからえらい。愚にして賢と心得てる程片腹痛い事はないものだ」
「諫に從ふ事流るゝが如しとは僕の事を云つたものだよ」
「醉拂つて居ても夫なら大丈夫だ」
「なんて生意氣を云ふ君はどうだ。醉拂つて居ると知りながら、胡坐をかく事も跪坐る事も出來ない人間だらう」
「まあ立ん坊だね」と甲野さんは淋し氣に笑つた。勢込んで喋舌て來た宗近君は急に眞面目になる。甲野さんの此笑ひ顏を見ると宗近君は屹度眞面目にならなければならぬ。幾多の顏の、幾多の表情のうちで、あるものは必ず人の肺腑に入る。面上の筋肉が我勝ちに躍る爲めではない。頭上の毛髮が一筋毎に稻妻を

起す爲めでもない。涙管の關が切れて滂沱の觀を添ふるが爲めでもない。いたづらに劇烈なるは、壯士が事もなきに劍を舞はして床を斬る樣なものである。淺いから動くのである。本鄕座の芝居である。甲野さんの笑つたのは舞臺で笑つたのではない。

毛筋程な細い管を通して、捕へがたい情けの波が、心の底から辛うじて流れ出して、ちらりと浮世の日に影を宿したのである。往來に轉がつてゐる表情とは違ふ。首を出して、浮世だなと氣が付けばすぐ奧の院へ引き返す。引き返す前に、捕まへた人が勝ちである。捕まへ損なへば生涯甲野さんを知る事は出來ぬ。

甲野さんの笑は薄く、柔らかに、寧ろ冷やかである。其大人しいうちに、其速かなるうちに、其消えて行くうちに、甲野さんの一生は明かに描き出されてゐる。此瞬間の意義を、さうかと合點するものは甲野君の知己である。斬つた張つたの境に甲野さんを置いて、はゝあ、斯んな人かと合點する樣では親子と雖ども未だしである。兄弟と雖ども他人である。斬つた張つたの境に甲野さんを置いて、始めて甲野さんの性格を描き出すのは野暮な小說である。廿世紀に斬つた張つたが無暗に出て來るものではない。

春の旅は長閑である。京の宿は靜かである。二人は無事である。巫山戲てゐる。其間に宗近君は甲野さんを知り、甲野さんは宗近君を知る。是が世の中である。

「立ん坊か」と云つた儘宗近君は駱駝の膝掛の馬簾をひねくり始めたが、やがて

「何時迄も立ん坊か」

と相手の顏は見ず、質問の樣に、獨語の樣に、駱駝の膝掛に話しかける樣に、立ん坊を繰り返した。

「立ん坊でも覺悟丈はちやんとしてゐる」と甲野さんは此時始めて、腰を浮かして、相手の方に向き直

る。

「叔父さんが生きてると好ゝがな」

「なに、阿爺が生きて居ると却つて面倒かも知れない」

「さうさなあ」と宗近君はなあを引つ張つた。

「つまり、家を藤尾に呉れて仕舞へば夫で濟むんだからね」

「夫で君はどうするんだい」

「僕は立ん坊さ」

「愈本當の立ん坊かい」

「うん、どうせ家を襲いだつて立ん坊、襲がなくつたつて立ん坊なんだから一向構はない」

「然しそりや、行かん。第一叔母さんが困るだらう」

「母がか」

甲野さんは妙な顔をして宗近君を見た。

疑がへば己にさへ欺むかれる。況して己以外の人間の、利害の衢に、損失の塵除と被る、面の厚さは、容易には度られぬ。親しき友の、わが母を、さうと評するのは、面の内側で評するのか、又は外側でのみ云ふ了見か。己にさへ、己を欺く魔の、どこにか潛んで居る樣な氣持は免かれぬものを、無二の友達とは云へ、父方の縁續きとは云へ、迂濶には天機を洩らし難い。宗近の言は繼母に對するわが心の底を見ん爲めの鎌か。見た上でも元の宗近ならば夫迄であるが、鎌を懸ける程の男ならば、思ふ通りを引き出した後

で、どう引つ繰り返らぬとも保證は出來ん。宗近の言は眞率なる彼の、裏表の見界なく、母の口占を一圖にそれと信じたる反響か。平生の彼是から推して見ると多分さうだらう。よもや、母から頼まれて、曇る胸の、われにさへ恐ろしき淵の底に、詮索の錘を投げ込む樣な卑劣な振舞はしまい。けれども、正直な者程人には使はれ易い。卑劣と知つて、人の手先にはならんでも、われに對する好意から、見損なつた母の意を承けて、御互に面白からぬ結果を、必然の期程以前に、家庭のなかに打ち開ける事がないとも限らん。何れにしても入らぬ口は發くまい。

二人は暫く無言である。隣家では未だ琴を彈いてゐる。

「あの琴は生田流かな」と甲野さんは、付かぬ事を聞く。

「寒くなつた、狐の袖無でも着やう」と宗近君も、付かぬ事を云ふ。二人は離れ〳〵に口を發いて居る。丹前の胸を開いて、違棚の上から、例の異樣な胴衣を取り下ろして、體を斜めに腕を通した時、甲野さんは聞いた。

「其袖無は手製か」

「うん、皮は支那に行つた友人から貰つたんだがね、表は糸公が着けて呉れた」

「本物だ。旨いもんだ。御糸さんは藤尾なんぞと違つて實用的に出來てるからいゝ」

「いゝか。ふん。彼奴が嫁に行くと少々困るね」

「いゝ嫁の口はないかい」

「嫁の口か」と宗近君は一寸甲野さんを見たが、氣の乘らない調子で「無い事もないが……」とだらり

も言葉の尾を垂れた。甲野さんは問題を轉じた。

「御糸さんが嫁に行くと御叔父さんも困るね」

「困つたつて仕方がない、どうせ何時か困るんだもの。――夫よりか君は女房を貰はないのかい」

「僕か――だつて――食はす事が出來ないもの」

「だから御母さんの云ふ通りに君が家を襲いで……」

「夫りや駄目だよ。母が何と云つたつて、僕は厭なんだ」

「妙だね、どうも。君が判然しないもんだから、藤尾さんも嫁に行かれないんだらう」

「行かれないんぢやない、行かないんだ」

宗近君はだまつて鼻をぴくつかせてゐる。

「又鱧を食はせるな。毎日鱧許り食つて腹の中が小骨だらけだ。京都と云ふ所は實に愚な所だ。もういい加減に歸らうぢやないか」

「歸つてもいゝ。鱧位なら歸らなくつてもいゝ。然し君の嗅覺は非常に鋭敏だね。鱧の臭がするかい」

「するぢやないか。臺所でしきりに燒いてゐらあね」

「其位虫が知らせると阿爺も外國で死なゝくつても濟んだかも知れない。阿爺は嗅覺が鈍かつたと見える」

「ハヽヽヽ。時に御叔父さんの遺物はもう、着いたか知ら」

「もう着いた時分だね。公使館の佐伯と云ふ人が持つて來て呉れる筈だ。――何にもないだらう――書

物が少しあるかな」
「例の時計はどうしたらう」
「さう〳〵。倫敦で買つた自慢の時計か。あれは多分來るだらう。小供の時から藤尾の玩具になつた時計だ。あれを持つと中々離さなかつたもんだ。あの鎖に着いて居る柘榴石が氣に入つてね」
「考へると古い時計だね」
「さうだらう、阿爺が始めて洋行した時に買つたんだから」
「あれを御叔父さんの片身に僕に呉れ」
「僕もさう思つて居た」
「御叔父さんが今度洋行するときね、歸つたら卒業祝にこれを御前にやらうと約束して行つたんだよ」
「僕も覺えてゐる。――ことによると今頃は藤尾が取つて又玩具にしてゐるかも知れないが……」
「藤尾さんとあの時計は到底離せないか。ハヽヽ、なに構はない、夫でも貰はう」
甲野さんは、だまつて宗近君の眉の間を、長い事見て居た。御晝の膳の上には宗近君の豫言通り鱧が出た。

四

甲野さんの日記の一節に云ふ。
「色を見るものは形を見ず、形を見るものは質を見ず」

小野さんは色を見て世を暮らす男である。

甲野さんの日記の一節に又云ふ。

「生死因縁無了期、色相世界現狂癡」

小野さんは色相世界に住する男である。

小野さんは暗い所に生れた。ある人は私生兒だとさへ云ふ。筒袖を着て學校へ通ふ時から友達に苛められて居た。行く所で犬に吠えられた。父は死んだ。外で辛い目に遇つた小野さんは歸る家が無くなつた。已むなく人の世話になる。

水底の藻は、暗い所に漂ふて、白帆行く岸邊に日のあたる事を知らぬ。右に搖かうが、左りに靡かうが嬲るは波である。唯其時々に逆らはなければ濟む。馴れては波も氣にならぬ。波は何物ぞと考へる暇もない。何故波がつらく己れにあたるかは無論問題には上らぬ。上つた所で改良は出來ぬ。只運命が暗い所に生へて居ろと云ふ。そこで生えてゐる。只運命が朝な夕なに動けと云ふ。だから動いてゐる。――小野さんは水底の藻であつた。

京都では孤堂先生の世話になつた。先生から絣の着物をこしらへて貰つた。年に二十圓の月謝も出して貰つた。書物も時々教はつた。祇園の櫻をぐる／＼周る事を知つた。智恩院の勅額を見上げて高いものだと悟つた。御飯も一人前は食ふ樣になつた。水底の藻は土を離れて漸く浮かび出す。

東京は目の眩む所である。元祿の昔に百年の壽を保つたものは、明治の代に三日住んだものよりも短命である。餘所では人が蹠であるいて居る。東京では爪先であるく。逆立をする。横に行く。氣の早いもの

は飛んで來る。小野さんは東京できり〳〵と回つた。
きり〳〵と回つた後で、眼を開けて見ると世界が變つて居る。眼を擦すつても變つてゐる。變だと考へるのは惡るく變つた時である。小野さんは考へずに進んで行く。友達は秀才だと云ふ。教授は有望だと云ふ。下宿では小野さん〳〵と云ふ。小野さんは考へずに進んで行く。進んで行つたら陛下から銀時計を賜はつた。浮かび出した藻は水面で白い花をもつ。根のない事には氣が付かぬ。
世界は色の世界である。只此色を味へば世界を味はつたものである。世界の色は自己の成功につれて鮮やかに眼に映る。鮮やかなる事錦を欺くに至つて生きて甲斐ある命は貴とい。小野さんの手巾には時々ヘリオトロープの香がする。
世界は色の世界である。形は色の殘骸である。殘骸を論つて中味の旨きを解せぬものは、方圓の器に拘はつて、盛り上る酒の泡をどう片付て然るべきかを知らぬ男である。いかに見極めても皿は食はれぬ。唇を着けぬ酒は氣が拔ける。形式の人は、底のない道義の巵を抱いて、路頭に躊躇してゐる。
世界は色の世界である。いたづらに空華と云ひ鏡花と云ふ。眞如の實相とは、世に容れられぬ畸形の徒が、容れられぬ恨を、黑甜鄕裏に晴らす爲めの妄想である。盲人は鼎を撫でる。色が見えねばこそ形が究めたくなる。手のない盲人は撫でる事をすら敢てせぬ。もの丶本體を耳目の外に求めんとするは、手のない盲人の所作である。小野さんの机の上には花が活けてある。窓の外には柳が緑を吹く。鼻の先には金縁の眼鏡が掛かつてゐる。
絢爛の域を超えて平淡に入るは自然の順序である。我等は昔し赤ん坊と呼ばれて赤いべゝを着せられた。

大抵のものは繪畫のなかに生ひ立つて、四條派の淡彩から、雲谷流の墨畫に老いて、遂に棺桶の果敢なきに親しむ。顧みると母がある、姉がある、菓子がある、鯉の幟がある。顧みれば顧みる程華麗である。小野さんは趣が違ふ。自然の徑路を逆しまにして、暗い土から、根を振り切つて、日の透る波の、明るい渚へ漂ふて來た。――坑の底で生れて一段毎に美しい浮世へ近寄る爲には二十七年かゝつた。二十七年の歷史を過去の節穴から覗いて見ると、遠くなればなる程暗い。只其途中に一點の紅がほのかに搖いて居る。東京へ來立には此紅が戀しくて、寒い記憶を繰り返すのも厭はず、度々過去の節穴を覗いては、長き夜を、永き日を、あるは時雨るゝを床しく暮らした。今は――紅も大分遠退いた。其上、色も餘程褪めた。小野さんは節穴を覗く事を怠たる樣になつた。

過去の節穴を塞ぎかけたものは現在に滿足する。現在が不景氣だと未來を製造する。小野さんの現在は薔薇である。薔薇の莟である。小野さんは未來を製造する必要はない。莟んだ薔薇を一面に開かせればそれが自からなる彼の未來である。未來の節穴を得意の管から眺めると、薔薇はもう開いて居る。手を出せば捕まへられさうである。早く捕まへろと誰かゞ耳の傍で云ふ。小野さんは博士論文を書かうと決心した。

論文が出來たから博士になるものか、博士になる爲に論文が出來るものか、博士に聞いて見なければ分らぬが、とにかく論文を書かねばならぬ。只の論文ではならぬ、必ず博士論文でなくてはならぬ。博士は學者のうちで色の尤も見事なるものである。未來の管を覗く度に博士の二字が金色に燃えてゐる。博士の傍には金時計が天から懸つてゐる。時計の下には赤い柘榴石が心臟の焰となつて搖れてゐる。其側に黑い眼の藤尾さんが纖い腕を出して手招ぎをしてゐる。凡てが美くしい畫である。詩人の理想は此畫の中の人

物となるにある。
昔しタンタラスと云ふ人があつた。わるい事をした罰で、苛い目に逢ふたと書いてある。身體は肩深く水に浸つてゐる。頭の上には旨さうな菓物が累々と枝をたわゝに結實つてゐる。タンタラスは咽喉が渇く。水を飲まうとすると水が退いて行く。タンタラスは腹が減る。菓物を食はうとすると菓物が逃げて行く。タンタラスの口が一尺動くと向ふでも一尺動く。二尺前むと向ふでも二尺前む。三尺四尺は愚か、千里を行き盡しても、タンタラスは腹が減り通しで、咽喉が渇き續けである。大方今でも水と菓物を追つ懸て歩いてるだらう。――未來の管を覗く度に、小野さんは、何だかタンタラスの子分の樣な氣がする。それのみではない。時によると藤尾さんがつんと澄まして居る事がある。長い眉を押し付けた樣に短かくして、屹と睨めて居る事がある。柘榴石がぱつと燃えて、焔のなかに、女の姿が、包まれながら消えて行く事がある。博士の二字が段々薄くなつて剝げながら暗くなる事がある。時計が遙かな天から隕石の樣に落ちて來て、割れる事がある。其時はぴしりと云ふ音がする。小野さんは詩人であるから色々な未來を描き出す。机の前に頰杖を突いて、色硝子の一輪挿をぱつと蔽ふ椿の花の奥に、小野さんは、例によつて自分の未來を覗いて居る。幾通りもある未來のなかで今日は一層出來がわるい。
「此時計をあなたに上げたいんだけれどもと女が云ふ。どうか下さいと小野さんが手を出す。女が其手をぴしやりと平手でたゝいて、御氣の毒樣もう約束濟ですと云ふ。ぢや時計は入りません、然しあなたは……と聞くと、私？私は無論時計にくつ付いてるんですと向をむいて、すた〱歩き出す」
小野さんは、此所迄未來をこしらへて見たが、餘り殘刻なのに驚いて、又最初から出直さうとして、少

し痛くなり掛けた腭を持ち上げると、障子が、すうと開いて、御手紙ですと下女が封書を置いて行く。

「小野清三様」と子昂流にかいた名宛を見た時、小野さんは、急に両肱に力を入れて、机に持たした體を跳ねる様に後へ引いた。未來を覗く椿の管が、同時に搖れて、唐紅の一片がロゼッチの詩集の上に音なしく落ちて來る。完き未來は、はや崩れかけた。

小野さんは机に添へて左りの手を伸した儘、顔を斜めに、受け取つた封書を掌の上に遠くから眺めて居たが、容易に裏を返さない。返さんでも大方の見當は付いて居る。付いて居ればこそ返しにくい。返した曉に推察の通りであつたなら、それこそ取り返しが付かぬ。かつて龜に聞いた事がある。首を出すと打たれる。どうせ打たれるとは思ひながら、出來るならばと甲羅の中に立て籠る。打たれる運命を眼前に控へた間際でも、一刻の首は一刻丈縮めてゐたい。思ふに小野さんは事實の判決を一寸に逃れる學士の龜であらう。龜は早晩首を出す。小野さんも今に封筒の裏を返すに違ない。

良しばらく眺めて居ると今度は掌が六づ痒ゆくなる。一刻の安きを貪つた後は、安き思を、猶安くする爲めに、裏返して得心したくなる。小野さんは思ひ切つて、封筒を机の上に逆に置いた。裏から井上孤堂の四字が明かにあらはれる。白い狀袋に墨を惜まず肉太に記した草字は、小野さんの眼に、針の先を竝べて植ゑ付けた様に、紙を離れて飛び付いて來た。

小野さんは障らぬ神に祟なしと云ふ風で、両手を机から離す。たゞ顔丈が机の上の手紙に向いて居る。然し机と膝とは一尺の谷で緣が切れてゐる。机から引き取つた手は、ぐにやりとして何だか肩から拔けて行きさうだ。

封を切らうか、切るよいか。だれか來て封を切れと云へば切らぬ理由を說明して、序でに自分も安心する。然し人を屈伏させないと到底自分も屈伏させる事が出來ない。あやふやな柔術使は、一度往來で人を抛けて見ないうちはどうも柔術家たる所以を自分に證明する道がない。弱い議論と弱い柔術は似たものである。小野さんは京都以來の友人が一寸遊びに來て吳れゝばいゝと思つた。

二階の書生がヴィオリンを鳴らし始めた。小野さんも近日うちにヴィオリンの稽古を始め樣として居る。今日はそんな氣も一向起らぬ。あの書生は呑氣で羨しいと思ふ。――椿の花片が又一つ落ちた。

一輪插を持つた儘障子を開けて椽側へ出る。花は庭へ棄てた。水も序でにあけた。花活は手に持つてゐる。實は花活も序でに棄てる所であつた。花活を持つた儘椽側に立つてゐる。檜がある。塀がある。向に二階がある。乾きかけた庭に雨傘が干してある。蛇の目の黑い緣に落花が二片貼付いて居る。其他色々ある。悉く無意義にある。みんな器械的である。

小野さんは重い足を引き擦つて又部屋のなかへ這入つて來た。坐らずに机の前に立つてゐる。過去の節穴がすうと開いて昔の歷史が細長く遠くに見える。暗い。其暗いなかの一點がぱつと燃え出した。動いて來る。小野さんは急に腰を屈めて手を伸ばすや否や封を切つた。

「拜啓柳暗花明の好時節と相成り候處愈御壯健奉賀候。小生も不相變頑强、小夜も息災に候へば乍憚御休神可被下候。偖舊臘中一寸申上候東京表へ轉住の義、其後色々の事情にて捗どりかね候所、此程に至り諸事好都合に埒あき、愈近日中に斷行の運びに至り候筈につき左樣御承知被下度候。二十年前に其地を引き拂ひ候儘、兩度の上京に、五六日の逗留の外は、全く故鄕の消息に疎く、

萬事不案内に候へば到着の上は定めて御厄介の事と存候。

「年來住み古るしたる住宅は隣家蔦屋にて讓り受け度旨申込有之、其他にも相談の口はかゝり候へども、此方に取り極め申候。荷物其他嵩張り候ものは皆當地にて賣拂ひ、可成手輕に引き移る積りに御座候。唯小夜所持の琴一面は本人の希望により、東京迄持ち運び候事に相成候。故きを棄てがたき婦女の心情御憐察可被下候。

「御承知の通小夜は五年前當地に呼び寄せ候迄、東京にて學校教育を受け候事とて切に轉住の速かなる事を希望致し居候。同人行末の義に關しては大略御同意の事と存じ候へば別に不申述。追て其地にて御面會の上篤と御協議申上度と存候。

「博覽會にて御地は定めし雜沓の事と存候。出立の節は可成急行の夜汽車を撰み度と存じ候へども、急行は非常の乘客の由につき、一層途中にて一二泊の上ゆる〳〵上京致すやも計りがたく候。時日刻限はいづれ確定次第御報可致候。先は右當用迄匆々不一」

讀み終つた小野さんは、机の前に立つた儘である。卷き納めぬ手紙は右の手からだらりと垂れて、清三樣……孤堂とかいた端が青いカシミヤの机掛の上に波を打つて二三段に疊まれてゐる。小野さんは自分の手元から半切れを傳はつて机掛の白く染め拔かれてゐるあたり迄順々に見下して行く。見下した眼の行き留つた時、已を得ず、睛を轉じてロゼッチの詩集を眺めた。詩集の表紙の上に散つた二片の紅も眺めた。紅に誘はれて、右の角に在るべき色硝子の一輪插を眺め樣とした。一輪插は何處かへ行つてあらぬ。一昨日插した椿は影も形もない。うつくしい未來を覗く管が無くなつた。

小野さんは机の前へ坐つた。力なく巻き納める恩人の手紙のなかゝら妙な臭が立ち上る。一種古ぼけた黴臭いにほひが上る。過去のにほひである。忘れんとして躊躇する毛筋の末を引いて、細い縁に、絶える程につながるゝ今と昔を、面のあたりに結び合はす香である。

半世の歴史を長き穂の心細き迄逆しまに尋ぬれば、溯る程に暗澹となる。芽を吹く今の幹なれば、通はぬ脈の枯れ枝の末に、錐の力の尖れるを幸と、記憶の命を突き透すは要なしと云はんより寧ろ無惨である。ジェーナスの神は二つの顔に、後ろをも前をも見る。幸なる小野さんは一つの顔しか持たぬ。背を過去に向けた上は、眼に映るは熙々たる前程のみである。後を向けばひゆうと北風が吹く。此寒い所をやつとの思ひで斬り抜けた昨日今日、寒い所から、寒いものが追つ懸けて來る。今迄は只忘れゝばよかつた。未來の發展の暖く鮮やかなるうちに、己れを捲き込んで、一歩でも過去を遠退けば夫で濟んだ。生きて居る過去も、死んだ過去のうちに鎖られて、動くかとは掛念しながらも、先づ大丈夫だらうと、其日、其日に立ち退いては、顧みるパノラマの長く連なる丈で、一點も動かぬに胸を撫でゝ居た。所が、昔しながらと高を括つて、過去の管を今更覗いて見ると――動くものがある。われは過去を棄てんとしつゝあるに、過去はわれに近付いて來る。逼つて來る。靜かなる前後と枯れ盡したる左右を乘り超えて、暗夜を照らす提灯の火の如く搖れて來る、動いてくる。小野さんは部屋の中を廻り始めた。

自然は自然を用ゐ盡さぬ。極まらんとする前に何事か起る。單調は自然の敵である。小野さんが部屋の中を廻り始めて半分と立たぬうちに、障子から下女の首が出た。

「御客樣」と笑ひながら云ふ。何故笑ふのか要領を得ぬ。御早うと云つては笑ひ、御歸んなさいと云つ

ては笑ひ、御飯ですと云つては笑ふ。人を見て妄りに笑ふものは必ず人に求むる所のある證據である。此下女は慥かに小野さんからある報酬を求めて居る。

小野さんは氣のない顏をして下女を見たのみである。下女は失望した。

「通しませうか」

小野さんは「え、うん」と判然しない返事をする。下女は又失望した。下女が無暗に笑ふのは小野さんに愛嬌があるからである。愛嬌のない御客は下女から見ると半文の價値もない。小野さんは此心理を心得てゐる。今日迄下女の人望を繋いだのも全く此自覺に基づく。小野さんは下女の人望をさへ妄りに落す事を好まぬ程の人物である。

同一の空間は二物によつて同時に占有せらるゝ事能はずと昔しの哲學者が云つた。愛嬌と不安が同時に小野さんの腦髓に宿る事は此哲學者の發明に反する。愛嬌が退いて不安が這入る。下女は惡るい所へ打つかつた。愛嬌が退いて不安が這入る。愛嬌が附燒刃で不安が本體だと思ふのは僞哲學者である。家主が這入るに就て、愛嬌が示談の上、不安に借家を讓り渡した迄である。夫にしても小野さんは惡るい所を下女に見られた。

「通してもいゝんですか」

「うん、さうさね」

「御留守だつて云ひませうか」

「誰だい」

「淺井さん」
「淺井か」
「御留守？」
「さうさね」
「御留守になさいますか」
「どう、しやうか知ら」
「どつち、でも」
「逢はうかな」
「ぢや、通しましやう」
「おい、一寸、待つた。おい」
「何です」
「あゝ、好い。好し〱」
友達には逢ひたい時と、逢ひ度ない時とある。それが判然すれば何の苦もない。いやなら留守を使へば濟む。小野さんは先方の感情を害せぬ限りは留守を使ふ勇氣のある男である。只困るのは逢ひたくもあり、逢ひ度もなくて、前へ行つたり後ろへ戻つたりして下女に迄馬鹿にされる時である。
往來で人と往き合ふ事がある。双方で一寸體を交はせば、夫限で御互にもとの通り、あかの他人となる。然し時によると兩方で、同じ右か、同じ左りへ避ける。是ではならぬと反對の側へ出樣と、足元を取り直

すとき、向ふも是ではならぬと氣を換へて反對へ出る。反對と反對が鉢合せをして、おい仕舞つたと心づいて、又出直すと、同時同刻に向ふでも同樣に出直してくる。兩人は出直さうとしては出遲れ、出遲れては出直さうとして、柱時計の振子の樣に此方、彼方と迷ひ續けに迷ふてくる。仕舞には双方で双方を思ひ切りの惡るい野郎だと惡口が云ひたくなる。人望のある小野さんは、もう少しで下女に思ひ切りの惡るい野郎だと云はれる所であつた。

そこへ淺井君が這入つてくる。淺井君は京都以來の舊友である。茶の帽子の聊か崩れかゝつたのを、右の手で壓し潰す樣に握つて、疊の上へ抛り出すや否や

「えゝ天氣だな」と胡坐をかく。小野さんは天氣の事を忘れてゐた。

「いゝ天氣だね」

「博覽會へ行つたか」

「いゝや、まだ行かない」

「行つて見い、面白いぜ。昨日行つての、アイスクリームを食ふて來た」

「アイスクリーム？さう、昨日は大分暑かつたからね」

「今度は露西亞料理を食ひに行く積りだ。どうだ一所に行かんか」

「今日かい」

「うん今日でもいゝ」

「今日は、少し……」

「行かんか。あまり勉強すると病氣になるぞ。早く博士になつて、美しい嫁さんでも貰はうと思ふてけつかる。失敬な奴ちや」

「なにそんな事はない。勉強がちつとも出來なくつて困る」

「神經衰弱だらう。顏色が惡いぞ」

「さうか、どうも心持ちがわるい」

「さうだらう。井上の御孃さんが心配する、早く露西亞料理でも食ふて、好うならんと」

「何故」

「何故つて、井上の御孃さんは東京へ來るんだらう」

「さうか」

「さうかつて、君の所へは無論通知が來た筈ぢや」

「君の所へは來たかい」

「うん、來た。君の所へは來んのか」

「いえ來た事は來たがね」

「いつ來たか」

「もう少し先刻だつた」

「愈結婚するんだらう」

「なにそんな事があるものか」

「何故つて、そこには段々深い事情があるんだがね」
「どんな事情が」
「まあ、それは遂つて緩つくり話すよ。僕も井上先生には大變世話になつたし、僕の力で出來る事は何でも先生の爲めにする氣なんだがね。結婚なんて、さう思ふ通りに急に出來るものぢやないさ」
「然し約束があるんだらう」
「夫がね、いつか君にも話さう〳〵と思つて居たんだが、――僕は實に先生には同情してるるんだよ」
「そりや、さうだらう」
「まあ、先生が出て來たら緩くり話さうと思ふんだね。さう向ふ丈で一人極めに極めて居ても困るからね」
「どんなに一人で極めて居るんだい」
「極めてるるらしいんだね、手紙の樣子で見ると」
「あの先生も隨分吉堅氣だからな」
「中々自分で極めた事は動かない。一徹なんだ」
「近頃は家計の方も餘りよくないんだらう」
「どうかね。さう困りもしまい」
「時に何時かな、君一寸時計を見てくれ」

「二時十六分だ」
「二時十六分？——それが例の恩賜の時計か」
「あゝ」
「旨い事をしたなあ。僕も貰つて置けばよかつた。かう云ふものを持つてゐると世間の受けが大分違ふな」
「さう云ふ事もあるまい」
「いやある。何しろ天皇陛下が保證して下さつたんだから慥かだ」
「君これから何處へ行くのかい」
「うん、天氣がいゝから遊ぶんだ。どうだ一所に行かんか」
「僕は少し用があるから——然しそこ迄一所に出樣」
門口で分れた小野さんの足は甲野の邸に向つた。

五

山門を入る事一歩にして、古き世の緑りが、急に左右から肩を襲ふ。自然石の形狀亂れたるを幅一間に行儀よく竝べて、錯落と平らかに敷き詰めたる徑に落つる足音は、甲野さんと宗近君の足音丈である。一條の徑の細く直なるを行き盡さゞる此方から、石に眼を添へて遙かなる向ふを極むる行き當りに、仰げば伽藍がある。木賊葺の厚板が左右から內輪にうねつて、大なる兩の翼を、險しき一本の脊筋にあつめ

たる上に、今一つ小さき家根が小さき翼を伸して乘つかつて居る。風拔きか明り取りかと思はれる。甲野さんも、宗近君も此精舍を、尤も趣きある横側の角度から同時に見上げた。

「明かだ」と甲野さんは杖を停めた。

「あの堂は木造でも容易に壞す事が出來ない樣に見える」

「つまり恰好が旨くさう云ふ風に出來てるんだらう。アリストートルの所謂理形に適つてるのかも知れない」

「大分六づかしいね。――アリストートルは如何でも構はないが、此邊の寺はどれも、一種妙な感じがするのは奇體だ」

「舟板塀趣味や御神燈趣味とは違ふさ。夢窓國師が建てたんだもの」

「あの堂を見上げて、一寸變な氣になるのは、つまり夢窓國師になるんだな。ハヽヽヽ。夢窓國師も少しは話せらあ」

「夢窓國師や大燈國師になるから、こんな所を逍遙する價値があるんだ。只見物したつて何になるもんか」

「夢窓國師も家根になつて明治迄生きてゐれば結構だ。安直な銅像より餘つ程いゝね」

「さうさ、一目瞭然だ」

「何が」

「何がつて、此境内の景色がさ。ちつとも曲つてゐない。どこ迄も明らかだ」

「丁度おれの樣だな。だから、おれは寺へ這入ると好い氣持ちになるんだらう」
「ハヽ、左樣かも知れない」
「して見ると夢窓國師がおれに似て居るんで、おれが夢窓國師に似てるるんぢやない」
「どうでも、好いさ。――まあ、ちつと休まうか」と、甲野さんは蓮池に渡した石橋の欄干に尻をかける。欄干の腰には大きな三階松が三寸の厚さを透かして水に臨んでゐる。石には苔の斑が薄青く吹き出して、灰を交へた紫の質に深く食ひ込む下に、枯蓮の黄な軸がすい〳〵と、去年の霜を彌生の中に突き出してゐる。
宗近君は燐寸を出して、烟草を出して、しゆつと云はせた燃え殘りを池の水に棄てる。
「夢窓國師はそんな惡戲はしなかつた」と甲野さんは、腮の先に、兩手で杖の頭を丁寧に抑へてゐる。
「それ丈、おれより下等なんだ。ちつと宗近國師の眞似をするが好い」
「君は國師より馬賊になる方がよからう」
「外交官の馬賊は少し變だから、まあ正々堂々と北京へ駐在する事にするよ」
「東洋專問の外交官かい」
「東洋の經綸さ。ハヽヽ。おれの樣なのは到底西洋には向きさうもないね。どうだらう、夫とも修業したら、君の阿爺位にはなれるだらうか」
「阿爺の樣に外國で死なれちや大變だ」
「なに、あとは君に賴むから構はない」

「こつちだつて只死ぬんぢやない、天下國家の爲めに死ぬんだから、その位な事はしても宜からう」

「此方は自分一人を持て餘して居る位だ」

「元來、君は我儘過ぎるよ。日本と云ふ考が君の頭のなかにあるかい」

今迄は眞面目の上に冗談の雲がかゝつて居た。冗談の雲は此時漸く晴れて、下から眞面目が浮き上がつて來る。

「君は日本の運命を考へた事があるのか」と甲野さんは、杖の先に力を入れて、持たした體を少し後ろへ開いた。

「運命は神の考へるものだ。人間は人間らしく働けば夫で結構だ。日露戰爭を見ろ」

「たまく風邪が癒れば長命だと思つてる」

「日本が短命だと云ふのかね」と宗近君は詰め寄せた。

「日本と露西亞の戰爭ぢやない。人種と人種の戰爭だよ」

「無論さ」

「亞米利加を見ろ、印度を見ろ、亞弗利加を見ろ」

「それは叔父さんが外國で死んだから、おれも外國で死ぬと云ふ論法だよ」

「論より證據誰でも死ぬぢやないか」

「死ぬのと殺されるのとは同じものか」

「大概は知らぬ間に殺されてゐるんだ」
凡てを爪弾きした甲野さんは杖の先で、とんと石橋を敲いて、懍とした樣に肩を縮める。宗近君はぬつと立ち上がる。
「あれを見ろ。あの堂を見ろ。峩山と云ふ坊主は一椀の托鉢丈であの本堂を再建したと云ふぢやないか。しかも死んだのは五十になるか、ならんうちだ。やらうと思はなければ、横に寐た箸を竪にする事も出來ん」
「本堂より、あれを見ろ」と甲野さんは欄干に腰をかけた儘、反對の方角を指す。
世界を輪切りに立て切つた、山門の扉を左右に颯と開いた中を、――赤いものが通る、青いものが通る。女が通る。小供が通る。嵯峨の春を傾けて、京の人は繽紛絡繹と嵐山に行く。
「あれだ」と甲野さんが云ふ。二人は又色の世界に出た。
天龍寺の門前を左へ折れゝば釋迦堂で右へ曲れば渡月橋である。京は所の名さへ美しい。二人は名物と銘打つた何やら蚊やらを矢鱈に竝べ立てた店を兩側に見て、停車場の方へ旅衣七日餘りの足を旅心地に移す。出逢ふは皆京の人である。二條から半時毎に花時を空にするなと仕立てる汽車が、今着いた許りの好男子好女子を悉く嵐山の花に向つて吐き送る。
「美しいな」と宗近君はもう天下の大勢を忘れてゐる。京程に女の綺羅を飾る所はない。天下の大勢も京女の色には叶はぬ。
「京都のものは朝夕都踊りをしてゐる。氣樂なものだ」

「だから小野的だと云ふんだ」

「然し都踊はいゝよ」

「悪るくないね。何となく景氣がいゝ」

「いゝえ。あれを見ると殆んど異性の感がない。女もあれ程に飾ると、飾りまけがして人間の分子が少なくなる」

「さうさ其理想の極端は京人形だ。人形は器械丈に厭味がない」

「どうも淡粧して、活動する奴が一番人間の分子が多くつて危險だ」

「ハヽヽ、如何な哲學者でも危險だらうな。ところが都踊となると、外交官にも危險はない。至極御同感だ。御互に無事な所へ遊びに來てまあ善かつたよ」

「人間の分子も、第一義が活動すると善いが、どうも普通は第十義位が無暗に活動するから厭になつちまう」

「御互は第何義位だらう」

「御互になると、是でも人間が上等だから、第二義、第三義以下には出ないね」

「是でかい」

「云ふ事はたわいがなくつても、そこに面白味がある」

「難有いな。第一義となると、どんな活動だね」

「第一義か。第一義は血を見ないと出て來ない」

「それこそ危險だ
「血で以て巫山戲た了見を洗つた時に、第一義が躍然とあらはれる。人間は夫程輕薄なものなんだよ」
「自分の血か、人の血か」
甲野さんは返事をする代りに、賣店に陳べてある、抹茶々碗を見始めた。土を捏ねて手造りにしたものか、棚三段を盡くして、あるものは悉くとぼけて居る。
「そんなとぼけた奴は、いくら血で洗つたつて駄目だらう」と宗近君は猶まつはつて來る。
「是は……」と甲野さんが茶碗の一つを取り上げて眺めて居る袖を、宗近君は斷はりもなく、力任せにぐいと引く。茶碗は土間の上で散々に壞れた。
「斯うだ」と甲野さんが壞れた片を土の上に眺めて居る。
「おい、壞れたか。壞れたつて、そんなものは構はん。一寸此方を見ろ。早く」
甲野さんは土間の敷居を跨ぐ。「何だ」と天龍寺の方を振り返る向ふは例の京人形の後姿がぞろ〳〵行く許りである。
「何だ」と甲野さんは聞き直す。
「もう行つて仕舞つた。惜しい事をした」
「何が行つて仕舞つたんだ」
「あの女がさ」
「あの女とは」

下らない茶碗なんかいぢくつてゐるもんだから」

「そりや惜しい事をした。どれだい」

「どれだか、もう見えるものかね」

「娘も惜しいが此茶碗は無殘な事をした。罪は君にある」

「有つて澤山だ。そんな茶碗は洗つた位ぢや追付かない。壞して仕舞はなけりや直らない厄介物だ。全體茶人の持つてる道具程氣に食はないものはない。みんな、ひねくれてゐる。天下の茶器をあつめて悉く敲き壞してやりたい氣がする。何なら序だからもう一つ二つ茶碗を壞して行かうぢやないか」

「ふうん、一個何錢位かな」

二人は茶碗の代を拂つて、停車場へ來る。

浮かれ人を花に送る京の汽車は嵯峨より二條に引き返す。引き返さぬは山を貫いて丹波へ拔ける。二人は丹波行の切符を買つて、龜岡に降りた。保津川の急湍は此驛より下る掟である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生へる。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな」と宗近君が云ふ。底は一枚板の平らかに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に烟草盆を轉

がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫どす、波はかゝりまへん」と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞つ先なるは、二間の竹竿、續づく二人は右側に櫂、左に立つは同じく竿である。

ぎい〳〵と櫂が鳴る。粗削りに平げたる樫の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黑きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせた樣に見える。藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓りでもする事か、強き項を眞直に立てた儘、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。櫂は一搔毎にぎい〳〵と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停まる暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の蹙つて行く、頭の上には、山城を屛風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の、忽ちに影を失ふかと思へば舟は早くも山峽に入る。保津の瀨は是からである。

「愈來たぜ」と宗近君は船頭の體を透かして岩と岩の逼る間を半丁の向に見る。水はごうと鳴る。

「成程」と甲野さんが、舷から首を出した時、船ははや瀨の中に滑り込んだ。右側の二人はすはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横へた儘である。傾むいて矢の如く下る船は、どゞと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壞はれるなと氣が付いた時は、もう走る瀨を拔けだしてゐた。

「あれだ」と宗近君が指す後ろを見ると、白い泡が一町ばかり、逆か落しに嚙み合つて、谷を洩る微かな日影を萬顆の珠と我勝に奪ひ合つてゐる。

「壯んなものだ」と宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがい〻」

「夢窓國師より此方の方がえらい樣だ」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の、落ちんとして、落ちざるを、苦にせぬ樣に、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀨は樣々に廻る。廻る每に新たなる山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる遑を行客に許さゞる狹き流れは、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に、擊ち付けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緣り崩るゝ眞中に、舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは。一圖に此大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向ふは見えず。削られて坂と落つる川底の深さは幾段か、乘る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突き當つて碎けるか、捲き込まれて、見えぬ彼方にどつと落ちて行くか、――舟は只まともに進む。

「當るぜ」と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は、はやくも船頭の黑い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん」と臍に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢いに、波を吞む岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取り直されて、肩より高く兩の手が揚がると共に舟はぐうと廻つた。此獸奴と突き離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜めに滑つて、舟は向ふへ落ち出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ」と宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落ち盡すと向から空舟が上つてくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を收めて、肩から斜めに目暗縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて來る。

水行く外に尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這ふて、穿く草鞋の滅り込む迄腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は塞かれて注ぐ渦の中に指先を浸す許である。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦り減つて、引き懸けて行く足の裏を、安々と受ける段々もある。長い竹を此所、彼所と、岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆はぬ程に、疾く滑らす爲めの策と云ふ。

「少しは穩かになつたね」と甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁々とする。黑い影は空高く動く。

「丸で猿だ」と宗近君は咽喉佛を突き出して峯を見上げた。

「慣れると何でもするもんだね」と相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて若干になるだらう」

「若干になるかな」

「下から聞いて見樣か」

「此流れは餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに駛つてゐる。所々にかう云ふ場所がないと矢張り行かんね」

「おれは、もつと、駛りたい。どうも、先つきの岩の腹を突いて曲がつた時なんか實に愉快だつた。願くは船頭の棹を借りて、おれが、舟を廻したかつた」

「君が廻せば今頃は御互に成佛してゐる時分だ」

「なに、愉快だ。京人形を見てゐるより愉快ぢやないか」

「自然は皆第一義で活動してるからな」
「すると自然は人間の御手本だね」
「なに人間が自然の御手本さ」
「それぢや矢つ張り京人形黨だね」
「京人形はいゝよ。あれは自然に近い。ある意味に於て第一義だ。困るのは……」
「困るのは何だい」
「大抵困るぢやないか」と甲野さんは打ち遣つた。
「さう困つた日にや方が付かない。御手本が無くなる譯だ」
「瀬を下つて愉快だと云ふのは御手本があるからさ」
「おれにかい」
「さうさ」
「すると、おれは第一義の人物だね」
「瀬を下つてるうちは、第一義さ」
「下つて仕舞へば凡人か。おや〱」
「自然が人間を飜譯する前に、人間が自然を飜譯するから、御手本は矢つ張り人間にあるのさ。瀬を下つて壯快なのは、君の腹にある壯快が第一義に活動して、自然に乘り移るのだよ。それが第一義の飜譯で、第一義の解釋だ」

「肝膽相照らすと云ふのは御互に第一義が活動するからだらう」
「まづそんなものに違ない」
「君に肝膽相照らす場合があるかい」
甲野さんは默然として、船の底を見詰めた。言ふものは知らずと昔し老子が說いた事がある。
「ハ、、、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ。愉快々々」と宗近君は二たび三たび手を敲く。
亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如くそと割れて、半ば碧りを透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて巖角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。
「その鼻を廻ると嵐山どす」と長い棹を舷のうちへ插し込んだ船頭が云ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を滑る樣に拔け出すと、左右の岩が自ら開いて、舟は大悲閣の下に着いた。
二人は松と櫻と京人形の群がるなかに這ひ上がる。幕と連なる袖の下を搔い潛ぐつて、松の間を渡月橋に出た時、宗近君は又甲野さんの袖をぐいと引いた。
赤松の二抱を楯に、大堰の波に、花の影の明かなるを誇る、橋の袂の葭簀茶屋に、高島田が休んでゐる。昔しの髷を今の世にしばし許せと被る瓜實顏は、花に臨んで風に堪へず、俯目に人を避けて、名物の團子を眺めて居る。薄く染めた綸子の被布に、正しく膝を組み合せたれば、下に重ねる衣の色は見えぬ。只襟元より燃え出づる何の模樣の半襟かゞ、すぐ甲野さんの眼に着いた。
「あれだよ」
「あれが？」

「あれが琴を彈いた女だよ。あの黑い羽織は阿爺に違ない」
「さうか」
「あれは京人形ぢやない。東京ものだ」
「どうして」
「宿の下女がさう云つた」
瓢箪に醉を飾る三五の癡漢が、天下の高笑に、腕を振つて後ろから押して來る。甲野さんと宗近さんは、體を斜めにえらがる人を通した。色の世界は今が眞つ盛りである。

六

丸顏に愁少し、颯と映る襟地の中から薄鶯の蘭の花が、幽なる香を肌に吐いて、着けたる人の胸の上にこぼれかゝる。糸子は斯んな女である。
人に示すときは指を用ゐる。四つを掌に折つて、餘る第二指の有丈にあれぞと指す時、指す手は只一筋の紛れなく明らかである。五本の指をあれ見よと悉く伸ばすならば、西東は當るとも、當ると思はるゝ感じは鈍くなる。糸子は五指を並べた樣な女である。受ける感じが間違つて居るとは云へぬ。然し變だ。物足らぬとは指點す指の短かきに過ぐる場合を云ふ。足り餘るとは指點す指の長きに失する時であらう。糸子は五指を同時に並べた樣な女である。足るとも云へぬ。足り餘るとも評されぬ。
人に指點す指の、細そりと爪先に肉を落すとき、明かなる感じは次第に爪先に集まつて焼點を構成る。

藤尾の指は爪先の紅を拔け出でゝ縫針の尖がれるに終る。見るものゝ眼は一度に痛い。要領を得ぬものは橋を渡らぬ。要領を得過ぎたものは欄干を渡る。欄干を渡るものは水に落ちる恐れがある。

藤尾と糸子は六疊の座敷で五指と針の先との戰爭をしてゐる。凡ての會話は戰爭である。女の會話は尤も戰爭である。

「暫らく御目に懸りませんね。よく入らしつた事」と藤尾は主人役に云ふ。

「父一人で忙がしいものですから、つい御無沙汰をして……」

「博覽會へも入らつしやらないの」

「いゝえ、まだ」

「向島は」

「まだ何處へも行かないの」

宅に許り居て、よく斯う滿足して居られると藤尾が思ふ。——糸子の眼尻には答へる度に笑の影が翳す。

「そんなに御用が御在りなの」

「なに大した用ぢやないんですけれども……」

糸子の答は大概半分で切れて仕舞ふ。

「少しは出ないと毒ですよ。春に一年に一度しか來ませんわ」

「さうね。わたしもさう思つてるんですけれども……」

「一年に一度だけれども、死ねば今年限りぢやありませんか」

「ホヽヽ死んぢや詰らないわね」
二人の會話は互に、死と云ふ字を貫いて、左右に飛び離れた。上野は淺草へ行く路である。同時に日本橋へ行く路である。藤尾は相手を墓の向側へ連れて行かうとした。相手は墓に向側のある事さへ知らなかつた。
「今に兄が御嫁でも貰つたら、出てあるきますわ」と糸子が云ふ。家庭的の婦女は家庭的の答へをする。男の用を足す爲めに生れたと覺悟をしてゐる女程憐れなものはない。藤尾は内心にふんと思つた。此眼は、此袖は、此詩と此歌は、鍋、炭取の類ではない。美くしい世に動く、美しい影である。實用の二字を冠らせられた時、女は――美くしい女は――本來の面目を失つて、無上の侮辱を受ける。
「一さんは、何時奥さんを御貰ひなさる御積りなんでせう」と話し丈は上滑をして前へ進む。糸子は返事をする前に顏を揚げて藤尾を見た。戰爭は段々始まつて來る。
「何時でも、來て下さる方があれば貰ふだらうと思ひますの」
今度は藤尾の方で、返事をする前に糸子を眤と見る。針は眞逆の用意に、中々瞳の中には出て來ない。
「ホヽヽ何んな立派な奥さんでも、すぐ出來ますわ」
「本當にさうなら、いゝんですが」と糸子は半分程裏へ絡まつてくる。藤尾は一寸逃げて置く必要がある。
「どなたか心當りはないんですか。一さんが貰ふと極まれば本氣に捜がしますよ」
黐竿は屆いたか、屆かないか、分らぬが、鳥は確かに逃げた樣だ。然しもう一歩進んで見る必要がある。

「えゝ、どうぞ捜がして頂戴、私の姉さんの積りで」
糸子は際どい所を少し出過ぎた。二十世紀の會話は巧妙なる一種の藝術である。出ねば要領を得ぬ。出過ぎるとはたかれる。
「あなたの方が姉さんよ」と藤尾は向ふで入れる捜索の綱を、ぷつりと切つて、逆さまに投げ歸した。
糸子はまだ悟らぬ。
「何故？」と首を傾ける。
放つ矢の中らぬは此方の不手際である。中たのに手答もなく裝はるゝは不器量である。女は不手際よりは不器量を無念に思ふ。藤尾は一寸下唇を嚙んだ。此所迄推して來て停まるは、只勝つ事を知る藤尾には出來ない。
「あなたは私の姉さんになり度はなくつて」と、素知らぬ顏で云ふ。
「あらつ」と糸子の頰に吾を忘れた色が出る。敵はそれ見ろと心の中に冷笑て引き上げる。
甲野さんと宗近君と相談の上取り極めた格言に云ふ。――第一義に於て活動せざるものは肝膽相照らすを得ずと。兩人の妹は肝膽の外廓で戰爭をしてゐる。肝膽の中に引き入れる戰爭か、肝膽の外に追つ拂ふ戰爭か。哲學者は二十世紀の會話を評して肝膽相曇らす戰爭と云つた。
所へ小野さんが來る。小野さんは過去に追ひ懸けられて、下宿の部屋のなかをぐる〳〵と廻つた。何度廻つても逃げ延びられさうもない時、過去の友達に逢つて、過去と現在との調停を試みた。調停は出來た樣な、出來ない樣な譯で、自己は依然として不安の狀態にある。度胸を据ゑて、追つ懸けてくるものを取

つ押へる勇氣は無論ない。小野さんは已むを得ず、未來を望んで馳け込んで來た。袞龍の袖に隱れると云ふ諺がある。小野さんは未來の袖に隱れやうとする。

小野さんは蹌々踉々として來た。只蹌々踉々の意味を說明し難いのが殘念である。

「どうか、なすつたの」と藤尾が聞いた。小野さんは心配の上に被せる從容の紋付を、まだ誂へてゐない。二十世紀の人は皆此紋付を二三着宛用意すべしと先の哲學者が述べた事がある。

「大變御顏の色が惡い事ね」と糸子が云つた。便る未來が戈を逆まにして、過去をほぢり出さうとするのは情けない。

「二三日寐られないんです」

「さう」と藤尾が云ふ。

「どう、なすつて」と糸子が聞く。

「近頃論文を書いて入らつしやるの。――ねえ夫でせう」と藤尾が答辯と質問を兼ねた言葉使ひをする。

「えゝ」と小野さんは渡りに舟の返事をした。小野さんは、どんな舟でも御乘んなさいと云はれゝば、乘らずには居られない。大抵の嘘は渡頭の舟である。あるから乘る。

「さう」と糸子は輕く答へる。如何なる論文を書かうと家庭的の女子は關係しない。家庭的の女子は只顏色の惡い所丈が氣にかゝる。

「卒業なすつても御忙いのね」

「卒業して銀時計を御頂きになつたから、是から論文で金時計を御取りになるんですよ」
「結構ね」
「ねえ、さうでせう。ねえ、小野さん」
小野さんは微笑した。
「それぢや、兄やこちらの欽吾さんと一所に京都へ遊びに入らつしやらない筈ね。――兄なんぞはそりや呑氣よ。少し寐られなくなればいゝと思ふわ」
「ホヽヽ夫でも家の兄より好いでせう」
「欽吾さんの方が幾何好いか分かりやしない」と糸子さんは、半分無意識に言つて退けたが、急に氣が付いて、羽二重の手巾を膝の上で苦茶々々に丸めた。
「ホヽヽ」
唇の動く間から前齒の角を彩どる金の筋がすつと外界に映る。敵は首尾よくわが術中に陷つた。藤尾は第二の凱歌を揚げる。
「未だ京都から御音信はないですか」と今度は小野さんが聞き出した。
「いゝえ」
「だつて端書位來さうなものですね」
「でも鐵砲玉だつて云ふぢやありませんか」
「だれがです」

「ほら、此間、母がさう云つたでしやう。二人共鐵砲玉だつて――糸子さん、殊に宗近は大の鐵砲玉ですとさ」

「だれが？御叔母さんが？。鐵砲玉で澤山よ。だから早く御嫁を持たして仕舞はないと何處へ飛んで行くか、心配でいけないんです」

「早く貰つて御上げなさいよ。ねえ、小野さん。二人で好いのを見付けて上げ樣ぢやありませんか」

藤尾は意味有り氣に小野さんを見た。小野さんの眼と、藤尾の眼が行き當つてぶる〳〵と顫へる。

「えゝ好いのを一人周旋しませう」と小野さんは、手巾を出して、薄い口髭を一寸撫でる。幽かな香がぷんとする。強いのは下品だと云ふ。

「京都には大分御知合があるでせう。京都の方を一さんに御世話なさいよ。京都には美人が多いさうぢやありませんか」

小野さんの手巾は一寸勢を失つた。

「なに實際美しくはないんです。――歸つたら甲野君に聞いて見ると分ります」

「兄がそんな話をするものですか」

「夫ぢや宗近君に」

「兄は大變美人が多いと申して居りますよ」

「宗近君は前にも京都へ入らしつた事があるんですか」

「いゝえ、今度が始めてゞすけれども、手紙を呉れまして」

「おや、それぢや鐵砲玉ぢやないのね。手紙が來たの」
「なに端書よ。都踊の端書をよこして、其はじに京都の女はみんな奇麗だと書いてあるのよ」
「さう。そんなに奇麗なの」
「何だか白い顏が澤山竝んでゝ些とも分らないわ。只見たら好いかも知れないけれども」
「只見ても白い顏が竝んどる許りです。奇麗は奇麗ですけれども、表情がなくつて、あまり面白くはないです」
「それから、まだ書いてあるんですよ」
「無精に似合はない事ね。何と」
「隣家の琴は御前より旨いつて」
「ホ、、一さんに琴の批評は出來さうもありませんね」
「私にあて付けたんでせう。琴がまづいから」
「ハ、、、宗近君も大分人の惡い事をしますね」
「しかも、御前より別嬪だと書いてあるんです。にくらしいわね」
「一さんは何でも露骨なんですよ。私なんぞも一さんに逢つちや叶はない」
「でも、あなたの事は褒めてありますよ」
「おや、何と」
「御前より別嬪だ、然し藤尾さんより惡いつて」

「まあ、いやだ事」

藤尾は得意と輕侮の念を交へたる眼を輝かして、すらりと首を後ろに引く。鬣に比すべきものゝ波を起すばかりに見えたるなかに、玉虫貝の菫のみが星の如く可憐の光を放つ。

小野さんの眼と藤尾の眼は此時再び合つた。糸子には意味が通ぜぬ。

「小野さん三條に蔦屋と云ふ宿屋が御座んすか」

底知れぬ黑き眼のなかに我を忘れて、縋る未來に全く吸ひ込まれたる人は、刹那の戸板返しにずどんと過去へ落ちた。

追ひ懸けて來る過去を逃がるゝは雲紫に立ち騰る袖香爐の烟る影に、縹緲の樂しみを是ぞと見極むるひまもなく、貪ぼると云ふ名さへ附け難き、眼と眼のひたと行き逢ひたる一拶に、結ばぬ夢は醒めて、逆しまに、われは過去に向つて投げ返される。草間蛇あり、容易に靑を踏む事を許さずとある。

「蔦屋がどうかしたの」と藤尾は糸子に向ふ。

「なに其蔦屋にね、欽吾さんと兄さんが宿つてるんですつて。だから、どんな所かと思つて、小野さんに伺つて見たんです」

「小野さん知つて居らしつて」

「三條ですか。三條の蔦屋と。さうですね、有つた樣にも覺えて居ますが……」

「それぢや、そんな有名な旅屋ぢやないんですね」と糸子は無邪氣に小野さんの顏を見る。

「えゝ」と小野さんは切なさうに答へた。今度は藤尾の番となる。

「有名でなくつたつて、好ゝぢやありませんか。裏座敷で琴が聽えて——尤も兄と一さんぢや駄目ね。小野さんなら、屹度御氣に入るでせう。春雨がしと〳〵降つてる靜かな日に、宿の隣家で美人が琴を彈いてるのを、氣樂に寐轉んで聽いてゐるのは、詩的でいゝぢやありませんか」

小野さんは何時になく默つてゐる。眼さへ、藤尾の方へは向けないで、床の山吹を無意味に眺めてゐる。

「好いわね」と糸子が代理に答える。

詩を知らぬ人が、趣味の問題に立ち入る權利はない。家庭的の女子からいゝわね位の贊成を求めて滿足する位なら始めから、春雨も、奧座敷も、琴の音も、口に出さぬ所であつた。藤尾は不平である。

「想像すると面白い畫が出來ますよ。どんな所としたらいゝでせう」

家庭的の女子には、何故こんな質問が出てくるのか、頓と其意を解しかねる。要らぬ事と默つて控へてゐるより仕方がない。小野さんは是非共口を開かねばならぬ。

「あなたは、どんな所がいゝと思ひます」

「私？　私はね、——さうね——裏二階がいゝわ——廻り椽で、加茂川がすこし見えて——三條から加茂川が見えても好ゝんでせう」

「えゝ、所によれば見えます」

「加茂川の岸には柳がありますか」

「えゝ、あります」

「其柳が、遠くに烟る樣に見えるんです。其上に東山が——東山でしたね奇麗な丸い山は——あの山が、

青い御供の樣に、こんもりと霞んでるんです。さうして霞のなかに、薄く五重の塔が――あの塔の名は何と云ひますか」

「どの塔です」

「どの塔つて、東山の右の角に見えるぢやありませんか」

「一寸覺えませんね」と小野さんは首を傾ける。

「有んです、屹度あります」と藤尾が云ふ。

「だつて琴は隣りよ、あなた」と糸子が口を出す。

女詩人の空想は此一句で破れた。家庭的の女は美くしい世を打ち壞しに生れて來たも同樣である。藤尾は少しく眉を寄せる。

「大變御急ぎだ事」

「なに、面白く伺つてるのよ。それから其五重の塔がどうかするの」

五重の塔がどうもする譯はない。刺身を眺めた丈で臺所へ下げる人もある。五重の塔をどうかしたがる連中は、刺身を食はなければ我慢の出來ぬ樣に教育された實用主義の人間である。

「それぢや五重の塔はやめましやう」

「面白いんですよ。五重の塔が面白いのよ。ねえ小野さん」

御機嫌に逆つた時は、必ず人を以て詫を入れるのが世間である。女王の逆鱗は鍋、釜、味噌漉の御供物では直せない。役にも立たぬ五重の塔を霞のうちに腫物の樣に安置しなければならぬ。

「五重の塔は夫れつきりよ。五重の塔がどうするものですかね」
藤尾の眉はぴくりと動いた。糸子は泣きたくなる。
「御氣に障つたの――私が悪るかつたわ。本當に五重の塔は面白いのよ。御世辭ぢやない事よ」
針鼠は撫でれば撫でる程針を立てる。小野さんは、破裂せぬ前にどうかしなければならぬ。
五重の塔を持ち出せば猶怒られる。琴の音は自分に取つて禁物である。小野さんはどうして調停したら好からうかと考へた。話が京都を離れゝば自分には好都合だが、無暗に緣のない離し方をすると、糸子さん同樣に輕蔑を招く。向ふの話題に着いて廻つて、しかも自分に苦痛のない樣に發展させなければならぬ。銀時計の手際では些と六づかし過ぎる樣だ。
「小野さん、あなたには分るでせう」と藤尾の方から切つて出る。糸子は分らず屋として取り除けられた。女二人を調停するのは眼の前に快からぬ言葉の果し合を見るのが厭だからである。文錦やさしき眉に切り結ぶ火花の相手が、相手にならぬと見下げられゝば、手を出す必要はない。取除者を仲間に入れてやる親切は、取除者の方で、うるさく絡つてくる時に限る。大人しくさへして居れば、取り除けられ樣が、見下けられ樣が、當分自分の利害には關係せぬ。小野さんは糸子を眼中に置く必要がなくなつた。切つて出た藤尾にさへ調子を合せて居れば間違はない。
「分りますとも。――詩の命は事實より確かです。然しさう云ふ事が分らない人が世間には大分ありますね」と云つた。小野さんは糸子を輕蔑する料簡ではない、只藤尾の御機嫌に重きを置いた迄である。しかも其答は眞理である。只弱いものにつらく當る眞理である。小野さんは詩の爲めに愛の爲めには其位の

犠牲を敢てする。道義は弱いものゝ頭に耀かず、糸子は心細い氣がした。藤尾の方は漸く胸が隙く。

「夫ぢや、其續をあなたに話して見ませうか」

人を呪はゞ穴二つと云ふ。小野さんは是非共えゝと答へなければならぬ。

「えゝ」

「二階の下に飛石が三つ許り筋違に見えて、其先に井桁があつて、小米櫻が擦れ〳〵に咲いてゐて、釣瓶が觸るとほろ〳〵、井戸の中へこぼれさうなんです。……」

糸子は默つて聽いてゐる。小野さんも默つて聽いてゐる。花曇りの空が段々擦り落ちて來る。重い雲がかさなり合つて、彌生をどんよりと抑へ付ける。晝は次第に暗くなる。戸袋を五尺離れて、袖垣のはづれに幣辛夷の花が怪しい色を併べて立つてゐる。木立に透かして能く見ると、折々は二筋、三筋雨の糸が途切れ途切れに映る。斜めにすうと見えたかと思ふと、はや消える。空の中から降るとは受け取れぬ、地の上に落つるとは猶更思へぬ。糸の命は僅かに尺餘りである。

居は氣を移す。藤尾の想像は空と共に濃かになる。

「小米櫻を二階の欄干から御覧になつた事があつて」と云ふ。

「まだ、ありません」

「雨の降る日に。――おや少し降つて來た樣ですね」と庭の方を見る。空は猶更暗くなる。

「それからね。――小米櫻の後ろは建仁寺の垣根で、垣根の向ふで琴の音がするんです」

琴は愈出て來た。糸子は成程と思ふ。小野さんは是はと思ふ。

「二階の欄干から、見下すと隣家の庭が悉皆見えるんです。――序でに其庭の作りも話しませうか。ホヽヽ」と藤尾は高く笑つた。冷たい糸が辛夷の花をきらりと掠める。

「ホヽヽ、御厭なの――何だか暗くなつて來た事。花曇りが化け出しさうね」

そこ迄近寄つて來た暗い雲は、そろ〳〵細い糸に變化する。すいと木立を横ぎつた、あとから直すいと追懸けて來る。見て居るうちにすい〳〵と幾本も一所に通つて行く。雨は漸く繁くなる。

「おや本降になりさうだ事」

「私失禮するは、降つて來たから。御話し中で失禮だけれども。大變面白かつたわ」

糸子は立ち上がる。話しは春雨と共に崩れた。

七

燐寸を擦る事一寸にして火は闇に入る。幾段の彩錦を捲り終れば無地の境をなす。春興は二人の青年に盡きた。狐の袖無を着て天下を行くものは、日記を懐にして百年の憂を抱くものと共に歸程に上る。古き寺、古き社、神の森、佛の丘を掩ふて、いそぐ事を解せぬ京の日は漸く暮れた。倦怠るい夕べである。消えて行く凡てのものゝ上に、星許り取り殘されて、夫すらも判然とは映らぬ。瞬くも嬾き空の中にどろんと溶けて行かうとする。過去は此眠れる奥から動き出す。

一人の一生には百の世界がある。ある時は土の世界に入り、ある時は風の世界に動く。またある時は血の世界に腥き雨を浴びる。一人の世界を方寸に纒めたる團子と、他の清濁を混じたる團子と、層々相連つ

て千人に千個の實世界を活現する。個々の世界は個々の中心を因果の交叉點に据ゑて分相應の圓周を右に劃し左に劃す。怒の中心より畫き去る圓は飛ぶが如くに速かに、戀の中心より振り來る圓周は燄の痕を空裏に燒く。あるものは道義の糸を引いて動き、あるものは奸譎の圜をほのめかして回る。縱橫に、前後に、上下四方に、亂れ飛ぶ世界と世界が喰ひ違ふとき秦越の客こゝに舟を同じうす。甲野さんと宗近君は、三春行樂の興盡きて東に歸る。孤堂先生と小夜子は、眠れる過去を振り起して東に行く。二個の別世界は八時發の夜汽車で端なくも喰ひ違つた。

わが世界とわが世界と喰ひ違ふとき腹を切る事がある。自滅する事がある。わが世界と他の世界と喰ひ違ふとき二つながら崩れる事がある。破けて飛ぶ事がある。あるひは發矢と熱を曳いて無極のうちに物別れとなる事がある。凄まじき喰ひ違ひ方が生涯に一度起るならば、われは幕引く舞臺に立つ事なくして自からなる悲劇の主人公である。天より賜はる性格は此時始めて第一義に於て躍動する。八時發の夜汽車で喰ひ違つた世界は左程に猛烈なものではない。然し只逢ふて只別れる袖丈の緣ならば、星深き春の夜を、名さへ寂びたる七條に、さして喰ひ違ふ程の必要もあるまい。小說は自然を彫琢する。自然其物は小說にはならぬ。

二個の世界は絶えざるが如く、續かざるが如く、夢の如く幻の如く、二百里の長き車のうちに喰ひ違つた。二百里の長き車は、牛を乘せ樣か、馬を乘せ樣か、如何なる人の運命を如何に東の方に搬び去らうか、更に無頓着である。世を畏れぬ鐵輪をごとりと轉す。あとは驀地に闇を衝く。離れて合ふを待ち侘び顏なるを、行いて歸るを快からぬを、旅に馴れて徂徠を意とせざるを、一樣に束ねて、悉く土偶の如くに遇待

うとする。夜こそ見えね、熾んに黑烟を吐きつゝある。
眠る夜を、生けるものは、提灯の火に、皆七條に向つて動いて來る。梶棒が下りるとき黑い影が急に明かるくなつて、待合に入る。黑い影は暗いなかから續々と現はれて出る。場内は生きた黑い影で埋まつて仕舞ふ。殘る京都は定めて靜かだらうと思はれる。
京の活動を七條の一點にあつめて、あつめたる活動の千と二千の世界を、十把一束に夜明迄に、あかるい東京へ推し出さう爲めに、汽車はしきりに烟を吐きつゝある。黑い影はなだれ始めた。――一團の塊まりはばら〳〵に解れて點となる。點は右へと左へと動く。しばらくすると、無敵な音を立てて車輛の戸をはた〳〵と締めて行く。忽然としてプラットフォームは、在る人を掃いて捨てた樣にがらんと廣くなる。大きな時計許りが窓の中から眼につく。すると口笛が遙かの後ろで鳴つた。車はごとりと動く。互の世界が如何なる關係に織り成さるゝかを知らぬ氣に、闇の中を鼻で行く、甲野さんは、宗近君は、孤堂先生は、可憐なる小夜子は、同じく此車に乘つて居る。知らぬ車はごとり〳〵と廻轉する。知らぬ四人は、四樣の世界を喰ひ違はせながら暗い夜の中に入る。
「大分込み合ふな」と甲野さんは室内を見廻はしながら云ふ。
「うん、京都の人間は此汽車でみんな博覽會見物に行くんだらう。餘つ程乘つたね」
「さうさ、待合所が黑山の樣だつた」
「京都は淋しいだらう。今頃は」
「ハヽヽ、本當に。實に閑靜な所だ」

「あんな所に居るものでも動くから不思議だ。あれでも矢つ張り色々な用事があるんだらうな」
「いくら閑静でも生れるものと死ぬものはあるだらう」と甲野さんは左の膝を右の上へ乗せた。
「ハヽヽ生れて死ぬのが用事か。蔦屋の隣家に住んでる親子なんか、まあそんな連中だね。隨分ひつそり暮してるぜ。かたりともしない。あれで東京へ行くと云ふから不思議だ」
「博覧會でも見に行くんだらう」
「いえ、家を疊んで引つ越すんださうだ」
「へえ。何時」
「何時か知らない。其所迄は下女に聞いて見なかつた」
「あの娘もいづれ嫁に行く事だらうな」と甲野さんは獨り言の樣に云ふ。
「ハヽヽ行くだらう」と宗近君は頭陀袋を棚へ上げた腰を卸しながら笑ふ。相手は半分顏を背けて硝子越に窓の外を透して見る。外は只暗い許りである。汽車は遠慮もなく暗いなかを突切つて行く。轟と云ふ音のみする。人間は無能力である。
「隨分早いね。何哩位の速力か知らん」と宗近君が席の上へ胡坐をかきながら云ふ。
「どの位早いか外が眞暗で些とも分らん」
「外が暗くつたつて、早いぢやないか」
「比較するものが見えないから分らないよ」
「見えなくつたつて、早いさ」

「君には分るのか」

「うん、ちやんと分る」と宗近君は威張つて胡坐をかき直す。話しは又途切れる。汽車は速度を増して行く。向の棚に載せた誰やらの帽子が、傾いた儘、山高の頂を顫はせてゐる。給仕が時々室内を拔ける。大抵の乘客は向ひ合せに顏と顏を見守つてゐる。

「どうしても早いよ。おい」と宗近君は又話しかける。甲野さんは半分眼を眠つてゐた。

「えゝ?」

「どうしてもね、――早いよ」

「さうか」

「うん。そうら――早いだらう」

汽車は轟と走る。甲野さんはにやりと笑つたのみである。

「急行列車は心持ちがいゝ。これでなくつちや乘つた樣な氣がしない」

「又夢窓國師より上等ぢやないか」

「ハヽヽ、第一義に活動して居るね」

「京都の電車とは大違だらう」

「京都の電車か?あいつは降參だ。全然第十義以下だ。あれで運轉して居るから不思議だ」

「乘る人があるからさ」

「乘る人があるからつて――餘りだ。あれで布設したのは世界一ださうだぜ」

「さゝでもないだらう。世界一にしちやあ幼稚過ぎる」

「所が布設したのが世界一なら、進歩しない事も世界一ださうだ」

「ハヽヽ、京都には調和してる」

「さうだ。あれは電車の名所古蹟だね。電車の金閣寺だ。元來十年一日の如しと云ふのは賞める時の言葉なんだがな」

「千里の江陵一日に還るなんと云ふ句もあるぢやないか」

「二百里程蜿蜒の間さ」

「そりや西鄕隆盛だ」

「さうか、どうも可笑しいと思つたよ」

甲野さんは返事を見合せて口を緘ぢた。會話は又途切れる。汽車は例によつて轟と走る。二人の世界はしばらく闇の中に搖られながら消えて行く。同時に、殘る二人の世界が、細長い夜を糸の如く照らして動く電燈の下にあらはれて來る。

色白く、傾く月の影に生れて小夜と云ふ。母なきを、つゞまやかに暮らす親一人子一人の京の住居に、盂蘭盆の灯籠を掛けてより五遍になる。今年の秋は久し振で、亡き母の精靈を、東京の苧殼で迎へる事と、長袖の左右に開くなかゝら、白い手を尋常に重ねてゐる。物の憐れは小さき人の肩にあつまる。乘し掛る怒は、撫で下す絹しなやかに情の裾に滑り込む。

紫に驕るものは招く、黄に深く情濃きものは追ふ。東西の春は二百里の鐵路に連なるを、願の糸の一筋

に、戀こそ誠なれと、髪に掛けたる丈長を顫はせながら、長き夜を縫ふて走る。古き五年は夢である。只滴たる繪筆の勢に、有耶無耶を貫いて赫と染めつけられた昔の夢は、深く記憶の底に透つて、當時を裏返す折々にさへ鮮かに煮染んで見える。小夜子の夢は命よりも明かである。小夜子は此明かなる夢を、春寒の懐に暖めつゝ、黒く動く一條の車に載せて東に行く。車は夢を載せた儘ひたすらに、只東へと走る。夢を携へたる人は、落すまじと、ひしと燃ゆるものを抱きしめて行く。車は無二無三に走る。野には綠りを衝き、山には雲を衝き、星ある程の夜には星を衝いて走る。夢を抱く人は、抱きながら、走りながら、明かなる夢を暗闇の遠きより切り放して、現實の前に抛げ出さんとしつゝある。車の走る毎に夢と現實の間は近づいてくる。小夜子の旅は明かなる夢と明かなる現實がはたと行き逢ふて區別なき境に至つて已む。

夜はまだ深い。

隣りに腰を掛けた孤堂先生は左程に大事な夢を持つて居らぬ。日毎に腮の下に白くなる疎髯を握つては昔しを思ひ出さうとする。昔しは二十年の奥に引き籠つて容易には出て來ない。漠々たる紅塵のなかに何やら動いて居る。人か犬か木か草かそれすらも判然せぬ。人の過去は人と犬と木と草との區別がつかぬ樣になつて始めて眞の過去となる。戀々たるわれを、つれなく見捨て去る當時に未練があればあるほど、人も犬も草も木も滅茶苦茶である。孤堂先生は胡麻鹽交りの髯をぐいと引いた。

「御前が京都へ來たのは幾歳の時だつたかな」

「學校を癈めてから、すぐですから、丁度十六の春でしやう」

「すると、今年で何だね、……」

「さう五年になるね。早いものだ、つい此間の樣に思つた居たが」と叉鬚を引つ張つた。

「來た時に嵐山へ連れていつて頂いたでせう。御母さんと一所に」

「さう〳〵、あの時は花がまだ早過ぎたね。あの時分から思ふと嵐山も大分變つたよ。名物の團子もまだ出來なかつた樣だ」

「いゝえ御團子はありましたわ。そら三軒茶屋の傍で喫たぢやありませんか」

「さうかね。能く覺えて居ないよ」

「ほら、小野さんが青いの許り食べるつて、御笑ひなすつたぢやありませんか」

「成程あの時分は小野が居たね。御母さんも丈夫だつたがな。あゝ早く亡くならうとは思はなかつたよ。人間程分らんものはない。小野も夫から大分變つたらう。何しろ五年も逢はないんだから……」

「でも御丈夫だから結構ですわ」

「さうさ。京都へ來てから大變丈夫になつた。來たては隨分蒼い顏をしてね、さうして何だか始終おど〳〵して居た樣だが、馴れると段々平氣になつて……」

「性質が柔和いんですよ」

「柔和いんだよ。柔和過ぎるよ。――でも卒業の成蹟が優等で銀時計を頂戴して、まあ結構だ。――人の世話はするもんだね。あゝ云ふ性質の好い男でも、あの儘放つて置けば夫れ限り、何處へどう這入つて仕舞ふか分らない」

「本當にね」

明かなる夢は輪を描いて胸のうちに回り出す。死したる夢ではない。五年の底から浮き刻りの深き記憶を離れて、咫尺に飛び上がつて來る。女は只眸を凝らして眼前に逼る夢の、明らかに過ぐる程の光景を右から、左から、前後上下から見る。夢を見るに心を奪はれたる人は、老いたる親の髯を忘れる。小夜子は口をきかなくなつた。

「小野は新橋迄迎にくるだらうね」

「入らつしやるでせうとも」

夢は再び躍る。躍るなと抑へたる儘、夜を込めて搖られながらに、暗きうちを駆ける。老人は髯から手を放す。やがて眼を眠る。人も犬も草も木も判然と映らぬ古き世界には、いつとなく黒い幕が下りる。小さき胸に躍りつゝ、轉りつゝ、抑へられつゝ走る世界は、闇を照らして火の如く明かである。小夜子は此明かなる世界を抱いて眠に就いた。

長い車は包む夜を押し分けて、遣らじと逆ふ風を打つ。追ひ懸くる冥府の神を、力ある尾に敲いて、漸やくに抜け出でたる曉の國の青く烟る向ふが一面に競り上がつて來る。茫々たる原野の自から盡きず、次第に天に逼つて上へ上へと限りなきを怪しみながら、消え殘る夢を排して、眼を半天に走らす時、日輪の世は明けた。

神の代を空に鳴く金鷄の、翼五百里なるを一時に搏して、漲ぎる雲を下界に披く大虛の眞中に、朗に浮き出す萬古の雪は、末廣になだれて、八州の野を壓する勢を、左右に展開しつゝ、蒼茫の裡に、腰から下

を埋めてゐる。白きは空を見よがしに貫ぬく。白きもの丶一段を盡くせば、紫の襞と藍の襞とを斜めに疊んで、白き地を不規則なる幾條に裂いて行く。見上ぐる人は這ふ雲の影を沿ふて、蒼暗き裾野から、藍、紫の深きを稻妻に縫ひつゝ、最上の純白に至つて、豁然として眼が醒める。白きものは明るき世界に凡ての乘客を誘ふ。

「おい富士が見える」と宗近君が座を滑り下りながら、窓をはたりと卸す。廣い裾野から朝風がすうと吹き込んでくる。

「うん。最先から見えてゐる」と甲野さんは駱駝の毛布を頭から被つた儘、存外冷淡である。

「さうか、寐なかつたのか」

「少しは寐た」

「何だ、そんなものを頭から被つて……」

「寒い」と甲野さんは膝掛の中で答へた。

「僕は腹が減つた。まだ飯は食はさないだらうか」

「飯を食ふ前に顏を洗はなくつちや……」

「御尤だ。御尤な事ばかり云ふ男だ。ちつと富士でも見るがいゝ」

「叡山よりいゝよ」

「叡山？何だ叡山なんか、高が京都の山だ」

「大變輕蔑するね」

「ふゝん。――どうだい、あの雄大な事は。人間もあゝ來なくつちあ駄目だ」
「君にはあゝ落ち付いちや居られないよ」
「保津川が關の山か。保津川でも君より上等だ。君なんぞは京都の電車位な所だ」
「京都の電車はあれでも動くからいゝ」
「君は全く動かないか。ハヽヽ。さあ駱駝を拂ひ退けて動いた」と宗近君は頭陀袋を棚から取り卸す。
室のなかはざわ付いてくる。明かるい世界へ馳け拔けた汽車は沼津で息を入れる。――顏を洗ふ。
窓から肉の落ちた顏が半分出る。疎髯を一本毎にあるひは黑く或は白く朝風に吹かして「おい辨當を二つ呉れ」と云ふ。孤堂先生は右の手に若干の銀貨を握つて、へぎ折を取る左と引き換に出す。御茶は部屋のなかで娘が注いで居る。
「どうだね」と折の蓋を取ると白い飯粒が裏へ着いてくる。なかには長芋の白茶に寐轉んでゐる傍らに、一片の玉子燒が黃色く壓し潰され樣として、苦し紛れに首丈飯の境に突き込んでゐる。
「まだ、食べたくないの」と小夜子は箸を執らずに折ごと下へ置く。
「やあ」と先生は茶碗を娘から受取つて、膝の上の折に突き立てた箸を眺めながら、ぐつと飲む。
「もう直ですね」
「あゝ、もう譯はない」と長芋が髯の方へ動き出した。
「今日はいゝ御天氣ですよ」
「あゝ天氣で仕合せだ。富士が奇麗に見えたね」と長芋が髯から折のなかへ這入る。

「小野さんは宿を搜がして置いて下すつたでせうか」
「うん、搜が――搜がしたに違ない」と先生の口が、喫飯と返事を兼勤する。食事はしばらく繼續する。
「さあ食堂へ行かう」と宗近君が隣りの車室で米澤絣の襟を掻き合せる。背廣の甲野さんは、ひよろ長く立ち上がつた。通り道に轉がつてゐる手提革鞄を跨いだ時、甲野さんは振り返つて
「おい、蹴爪づくと危ない」と注意した。
硝子戸を押し開けて、隣りの車室へ足を踏ん込んだ甲野さんは、眞直に拔ける氣で、中途迄來た時、宗近君が後ろから、ぐいと背廣の尻を引つ張つた。
「御飯が少し冷えてますね」
「冷えてるのはいゝが、硬過ぎてね。――阿爺の樣に年を取ると、どうも硬いのは胸に痞えていけないよ」
「御茶でも上がつたら……注ぎませうか」
青年は無言の儘食堂へ拔けた。
日毎夜毎を入り亂れて、盡十方に飛び交はす小世界の、普ねく天涯を行き盡して、しかも盡くる期なしと思はるゝなかに、絹糸の細きを厭はず植ゑ付けし蠶の卵の並べる如くに、四人の小宇宙は、心なき汽車のうちに行く夜半を背中合せの知らぬ顏に並べられた。星の世は掃き落されて、大空の皮を奇麗に剝ぎ取つた白日の、隱すなかれと立ち上る窓の中に、四人の小宇宙は偶を作つて、こゝぞと互に擦れ違つた。擦れ違つて通り越した一個の小宇宙は今白い卓布を挾んでハムエクスを平げつゝある。

「おい居たぜ」と宗近君が云ふ。

「うん居た」と甲野さんは獻立表を眺めながら答へる。

「愈東京へ行くと見える。昨夕京都の停車場では逢はなかつた樣だね」

「いゝや、些とも氣が付かなかつた」

「隣りに乘つてるとは僕も知らなかつた。——どうも善く逢ふね」

「少し逢ひ過ぎるよ。——此ハムは丸で脣許りだ。君のも同樣かい」

「まあ似たもんだ。君と僕の逢位な所かな」と宗近君は肉刺を逆にして大きな切身を口へ突き込む。

「御互に豚を以て自任して居るのかなあ」と甲野さんは、少々情けなさゝうに白い脣味を頰張る。

「豚でもいゝが、どうも不思議だよ」

「猶太人は豚を食はんさうだね」と甲野さんは突然超然たる事を云ふ。

「猶太人は兎も角も、あの女がさ。少し不思議だよ」

「あんまり逢ふからかい」

「うん。——給仕紅茶を持つて來い」

「僕はコフヒーを飮む。此豚は駄目だ。」と甲野さんは又女を外して仕舞ふ。

「これで何遍逢ふかな。一遍、二遍、三遍と何でも三遍許り逢ふぜ」

「小說なら、是が緣になつて事件が發展する所だね。是丈でまあ無事らしいから……」と云つたなり甲野さんはコフヒーをぐいと飮む。

「是丈で無事らしいから御互に豚なんだらう。ハヽヽヽ。――然し何とも云はれない。君があの女に懸想して……」

「さうさ」と甲野さん、相手の文句を途中で消して仕舞つた。

「夫でなくつても、此位違ふ位だからこの先、どう關係がつかないとも限らない」

「君とかい」

「なにさ、そんな關係ぢやない外の關係さ。情交以外の關係だよ」

「左樣」と甲野さんは、左の手で顎を支へながら、右に持つたコフヒー茶碗を鼻の先に据ゑたまゝぼんやり向ふを見てゐる。

「蜜柑が食ひたい」と宗近君が云ふ。甲野さんは默つてゐる。やがて

「あの女は嫁にでも行くんだらうか」と毫も心配にならない氣色で云ふ。

「ハヽヽ。聞いてやらうか」と挨拶も聞く料簡はなさゝうである。

「嫁か？そんなに嫁に行きたいものかな」

「だからさ、そりや聞いて見なけりあ分からないよ」

「君の妹なんぞは、どうだ。矢つ張り行きたい樣かね」と甲野さんは妙な事を眞面目に聞き出した。

「糸公か。あいつは、から赤兒だね。然し兒思ひだよ。狐の袖無を縫つてくれたり、なんかしてね。あいつは、あれで裁縫が上手なんだぜ。どうだ肱突でも造てもらつて遣らうか」

「さうさな」

「入らないか」
「うん、入らん事もないが……」
肱突は不得要領に終つて、二人は食卓を立つた。孤堂先生の車室を通り拔けた時、先生は顏の前に朝日新聞を一面に擴げて、小夜子は小さい口に、玉子燒をすくひ込んで居た。四個の小世界は夫れ〳〵に活動して、二たゝび列車のなかに擦れ違つた儘、互の運命を自家の未來に危ぶむが如く、又怪しまざるが如く、測るべからざる明日の世界を擁して新橋の停車場に着く。
「さつき馳けて行つたのは小野ぢやなかつたか」と停車場を出る時、宗近君が聞いて見る。
「さうか。僕は氣が付かなかつたが」と甲野さんは答へた。
四個の小世界は、停車場に突き當つて、しばらく、ばらく〳〵となる。

八

一本の淺葱櫻が夕暮を庭に曇る。拭き込んだ椽は、立て切つた障子の外に靜かである。うちは小形の長火鉢に手取形の鐵瓶を沸らして前には絞り羽二重の座布團を敷く。布團の上には甲野の母が品よく座つてゐる。きりりと釣り上げた眼尻の盡くるあたりに、疳の筋が裏を通つて額へ突き拔けてゐるらしい上部を、淺黑く膚理の細かい皮が包んで、外見丈は至極穩やかである。――針を海綿に藏して、ぐつと握らしめたる後、柔らかき手に膏藥を貼つて創口を快よく慰めよ。出來得べくんば唇を血の出る局所に接けて他意なきを示せ。――二十世紀に生れた人は是丈の事を知らねばならぬ。骨を露はすものは亡ぶと甲野さんが嘗つ

て日記に書いた事がある。

靜かな椽に足音がする。今卸したかと思はれる程の白足袋を張り切る許りに細長い足に見せて、變り色の厚い袷の椽に引き擦るを輕く蹴返しながら、障子をすうと開ける。

居住を其儘の母は、濃い眉を半分程入口に傾けて、

「おや、御這入」と云ふ。

藤尾は無言で後を締める。母の向に火鉢を隔てゝすらりと坐つた時、鐵瓶は頻りに鳴る。

母は藤尾の顏を見る。藤尾は火鉢の横に二つ折に疊んである新聞を俯目に眺める。――鐵瓶は依然として鳴る。

口多き時に眞少なし。鐵瓶の鳴るに任せて、徒らに差し向ふ親と子に、椽は靜かである。淺葱櫻は夕暮を誘ひつゝある。春は逝きつゝある。

藤尾はやがて顏を上げた。

「歸つて來たのね」

親、子の眼は、はたと行き合つた。眞は一瞥に籠る。熱に堪へざる時は骨を露はす。

「ふん」

長烟管に烟草の殼を丁とはたく音がする。

「どうする氣なんでせう」

「どうする氣か、彼人の料簡許りは御母さんにも分らないね」

雲井の烟は會釋なく、骨の高い鼻の穴から吹き出す。

「歸つて來ても同じ事ですね」

「同じ事さ。生涯あれなんだよ」

御母さんの疳の筋は裏から表へ浮き上がつて來た。

「家を襲ぐのがあんなに厭なんでせうか」

「なあに、口丈さ。夫だから惡いんだよ。あんな事を云つて私達に當付る積なんだから……本當に財産も何も入らないなら自分で何かしたら、善いぢやないか。毎日々々愚圖々々して、卒業してから今日迄もう二年にもなるのに。いくら哲學だつて自分一人位どうにかなるに極つてるらあね。煮え切らないつちやありやしない。彼人の顏を見るたんびに阿母は疳癪が起つてね。……」

「遠廻しに云ふ事は些とも通じない樣ね」

「なに、通じても、不知を切つてるんだよ」

「憎らしいわね」

「本當に。彼人がどうかして呉れないうちは、御前の方を如何にもする事が出來ない。……」

藤尾は返事を控へた。戀は凡ての罪惡を孕む。返事を控へたうちには、あらゆるものを犧牲に供するの決心がある。母は續ける。

「御前も今年で二十四ぢやないか。二十四になつて片付かないものが滅多にあるものかね。――それを、嫁に遣らうかと相談すれば、御廢しなさい、阿母さんの世話は藤尾にさせたいからと云ふし、そんなら獨

立する丈の仕事でもするかと思へば、毎日部屋のなかへ閉ぢ籠つて寐轉んでるしさ。——さうして他人には財産を藤尾にやつて自分は流浪する積だなんて云ふんだよ。さも此方が邪魔にして追ひ出しにでもかゝつてる樣で見つともないぢやないか」

「何處へ行つて、そんな事を云つたんです」

「宗近の阿爺の所へ行つた時、さう云つたとさ」

「餘つ程男らしくない性質ですね。夫より早く糸子さんでも貰つて仕舞つたら好いでせうに」

「全體貰ふ氣があるのかね」

「兄さんの料簡はとても分りませんわ。然し糸子さんは兄さんの所へ來たがつてるんですよ」

母は鳴る鐵瓶を卸して、炭取を取り上げた。隙間なく澁の洩れた劈痕燒に、二筋三筋藍を流す波を描いて、眞白な櫻を氣儘に散らした、薩摩の急須の中には、綠りを細く綯り込んだ宇治の葉が、午の湯に腐やけた儘、ひた〳〵に重なり合ふて冷えてゐる。

「御茶でも入れ樣かね」

「いゝえ」と藤尾は疾く拔け出した香の猶餘りあるを、急須と同じ色の茶碗のなかに疊み込む。黄な流れの底を敲く程は、左程とも思へぬが、緣に近く漸く色を増して、濃き水は泡を面に片寄せて動かずなる。

母は搔き馴らしたる灰の盛り上りたるなかに、佐倉炭の白き殘骸の完きを毀ちて、心に潛む赤きものを片寄せる。温もる穴の崩れたる中には、黑く輪切の正しきを擇んで、ぴち〳〵と活ける。——室内の春光は飽く迄も二人の母子に穩かである。

此作者は趣なき會話を嫌ふ。猜疑不和の暗き世界に、一點の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流ではない。閑花素琴の春を司どる人の歌めく天が下に住まずして、半滴の氣韻だに帶びざる野卑の言語を臚列するとき、毫端に泥を含んで双手に筆を運らし難き心地がする。宇治の茶と、薩摩の急須と、佐倉の切り炭を描くは瞬時の閑を偸んで、一彈指頭に脱離の安慰を讀者に與ふるの方便である。たゞし地球は昔しより廻轉する。明暗は晝夜を捨てぬ。嬉しからぬ親子の半面を最も簡短に敍するは此作者の切なき義務である。茶を品し、炭を寫したる筆は再び二人の對話に戻らねばならぬ。二人の對話は少なくとも前段より趣がなくてはならぬ。

「宗近と云へば、一も餘つ程剽輕者だね。學問も何にも出來ない癖に大きな事ばかり云つて、――あれで當人は立派にえらい氣なんだよ」

厩と鳥屋と一所にあつた。牝鷄の馬を評する語に、――あれは鷄鳴をつくる事も、鷄卵を生む事も知らぬとあつたさうだ。尤もである。

「外交官の試驗に落第したつて、些とも恥づかしがらないんですよ。普通のものなら、もう少し奮發する譯ですがねえ」

「鐵砲玉だよ」

意味は分からない。只思ひ切つた評である。藤尾は滑らかな頰に波を打たして、にやりと笑つた。藤尾は詩を解する女である。駄菓子の鐵砲玉は黒砂糖を丸めて造る。砲兵工廠の鐵砲玉は鉛を鎔かして鑄る。いづれにしても鐵砲玉は鐵砲玉である。さうして母は飽く迄も眞面目である。母には娘の笑つた意味が分

からない。

「御前はあの人をどう思つてるの」

娘の笑は、端なくも母の疑問を起す。子を知るは親に若かずと云ふ。それは違つてゐる。御互に喰ひ違つて居らぬ世界の事は親と雖ども唐、天竺である。

「どう思つてるつて……別にどうも思つてやしません」

母は鋭どき眉の下から、娘を屹と見た。意味は藤尾にちやんと分つてゐる。相手を知るものは騒がす。藤尾はわざと落ち付き拂つて母の切つて出るのを待つ。掛引は親子の間にもある。

「御前あすこへ行く氣があるのかい」

「宗近へですか」と聞き直す。念を押すのは滿を引いて始めて放つ爲めの下拵と見える。

「あゝ」と母は輕く答へた。

「いやですわ」

「いやかい」

「いやかいつて、……あんな趣味のない人」と藤尾はすぱりと句を切つた。筍を輪切りにすると、斯んな風になる。張のある眉に風を起して、是限で澤山だと締切つた口元に猶籠る何物かゞ一寸閃いてすぐ消えた。母は相槌を打つ。

「あんな見込のない人は、私も好かない」

趣味のないのと見込のないのとは別物である。鍛冶の頭はかんと打ち、相槌はとんと打つ。去れども打

たるゝは同じ劒である。

「いつそ、此所で、判然斷はらう」

「斷はるつて、約束でもあるんですか」

「約束？約束はありません。けれども阿爺が、あの金時計を一にやると御言ひのだよ」

「それが、どうしたんです」

「御前が、あの時計を玩具にして、赤い珠ばかり、いぢつて居た事があるもんだから……」

「それで」

「それでね――此時計と藤尾とは緣の深い時計だが之を御前に遣らう。然し今は遣らない、卒業したら遣る。然し藤尾が欲しがつて繰つ着いて行くかも知れないが、夫でも好いかつて、冗談半分に皆の前で一に仰しやつたんだよ」

「それを今だに謎だと思つてるんですか」

「宗近の阿爺の口占ではどうもさうらしいよ」

「馬鹿らしい」

藤尾は銳どい一句を長火鉢の角に敲きつけた。反響はすぐ起る。

「馬鹿らしいのさ」

「あの時計は私が貰ひますよ」

「まだ御前の部屋にあるかい」

「文庫のなかに、ちやんと仕舞つてあります」
「さう。そんなに欲しいのかい。だつて御前には持てないぢやないか」
「いゝから下さい」
鎖の先に燃える柘榴石は、蒔繪の蘆雁を高く置いた手文庫の底から、怪しき光りを放つて藤尾を招く。藤尾はすうと立つた。朧とも化けぬ淺葱櫻が、暮近く消えて行くべき晝の命を、今少時と護る椽に、拔け出した高い姿が、振り向きながら、精采の影になつた半面を、障子のうちに傾けて
「あの時計は小野さんに上げても好いでせうね」
と云ふ。障子のうちの返事は聞えず。――春は母と子に暮れた。
同時に豐かな灯が宗近家の座敷に點る。靜かなる夜を陽に返す洋燈の笠に白き光りをゆかしく罩めて、唐草を一面に高く敲き出した白銅の油壺が晴がましくも宵に曇らぬ色を誇る。燈火の照らす限りは顔毎に賑やかである。
「アハヽヽヽ」と云ふ聲が先づ起る。此燈火の周圍に起る凡ての談話はアハヽヽを以て始まるを恰好と思ふ。
「それぢや相輪橖も見ないだらう」と大きな聲を出す。聲の主は老人である。色の好い頬の肉が双方から垂れ餘つて、抑へられた顎は已を得ず二重に折れてゐる。頭は大分禿げかゝつた。之を時々撫でる。宗近の父は頭を撫で禿がして仕舞つた。
「相輪橖た何ですか」と宗近君は阿爺の前で變則の胡坐をかいてゐる。

「アハヽヽ、それぢや叡山へ何しに登つたか分からない」
「そんなものは通り路に見當らなかつた樣だね、甲野さん」
甲野さんは茶碗を前に、くすんだ萬筋の前を合して、黑い羽織の襟を正しく坐つてゐる。甲野さんが問ひ懸けられた時、穆然な糸子の顏は搖いた。
「相輪橖はなかつた樣だね」と甲野さんは手を膝の上に置いた儘である。
「通り路にないつて……まあ何處から登つたか知らないが——吉田かい」
「甲野さん、あれは何と云ふ所かね。僕等の登つたのは」
「何と云ふ所か知ら」
「阿爺何でも一本橋を渡つたんですよ」
「一本橋だ？」
「えゝ——一本橋を渡つたな、君、——もう少し行くと若狹の國へ出る所ださうです」
「さう早く若狹へ出るものか」と甲野さんは忽ち前言を取り消した。
「だつて君か、さう云つたぢやないか」
「それは冗談さ」
「アハヽヽ、若狹へ出ちや大變だ」と老人は大いに愉快さうである。糸子も丸顏に二重瞼の波を寄せた。
「一體御前方は只歩行く許りで飛脚同然だからいけない。——叡山には東塔、西塔、横川とあつて、その三ヶ所を毎日往來してそれを修業にしてゐる人もある位廣い所だ。只登つて下りる丈ならどこの山へ登

つたつて同じ事ぢやないか」
「なに、只の山の積りで登つたんです」
「アハヽヽ、それぢや足の裏へ豆を出しに登つた樣なものだ」
「豆は慥かです。豆は其方の受持です」と笑ながら甲野さんの方を見る。哲學者も六づかしい顏許りはして居られぬ。燈火は明かに搖れる。糸子は袖を口へ當てゝ、崩しかゝつた笑顏の收まり際に頭を上げながら、眸を豆の受持ち手の方へ動かした。眼を動かさんとするものは、先づ顏を動かす。火事場に泥棒を働らくの格である。家庭的の女にも此位な作略はある。素知らぬ顏の甲野さんは、すぐ問題を呈出した。
「御叔父さん、東塔とか西塔とか云ふのは何の名ですか」
「矢張り延暦寺の區域だね。廣い山の中に、あすこに一と塊まり、こゝに一と塊まりと坊が集まつて居るから、まあ之を三つに分けて東塔とか西塔とか云ふのだと思へば間違はない」
「まあ、君、大學に法、醫、文とある樣なものだよ」と宗近君は横合から、知つた樣な口を出す。
「まあ、さうだ」と老人は卽坐に贊成する。
「東は修羅、西は都に近ければ横川の奧ぞ住みよかりけると云ふ歌がある通り、横川が一番淋しい、學問でもするに好い所となつてゐる。——今話した相輪橖から五十丁も這入らなければ行かれない」
「どうれで知らずに通つた譯だな、君」と宗近君が又甲野さんに話しかける。甲野さんは何とも云はずに老人の說明を謹聽してゐる。老人は得意に辯ずる。
「そら謠曲の船辨慶にもあるだらう。——斯樣に候ものは、西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候——

辨慶は西塔に居つたのだ」
「辨慶は法科に居たんだね。君なんかは横川の文科組なんだ。——阿爺さん叡山の總長は誰ですか」
「總長とは」
「叡山の——つまり叡山を建てた男です」
「開基かい。開基は傳教大師さ」
「あんな所へ寺を建てたつて、人泣かせだ、不便で仕方がありやしない。全體昔しの男は醉興だよ、ねえ甲野さん」
甲野さんは何だか要領を得ぬ返事を一口した。
「傳教大師は御前、叡山の麓で生れた人だ」
「成程さう云へば分つた。甲野さん分つたらう」
「何が」
「傳教大師御誕生地と云ふ棒杭が坂本に建つて居ましたよ」
「あすこで生れたのさ」
「うん、さうか、甲野さん君も氣が着いたらう」
「僕は氣が着かなかつた」
「豆に氣を取られて居たからさ」
「アハヽヽヽ」と老人が又笑ふ。

觀ずるものは見ず。昔しの人は想こそ無上なれと說いた。逝く水は日夜を捨てざるを、徒らに眞と書き、眞と書いて、去る波の今書いた眞を今載せて杳然と去るを思はぬが世の常である。堂に法華と云ひ、石に佛足と云ひ、塔に相輪と云ひ、院に淨土と云ふも、たゞ名と年と歷史を記して吾事畢ると思ふは屍を抱いて活ける人を髣髴する樣なものである。見るは名あるが爲めではない。觀ずるは見るが爲めではない。太上は形を離れて普遍の念に入る。――甲野さんが叡山に登つて叡山を知らぬは此故である。

過去は死んで居る。大法鼓を鳴らし、大法螺を吹き、大法幢を樹てゝ王城の鬼門を護りし昔しは知らず、中堂に佛眠りて天蓋に蜘蛛の糸引く古伽藍を、今更の樣に桓武天皇の御宇から堀り起して、無用の詮議に、千古の泥を洗ひ落すは、一日に四十八時間の夜晝ある閑人の所作である。現在は刻をきざんで吾を待つ。有爲の天下は眼前に落ち來る。双の腕は風を截つて乾坤に鳴る。――是だから宗近君は叡山に登りながら何にも知らぬ。

只老人丈は太平である。天下の興廢は叡山一刹の指揮によつて、夜來、日來に面目を新たにするものだやと思ひ籠めた樣に、娓々として叡山を說く。說くは固より青年に對する親切から出る。只青年は少々迷惑である。

「不便だつて、修業の爲めにわざ〳〵、あゝ云ふ山を擇んで開くのさ。今の大學抔はあまり便利な所にあるから、みんな贅澤になつて行かん。書生の癖に西洋菓子だの、ホ井スキーだのと云つて……」

宗近君は妙な顏をして甲野さんを見た。甲野さんは存外眞面目である。

「阿爺叡山の坊主は夜十一時頃から坂本迄蕎麥を食ひに行くさうですよ」

「アハヽヽ、眞逆」
「なに本當ですよ。ねえ甲野さん。――いくら不便だつて食ひたいものは食ひたいですからね」
「夫はのらくら坊主だらう」
「すると僕等はのらくら書生かな」
「御前達はのらくら以上だ」
「僕等は以上でもいゝが――坂本迄は山道一里許りありますぜ」
「あるだらう、其位は」
「それを夜の十一時から下りて、蕎麥を食つて、それから又登るんですからね」
「だから、どうなんだい」
「到底のらくらぢや出來ない仕事ですよ」
「アハヽヽ」と老人は大きな腹を競り出して笑つた。洋燈の蓋が喫驚する位な聲である。
「あれでも昔しは眞面目な坊主が居たものでせうか」と今度は甲野さんが不圖思ひ出した樣な樣子で聞いて見る。
「それは今でもあるよ。眞面目なものが世の中に少ない如く、僧侶にも多くはないが――然し今だつて全く無い事はない。何しろ古い寺だからね。あれは始めは一乘止觀院と云つて、延暦寺となつたのは大分後の事だ。其時分から妙な行があつて、十二年間山へ籠り切りに籠るんださうだがね」
「蕎麥所ぢやありませんね」

「どうして。――何しろ一度も下山しないんだから」
「さう山の中で年許り取つてどうする了見かな」
と宗近君が今度は獨語の樣に云ふ。
「修業するのさ。御前達もさうのらくらしないで些そんな眞似でもするがいゝ」
「そりや駄目ですよ」
「何故」
「何故つて。僕は出來ない事もないが、さうした日にや、あなたの命令に背く譯になりますからね」
「命令に？」
「だつて人の顏を見るたんびに嫁を貰へ〳〵と仰やるぢやありませんか。是から十二年も山へ籠つたら、嫁を貰ふ時分にや腰が曲がつちまいます」
一座はどつと噴き出した。老人は首を少し上げて頭の禿を逆に撫でる。垂れ懸つた頰の肉が顫へ落ちさうだ。糸子は俯向いて聲を殺した爲め二重瞼が薄赤くなる。甲野さんの堅い口も解けた。
「いや修業も修業だが嫁も貰はなくちあ困る。何しろ二人だから臆怯だ。――欽吾さんも、もう貰はなければならんね」
「えゝ、さう急には……」
如何にも氣の無い返事をする。嫁を貰ふ位なら十二年叡山へでも籠る方が増しであると心のうちに思ふ。凡てを見逃さぬ糸子の目には欽吾の心がひらりと映つた。小さい胸が急に重くなる。

「然し阿母さんが心配するだらう」
甲野さんは何とも答へなかつた。此老人も自分の母を尋常の母と心得てゐる。世の中に自分の母の心のうちを見拔いたものは一人もない。自分の母を見拔かなければ自分に同情しやう筈がない。甲野さんは渺然として天地の間に懸つてゐる。世界滅却の日を只一人生き殘つた心持である。
「君が愚圖々々して居ると藤尾さんも困るだらう。女は年頃をはづすと、男と違つて、片付けるにも骨が折れるからね」
敬ふべく愛すべき宗近の父は依然として母と藤尾の味方である。甲野さんは返事の仕樣がない。
「一にも貰つて置かんと、わしも年を取つて居るから、何時どんな事があるかも知れないからね」
老人は自分の心で、わが母の心を推してゐる。親と云ふ名が同じでも、親と云ふ心には相違がある。然し說明は出來ない。
「僕は外交官の試驗に落第したから當分駄目ですよ」と宗近君が橫から口を出した。
「去年は落第さ。今年の結果はまだ分らんだらう」
「えゝ、まだ分らんです。ですがね、又落第しさうですよ」
「何故」
「矢つ張りのらくら以上だからでせう」
「アハヽヽヽ」
今夕の會話はアハヽヽヽに始まつてアハヽヽヽに終つた。

九

眞葛が原に女郎花が咲いた。すら／＼と薄を抜けて、悔ある高き身に、秋風を品よく避けて通す心細さを、秋は時雨て冬になる。茶に、黒に、ちり／＼に降る霜に、冬は果てしなく續くなかに、細い命を朝夕に頼み少なく繋なぐ。冬は五年の長きを厭はず。淋しき花は寒い夜を抜け出でゝ、紅緑に貧を知らぬ春の天下に紛れ込んだ。地に空に春風のわたる程は物みな燃え立つて富貴に色づくを、ひそかなる黄を、一本の細き末に頂いて、住むまじき世に肩身狹く憚かりの呼吸を吹く様である。

今迄は珠よりも鮮やかなる夢を抱いて居た。眞黑闇に据ゑた金剛石にわが眼を授け、わが身を與へ、わが心を託して、其他なる右も左りも氣に懸ける暇もなかつた。懷に抱く珠の光りを夜に抜いて、二百里の道を遙々と闇の袋より取り出した時、珠は現實の明海に幾分か往昔の輝きを失つた。

小夜子は過去の女である。小夜子の抱けるは過去の夢である。過去の女に抱かれたる過去の夢は、現實と二重の關を隔てゝ逢ふ瀨はない。たま／＼に忍んで來れば犬が吠える。自からも、わが來る所ではないか知らんと思ふ。懷に抱く夢は、抱くまじき罪を、人目を包む風呂敷に裹して猶更に疑を路上に受くる様な氣がする。

過去へ歸らうか。水のなかに紛れ込んだ一雫の油は容易に油壺の中へ歸る事は出來ない。いやでも應でも水と共に流れねばならぬ。夢を捨てやうか。捨てられるものならば明海へ出ぬうちに捨てゝ仕舞ふ。捨てれば夢の方で飛び付いて來る。

自分の世界が二つに割れて、割れた世界が各自に働き出すと苦しい矛盾が起る。多くの小説は此矛盾を得意に描く。小夜子の世界は新橋の停車場へ打突つた時、劈痕が入つた。あとは割れる許りである。小説は是から始まる。是から小説を始める人の生活程氣の毒なものはない。

小野さんも同じ事である。打ち遣つた過去は、夢の塵をむく／＼と搔き分けて、古ぼけた頭を歴史の芥溜から出す。おやと思ふ間に、ぬつくと立つて歩いて來る。打ち遣つた時に、生息の根を留めて置かなかつたのが無念であるが、生息は斷はりもなく向で吹き返したのだから是非もない。立ち枯れの秋草が氣紛の時節を誤つて、暖たかき陽炎のちらつくなかに甦へるのは情けない。甦つたものを打ち殺すのは詩人の風流に反する。追ひ付かれゝば劬らねば濟まぬ。生れてから濟まぬ事は只の一度もした事はない。今後とてもする氣はない。濟まぬ事をせぬ樣に、又自分にも濟む樣に、小野さんは一寸未來の袖に隱れて見た。紫の匂は強く、近付いて來る過去の幽靈も是ならばと度胸を据ゑかける途端に小夜子は新橋に着いた。小野さんの世界にも劈痕が入る。作者は小夜子を氣の毒に思ふ如くに、小野さんをも氣の毒に思ふ。

「阿父は」と小野さんが聞く。

「一寸出ました」と小夜子は何となく臆して居る。引き越して新たに家をなす翌日より、親一人に、子一人に春忙がしき世帶は、蒸れ易き髪に櫛の齒を入れる暇もない。不斷着の綿入さへ見すぼらしく詩人の眼に映る。――粧ひは鏡に向つて凝らす、玻璃瓶裏に薔薇の香を浮かして、輕く雲鬟を浸し去る時、琥珀の櫛は條々の翠を解く。――小野さんはすぐ藤尾の事を思ひ出した。是だから過去は駄目だと心のうちに語るものがある。

「御忙しいでせう」
「まだ荷物抔も其儘にして居ります……」
「御手傳に出る積でしたが、昨日も一昨日も會がありまして……」
日毎の會に招かるる小野さんは其方面に名を得たる證據である。然しどんな方面か、小夜子には想像がつかぬ。只己れよりは高過ぎて、とても寄り付けぬ方面だと思ふ。小夜子は俯向いて、膝に載せた右手の中指に光る金の指輪を見た。——藤尾の指輪とは無論比較にはならぬ。

小野さんは眼を上げて部屋の中を見廻はした。低い天井の白茶けた板の、二た所迄節穴の歴然と見える上、雨漏の染みを侵して、こゝかしこと蜘蛛の圍を欺く煤がかたまつて黒く釣りを懸けてゐる。左から四本目の棧の中程を、杉箸が一本横に貫ぬいて、長い方の端が、思ふ程下に曲がつてゐるのは、立ち退いた以前の借主が通す縄に胸を冷やす氷嚢でもぶら下げたものだらう。次の間を立て切る二枚の唐紙は、洋紙に箔を置いて英吉利めいた葵の幾何模様を規則正しく數十個竝べてゐる。屋敷らしい縁の黒塗が猶更卑しい。庭は二た間を貫ぬく椽に沿ふて勝手に折れ曲ると云ふ名のみで、幅は茶獻上程もない。丈に足らぬ檜が春に用なき、去年の葉を硬く尖らして、瘠せこけて立つ後ろは、腰高塀に隣家の話が手に取る樣に聞える。

家は小野さんが孤堂先生の爲めに周旋したに相違ない。然し極めて下卑て居る。小野さんは心のうちに厭な住居だと思つた。どうせ家を持つならばと思つた。袖垣に辛夷を添はせて、松苔を葉蘭の影に畳む上に、切り立ての手拭が春風に搖ら付く樣な所に住んで見たい。——藤尾はあの家を貰ふとか聞いた。

「御蔭さまで、好い家が手に入りまして……」と誇る事を知らぬ小夜子は云ふ。本當に好ゝ家と心得てゐるなら情けない。或る人に奴鰻を奢つたら、御蔭樣で始めて旨い鰻を食べましてと禮を云つた。奢つた男はそれより以來此人を輕蔑したさうである。

いぢらしいのと見縊るのはある場合に於て一致する。小野さんは慥かに眞面目に禮を云つた小夜子を見縊つた。然し其うちに露いぢらしい所があるとは氣が付かなかつた。祟が祟つたからである。祟があると眼玉が三角になる。

「もつと好い家でないと御氣に入るまいと思つて、方々尋ねて見たんですが、生憎恰好なのがなくつて……」

と云ひ懸けると、小夜子は、すぐ、

「いえ是で結構ですわ。父も喜んで居ります」と小野さんの言葉を打ち消した。小野さんは吝嗇な事を云ふと思つた。小夜子は知らぬ。

細い面を一寸奥へ引いて、上眼に相手の樣子を見る。どうしても五年前とは變つてゐる。――眼鏡は金に變つてゐる。久留米絣は背廣に變つてゐる。五分刈は光澤のある毛に變つてゐる。――髭は一躍して紳士の域に上る。小野さんは、何時の間にやら黑いものを蓄へてゐる。もとの書生ではない。襟は卸し立てである。飾りには留針さへ肩を動かす度に光る。鼠の勝つた品の好い胴衣の隱袋には――恩賜の時計が這入つてゐる。此上に金時計をとは、小さき胸の小夜子が夢にだも知る筈がない。小野さんは變つてゐる。五年の間一日一夜も懷に忘られぬ命より明らかな夢の中なる小野さんはこんな人ではなかつた。五年は

昔である。西東長短の袂を分かつて、離愁を鎖す暮雲に相思の關を塞かれては、逢ふ事の疎くなりまさる此年月を、變らぬといふは思ひも寄らぬ。風吹けば變る事と思ひ、雨降れば變る事と思ひ、月に花に變る事と思ひ暮らしてゐた。然し、かうは變るまいと念じてプラット、フォームへ下りた。

小野さんの變りかたは過去を順當に延ばして、健氣に生ひ立つた阿蒙の變りかたではない。色の褪めた過去を逆に捻ぢ伏せて、目醒しき現在を、相手が新橋へ着く前の晩に、性急に拵へ上げた樣な變りかたである。小夜子には寄り付けぬ。手を延ばしても屆きさうにない。變りたくても變られぬ自分が恨めしい氣になる。小野さんは自分と遠ざかる爲めに變つたと同然である。

新橋へは迎に來て吳れた。車を傭つて宿へ案內して吳れた。のみならず、忙がしいうちを無理に算段して、蝸牛親子して寐る庵を借りて吳れた。小野さんは昔の通り親切である。父も左樣に云ふ。自分もさう思ふ。然し寄り付けない。

プラット、フォームを下りるや否や御荷物をと云つた。小さい手提の荷にはならず、持つて貰ふ程でもないのを無理に受取つて、膝掛と一所に先へ行つた、刻み足の後ろ姿を見たときに――是はと思つた。先へ行くのは、遙々と來た二人を案內する爲めではなく、時候後れの親子を追ひ越して馳け拔ける爲めの樣に見える。割符とは瓜二つを取つてつけて較べる爲めの證據である。天に懸る日よりも貴しと護るわが夢を、五年の長き香洩る「時」の袋から現在に引き出して、よも間違はあるまいと見較べて見ると、現在ははやくも遠くに立ち退いて居る。握る割符は通用しない。

始めは穴を出でゝ眩き故と思ふ。少し慣れたらばと、逝く日を杖に、一度逢ひ、二度逢ひ、三度四度と

重なるたびに、小野さんは愈丁寧になる。丁寧になるに付けて、小夜子は愈近寄り難くなる。やさしく咽喉に滑べり込む長い顎を奥へ引いて、上眼に小野さんの姿を眺めた小夜子は、變る眼鏡を見た。變る髭を見た。變る髪の風と變る裝とを見た。凡ての變るものを見た時、心の底でそつと嘆息を吐いた。あゝ。

「京都の花はどうです。もう遲いでせう」

小野さんは急に話を京都へ移した。病人を慰めるには病氣の話をする。好かぬ昔に飛び込んで、難有くほどけ掛けた記憶の絢を逆に戻すは、詩人の同情である。小夜子は急に小野さんと近付いた。

「もう遲いでせう。立つ前に一寸嵐山へ參りましたが其時が丁度八分通りでした」

「其位でせう、嵐山は早いですから。それは結構でした。何誰と御一所に」

花を看る人は星月夜の如く夥しい。然し一所に行く人は天を限り地を限つて父より外にない。父でなければ――あとは胸のなかでも名は言はなかつた。

「矢つ張り阿父とですか」

「えゝ」

「面白かつたでせう」と口の先で云ふ。小夜子は何故か情けない心持がする。小野さんは出直した。

「嵐山も元とは大分違つたでせうね」

「えゝ。大悲閣の溫泉抔は立派に普請が出來て……」

「さうですか」

「小督の局の墓が御座んしたらう」
「えゝ、知つてます」
「彼所いらは皆掛茶屋許りで大變賑やかになりました」
「毎年俗になる許りですね。昔の方が餘程好い」
近寄れぬと思つた小野さんは、夢の中の小野さんとぱたりと合つた。小夜子ははつと思ふ。
「本當に昔の方が……」と云ひ掛けて、わざと庭を見る。庭には何にもない。
「私が御一所に遊びに行つた時分は、そんなに雜沓しませんでしたね」
小野さんは矢張り夢の中の小野さんであつた。庭を向いた眼は、ちらりと眞向に返る。金縁の眼鏡と薄黑い口髭がすぐ眸に映る。相手は依然として過去の人ではない。小夜子は床しい昔話の緒の、する〳〵と拔け出しさうな咽喉を抑へて、默つて口をつぐんだ。調子づいて角を曲らうとする、どつこいと突き當る事がある。品のいゝ紳士淑女の對話も胸のうちでは始終突き當つてゐる。小野さんは又口を開く番となる。
「あなたはあの時分と少しも違つて入らつしやいませんね」
「さうでせうか」と小夜子は相手を諾する樣な、自分を疑ふ樣な、氣の乘らない返事をする。變つて居りさへすればこんなに心配はしない。變るのは歲許で、徒づらに育つた縞柄と、用ゐ古るした琴が恨めしい。琴は蔽のまゝ床の間に立て掛けてある。
「私は大分變りましたらう」

「見違へる樣に立派に御成りです事」

「ハヽヽ、夫は恐れ入りますね。まだ是からどし〳〵變る積です。丁度嵐山の樣に……」

小夜子は何と答へていゝか分らない。膝に手を置いた儘、下を向いて居る。小さい耳朶が、行儀よく、鬢の末を潛り拔けて、頰と頸の續目が、暈した樣に曲線を陰に曳いて去る。見事な畫である。惜しい事に眞向に座つた小野さんには分からない。詩人は感覺美を好む。是程の肉の上げ具合、是程の肉の退き具合、是程の光線に、是程の色の付き具合は滅多に見られない。小野さんが此瞬間に此美しい畫を捕へたなら、編み上げの踵を、地に減り込む程に回らして、五年の流を逆に過去に向つて飛び付いたかも知れぬ。惜しい事に小野さんは眞向に坐つて居る。小野さんは只面白味のない詩趣に乏しい女だと思つた。同時に波を打つて鼻の先に飜へる袖の香が、濃き紫の眉間を掠めてぷんとする。小野さんは急に歸りたくなつた。

「また來ませう」と脊廣の胸を合せる。

「もう歸る時分ですから」と小さな聲で引き留め樣とする。

「また來ます。御歸りになつたら、どうぞ宜しく」

「あの……」と口籠つてゐる。

相手は腰を浮かしながら、あのあとを待ち兼ねる。早くと急き立てられる氣がする。近寄れぬものは益離れて行く。情ない。

「あの……父が……」

小野さんは、何とも知れず重い氣分になる。女は益切り出し惡くなる。

「また上がります」と立ち上がる。云はうと思ふ事を聞いても呉れない。離れるものは沒義道に離れて行く。未練も會釋もなく離れて行く。玄關から座敷に引き返した小夜子は惘然として、椽に近く坐つた。長閑に降らんとして降り損ねた空の奧から幽かな春の光りが、淡き雲に遮ぎられながら一面に照り渡る。長閑かさを抑へ付けたる頭の上は、晴るゝ樣で何となく鬱陶しい。何處やらで琴の音がする。わが彈くべきは塵も拂はず、更紗の小包を二つ竝べた間に、袋の儘で淋しく壁に持たれてゐる。何時鬱金の掩を除ける事やら。あの曲は大分熟れた手に違ない。片々に抑へて片々に彈く爪の、安らかに幾關の柱を往きつ戻りつして、春を限りと亂るゝ色は甲斐々々しくも豐かである。聞いてゐると、あの雨をつい昨日の樣に思ふ。ちら／＼に晝の螢と竹垣に滴る連翹に、朝から降つて退屈だと阿父樣が仰やる。繻子の袖口は手頸に滑り易い。絹糸を細長く目に貫いた儘、針差の紅をぷつりと刺して立ち上がる。盛り上がる古桐の長い胴に、鮮かに眼を醒ませと、への字に渡す糸の數々を、幾度か抑へて、幾度か撥ねた。曲はたしか小督であつた。狂ふ指の、憂き晝を、苦茶々々に揉みこなしたと思ふ頃、阿父樣は御苦勞と手づから御茶を入れて下さつた。京は春の、雨の、琴の京である。なかでも琴は京に能う似合ふ。琴の好な自分は、矢張り靜かな京に住むが分である。古い京から拔て來た身は、闇を破る烏の、飛び出して見て、そゞろ黑きに驚ろき、舞ひ戻らんとする夜はからりと明け離れた樣なものである。こんな事なら琴の代りに洋琴でも習つて置けば善かつた。英語も昔の儘で、今は大方忘れてゐる。阿父は女にそんなものは必要がないと仰る。先の世に住み古るしたる人を便りに、小野さんには、追ひ付く事も出來ぬ樣に後れて仕舞つた。住み古るした人の世はいづれ長い事はあるまい。古るい人に先だゝれ、新らしい人に後れゝば、今日を明日と、其日に數る命

は、文も理も危い。……
格子ががらりと開く。古の人は歸つた。
「今歸つたよ。どうも苛い埃でね」
「風もないのに？」
「風はないが、地面が乾いてるんで――どうも東京と云ふ所は厭な所だ。京都の方が餘つ程いゝね」
「だつて早く東京へ引き越す、引き越すつて、毎日の樣に云つて居らしつたぢやありませんか」
「云つてた事は、云つてたが、來て見るとさうでもないね」と椽側で足袋をはたいて座に直つた老人は、
「茶碗が出てるね。誰か來たのかい」
「えゝ。小野さんが入らしつて……」
「小野が？そりやあ」と云つたが、提げて來た大きな包をからげた細繩の十文字を、丁寧に一文字宛ほどき始める。
「今日はね。座布團を買はうと思つて、電車へ乘つた所が、つい乘り替を忘れて、ひどい目に逢つた」
「おや／＼」と氣の毒さうに微笑だ娘は
「でも布團は御買ひになつて？」と聞く。
「あゝ、布團丈はこゝへ買つて來たが、御蔭で大變遲れて仕舞つたよ」と包みのなかゝら八丈まがひの黄な縞を取り出す。
「何枚買つて入らしつて」

二三枚さ。まあ三枚あれば當分間に合ふだらう。さあ一寸敷いて御覽」と一枚を小夜子の前へ出す。

「ホヽヽあなた御敷なさいよ」

「阿父も敷くから、御前も敷いて御覽。そら中々好いだらう」

「少し綿が硬い樣ね」

「綿はどうせ――價が價だから仕方がない。でも是を買ふ爲めに電車に乘り損なつて仕舞つて……」

「乘替をなさらなかつたんぢやないの」

「さうさ、乘替を――車掌に賴んで置いたのに。忌々しいから歸りには歩いて來た」

「御草臥なすつたでせう」

「なあに。是でも足はまだ達者だからねこ――然し御蔭で髯も何も埃だらけになつちまつた。こら」と右手の指を四本幷べて櫛の代りに顋の下を梳くと、果して薄黑いものが股について來た。

「御湯に御這入んなさらないからですよ」

「なに埃だよ」

「だつて風もないのに」

「風もないのに埃が立つから妙だよ」

「だつて」

「だつてぢやないよ。まあ試しに外へ出て御覽。どうも東京の埃には大抵のものは驚ろくよ。御前が居た時分もかうかい」

「えゝ隨分青くつてよ」

「年々烈しくなるんぢやないかしら。今日なんぞは全く風はないね」と廂の外を下から覗いて見る。空は曇る心持ちを透かして春の日があやふやに流れてる。琴の音がまだ聽える。

「おや琴を彈いて居るね。――中々旨い。ありや何だい」

「當てゝ御覽なさい」

「當てゝ見ろ。ハヽヽ、阿父には分らないよ。琴を聽くと京都の事を思ひ出すね。京都は靜でいゝ。阿父の樣な時代後れの人間は東京の樣な烈しい所には向かない。東京はまあ小野だの、御前だのゝ樣な若い人が住まう所だね」

時代後れの阿父は小野さんと自分の爲めにわざ／＼埃だらけの東京へ引き越した樣なものである。

「ぢや京都へ歸りませうか」と心細い顏に笑を浮べて見せる。老人は世に疎いわれを憐れむ孝心と受取つた。

「アハヽヽ、本當に歸らうかね」

「本當に歸つても宜う御座んすわ」

「何故」

「何故でも」

「だつて來た許ぢやないか」

「來た許でも構ひませんわ」

「構はない？ハヽヽ、冗談を……」
娘は下を向いた。
「小野が來たさうだね」
「えゝ」　娘は矢つ張り下を向いて居る。
「小野は――小野は何かね――」
「え？」と首を上げる。老人は娘の顔を見た。
「小野は――來たんだね」
「えゝ、入らしつてよ」
「それで何かい。その、何も云つて行かなかつたのかい」
「いゝえ別に……」
「何にも云はない？――待つてれば好いのに」
「急ぐから又來るつて御歸りになりました」
「さうかい。それぢや別に用があつて來た譯ぢやないんだね。さうか」
「阿父樣」
「何だね」
「小野さんは御變りなさいましたね」
「變つた？――あゝ大變立派になつたね。新橋で逢つた時は丸で見違へる樣だつた。まあ御互に結構な

事だ」
娘は叉下を向いた。――單純な父には自分の云ふ意味が徹せぬと見える。
「私は昔の通りで、ちつとも變つてゐないさうです。……變つてゐないたつて……」
後の句は鳴る糸の尾を素足に踏む如く、孤堂先生の頭に響いた。
「變つてゐないたつて?」と次を催促する。
「仕方がないわ」と小さな聲で附ける。老人は首を傾けた。
「小野が何か云つたかい」
「いゝえ別に……」
同じ質問と同じ返事は又繰返される。水車を踏めば廻る許である。何時迄踏んでも踏み切れるものではない。
「ハヽヽ、くだらぬ事を氣にしちや不可ない。春は氣が鬱ぐものでね。今日なぞは阿父などにもよくない天氣だ」
氣が鬱ぐのは秋である。餅と知つて、酒の咎だと云ふ。慰さめられる人は、馬鹿にされる人である。小夜子は默つてゐた。
「ちつと琴でも彈いちやどうだい。氣晴に」
娘は浮かぬ顏を、愛嬌に傾けて、床の間を見る。軸は空しく落ちて、徒に餘る黑壁の端を、竪に截つて、鬱金の蔽が春を隱さず明らかである。

で……」

「廢すなら御廢し。――あの、小野はね。近頃忙がしいんだよ。近々博士論文を出すんださう

「まあ廢しませう」

小夜子は銀時計すら入らぬと思ふ。百の博士も今の己れには無益である。

「だから落ち付いて居ないんだよ。學問に凝ると誰でもあんなものさ。あんまり心配しないがいゝ。な

に緩くりしたくつても、して居られないんだから仕方がない。え？何だつて」

「あんなにね」

「うん」

「急いでね」

「あゝ」

「御歸りに……」

「御歸りに――なつた？ならないでも？好さゝうなものだつて仕方がないよ。學問で夢中になつてるん

だから。――だから一日都合をして貰つて、一所に博覽會でも見やうつて云つてるんぢやないか。御前話

したかい」

「いゝえ」

「話さない？話せばいゝのに。一體小野が來たと云ふのに何をして居たんだ。いくら女だつて、少しは

口を利かなくつちやいけない」

口を利けぬ樣に育てゝ置いて何故口を利かぬと云ふ。小夜子は凡ての非を負はねばならぬ。眼の中が熱くなる。

「なに好いよ。阿父が手紙で聞き合せるから――悲しがる事はない。叱つたんぢやない。――時に晩の御飯はあるかい」

「御飯丈はあります」

「御飯丈あればいゝ。なに御菜は入らないよ。――頼んで置いた婆さんは明日くるさうだ。――もう少し慣れると、東京だつて京都だつて同じ事だ」

小夜子は勝手へ立つた。孤堂先生は床の間の風呂敷包を解き始める。

✝

謎の女は宗近家へ乘り込んで來る。謎の女の居る所には波が山となり炭團が水晶と光る。禪家では柳は緑花は紅と云ふ。あるひは雀はちゆ〱で烏はかあ〱とも云ふ。謎の女は烏をちゆ〱にして、雀をかあ〱にせねば已まぬ。謎の女が生れてから、世界が急にごたくさになつた。謎の女は近づく人を鍋の中へ入れて、方寸の杉箸に交ぜ繰り返す。芋を以て自から居るものでなければ、謎の女に近づいてはならぬ。謎の女は金剛石の樣なものである。いやに光る。そして其光りの出所が分らぬ。右から見ると左に光る。左から見ると右に光る。雜多な光を雜多な面から反射して得意である。神樂の面には二十通り程ある。神樂の面を發明したものは謎の女である。――謎の女は宗近家へ乘り込んでくる。

眞率なる快活なる宗近家の大和尙は、斯く物騷な女が天が下に生を享けて、しきりに鍋の底を攪き廻して居るとは思ひも寄らぬ。唐木の机に唐刻の法帖を乘せて、厚い坐布團の上に、信濃の國に立つ烟、立つ烟と、大きな腹の中から鉢の木を謠つて居る。謎の女は次第に近づいてくる。

悲劇マクベスの妖婆は鍋の中に天下の雜物を攫ひ込んだ。石の影に三十日の毒を人知れず吹く夜の蟇と、燃ゆる腹を黑き脊に藏す蠑螈の膽と、蛇の眼と蝙蝠の爪と、――鍋はぐら／＼と煑える。妖婆はぐるりぐるりと鍋を廻る。枯れ果てゝ尖れる爪は、世を咀ふ幾代の錆に瘠せ盡くしたる鐵の火箸を握る。煑え立つた鍋はどろ／＼の波を泡と共に起す。――讀む人は怖ろしいと云ふ。

それは芝居である。謎の女はそんな氣味の惡い事はせぬ。住むは都である。時は二十世紀である。乘り込んで來るのは眞晝間である。鍋の底からは愛嬌が湧いて出る。漾ふは笑の波だと云ふ。攪き淆ぜるのは親切の箸と名づける。鍋そのものからが品よく出來上つて居る。謎の女はそろ／＼と攪き淆ぜる。手つきさへ能掛である。大和尙の怖からぬのも無理はない。

「いや、大部御暖になりました。さあどうぞ」と布團の方へ大きな掌を出す。女はわざと入口に坐つた儘兩手を尋常につかへる。

「其後は……」

「どうぞ御敷き……」と大きな手は矢つ張り前へ突き出した儘である。

「一寸出ますんで御座いますが、つい無人だもので、出やう出やうと思ひながら、とう／＼御無沙汰になりまして……」で少し句が切れたから大和尙が何か云はうとすると、謎の女はすぐ後を付ける。

「まことに相濟みません」で黑い頭をぴたりと疊へつけた。

「いゑ、どう致しまして……」位では容易に頭を上げる女ではない。ある人が云ふ。あまりしとやかに禮をする女は氣味がわるい。またある人が云ふ。あまり丁寧に御辭儀をする女は迷惑だ。第三の人が云ふ。人間の誠は下げる頭の時間と正比例するものだ。色々な說がある。たゞし大和尙は迷惑黨である。

黑い頭は疊の上に、聲丈は口から出て來る。

「御宅でも皆樣御變りもなく……每々欽吾や藤尾が出まして、御厄介にばかりなりまして……先達ては又結構なものを頂戴致しまして、とうに御禮に上がらなければならないんで御座いますが、つい手前にかまけまして……」

頭は此所で漸く上がる。阿父はほつと氣息をつく。

「いや、詰らんもので……到來物でね。アハヽヽ、漸く暖かになつて」と突然時候をつけて庭の方を見たが

「どうです御宅の櫻は。今頃は丁度盛でせう」で結んで仕舞つた。

「本年は陽氣の所爲か、例年より少し早目で、四五日前が丁度觀頃で御座いましたが、一昨日の風で、大分傷められまして、もう……」

「駄目ですか。あの櫻は珍らしい。何とか云ひましたね。えゝ？淺葱櫻。さうさう。あの色が珍らしい」

「少し靑味を帶びて、何だか、かう、夕方抔は凄い樣な心持が致します」

「さうですか、アハヽヽ。荒川には緋櫻と云ふのがあるが、淺葱櫻は珍らしい」

「みなさんが、左樣仰います。八重は澤山あるが靑いのは滅多にあるまいつてね……」
「ないですよ。尤も櫻も好事家に云はせると百幾種とかあるさうだから……」
「へえゝ、まあ」と女は左も驚ろいた樣に云ふ。
「アハヽヽ、櫻でも馬鹿には出來ない。此間も一が京都から歸つて來て嵐山へ行つたと云ふから、どんな花だと聞いて見たら、只一重だと云ふ丈でね、何にも知らない。今時のものは呑氣なものでアハヽヽヽ。
――どうです粗果だが一つ御撮みなさい。岐阜の柿羊羹」
「いゝえどうぞ、もう御構ひ下さいますな……」
「あんまり、旨いものぢやない。只珍らしい丈だ」と宗近老人は箸を上げて皿の中から剝ぎ取つた羊羹の一片を手に受けて、獨りでむしや〳〵食ふ。
「嵐山と云へば」と甲野の母は切り出した。
「先達中は欽吾がまた、色々御厄介になりまして、御蔭樣で方々見物させて頂いたと申して大變喜んで居ります。まことにあの通の我儘者で御座いますから一さんも嘸御迷惑で御座いましたらう」
「いえ、一の方で色々御世話になつたさうで……」
「どう致しまして、人樣の御世話抔の出來る樣な男では御座いませんので。あの年になりまして朋友と申すものが只の一人も御座いませんさうで……」
「あんまり學問をすると、さう誰でも彼でも無暗に附合が出來にくゝなる。アハヽヽ」
「私には女で一向分りませんが、何だか鬱いで許居る樣で――此方の一さんにでも連れ出して戴かない

と、誰も相手にして呉れない樣で……」

「アハヽヽヽ一は又正反對。誰でも相手にする。家にさへ居るとあなた、妹に許からかつて――いや、あれでも困る」

「いえ。誠に陽氣で淡泊してゝ、結構で御座いますねえ。どうか一さんの半分でいゝから、欽吾がもう少し面白くして呉れゝば好いと藤尾にも不斷申して居るんで御座いますが――それも是もみんな彼人の病氣の所爲だから、今更愚痴をこぼしたつて仕方がないとは思ひますが、なまじい自分の腹を痛めた子でない丈に、世間へ對しても心配になりまして……」

「御尤で」と宗近老人は眞面目に答へたが、序に灰吹をぽんと敲いて、銀の延打の烟管を疊の上にころりと落す。雁首から、餘る烟が流れて出る。

「どうです、京都から歸つてから少しは好い樣ぢやありませんか」

「御蔭樣で……」

「先達て家へ見えた時抔は皆と馬鹿話をして、大分愉快さうでしたが」

「へえゝ」是は仔細らしく感心する。「まことに困り切ります」是は困り切つた樣に長々と引き延ばして云ふ。

「そりや、どうも」

「彼人の病氣では、今迄どの位心配したか分りません」

「いつそ結婚でもさせたら氣が變つて好ゝかも知れませんよ」

謎の女は自分の思ふ事を他に云はせる。手を下しては落度になる。向ふで滑つて轉ぶのを大人しく待つてゐる。只滑る樣な泥海を知らぬ間に用意する許である。

「その結婚の事を朝暮申すので御座いますが――どう在つても、うんと云つて承知して呉れません。私も御覽の通り取る年で御座いますし、夫に甲野もあんな風に突然外國で亡くなります樣な仕儀で、まことに心配でなりませんから、どうか一日も早く彼人の爲めに身の落付をつけてやりたいと思ひまして……本當に、今迄嫁の事を持ち出した事は何度だか分りません。が持ち出すたんびに頭から撥ね付けられるのみで……」

「實は此間見えた時も、一寸其話をしたんですがね。君がいつ迄も強情を張ると心配するのは阿母丈で、可愛想だから、今のうちに早く身を堅めて安心させたら善からうつてね」

「御親切にどうも難有う存じます」

「いえ、心配は御互で、此方も丁度どうかしなければならないのを二人背負い込んでるものだから、アハ、、、どうも何ですね。何歳になつても心配は絶えませんね」

「此方樣抔は結構で入らつしやいますが、私は――若し彼人が何時迄も病氣だ〳〵と申して嫁を貰つて呉れませんうちに、もしもの事があつたら、草葉の陰で配偶に合はす顏が御座いません。まあどうして、あんなに聞き譯がないんで御座いませう。何か云ひ出すと、阿母私はこんな身體で、とても家の面倒は見て行かれないから、藤尾に聟を貰つて、阿母さんの世話をさせて下さい。私は財産なんか一錢も入らない。と、まあ斯うで御座んすもの。私が本當の親なら、それぢや御前の勝手におしと申す事も出來ますが、御

存じの通りなさぬ中の間柄で御座いますから、そんな不義理な事は人樣に對しても出來かねますし、じつに途方に暮れます」

謎の女は和尚を凝と見た。和尚は大きな腹を出した儘考へて居る。灰吹がぽんと鳴る。紫檀の蓋を丁寧に被せる。烟管は轉がつた。

「成程」

和尚の聲は例に似ず沈んでゐる。

「そうかと申して生の母でない私が壓制がましく、無暗に差出た口を利きますと、御聞かせ申し度ない樣な紛紜も起りませうし……」

「ふん。困るね」

和尚は手提の烟草盆の淺い抽出から鬱金木綿の布巾を取り出して、鯨の蔓を鄭重に拭き出した。

「いつそ、私から篤と談じて見ませうか。あなたが云ひ惡ければ」

「色々御心配を掛けまして……」

「さうして見るかね」

「どんなもので御座いませう。あゝ云ふ神經が妙になつて居る所へ、そんな事を聞かせましたら」

「なにそりや、承知して居るから、當人の氣に障らない樣に云ふ積ですがね」

「でも、萬一私が此方へ出てわざ／＼御願ひ申した樣に取られると、それこそ後が大變な騷ぎになりますから……」

「弱るね、さう、癇が高くなつてちやあ」

「丸で腫物へ障る樣で……」

「ふうん」と和尚は腕組を始めた。裄が短かいので太い肘が無作法に見える。

謎の女は人を迷宮に導いて、成程と云はせる。ふうんと云はせる。灰吹をぽんと云はせる。仕舞には腕組をさせる。廿世紀の禁物は疾言と遽色である。何故かと、ある紳士、ある淑女に尋ねて見たら、紳士も淑女も口を揃へて答へた。――疾言と遽色は、尤も法律に觸れ易いからである。――謎の女の鄭重なのは尤も法律に觸れ惡い。和尚は腕組をしてふうんと云つた。

「もし彼人が斷然家を出ると云ひ張りますと――私がそれを見て無論默つて居る譯には參りませんが――然し當人がどうしても聞いて吳れないとすると……」

「聟かね。聟となると……」

「いゝえ、さうなつては大變で御座いますが――萬一の場合も考へて置かないと、いざと云ふ時に困りますから」

「そりや、左樣」

「それを考へると、あれが病氣でもよくなつて、もう少し確かりして吳れないうちは、藤尾を片付ける譯に參りません」

「左樣さね」と和尚は單純な首を傾けたが

「藤尾さんは幾歲ですい」

「もう、明けて四になります」
「早いものですね。えつ。つい此間迄これつぱかりだつたが」と大きな手を肩とすれ〳〵に出して、ひろげた掌を下から覗き込む樣にする。
「いえもう、身體許大きう御座いまして、から、役に立ちません」
「……勘定すると四になる譯だ。うちの糸が二だから」
話は放つて置くと何處かへ流れて行きさうになる。謎の女は引つ張らなければならぬ。
「此方でも、糸子さんやら、一さんやらで、御心配の所を、こんな餘計な話を申し上げて、嘸人の氣も知らない呑氣な女だと覺し召すで御座いませうが……」
「いえ、どう致して、實は私の方から其事に就て篤と御相談もしたいと思つて居た所で――一も外交官になるとか、ならんとか云つて騷いでゐる最中だから、今日明日と云ふ譯にも行かないですが、晩かれ、早かれ嫁を貰はなければならんので……」
「で御座いますとも」
「就ては、その、藤尾さんなんですがね」
「はい」
「あの方なら、まあ氣心も知れてゐるし、私も安心だし、一は無論異存のある譯はなし――よからうと思ふんですがね」
「はい」

「どうでせう、阿母の御考は」
「あの通行き屆きませんものを夫程迄に仰しやつて下さるのは寔に難有い譯で御座いますが……」
「いゝぢや、ありませんか」
「さうなれば藤尾も仕合せ、私も安心で……」
「御不足なら兎も角、さうでなければ……」
「不足所ぢや御座いません。願つたり叶つたりで、此上もない結構な事で御座いますが、只彼人に困りますので。一さんは宗近家を御襲ぎになる大事な身體で入らつしやる。藤尾が御氣に入るか、入らないかは分りませんが、まづ貰つて頂いたと致した所で、差し上げた後で、欽吾が矢張り今の樣では私も實の所甚だ心細い樣な譯で……」
「アハヽヽさう心配しちや際限がありませんよ。藤尾さんさへ嫁に行つて仕舞へば欽吾さんにも責任が出る譯だから、自然と考もちがつてくるに極つてゐる。さうなさい」
「さう云ふもので御座いませうかね」
「それに御承知の通、阿父がいつぞや仰しやつた事もあるし。さうなれば亡くなつた人も滿足だらう」
「色々御親切に難有う存じます。なに配偶さへ生きて居りますれば、一人で――こん――こんな心配は致さなくつても宜しい――ので御座いますが」
謎の女の云ふ事は次第に濕氣を帶びて來る。世に疲れたる筆は此濕氣を嫌ふ。辛うじて謎の女の謎をこゝ迄叙し來つた時、筆は、一歩も前へ進む事が厭だと云ふ。日を作り夜を作り、海と陸と凡てを作りたる

神は、七日目に至つて休めと言つた。謎の女を書きこなしたる筆は、日のあたる別世界に入つて此濕氣を拂はねばならぬ。

日のあたる別世界には二人の兄妹が活動する。六疊の中二階の、南を受けて明るきを足れりとせず、小氣味よく開け放ちたる障子の外には、二尺の松が信樂の鉢に、蟠まる根を盛りあげて、くの字の影を椽に伏せる。一間の唐紙は白地に秦漢瓦鐺の譜を散らしに張つて、引手には波に千鳥が飛んでゐる。つゞく三尺の假の床は、軸を嫌つて、籠花活に輕い一輪をざつくばらんに投げ込んだ。

糸子は床の前に縫物の五色を、彩と亂して、糸屑のこぼるゝ程の抽出を二つ迄あらはに拔いた針箱を窓近くに添へる。縫ふて行く糸の行方は、一針毎に春を刻む幽かな音に、聽かれる程の靜かさを、兄は大きな聲で消して仕舞ふ。

腹這は彌生の姿、寐ながらにして天下の春を領す。物指の先で頻りに敷居を敲いて居る。

「糸公。こりや御前の座敷の方が明かるくつて上等だね」

「替へたげませうか」

「さうさ。替へて貰つた所で餘り儲かりさうでもないが――然し御前には上等過ぎるよ」

「上等過ぎたつて誰も使はないんだから好いぢやありませんか」

「好いよ。好い事は好いが少し上等過ぎるよ。夫れに此裝飾物がどうも――妙齡の女子には似合はしからんものがあるぢやないか」

「何が?」

「何がつて、此松さ。こりや慥か阿父が苔盛園で二十五圓で賣りつけられたんだらう」

「え、。大事な盆栽よ、轉覆でもしやうもんなら大變よ」

「ハ、、、是を二十五圓で賣りつけられる阿爺も阿爺だが、それを又二階迄、えつちらおつちら擔ぎ上げる御前も御前だね。矢つ張りいくら年が違つても親子は爭はれないものだ」

「ホ、、、兄さんは餘つ程馬鹿ね」

「馬鹿だつて糸公と同じ位な程度だあね。兄弟だもの」

「おやいやだ。そりや私は無論馬鹿ですわ。馬鹿ですけれども、兄さんも馬鹿よ」

「馬鹿よか。だから御互に馬鹿よで好いぢあないか」

「だつて證據があるんですもの」

「馬鹿の證據がかい」

「え、」

「そりや糸公の大發明だ。どんな證據があるんだね」

「其盆栽はね」

「うん、此盆栽は」

「其盆栽はね――知らなくつて」

「知らないとは」

「私大嫌よ」

「へえゝ、今度此方の大發明だ。ハ、、、。嫌なものを、なんで又持つて來たんだ。重いだらうに」
「阿父さまが御自分で持つて入らしつたのよ」
「何だつて」
「日が中つて二階の方が松の爲めに好いつて」
「阿爺も親切だな。さうか夫で兄さんが馬鹿になつちまつたんだね。阿爺親切にして子は馬鹿になりか」
「なに、そりや。一寸。發句？」
「まあ發句に似たもんだ」
「似たもんだつて、本當の發句ぢやないの」
「中々追窮するね。夫よりか御前今日は大變立派なものを縫つてるね。何だい夫は」
「是？是は伊勢崎でせう」
「いやに光つくぢやないか。兄さんのかい」
「阿爺のよ」
「阿爺のもの許縫つて、些とも兄さんには縫つて呉れないね。狐の袖無以後御見限りだね」
「あらいやだ。あんな嘘ばかり。今着て入らつしやるのも縫つて上げたんだわ」
「是かい。是はもう駄目だ。こら此通り」
「おや、ひどい襟垢だ事、此間着た許だのに――兄さんは膏が多過ぎるんですよ」
「何が多過ぎても、もう駄目だよ」

「ぢや是を縫ひ上げたら、すぐ縫つて上げませう」
「新らしいんだらうね」
「えゝ、洗つて張つたの」
「あの親父の拜領ものか。ハヽヽヽ。時に糸公不思議な事があるがね」
「何が」
「阿爺さんは年寄の癖に新らしいもの許着て、年の若いおれには御古許着せたがるのは、少し妙だよ。此調子で行くと仕舞には自分でパナマの帽子を被つて、おれには物置にある陣笠をかぶれと云ふかも知れない」
「ホヽヽ兄さんは隨分口が達者ね」
「達者なのは口丈か。可哀想に――」
「まだ、あるのよ」
宗近君は返事をやめて、欄干の隙間から庭前の植込を頬杖に見下して居る。
「まだあるのよ。一寸」と針を離れぬ糸子の眼は、左の手につんと撮んだ合せ目を、見る間に揩けて來て、いざと云ふ指先を白くふつくらと放した時、漸く兄の顔を見る。
「まだあるのよ。兄さん」
「何だい。口丈で澤山だよ」
「だつて、まだあるんですもの」と針の針孔を障子へ向けて、可愛らしい二重瞼を細する。宗近君は依然として長閑な心を頬杖に託して庭を眺めて居る。

「云つて見ませうか」
「う。うん」
下顎は頰杖で動かす事が出來ない。返事は咽喉から鼻へ拔ける。
「あし（足）。分つたでせう」
「う。うん」
紺の糸を唇に濕して、指先に尖らすは、射損なつた針孔を通す女の計である。
「糸公、誰か御客があるのかい」
「え〻、甲野の阿母が御出よ」
「甲野の阿母か。あれこそ達者だね、兄さんなんか到底叶はない」
「でも品がい〻わ。兄さん見た樣に惡口は仰しやらないからい〻わ」
「さう兄さんが嫌ぢや、世話の仕榮がない」
「世話もしない癖に」
「ハ〻〻、實は狐の袖無の御禮に、近日御花見にでも連れて行かうかと思つて居た所だよ」
「もう花は散つて仕舞つたぢやありませんか。今時分御花見だなんて」
「いえ、上野や向島は駄目だが荒川は今が盛だよ。荒川から萱野へ行つて櫻草を取つて王子へ廻つて汽車で歸つてくる」
「いつ」と糸子は縫ふ手を已めて、針を頭へ刺す。

「でなければ、博覧會へ行つて臺灣館で御茶を飲んで、イルミネーションを見て電車で歸る。――どつちが好い」
「わたし、博覧會が見たいわ。是を縫つて仕舞つたら行きませう。ね」
「うん。だから兄さんを大事にしなくつちあ行けないよ。こんな親切な兄さんは日本中に澤山はないぜ」
「ホヽヽ、へえ、大事に致します。――一寸その物指を借して頂戴」
「さうして裁縫を勉強すると、今に御嫁に行くときに金剛石の指環を買つてやる」
「旨いのねえ、口丈は。そんなに御金があるの」
「あるのつて、――今はないさ」
「一體兄さんは何故落第したんでせう」
「えらいからさ」
「まあ――どこか其所いらに鋏はなくつて」
「其蒲團の横にある。いや、もう少し左。――其鋏に猿が着いてるのは、どう云ふ譯だ。洒落かい」
「是？奇麗でせう。縮緬の御申さん」
「御前がこしらへたのかい。感心に旨く出來てる。御前は何にも出來ないが、こんなものは器用だね」
「どうせ藤尾さんの樣には參りません――あらそんな椽側へ烟草の灰を捨てるのは御廢しなさいよ。――これを借してたげるから」
「なんだい是は。へえゝ。板目紙の上へ千代紙を張り付けて。矢つ張御前がこしらへたのか。閑人だな

あ。一體何にするものだい。――糸を入れる？糸の屑をかい。へえゝ」
「兄さんは藤尾さんの樣な方が好きなんでせう」
「御前の樣なのも好きだよ」
「私は別物として――ねえ、さうでせう」
「嫌でもないね」
「あら隱して入らつしやるわ。可笑しい事」
「可笑しい？。可笑しくつてもいゝや。――甲野の叔母はしきりに密談をして居るね」
「ことに因ると藤尾さんの事かも知れなくつてよ」
「さうか、それぢや聽きに行かうか」
「あら、御廢しなさいよ――わたし、火熨が入るんだけれども遠慮して取りに行かないんだから」
「自分の家で、さう遠慮しちや有害だ。兄さんが取つて來てやらうか」
「いゝから御廢しなさいよ。今下へ行くと折角の話をやめて仕舞つてよ」
「どうも劍呑だね。夫ぢや此方も氣息を殺して寐轉んでるのか」
「氣息を殺さなくつてもいゝわ」
「ぢや氣息を活かして寐轉ぶか」
「寐轉ぶのはもう好い加減になさいよ。そんなに行儀がわるいから外交官の試驗に落第するのよ」
「さうさな、あの試驗官はことによると御前と同意見かも知れない。困つたもんだ」

「困つたもんだつて、藤尾さんも矢つ張り同意見ですよ」

裁縫の手を休めて、火熨に逡巡て居た糸子は、入子菱に縢つた指拔を抽いて、鴇色に銀の雨を刺す針差を裏に、如鱗木の塗美くしき蓋をはたと落した。やがて日永の窓に赤くなつた耳朶のあたりを、平手で支へて、右の肘を針箱の上に、取り廣げたる縫物の下で、隱れた膝を斜めに崩した。繻袢の袖に花と亂る丶濃き色は、柔らかき腕を音なく滑つて、くつきりと普通よりは明かなる肉の柱が、蝶と傾く絹紐の下に鮮かである。

「兄さん」

「何だい。――仕事はもうおやめか。何だかぼんやりした顏をして居るね」

「藤尾さんは駄目よ」

「駄目だ？駄目とは」

「だつて來る氣はないんですもの」

「御前聞いて來たのか」

「そんな事がまさか無躾に聞かれるもんですか」

「聞かないでも分かるのか。丸で巫女だね。――御前がさう頰杖を突いて針箱へ靠たれてる所は天下の絶景だよ。妹ながら天晴な姿勢だハ、、、」

「澤山御冷やかしなさい。人が折角親切に言つて上げるのに」

云ひながら糸子は首を支へた白い腕をぱたりと倒した。揃つた指が針箱の角を抑へる樣に、前へ垂れる。

障子に近い片頬は、壓し付けられた手の痕を耳朶共にぽっと赤く染めてゐる。奇麗に圍ふ二重の瞼は、涼しい眸を、長い睫に隱さうとして、上の方から垂れかゝる。宗近君は此睫の奥からしみ〴〵と妹に見られた。――四角な肩へ肉を入れて、倒した胴を肘に撥ねて起き上がる。

「糸公、おれは叔父さんの金時計を貰ふ約束があるんだよ」

「叔父さんの？」と輕く聞き返して、急に聲を落すと「だつて……」と云ふや否や、黑い眸は長い睫の裏にかくれた。派出な色の絹紐がちらりと前の方へ顏を出す。

「大丈夫だ。京都でも甲野に話して置いた」

「さう」と俯目になつた顏を半ば上げる。危ぶむ樣な、慰める樣な笑が顏と共に浮いて來る。

「兄さんが今に外國へ行つたら、御前に何か買つて送つてやるよ」

「今度の試驗の結果はまだ分らないの」

「もう直だらう」

「今度は是非及第なさいよ」

「え、うん。アハヽヽヽ。まあ好いや」

「好かないわ。――藤尾さんはね。學問がよく出來て、信用のある方が好きなんですよ」

「兄さんは學問が出來なくつて、信用がないのかな」

「さうぢやないのよ。さうぢやないけれども――まあ例に云ふと、あの小野さんと云ふ方があるでせう」

「うん」

「優等で銀時計を頂いたつて。今博士論文を書いて入らつしやるつてね。――藤尾さんはあゝ云ふ方が好なのよ」

「さうか。おや／＼」

「何がおや／＼なの。だつて名譽ですわ」

「兄さんは銀時計も頂けず、博士論文も書けず。落第はする。不名譽の至だ」

「あら不名譽だと誰も云やしないわ。只あんまり氣樂過ぎるのよ」

「あんまり氣樂過ぎるよ」

「ホヽヽ、可笑しいのね。何だか些とも苦にならない樣ね」

「糸公、兄さんは學問も出來ず落第もするが――まあ廢さう、どうでも好い。兎に角御前兄さんを好い兄さんと思はないかい」

「そりや思ふわ」

「小野さんとどつちが好い」

「そりや兄さんの方が好いわ」

「甲野さんとは」

「知らないわ」

深い日は障子を透して糸子の頰を暖かに射る。俯向いた額の色丈がいちゞるしく白く見えた。

「おい頭へ針が刺さつてる。忘れると危ないよ」

「あら」と翻へる繻袢の袖のほのめくうちを、二本の指に、こゝと抑へて、輕く拔き取る。
「ハ、、、見えない所でも、旨く手が屆くね。盲目にすると疳の好い按摩さんが出來るよ」
「だつて慣れてるんですもの」
「えらいもんだ。時に糸公面白い話を聞かせ樣か」
「なに」
「京都の宿屋の隣に琴を引く別嬪が居てね」
「端書に書いてあつたんでせう」
「あゝ」
「あれなら知つてゝよ」
「それがさ、世の中には不思議な事があるもんだね。兄さんと甲野さんと嵐山へ御花見に行つたら、其女に逢つたのさ。逢つた許ならいゝが、甲野さんが其女に見惚れて茶碗を落して仕舞つてね」
「あら、本當?まあ」
「驚ろいたらう。夫から急行の夜汽車で歸る時に、又其女と乘り合せてね」
「嘘よ」
「ハ、、、とう〳〵東京迄一所に來た」
「だつて京都の人がさう無暗に東京へくる譯がないぢやありませんか」
「それが何かの因緣だよ」

「人を……」

「まあ御聞きよ。甲野が汽車の中であの女は嫁に行くんだらうか、どうだらうかつて、頻りに心配して……」

「もう澤山」

「澤山なら廢さう」

「其方の方は何と仰しやるの、名前は」

「名前かい――だつてもう澤山だつて云ふぢやないか」

「教へたつて好いぢやありませんか」

「ハ、、、さう眞面目にならなくつても好い。實は嘘だ。全く兄さんの作り事さ」

「悪らしい」

糸子は目出度笑つた。

十一

蟻は甘きに集まり、人は新しきに集まる。文明の民は劇烈なる生存のうちに無聊をかこつ。立ちながら三度の食に就くの忙きに堪へて、路上に昏睡の病を憂ふ。生を縦横に託して、縦横に死を貪るは文明の民である。文明の民程自己の活動を誇るものなく、文明の民程自己の沈滯に苦しむものはない。文明は人の神經を髪剃に削つて、人の精神を擂木と鈍くする。刺激に麻痺して、しかも刺激に渇くものは數を盡くし

て新らしき博覽會に集まる。

狗は香を慕ひ、人は色に趨る。狗と人とは此點に於て尤も鋭敏な動物である。紫衣と云ひ、黄袍と云ひ、青衿と云ふ。皆人を呼び寄せるの道具に過ぎぬ。土堤を走る彌次馬は必ず色々の旗を擔ぐ。擔がれて懸命に權を操るものは色に擔がれるのである。天下、天狗の鼻より著しきものはない。天狗の鼻は古へより赫奕として赤である。色のある所は千里を遠しとせず。凡ての人は色の博覽會に集まる。

蛾は燈に集まり、人は電光に集まる。輝やくものは天下を牽く。金銀、硨磲、瑪瑙、琉璃、閻浮檀金、の屬を擧げて、悉く退屈の眸を見張らして、疲れたる頭を我破と跳ね起させる爲めに光るのである。晝を短かしとする文明の民の夜會には、あらはなる肌に鏤たる寶石が獨り幅を利かす。金剛石は人の心を奪ふが故に人の心よりも高價である。泥海に落つる星の影は、影ながら瓦よりも鮮に、見るもの丶胸に閃く。閃く影に躍る善男子、善女子は家を空しうしてイルミネーションに集まる。

文明を刺激の袋の底に篩ひ寄せると博覽會になる。博覽會を鈍き夜の砂に漉せば燦たるイルミネーションになる。苟しくも生きてあらば、生きたる證據を求めんが爲めにイルミネーションを見て、あつと驚かざるべからず。文明に麻痺したる文明の民は、あつと驚く時、始めて生きて居るなと氣が付く。

花電車が風を截つて來る。生きて居る證據を見てこいと、積み込んだ荷を山下雁鍋の邊で卸す。雁鍋はとくの昔に亡くなつた。卸された荷物は、自己が亡くならんとしつ丶ある名譽を回復せんと森の方にぞろ〳〵行く。

岡は夜を掠めて本郷から起る。高き臺を朧に浮かして幅十町を東へなだれる下り口は、根津に、彌生に、

切り通しに、驚ろかんとするものを桝で料つて下谷へ通す。踏み合ふ黒い影は悉く池の端にあつまる。――文明の人程驚ろきたがるものはない。

松高くして花を隱さず、枝の隙間に夜を照らす宵重なりて、雨も降り風も吹く。始めは一片と落ち、次には二片と散る。次には數ふるひまに只はら／＼と散る。此間中は見るからに、萬紅を大地に吹いて、吹かれたるものの地に屆かざるうちに、梢から後を追ふて落ちて來た。忙がしい吹雪は何時か盡きて、今は殘る樹頭に嵐も漸く收つた。星ならずして夜を護る花の影は見えぬ。同時にイルミネーションは點いた。

「あら」と糸子が云ふ。

「夜の世界は晝の世界より美しい事」と藤尾が云ふ。

薄の穗を丸く曲げて、左右から重なる金の閃く中に織り出した半月の數は分からず。幅廣に腰を蔽ふ藤尾の帶を一尺隔てゝ宗近君と甲野さんが立つてゐる。

「是は奇觀だ。ざつと龍宮だね」と宗近君が云ふ。

「糸子さん、驚いた樣ですね」と甲野さんは帽子を眉深く被つて立つ。

糸子は振り返る。夜の笑は水の中で詩を吟ずる樣なものである。思ふ所へは屆かぬかも知れぬ。振り返る人の衣の色は黄に似て夜を欺くを、黒いものが幾筋も竪に刻んでゐる。

「驚いたかい」と今度は兄が聞き直す。

「貴所方は」と糸子を差し置いて藤尾が振り返る。黒い髮の陰から颯と白い顏を映す。頰の端は遠い火光を受けてほの赤い。

「僕は三遍目だから驚ろかない」と宗近君は顏一面を明かるい方へ向けて云ふ。

「驚くうちは樂があるもんだ。女は樂が多くて仕合せだね」と甲野さんは長い體軀を眞直に立てた儘藤尾を見下した。

黑い眼が夜を射て動く。

「あれが臺灣館なの」と何氣なき糸子は水を横切つて指を點す。

「あの一番右の前へ出てるのが左樣だ。あれが一番善く出來てゐる。ねえ甲野さん」

「夜見ると」と甲野さんがすぐ但書を附け加へた。

「ねえ、糸公、丸で龍宮の樣だらう」

「本當に龍宮ね」

「藤尾さん、どう思ふ」と宗近君はどこ迄も龍宮が得意である。

「俗ぢやありませんか」

「何が、あの建物がかね」

「あなたの形容がですよ」

「ハヽヽ、甲野さん、龍宮は俗だと云ふ御意見だ。俗でも龍宮ぢやないか」

「形容は旨く中ると俗になるのが通例だ」

「中ると俗なら、中らなければ何になるんだ」

「詩になるでせう」と藤尾が横合から答へた。

「だから、詩は實際に外れる」と甲野さんが云ふ。
「實際より高いから」と藤尾が註釋する。
「すると旨く中つた形容が俗で、旨く中らなかつた形容が詩なんだね。藤尾さん無味くつて中らない形容を云つて御覽」
「云つて見ませうか。——兄さんが知つてるでせう。聽いて御覽なさい」と藤尾は鋭どい眼の角から欽吾を見た。眼の角は云ふ。——無味くつて中らない形容は哲學である。
「あの横にあるのは何」と糸子が無邪氣に聞く。
燄の線を闇に渡して空を横に切るは屋根である。竪に切るは柱である。斜めに切るは甍である。朧の奥に星を埋めて、限りなき夜を薄黑く地ならししたる上に、稻妻の穗は一を引いて虛空を走つた。二を引いて上から落ちて來た。卍を描いて花火の如く地に近く廻轉した。最後に穗先を逆に返して帝座の眞中を貫けと許拋げ上げた。かくして塔は棟に入り、棟は床に連なつて、不忍の池の、此方から見渡す向を、右から左へ隙間なく埋めて、大いなる火の繪圖面が出來た。
藍を含む黑塗に、金を惜まぬ高蒔繪は堂を描き、樓を描き、廻廊を描き、曲欄を描き、圜塔方柱の數々を描き盡して、猶餘りあるを是非に用ひ切らん爲めに、描ける上を往きつ戻りつする。縱横に空を走る燄の線は一點一劃を亂すことなく整然として一點一劃のうちに活きて居る。動いて居る。しかも明かに動いて、動く限りは形を崩す氣色が見えぬ。
「あの横に見えるのは何」と糸子が聞く。

「あれが外國館。丁度正面に見える。此所から見るのが一番奇麗だ。あの左にある高い丸い屋根が三菱館。――あの恰好が好い。何と形容するかな」と宗近君は一寸躊躇した。

「あの眞中丈が赤いのね」と妹が云ふ。

「冠の紅玉を嵌めた樣だ事」と藤尾が云ふ。

「成程、天賞堂の廣告見た樣だ」と宗近君は知らぬ顏で俗にして仕舞ふ。甲野さんは輕く笑つて仰向いた。

空は低い。薄黑く大地に逼る夜の中途に、煮え切らぬ星が路頭に迷つて放下がつてゐる。柱と連なり、甍と積む萬點の焱は逆しまに天を浸して、寐とぼけた星の眼を射る。星の眼は熱い。

「空が焦げる樣だ。――羅馬法王の冠かも知れない」と甲野さんの視線は谷中から上野の森へかけて大いなる圜を畫いた。

「羅馬法王の冠か。藤尾さん、羅馬法王の冠はどうだい。天賞堂の廣告の方が好さゝうだがね」

「孰れでも……」と藤尾は澄ましてゐる。

「孰れでも差支なしか。兎に角女王の冠ぢやない。ねえ甲野さん」

「何とも云へない。クレオパトラはあんな冠をかぶつてゐる」

「どうして御存じなの」と藤尾は鋭どく聞いた。

「御前の持つてゐる本に繪がかいてあるぢやないか」

「空より水の方が奇麗よ」と糸子が突然注意した。對話はクレオパトラを離れる。

晝でも死んでゐる水は、風を含まぬ夜の影に壓し付けられて、見渡す限り平かである。動かぬは何時の事からか、靜かなる水は知るまい。百年の昔に堀つた池ならば、百年以來動かぬ、五十年の昔ならば、五十年以來動かぬとのみ思はれる水底から、腐つた蓮の根がそろ〳〵青い芽を吹きかけて居る。泥から生れた鯉と鮒が、闇を忍んで緩やかに腮を働かしてゐる。イルミネーションは高い影を逆まにして、二丁餘の岸を、尺も殘さず眞赤になつて此靜かなる水の上に倒れ込む。黑い水は死につゝもぱつと色を作す。泥に潛む魚の鰭は燃える。

濕へる焰は、一抹に岸を伸して、明かに向側へ渡る。行く道に横はる凡てのものを染め盡して已まざるを、ぷつりと截つて長い橋を西から東へ懸る。白い石に野羽玉の波を跨ぐアーチの數は二十、欄に盛る擬寶珠は悉く夜を照らす白光の珠である。

「空より水の方が奇麗よ」と注意した糸子の聲に連れて、殘る三人の眼は悉く水と橋とに聚つた。一間毎に高く石欄干を照らす電光が、遠き此方からは、行儀よく一列に空に懸つて見える。下をぞろ〳〵人が通る。

「あの橋は人で埋つてゐる」

と宗近君が大きな聲を出した。

小野さんは孤堂先生と小夜子を連れて今此橋を通りつゝある。驚ろかんとあせる群集は辨天の祠を拔けて壓して來る。向が岡を下りて壓して來る。東西南北の人は廣い森と、廣い池の周圍を捨てゝ悉く細長い橋の上に集まる。橋の上は動かれぬ。眞中に弓張を高く差し上げて、巡査が來る人と往く人を左へ右へと

制してゐる。來る人も往く人も只揉まれて通る。足を地に落す暇はない。樂に踏む餘地を尺寸に見出して、安々と踵を着ける心持がやつと有つたなと思ふうち、もう後ろから前へ押し出される。歩くとは思へない。歩かぬとは無論云へぬ。小夜子は夢の樣に心細くなる。孤堂先生は過去の人間を壓し潰す爲めに皆が揉むのではないかと恐ろしがる。小野さん丈は比較的得意である。多勢の間に立つて、多數より優れたりとの自覺あるものは、身動きが出來ぬ時ですら得意である。博覽會は當世である。イルミネーションは尤も當世である。驚ろかんとして茲にあつまる者は皆當世的の男と女である。只あつと云つて、當世的に生存の自覺を強くする爲めである。御互に御互の顏を見て、御互の世は當世だと默契して、自己の勢力を多數と認識したる後家に歸つて安眠する爲めである。小野さんは此多數の當世のうちで、尤も當世なものである。得意なのは無理もない。

得意な小野さんは同時に失意である。自分一人でこそ誰が眼にも當世に見える。申し分のある筈がない。然し時代後れの御荷物を丁寧に二人迄脊負つて、幅の利かぬ過去と同一體だと當世から見られるのは、只見られるのではない、見咎められるも同然である。芝居に行つて、自分の着てゐる羽織の紋の大さが、時代か時代後れか、それ許が氣になつて、見物には一向身が入らぬものさへある。小野さんは肩身が狹い。人の波の許す限り早く歩く。

「阿爺、大丈夫?」と後から呼ぶ。

「あゝ大丈夫だよ」と知らぬ人を間に挾んだ儘一軒置いて返事がある。

「何だか危なくつて……」

「なに自然に押して行けば世話はない」と挾まつた人を遣り過ごして、苦しい所を娘と一所になる。

「押される許で、些とも押せやしないわ」と娘は落ち付かぬながら、薄い片頰に笑を見せる。

「押さなくつてもいゝから、押される丈押されるさ」と云ふうち二人は前へ出る。巡査の提灯が孤堂先生の黒い帽子を掠めて動いた。

「小野はどうしたかね」

「彼所よ」と眼元で指す。手を出せば人の肩で遮ぎられる。

「何處に」と孤堂先生は足を揃へる暇もなく、其儘日和下駄の前齒を傾けて脊延をする。先生の腰が中心を失ひかけた所を、後ろから氣の早い文明の民が押しかゝる。先生はのめつた。危うく倒れる所を、前に立つ文明の民の脊中で漸く喰ひ留める。文明の民は何處迄も前へ出たがる代りに、脊中で人を援ける事を拒まぬ親切な人間である。

文明の波は自から動いて頼のない親と子を辨天の堂近く押し出して來る。長い橋が切れて、渡る人の足が土へ着くや否や波は急に左右に散つて、黑い頭が勝手な方へ崩れ出す。二人は漸く胸が廣くなつた樣な心持になる。

暗い底に藍を含む逝く春の夜を透かして見ると、花が見える。雨に風に散り後れて、八重に咲く遲き香を、夜に懸けん花の願を、人の世の灯が下から朗かに照らしてゐる。朧に薄紅の螺鈿を鏤る。鏤ると云ふと硬過る。浮くと云へば空を離れる。此宵と此花をどう形容したらよからうかと考へながら、小野さんは二人を待ち合せて居る。

「どうも怖ろしい人だね」と追ひ付いた孤堂先生が云ふ。怖ろしいとは、本當に怖ろしい意味で且つ普通に怖ろしい意味である。

「隨分出ます」

「早く家へ歸りたくなつた。どうも怖しい人だ。どこから斯んなに出て來るのかね」

小野さんはにや／＼と笑つた。蛛蜘の子の様に暗い森を蔽ふて至る文明の民は皆自分の同類である。

「さすが東京だね。まさか、こんなぢや無からうと思つてゐた。怖しい所だ」

數は勢である。勢を生む所は怖しい。一坪に足らぬ腐れた水でも御玉杓子のうぢよ／＼湧く所は怖しい。況んや高等なる文明の御玉杓子を苦もなくひり出す東京が怖しいのは無論の事である。小野さんは又にや／＼と笑つた。

「小夜や、どうだい。あぶない、もう少しで紛れる所だつた。京都ぢやこんな事はないね」

「あの橋を通る時は……どうしやうかと思ひましたわ。だつて怖くつて……」

「もう大丈夫だ。何だか顔色が悪い様だね。草臥たかい」

「少し心持が……」

「悪い？歩きつけないのを無理に歩いた所爲だよ。夫に此人出ぢやあ。どつかで一寸休まう。――小野どつか休む所があるだらう、小夜が心持がよくないさうだから」

「さうですか、其所へ出ると澤山茶屋がありますから」と小野さんは又先へ立つて行く。

運命は丸い池を作る。池を回るものはどこかで落ち合はねばならぬ。落ち合つて知らぬ顔で行くものは

幸である。人の海の湧き返る薄黒い倫敦で、朝な夕なに回り合はんと心掛ける甲斐もなく、眼を皿に、足を棒に、尋ねあぐんだ當人は、只一重の壁に遮られて隣りの家に煤けた空を眺めて居る。それでも逢へぬ、一生逢へぬ、骨が舍利になつて、墓に草が生へる迄逢ふ事が出來ぬかも知れぬと書いた人がある。運命は一重の壁に思ふ人を終古に隔てると共に、丸い池に思はぬ人をはたと行き合はせる。變なものは互に池の周圍を回りながら近寄つて來る。不可思議の糸は闇の夜をさへ縫ふ。

「どうだい女連は大分疲れたらう。こゝで御茶でも飲むかね」と宗近君が云ふ。

「女連はとにかく僕の方が疲れた」

「君より糸公の方が丈夫だぜ。糸公どうだ、まだ歩けるか」

「まだ歩けるわ」

「まだ歩ける？そりやえらい。ぢや御茶は廢しにするかね」

「でも欽吾さんが休みたいと仰しやるぢやありませんか」

「ハ、、、中々旨い事を云ふ。甲野さん、糸公が君の爲めに休んでやるとさ」

「難有い」と甲野さんは薄笑をしたが、

「藤尾も休んで吳れるだらうね」と同じ調子で付け加へる。

「御賴みなら」と簡明な答がある。

「どうせ女には敵はない」と甲野さんは斷案を下した。

池の水に差し掛けて洋風に作り上げた假普請の入口を跨ぐと、小い卓に椅子を添へて此所、彼所に併べ

た大廣間に、三人四人宛の群が各口の用を辨じてゐる。どこへ席をとらうかと、四五十人の一座をずつと見廻した宗近君は、並んで右に立つてゐる甲野さんの袂をぐいと引いた。後の藤尾はすぐおやと思ふ。然し仰山に何事かと聞くのは不見識である。甲野さんは別段相圖を返した樣子もなく
「あすこが空いてゐる」とずん／＼奥へ這入つて行く。あとを跟けながら藤尾の眼は大きな部屋の隅から隅迄を殘りなく腹の中へ疊み込む。糸子は只下を見て通る。
「おい氣が付いたか」と宗近君の腰は先づ椅子に落ちた。
「うん」と云ふ簡潔な返事がある。
「藤尾さん小野が來てゐるよ。後ろを見て御覽」と宗近君が又云ふ。
「知つてゐます」と云つたなり首は少しも動かなかつた。黑い眼が怪しい輝を帶びて、頬の色は電氣燈のもとでは少し熱過ぎる。
「どこに」と何氣なき糸子は、優しい肩を斜めに捩ぢ向けた。
入口を左へ行き盡くして、二列目の卓を壁際に近く圍んで小野さんの連中は席を占めて居る。腰を卸した三人は突き當りの右側に、窓を控へて陣を取る。肩を動かした糸子の眼は、廣い部屋に所擇ばず散らついて居る群衆を端から端へ貫ぬいて、遙か隔たつた小野さんの横顏に落ちた。――小夜子は眞向に見える。孤堂先生は脊中の紋ばかりである。春の夜を淋しく交る白い糸を、顎の下に拔くも懶うく、世の儘に、人の儘に、又取る年の積る儘に捨てゝ吹かるゝ憂き髯は小夜子の方に向いて居る。
「あら御連があるのね」と糸子は頸をもとへ返す。返すとき前に坐つてゐる甲野さんと眼を見合せた。

甲野さんは何にも云はない。灰皿の上に竪に挟んだ燐寸箱の横側をしゆつと擦つた。藤尾も口を結んだ儘である。小野さんとは脊中合せの儘でわかれる積かも知れない。

「どうだい、別嬪だらう」と宗近君は糸子に調戯かける。

俯目に卓布を眺めてゐた藤尾の眼は見えぬ、濃い眉丈はぴくりと動いた。糸子は氣が付かぬ、宗近君は平氣である、甲野さんは超然としてゐる。

「うつくしい方ね」と糸子は藤尾を見る。藤尾は眼を上げない。

「えゝ」と素氣なく云ひ放つ。極めて低い聲である。答を與ふるに慣せぬ事を聞かれた時に、――相手に合槌を打つ事を屑とせざる時に――女は此法を用ひる。女は肯定の辭に、否定の調子を寓する靈腕を有してゐる。

「見たかい甲野さん、驚いたね」

「うん、ちと妙だね」と巻烟草の灰を皿の中にはたき落す。

「だから僕が云つたのだ」

「何と云つたのだい」

「何と云つたつて、忘れたかい」と宗近君も下向になつて燐寸を擦る。刹那に藤尾の眸は宗近君の額を射た。宗近君は知らない。啣へた巻烟草に火を移して顔を眞向に起した時、稲妻は既に消えてゐた。

「あら妙だわね。二人して……何を云つて入らつしやるの」と糸子が聞く。

「ハヽヽ、面白い事があるんだよ。糸公……」と云ひ掛けた時紅茶と西洋菓子が來る。

「いやあ亡國の菓子が來た」
「亡國の菓子とは何だい」と甲野さんは茶碗を引き寄せる。
「亡國の菓子さハヽヽ。糸公知つてるだらう亡國の菓子の由緒を」と云ひながら角砂糖を茶碗の中へ拋り込む。蟹の眼の樣な泡が幽かな音を立てゝ浮き上がる。
「そんな事知らないわ」と糸子は匙でぐる〳〵攪き廻してゐる。
「そら阿爺が云つたぢやないか。書生が西洋菓子なんぞを食ふ樣ぢや日本も駄目だつて」
「ホヽヽそんな事を仰しやるもんですか」
「云はない？御前餘つ程物覺がわるいね。そら此間甲野さんや何かと晩飯を食つた時、さう云つたぢやないか」
「さうぢやないわ。書生の癖に西洋菓子なんぞ食ふのはのらくらものだつて仰しやつたんでせう」
「はあゝ、さうか。亡國の菓子ぢやなかつたかね。兎に角阿爺は西洋菓子が嫌だよ。柿羊羹か味噌松風、妙なもの許珍重したがる。藤尾さんの樣なハイカラの傍へ持つて行くとすぐ輕蔑されて仕舞ふ」
「さう阿爺の惡口を仰しやらなくつてもいゝわ。兄さんだつて、もう書生ぢやないから西洋菓子を食べたつて大丈夫ですよ」
「もう叱られる氣遣はないか。それぢや一つ遣るかな。糸公も一つ御上り。どうだい藤尾さん一つ。——然しなんだね、阿爺の樣な人はこれから日本に段々少なくなるね。惜しいもんだ」とチヨコレートを塗つた卵糖を口一杯に頰張る。

「ホヽヽ一人で饒舌て……」と藤尾の方を見る。藤尾は應じない。

「藤尾は何も食はないのか」と甲野さんは茶碗を口へ付けながら聞く。

「澤山」と云つたぎりである。

甲野さんは靜かに茶碗を卸して、首を心持藤尾の方へ向け直した。藤尾は來たなと思ひながら、瞬もせず窓を透して映る、イルミネーションの片割を專念に見てゐる。兄の首は次第に故の位地に歸る。

四人が席を立つた時、藤尾は傍目も觸らず、只正面を見たなりで、女王の人形が歩を移すが如く昂然として入口迄出る。

「もう小野は歸つたよ、藤尾さん」と宗近君は洒落に女の肩を敲く。藤尾の胸は紅茶で燒ける。

「驚ろくうちは樂がある。女は仕合せなものだ」と再び入込へ出た時、何を思つたか甲野さんは復前言を繰り返した。

驚くうちは樂がある？女は仕合せなものだ？家へ歸つて寐床へ這入る迄藤尾の耳に此二句が嘲の鈴の如く鳴つた。

十二

貧乏を十七字に標榜して、馬の糞、馬の尿を得意氣に咏ずる發句と云ふがある。芭蕉が古池に蛙を飛び込ますと、蕪村が傘を擔いで紅葉を見に行く。明治になつては子規と云ふ男が脊髓病を煩つて糸瓜の水を取つた。貧に誇る風流は今日に至つても盡きぬ。只小野さんは是を卑しとする。

仙人は流霞を餐し、朝沆を吸ふ。詩人の食物は想像である。美くしき想像に耽るためには餘裕がなくてはならぬ。美くしき想像を實現する爲めには財產がなくてはならぬ。二十世紀の詩趣と元祿の風流とは別物である。

文明の詩は金剛石より成る。紫より成る。薔薇の香と、葡萄の酒と、琥珀の盃より成る。冬は斑入の大理石を四角に組んで、漆に似たる石炭に絹足袋の底を煖める所にある。夏は氷盤に苺を盛つて、旨き血を、クリームの白きなかに溶し込む所にある。あるときは熱帶の奇蘭を見よがしに匂はする溫室にある。野路や空、月のなかなる花野を惜氣もなく織り込んだ綴の丸帶にある。唐錦小袖振袖の擦れ違ふ所にある。——文明の詩は金にある。小野さんは詩人の本分を完ふする爲めに金を得ねばならぬ。

詩を作るより田を作れと云ふ。詩人にして產を成したものは古今を傾けて幾人もない。ことに文明の民は詩人の歌よりも詩人の行を愛する。彼等は日每夜每に文明の詩を實現して、花に月に富貴の實生活を詩化しつゝある。小野さんの詩は一文にもならぬ。

詩人程金にならん商買はない。同時に詩人程金の入る商買もない。文明の詩人は是非共他の金で詩を作り、他の金で美的生活を送らねばならぬ事となる。小野さんがわが本領を解する藤尾に頼たくなるのは自然の數である。あすこには中以上の恆產があると聞く。腹違の妹を片付るに只の簞笥と長持で承知する樣な母親ではない。殊に欽吾は多病である。實の娘に婿を取つて、かゝる氣がないとも限らぬ。折々に、解いて見ろと、わざとらしく結ぶ辻占があたればいつも吉である。急いては事を仕損ずる。小野さんは大人なしくして事件の發展を、自ら開くべき優曇華の未來に待ち暮してゐた。小野さんは進んで仕掛ける樣

な相撲をとらぬ、又とれぬ男である。

天地は此有望の青年に對して悠久であつた。春は九十日の東風を限りなく得意の額に吹く樣に思はれた。小野さんは優しい、物に逆はぬ、氣の長い男であつた。――所へ過去が押し寄せて來た。二十七年の長い夢と背を向けて、西の國へさらりと流した筈の昔から、一滴の墨汁にも較ぶべき程の暗い小い點が、明かなる都迄押し寄せて來た。押されるものは出る氣がなくても前へのめりたがる。大人しく時機を待つ覺悟を氣長に極めた詩人も未來を急がねばならぬ。黑い點は頭の上にぴたりと留つてゐる。仰ぐとぐる／＼旋轉しさうに見える。ぱつと散れば白雨が一度にくる。小野さんは首を縮めて駈け出したくなる。

四五日は孤堂先生の世話やら用事やらで甲野の方へ足を向ける事も出來なかつた。昨夜は出來ぬ工夫を無理にして、舊師への義理立てに、先生と小夜子を博覽會へ案内した。恩は昔受けても今受けても恩である。恩を忘れる樣な不人情な詩人ではない。一飯漂母を德とすと云ふ故事を孤堂先生から教はつた事さへある。先生の爲めならば是から先何處迄も力になる積でゐる。人の難儀を救ふのは美くしい詩人の義務である。此義務を果して、濃やかな人情を、得意の現在に、わが歷史の一部として、思出の詩料に殘すのは溫厚なる小野さんに尤も恰好な優しい振舞である。只何事も金がなくては出來ぬ。金は藤尾と結婚せねば出來ぬ。結婚が一日早く成立すれば、一日早く孤堂先生の世話が思ふ樣に出來る。――小野さんは机の前で斯う云ふ論理を發明した。

小夜子を捨てる爲ではない、孤堂先生の世話が出來る爲に、早く藤尾と結婚して仕舞はなければならぬ。――小野さんは自分の考に間違はない筈だと思ふ。人が聞けば立派に辯解が立つと思ふ。小野さんは頭腦

の明瞭な男である。
こゝ迄考へた小野さんはやがて机の上に置いてある、茶の表紙に豊かな金文字を入れた厚い書物を開けた。中からヌーボー式に青い柳を染めて赤瓦の屋根が少し見える栞があらはれる、小野さんは左の手に栞を滑らして、細かい活字を金縁の眼鏡の奥から讀み始める。五分許は無事であつたが、しばらくすると、何時の間にやら、黒い眼は頁を離れて、筋違に日脚の伸びた障子の棧を見詰めてゐる。――四五日藤尾に逢はぬ、屹度何とか思つてゐるに違ない。只の時なら四五日が十日でも左して心配にはならぬ。過去に追ひ付かれた今の身には梳る間も千金である。逢へば逢ふ度に願の的は近くなる。逢はねば元の君と我にたぐり寄すべき戀の綱の寸分だも縮まる縁はない。のみならず、魔は節穴の隙にも射す。逢はぬ半日に日が落ちぬとも限らぬ。籠る一夜に月は入る。等閑の此四五日に藤尾の眉に如何な稲妻が差してゐるかは夢測り難い。論文を書く爲めの勉强は無論大切である。然し藤尾は論文よりも大切である。小野さんはばたりと書物を伏せた。
芭蕉布の襖を開けると、押入の上段は夜具、下には柳行李が見える。小野さんは行李の上に疊んである脊廣を出して手早く着換へ終る。帽子は壁に主を待つ。がらりと障子を明けて、赤い鼻緒の上草履に、カシミヤの靴足袋を無理に突き込んだ時、下女が來る。
「おや御出掛。少し御待ちなさいよ」
「何だ」と草履から顔を上げる。下女は笑つてゐる。
「何か用かい」

「え〻」と矢つ張り笑つてゐる。

「何だ。冗談か」と行かうとすると、卸し立ての草履が片方足を離れて、拭き込んだ廊下を洋燈部屋の方へ滑つて行く。

「ホ、、、餘まり周章るもんだから。御客様ですよ」

「誰だい」

「あら待つてた癖に空つとぼけて……」

「待つてた？何を」

「ホ、、、大變眞面目ですね」と笑ひながら、返事も待たず、入口へ引き返す。小野さんは氣掛な顔をして障子の傍に上草履を揃へた儘廊下の突き當りを眺めて居る。何が出てくるかと思ふ。焦茶の中折が鴨居を越す程の高い脊を伸して、薄暗い廊下のはづれに折目正しく着こなした脊廣の地味な丈に、胸開の狹い胴衣から白い襯衣と白い襟が著るしく上品に見える。小野さんは姿よく着こなした衣裳を、見榮のせぬ廊下の片隅に、中ぶらりんに落ち付けて、光る眼鏡を斜めに、突き當りを眺めてゐる。何が出てくるのかと思ひながら眺めてゐる。兩手を洋袴の隱袋に插し込むのは落ちつかぬ時の、落ち付いた姿である。

「そこを曲ると眞直です」と云ふ下女の聲が聞えたと思ふと、すらりと小夜子の姿が廊下の端にあらはれた。海老茶色の緞子の片側が龍紋の所丈異樣に光線を射返して見える。在來りの銘仙の袷を、白足袋の甲を隱さぬ程に着て、きり〻と角を曲つた時、長襦袢らしいものがちらと色めいた。同時に遮ぎるものもない中廊下に七歩の間隔を置いて、男女の視線は御互の顔の上に落ちる。

男はおやと思ふ。姿勢丈は崩さない。女ははつと躊躇ふ。やがて頬に差す紅な〻度にかくして、亂るゝ笑顔を肩共に落す。油を注さぬ黑髮に、漣の琥珀に寄る幅廣の絹の色が鮮な翼を片鬢に張る。

「さあ」と小野さんは隔たる人を近く誘ふ樣な挨拶をする。

「どちらへか御出掛で……」と立ちながら兩手を前に重ねた女は、落した肩を、少しく浮かした儘で、氣の毒さうに動かない。

「いゝえ何……まあ御這入なさい。さあ」と片足を部屋のうちへ引く。

「御免」と云ひながら、手を重ねた儘擦足に廊下を滑つて來る。

男は全く部屋の中へ引き込んだ。女もつゞいて這入る。明かなる日永の窓は若き二人に若き對話を促がす。

「昨夜は御忙しい所を……」と女は入口に近く手をつかへる。

「いえ、嘸御疲でしたらう。どうです、御氣分は。もう悉皆好いですか」

「はあ、御蔭さまで」と云ふ顏は何となく窶れてゐる。男は一寸眞面目になつた。女はすぐ辯解する。

「あんな人込へは滅多に出つけた事がないもんですから」

文明の民は驚ろいて喜ぶ爲めに博覽會を開く。過去の人は驚ろいて怖がる爲めにイルミネーションを見る。

「先生はどうですか」

小夜子は返事を控へて淋しく笑つた。

「先生も雜沓する所が嫌でしたね」
「どうも年を取つたもんですから」と氣の毒さうに、相手から眼を外して、疊の上に置いてある埋木の茶托を眺める。京燒の染付茶碗は先から膝頭に載つてゐる。
「御迷惑でしたらう」と小野さんは隱袋から烟草入を取り出す。闇を照す月の色に富士と三保の松原が細かに彫つてある。其松に綠の繪の具を使つたのは詩人の持物としては少しく俗である。派出を好む藤尾の贈物かも知れない。
「いえ、迷惑だなんて。此方から願つて置いて」と小夜子は頭から小野さんの言葉を打ち消した。男は烟草入を開く。裏は一面の鍍金に、銀の冴えたる上を、花やかにぱつと流す。淋しき女は見事だと思ふ。
「先生丈なら、もつと閑靜な所へ案內した方が好かつたかも知れませんね」
忙しがる小野を無理に都合させて、好かぬ人込へわざ〳〵出掛けるのも皆自分が可愛いからである。濟まぬ事には人込は自分も嫌である。折角の思に、袖振り交はして、長閑な步を、春の宵に併んで移す當人は、依然として近寄れない。小夜子は何と返事をしていゝか躊躇た。相手の親切に氣兼をして、先方の心持を惡くさせまいと云ふ世態染た料簡からではない。小夜子の躊躇たのには、もう少し切ない意味が籠つてゐる。
「先生には矢張京都の方が好くはないですか」と女の躊躇た氣色をどう解釋したか、小野さんは再び問ひ掛けた。
「東京へ來る前は、頻に早く移りたい樣に云つてたんですけれども、來て見ると矢張住み馴れた所が好

いさうで」
「さうですか」と小野さんは大人しく受けたが、心の中では夫程性に合はない所へ何故出て來たのかと、自分の都合を考へて多少馬鹿らしい氣もする。
「あなたは」と聞いて見る。
小夜子は又口籠る。東京が好いか惡いかは、目の前に、西洋の臭のする烟草を燻らして居る青年の心掛一つで極る問題である。船頭が客人に、あなたは船が好きですかと聞いた時、好きも嫌も御前の舵の取り樣一つさと答へなければならない場合がある。責任のある船頭にこんな質問を掛けられる程腹の立つ事はない樣に、自分の好惡を支配する人間から、素知らぬ顏ですきかきらひかを尋ねられるのは恨めしい。小夜子は又口籠る。小野さんは何故斯う豁達せぬのかと思ふ。
胴衣の隱袋から時計を出して見る。
「何所へか御出掛で」と女はすぐ悟つた。
「えゝ、一寸」と旨い具合に渡し込む。
女は又口籠る。男は少し焦慮なる。藤尾が待つてゐるだらう。――しばらくは無言である。
「實は父が……」と小夜子は漸との思で口を切つた。
「はあ、何か御用ですか」
「色々買物がしたいんですが……」
「成程」

「もし、御閑ならば、小野さんに一所に行つて頂て勸工場でゞも買つて來いと申しましたから」

「はあ、さうですか。そりや、殘念な事で。丁度今から急いで出なければならない所があるもんですからね。――ぢや、かう爲ませう。品物の名を聞いて置いて、私が歸りに買つて晩に持つて行きませう」

「夫では御氣の毒で……」

「何構ひません」

父の好意は再び水泡に歸した。小夜子は悄然として歸る。小野さんは、脱いだ帽子を頭へ載せて手早く表へ出る。――同時に逝く春の舞臺は廻る。

紫を辛夷の瓣に洗ふ雨重なりて、花は漸く茶に朽ちかゝる椽に、干す髪の帶を隱して、動かせば春に陽炎が立つ。黒きを外に、風が嬲り、日が嬲り、つい今しがたは黄な蝶がひら〳〵と嬲りに來た。知らぬ顔の藤尾は、内側を向いてゐる。くつきりと肉の締つた横顔は、後ろからさす日の影に、耳を蔽ふて肩に流す鬢の影に、しつとりとして仄である。千筋にぎらついて深き菫を一面に浴せる肩を通り越して、向ふ側はと覗き込むとき、眩ゆき眼はしんと靜まる。夕暮にそれかと思ふ蓼の花の、白きを人は潛むと云つた。髪多く餘る光を椽にこぼす此方の影に、有るか無きかの細した顔のなかを、濃く引き殘したる眉の尾のみが慥かである。眉の下なる切長の黒い眼は何を語るか分らない。藤尾は寄木の小机に肱を持たせて俯向いて居る。

心臓の扉を黄金の鍵に敲いて、青春の盃に戀の血潮を盛る。飲まずと口を背けるものは片輪である。月傾いて山を慕ひ、人老いて妄りに道を説く。若き空には星の亂れ、若き地には花吹雪、一年を重ねて二

十に至つて愛の神は今が盛である。緑濃き黒髪を婆娑とさばいて春風に織る羅を、蜘蛛の圍と五彩の軒に懸けて、自と引き掛る男を待つ。引き掛つた男は夜光の璧を迷宮に尋ねて、紫に輝やく糸の十字萬字に、魂を逆にして、後の世迄の心を亂す。女は只心地よげに見遣る。耶蘇教の牧師は救はれよといふ。臨濟、黄檗は悟れと云ふ。此女は迷へとのみ黑い眸を動かす。迷はぬものは凡て此女の敵である。迷ふて、苦しんで、狂ふて、躍る時、始めて女の御意は目出度い。欄干に纎い手を出してわんと云へといふ。わんと云へば又わんと云へと云ふ。犬は續け様にわんと云ふ。女は片頬に笑を含む。犬はわんと云ひ、わんと云ひながら右へ左へ走る。女は默つてゐる。犬は尾を逆にして狂ふ。女は益得意である。——藤尾の解釋した愛は是である。

石佛に愛なし、色は出來ぬものと始から覺悟を極めて居るからである。愛は愛せらるゝ資格ありとの自信に基いて起る。たゞし愛せらるゝの資格ありと自信して、愛するの資格なきに氣の付かぬものがある。此兩資格は多くの場合に於て反比例する。愛せらるゝの資格を標榜して憚からぬものは、如何なる犧牲をも相手に逼る、相手を愛するの資格を具へざるが爲である。眄たる美目に魂を打ち込むものは必ず食はれる。小野さんは危い。倩たる巧笑にわが命を托するものは必ず人を殺す。藤尾は丙午である。藤尾は己れの爲にする愛を解する。人の爲にする愛の、存在し得るやと考へた事もない。詩趣はある。道義はない。

愛の對象は玩具である。神聖なる玩具である。普通の玩具は弄ばるゝ丈が能である。愛の玩具は互に弄ぶを以て原則とする。藤尾は男を弄ぶ。一毫も男から弄ばるゝ事を許さぬ。藤尾は愛の女王である。成立つものは原則を外れた戀でなければならぬ。愛せらるゝ事を専問にするものと、愛する事のみを念頭

に置くものとが、春風の吹き廻しで、旨い潮の滿干で、はたりと天地の前に行き逢つた時、此變則の愛は成就する。

　我を立てゝ戀をするのは、火事頭巾を被つて、甘酒を飮む樣なものである。調子がわるい。戀は凡てを溶かす。角張つた繪紙鳶も飴細工であるからは必ず流れ出す。我は愛の水に浸して、三日三晩の長きに渉つてもふやける氣色を見せぬ。どこ迄も堅く控へてゐる。我を立てゝ戀をするものは氷砂糖である。

　沙翁は女を評して脆きは汝が名なりと云つた。脆きが中に我を通す昂れる戀は、炊ぎたる飯の柔らかきに御影の砂を振り敷いて、心を許す奧齒をがり〳〵と寒からしむ。噛み締めるものに護謨の彈力がなくては無事には行かぬ。我の强い藤尾は戀をする爲めに我のない小野さんを擇んだ。蜘蛛の圍にかゝる油蟬はかゝつても暴れて行かぬ。時によると網を破つて逃げる事がある。宗近君を捕るは容易である。宗近君を馴らすは藤尾と雖、困難である。我の女は顋で相圖をすれば、すぐ來るものを喜ぶ。小野さんはすぐ來るのみならず、來る時は必ず詩歌の璧を懷に抱いて來る。夢にだもわれを弄ぶの意思なくして、滿腔の誠を捧げてわが玩具となるを榮譽と思ふ。彼を愛するの資格をわれに求むる事は露知らず、ただ愛せらるべき資格を、わが眼に、わが眉に、わが唇に、さてはわが才に認めて只管に渴仰する。藤尾の戀は小野さんでなくてはならぬ。

　唯々として來るべき筈の小野さんが四五日見えぬ。藤尾は薄き粧を日毎にして我の角を鏡の裡に隱してゐた。其五日目の昨夕！驚くうちは樂がある！女は仕合せなものだ！嘲の鈴はいまだに耳の底に鳴つてゐる。小机に肱を持たした儘、燃ゆる黑髮を照る日に打たして身動もせぬ。脊を椽に、顏を影なる居住は、

考へ事に明海を忌む、昔からの掟である。
細なくて十重に括る虜は、捕はれたるを誇顔に、囁けば來り、指せば走るを、他意なしとのみ弄びたるに、奇麗な葉を裏返せば毛虫が居る。思ふ人と併んで姿見に向つた時、大丈夫寫るは君と我のみと、神懸けて疑はぬを、見れば間違た。男は其儘の男に、寄り添ふは見た事もない他人である。驚くうちは樂がある！女は仕合せなものだ！

冴えぬ白さに青味を含む憂顔を、三五の卓を隔てゝ電燈の下に眺めた時は、――わが傍ならでは、若き美くしき女に近付くまじき筈の男が、氣遣し氣に、又親し氣に、此人と半々に洋卓の角を回つて向き合つてゐた時は、――撞木で心臟をすほりと敲かれた樣な氣がした。拍子に胸の血は悉く頰に潮す。紅は云ふ、赫として此所に躍り上がると。

我は猛然として立つ。其儀ならばと云ふ。振り向いてもならぬ。不審を打つてもならぬ。一字の批評も不見識である。有ども無きが如くに裝へ。昂然として水準以下に取り扱へ。――氣が付いた男は面目を失ふに違ない。是が復讐である。

我の女はいざと云ふ間際迄心細い顏をせぬ。恨むと云ふは頼る人に見替られた時に云ふ。侮に對する適當な言葉は怒である。無念と嫉妬を交ぜ合せた怒である。文明の淑女は人を馬鹿にするを第一義とする。人に馬鹿にされるのを死に優る不面目と思ふ。小野さんは慥かに淑女を辱しめた。

愛は信仰より成る。信仰は二つの神を念ずるを許さぬ。愛せらるべき、わが資格に、歸依の頭を下げながら、二心の脊を輕薄の街に向けて、何の社の鈴を鳴らす。午頭、馬骨、祭るは人の勝手である。只小野

さんは勝手な神に戀の御賽錢を投げて、波か字かの辻占を見てはならぬ。小野さんは、此黒い眼から早速に放つ、見えぬ光りに、空かけて織りなした無紋の網に引き掛つた餌食である。外へはやられぬ。神聖なる玩具として生涯大事にせねばならぬ。

神聖とは自分一人が玩具にして、外の人には指もさゝせぬと云ふ意味である。昨夕から小野さんは神聖でなくなつた。それのみか向ふで此方を玩具にしてゐるかも知れぬ。――肱を持たして、俯向く儘の藤尾の眉が活きて來る。

玩具にされたのなら此儘では置かぬ。我は愛を八つ裂にする。面當はいくらもある。貧乏は戀を乾干にする。富貴は戀を贅澤にする。功名は戀を犧牲にする。我は未練な戀を踏み付ける。尖る錐に自分の股を刺し通して、それ見ろと人に示すものは我である。自己が尤も價ありと思ふものを捨てゝ、得意なものは我である。我が立てば、虛榮の市にわが命さへ屠る。逆しまに天國を辭して奈落の暗きに落つるセータンの耳を切る地獄の風は我！　我！　と叫ぶ。――藤尾は俯向ながら下唇を嚙んだ。

逢はぬ四五日は手紙でも出さうかと思つてゐた。昨夕歸つてからすぐ書きかけて見たが、五六行かいた後で何をとずた〳〵に引き裂いた。決して書くまい。頭を下げて先方から折れて出るのを待つてゐる。だまつて居れば屹度出てくる。出てくれば謝罪せる。出て來なければ？我は一寸困つた。手の屆かぬ所に我を立て樣がない。――なに來る、屹度來る、と藤尾は口の中で云ふ。知らぬ小野さんは果して我に引かれつゝある。來つゝある。

よし來ても昨夜の女の事は聞くまい。聞けばあの女を眼中に置く事になる。昨夕食卓で兄と宗近が妙な

合言葉を使つてゐた。あの女と小野の關係を聞えよがしに、自分を焦らす料簡だらう。頭を下げて聞き出しては我が折れる。二人で寄つてたかつて人を馬鹿にする積ならそれでよい。二人が仄した事實の反證を擧げて鼻をあかしてやる。

小野はどうしても詫せなければならぬ。つらく當つて詫せなければならぬ。同時に兄と宗近も詫せなければならぬ。小野は全然わがもので、調戲面にあてつけた二人の惡戲は何の役にも立たなかつた、見ろ此通りと親しい所を見せつけて、鼻をあかして詫せなければならぬ。――藤尾は矛盾した兩面を我の一字で貫かうと、洗髮の後に顏を埋めて考へてゐる。

靜かな椽に足音がする。脊の高い影がのつと現はれた。絣の袷の前が開いて、肌につけた鼠色の毛織の襯衣が、長い三角を逆樣にして胸に映る上に、長い頸がある、長い顏がある。顏の色は蒼い。髮は渦を捲いて、二三ケ月は刈らぬと見える。四五日は櫛を入れないとも思はれる。美くしいのは濃い眉と口髭である。髭の質は極めて黑く、極めて細い。手を入れぬ儘に自然の趣を具へて何となく人柄に見える。腰は汚れた白縮緬を二重に周して、長過ぎる端を、だらりと、猫ぢやらしに、右の袂の下で結んでゐる。裾は固より合はない。引き掛けた法衣の樣にふわついた下から黑足袋が見える。足袋丈は新らしい。嗅げば紺の匂がしさうである。古い頭に新しい足の欽吾は、世を逆樣に歩いて、ふらりと椽側へ出た。

拭き込んだ細かい柾目の板が、雲齋底の影を寫す程に、輕く足音を受けた時に、藤尾の脊中に脊負た黑い髮はさらりと動いた。途端に椽に落ちた紺足袋が女の眼に這入る。足袋の主は見なくても知れてゐる。紺足袋は靜かに歩いて來た。

「藤尾」

聲は後でする。雨戸の溝をすつくと仕切つた栂の柱を脊に、欽吾は留つたらしい。藤尾は默つてゐる。

「又夢か」と欽吾は立つた儘、癖のない洗髪を見下した。

「何です」と云ひなり女は、顔を向け直した。赤棟蛇の首を擡げた時の樣である。黑い髪に陽炎を碎く。

男は、眼さへ動かさない。蒼い顔で見下してゐる。向き直つた女の額を眤と見下してゐる。

「昨夕は面白かつたかい」

女は答へる前に熱い團子をぐいと嚥み下した。

「えゝ」と極めて冷淡な挨拶をする。

「それは好かつた」と落ち付き拂つて云ふ。

女は急いて來る。勝氣な女は受太刀だなと氣が付けば、すぐ急いて來る。相手が落ち付いてゐれば猶急いて來る。汗を流して斬り込むならまだしも、斬り込んで置きながら悠々として柱に倚つて人を見下してゐるのは、酒を飮みつゝ胡坐をかいて追剝をすると同樣、ちと虫がよすぎる。

「驚くうちは樂があるんでせう」

女は逆に寄せ返した。男は動じた樣子もなく依然として上から見下してゐる。意味が通じた氣色さへ見えぬ。欽吾の日記に云ふ。――或人は十錢を以て一圓の十分一と解釋し、或人は十錢を以て一錢の十倍と解釋すと。同じ言葉が人に依つて高くも低くもなる。言葉を用ゐる人の見識次第である。欽吾と藤尾の間には是丈の差がある。段が違ふものが喧嘩をすると妙な現象が起る。

姿勢を變へるさへ嬾うく見へた男は只

「さうさ」と云つたのみである。

「兄さんの樣に學者になると驚きたくつても、驚ろけないから樂がないでせう」

「樂?」と聞いた。樂の意味が分つてるのかと云はぬ許の挨拶と藤尾は思ふ。兄はやがて云ふ。

「樂はさうないさ。其代り安心だ」

「何故」

「樂のないものは自殺する氣遣がない」

藤尾には兄の云ふ事が丸で分らない。蒼い顔は依然として見下してゐる。何故と聞くのは不見識だから默つてゐる。

「御前の樣に樂の多いものは危ないよ」

藤尾は思はず黑髮に波を打たした。屹と見上げる上から兄は分つたかと矢張り見下してゐる。何事とも知らず「埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、斯くありてこそ」と云ふ句を明かに思ひ出す。

「小野は相變らず來るかい」

藤尾の眼は火打石を金槌の先で敲いた樣な火花を射る。構はぬ兄は

「來ないかい」と云ふ。

藤尾はぎり〳〵と齒を嚙んだ。兄は談話を控へた。然し依然として柱に倚つてゐる。

「兄さん」

「何だい」と又見下す。

「あの金時計は、あなたには渡しません」

「おれに渡さなければ誰に渡す」

「當分私が預つて置きます」

「當分御前が預かる？夫もよからう。然しあれは宗近にやる約束をしたから……」

「宗近さんに上げる時には私から上げます」

「御前から」と兄は少し顏を低くして妹の方へ眼を近寄せた。

「私から――えゝ私から――私から誰かに上げます」と寄木の机に凭せた肘を跳ねて、すつくり立ち上がる。紺と、濃い黄と、木賊と海老茶の棒縞が、棒の如く揃つて立ち上がる。裾丈が四色の波のうねりを打つて白足袋の鞐を隱す。

「そうか」

と兄は雲齋底の踵を見せて、向へ行つて仕舞つた。

甲野さんが幽靈の如く現はれて、幽靈の如く消える間に、小野さんは近付いて來る。幾度の降る雨に、土に籠る青味を蒸し返して、濕りながらに暖かき大地を踏んで近付いて來る。磨き上げた山羊の皮に被る埃さへ目に付かぬ程の奇麗な靴を、刻み足に運ばして甲野家の門に近付いて來る。

世を投げ遣りのだらりとした姿の上に、義理に着る羽織の紐を丸打に結んで、細い杖に本來空の手持無沙汰を紛らす甲野さんと、近付いてくる小野さんは塀の側でぱたりと逢つた。自然は對照を好む。

「何所へ」と小野さんは帽に手を懸けて、笑ひながら寄つてくる。

「やあ」と受け應があつた。其儘洋杖は動かなくなる。本來は洋杖さへ手持無沙汰なものである。

「今、一寸行かうと思つて……」

「行き玉へ。藤尾は居る」と甲野さんは素直に相手を通す氣である。小野さんは躊躇する。

「君は何處へ」と又聞き直す。君の妹には用があるが、君はどうなつても構はないと云ふ態度は小野さんの取るに忍びざる所である。

「僕か、僕は何處へ行くか分らない。僕が此杖を引つ張り廻す樣に、何かゞ僕を引つ張り廻す丈だ」

「ハヽヽ大分哲學的だね。――散歩？」と下から覗き込んだ。

「えゝ、まあ……好い天氣だね」

「好い天氣だ。――散歩より博覽會はどうだい」

「博覽會か――博覽會は――昨夕見た」

「昨夕行つたつて？」と小野さんの眼は一時に坐る。

「あゝ」

小野さんはあゝの後から何か出て來るだらうと思つて、控へてゐる。時鳥は一聲で雲に入つたらしい。

「一人で行つたのかい」と今度は此方から聞いて見る。

「いゝや。誘はれたから行つた」

甲野さんには果して連があつた。小野さんはもう少し進んで見なければ濟まない樣になる。

「さうかい、奇麗だつたらう」と先づ繋ぎに出して置いて、其うちに次の問を考へる事にする。所が甲野さんは簡單に

「うん」の一句で答をして仕舞ふ。此方は考のまとまらないうち、すぐ何とか附けなければならぬ。始めは「誰と？」と聞かうとしたが、聞かぬ前にいや「何時頃？」の方が便宜ではあるまいかと思ふ。一層「僕も行つた」と打つて出樣か知ら、さうしたら先方の答次第で萬事が明瞭になる。然しそれも入らぬ事だ。――小野さんは胸の上、咽喉の奧でしばらく押問答をする。其間に甲野さんは細い杖の先を一尺ばかり動かした。杖のあとに動くものは足である。此相圖をちらりと見て取つた小野さんはもう駄目だ、よさうと咽喉の奧で折角の計畫をほごして仕舞ふ。爪の垢程先を制せられても、取り返しを付け樣と意思を働かせない人は、教育の力では翻へす事の出來ぬ宿命論者である。

「まあ行き給へ」と又甲野さんが云ふ。催促される樣な氣持がする。運命が左へと指圖をしたらしく感じた時、後から押すものがあれば、すぐ前へ出る。

「ぢやあ……」と小野さんは帽子をとる。

「さうか、ぢやあ失敬」と細い杖は空間を二尺許小野さんから遠退いた。一歩門へ近寄つた小野さんの靴は同時に一歩杖に牽かれて故へ歸る。運命は無限の空間に甲野さんの杖と小野さんの足を置いて、一尺の間隔を爭はしてゐる。此杖と此靴は人格である。我等の魂は時あつて靴の踵に宿り、時あつて杖の先に潛む。魂を描く事を知らぬ小説家は杖と靴とを描く。

一歩の空間を行き盡した靴は、光る頭を回らして、棄身に細い體を大地に托した杖に問ひかけた。

「藤尾さんも、昨夕一所に行つたのかい」
棒の如く眞直に立ち上がつた杖は答へる。
「あゝ、藤尾も行つた。――ことに因ると今日は下讀が出來てゐないかも知れない」
細い杖は地に着くが如く、又地を離るゝが如く、立つと思へば傾むき、傾むくと思へば立ち、無限の空間を刻んで行く。光る靴は突き込んだ頭に薄い泥を心持わるく被つた儘、遠慮勝に門内の砂利を踏んで玄關に掛ゝる。

小野さんが玄關に掛かると同時に、藤尾は椽の柱に倚りながら、席に返らぬ爪先を、雨戸引く溝の上に翳して、手廣く圍ひ込んだ庭の面を眺めてゐる。藤尾が椽の柱に倚りかゝる餘程前から、謎の女は立て切つた一間のうちで、鳴る鐵瓶を相手に、行く春の行き盡さぬ間を、根限り考へてゐる。

欽吾はわが腹を痛めぬ子である。――謎の女の考は、凡て此一句から出立する。此一句を布衍すると謎の女の人生觀になる。人生觀を增補すると宇宙觀が出來る。謎の女は每日鐵瓶の音を聞いては、六疊敷の人生觀を作り宇宙觀を作つてゐる。人生觀を作り宇宙觀を作るものは閑のある人に限る。謎の女は絹布團の上で其日〳〵を送る果報な身分である。

居住は心を正す。端然と戀に焦れ給ふ雛は、虫が喰ふて鼻が缺けても上品である。謎の女はしとやかに坐る。六疊敷の人生觀も亦しとやかでなくてはならぬ。

老いて夫なきは心細い。かゝるべき子なきは猶更心細い。かゝる子が他人なるは心細い上に忌はしい。かゝるべき子を持ちながら、他人にかゝらねばならぬ掟は忌はしいのみか情けない。謎の女は自を情な

い不幸の人と信じてゐる。

　他人でも合はぬとは限らぬ。醤油と味淋は昔から交つてゐる。然し酒と烟草を一所に呑めば咳が出る。親の器の方圓に應じて、盛らるゝ水の調子を合はせる欽吾ではない。日を經れば日を重ねて隔りの關が出來る。此頃は江戸の敵に長崎で巡り逢つた樣な心持がする。學問は立身出世の道具である。親の機嫌に逆つて、師走正月の拍子をはづす爲の修業ではあるまい。金を掛けてわざ〳〵變人になつて、學校を出ると世間に通用しなくなるのは不名譽である。外聞がわるい。嗣子としては不都合と思ふ。こんなものに死水を取つて貰ふ氣もないし、又取る程の働のある筈がない。

　幸と藤尾がゐる。冬を凌ぐ女竹の、吹き寄せて夜を積る粉雪をぴんと撥ねる力もある。十日を街頭に集むる春の姿に、蝶を縫ひ花を浮かした派出な衣裳も着せてある。わが子として押し出す世間は廣い。晴れた天下を、晴れやかに練り行くを、迷ふは人の隨意である。三國一の婿と名乘る誰彼を、迷はしてこそ、焦らしてこそ、育て上げた母の面目は揚る。海鼠の氷つた樣な他人にかゝるよりは、羨しがられて華麗に暮れては明る寶の娘の月日に添ふて墓に入るのが順路である。

　蘭は幽谷に生じ、劍は烈士に歸す。美くしき娘には、名ある聟を取らねばならぬ。申込は澤山あるが、娘の氣に入らぬものは、自分の氣に入らぬものは、役に立たぬ。指の太さに合はぬ指輪は貰つても捨てる許である。大き過ぎても小さ過ぎても聟には出來ぬ。從つて聟は今日迄出來ずに居た。燦として群がるものゝうちに只一人小野さんが殘つてゐる。小野さんは大變學問の出來る人だと云ふ。恩賜の時計を頂いたと云ふ。もう少し立つと博士になると云ふ。のみならず愛嬌があつて親切である。上品で調子がいゝ。藤

尾の聟にして恥づかしくはあるまい。世話になつても心持がよからう。

小野さんは中分のない聟である。只財産のないのが缺點である。然し聟の財産で世話になるのは、如何に氣に入つた男でも幅が利かぬ。無一物の某を入れて、大人しく嫁姑を大事にさせるのが、藤尾の都合にもなる、自分の爲でもある。一つ困る事は其財産である。夫が外國で死んだ四ヶ月後の今日は當然欽吾の所有に歸して仕舞つた。魂膽はこゝから始まる。

欽吾は一文の財産も入らぬと云ふ。家も藤尾に遣ると云ふ。義理の着物を脫いで便利の赤裸になれるものなら、降つて湧いた溫泉へ得たり賢こしと飛び込む氣にもなる。然し體裁に着る衣裳はさう無雜作に剝ぎ取れるものではない。降りさうだから傘をやらうと投げ出した時、二本あれば遠慮をせぬが世間であるが、見す〱吳れる人が濡れるのを構はずに我儘な手を出すのは人の思はくもある。そこに謎が出來る。吳れると云ふのは本氣で云ふ噓で、取らぬ顏付を見せるのも隣近所への申譯に過ぎない。欽吾の財産を欽吾の方から無理に藤尾に讓るのを、厭々ながら受取つた顏付に、文明の手前を繕はねばならぬ。そこで謎が解ける。吳れると云ふのを、吳れたくない意味と解いて、貰ふ料簡で貰はないと主張するのが謎の女である。六疊敷の人生觀は頗る複雜である。

謎の女は問題の解決に苦しんでとう〱六疊敷を出た。貰ひたいものを飽く迄貰はないと主張して、しかも一日も早く貰つて仕舞ふ方法は微分積分でも容易に發見の出來ぬ方法である。謎の女が苦し紛れの屈托顏に六疊敷を出たのは、焦慮いが高じて、布團の上に坐たゝまれないからである。出て見ると春の日は存外長閑で、平氣に鬢を嬲る溫風はいやに人を馬鹿にする。謎の女は愈氣色が惡くなつた。

椽を左に突き當れば西洋館で、應接間につゞく一部屋は欽吾が書齋に使つてゐる。右は鍵の手に折れて、折れたはづれの南に突き出した六疊が藤尾の居間となる。

菱餅の底を渡る氣で眞直な向ふ角を見ると藤尾が立つてゐる。濡色に捌いた濃き鬢のあたりを、栂の柱に壓し付けて、斜めに持たした艶な姿の中程に、帶深く差し込んだ手頸丈が白く見える。萩に伏し薄に靡く故里を流離人はこんな風に眺める事がある。故里を離れぬ藤尾は何を眺めて居るか分らない。母は椽を曲つて近寄つた。

「何を考へてるの」

「おや、御母さん」と斜めな身體を柱から離す。振り返つた眼付には愁の影さへもない。我の女と謎の女は互に顔を見合した。實の親子である。

「どうかしたのかい」と謎が云ふ。

「何故」と我が聞き返す。

「だつて、何だか考へ込んでるからさ」

「何にも考へて居やしません。庭の景色を見て居たんです」

「さう」と謎は意味のある顔付をした。

「池の緋鯉が跳ねますよ」と我は飽く迄も主張する。成程濁つた水のなかで、ぼちやりと云ふ音がした。

「おや〳〵。――御母さんの部屋では少しも聞えないよ」

聞えないんではない。謎で夢中になつてゐたのである。

「さう」と今度は我の方で意味のある顔付をする。世は樣々である。

「おや、もう蓮の葉が出たね」

「えゝ。まだ氣が付かなかつたの」

「いゝえ。今始て」と謎が云ふ。謎ばかり考へてゐるものは迂濶である。欽吾と藤尾の事を引き拔くと頭は眞空になる。蓮の葉どころではない。

蓮の葉が出たあとには蓮の花が咲く。蓮の花が咲いたあとには蚊帳を疊んで藏へ入れる。夫から蟋蟀が鳴く。時雨れる。木枯が吹く。……謎の女が謎の解決に苦しんでゐるうちに世の中は變つて仕舞ふ。それでも謎の女は一つ所に坐つて謎を解く積でゐる。謎の女は世の中で自分程賢いものはないと思つてゐる。迂濶だ抔とは夢にも考へない。

緋鯉がぽちやりと又跳ねる。薄濁のする水に、泥は沈んで、上皮丈は輕く溫む底から、朦朧と朱い影が靜かな土を動かして、浮いて來る。滑らかな波にきらりと射す日影を崩さぬ程に、尾を搖つて居るかと思ふと、思ひ切つてぽんと水を敲いて飛びあがる。一面に揚る泥の濃きうちに、幽かなる朱いものが影を潛めて行く。溫い水を春に押し分けて去る痕は、一筋のうねりを見せて、去年の蘆を風なきに嬲る。甲野さんの日記には鳥入雲無迹、魚行水有紋と云ふ一聯が律にも絶句にもならず、其儘楷書でかいてある。春光は天地を蔽はず、任意に人の心を悦ばしむ。只謎の女には幸せぬ。

「何だつて、あんなに跳ねるんだらうね」と聞いた。謎の女が謎を考へる如く、緋鯉も無暗に跳ねるのであらう。醉狂と云へば双方とも醉狂である。藤尾は何とも答へなかつた。

浮き立ての蓮の葉を稱して支那の詩人は靑錢を疊むと云つた。錢の樣な重い感じは無論ない。然し水際に始めて昨日、今日の嫩い命を托して、娑婆の風に薄い顏を曝すうちは錢の如く細かである。色も全く靑いとは云へぬ。美濃紙の薄きに過ぎて、重苦しと碧を厭ふ柔らかき茶に、日毎に冒す綠靑を交ぜた葉の上には、鯉の躍つた、春の名殘が、吹けば飛ぶ、置けば崩れぬ珠となつて轉がつてゐる。――答をせぬ藤尾は只眼前の景色を眺める。鯉は又躍つた。

母は無意味に池の上を眸て居たが、やがて氣を換へて

「近頃、小野さんは來ない樣だね。どうかしたのかい」と聞いて見る。

藤尾は屹と向き直つた。

「どうしたんですか」と凝と母を見た上で、澄して又庭の方へ眸を反らす。母はおやと思ふ。先の鯉が薄赤く浮葉の下を通る。葉は氣輕に動く。

「來ないなら、何とか云つて來さうなもんだね。病氣でもしてゐるんぢやないか」

「病氣だつて?」と藤尾の聲は疳走る程に高かつた。

「いゝえさ。病氣ぢやないかと聞くのさ」

「病氣なもんですか」

淸水の舞臺から飛び降りた樣な語勢は鼻の先でふゝんと留つた。母は又おやと思ふ。

「あの人はいつ博士になるんだらうね」

「何時ですか」と餘所事の樣に云ふ。

「御前――あの人と喧嘩でもしたのかい」
「小野さんに喧嘩が出來るもんですか」
「さうさ、只教へて貰やしまいし、相當の禮をしてゐるんだから」
謎の女には是より以上の解釋は出來ないのである。藤尾は返事を見合せた。
昨夕の事を打ち明けて是々であつたと話して仕舞へば夫迄である。母は無論躍起になつて、此方に同情するに違ない。打ち明けて都合が惡いとは露思はぬが、進んで同情を求めるのは、饑に逼つて、知らぬ人の門口に、一錢二錢の憐を乞ふのと大した相違はない。同情は我の敵である。昨日迄舞臺に躍る操人形の樣に、物云ふも懶きわが小指の先で、意の如く立たしたり、寐かしたり、果は笑はしたり、焦らしたり、いゝ、どぎまぎさして、面白く興じて居た手柄顏を、母も天晴れと、うごめかす鼻の先に、得意の見榮をぴくつかせてゐたものを、――あれは、ほんの表向で、内實の昨夕を見たら、招く薄は向へ靡く。知らぬ顏の美しい人と、睦じく御茶を飲んで居たと、心外な蓋をとれば、母の手前で器量が下がる。我が承知が出來ぬと云ふ。外れた鷹なら見限をつけてもう入らぬと話す。あとを跟けて鼻を鳴らさぬ樣な犬ならば打ち遣つた後で、捨てゝ來たと公言する。小野さんの不心得はそこ迄は進んで居らぬ。放つて置けば歸るかも知れない。いや歸るに違ないと、小夜子と自分を比較した我が證言して呉れる。歸つて來た時に辛い目に逢せる。辛い目に逢はせた後で、立たしたり、寐かしたりする。笑はしたり、焦らしたり、いゝ、どぎまぎさしたりする。さうして、面白さうな手柄顏を、母に見せれば母への面目は立つ。兄と一に見せれば、兩人への意趣返しになる。――夫迄は話すまい。藤尾は返事を見合せた。母は自分の誤解を悟る機會を永久に失つた。

「先き欽吾が來やしないか」と母は又質問を掛ける。鯉は躍る、蓮は芽を吹く、芝生は次第に青くなる。辛夷は朽ちた。謎の女はそんな事に頓着はない。日となく夜となく欽吾の幽靈で苦しめられてゐる。書齋に居れば何をしてゐるかと思ひ、考へて居れば何を考へてるるかと思ひ、藤尾の所へ來れば、どんな話をしに來たのかと思ふ。欽吾は腹を痛めぬ子である。腹を痛めぬ子に油斷は出來ぬ。是が謎の女の先天的に教はつた大眞理である。此眞理を發見すると共に謎の女は神經衰弱に罹つた。神經衰弱は文明の流行病である。自分の神經衰弱を濫用すると、わが子迄も神經衰弱にして仕舞ふ。さうしてあれの病氣にも困り切りますと云ふ。感染したものこそいゝ迷惑である。困り切るのは何方の云ひ分か分らない。たゞ謎の女の方では、飽く迄も欽吾に困り切つてゐる。

「さつき欽吾が來やしないか」と云ふ。

「來たわ」

「どうだい樣子は」

「矢つ張り相變らずですわ」

「あれにも、本當に……」で薄く八の字を寄せたが、

「困り者だね」と切つた時、八の字は見る〳〵深くなつた。

「何でも奥歯に物の挾つた樣な皮肉ばかり云ふんですよ」

「皮肉なら好いけれども、時々氣の知れない囈語を云ふにや困るぢやないか。何でも此頃は樣子が少し變だよ」

「あれが哲學なんでせう」

「哲學だか何だか知らないけれども。――先き何か云つたかい」

「えゝ又時計の事を……」

「返せつて云ふのかい。一に遣らうが遣るまいが餘計な御世話ぢやないか」

「今どつかへ出掛たでせう」

「どこへ行つたんだらう」

「屹度宗近へ行つたんですよ」

對話が此所迄進んだ時、小野さんが入らつしやいましたと下女が兩手をつかへる。母は自分の部屋へ引き取つた。

椽側を曲つて母の影が障子のうちに消えたとき、小野さんは内玄關の方から、茶の間の横を通つて、次の六疊を、廊下へ廻らず拔けて來る。

磬を打つて入室相見の時、足音を聞いた丈で、公案の工夫が出來たか、出來ないか、手に取る樣にわかるものぢやと云つた和尚がある。氣の引けるときは歩き方にも現はれる。獸にさへ居所のあゆみと云ふ諺がある。參禪の衲子に限つた現象とは認められぬ。應用は才人小野さんの上にも利く。小野さんは常から世の中に氣兼をし過ぎる。今日は一入變である。落人は戰ぐ芒に安からず、小野さんは輕く踏む青疊に、そと落す靴足袋の黑き爪先に憚りの氣を置いて這入つて來た。

一睛を暗所に點ぜす、藤尾は眼を上げなかつた。只疊に落す靴足袋の先をちらりと見た丈ではゝあと悟

つた。小野さんは座に着かぬ先から、もう舐められてゐる。
「今日は……」と座りながら笑ひかける。
「入らつしやい」と眞面目な顏をして、始めて相手をまともに見る。見られた小野さんの眸はぐらついた。
「御無沙汰をしました」とすぐ言譯を添へる。
「いゝえ」と女は遮つた。但し夫限である。
男は出鼻を挫かれた氣持で、何處から出直さうかと考へる。座敷は例の如く靜である。
「大分暖かになりました」
「えゝ」
座敷のなかに此二句を點じた丈で、後は故の如く靜になる。所へ鯉がぽちやりと又跳る。池は東側で、小野さんの脊中に當る。小野さんは一寸振り向いて鯉がと云はうとして、女の方を見ると、相手の眼は南側の辛夷に注いでゐる。――壺の如く長い瓣から、濃い紫が春を追ふて拔け出した後は、殘骸に空しき茶の汚染を皺立てゝ、あるものはほきりと絕えた萼のみあらはである。
鯉がと云はうとした小野さんは又廢めた。女の顏は前よりも寄り付けない。――女は御無沙汰をした男から、御無沙汰をした譯を云はせる氣で、只いゝえと受けた。男は仕損と心得て、大分暖になりましたと氣を換へて見たが、夫でも驗が見えぬので、鯉がの方へ移らうとしたのである。男は踏み留まれる所迄滑つて行く氣で、氣を揉んでゐるのに、女は依然として故の所に坐つて動かない。知らぬ小野さんは又考

へなければならぬ。

四五日來なかつたのが氣に入らないなら、どうでもなる。昨夕博覽會で見付かつたなら少し面倒である。それにしても辯解の道はいくらでも付く。然し藤尾が果して自分と小夜子を、ぞろ〳〵動く黑い影の絶間なく入れ代るうちで認めたらうか。認められたら夫迄である。認められないのに、此方から思ひ切つて持ち出すのは、肌を脱いで汚い腫物を知らぬ人の鼻の前に臭はせると同じ事になる。

若い女と連れ立つて路を行くは當世である。只歩く丈なら名譽にならうとも瑕疵とは云はせぬ。今宵限の朧だものと、卽興にそゝのかされて、他生の緣の袖と袂を、今宵限り擦り合せて、あとは知らぬ世の、黑い波のざわつく中に、西東首を埋めて、あかの他人と化けて仕舞ふ。夫ならば差支ない。進んで斯うと話もする。殘念な事には、小夜子と自分は、碁盤の上に、譯もなく併べられた二つの石の引つ付く樣な淺い關係ではない。此方から逃げ延びた五年の永き年月を、向では離れじと、日の間とも夜の間ともなく、繰り出す糸の、誠は赤き緣の色に、細くとも是迄繫ぎ留められた仲である。

只の女と云ひ切れば濟まぬ事もない。其代り、人も嫌ひ自分も好かぬ嘘となる。嘘は河豚汁である。其場限りで祟がなければ是程旨いものはない。然し中毒たが最後苦しい血も吐かねばならぬ。其上嘘は實を手繰寄せる。默つて居れば悟られずに、行き拔ける便もあるに、隱さうとする身繕ひ、名繕ひ、偖は素性繕ひに、疑の眸の征矢はてつきり的と集り易い。繕は綻びるを持前とする。綻びた下から醜い正體が、それ見た事かと、現はれた時こそ、身の鏽は生涯洗はれない。――小野さんは是程の分別を持つた、利害の關係には暗からぬ利巧者である。西東隔たる京を縫ふて、五年の長き思の糸に括られてゐるわが情實は、目の前

にすねて坐つた當人には話し度ない。少なくとも新らしい血に通ふ此頃の戀の脈が、調子を合せて、天下晴れての夫婦ぞと、二人の手頸に暖たかく打つ迄は話し度ない。此情實を話すまいとすると、只の女と不知を切る當座の嘘は吐たくない。嘘を吐くまいとすると、小夜子の事は名前さへも打ち明けたくない。――
――小野さんはしきりに藤尾の樣子を眺めてゐる。

「昨夕博覽會へ御出に……」と迄思ひ切つた小野さんは、御出になりましたかにしやうか、御出になつたさうですねにしやうかの所で一寸ごとついた。

「えゝ行きました」

迷つてゐる男の鼻面を掠めて、黒い影が颯と橫切つて過ぎた。男はあつと思ふ間に先を越されて仕舞ふ。仕方がないから、

「奇麗でしたらう」とつける。奇麗でしたらうは詩人として餘りに平凡である。口に出した當人も、是はひどいと自覺した。

「奇麗でした」と女は明確受け留める。後から

「人間も大分奇麗でした」と浴びせる樣に付け加へた。小野さんは思はず藤尾の顏を見る。少し見當がつき兼ねるので

「さうでしたか」と云つた。當り障りのない答は大抵の場合に於て愚な答である。弱身のある時は、如何なる詩人も愚を以て自ら甘んずる。

「奇麗な人間も大分見ましたよ」と藤尾は鋭どく繰り返した。何となく物騷な句である。なんだか無事

に通り拔けられさうにない。男は仕方なしに口を緘んだ。女も留つた儘動かない。まだ白狀しない氣かと云ふ眼付をして小野さんを見てゐる。宗盛と云ふ人は刀を突き付けられてさへ腹を切らなかつたと云ふ。利害を重んずる文明の民が、さう輕卒に自分の損になる事を陳述する譯がない。小野さんはもう少し敵の動靜を審にする必要がある。

「誰か御伴がありましたか」と何氣なく聽いて見る。

今度は女の返事がない。どこ迄も一つ關所を守つてゐる。

「今、門の所で甲野さんに逢つたら、甲野さんも一所に行つたさうですね」

「それ程知つて入らつしやる癖に、何で御尋ねになるの」と女はつんと拗ねた。

「いえ、別に御伴でもあつたのかと思つて」と小野さんは、うまく逃げる。

「兄の外にですか」

「えゝ」

「兄に聞いて御覽になればいゝのに」

機嫌は依然として惡いが、うまくすると、どうか、かうか渦の中を漕ぎ拔けられさうだ。向ふの言葉にぶら下がつて、往つたり來たりするうちに、いつの間にやら平地へ出る事がある。小野さんは今迄毎度此手で成功してゐる。

「甲野君に聞かうと思つたんですけれども、早く上がらうとして急いだもんですから」

「ホヽヽ」と突然藤尾は高く笑つた。男はぎよつとする。其隙に

「そんなに忙しいものが、何で四五日無屆缺席をしたんです」と飛んで來た。
「いえ、四五日大變忙しくつて、どうしても來られなかつたんです」
「晝間も」と女は肩を後へ引く。長い髮が一筋毎に活きてゐる樣に動く。
「え〻?」と變な顏をする。
「晝間もそんなに忙しいんですか」
「晝間つて……」
「ホ、、、まだ分らないんですか」と今度は又庭迄響く程に甲高く笑ふ。女は自由自在に笑ふ事が出來る。男は茫然としてゐる。
「小野さん、晝間もイルミネーションがありますか」と云つて、兩手を大人しく膝の上に重ねた。燦たる金剛石がぎらりと痛く、小野さんの眼に飛び込んで來る。小野さんは竹箆でぴしやりと頬邊を叩かれた。同時に頭の底で見られたと云ふ音がする。
「あんまり、勉强なさると却つて金時計が取れませんよ」と女は澄した顏で疊み掛ける。男の陣立は總崩となる。
「實は一週間前に京都から故の先生が出て來たものですから……」
「おや、さう、些とも知らなかつたわ。夫ぢや御忙い譯ね。さうですか。さうとも知らずに、飛んだ失禮を申しまして」と嘯きながら頭を低れた。綠の髮が又動く。
「京都に居つた時、大變世話になつたものですから……」

「だから、いゝぢやありませんか、大事にして上げたら。――私はね。昨夕兄と一さんと糸子さんと一所に、イルミネーションを兄に行つたんですよ」

「あゝ、さうですか」

「えゝ、さうして、あの池の邊に龜屋の出店があるでせう。――ねえ知つて入らつしやるでせう、小野さん」

「えゝ――知つて――居ます」

「知つて入らつしやる。――入らつしやるでせう。あすこで皆して御茶を飲んだんです」

男は席を立ちたくなつた。女はわざと落ち付いた風を、飽く迄も粧ふ。

「大變旨い御茶でした事。あなた、まだ御這入になつた事はないの」

小野さんは默つてゐる。

「まだ御這入にならないなら、今度是非其京都の先生を御案内なさい。私も又一さんに連れて行つて貰ふ積ですから」

藤尾は一さんと云ふ名前を妙に響かした。

春の影は傾く。永き日は、永くとも二人の專有ではない。床に飾つたマジヨリカの置時計が絶えざる對話を此一句にちんと切つた。三十分程してから小野さんは門外へ出る。其夜の夢に藤尾は、鷙くうちは樂がある！女は仕合なものだ！と云ふ嘲の鈴を聽かなかつた。

十三

太い角柱を二本立てゝ門と云ふ。扉はあるかないか分らない。夜中郵便と書いて板塀に穴があいてゐる所を見ると夜は締りをするらしい。正面に芝生を土饅頭に盛り上げて市を遮ぎる翠を傘と張る松を格の如く植ゑる。松を廻れば、弧線を描いて、頭の上に合ふ玄關の廂に、浮彫の波が見える。障子は明け放つた儘である。呑氣な白襖に舞樂の面程な草體を、大雅堂流の筆勢で、無殘に書き散らして、座敷との仕切とする。

甲野さんは玄關を右に切れて、下駄箱の透いて見える格子をそろりと明けた。細い杖の先で合土の上をこち〳〵叩いて立つてゐる。賴むとも何とも云はぬ。無論應ずるものはない。屋敷のなかは人の住む氣合も見えぬ程にしんとしてゐる。門前を通る車の方が却つて賑やかに聞える。細い杖の先がこち〳〵鳴る。

やがて靜かなうちで、すうと唐紙が明く音がする。淸や〳〵と下女を呼ぶ。下女は居ないらしい。足音は勝手の方に近付いて來た。杖の先はこち〳〵と云ふ。足音は勝手から内玄關の方へ拔け出した。障子があく。糸子と甲野さんは顏を見合せて立つた。

下女も居り書生も置く身は、氣輕く構へても滅多に取次に出る事はない。出樣と思ふ間に、立てかけた膝を卸して、一針でも二針でも縫糸が先へ出るが常である。重たき琵琶の抱き心地と云ふ永い晝が、永きに堪へず崩れんとするを、鳴く鼠にうつとりと夢を支へて、淸を呼べば、淸は裏へでも行つたらしい。かららりとした勝手には茶釜許が靜かに光つて居る。黑田さんは例のごとく、書生部屋で、坊主頭を腕の中に

埋めて、机の上に猫の様に寐て居るだらう。立ち退いた空屋敷とも思はるゝなかに、内玄關でこち〳〵音がする。はてなと何氣なく障子を明けると――廣い世界にたつた一人の甲野さんが立つてゐる。格子から差す戶外の日影を脊に受けて、薄暗く高い身を、三和土の眞中に動かしもせず、頻りに杖を鳴らしてゐる。

「あら」

同時に杖の音はとまる。甲野さんは帽の廂の下から女の顏を久し振の樣に見た。女は急に眼をはづして、細い杖の先を眺める。杖の先から熱いものが上つて、顏がほうとほてる。油を拔いて、爲すが儘にふくらました髮を、落すが如く前に、糸子は腰を折つた。

「御出?」と甲野さんは言葉の尻を上げて簡單に聞く。

「今一寸」と答へたのみで、苦のない二重瞼に愛嬌の波が寄つた。

「御留守ですか。――阿爺さんは」

「父は謠の會で朝から出ました」

「さう」と男は長い體軀を、半分𢌞して、橫顏を糸子の方へ向けた。

「まあ、御這入、――兄はもう歸りませう」

「難有う」と甲野さんは壁に物を云ふ。

「どうぞ」と誘ひ込む樣に片足を後へ引いた。着物はあらい縞の銘仙である。

「難有う」

「どうぞ」

「どこへ行つたんです」と甲野さんは壁に向けた顏を、少し女の方へ振り直す。後から掠めて來る日影に、蒼い頰が、氣の所爲か、昨日より少し痩けた樣だ。

「散歩でせう」と女は首を傾けて云ふ。

「私も今散歩した歸りだ。大分歩いて疲れて仕舞つて……」

「ぢや、少し上がつて休んで居らつしやい。もう歸る時分ですから」

話は少しづゝ延びる。話の延びるのは氣の延びた證據である。甲野さんは粗柾の俎下駄を脱いで座敷へ上がる。

長押作りに重い釘隱を打つて、動かぬ春の床には、常信の雲龍の圖を奧深く掛けてある。薄黑く墨を流した絹の色を、角に取り卷く紋緞子の藍に、寂びたる時代は、象牙の軸さへも落ち付いてゐる。唐獅子を青磁に鑄る、口許なる香爐を、どつかと据ゑた尺餘の卓は、木理に光澤ある膏を吹いて、茶を紫に、紫を黑に渡る、胡麻濃やかな紫檀である。

椽に遲日多し、世を只管に寒がる人は、端近く絣の前を合せる。亂菊に襟晴れがましきを豐なる顋に壓し付けて、面と向ふ障子の明なるを眩く思ふ女は入口に控へる。八疊の座敷は眇たる二人を離れ離れに容れて廣過ぎる。間は六尺もある。

忽然として黑田さんが現れた。小倉の襞を飽く迄潰した袴の裾から赭黑い足をによき〳〵と運ばして、茶を持つて來る。烟草盆を持つて來る。菓子鉢を持つて來る。六尺の距離は格の如く埋められて、主客の位地は辛うじて、接待の道具で繫がれる。忽然として午睡の夢から起きた黑田さんは器械的に緣の糸を二

人の間に渡した儘、朦朧たる精神を毬栗頭の中に封じ込めて、再び書生部屋へ引き下がる。あとは故の空屋敷となる。

「昨夕は、どうでした。疲れましたらう」

「いゝえ」

「疲れない？私より丈夫だね」と甲野さんは少し笑ひ掛けた。

「だつて、往復共電車ですもの」

「電車は疲れるもんですがね」

「どうして」

「あの人で。あの人で疲れます。さうでも無いですか」

糸子は丸い頬に片靨を見せた許である。返事はしなかつた。

「面白かつたですか」と甲野さんが聞く。

「えゝ」

「何が面白かつたですか。イルミネーションがですか」

「えゝ、イルミネーションも面白かつたけれども……」

「イルミネーションの外に何か面白いものが有つたんですか」

「えゝ」

「何が」

「でも可笑いわ」と首を傾けて愛らしく笑つてゐる。要領を得ぬ甲野さんも何となく笑ひたくなる。
「何ですか其面白かつたものは」
「云つて見ませうか」
「云つて御覧なさい」
「あの、皆して御茶を飲んだでせう」
「えゝ、あの御茶が面白かつたんですか」
「御茶ぢやないんです。御茶ぢやないんですけれどもね」
「あゝ」
「あの時小野さんが居らしつたでせう」
「えゝ、居ました」
「美しい方を連れて居らしつたでせう」
「美しい？さう。若い人と一所の様でしたね」
「あの方を御存じでせう」
「いゝえ、知らない」
「あら。だつて兄がさう云ひましたわ」
「そりや顔を知つてると云ふ意味なんでせう。話をした事は一遍もありません」
「でも知つてゐらつしやるでせう」

「ハ、、、。どうしても知つてなければならないんですか。實は逢つた事ほ何遍もあります」
「だから、さう云つたんですわ」
「だから何と」
「面白かつたつて」
「何故」
「何故でも」
二重瞼に寄る波は、寄りては崩れ、崩れては寄り、黒い眸を、見よがしに弄ぶ。繁き若葉を洩る日影の、錯落と大地に鋪くを、風は枝頭を搖かして、ちらつく苔の定かならぬ樣である。甲野さんは糸子の顏を見た儘、何故の說明を求めなかつた。糸子も進んで何故の譯を話さなかつた。何故は愛嬌のうちに溺れて、要領を得る前に、行方を隱して仕舞つた。
塗り立てゝ瓢箪形の池淺く、焙烙に熬る玉子の黃味に、朝夕を樂しく暮す金魚の世は、尾を振り立てゝ藻に潛るとも、起つ波に身を攫るゝ憂はない。鳴戶を拔ける鯛の骨は潮に揉まれて年々に硬くなる。荒海の下は地獄へ底拔けの、行くも歸るも徒事では通れない。只廣海の荒魚も、三つ尾の丸つ子も、同じ箱に入れられゝば、水族館に隣合の友となる。隔たりの關は見えぬが、仕切る硝子は透き通りながら、突き拔け樣とすれば鼻頭を痛める許である。海を知らぬ糸子に、海の話は出來ぬ。甲野さんはしばらく瓢箪形に應對をしてゐる。
「あの女はそんなに美人でせうかね」

「私は美　いと思ひますわ」

「さうかな」と甲野さんは椽側の方を見た。野面の御影に、乾かぬ露が降りて、いつ迄も濕とりと眺められる徑二尺の、縁を擇んで、鷺草とも菫とも片付かぬ花が、數を乏しく、行く春を偸んで、ひそかに咲いて居る。

「美しい花が咲いて居る」

「何處に」

糸子の目には正面の赤松と根方にあしらつた熊笹が見えるのみである。

「何處に」と暖い顎を延ばして向を眺める。

「あすこに。――其所からは見えない」

糸子は少し腰を上げた。長い袖をふら付かせながら、二三歩膝頭で椽に近く擦り寄つて來る。二人の距離が鼻の先に逼ると共に微かな花は見えた。

「あら」と女は留る。

「奇麗でせう」

「えゝ」

「知らなかつたんですか」

「いゝえ、些とも」

「あんまり小さいから氣が付かない。何時咲いて、何時消えるか分らない」

「矢つ張桃や櫻の力が奇麗でいゝのね」
甲野さんは返事をせずに、只口のうちで
「憐れな花だ」と云つた。糸子は默つてゐる。
「昨夜の女の樣な花だ」と甲野さんは重ねた。
「どうして」と女は不審さうに聞く。男は長い眼を翻へして凝と女の顏を見てゐたが、やがて、
「あなたは氣樂でいゝ」と眞面目に云ふ。
「さうでせうか」と眞面目に答へる。
賞められたのか、腐されたのか分らない。氣樂か氣樂でないか知らない。氣樂がいゝものか、わるいものか解し難い。只甲野さんを信じてゐる。信じてゐる人が眞面目に云ふから、眞面目にさうでせうかと云より外に道はない。
文は人の目を奪ふ。巧は人の目を掠める。質は人の目を明かにする。さうでせうかを聞いた時、甲野さんは何となく難有い心持がした。直下に人の魂を見るとき、哲學者は理解の頭を下げて、無念とも何とも思はぬ。
「いゝですよ。それでいゝ。それで無くつちや駄目だ。いつ迄もそれでなくつちや駄目だ」
糸子は美くしい齒を露はした。
「どうせ斯うですわ。何時迄立つたつて、斯うですわ」
「さうは行かない」

「だつて、是が生れ付なんだから、何時迄立つたつて、變り樣がないわ」
「變ります。――阿爺と兄さんの傍を離れると變ります」
「どうしてでせうか」
「離れると、もつと利口に變ります」
「私もつと利口になりたいと思つてるんですわ。利口に變れば變る方がいゝんでせう。どうかして藤尾さんの樣になりたいと思ふんですけれども、こんな馬鹿だものだから……」
甲野さんは世に氣の毒な顏をして糸子のあどけない口元を見てゐる。
「藤尾がそんなに羨しいんですか」
「えゝ、本當に羨ましいわ」
「糸子さん」と男は突然優しい調子になつた。
「なに」と糸子は打ち解けてゐる。
「藤尾の樣な女は今の世に有過ぎて困るんですよ。氣を付けないと危ない」
女は依然として、肉餘る瞼を二重に、愛嬌の露を大きな眸の上に滴してゐるのみである。危ないといふ氣色は影さへ見えぬ。
「藤尾が一人出ると昨夕の樣な女を五人殺します」
鮮かな眸に滴るものはぱつと散つた。表情は咄嗟に變る。殺すと云ふ言葉は左程に怖しい。――其他の意味は無論分らぬ。

「あなたは夫で結構だ。動くと變ります。動いてはいけない」
「動くと？」
「えゝ、戀をすると變ります」
女は咽喉から飛び出しさうなものを、ぐつと嚥み下した。顏は眞赤になる。
「嫁に行くと變ります」
女は俯向た。
「夫で結構だ。嫁に行くのは勿體ない」
可愛らしい二重瞼がつゞけ樣に二三度またたいた。結んだ口元をちよろ／＼と雨龍の影が渡る。鷺草とも菫とも片付かぬ花は依然として春を乏しく咲いてゐる。

十四

電車が赤い札を卸して、ぶうと鳴つて來る。入れ代つて後から町内の風を鐵軌の上に追ひ捲くつて去る。按摩が隙を見計つて恐る／＼向側へ渡る。茶屋の小僧が臼を挽きながら笑ふ。旗振の着るヘル地の織目は、埃が一杯溜つて、黄色にぼけてゐる。古本屋から洋服が出て來る。鳥打帽が寄席の前に立つてゐる。今晩の語り物が塗板に白くかいてある。空は針線だらけである。一羽の鳶も見えぬ。上の靜なる丈に下は頗る雜駁な世界である。
「おい／＼」と大きな聲で後から呼ぶ。

二十四五の夫人が一寸振り向いた儘行く。

「おい」

今度は印絆天が向いた。

呼ばれた本人は、知らぬ氣に、來る人を避けて早足に行く。拔き競をして飛んで來た二輛の人力に遮ぎられて、間は益遠くなる。宗近君は胸を出して馳け出した。寛く着た袷と羽織が、足を下す度に躍を踴る。

「おい」と後から手を懸ける。肩がぴたりと留まると共に、小野さんの細面が斜めに見えた。兩手は塞がつて居る。

「おい」と手を懸けた儘肩をゆす振る。小野さんはゆす振られながら向き直つた。

「誰かと思つたら……失敬」

小野さんは帽子の儘鄭寧に會釋した。兩手は塞がつてゐる。

「何を考へてるんだ。いくら呼んでも聽えない」

「さうでしたか。些とも氣が付かなかつた」

「急いでる樣で、しかも地面の上を歩いて居ない樣で、少し妙だよ」

「何が」

「君の歩行方がさ」

「廿世紀だから、ハヽヽヽ」

「夫が新式の歩行方か。何だか片足が新で片足が舊の樣だ」
「實際斯う云ふものを提げて居ると歩行にくいから……」
小野さんは兩手を前の方へ出して、此通りと云はぬ許に、自分から下の方へ眼を着けて見せる。宗近君も自然と腰から下へ視線を移す。
「何だい、夫は」
「此方が紙屑籠で、此方が洋燈の臺」
「そんなハイカラな形姿をして、大きな紙屑籠なんぞを提げてるから妙なんだよ」
「妙でも仕方がない、頼まれものだから」
「頼まれて妙になるのは感心だ。君に紙屑籠を提げて往來を歩く丈の義俠心があるとは思はなかつた」
小野さんは默つて笑ながら御辭儀をした。
「時に何處へ行くんだね」
「是を持つて……」
「夫を持つて歸るのかね」
「いゝえ。頼まれたから買つて行つてやるんです。君は？」
「僕はどつちへでも行く」
小野さんは内心少々當惑した。急いでゐる樣で、しかも地面の上を歩行てゐない樣だと、宗近君が云つたのは、正に現下の狀態によく適合た小野評である。靴に踏む大地は廣くもある、堅くもある、然し何と

なく踏み心地が確かでない。にも拘はらず急ぎたい。氣樂な宗近君抔に逢つては立話をするのさへ難義である。一所にあるかうと云はれると猶更困る。

常でさへ宗近君に捕まると何となく不安である。宗近君と藤尾の關係を知る樣な知らぬ樣な間に、自分と藤尾との關係は成り立つて仕舞つた。表向人の許嫁を盜んだ程の罪は犯さぬ積であるが、宗近君の心は聞かんでも知れてゐる。露骨な人の立居振舞の折々にも、氣のある所はそれと推測が出來る。夫を裏から壞しに掛つたと迄は行かぬにしても、事實に宗近君の望を、われ故に、永久に鎖した譯になる。人情としては氣の毒である。

氣の毒は是丈で氣の毒である上に、宗近君が氣樂に構へて、毫も自分と藤尾の仲を苦にして居ないのが猶更の氣の毒になる。逢へば隔意なく話をする。冗談を云ふ。笑ふ。男子の本領を說く。東洋の經綸を論ずる。尤も戀の事は餘り語らぬ。語らぬと云はんより寧ろ語れぬのかも知れぬ。宗近君は恐らく戀の眞相を解せぬ男だらう。藤尾の夫には不足である。夫にも拘はらず氣の毒は依然として氣の毒である。

氣の毒とは自我を沒した言葉である。自我を沒した言葉であるから難有い。小野さんは心のうちで宗近君に氣の毒だと思つてゐる。然し此氣の毒のうちに大いなる己を含んでゐる。惡戯をして親の前へ出るときの心持を考へて見るとわかる。氣の毒だつたと親の爲に悔ゆる了見よりは何となく物騷だと云ふ感じが重である。わが惡戲が、己れと掛け離れた別人の頭の上に落した迷惑はともかくも、此迷惑が反響して自分の頭ががんと鳴るのが氣味が惡い。雷の嫌なものが、雷を封じた雲の峯の前へ出ると、少しく逡巡するのと一般である。只の氣の毒とは餘程趣が違ふ。けれども小野さんは之を稱して氣の毒と云つて居る。

小野さんは自分の感じを氣の毒以下に分解するのを好まぬからであらう。
「散歩ですか」と小野さんは鄭寧に聞いた。
「うん。今、其角で電車を下りた許だ。だから、どつちへ行つてもいゝ」
此答は少々論理に叶はないと、小野さんは思つた。然し論理はどうでも構はない。
「僕は少し急ぐから……」
「僕も急いで差支ない。少し君の歩く方角へ急いで一所に行かう。――其紙屑籠を出せ。持つてやるから」
「なに宜いです。見つともない」
「まあ、出しなさい。成程嵩張割に輕いもんだね。見つともないと云ふのは小野さんの事だ」と宗近君は屑籠を搖り乍ら歩き出す。
「さう云ふ風に提げるとさも輕さうだ」
「物は提げ様一つさ。ハヽヽ。是や勸工場で買つたのかい。大分精巧なものだね。紙屑を入れるのは勿體ない」
「だから、まあ往來を持つて歩けるんだ。本當の紙屑が這入つてゐちや……」
「なに持つて歩けるよ。電車は人屑を一杯詰めて威張つて往來を歩いてるぢやないか」
「ハヽヽ、すると君は屑籠の運轉手と云ふ事になる」
「君が屑籠の社長で、賴んだ男は株主か。滅多な屑は入れられない」

「歌反古とか、五車反古と云ふ樣なものを入れちや、どうです」
「そんなものは要らない。紙幣の反古を澤山入れて貰ひたい」
「只の反古を入れて置いて、催眠術を掛けて貰ふ方が早さうだ」
「まづ人間の方で先に反古になる譯だな。乞ふ隗より始めよか。人間の反古なら催眠術を掛けなくても澤山ゐる。何故かう隗より始めたがるのかな」
「中々隗より始めたがらないですよ。人間の反故が自分で屑籠の中へ這入つて呉れると都合がいゝんだけれども」
「自働屑籠を發明したら好からう。さうしたら人間の反故がみんな自分で飛び込むだらう」
「一つ專賣でも取るか」
「アハ、、、好からう。知つたものゝうちで飛び込ましたい人間でもあるかね」
「あるかも知れません」と小野さんは切り拔けた。
「時に君は昨夕妙な伴とイルミネーションを見に行つたね」
見物に行つた事は先き露見して仕舞つた。今更隱す必要はない。
「えゝ、君等も行つたさうですね」と小野さんは何氣なく答へた。甲野さんは見付ても知らぬ顔をしてゐる。藤尾は知らぬ顔をして、しかも是非共此方から白狀させ樣とする。宗近君は向から正面に質問してくる。小野さんは何氣なく答へながら、心のうちに成程と思つた。
「あれは君の何だい」

「少し猛烈ですね。――故の先生です」
「あの女は、それぢあ恩師の令嬢だね」
「まあ、そんなものです」
「あゝやつて、一所に茶を飲んでゐる所を見ると、他人とは見えない」
「兄妹と見えますか」
「夫婦さ。好い夫婦だ」
「恐れ入ります」と小野さんは一寸笑つたがすぐ眼を外した。向側の硝子戸のなかに金文字入の洋書が燦爛と詩人の注意を促がしてゐる。
「君、あすこに大分新刊の書物が來てゐる樣だが、見樣ぢやありませんか」
「書物か。何か買ふのかい」
「面白いものがあれば買つてもいゝが」
「屑籠を買つて、書物を買ふのは頗るアイロニーだ」
「何故」
宗近君は返事をする前に、屑籠を提げた儘、電車の間を向側へ馳け拔けた。小野さんも小走に跟いて來る。
「はあ大分奇麗な本が陳列してゐる。どうだい欲しいものがあるかい」
「左樣」と小野さんは腰を屈めながら金縁の眼鏡を硝子窓に擦り寄せて餘念なく見取れてゐる。小羊の

皮を柔らかに鞣して、木賊色の濃き眞中に、水蓮を細く金に描いて、瓣の盡くる萼のあたりから、直なる線を底迄通して、ぐるりと表紙の周圍を囲らしたのがある。脊を平らに截つて、深き紅に金髮を一面に這はせた樣な模樣がある。堅き眞鍮版に、どつかと布の目を潰して、重たき箔を楯形に置いたのがある。素氣なきカーフの脊を鈍色に綠に上下に區切つて、双方に文字丈を鏤めたのがある。ざら目の紙に、品よく朱の書名を配置した扉も見える。

「みんな欲しさうだね」と宗近君は書物を見ずに、小野さんの眼鏡ばかり見てゐる。

「みんな新式な裝釘だ。どうも」

「表紙丈奇麗にして、内容の保險をつけた氣なのかな」

「あなた方のほうと違つて文學書だから」

「文學書だから上部を奇麗にする必要があるのかね。それぢや文學者だから金縁の眼鏡を掛ける必要が起るんだね」

「どうも、きびしい。然しある意味で云へば、文學者も多少美術品でせう」と小野さんは漸く窓を離れた。

「美術品で結構だが、金縁眼鏡丈で保險をつけてるのは情ない」

「兎角眼鏡が祟る樣だ。——宗近君は近視眼ぢやないんですか」

「勉強しないから、なり度てもなれない」

「遠視眼でもないんですか」

「冗談を云つちやいけない。――さあ好加減に歩かう」

二人は肩を比べて又歩き出した。

「君、鵜と云ふ鳥を知つてるだらう」と宗近君が歩き乍ら云ふ。

「えゝ。鵜がどうかしたんですか」

「あの鳥は魚を折角呑んだと思ふと吐いて仕舞ふ。詰らない」

「詰らない。然し魚は漁夫の魚籃の中に這入るから、いゝぢやないですか」

「だからアイロニーさ。折角本を讀むかと思ふとすぐ屑籠のなかへ入れて仕舞ふ。學者と云ふものは本を吐いて暮して居る。なんにも自分の滋養にやならない。得の行くのは屑籠許だ」

「さう云はれると學者も氣の毒だ。何をしたら好いか分らなくなる」

「行爲さ。本を讀むばかりで何にも出來ないのは、皿に盛つた牡丹餅を畫にかいた牡丹餅と間違へて大人しく眺めてゐるのと同樣だ。ことに文學者なんてものは奇麗な事を吐く割に、奇麗な事をしないものだ。どうだい小野さん、西洋の詩人なんかによくそんなのがある樣ぢやないか」

「左樣」と小野さんは間を延ばして答へたが、

「例へば」と聞き返した。

「名前なんか忘れたが、何でも女を胡魔化したり、女房を打遣つたりしたのがゐるぜ」

「そんなのは居ないでせう」

「なにゐる、慥かに居る」

「さうかな。僕もよく覺えてゐないが……」
「專門家が覺えてゐなくつちや困る。――そりやさうと昨夜の女ね」
小野さんの腋の下が何だかじめ〳〵する。
「あれは僕よく知つてるぜ」
琴の事件なら糸子から聞いた。其外に何も知る筈がない。
「蔦屋の裏に居たでせう」と一躍して先へ出て仕舞つた。
「琴を彈いてゐた」
「中々旨いでせう」と小野さんは容易に悄然ない。藤尾に逢つた時とは少々樣子が違ふ。
「旨いんだらう、何となく眠氣を催したから」
「ハ、、、夫こそアイロニーだ」と小野さんは笑つた。小野さんの笑ひ聲は如何なる場合でも靜の一字を離れない。其上色彩がある。
「冷やかすんぢやない。眞面目な所だ。かりそめにも君の恩師の令孃を馬鹿にしちや濟まない」
「然し眠氣を催しちや困りますね」
「眠氣を催ふす所が好いんだ。人間でもさうだ。眠氣を催ふす樣な人間はどこか尊とい所がある」
「古くつて尊といんでせう」
「君の樣な新式な男はどうしても眠くならない」
「だから尊とくない」

「許ぢやない。ことに依ると、尊とい人間を時候後れだ抔とけなしたがる」

「今日は何だか攻撃ばかりされてゐる。こゝいらで御分れにしませうか」と小野さんは少し苦しい所を、わざと笑つて、立ち留る。同時に右の手を出す。紙屑籠を受取らうと云ふ謎である。

「いや、もう少し持つてやる。どうせ暇なんだから」

二人は又歩き出す。二人が二人の心を竝べた儘一所に歩き出す。双方で双方を輕蔑してゐる。

「君は毎日暇の樣ですね」

「僕か？本はあんまり讀まないね」

「外にだつて、あまり忙がしい事がありさうには見えませんよ」

「さう忙がしがる必要を認めないからさ」

「結構です」

「結構に出來る間は結構にして置かんと、いざと云ふ時に困る」

「臨時應急の結構。愈結構ですハ、、、」

「君、相變らず甲野へ行くかい」

「今行つて來たんです」

「甲野へ行つたり、恩師を案內したり、忙がしいだらう」

「甲野の方は四五日休みました」

「論文は」

「ハヽヽ、何時の事やら」

「急いで出すが好い。何時の事やらぢや折角忙がしがる甲斐がない」

「まあ臨時應急にやりませう」

「時にあの恩師の令孃はね」

「えゝ」

「あの令孃に就て余つ程面白い話があるがね」

小野さんは急にどきんとした。何の話か分らない。眼鏡の縁から、斜めに宗近君を見ると、相變らず、紙屑籠を搖つて、揚々と正面を向いて歩いてゐる。

「どんな……」と聞き返した時は何となく勢がなかつた。

「どんなつて、余つ程深い因緣と見える」

「誰が」

「僕等とあの令孃がさ」

小野さんは少し安心した。然し何だか引つ掛つてゐる。淺かれ深かれ宗近君と孤堂先生との關係をぶすりと切つて棄てたい。然し自然が結んだものは、いくら能才でも天才でも、どうする譯にも行かない。京の宿屋は何百軒とあるに、何で蔦屋へ泊り込んだものだらうと思ふ。泊らんでも濟むだらうにと思ふ。わざわざ三條へ梶棒を卸して、わざわざ蔦屋へ泊るのは入らざる事だと思ふ。醉興だと思ふ。余計な惡戲だと思ふ。先方に益もないのに好んで人を苦しめる泊り方だと思ふ。然しいくら、どう思つても仕方がない

と思ふ。小野さんは返事をする元氣も出なかつた。
「あの令孃がね。小野さん」
「えゝ」
「あの令孃がねぢやいけない。あの令孃をだ。――見たよ」
「宿の二階からですか」
「二階からも見た」
もの字が少し氣になる。春雨の欄に出て、連翹の花諸共に古い庭を見下された事は、とくの昔に知つてゐる。今更引合に出されても驚ろきはしない。然し二階からもとなると劍呑だ。其外に未だ見られた事があるに極つてゐる。不斷なら進んで聞く所だが、何となく空景氣を着ける樣な心持がして、どこでと押を強く出損なつた儘、二三歩あるく。
「嵐山へ行く所も見た」
「見た丈ですか」
「知らない人に話は出來ない。見た丈さ」
「話して見れば好かつたのに」
小野さんは突然冗談を云ふ。俄かに景氣が好くなつた。
「團子を食つてゐる所も見た」
「何所で」

「矢つ張り嵐山だ」
「夫れつ切りですか」
「まだ有る。京都から東京迄一所に來た」
「成程勘定して見ると同じ汽車でしたね」
「君が停車場へ迎へに行つた所も見た」
「さうでしたか」と小野さんは苦笑した。
「あの人は東京ものださうだね」
「誰が……」と云ひ掛けて、小野さんは、眼鏡の珠のはづれから、變に相手の横顔を覗き込んだ。
「誰が？誰がとは」
「誰が話したんです」
小野さんの調子は存外落付てゐる。
「宿屋の下女が話した」
「宿屋の下女が？蔦屋の？」
念を押した樣な、後が聞きたい樣な、後がないのを確かめたい樣な樣子である。
「うん」と宗近君は云つた。
「蔦屋の下女は……」
「そつちへ曲るのかい」

「もう少し、どうです、散歩は」
「もう好い加減に引き返さう。さあ大事の紙屑籠。落さない樣に持つて行くがいゝ」
小野さんは恭しく屑籠を受取つた。宗近君は飄然として去る。
一人になると急ぎ度なる。急げば早く孤堂先生の家へ着く。着くのは難有くない。孤堂先生の家へ急ぎたいのではない。小野さんは何だか急ぎたいのである。兩手は塞つてゐる。足は動いて居る。恩賜の時計は胴衣のなかで鳴つてゐる。往來は賑かである。——凡てのものを忘れて、小野さんの頭は急いでゐる。早くしなければならん。然しどうして早くして好ゝか分らない。只一晝夜が十二時間に縮まつて、運命の車が思ふ方角へ全速力で廻轉して吳れるより外に致し方はない。進んで自然の法則を破る程な不料簡は起さぬ積である。然し自然の方で、少しは事情を斟酌して、自分の味方になつて働らいて吳れても好さゝうなものだ。さうなる事は受合だと保證がつけば、觀音樣へ御百度を踏んでも構はない。不動樣へ護摩を上げても宜しい。耶蘇教の信者には無論なる。小野さんは步きながら神の必要を感じた。
宗近と云ふ男は學問も出來ない、勉強もしない。詩趣も解しない。あれで將來何になる氣かと不思議に思ふ事がある。何が出來るものかと輕蔑む事もある。露骨でいやになる事もある。然し今更の樣に考へて見ると、あの態度は自分には到底出來ない態度である。出來ないから此方が劣つてゐると結論はせん。世の中には出來もせぬが、又爲度もない事がある。箸の先で皿を廻す藝當は出來るより出來ない方が上品だと思ふ。宗近の言語動作は無論自分には出來にくい。然し出來にくいから、却つて自分の名譽だと今迄は心得てゐた。あの男の前へ出ると何だか壓迫を受ける。不愉快である。個人の義務は相手に愉快を與へる

が專一と思ふ。宗近は社交の第一要義にも通じて居らん。あんな男はたゞの世の中でも成功は出來ん。外交官の試驗に落第するのは當り前である。

然しあの男の前へ出て感じる壓迫は一種妙である。露骨から來るのか、單調から來るのか、所謂昔風の率直から來るのか、未だに解剖して見樣と企てた事はないが兎に角妙である。故意に自分を壓し付け樣として居る氣色が寸毫も先方に見えないのに此方は何となく感じてくる。只會釋もなく思ふ儘を隨意に振舞つてゐる自然のなかゝら、どうだと云はぬ許に壓迫が顏を出す。自分はなんだか氣が引ける。あの男に對しては濟まぬ裏面の義理もあるから、それが祟つて、德義が制裁を加へるとのみ思ひ通して來たが夫許では決してない。例へば天を憚からず地を憚からぬ山の、無頓着に聳えて、面白からぬと云はんよりは、美くしく思へぬ感じである。星から墜つる露を、蕊に受けて、可憐の瓣を、折々は、風の音信と小川へ流す。自分はこんな景色でなければ樂しいとは思へぬ。要するに宗近と自分とは檜山と花圃の差で、本來から性が合はぬから妙な感じがするに違ない。

性が合はぬ人を、合はねば夫迄と澄してゐた事もある。氣の毒だと考へた事もある。情ないと輕蔑だ事もある。然し今日程羨しく感じた事はない。高尚だから、上品だから、自分の理想に近いから、羨ましいとは夢にも思はぬ。只あんな氣分になれたら嘸よからうと、今の苦しみに引き較べて、急に羨ましくなつた。

藤尾には小夜子と自分の關係を云ひ切つて仕舞つた。あるとは云ひ切らない。世話になつた昔の人に、心細く附き添ふ小さき影を、逢はぬ五年を霞と隔てゝ、再び逢ふた許の朦朧した間柄と云ひ切つて仕舞つ

た。恩を着るは情の肌、師に渥きは弟子の分、其外には鳥と魚との關係だにないと云ひ切つて仕舞つた。出來るならばと辛防して來た嘘はとう／＼吐いて仕舞つた。漸くの思で吐いた嘘は、嘘でも立てなければならぬ。僞を實と僞はる料簡はなくとも、吐くからは嘘に對して義務がある、責任が出る。あからさまに云へば嘘に對して一生の利害が伴なつて來る。もう嘘は吐けぬ。二重の嘘は神も嫌だと聞く。今日からは是非共嘘を實と通用させなければならぬ。

夫が何となく苦しい。是から先生の所へ行けば屹度二重の嘘を吐かねばならぬ樣な話を持ちかけられるに違ない。切り拔ける手はいくらもあるが、手詰に出られると跳ね付ける勇氣はない。もう少し冷刻に生れてゐれば何の雜作もない。法律上の問題になる樣な不都合はして居らん積だから、判然斷はつて仕舞へば夫迄である。然しそれでは恩人に濟まぬ。恩人から逼られぬうちに、自分の嘘が發覺せぬうちに、自然が早く廻轉して、自分と藤尾が公然結婚する樣に運ばなければならん。――後は？後は後から考へる。事實は何よりも有效である。結婚と云ふ事實が成立すれば、萬事は此新事實を土臺にして考へ直さなければならん。此新事實を一般から認められゝば、あとはどんな不都合な犧牲でもする。どんなにつらい考へ直し方でもする。

只機一髮と云ふ間際で、煩悶する。どうする事も出來ぬ心が急く。進むのが怖い。退ぞくのが厭だ。早く事件が發展すればと念じながら、發展するのが不安心である。從つて氣樂な宗近が羨ましい。萬事を商量するものは一本調子の人を羨ましがる。

春は行く。行く春は暮れる。絹の如き淺黄の幕はふわり／＼と幾枚も空を離れて地の上に被さつてくる。

拂ひ退ける風も見えぬ往來は、夕暮の爲すが儘に靜まり返つて、蒼然たる大地の色は刻々に蔓つて來る。西の果に用もなく薄燒てゐた雲は漸く紫に變つた。

　蕎麥屋の看板におかめの顏が薄暗く膨れて、後から點ける灯を今やと赤い頰に待つ向横町は、二間足らずの狹い往來になる。黄昏は細長く家と家の間に落ちて、鎖さぬ門を戸毎にくゞる。部屋のなかは猶更暗いだらう。

　曲つて左側の三軒目迄來た。門構と云ふ名は付けられない。往來を僅かに仕切る格子戸をそろりと明けると、なかは、ほのくらく近付く宵を、一段と刻んで下へ降りた樣な心持がする。

「御免」と云ふ。

　靜かな聲は落付いた春の調子を亂さぬ程に穩である。幅一尺の揚板に、菱形の黑い穴が、椽の下へ拔けてゐるのを眺めながら取次を大人しく待つ。返事はやがてした。うんと云ふのか、あゝと云ふのかはいと云ふのか、更に要領を得ぬ聲である。小野さんは矢張菱形の黑い穴を覗きながら取次を待つてゐる。やがて障子の向でずしんと誰か跳ね起きた樣子である。怪しい普請と見えて根太の鳴る音が手に取る樣に聞える。例の壁紙模樣の襖が開く。二疊の玄關へ出て來たなと思ふ間もなく、薄暗い障子の影に、肉の落ちた孤堂先生の顏が髯諸共に現はれた。

　平生からあまり丈夫には見えない。骨が細く、軀が細く、顏は特更細く出來上つたうへに、取る年は爭はれぬ雨と風と苦勞とを吹き付けて、辛い浮世に、辛くも取り留めた心さへ細くなる許である。今日は一層顏色が惡い。得意の髯さへも尋常には見えぬ。黑い隙間を白いのが埋めて、白い隙間を風が通る。

古の人は顎の下迄影が薄い。一本宛吟味して見ると先生の髯は一本毎にひよろ〳〵してゐる。小野さんは鄭寧に帽を脱いで、無言の儘挨拶をする。英吉利刈の新式な頭は、眇然たる「過去」の前に落ちた。

　徑何十尺の圓を描いて、周圍に鐵の格子を嵌めた箱を幾何となくさげる。運命の玩弄兒はわれ先にと此箱へ這入る。圓は廻り出す。此箱に居るものが青空へ近く昇る時、あの箱に居るものは、凡てを吸ひ盡す大地へそろ〳〵と落ちて行く。觀覧車を發明したものは皮肉な哲學者である。

　英吉利式の頭は、此箱の中で是から雲へ昇らうとする。心細い髯に、世を侘び古りた記念の爲めと、大事に胡麻鹽を振り懸けてゐる先生は、あの箱の中で是から暗い所へ落ち付かうとする。片々が一尺昇れば片々は一尺下がる樣に運命は出來上つてゐる。

　昇るものは、昇りつゝある自覺を抱いて、降りつゝ夜に行くものゝ前に鄭寧な頭を惜氣もなく下げた。之を神の作れるアイロニーと云ふ。

「やあ、是は」と先生は機嫌が好い。運命の車で降りるものが、昇るものに出合ふと自然に機嫌がよくなる。

「さあ御上り」と忽ち座敷へ取つて返す。小野さんは靴の紐を解く。解き終らぬ先に先生は又出てくる。

「さあ御上り」

座敷の眞中に、晝を厭はず延べた床を、壁際へ押し遣つたあとに、新調の座布團が敷いてある。

「どうか、なさいましたか」

「何だか、今朝から心持が惡くつてね。それでも朝のうちは我慢してゐたが、午からとう〳〵寐て仕舞

つた。今丁度うと〳〵してゐた所へ君が來たので、待たして御氣の毒だつた」
「いえ、今格子を開けた許です」
「さうかい。何でも誰か來た樣だから驚いて出て見た」
「さうですか、夫は御邪魔をしました。寐て居らつしやれば好かつたですね」
「なに大した事はないから。――夫に小夜も婆さんも居ないものだから」
「何所かへ……」
「一寸風呂に行つた。買物旁」
床の拔殼は、こんもり高く、這ひ出した穴を障子に向けてゐる。影になつた方が、薄暗く夜着の模樣を暈す上に、投げ懸けた羽織の裏が、乏しき光線をきら〳〵と聚める。裏は鼠の甲斐絹である。
「少しぞく〳〵する樣だ。羽織でも着やう」と先生は立ち上がる。
「寐て居らしつたら好いでせう」
「いや少し起きて見樣」
「何ですかね」
「風邪でもない樣だが、――なに大した事もあるまい」
「昨夕御出になつたのが惡かつたですかね」
「いえ、なに。――時に昨夕は大きに御厄介」
「いゝえ」

「小夜も大變喜んで。御蔭で好い保養をした」
「もう少し閑だと、方々へ御供をする事が出來るんですが……」
「忙がしいだらうからね。いや忙がしいのは結構だ」
「どうも御氣の毒で……」
「いや、そんな心配はちつとも要らない。君の忙がしいのは、つまり我々の幸福なんだから」
小野さんは默つた。部屋は次第に暗くなる。
「時に飯は食つたかね」と先生が聞く。
「えゝ」
「食つた？——食はなければ御上り。何にもないが茶漬ならあるだらう」とふら〱と立ち懸ける。締め切つた障子に黒い長い影が出來る。
「先生、もう好ゝんです。飯は濟まして來たんです」
「本當かい。遠慮しちや不可ん」
「遠慮しやしません」
黒い影は折れて故の如く低くなる。えがらつぽい咳が二つ三つ出る。
「咳が出ますか」
「から——からつ咳が出て……」と云ひ懸ける途端に又二つ三つ込み上げる。小野さんは憮然として咳の終るを待つ。

「横になつて温まつて居らしつたら好いでせう。冷えると毒です」

「いえ、もう大丈夫。出だすと一時不可ないんだがね。――年を取ると意氣地がなくなつて――何でも若いうちの事だよ」

若いうちの事だとは今迄毎度聞いた言葉である。然し孤堂先生の口から聞いたのは今が始めてゞある。骨許此世に取り殘されたかと思ふ人の、疎らな髯を風塵に託して、殘喘に一昔と二昔を、互違に呼吸する口から聞いたのは、少なくとも今が始めてゞある。子の鐘は陰に響いてぼうんと鳴る。薄暗い部屋のなかで、薄暗い人から此言葉を聞いた小野さんは、つく〲若いうちの事だと思つた。若いうちは二度とないと思つた。若いうち旨くやらないと生涯の損だと思つた。

生涯の損をして此先生の樣に老朽した時の心持は定めて淋しからう。よく〱詰らないだらう。然し恩のある人に濟まぬ不義理をして死ぬ迄寐醒が惡いのは、損をした昔を思ひ出すより鬱陶しいかも知れぬ。何れにしても若いうちは二度とは來ない。二度と來ない若いうちに極めた事は生涯極つて仕舞ふ。生涯極つて仕舞ふ事を、自分は今どつちかに極めなければならぬ。今日藤尾に逢ふ前に先生の所へ來たら、あの嘘を當分見合せたかも知れぬ。然し嘘を吐いて仕舞つた今となつて見ると致し方はない。將來の運命は藤尾に任せたと云つて差し支ない。――小野さんは心中でかう云ふ言譯をした。

「東京は變つたね」と先生が云ふ。

「烈しい所で、毎日變つて居ます」

「恐ろしい位だ。昨夜も大分驚いたよ」

「隨分人が出ましたから」
「出たねえ。あれでも知つた人には滅多に逢はないだらうね」
「さうですね」と曖昧に受ける。
「逢ふかね」
小野さんは「まあ……」と濁しかけたが「まあ、逢はない方ですね」と思ひ切つて仕舞つた。
「逢はない。成程廣い所に違ない」と先生は大いに感心してゐる。なんだか田舍染みて見える。小野さんは光澤の惡い先生の顔から眼を放して、自分の膝元を眺めた。カフスは眞白である。七寶の夫婦釦は滑な淡紅色を綠の上に浮かして、華奢な金縁のなかに暖かく包まれてゐる。脊廣の地は品の好い英吉利織である。自己をまのあたりに物色した時、小野さんは自己の住むべき世界を卒然と自覺した。先生に釣り込まれさうな際どい所で急に忘れ物を思ひ出した樣な氣分になる。先生には無論分らぬ。
「一所にあるいたのも久し振だね。今年で丁度五年目になるかい」と左も可懷げに話しかける。
「えゝ五年目です」
「五年目でも、十年目でも、かうして一つ所に住む樣になれば結構さ。――小夜も喜んでゐる」と後から繼ぎ足した樣に一句を付け添へた。小野さんは早速の返事を忘れて、暗い部屋のなかに竦る樣な氣がした。
「先き御孃さんが御出でした」と仕方がないから渡し込む。
「あゝ、――なに急ぐ事でも無かつたんだが、もしや暇があつたら一所に連れて行つて買物をして貰はうと思つてね」

「生憎出掛けだつたものですから」
「さうだつてね。飛んだ御邪魔をしたらう。何處ぞ急用でもあつたのかい」
「いえ——急用でもなかつたんですが」と相手は少々言ひ淀む。先生は追窮しない。
「はあ、さうかい。そりやあ」と漠々たる挨拶をした。挨拶が漠々たると共に、部屋のなかも朦朧と取締がなくなつて來る。今宵は月だ。月だが、まだ間がある。のに日は落ちた。床は一間を申譯の爲めに濃い藍の砂壁に塗り立てた奥には、先生が祕藏の義董の幅が掛かつて居た。唐代の衣冠に蹣跚の履を危うく踏んで、だらしなく腕に巻きつけた長い袖を、童子の肩に凭した醉態は、此家の淋しさに似ず、春王の四月に叶ふ樂天家である。仰せの如く額をかくす冠の、黒い色が著るしく目についたのは今先の事であつたに、不圖見ると、纓か飾か、紋切形に左右に流す幅廣の絹さへ、ぼんやりと近付く宵を迎へて、來る夜に紛れ込まうとする。先生も自分も愚圖々々すると一つ穴へはまつて、影の樣に消えて行きさうだ。
「先生、御頼の洋燈の臺を買つて來ました」
「それは難有い。どれ」
小野さんは薄暗いなかを玄關へ出て、臺と屑籠を持つてくる。
「はあ——何だか暗くつて能く見えない。燈火を點けてから緩くり拜見し樣」
「私が點けませう。洋燈は何處にありますか」
「氣の毒だね。もう歸つて來る時分だが。ぢや椽側へ出ると右の戸袋のなかにあるから頼まう。掃除はもうしてある筈だ」

薄黒い影が一つ立つて、障子をすうと明ける。殘る影はひそかに手を拱いて動かぬ程を、夜は襲つて來る。六疊の座敷は淋しい人を陰氣に封じ込めた。ごほん／＼と咳をせく。

やがて椽の片隅で擦る燐寸の音と共に、咳は已んだ。明るいものは室のなかに動いて來る。小野さんは洋袴の膝を折つて、五分心を新らしい臺の上に載せる。

「丁度能く合ふね。据りがいゝ。紫檀かい」

「模擬でせう」

「模擬でも立派なものだ。代は？」

「何よう御座んす」

「よくはない。幾何かね」

「兩方で四圓少しです」

「四圓。成程東京は物が高いね。――少し許の恩給で遣つて行くには京都の方が遥かに好い樣だ」

二三年前と違つて、先生は些額の恩給と僅かな貯蓄から上がる利子とで生活して行かねばならぬ。小野さんの世話をした時とは大分違ふ。事に依れば小野さんの方から幾分か貢で貰ひたい樣にも見える。小野さんは畏まつて控えてゐる。

「なに小夜さへなければ、京都に居ても差し支ないんだが、若い娘を持つと中々心配なもので……」と途中で一寸休んで見せる。小野さんは畏まつた儘應じなかつた。

「私抔は何處の果で死なうが同じ事だが、後に殘つた小夜がたつた一人で可哀想だから此年になつて、

わざ〳〵東京迄出掛けて來たのさ。――如何な故郷でももう出てから二十年にもなる。知合も交際もない。丸で他國と同樣だ。夫に來て見ると、砂が立つ、埃が立つ。雜沓はする、物價は貴し、決して住み好いとは思はない。……」

「住み好い所ではありませんね」

「是でも昔は親類も二三軒はあつたんだが、長い間音信不通にしてゐたものだから、今では居所も分らない。不斷は左程にも思はないが、かう遣つて、半日でも寢ると考へるね。何となく心細い」

「成程」

「まあ御前が傍に居て呉れるのが何よりの依賴だ」

「御役にも立ちませんで……」

「いえ、色々親切にしてくれて洵に難有い。忙しい所を……」

「論文の方がないと、まだ閑なんですが」

「論文。博士論文だね」

「えゝ、まあさうです」

「何時出すのかね」

何時出すのか分らなかつた。早く出さなければならないと思ふ。こんな引つ掛りがなければ、もう餘程書けたらうにと思ふ。口では

「今一生懸命に書いてる所です」と云ふ。

先生は襦袢の袖から手を抜いて、素肌の懐に肘迄収めた儘、二三度肩をゆすつて
「どうも、ぞく／＼する」と細長い髯を襟のなかに埋めた。
「御寝みなさい。起きて居らつしやると毒ですから。私はもう御暇をします」
「なに、まあ御話し。もう小夜が歸る時分だから。寐たければ私の方で御免蒙つて寐る。それにまだ話も殘つてるから」
先生は急に胸の中から、手を出して膝の上へ乘せて、双方を一度に打つた。
「まあ緩くりするが好い。今暮れた許だ」
迷惑のうちにも小野さんは流石氣の毒に思つた。是程迄に自分を引き留めたいのは、只當年の可懷味や、一夕の無聊ではない。よく／＼行く先が案じられて、亡き後の安心を片時も早く、脈の打つ手に握りたいからであらう。
實は夕食もまだ食はない。居れば耳を傾けたくない話が出る。腰丈はとうから宙に浮いてゐる。然し先生の樣子を見ると無理に洋袴の膝を伸す譯にも行かない。老人は病を力めて、わが爲めに強いて元氣を付けてゐる。親しみ易き蒲團は片寄せられて、穴許になつた。溫氣は昔の事である。
「時に小夜の事だがね」と先生は洋燈の灯を見ながら云ふ。五分心を蒲鉾形に點る火屋のなかは、壺に充る油を、物言はず吸ひ上げて、穩かな焰の舌が、暮れた許りの春を、動かず守る。人佗て淋しき宵を、只一點の明きに償ふ。燈灯は希望の影を招く。
「時に小夜の事だがね。知つての通りあゝ云ふ內氣な性質ではあるし、今の女學生の樣にハイカラな敎

育もないから到底氣にも入るまいが、……」迄來て先生は洋燈から眼を放した。眼は小野さんの方に向ふ。何とか取り合はなければならない。

「いゝえ――どうして――」と受けて、一寸何を切つて見せたが、先生は依然として、此方の顏から眸を動かさない。其上口を開かずに何だか待つて居る。

「氣に入らんなんて――そんな事が――ある筈がないですが」とぼつ〳〵に答へる。漸くに納得した先生は先へ進む。

「あれも不憫だからね」

小野さんは、さうだとも、さうでないとも云はなかつた。手は膝の上にある。眼は手の上にある。

「私がかうして、何うか斯うかしてゐるうちは好い。好いが此通りの身體だから、いつ何時どんな事がないとも限らない。其時が困る。兼ての約束はあるし、御前も約束を反故にする樣な輕薄な男ではないから、小夜の事は私が居ない後でも世話はして吳れるだらうが……」

「そりや勿論です」と云はなければならない。

「そこは私も安心してゐる。然し女は氣の狹いものでね。アハ、、、困るよ」

何だか無理に笑つた樣に聞える。先生の顏は笑つた爲めに愈淋しくなつた。

「そんなに御心配なさる事も要らんでせう」と覺束なく言ふ。言葉の腰がふら〳〵してゐる。

「私はいゝが、小夜がさ」

小野さんは右の手で洋服の膝を摩り始めた。しばらくは二人とも無言である。心なき燈火が双方を半分

づゝ照らす。
「御前の方にも色々な都合はあるだらう。然し都合はいくら立つたつて片付くものぢやない」
「さうでも無いです。もう少しです」
「だつて卒業して二年になるぢやないか」
「えゝ。然しもう少しの間は……」
「少しつて、何時迄の事かい。そこが判然して居れば待つても好いさ。小夜にも私からよく話して置く。然したゞ少しでは困る。いくら親でも子に對して幾分か責任があるから。――少しつて云ふのは博士論文でも書き上げて仕舞ふ迄かい」
「えゝ、先づさうです」
「大分久しく書いてるる樣だが、まあ何時頃濟む積かね。大體」
「可成早く書いて仕舞はうと思つて骨を折つてるるんですが。何分問題が大きいものですから」
「然し大體の見當は着くだらう」
「もう少しです」
「來月位かい」
「さう早くは……」
「來々月はどうだね」
「どうも……」

「ぢや、結婚をしてからにしたら好からう。結婚をしたから論文が書けなくなつたと云ふ理由も出て來さうにない」
「ですが、責任が重くなるから」
「いゝぢやないか、今迄通りに働いてさへゐれば。當分の間、我々は經濟上、君の世話にならんでもいいから」
小野さんは返事の仕樣がなかつた。
「收入は今どの位あるのかね」
「僅かです」
「僅とは」
「みんなで六十圓許です。一人が漸々です」
「下宿をして？」
「えゝ」
「そりや馬鹿氣てる。一人で六十圓使ふのは勿體ない。家を持つても樂に暮せる」
小野さんは又返事の仕樣がなかつた。
東京は物價が高いと云ひながら、東京と京都の區別を知らない。鳴海絞の兵兒帶を締めて芋粥に寒さを凌いだ時代と、大學を卒業して相當の尊敬を衣帽の末に拂はねばならぬ今の境遇とを比較する事を知らない。書物は學者に取つて命から二代目である。按摩の杖と同じく、無くつては世渡りが出來ぬ程に大切な

道具である。其書物は机の上へ湧いてでも出る事か、中には人の驚く樣な奮發をして集めてゐる。先生はそんな費用が、どれ位かゝるか丸で一切空である。從つて、おいそれと簡單な返事が出事ない。

小野さんは何を思つたか、左手を疊へつかへると、右を伸して洋燈の心をぱつと出した。六疊の小地球が急に東の方へ廻轉した樣に、一度は明るくなる。先生の世界觀が瞬と共に變る樣に明るくなる。小野さんはまだ螺旋から手を放さない。

「もう好い。其位で好い。あんまり出すと危ない」と先生が云ふ。

小野さんは手を放した。手を引くときに、自分でカフスの奧を腕迄覗いて見る。やがて脊廣の表隱袋から、眞白な手巾を撮み出して丁寧に指頭の油を拭き取つた。

「少し灯が曲つてゐるから……」と小野さんは拭き取つた指頭を鼻の先へ持つて來てふん〳〵と二三度嗅いだ。

「あの婆さんが切ると何時でも曲る」と先生は股の開いた灯を見ながら云ふ。

「時にあの婆さんはどうです、御間に合ひますか」

「さう、まだ禮も云はなかつたね。段々御手數を掛けて………」

「いゝえ。實は年を取つてるから働らけるかと思つたんですが」

「まあ、あれで結構だ。段々慣れてくる樣子だから」

「さうですか、そりや好い按排でした。實はどうかと思つて心配してゐたんですが。其代り人間は慥だ。

さうです。淺井が受合つて行つたんですから」

「さうかい。時に淺井と云へば、どうしたい。まだ歸らないかい」
「もう歸る時分ですが。ことに因ると今日位の汽車で歸つて來るかも知れません」
「一昨日かの手紙には、二三日中に歸るとあつたよ」
「はあ、さうでしたか」と云つたぎり、小野さんは捩ぢ上げた五分心の頭を無心に眺めてゐる。淺井の歸京と五分心の關係を見極めんと思索する如くに眸子は一點に集つた。
「先生」と云ふ。顏は先生の方へ向け易へた。例になく口の角に聊かの決心を齎してゐる。
「何だい」
「今の御話ですね」
「うん」
「もう二三日待つて下さいませんか」
「もう二三日」
「つまり要領を得た御返事をする前に色々考へて見たいですから」
「そりや好いとも。三日でも四日でも、――一週間でも好い。事が判然さへすれば安心して待つてゐる。ぢや小夜にもさう話して置かう」
「えゝ、どうか」と云ひながら恩賜の時計を出す。夏に向ふ永い日影が落ちてから、夜の針は疾く回るらしい。
「ぢや、今夜は失禮します」

「まあ好いぢやないか。もう歸つて來る」
「また、すぐ來ますから」
「それでは――御疎忽であつた」
小野さんはすつきりと立つ。先生は洋燈を執る。
「もう、どうぞ。分ります」と云ひつゝ玄關へ出る。
「やあ、月夜だね」と洋燈を肩の高さに支へた先生がいふ。
「えゝ穩な晩です」と小野さんは靴の紐を締めつゝ格子から往來を見る。
「京都は猶穩だよ」
屈んでゐた小野さんは漸く沓脱に立つた。格子が明く。華奢な體軀が半分許往來へ出る。
「清三」と先生は洋燈の影から呼び留めた。
「えゝ」と小野さんは月のさす方から振り向いた。
「なに別段用ぢやない。――かうして東京へ出掛て來たのは、小夜の事を早く片付けて仕舞ひたいからだと思つて呉れ。分つたらうな」と云ふ。
小野さんは恭しく帽子を脱ぐ。先生の影は洋燈と共に消えた。
外は朧である。半ば世を照らし、半ば世を鎖す光が空に懸る。空は高きが如く低きが如く据らぬ腰を、更けぬ宵に浮かしてゐる。懸るものは猶更ふわ〳〵する。丸い縁に黄を帶びた輪をぼんやり膨らまして輪廓も確でない。黄な帶は外圍に近く色を失つて、黑ずんだ藍のなかに煮染出す。流れゝば月も消えさうに

見える。月は空に、人は地に紛れ易い晩である。

小野さんの靴は、濕つぽい光を憚かる如く、地に落す踵を洋袴の裾に隱して、小路を蕎麥屋の行燈迄拔け出して左へ折れた。往來は人の香がする。地に拖く影は長くはない。丸まつて動いて來る。こんもりと搖れて去る。下駄の音は朧に包まれて、霜の樣には冴えぬ。撫でゝ通る電信柱に白い模樣が見えた。すかす眸を不審と据ゑると白墨の相々傘が映る。夫程の淺い夜を、晝から引つ越して來た霞が立て籠める。行く人も來る人も何となく要領を得ぬ。逃れば靄のなか、出れば月の世界である。小野さんは夢の樣に步を移して來た。踽々として獨り行くと云ふ句に似てゐる。

實は夕食もまだ食はない。いつもなら通りへ出ると、すぐ西洋料理へでも飛び込む料簡で、得意な髭の正しい洋袴を、誇り顏に運ぶ筈である。今宵はいつ迄立つても腹も減らない。牛乳さへ飲む氣にならん。陽氣は暖か過ぎる。胃は重い。引く足は千鳥にはならんが、確と踏答へがない樣な心持である。そと卸す所爲かも知れぬ。去ればとて、こつりと大地へ當る氣にはならん。巡査の樣にあるけたなら世に朧は要らぬ。次に心配は要らぬ。巡査だから、あゝも步ける。小野さんには――殊に今夜の小野さんには――巡査の眞似は出來ない。

何故かう氣が弱いだらう――小野さんは考へながら、ふら〳〵步いてゐる。――何故かう氣が弱いだらう。頭腦も人には負けぬ。學問も級友の倍はある。擧止動作から衣服の着こなし方に至つて、悉く粹を盡くしてゐると自信してゐる。只氣が弱い。氣が弱い爲めに損をする。損をする丈ならいゝが乘つ引きならぬ羽目に陷る。水に溺れるものは水を蹴ると何かの本にあつた。脊に腹は替へられぬ今の場合、と諦めて

蹴て仕舞へば夫迄である。が……

女の話し聲がする。人影は二つ、路の向ふ側を此方へ近付いて來る。吾妻下駄と駒下駄の音が調子を揃へて、生温く宵を刻んで寛なるなかに、話し聲は聞える。

「洋燈の臺を買つて來て下さつたでせうか」と一人が云ふ。「さうさね」と一人が應へる。「今頃は來てるらつしやるかも知れませんよ」と前の聲が又云ふ。「どうだか」と後の聲が又應へる。「でも買つて行くと仰しやつたんでせう」と押す。「あゝ。——何だか暖か過ぎる晩だこと」と逃げる。「御湯の所爲で御座んすよ。藥湯は温まりますから」と説明する。

二人の話は此所で小野さんの向側を通り越した。見送ると並ぶ軒下から頭の影丈が斜に出て、蕎麥屋の方へ動いて行く。しばらく首を捩ぢ向けて、立ち留つて居た小野さんは、又歩き出した。

淺井の樣に氣の毒氣の少ないものなら、すぐ片付ける事も出來る。宗近の樣な平氣な男なら、苦もなくどうかするだらう。甲野なら超然として板挾みになつてるかも知れぬ。然し自分には出來ない。向へ行つて一歩深く陷り、此方へ來て一歩深く陷る。双方へ氣兼をして、片足づゝ双方へ取られて仕舞ふ。つまりは人情に絡んで意思に乏しいからである。利害？利害の念は人情の土臺の上に、後から被せた景氣の皮である。自分を動かす第一の力はと聞かれゝば、すぐ人情だと答へる。利害の念は第三にも第四にも、ことによつたら全くなくつても、自分は矢張り同樣の結果に陷るだらうと思ふ。——小野さんはかう考へて歩いて行く。

如何に人情でも、こんなに優柔ではいけまい。手を拱いて、自然の爲すが儘にして置いたら、事件はど

う發展するか分らない。想像すると怖しくなる。人情に屈託してゐれば居る程、怖しい發展を、眼のあたりに見る樣になるかもしれぬ。是非こゝで、どうかせねばならん。然し、まだ二三日の餘裕はある。二三日能く考へた上で決斷しても遲くはない。二三日立つて善い智慧が出なければ、其時こそ仕方がない。淺井を捕へて、孤堂先生への談判を賴んで仕舞ふ。實はさつきも其考で、淺井の歸りを勘定に入れて、二三日の猶豫をと云つた。こんな事は人情に拘泥しない淺井に限る。自分の樣な情に篤いものは到底斷わり切れない。――小野さんはかう考へて歩いて行く。

月はまだ天のなかに居る。流れんとして流るゝ氣色も見えぬ。地に落つる光は、冴ゆる暇なきを、重たき溫氣に封じ込められて、限りなき大夢を半空に曳く。乏しい星は雲を潛つて向側へ拔けさうに見える。綿のなかに砲彈を打ち込んだのが辛うじて輝やく樣だ。靜かに重い宵である。小野さんは此なかを考へながら歩いて行く。今夜は半鐘も鳴るまい。

十五

部屋は南を向く。佛蘭西式の窓は床を去る事五寸にして、すぐ硝子となる。明け放てば日が這入る。溫かい風が這入る。日は椅子の足で留まる。風は留まる事を知らぬ故、容赦なく天井迄吹く。窓掛の裏迄渡る。からりとして朗らかな書齋になる。

佛蘭西窓を右に避けて一脚の机を据ゑる。蒲鉾形に引戸を卸せば、上から錠がかゝる。明ければ、綠の羅紗を張り詰めた眞中を、斜めに低く手元へ削つて、脊を平らかに、書を開くべき便宜とする。下は左右

を銀金具の抽出に疊み卸して其四つ目が床に着く。床は樟の木の寄木に假漆を掛けて、禮に叶はぬ靴の裏を、ともすれば危からしめんと、てら〳〵する。

其外に洋卓がある。チツペンデールとヌーヴォーを取り合せた樣な組み方に、思ひ切つた今樣を華奢な昔に忍ばして、室の眞中を占領してゐる。周圍に竝ぶ四脚の椅子は無論同式の構造である。繻子の模樣も對とは思ふが、日除の白薇に、卸す腰も、凭れる脊も、只心安しと氣を樂に落ち付ける許で、目の保養にはならぬ。

書棚は壁に片寄せて、間の高さを九尺列ねて戸口迄續く。組めば重ね、離せば一段の棚を喜んで、亡き父が西洋から取り寄せたものである。一杯に竝べた書物が紺に、黄に、色々に、床かしき光を闘はすなかに花文字の、角文字の金は、縱にも横にも奇麗である。

小野さんは欽吾の書齋を見る度に羨しいと思はぬ事はない。欽吾も無論嫌つては居らぬ。もとは父の居間であつた。仕切りの戸を一つ明けると直應接間へ拔ける。殘る一つを出ると内廊下から日本座敷へ續く。洋風の二間は、父が手狹な住居を、廿世紀に取り擴げた便利の結果である。趣味に叶ふと云はんよりは、寧ろ實用に逼られて、時好の程度に己れを委却した建築である。左程に嬉しい部屋ではない。けれども小野さんは非常に羨ましがつて居る。

かう云ふ書齋に這入つて、好きな書物を、好きな時に讀んで、厭きた時分に、好きな人と好きな話をしたら極樂だらうと思ふ。博士論文はすぐ書いて見せる。博士論文を書いたあとは後代を驚ろかす樣な大著述をして見せる。定めて愉快だらう。然し今の樣な下宿住居で、隣り近所の亂調子に頭を攪き廻される樣

では到底駄目である。今の樣に過去に追窮されて、義理や人情の紛紜に、日夜共心を使つて居ては到底駄目である。自慢ではないが自分は立派な頭腦を持つてゐる。立派な頭腦を持つてゐるものは、此頭腦を使つて世間に貢獻するのが天職である。天職を盡す爲には、盡し得る丈の條件が入る。かう云ふ書齋は其條件の一つである。――小野さんはかう云ふ書齋に這入りたくて堪らない。

高等學校こそ違へ、大學では甲野さんも小野さんも同年であつた。哲學と純文學は科が異なるから、小野さんは甲野さんの學力を知り樣がない。只「哲世界と實世界」と云ふ論文を出して卒業したと聞く許である。「哲世界と實世界」の價値は、讀まぬ身に分る筈がないが、兎に角甲野さんは時計を頂戴して居らん。自分は頂戴して居る。恩賜の時計は時を計るのみならず、腦の善惡をも計る。未來の進歩と、學界の成功をも計る。特典に洩れた甲野さんは大した人間ではないに極つてゐる。其上卒業してから是と云ふ研究もしない樣だ。深い考を内に蓄へて居るかも知れぬが、蓄へて居るならもう出す筈である。出さぬは蓄がない證據と見て差支ない。どうしても自分は甲野さんより有益な材である。その有益な材を抱いて奔走に、六十圓に、月々を衣食するに、甲野さんは、手を拱いて、徒然の日を退屈さうに暮らしてゐる。此書齋を甲野さんが占領するのは勿體ない。自分が甲野の身分で此部屋の主人となる事が出來るなら、此二年の間に相應の仕事はしてゐるものを、親讓りの貧乏に、驥も櫪に伏す天の不公平を、已を得ず、今日迄忍んで來た。一陽は幸なき人の上にも來り復ると聞く。願くは〳〵と小野さんは日頃に念じてゐた。――知らぬ甲野さんはほつ然として机に向つてゐる。

正面の窓を明たらば、石一級の歩に過ぎずして、廣い芝生を一目に見渡すのみか、朗な氣が地つゞきを、

すぐ部屋のなかに這入るものを、甲野さんは締め切つた儘、ひそりと立て籠つてゐる。
右手の小窓は、硝子を下した上に、左右から垂れかゝる窓掛に半ば蔽はれてゐる。通ふ光線は幽かに床の上に落つる。窓掛は海老茶の毛織に浮出しの花模様を埃の儘に、二十日程は動いた事がない様である。色も大分褪めた。部屋と調和のない裝飾も、過渡時代の日本には當然として立派に通用する。窓掛の隙間から硝子へ顏を壓し付けて、外を覗くと扇骨木の植込を通して池が見える。棒縞の間から横へ拔けた波模樣の樣に、途切れ〱に見える。池の筋向が藤尾の座敷になる。甲野さんは植込も見ず、池も見ず、芝生も見ず、机に凭つて凝としてゐる。焚き殘された去年の石炭が、煖爐のなかに只一個冷やかに春を觀ずる體である。

やがて、かたりと書物を置き易へる音がする。甲野さんは手垢の着いた、例の日記帳を取り出して、誌け始める。

「多くの人は吾に對して惡を施さんと欲す。同時に吾の、彼等を目して兇徒となすを許さず。又其兇暴に抗するを許さず。曰く。命に服せざれば汝を嫉まんと」

細字に書き終つた甲野さんは、其後に片假名でレオパルヂと入れた。日記を右に片寄せる。置き易へた書物を再び故の座に直して、靜かに讀み始める。細い靑貝の軸を着けた洋筆がころ〱と机を滑つて床に落ちた。ほたりと黑いものが足の下に出來る。甲野さんは兩手を机の角に突張つて、心持腰を後へ浮かしたが、眼を落して先づ黑いしたゝりを眺めた。丸い輪に墨が餘つて潑と四方に飛んでゐる。靑貝は寐返りを打つて、薄暗いなかに冷たさうな長い光を放つ。甲野さんは椅子をづらす。手搜に取り上げた洋筆軸は

父が西洋から買つて來て呉れた昔土産である。

甲野さんは、指先に軸を撮んだ手を裏返して、拾つた物を、指の谷から滑らして掌のなかに落し込む。掌の向を上下に易へると、長い軸は、ころ〱と前へ行き後ろへ戻る。動くたびにきらきら光る。小さい記念である。

洋筆軸を轉がし乍ら、書物の續きを讀む。頁をはぐると斯んな事が、かいてある。

「劍客の劍を舞はすに、力相若くときは劍術は無術と同じ。彼、此を一籌の末に制する事能はざれば、學ばざるものゝ相對して敵となるに等しければなり。人を欺くも亦之に類す。欺かるゝもの、欺くものと一樣の譎詐に富むとき、二人の位地は、誠實を以て相對すると毫も異なる所なきに至る。此故に僞と惡とは優勢を引いて援護となすにあらざるよりは、不足僞、不足惡に出會するにあらざるよりは、最後に、至善を敵とするにあらざるよりは、――效果を收むる事難しとす。第三の場合は固より稀なり。第二も亦多からず。兇漢は敗德に於て匹敵するを以て常態とすればなり。人相賊して遂に達する能はず、或は千辛萬苦して始めて達し得べきものも、たゞ互に善を行ひ德を施こして容易に到り得べきを思へば、悲しむべし」

甲野さんは又日記を取り上げた。青貝の洋筆軸を、ほとりと墨壺の底に落す。落した儘容易に上げないと思ふと、遂には手を放した。レオパルヂは開いた儘、黄な表紙の日記を頁の上に載せる。兩足を踏張つて、組み合せた手を、頸根にうんと椅子の脊に凭れかゝる。仰向く途端に父の半身畫と顔を見合はした。餘り大きくはない。半身とは云へ胴衣の釦が二つ見へる丈である。服はフロックと思はれるが、背景の暗いうちに吸ひ取られて、明らかなのは、僅かに洩るゝ白襯衣の色と、額の廣い顔丈である。

名ある人の筆になると云ふ。三年前歸朝の節、父は此一面を携へて、遙かなる海を横濱の埠頭に上つた。夫より以後は、欽吾が仰ぐ度に壁間に懸つてゐる。仰がぬ時も壁間から欽吾を見下してゐる。筆を執るときも、頬杖を突くときも、假寐の頭を机に支ふるときも——絶えず見下してゐる。欽吾が居ない時ですら、畫布の人は、常に書齋を見下してゐる。

見下す丈あつて活きて居る。眼玉に締りがある。それも丹念に塗りたくつて、根氣任せに錬り上げた眼玉ではない。一刷毛に輪廓を描いて、眉と瞼の間に自然の影が出來る。下瞼の垂味が見える。取る年が集つて目尻を引張る波足が浮く。其中に瞳が活きてゐる。動かないでしかも活きてゐる刹那の表情を、其儘畫布に落した手腕は、會心の機を早速に捕へた非凡の技と云はねばならぬ。甲野さんは此眼を見る度に活きてるなと思ふ。

想界に一瀾を點ずれば、千瀾追ふて至る。瀾々相擁して思索の郷に、吾を忘るゝとき、懊惱の頭を上げて、此眼にはたりと逢へば、あつ、在つたなと思ふ。ある時はおや居たかと驚ろく事さへある。——甲野さんがレオパルヂから眼を放して、萬事を椅子の脊に託した時は、常よりも烈しくおや居たなと驚ろいた。

思出の種に、亡き人を忍ぶ片身とは、思ひ出す便を與へながら、亡き人を故に返さぬ無慘なものである。肌に離さぬ數絲の髪を、懷いては、泣いては、月日は只先へと廻るのみの浮世である。片身は燒くに限る。父が死んでからの甲野さんは、何となく此畫を見るのが厭になつた。離れても別狀がないと落付の根城を据ゑて、咫尺に慈顏を髣髴するは、離れたる親を、記憶の紙に炙り出すのみか、逢へる日を春に待てとの占にもなる。が、逢はうと思つた本人はもう死んで仕舞つた。活きてゐるものは只眼玉丈である。夫すら

活きて居るのみで毫も動かない。——甲野さんは茫然として、眼玉を睜めながら考へてゐる。

親父も氣の毒な事をした。もう少し生きれば生きられる年だのに。髭も丸で白くはない。血色もみづみづして居る。死ぬ氣は無論なかつたらう。氣の毒な事をした。どうせ死ぬなら、日本へ歸つてから死んで呉れゝば好いのに。言ひ置いて行きたい事も定めてあつたらう。聞きたい事、話したい事も澤山あつた。惜い事をした。好い年をして三遍も四遍も外國へ遣られて、しかも任地で急病に罹つて頓死して仕舞つた。……

活きて居る眼は、壁の上から甲野さんを見詰めてゐる。甲野さんは椅子に倚り掛つた儘、壁の上を見詰めて居る。二人の眼は見る度にぴたりと合ふ。凝として動かずに、合はした儘の秒を重ねて分に至ると、向ふの眸が何となく働らいて來た。睛を閑所に轉ずる氣紛の働ではない。打ち守る光が次第に強くなつて、眼を拔けた魂がじりじりと一直線に甲野さんに逼つて來る。甲野さんはおやと、首を動した。髪の毛が、椅子の背を離れて二寸許前へ出た時、もう魂は居なくなつた。何時の間にやら、眼のなかへ引き返したと見える。一枚の額は依然として一枚の額に過ぎない。甲野さんは再び黒い頭を椅子の肩に投げかけた。

馬鹿々々しい。が近頃時々斯んな事がある。身體が衰弱した所爲か、頭腦の具合が惡いからだらう。夫にしても此畫は厭だ。なまじい親父に似て居る丈が猶氣掛りである。死んだものに心を殘したつて始まらないのは知れて居る。所へ死んだものを鼻の先へぶら下げて思へ思へと催促されるのは、木刀を突き付けて、さあ腹を切れと逼られる樣なものだ。うるさいのみか不快になる。

それも唯の場合なら兎も角である。親父の事を思ひ出す度に、親父に氣の毒になる。今の身と、今の心

は自分にさへ氣の毒である。實世界に住むとは、名許の衣と住と食とを貪る丈で、頭は外の國に、母も妹も忘れゝばこそ、斯う生きても居る。實世界の地面から、踵を上げる事を解し得ぬ利害の人の眼に見たら、定めし馬鹿の骨頂だらう。自分は自分に凡てを棄てる覺悟があるにもせよ、此體たらくを親父には見せ度ない。親父は只の人である。草葉の蔭で親父が見てゐたら、定めて不肖の子と思ふだらう。不肖の子は親父の事を思ひ出したくない。思ひ出せば氣の毒になる。——どうも此書はいかん。折があつたら藏のなかへでも片付てしまはう。……

十人は十人の因果を有つ。羹に懲りて膾を吹くは、株を守つて兎を待つと、等しく一樣の大律に支配せらる。白日天に中して萬戸に午砲の飯を炊ぐとき、蹠下の民は褥裏に夜半太平の計を熟す。甲野さんが只一人書齋で考へて居る間に、母と藤尾は日本間の方で小聲に話して居る。

「おやあ、未だ話さないんですね」と藤尾が云ふ。茶の勝つた節糸の袷は存外地味な代りに、長く明けた袖の後から紅絹の裏が婀娜な色を一筋なまめかす。帶に代赭の古代模樣が見える。織物の名は分らぬ。

「欽吾にかい」と母が聞き直す。是もくすんだ縞物を、年相應に着こなして、腹合せの黑繻が目に着く程に締めてゐる。

「えゝ」と應じた藤尾は

「兄さんは、まだ知らないんでせう」と念を押す。

「未だ話さないよ」と云つた限、母は落ち付いてゐる。座布團の縁を捲つて、

「おや、羅宇はどうしたらう」と云ふ。

烟管は火鉢の向ふ側にある。長い羅宇を、逆に、親指の股に挾んで
「はい」と手取形の鐵瓶の上から渡す。
「話したら何とか云ふでせうか」と差し出した手を此方側へ引く。
「云へば御癈しかい」と母は皮肉に云ひ切つた儘、下を向いて、雁首へ雲井を詰める。娘は答へなかつた。答へをすれば弱くなる。尤も強い返事をしやうと思ふときは默つてゐるに限る。無言は黄金である。五徳の下で、存分に吸ひ付けた母は、鼻から出る烟と共に口を開いた。
「話は何時でも出來るよ。話すのが好ければ私が話して上げる。なに相談するがものはない。斯う云ふ風にする積だからと云へば、夫限の事だよ」
「そりや私だつて、自分の考が極つた以上は、兄さんがいくら何と云つたつて承知しやしませんけれども……」
「何にも云へる人ぢやないよ。相談相手に出來る位なら、初手から斯うしないでも外にいくらも遣口はあらあね」
「でも兄さんの心持一つで、此方が困る樣になるんだから」
「さうさ。夫さへなければ、話も何も要りやしないんだが。どうも表向家の相續人だから、あの人がうんと云つて呉れないと、此方が路頭に迷ふ樣になる許だからね」
「其癖、何か話すたんびに、財産はみんな御前に遣るから、其積でゐるがいゝつて云ふんですがね」
「云ふ丈ぢや仕方がないぢやないか」

「まさか催促する譯にも行かないでせう」
「なに呉れるものなら、催促して貰つたつて、構はないんだが――只世間體がわるいからね。いくらあの人が學者でも此方からさうは切り出し惡いよ」
「だから、話したら好ゝぢやありませんか」
「何を」
「何をつて、あの事を」
「小野さんの事かい」
「えゝ」と藤尾は明瞭に答へた。
「話しても好いよ。どうせ何時か話さなければならないんだから」
「さうしたら、何うにかするでせう。丸つ切り財産を呉れる積なら、呉れるでせうし。幾らか分けて呉れる氣なら、分けるでせうし。家が厭なら何所へでも行くでせうし」
「だが、御母さんの口から、御前の世話にはなりたくないから藤尾をどうかして呉れとも云ひ惡いからね」
「だつて向で世話をするのが厭だつて云ふんぢやありませんか。世話は出來ない、財産はやらない。それぢや御母さんを何うする積なんです」
「どうする積も何も有やしない。只あゝやつて愚圖々々して人を困らせる男なんだよ」
「少しは此方の樣子でも分りさうなもんですがね」

母は默つて居る。
「此間金時計を宗近にやれつて云つた時でも……」
「小野さんに上げると御云ひのかい」
「小野さんにとは云はないけれども。一さんに上げるとは云はなかつたわ」
「妙だよあの人は。藤尾に養子をして、面倒を見て御貰ひなさいと云ふかと思ふと、矢つ張り御前を一に遣りたいんだよ。だつて一は一人息子ぢやないか。養子なんぞに來られるものかね」
「ふん」と受けた藤尾は、細い首を横に庭の方を見る。夕暮を促がすとのみ眺められた遲櫻は、悉く梢を辭して、光る茶色の嫩葉さへ吹き出してゐる。左に茂る三四本の扇骨木の丸く刈り込まれた間から、書齋の窓が少し見える。思ふさま片寄て枝を伸した櫻の幹を、右へ離れると池になる。池が盡きれば張り出した自分の座敷である。
靜かな庭を一目見廻はした藤尾は再び横顏を返して、母を眞向に見る。母はさつきから藤尾の方を向いたなり眼を放さない。二人が顏を合せた時、何を思つたか、藤尾は美しい片頰をむづつかせた。笑と迄片付ぬものは、明かに浮ばぬ先に自然と消える。
「宗近の方は大丈夫なんでせうね」
「大丈夫でなくつたつて、仕方がないぢやないか」
「でも斷つて下すつたんでせう」
「斷つたんだとも。此間行つた時に、宗近の阿爺に逢つて、よく理由は話して來たのさ。――歸つてか

ら御前にも話した通り」
「夫は覺えてゐますけれども、何だか判然しない樣だつたから」
「判然しないのは向うの事さ。阿爺があの通り氣の長い人だもんだから」
「此方でも判然とは斷はらなかつたんでせう」
「そりや今迄の義理があるから、さう小供の使の樣に、藤尾が厭だと申しますから、平に御斷はり申しますとは云へないからね」
「なに厭なものは、どうしたつて好くなりつこ無いんだから、一層平つたく云つた方が好いんですよ」
「だつて、世間はさうしたもんぢやあるまい。御前はまだ年が若いから露骨でも構はないと御思ひかも知れないが、世の中はさうは行かないよ。同じ斷はるにしても、そこにはね。矢つ張り蓋も味もある樣に云はないと──只怒らして仕舞つたつて仕方がないから」
「何とか云つて斷つたのね」
「欽吾がどうあつても嫁を貰ふと云つて呉れません。私も取る年で心細う御座いますから」と一と息に下して來る。一寸御茶を呑む。
「年を取つて心細いから」
「心細いから、欽吾があの儘押し通す料簡なら、藤尾に養子でもして掛かるより外に致し方が御座いません。すると一さんは大事な宗近家の御相續人だから私共へ入らしつて頂く譯にも行かず、又藤尾を差し上げる譯にも參らなくなりますから……」

「それぢや兄さんがもしや御嫁を貰ふと云ひ出したら困るでせう」
「なに大丈夫だよ」と母は淺黑い額へ癇癪の八の字を寄せた。八の字はすぐとれる。やがて云ふ。
「貰ふなら、貰ふで、糸子でも何でも勝手な人を貰ふがいゝやね。此方は此方で早く小野さんを入れて仕舞ふから」
「でも宗近の方は」
「いゝよ。さう心配しないでも」と地烈太さうに云ひ切つた後で
「外交官の試驗に及第しないうちは嫁所ぢやないやね」と付けた。
「もし及第したら、すぐ何か云ふでせう」
「だつて、彼男に及第が出來ますものかね。考へて御覽な。――もし及第なすつたら藤尾を差上ませうと約束したつて大丈夫だよ」
「さう云つたの」
「さうは云はないさ。さうは云はないが、云つても大丈夫、及第出來つ子ない男だあね」
藤尾は笑ながら、首を傾けた。やがてすつきと姿勢を正して、話を切り上げながら云ふ。
「ぢや宗近の御叔父は慥かに斷はられたと思つてるんですね」
「思つてる筈だがね。――どうだい、あれから一の樣子は、少しは變つたかい」
「矢つ張同じですからさ。此間博覽會へ行つたときも相變らずですもの」
「博覽會へ行つたのは、何時だつたかね」

「今日で」と考へる。「一昨日、一昨々日の晩です」と云ふ。
「そんなら、もう一に通じてゐる時分だが。――尤も宗近の御叔父があゝ云ふ人だから、殊に依ると謎が通じなかつたかも知れないね」とさも齒痒さうである。
「それとも一さんの事だから、御叔父から聞いても平氣で居るのかも知れないわね」
「さうさ。何方が何方とも云へないね。ぢや、かうし樣。兎も角も欽吾に話して仕舞はう。――こつちで默つて居ちや、何時迄立つても際限がない」
「今、書齋にゐるでせう」
母は立ち上がつた。椽側へ出た足を一歩後へ返して、小聲に
「御前、一に逢ふだらう」と屈作ら云ふ。
「逢ふかも知れません」
「逢つたら少し匂はして置く方が好いよ。小野さんと大森へ行くとか云つてゐたぢやないか。明日だつたかね」
「えゝ。明日の約束です」
「何なら二人で遊んで歩く所でも見せてやると好い」
「ホヽヽヽ」
母は書齋に向ふ。
からりとした椽を通り越して、奇麗な木理を一面に研ぎ出してある西洋間の戸を半分明けると、立て切

つた中は暗い。圓鈕を前に押しながら、開く戸に身を任せて、音なき兩足を寄木の床に落した時、釦のかちやりと跳ね返る音がする。窓掛に春を遮ぎる書齋は、薄暗く二人を、人の世から仕切つた。

「暗い事」と云ひながら、母は眞中の洋卓迄來て立ち留まる。椅子の脊の上に首丈見えた欽吾の後姿が、聲のした方へ、じいつと廻り込むと、なぞへに引いた眉の切れが三が一ほどあらはれた。黒い片髭が上唇を滑ふて、自然と下りて來て、盡んとする角から、急に捲き返す。口は結んでゐる。同時に黒い眸は眼尻迄寄つて來た。母と子は此姿勢のうちに互を認識した。

「陰氣だねえ」と母は立ちながら繰り返す。

無言の人は立ち上る。上靴を二三度床に鳴らして、洋卓の角迄足を運ばした時、始めて

「窓を明けませうか」と緩り聞いた。

「どうでも――母さんはどうでも構はないが、只御前が鬱陶しいだらうと思つてさ」

無言の人は再び右の手の平を、洋卓越に前へ出した。促がされたる母は先づ椅子に着く。欽吾も腰を卸した。

「どうだね、具合は」

「難有う」

「ちつとは好い方かね」

「えゝ――先あ――」と生返事をした時、甲野さんは脊を引いて腕を組んだ。同時に洋卓の下で、右足の甲の上へ左の外踝を乗せる。母の眼からは、只裄の縮んだ卵色の襯衣の袖が正面に見える。

「身體を丈夫にして呉れないとね、母さんも心配だから……」
何の切れぬうちに、甲野さんは自分の顎を咽喉へ押し付けて、洋卓の下を覗き込んだ。黒い足袋が二つ重なつてゐる。母の足は見えない。母は出直した。
「身體が惡いと、つい氣分迄鬱陶敷なつて、自分も面白くないし……」
甲野さんは不圖眼を上げた。母は急に言葉を移す。
「でも京都へ行つてから、少しは好い樣だね」
「さうですか」
「ホヽヽ、さうですかつて、他人の事の樣に。――何だか顔色が丈夫くして來たぢやないか。日に燒けた所爲かね」
「さうかも知れない」と甲野さんは、首を向け直して、窓の方を見る。窓掛の深い襞が左右に切れる間から、扇骨木の若葉が燃える樣に硝子に映る。
「ちつと、日本間の方へ話にでも來て御覽。あつちは、廓つとして、書齋より心持が好いから。たまには、一の樣につまらない女を相手にして世間話をするのも氣が變つて面白いものだよ」
「難有う」
「どうせ相手になる程の話は出來ないけれども――それでも馬鹿は馬鹿なりにね。……」
甲野さんは眩しさうな眼を扇骨木から放した。
「扇骨木が大變奇麗に芽を吹きましたね」

「見事だね。却つて生じいな花よりも、好ござんすよ。此所からは、たつた一本しつきや見えないね。向へ廻ると刈り込んだのが丸く揃つて、そりや奇麗」

「あなたの部屋からが一番好く見える樣ですね」

「あゝ、御覽かい」

甲野さんは見たとも見ないとも云はなかつた。母は云ふ。――

「それにね。近頃は陽氣の所爲か池の緋鯉が、まことに能く跳るんで……此所から聞えますかい」

「鯉の跳ぶ音がですか」

「あゝ」

「いゝえ」

「聞えない。聞えないだらうね斯う立て切つて有つちやあ。母さんの部屋からでも聞えない位だから。此間藤尾に母さんは耳が惡くなつたつて、散々笑はれたのさ。――尤も、もう耳も惡くなつて好い年だから仕方がないけれども」

「藤尾は居ますか」

「ゐるよ。もう小野さんが來て稽古をする時分だらう。――何か用でもあるかい」

「いえ、用は別にありません」

「あれも、あんな、氣の勝つた子で、嘸御前さんの氣に障る事もあらうが、まあ我慢して、本當の妹だと思つて、面倒を見て遣つて下さい」

甲野さんは腕組の儘、じつと、深い瞳を母の上に据ゑた。母の眼は何故か洋卓の上に落ちてゐる。
「世話はする氣です」と徐かに云ふ。
「御前がさう云つて呉れると私もまことに安心です」
「する氣どころぢやない。したいと思つてゐる位です」
「それ程に思つて呉れると聞いたら當人も嘸喜ぶ事だらう」
「ですが……」で言葉は切れた。母は後を待つ。欽吾は腕組を解いて、椅子に倚る脊を前に、胸を洋卓の角へ着ける程母に近付いた。
「ですが、母さん。藤尾の方では世話になる氣がありません」
「そんな事が」と今度は母の方が身體を椅子の脊に引いた。甲野さんは一筋の眉さへ動かさない。同じ樣な低い聲を、靜かに繋げて行く。
「世話をすると云ふのは、世話になる方で此方を信仰――信仰と云ふのは神さまの樣で可笑しい」
甲野さんは此所でぽつりと言葉を切つた。母はまだ番が回つて來ないと心得たか、尋常に控へてゐる。
「兎に角世話になつても好いと思ふ位に信用する人物でなくつちや駄目です」
「そりや御前にさう見限られて仕舞へば夫迄だが」と此所迄は何の苦もなく出したが、急に調子を逼らして、
「藤尾も實は可哀想だからね。さう云はずに、どうかして遣つて下さい」と云ふ。甲野さんは肘を立てて、手の平で額を抑へた。

「だつて見縊られて居るんだから。世話を燒けば喧嘩になる許です」
「藤尾が御前さんを見縊るなんて……」と打ち消はしとやかな母にしては比較的に大きな聲であつた。
「そんな事があつては第一私が濟まない」と次に添へた時はもう常に復してゐた。
甲野さんは默つて肘を立てゝゐる。
「何か藤尾が不都合な事でもしたかい」
甲野さんは依然として額に加へた手の下から母を眺めてゐる。
「もし不都合があつたら、私から篤と云つて聞かせるから、遠慮しないで、何でも話して御呉れ。御互のなかで氣不味い事があつちあ面白くないから」
額に加へた五本の指は、節長に細りして、爪の形さへ女の樣に華奢に出來てゐる。
「藤尾は慥二十四になつたんですね」
「明けて四になつたのさ」
「もう何うかしなくつちやならないでせう」
「嫁の口かい」と母は簡單に念を押した。甲野さんは嫁とも聟とも判然した答をしない。母は云ふ。
「藤尾の事も、實は相談したいと思つてゐるんだが、其前にね」
「何ですか」
右の眉は矢張り手の下に隱れてゐる。眼の色は深い。けれども鋭い點は何所にも見えぬ。
「どうだらう。もう一遍考へ直してくれると好いがね」

「何をですか」
「御前の事をさ。藤尾も藤尾でどうかしなければならないが、御前の方を先へ極めないと、母さんが困るからね」
甲野さんは手の甲の影で片頬に笑つた。淋しい笑である。
「身體が惡いと御云ひだけれども、御前位な身體で御嫁を取つた人は幾何でもあります」
「そりや、有でせう」
「だからさ。御前も、もう一遍考へ直して御覧な。中には御嫁を貰つて大變丈夫になつた人もある位だよ」
甲野さんの手は此時始めて額を離れた。洋卓の上には一枚の罫紙に鉛筆が添へて載せてある。何氣なく罫紙を取り上げて裏を返して見ると三四行の英語が書いてある。讀み掛けて氣が付いた。昨日讀んだ書物の中から備忘の爲め抄録して、其儘に捨てゝ置いた紙片である。甲野さんは罫紙を洋卓の上に伏せた。
母は額の裏側丈に八の字を寄せて、甲野さんの返事を大人しく待つてゐる。甲野さんは鉛筆を執つて紙の上へ烏と云ふ字を書いた。
「どうだらうね」
烏と云ふ字が鳥になつた。
「さうして呉れると好いがね」
鳥と云ふ字が鴃の字になつた。其下に舌の字が付いた。さうして顔を上げた。云ふ。

「まあ藤尾の方から極めたら好いでせう」
「御前が、どうしても承知して呉れなければ、さうするより外に道はあるまい」
云ひ終つた母は悄然として下を向いた。同時に悴の紙の上に三角が出來た。三角が三つ重なつて鱗の紋になる。
「母かさん。家は藤尾に遣りますよ」
「それぢや御前……」と打ち消にかゝる。
「財産も藤尾に遣ります。私は何にも入らない」
「それぢや私達が困るばかりだあね」
「困りますか」と落ち付いて云つた。母子は一寸眼を見合せる。
「困りますかつて。──私が、死んだ阿父さんに濟まないぢやないか」
「さうですか。ぢや何うすれば好いんです」と飴色に塗つた鉛筆を洋卓の上にはたりと放り出した。
「どうすれば好いか、どうせ母さんの樣な無學なものには分らないが、無學は無學なりにそれぢや濟まないと思ひますよ」
「厭なんですか」
「厭だなんて、そんな勿體ない事を今迄云つた事があつたかね」
「有りません」
「私も無い積だ。御前がさう云つて呉れるたんびに、御禮は始終云つてるぢやないか」

「御禮は始終聞いてゐます」
母は轉がつた鉛筆を取り上げて、尖つた先を見た。丸い護謨の尻を見た。心のうちで手の付け樣のない人だと思つた。やゝあつて護謨の尻をきゆうつと洋卓の上へ引つ張りながら云ふ。
「ぢや、何うあつても家を襲ぐ氣はないんだね」
「家は襲いでゐます。法律上私は相續人です」
「甲野の家は襲いでも、母かさんの世話はして呉れないんだね」
甲野さんは返事をする前に、眸を長い眼の眞中に据ゑてつくづくと母の顏を眺めた。やがて
「だから、家も財産もみんな藤尾にやると云ふんです」と慇懃に云ふ。
「夫程に御云ひなら、仕方がない」
母は溜息と共に、此一句を洋卓の上に打ち遣つた。甲野さんは超然として居る。
「ぢや仕方がないから、御前の事は御前の思ひ通りにするとして、――藤尾の方だがね」
「えゝ」
「實はあの小野さんが好からうと思ふんだが、どうだらう」
「小野をですか」と云つた限り、默つた。
「不可まいか」
「不可ない事もないでせう」と緩くり云ふ。
「可ければ、さう極めやうと思ふが……」

甲野さんは眤と眼を凝らして正面に何物をか見詰めて居る。恰も前にある母の存在を認めざる如くである。

「えゝ」

「夫で漸く安心した」

「好いかい」

「好いでせう」

「夫で漸く――御前どうか御爲かい」

「母かさん、藤尾は承知なんでせうね」

「無論知つてるよ。何故」

甲野さんは、矢張り遠方を見てゐる。やがて瞬を一つすると共に、眼は急に近くなつた。

「宗近は不可ないんですか」と聞く。

「一かい。本來なら一が一番好いんだけれども。――父さんと宗近とは、あゝ云ふ間柄ではあるしね」

「約束でもありやしなかつたですか」

「約束と云ふ程の事はなかつたよ」

「何だか父さんが時計を遣るとか云つた事がある樣に覺えてるますが」

「時計?」と母は首を傾げた。

「父さんの金時計です。柘榴石の着いてゐる」

「あゝ、さう〳〵。そんな事が有つた樣だね」と母は思ひ出した如くに云ふ。
「一はまだ當にしてゐる樣です」
「さうかい」と云つた限り母は澄ましてゐる。
「約束があるなら遣らなくつちや惡い。義理が缺ける」
「時計は今藤尾が預つてゐるから、私から、よく、さう云つて置かう」
「時計もだが、藤尾の事を重に云つてるんです」
「だつて藤尾を遣らうと云ふ約束は丸で無いんだよ」
「さうですか。――夫ぢや、好いでせう」
「さう云ふと私が何だか御前の氣に逆ふ樣で惡いけれども、――そんな約束は丸で覺がないんだもの」
「はあゝ。ぢや無いんでせう」
「そりやね。約束があつても無くつても、一なら遣つても好いんだが、あれも外交官の試驗がまだ濟まないんだから勉强中に嫁でもあるまいし」
「そりや、構はないです」
「夫に一は長男だから、どうしても宗近の家を襲がなくつちやならずね」
「藤尾へは養子をする積なんですか」
「したくはないが、御前が母かさんの云ふ事を聞いて御呉れでないから……」
「藤尾がわきへ行くにしても、財産は藤尾に遣ります」

「財産は――御前私の料簡を間違へて取つて御呉れだと困るが――母さんの腹の中には財産の事なんか丸でありやしないよ。そりや割つて見せたい位に奇麗な積だがね。さうは見えないか知ら」

「見えます」と甲野さんが云つた。極めて眞面目な調子である。母にさへ嘲弄の意味には受取れなかつた。

「成程」

「只年を取つて心細いから……たつた一人の藤尾を遣つて仕舞ふと、後が困るんでね」

「でなければ一が好いんだがね。御前とも仲が善し……」

「母かさん、小野をよく知つてゐますか」

「知つてる積です。叮嚀で、親切で、學問が能く出來て立派な人ぢやないか。――何故」

「そんなら好いです」

「さう素氣なく云はずと、何か考があるなら聞かして御呉れな。折角相談に來たんだから」

しばらく野紙の上の樂書を見詰めてゐた甲野さんは眼を上げると共に穩かに云ひ切つた。

「宗近の方が小野より母さんを大事にします」

「そりや」と忽ち出る。後から靜かに云ふ。

「さうかも知れない――御前の見た眼に間違はあるまいが、外の事と違つて、是許は親や兄の自由には行かないもんだからね」

「藤尾が是非にと云ふんですか」

「え、まあ——是非とも云ふまいが」
「そりや私も知つてゐる。知つてるんだが。——藤尾は居ますか」
「呼びませう」
母は立つた。薄紅色に深く唐草を散らした壁紙に、立ちながら、手頃に届く電鈴を、白きたゞ中に押すと、座に返る程なきに應がある。入口の戸が五寸許そつと明く。所を振り返つた母か
「藤尾に用があるから一寸」と云ふ。そつと明いた戸はそつと締る。
母と子は洋卓を隔てゝ差し向ふ。互に無言である。欽吾はまた鉛筆を取り上げた。三つ鱗の周圍に擦れ〳〵の大きさに圓を描く。圓と鱗の間を塗る。黒い線を一本一本叮嚀に並行させて行く。母は所在なさに、悴の圖案を慇懃に眺めて居る。
二人の心は無論わからぬ。只上部丈は如何にも靜である。もし手足の擧止が、內面の消息を形而下に運び來る記號となり得るならば、此二人程に長閑な母子は容易に見出し得まい。退屈の刻を、數十の線に劃して、行儀よく三つ鱗の外部を塗り潰す子と、尋常に手を膝の上に重ねて、一劃毎に黒くなる圓の中を、端然と打ち守る母とは、咸雍の母子である。和怡の母子である。挾さむ洋卓に、遮らるゝ胸と胸を對ひ合せて、春鎖す窓掛のうちに、世を、人を、爭を、忘れたる姿である。亡き人の肖像は例に因つて、壁の上から、閑靜なる此母子を照らしてゐる。
丹念に引く線は漸く繁くなる。黒い部分は次第に増す。殘るは只右手に當る弓形の一ケ所となつた時、がちやりと釘舌を捩る音がして、待ち設けた藤尾の姿が入口に現はれた。白い姿を春に託す。深い背景の

うちに肩から上が浮いて見える。甲野さんの鉛筆は引きかけた線の半ばでぴたりと留つた。同時に藤尾の顔は背景を抜け出して來る。

「炙り出しはどうして」と言ひながら、母の隣迄來て、横合から腰を卸す。卸し終つた時、また、

「出て？」と母に聞く。母は只藤尾の方を意味ありげに見たのみである。甲野さんの黒い線は此間に四本増した。

「兄さんが御前に何か御用があると御云ひだから」

「さう」と云つたなり、藤尾は兄の方へ向き直つた。黒い線がしきりに出來つゝある。

「兄さん、何か御用」

「うん」と云つた甲野さんは、漸く顔を上げた。顔を上げたなり何とも云はない。

藤尾は再び母の方を見た。見ると共に薄笑の影が奇麗な頬にさす。兄はやつと口を切る。

「藤尾、此家と、私が父さんから受け襲いだ財産はみんな御前にやるよ」

「何時」

「今日から遣る。——其代り、母さんの世話は御前がしなければ不可ない」

「難有う」と云ひながら、又母の方を見る。矢張笑つて居る。

「御前宗近へ行く氣はないか」

「えゝ」

「ない？どうしても厭か」

「厭です」
「さうか。――そんなに小野が好いのか」
藤尾は屹となる。
「それを聞いて何になさる」と椅子の上に脊を伸して云ふ。
「何にもしない。私の爲には何にもならない事だ。只御前の爲に云つて遣るのだ」
「私の爲に？」と言葉の尻を上げて置いて、
「さう」とさも輕蔑した樣に落す。母は始めて口を出す。
「兄さんの考では、小野さんより一の方がよからうと云ふ話なんだがね」
「兄さんは兄さん。私は私です」
「兄さんは小野さんよりも一の方が、母さんを大事にして呉れると御言ひのだよ」
「兄さん」と藤尾は鋭く欽吾に向つた。「あなた小野さんの性格を知つて入らつしやるか」
「知つてゐる」と閑靜に云ふ。
「知つてるもんですか」と立ち上がる。「小野さんは詩人です。高尙な詩人です」
「さうか」
「趣味を解した人です。愛を解した人です。溫厚の君子です。――哲學者には分らない人格です。あなたには一さんは分るでせう。然し小野さんの價値は分りません。決して分りません。一さんを賞める人に小野さんの價値が分る譯がありません。……」

「ちや小野にするさ」

「無論します」

云ひ棄てゝ紫の絹は戸口の方へ搖いた。纎い手に圓鈕をぐるりと廻すや否や藤尾の姿は深い背景のうちに隠れた。

十六

敍述の筆は甲野の書齋を去つて、宗近の家庭に入る。同日である。又同刻である。

相變らずの唐机を控へて、宗近の父さんが鬼更紗の座蒲團の上に坐つて居る。襯衣を嫌つた、黒八丈の襦袢の襟が崩れて、素肌に、もぢや、もぢやと胸毛が見える。忌部燒の布袋の置物に斯んなのが能くある。布袋の前に異樣の烟草盆を置く。呉祥瑞の銘のある染付には山がある、柳がある、人物がゐる。人物と山と同じ位な大きさに描かれて居る間を、一筋の金泥が蜿蜒と縁迄這上る。形は甕の如く、鉢が開いて、開いた頂が、がつくりと縮まると、丸い縁になる。向ひ合せの耳を潜る蔓には、ぎり／＼と澁を帶びた籐を巻き付けて手提の便を計る。

宗近の父さんは昨日何處の古道具屋からか、繼のある此烟草盆を掘り出して來て、今朝から祥瑞だ、祥瑞だと騒いだ結果、灰を入れ、火を入れ、しきりに烟草を吸つて居る。

所へ入口の唐紙をさらりと開けて、宗近君が例の如く活潑に這入つて來る。父は烟草盆から眼を離した。見ると悴は親讓りの背廣をだぶ／＼に着て、カシミヤの靴足袋丈に、大なる通を極めて居る。

「何所ぞへ行くかね」
「行くんぢやない、今歸つた所です。――あゝ暑い。今日は餘つ程暑いですね」
「家に居ると、さうでもない。御前は無暗に急ぐから暑いんだ。もう少し落ち付いて歩いたらどうだ」
「充分落ち付いてゐる積なんだが、さう見えないかな。弱るな。――やあ、とう〳〵烟草盆へ火を入れましたね。成程」
「どうだ祥瑞は」
「何だか酒甕の樣ですね」
「なに烟草盆さ。御前達が何だ蚊だつて笑ふが、斯うやつて灰を入れて見ると矢つ張り烟草盆らしいだらう」
老人は蔓を持つて、ぐつと祥瑞を宙に釣るし上げた。
「どうだ」
「えゝ。好いですね」
「好いだらう。祥瑞は贋の多いもんで容易には買へない」
「全體幾何なんですか」
「若干だか當てゝ御覧」
「見當が着きませんね。滅多な事を云ふと又此間の松見た樣に頭ごなしに叱られるからな」
「壹圓八十錢だ。安いもんだらう」

「安いですかね」

「全く掘出だ」

「へえゝ――おや椽側にも亦新らしい植木が出來ましたね」

「さつき萬兩と植ゑ替へた。夫は薩摩の鉢で古いものだ」

「十六世紀頃の葡萄耳人が被つた帽子の樣な恰好ですね。――此薔薇は又大變赤いもんだな、こりあ」

「それは佛見笑と云つてね。矢つ張り薔薇の一種だ」

「佛見笑？妙な名だな」

「華嚴經に外面如菩薩、内心如夜叉と云ふ句がある。知つてるだらう」

「文句丈は知つてます」

「それで佛見笑と云ふんださうだ。花は奇麗だが、大變刺がある。觸つて御覽」

「なに觸らなくつても結構です」

「ハヽヽ、外面如菩薩、内心如夜叉。女は危ないものだ」と云ひながら、老人は雁首の先で祥瑞の中を穿り廻す。

「六づかしい薔薇があるもんだな」と宗近君は感心して佛見笑を眺めて居る。

「うん」と老人は思ひ出した樣に膝を打つ。

「一あの花を見た事があるかい。あの床に插してある」

老人は居ながら、顏の向を後へ變へる。捩れた頸に、行き所を失つた肉が、三筋程括られて肩の方へ競

り出して來る。
茶がかつた平床には、釣竿を擔いだ蜆子和尙を一筆に描いた軸を閑靜に掛けて、前に靑銅の古瓶を据ゑる。鶴程に長い頸の中から、すいと出る二莖に、十字と四方に圍ふ葉を境に、數珠に貫く露の珠が二穗宛偶を作つて咲いてゐる。
「大變細い花ですね。——見た事がない。何と云ふんですか」
「是が例の二人靜だ」
「例の二人靜? 例にも何にも今迄聞いた事がないですね」
「覺えて置くがいゝ。面白い花だ。白い穗が屹度二本宛出る。だから二人靜。謠曲に靜の靈が二人して舞ふと云ふ事がある。知つてゐるかね」
「知りませんね」
「二人靜。ハヽヽ面白い花だ」
「何だか因果のある花ばかりですね」
「調べさへすれば因果はいくらでもある。御前、梅に幾通あるか知つてるか」と烟草盆を釣るして、又烟管の雁首で灰の中を掻き廻す。宗近君は此機に乘じて話頭を轉換した。
「阿爺さん。今日ね、久し振に髪結床へ行つて、頭を刈つて來ました」と右の手で黑い所を撫で廻す。
「頭を」と云ひながら羅宇の中程を祥瑞の縁でとんと叩いて灰を落す。
「あんまり奇麗にもならんぢやないか」と眞向に歸つてから云ふ。

「奇麗にもならんぢやないかつて、阿爺さん、こりや五分刈ぢやないですぜ」
「おや何刈だい」
「分けるんです」
「分かつて居ないぢやないか」
「今に分かる樣になるんです。眞中が少し長いでせう」
「さう云へば心持長いかな。廢せばいゝのに、見つともない」
「見つともないですか」
「夫に是から夏向は熱苦しくつて……」
「所がいくら熱苦しくつても、かうして置かないと不都合なんです」
「何故」
「何故でも不都合なんです」
「妙な奴だな」
「ハヽヽ、實はね、阿爺さん」
「うん」
「外交官の試驗に及第してね」
「及第したか。そりや〳〵。さうか。そんなら早くさう云へば好いのに」
「まあ頭でも拵へてからに仕樣と思つて」

「頭なんぞは何うでも好いさ」
「所が五分刈で外國へ行くと懲役人と間違へられるつて云ひますからね」
「外國へ――外國へ行くのかい。何時」
「まあ此髪が延びて小野清三式になる時分でせう」
「ぢや、まだ一ヶ月位はあるな」
「えゝ、其位はあります」
「一ヶ月あるならまあ安心だ。立つ前にゆつくり相談も出來るから」
「えゝ時間はいくらでもあります。時間の方はいくらでもありますが、此洋服は今日限御返納に及びたいです」
「ハヽヽヽ不可んかい。能く似合ふぜ」
「あなたが似合ふ〳〵と仰しやるから今日迄着た樣なものゝ――至る所だぶ〳〵してゐますぜ」
「さうか夫ぢや廢すがいゝ。又阿爺さんが着やう」
「ハヽヽ、驚いたなあ。夫こそ御廢しなさい」
「廢しても好い。黑田にでも遣るかな」
「黑田こそいゝ迷惑だ」
「そんなに可笑しいかな」
「可笑しかないが、身體に合はないでさあ」

「さうか、夫ぢや矢つ張り可笑しいだらう」
「えゝ、つまる所可笑しいです」
「ハヽヽ、時に糸にも話したかい」
「試驗の事ですか」
「あゝ」
「まだ話さないです」
「まだ話さない。なぜ。――全體何時分つたんだ」
「通知のあつたのは二三日前ですがね。つい、忙しいもんだから、まだ誰にも話さない」
「御前は呑氣過ていかんよ」
「なに忘れやしません。大丈夫」
「ハヽヽ、忘れちや大變だ。まあもう、ちつと氣を付けるがいゝ」
「えゝ是から糸公に話してやらうと思つてね。――心配して居るから。――及第の件とそれから此頭の說明を」
「頭は好いが――全體何所へ行く事になつたのかい。英吉利か、佛蘭西か」
「其邊はまだ分らないです。何でも西洋は西洋でせう」
「ハヽヽ、氣樂なもんだ。まあ何所へでも行くが好い」
「西洋なんか行き度もないんだけれども――まあ順序だから仕方がない」

「うん、まあ勝手な所へ行くがいゝ」
「支那や朝鮮なら、故の通の五分刈で、此だぶ〳〵の洋服を着て出掛るですがね」
「西洋は八釜しい。御前の樣な不作法ものには好い修業になつて結構だ」
「ハ、、、西洋へ行くと墮落するだらうと思つてね」
「何故」
「西洋へ行くと人間を二た通り拵へて持つて居ないと不都合ですからね」
「二た通とは」
「不作法な裏と、奇麗な表と。厄介でさあ」
「日本でもさうぢやないか。文明の壓迫が烈しいから上部を奇麗にしないと社會に住めなくなる」
「其代り生存競爭も烈しくなるから、内部は益不作法になりまさあ」
「丁度なんだな。裏と表と反對の方角に發達する譯になるな。是からの人間は生きながら八つ裂の刑を受ける樣なものだ。苦しいだらう」
「今に人間が進化すると、神樣の顏へ豚の睾丸をつけた樣な奴ばかり出來て、それで落付が取れるかも知れない。いやだな、そんな修業に出掛けるのは」
「いつそ廢にするか。うちに居て親父の古洋服でも着て太平樂を竝べてゐる方が好いかも知れない。ハハ、、」
「ことに英吉利人は氣に喰はない。一から十迄英國が模範であると云はん許の顏をして、何でも蚊でも

我流で押し通さうとするんですからね」

「だが英國紳士と云つて近頃大分評判がいゝぢやないか」

「日英同盟だつて、何もあんなに賞めるにも當らない譯だ。彌次馬共が英國へ行つた事もない癖に、旗許押し立てゝ、丸で日本が無くなつた樣ぢやありませんか」

「うん。何所の國でも表が表丈に發達すると、裏も裏相應に發達するだらうからな。――なに國許ぢやない個人でもさうだ」

「日本がえらくなつて、英國の方で日本の眞似でもする樣でなくつちや駄目だ」

「御前が日本をえらくするさ。ハヽヽヽ」

宗近君は日本をえらくするとも、しないとも云はなかつた。不圖手を伸すと更紗の結襟が白襟の眞中迄浮き出して結目は横に捩れて居る。

「どうも、此襟飾は滑つて不可ない」と手探に位地を正しながら、

「おや糸に一寸話しませう」と立ちかける。

「まあ御待ち、少し相談がある」

「何ですか」と立ち掛けた尻を卸す機會に、準胡坐の姿勢を取る。

「實は今迄は、御前の位地もまだ極つて居なかつたから、左程にも云はなかつたが……」

「嫁ですかね」

「さうさ。どうせ外國へ行くなら、行く前に極めるとか、結婚するとか、又は連れて行くとか……」

「とても連れちや行かれませんよ。金が足りないから」
「連れて行かんでも好い。ちやんと片を付けて、さうして置いて行くなら。留守中は私が大事に預つてやる」
「私もさう仕樣と思つてるんです」
「どうだな其所で。氣に入つた婦人でもあるかな」
「甲野の妹を貰ふ積なんですがね。どうでせう」
「藤尾かい。うん」
「駄目ですかね」
「なに駄目ぢやない」
「外交官の女房にや、あゝ云ふんでないと不可ないです」
「そこでだて。實は甲野の親父が生きてるうち、私と親父の間に、少しは其話もあつたんだがな。御前は知らんかも知らんが」
「叔父さんは時計を遣ると云ひました」
「あの金時計かい。藤尾が玩弄にするんで有名な」
「えゝ、あの太古の時計です」
「ハヽヽ、あれで針が回るかな。時計はそれとして、實は肝心の本人の事だが——此間甲野の母さんが來た時、序だから話して見たんだがね」

「はあ、何とか云ひましたか」
「まことに好い御縁だが、まだ御身分が極つて御出でないから殘念だけれども……」
「身分が極らないと云ふのは外交官の試驗に及第しないと云ふ意味ですかね」
「まあ、さうだらう」
「だらうは些と驚ろいたな」
「いや、あの女の云ふ事は、非常に能辯な代りに能く意味が通じないで困る。滔々と述べる事は述べるが、遂に要點が分らない。要するに不經濟な女だ」
多少苦々しい氣色に、烟管でとんと膝頭を敲いた父さんは、視線さへ椽側の方へ移した。最前植ゑ易へた佛見笑が鮮な紅を春と夏の境に今ぞと誇つてゐる。
「だけれども斷つたんだか、斷らないんだか分らないのは厄介ですね」
「厄介だよ。あの女にかゝると今迄も隨分厄介な事が大分あつた。猫撫聲で長つたらしくつて――私や嫌だ」
「ハヽヽ、そりや好いが――遂に談判は發展しずに仕舞つたんですか」
「つまり先方の云ふ所では、御前が外交官の試驗に及第したら遣つてもいゝと云ふんだ」
「ぢや譯ない。此通り及第したんだから」
「所がまだあるんだ。面倒な事が。まことにどうも」と云ひながら父さんは、手の平を二つ内側へ揃へて眼の球をぐり〳〵擦る。眼の球は赤くなる。

「及第しても駄目なんですか」
「駄目ぢやあるまいが――欽吾がうちを出ると云ふさうだ」
「馬鹿な」
「もし出られて仕舞ふと、年寄の世話の仕手がなくなる。だから藤尾に養子をしなければならない。すると宗近へでも、何所へでも嫁にやる譯には行かなくなると、まあ斯う云ふんだな」
「下らない事を云ふもんですね。第一甲野が家を出るなんて、そんな譯がないがな」
「家を出るつて、まさか坊主になる料簡でもなからうが、つまり嫁を貰つて、あの御袋の世話をするのが厭だと云ふんだらうぢやないか」
「甲野が神經衰弱だから、そんな馬鹿氣た事を云ふんですよ。間違つてる。よし出るたつて――叔母さんが甲野を出して、養子をする氣なんですか」
「さうなつては大變だと云つて心配してるのさ」
「そんなら藤尾さんを嫁にやつても好ささうなものぢやありませんか」
「好い。好いが、萬一の事を考へると私も心細くつて堪らないと云ふのさ」
「何が何だか分りやしない。丸で八幡の藪不知へ這入つた樣なものだ」
「本當に――要領を得ないにも困り切る」
父さんは額に皺を寄せて上眼を使ひながら、頭を撫で廻す。
「元來そりや何時の事です」

「此間だ。今日で一週間にもなるかな」
「ハヽヽ、私の及第報告は二三日後れた丈だが、父さんのは一週間だ。親丈あつて、私より倍以上氣樂ですぜ」
「ハヽ、だが要領を得ないからね」
「要領は慥に得ませんね。早速要領を得る樣にして來ます」
「どうして」
「先づ甲野に妻帶の件を說諭して、坊主にならない樣にして仕舞つて、夫から藤尾さんを吳れるか吳れないか判然談判して來る積です」
「御前一人で遣る氣かね」
「えゝ、一人で澤山です。卒業してから何にもしないから、せめて斯んな事でもしなくつちや退屈でいけない」
「うん、自分の事を自分で片付けるのは結構な事だ。一つ遣つて見るが好い」
「それでね。もし甲野が妻を貰ふと云つたら糸を遣る積ですが好いでせうね」
「それは好い。構はない」
「一先本人の意志を聞いて見て……」
「聞かんでも好からう」
「だつて、そりや聞かなくつちや不可ませんよ。外の事とは違ふから」

「そんなら聞いて見るが好い。此所へ呼ばうか」
「ハ、、、親と兄の前で詰問しちや猶不可ない。是から私が聞いて見ます。で當人が好いと云つたら、其積で甲野に話しますからね」
「うん、宜からう」
宗近君はずんど切の洋袴を二本ぬつと立てた。佛見笑と二人靜と蜆子和尙と活きた布袋の置物を殘して廊下つゞきを中二階へ上る。
とん〳〵と二段踏むと妹の御太鼓が奇麗に見える。三段目に水色の絹が、横に傾いて、ふつくらした片頰が入口の方に向いた。
「今日は勉强だね。珍らしい。何だい」といきなり机の横へ坐り込む。糸子ははたりと本を伏せた。伏せた上へ肉の附いた丸い手を置く。
「何でもありませんよ」
「何でもない本を讀むなんて、天下の逸民だね」
「どうせ、さうよ」
「手を放したつて好いぢやないか。丸で散らしでも取つた樣だ」
「散らしでも何でも好くつてよ。御生だから彼方へ行つて頂戴」
「大變邪魔にするね。糸公、父つさんが、さう云つてたぜ」
「何て」

「糸はちつと女大學でも讀めば好いのに、近頃は戀愛小說ばかり讀んでゝ、まことに困るつて」
「あら嘘ばつかり。私が何時そんなものを讀んで」
「兄さんは知らないよ。阿父さんがさう云ふんだから」
「嘘よ、阿父樣がそんな事を仰るもんですか」
「さうかい。だつて、人が來ると讀み掛けた本を伏せて、枡落し見た樣に一生懸命に抑へてゐる所を以て見ると、阿父さんの云ふ所も萬更嘘とは思へないぢやないか」
「嘘ですよ。嘘だつて云ふのに、あなたも餘つ程卑劣な方ね」
「卑劣は一大痛棒だね。注意人物の賣國奴ぢやないかハヽヽヽ」
「だつて人の云ふ事を信用なさらないんですもの。そんなら證據を見せて上げませうか。ね。待つて居らつしやいよ」
糸子は抑へた本を袖で隱さん許に、机から手本へ引き取つて、兄の見えぬ樣に帶の影に忍ばした。
「掏り替へちや不可ないぜ」
「まあ默つて、待つて居らつしやい」
糸子は兄の眼を掠めて、長い袖の下に隱した本を、しきりに細工してゐたが、やがて
「ほら」と上へ出す。
兩手で叮嚀に抑へた頁の、殘る一寸角の眞中に朱印が見える。
「見留ぢやないか。なんだ――甲野」

「分つたでせう」
「借りたのかい」
「え丶。戀愛小說ぢやないでせう」
「種を見せない以上は何とも云へないが、まあ堪辨してやらう。時に糸公御前今年幾歳になるね」
「當て丶御覽なさい」
「當て丶見ないだつて區役所へ行きや、すぐ分る事だが、一寸參考の爲に聞いて見るんだよ。隱さずに云ふ方が御前の利益だ」
「隱さずに云ふ方がだつて――何だか惡い事でもした樣ね。私厭だわ、そんなに强迫されて云ふのは」
「ハ、、、流石哲學者の御弟子丈あつて、容易に權威に服從しない所が感心だ。ぢや改めて伺ふが、取つて御幾歳ですか」
「そんな茶化したつて、誰が云ふもんですか」
「困つたな。叮嚀に云へば云ふで怒るし。――一だつたかね。二かい」
「大方そんな所でせう」
「判然しないのか。自分の年が判然しない樣ぢや、兄さんも少々心細いな。とにかく十代ぢやないね」
「餘計な御世話ぢやありませんか。人の年齡なんぞ聞いて。――それを聞いて何になさるの」
「なに別の用でもないが、實は糸公を御嫁にやらうと思つてさ」
冗談半分に相手になつて、調戲れて居た妹の樣子は突然と變つた。熱い石を氷の上に置くと見る／＼冷

めて來る。糸子は一度に元氣を放散した。同時に陽氣な眼を陰に俯せて、疊の目を勘定し出した。

「どうだい、御嫁は。厭でもないだらう」

「知らないわ」と低い聲で云ふ。矢つ張下を向いた儘である。

「知らなくつちや困るね。兄さんが行くんぢやない、御前が行くんだ」

「行くつて云ひもしないのに」

「ぢや行かないのか」

糸子は頭を竪に振つた。

「行かない？本當に」

答はなかつた。今度は首さへ動かさない。

「行かないとなると、兄さんが切腹しなけりやならない。大變だ」

俯向いた眼の色は見えぬ。只豐なる頰を掠めて笑の影が飛び去つた。

「笑ひ事ぢやない。本當に腹を切るよ。好いかね」

「勝手に御切んなさい」と突然顏を上げた。にこ〳〵と笑ふ。

「切るのは好いが、あんまり深刻だからね。ならう事なら此儘で生きてる方が、御互に便利ぢやないか。御前だつてたつた一人の兄さんに腹を切らしたつて、詰らないだらう」

「誰も詰ると云やしないわ」

「だから兄さんを助けると思つてうんと御云ひ」

「だつて譯も話さないで、藪から棒にそんな無理を云つたつて」
「譯は聞さへすれば、いくらでも話すさ」
「好くつてよ、譯なんか聞かなくつても、私御嫁なんかに行かないんだから」
「糸公御前の返事は鼠花火の樣にくる〳〵廻つて居るよ。錯亂體だ」
「何ですつて」
「なに、何でもいゝ、法律上の術語だから――それでね、糸公、いつまで行つても埒が明かないから、一と思に打ち明けて話して仕舞ふが、實はかうなんだ」
「譯は聞いても御嫁にや行かなくつてよ」
「條件つきに聞く積か。中々狡猾だね。――實は兄さんが藤尾さんを御嫁に貰はうと思ふんだがね」
「まだ」
「まだつて今度が始てだね」
「だけれど、藤尾さんは御廢しなさいよ。藤尾さんの方で來たがつて居ないんだから」
「御前此間もそんな事を云つたね」
「えゝ、だつて、厭がつてるものを貰はなくつても好いぢやありませんか。外に女がいくらでも有るのに」
「そりや大いに御尤もだ。厭なものを強請るなんて卑怯な兄さんぢやない。糸公の威信にも關係する。厭なら厭と事が極まれば外に捜すよ」

「一層さうなすつた方が可いでせう」
「だが其邊が判然しないからね」
「だから判然させるの。まあ」と內氣な妹は少し驚いた樣に眼を机の上に轉じた。
「此間甲野の御叔母さんが來て、下で內談をして居たらう。あの時その話があつたんだとさ。叔母さんが云ふには、今はまだ不可ないが、一さんが外交官の試驗に及第して、身分が極つたら、どうでも御相談を致しませうつて阿爺に話したさうだ」
「それで」
「だから好いぢやないか、兄さんがちやんと外交官の試驗に及第したんだから」
「おや、何時」
「何時つて、ちやんと及第しちまつたんだよ」
「あら、本當なの、驚ろいた」
「兄が及第して驚ろく奴があるもんか。失禮千萬な」
「だつて、そんなら早くさう仰しやれば好いのに。是でも大分心配して上げたんだわ」
「全く御前の御蔭だよ。大いに感泣してるさ。感泣はしてる樣なもの丶忘れちまつたんだから仕方がない」
兄妹は隔なき眼と眼を見合せた。さうして同時に笑つた。
笑ひ切つた時、兄が云ふ。

「そこで兄さんも此通り頭を刈つて、近々洋行する筈になつたんだが、阿父さんの云ふには、立つ前に嫁を貰つて人格を作つてけつて責めるから、兄さんが、どうせ貰ふなら藤尾さんを貰ひませう。外交官の妻君にはあゝ云ふハイカラでないと將來困るからと云つたのさ」
「夫程御氣に入つたら藤尾さんになさい。――女を見るのは矢つ張女の方が上手ね」
「そりや才媛糸公の意見に間違はなからうから、充分兄さんも參考にはする積だが、兎に角判然談判を極めて來なくつちやいけない。向ふだつて厭なら厭と云ふだらう。外交官の試驗に及第したからつて、急に氣が變つて參りませうなんて輕薄な事は云ふまい」
糸子は微かな笑を、二三段に切つて鼻から洩した。
「云ふかね」
「どうですか。聞いて御覽なさらなくつちや――然し聞くなら欽吾さんに御聞きなさいよ。恥を搔くといけないから」
「ハヽヽ、厭なら斷るのが天下の定法だ。斷はられたつて恥ぢやない……」
「だつて」
「……ないが甲野に聞くよ。聞く事は甲野に聞くが――其所に問題がある」
「どんな」
「先決問題がある。――先決問題だよ、糸公」
「だから、何んなつて、聞いてるぢやありませんか」

「外でもないが、甲野が坊主になるつて騒ぎなんだよ」
「馬鹿を仰しやい。縁喜でもない」
「なに、今の世に坊主になる位な決心があるなら、縁喜は兎も角、大に慶すべき現象だ」
「苛い事を……だつて坊さんになるのは、醉興になるんぢやないでせう」
「何とも云へない。近頃の様に煩悶が流行した日にや」
「ぢや、兄さんからなつて御覧なさいよ」
「醉興にかい」
「醉興でも何でもいゝから」
「だつて五分刈でさへ懲役人と間違へられる所を青坊主になつて、外國の公使館に詰めてゐりや氣違としきや思はれないもの。外の事なら一人の妹の事だから何でも聞く積だが、坊主丈は勘辨して貰ひたい。坊主と油揚は小供の時から嫌なんだから」
「ぢや欽吾さんもならないだつて好いぢやありませんか」
「さうさ、何だか論理が少し變だが、然しまあ、ならずに濟むだらうよ」
「兄さんの仰しやる事は何所迄が眞面目で何所迄が冗談だか分らないのね。夫で外交官が勤まるでせうか」
「かう云ふんでないと外交官には向かないとさ」
「人を……夫で欽吾さんがどうなすつたんですよ。本當の所」

「本當の所、甲野がね。家と財産を藤尾にやつて、自分は出てしまふと云ふんだとさ」
「何故でせう」
「つまり、病身で御叔母さんの世話が出來ないからださうだ」
「さう、御氣の毒ね。あゝ云ふ方は御金も家も入らないでせう。さうなさる方が好いかも知れないわ」
「さう御前迄贊成しちや、先決問題が解決しにくゝなる」
「だつて御金が山の樣にあつたつて、欽吾さんには何にもならないでせう。夫よりか藤尾さんに上げる方が好ござんすよ」
「御前は女に似合はず氣前が好いね。尤も人のものだけれども」
「私だつて御金なんか入りませんわ。邪魔になる許ですもの」
「邪魔にする程ないから慥だ。ハ、、、。然し其心掛は感心だ。尼になれるよ」
「おゝ厭だ。尼だの坊さんだのつて大嫌ひ」
「其所丈は兄さんも贊成だ。然し自分の財産を棄てゝ吾家を出るなんて馬鹿氣てゐる。財産はまあいゝとして、——欽吾に出られゝばあとが困るから藤尾に養子をする。すると一さんへは上げられませんと、かう御叔母さんが云ふんだよ。尤もだ。つまり甲野の我儘で兄さんの方が破談になると云ふ始末さ」
「ぢや兄さんが藤尾さんを貰ふために、欽吾さんを留め樣と云ふんですね」
「まあ一面から云へばさうなるさ」
「それぢや欽吾さんより兄さんの方が我儘ぢやありませんか」

「今度は非常に論理的に來たね。だつて詰らんぢやないか、當然相續してゐる財産を捨てゝ」
「だつて厭なら仕方がないわ」
「厭だなんて云ふのは神經衰弱の所爲だあね」
「神經衰弱ぢやありませんよ」
「病的に違ないぢやないか」
「病氣ぢやありません」
「糸公、今日は例に似ず大いに斷々乎としてゐるね」
「だつて欽吾さんは、あゝ云ふ方なんですもの。それを皆が病氣にするのは、皆の方が間違つてゐるんです」
「然し健全ぢやないよ。そんな動議を呈出するのは」
「自分のものを自分が棄てるんでせう」
「そりや御尤だがね……」
「要らないから棄てるんでせう」
「要らないつて……」
「本當に要らないんですよ、甲野さんのは。負惜みや面當ぢやありません」
「糸公、御前は甲野の知己だよ。兄さん以上の知己だ。夫程信仰してゐるとは思はなかつた」
「知己でも知己でなくつても、本當の所を云ふんです。正しい事を云ふんです。叔母さんや藤尾さんが

さうでないと云ふんなら、叔母さんや藤尾さんの方が間違つてるんです。私は嘘を吐くのは大嫌です」

「感心だ。學問がなくつても誠から出た自信があるから感心だ。兄さん大賛成だ。それでね、糸公、改めて相談するが甲野が家を出ても出なくつても、財産を遣つても遣らなくつても、御前甲野の所へ嫁に行く氣はあるかい」

「夫は話が丸で違ひますわ。今云つたのは只正直な所を云つた丈ですもの。欽吾さんに御氣の毒だから云つたんです」

「よろしい。中々譯が分つてゐる。妹ながら見上げたもんだ。だから別問題として聞くんだよ。どうだね厭かい」

「厭だつて……」と言ひ懸けて糸子は急に俯向いた。しばらくは半襟の模様を見詰めてゐる樣に見えた。やがて瞬く睫を絡んで一雫の涙がほたりと膝の上に落ちた。

「糸公、どうしたんだ。今日は天候劇變で兄さんに面喰はして許るね」

答のない口元が結んだ儘しやくんで、見るうちに又二雫落ちた。宗近君は親譲の背廣の隱袋から、苦茶く々々の手巾をするりと出した。

「さあ、御拭き」と云ひながら糸子の胸の先へ押し付ける。妹は作り付けの人形の樣に凝として動かない。宗近君は右の手に手巾を差し出した儘、少し及び腰になつて、下から妹の顔を覗き込む。

「糸公厭なのかい」

糸子は無言の儘首を掉つた。

「ぢや、行く氣だね」
今度は首が動かない。
宗近君は手巾を妹の膝の上に落した儘、身體丈を故へ戻す。
「泣いちや不可ないよ」と云つて糸子の顔を見守つて居る。しばらくは双方共言葉が途切れた。
糸子は漸く手巾を取上る。粗い縮緬の膝が少し染になつた。其上へ、手巾の皺を叮嚀に延して四つ折に敷いた。角をしつかり抑へて居る。それから眼を上げた。眼は海の樣である。
「私は御嫁には行きません」と云ふ。
「御嫁には行かない」と殆んど無意味に繰り返した宗近君は、忽ち勢をつけて、
「冗談云つちや不可ない。今厭ぢやないと云つた許ぢやないか」
「でも、欽吾さんは御嫁を御貰ひなさりやしませんもの」
「そりや聞いて見なけりや――だから兄さんが聞きに行くんだよ」
「聞くのは廢して頂戴」
「何故」
「何故でも廢して頂戴」
「ぢや仕樣がない」
「仕樣がなくつても好いから廢して頂戴。私は今の儘でちつとも不足はありません。是で好いんです。御嫁に行くと却つて不可ません」

「困つたな、何時の間に、さう硬くなつたんだらう。――糸公、兄さんはね、藤尾さんを貰ふ爲めに、御前を甲野に遣らうなんて利己主義で云つてるんぢやないよ。今の所ぢや、只御前の事許り考へて相談してるんだよ」

「そりや分つてゐますわ」

「其所が分りさへすれば、後が話し好い。それでと、御前は甲野を嫌つてるんぢやなからう。――よし、それは兄さんがさう認めるから構はない。好いかね。次に、甲野に貰ふか貰はないか聞くのは厭だと云ふんだね。兄さんには其理窟が更に解せないんだが、それも、それで可とするさ。――聞くのは厭だとして、もし甲野が貰ふと云ひさへすれば行つても好いんだらう。――なに金や家はどうでも構はないさ。一文無の甲野の所へ行かうと云やあ、却つて御前の名譽だ。夫でこそ糸公だ。兄さんも阿父さんも故障を云やしない。……」

「御嫁に行つたら人間が惡くなるもんでせうか」

「ハヽヽ突然大問題を呈出するね。何故」

「何故でも――もし惡くなると愛想をつかされる許ですもの。だから何時迄もかうやつて阿父樣と兄さんの傍に居た方が好いと思ひますわ」

「阿父樣と兄さんと――そりや阿父樣も兄さんも何時迄も御前と一所に居たい事は居たいがね。なあ糸公、そこが問題だ。御嫁に行つて益人間が上等になつて、さうして御亭主に可愛がられゝば好いぢやないか。――それよりか實際問題が肝要だ。そこでね、先の話だが兄さんが受合つたら好いだらう」

「何を」
「甲野に聞くのは厭だと、と云つて甲野の方から御前を貰ひに來るのは何時の事だか分らずと……」
「何時迄待つたつて、そんな事があるものですか。私には欽吾さんの胸の中がちやんと分つてるます」
「だからさ、兄さんが受合ふんだよ。是非甲野にうんと云はせるんだよ」
「だつて……」
「何云はせて見せる。兄さんが責任を以て受合ふよ。なあに大丈夫だよ。兄さんも此頭が延び次第外國へ行かなくつちやならない。すると當分糸公にも逢へないから、平生親切にしてくれた御禮に、遣つてやるよ。――狐の袖無の御禮に。ねえ好いだらう」
糸子は何とも答へなかつた。下で阿父さんが謠をうたひ出す。
「そら始まつた。――ぢや行つて來るよ」と宗近君は中二階を下りる。

十七

小野と淺井は橋迄來た。來た路は青麥の中から出る。行く路は青麥のなかに入る。一筋を前後に餘して、深い谷の底を鐵軌が通る。高い土手は春に籠る緑を今やと吹き返しつつ、見事なる切り岸を立て廻して、丸い屛風の如く弧形に折れて遙かに去る。斷橋は鐵軌を高きに隔つる事丈を重ねて十に至つて南より北に横ぎる。欄に倚つて俯すとき廣き兩岸の青を極めつくして、始めて石垣に至る。石垣を底に見下して始めて茶色の路が細く横はる。鐵軌は細い路のなかに細く光る。――二人は斷橋の上迄來て留つた。

「いゝ景色だね」
「うん、えゝ景色ぢや」
二人は欄に倚つて立つた。立つて見る間に、限りなき麥は一分宛延びて行く。暖たかいと云はんより寧ろ暑い日である。
青莚をのべつに敷いた一枚の果は、がたりと調子の變つた地味な森になる。黒ずんだ常磐木の中に、けばけばしくも黄を含む綠の、粉となつて空に吹き散るかと思はれるのは、樟の若葉らしい。
「久し振で郊外へ來て好い心持だ」
「たまには、かう云ふ所も好えな。僕はしかし田舍から歸つた許だから一向珍しうない」
「君はさうだらう。君をこんな所へ連れて來たのは少し氣の毒だつたね」
「なに構はん。どうせ遊んどるんだから。然し人間も遊んどる暇があるやうでは駄目ぢやな、君。ちつとなんぞ金儲の口はないかいに」
「金儲は僕の方にやないが、君の方にや澤山あるだらう」
「いや近頃は法科も詰らん。文科と同じこつちや。銀時計でなくちや通用せん」
小野さんは橋の手擦に脊を靠たせた儘、内隱袋から例の通り銀製の烟草入を出してぱちりと開けた。箔を置いた埃及烟草の吸口が奇麗に竝んで居る。
「一本どうだね」
「や、難有う。大變立派なものを持つとるの」

「貰ひ物だ」と小野さんは、自分も一本抜き取つた後で、又見えない所へ投げ込んだ。二人の烟は恙なく立ち騰つて、事なき空に入る。

「君は始終こんな上等な烟草を呑んどるのか。餘程餘裕があると見えるの。少し借さんか」

「ハ、、、此方が借りたい位だ」

「なにそんな事があるものか。少し借せ。僕は今度國へ行つたんで大變錢が入つて困つとる所ぢや」

本氣に云つてるらしい。小野さんの烟草の烟がふうと横に走つた。

「どの位要るのかね」

「三十圓でも二十圓でも好ゝ」

「そんなにあるものか」

「ぢや十圓でも好え。五圓でも好え」

淺井君はいくらでも下げる。小野さんは兩肘を鐵の手擦に後から持たして、山羊仔の靴を心持前へ出した。烟草を啣えた儘、眼鏡越に爪先の飾を眺めて居る。遲日影長くして光を惜まず。拭き込んだ皮の濃かに照る上に、眼に入らぬ程の埃が一面に積んでゐる。小野さんは携へた細手の洋杖で靴の横腹をほん／＼と鞭うつた。埃は靴を離れて一寸程舞ひ上がる。鞭うたれた局部丈は斑に黒くなつた。竝んで見える淺井の靴は、兵隊靴の如く重く且つ無細工である。

「十圓位なら都合が出來ない事もないが——何時頃迄」

「今月末には屹度返す。それで好からう」と淺井君は顏を寄せて來る。小野さんは口から烟草を離した。

指の股に挾んだ儘、一振はたくと三分の灰は靴の甲に落ちた。體を其儘に白い襟の上から首丈を横に捩ると、欄干に頬杖をついた人の顏が五寸下に見える。

「今月末でも、何時でも好い。――其代り少し御願がある。聞いて呉れるかい」

「うん、話して見い」

淺井君は容易に受合つた。同時に頬杖をやめて脊を立てる。二人の顏はすれ〴〵に來た。

「實は井上先生の事だがね」

「おゝ、先生は何うしとるか。歸つてから、まだ尋ねる閑がないから、行かんが。君先生に逢ふたら宜しく云ふて呉れ。序に御孃さんにも」

淺井君はハヽヽと高く笑つた。序に欄干から胸をつき出して、涎の如き唾を遙かの下に吐いた。

「其御孃さんの事なんだが……」

「愈結婚するか」

「君は氣が早くつて不可ない。さう先へ云つちまつちやあ……」と言葉を切つて、しばらく麥畑を眺めて居たが、忽ち手に持つた吸殼を向へ投げた。白いカフスが七寶の夫婦釦と共にかしやと鳴る。一寸に餘る金が空を掠めて橋の袂に落ちた。落ちた烟は逆様に地から這ひ揚がる。

「勿體ない事をするのう」と淺井君が云つた。

「君本當に僕の云ふ事を聞いて呉れるのかい」

「本當に聞いとる。夫から」

「夫からつて、まだ何にも話しやしないぢやないか。――金の工面はどうでもするが、君に折入つて御願があるんだよ」

「だから話せ。京都からの知己ぢや。何でもしてやるぞ」

調子は大分熱心である。小野さんは片肘を放して、ぐるりと淺井君の方へ向き直る。

「君なら遣つて呉れるだらうと思つて、實は君の歸るのを待つてゐた所だ」

「そりや、好ゝ時に歸つて來た。何か談判でもするのか。結婚の條件か。近頃は無財産の細君を貰ふのは不便だからのう」

「そんな事ぢやない」

「然し、さう云ふ條件を付けて置く方が君の將來の爲に好ゝぞ。さう爲い。僕が懸合ふてやる」

「そりや貰ふとなれば、さう云ふ談判にしても好いが……」

「貰ふ事は貰ふ積ぢやらう。みんな、さう思ふとるぞ」

「誰が」

「誰がてゝ、我々が」

「そりや困る。僕が井上の御孃さんを貰ふなんて、――そんな堅い約束はないんだからね」

「さうか。――いや怪しいぞ」と淺井君が云つた。小野さんは腹の中で下等な男だと思ふ。こんな男だから破談を平氣に持ち込む事が出來るんだと思ふ。

「さう頭から冷やかしちや話が出來ない」と故の樣な大人なしい調子で云ふ。

「ハ、、、。さう眞面目にならんでも好い。さう大人しくちや損だぞ。もう少し面の皮を厚くせんと」
「まあ少し待つて呉れ玉へ。修業中なんだから」
「ちと稽古の爲にどつかへ連れて行つてやらうか」
「何分宜しく……」
「などゝ云つて、裏では盛に修業しとるかも知れんの」
「まさか」
「いやさうでないぞ。近頃大分修飾る所を以て見ると。ことに先の巻烟草入の出所抔は甚だ疑はしい。さう云へば此烟草も何となく妙な臭がするわい」
淺井君は茲に至つて指の股に焦げ付いて來さうな烟草を、鼻の先へ持つて來てふん〱と二三度嗅いだ。
小野さんは愈ノンセンスなわる洒落だと思つた。
「まあ歩きながら話さう」
惡洒落の續きを切る爲めに、小野さんは一歩橋の眞中へ踏み出した。淺井君の肘は欄干を離れる。右左地を拔く麥に、日は空から寄つて來る。暖かき緑は穂を掠めて畦を騰る。野を蔽ふ一面の陽炎は逆上る程に二人を込めた。
「暑いのう」と淺井君は後から跟いて來る。
「暑い」と待ち合はした小野さんは、肩の竝んだ時、歩き出す。歩き出しながら眞面目な問題に入る。
「先の話だが――實は二三日前井上先生の所へ行つた所が、先生から突然例の縁談一條を持ち出されて、

ね。……」

「待つてましたぢや」と受けた淺井君はまた何か云ひさうだから、小野さんは談話の速力を增して、急に進行してしまふ。——

「先生が隨分烈敷來たので、僕もさう世話になつた先生の感情を害する譯にも行かないから、熟考する爲に二三日の餘裕を與へて貰つて歸つたんだがね」

「そりや愼重の……」

「まあ仕舞迄聞いて呉れ玉へ。批評はあとで緩くり聞くから。——夫で僕も、君の知つてゐる通、先生の世話には大變なつたんだから、先生の云ふ事は何でも聞かなければ義理がわるい……」

「そりや惡い」

「惡いが、外の事と違つて結婚問題は生涯の幸福に關係する大事件だから、いくら恩のある先生の命令だつて、さう、おいそれと服從する譯には行かない」

「そりや行かない」

小野さんは、相手の顏をぢろりと見た。相手は存外眞面目である。話は進行する。——

「それも僕に判然たる約束をしたとか、或は御孃さんに對して濟まん關係でも拵らへたと云ふ大責任があれば、先生から催促される迄もない。此方から進んで、どうでも方を付ける積だが、實際僕は其點に關しては潔白なんだからね」

「うん潔白だ。君程高尙で潔白な人間はない。僕が保證する」

小野さんは又ぢろりと淺井君の顏を見た。淺井君は一向氣が着かない。話は又進行する。――
「所が先生の方では、頭から僕にそれ丈の責任があるかの如く見做して仕舞つて、さうして萬事をそれから演繹してくるんだらう」
「うん」
「まさか根本に立ち返つて、あなたの御考は出立點が間違つてゐますと誤謬を指摘する譯にも行かず……」
「そりや、餘り君が人が好過るからぢや。もう少し世の中に擦れんと損だぞ」
「損は僕も知つてるんだが、どうも僕の性質として、さう露骨に人に反對する事が出來ないんだね。ことに相手は世話になつた先生だらう」
「さう、相手が世話になつた先生ぢやからな」
「夫に僕の方から云ふと、今丁度博士論文を書きかけてる最中だから、そんな話を持ち込まれると餘計困るんだ」
「博士論文をまだ書いとるか、えらいもんぢやな」
「えらい事もない」
「なにえらい。銀時計の頭でなくちや、とても出來ん」
「そりや何うでも好いが、――それでね、今云ふ通りの事情だから、折角の厚意は難有いけれども、まあ此所のところは一旦斷はりたいと思ふんだね。然し僕の性質ぢや、とても先生に逢ふと氣の毒で、そん

な強い事が云へさうもないから、それで君に賴みたいと云ふ譯だが。どうだね、引き受けて呉れるかい」

「さうか、譯ない。僕が先生に逢ふてよく話してやらう」

淺井君は茶漬を搔き込む樣に容易く引き受けた。注文通りに行つた小野さんは中休みに一二歩前へ移す。さうして云ふ。――

「其代り先生の世話は生涯する考だ。僕も何時迄もこんなに愚圖々々して居る積でもないから――實の所を云ふと先生も故の樣に經濟が樂ぢやない樣だ。だから猶氣の毒なのさ。今度の相談も只結婚と云ふ單純な問題ぢやなくつて、それを方便にして、僕の補助を受けたい樣な素振も見えた位だ。だから、そりややるよ。飽く迄も先生の爲めに盡す積だ。だが結婚したから盡す、結婚せんから盡さないなんて、そんな輕薄な料簡は少しも此方にやないんだから――世話になつた以上はどうしたつて世話になつたのさ。それを返して仕舞ふ迄はどうしたつて恩は消えやしないからね」

「君は感心な男だ。先生が聞いたら嘸喜ぶだらう」

「よく僕の意志が徹する樣に云つて呉れ玉へ。誤解が出來ると又後が困るから」

「よし。感情を害せん樣にの。よう云ふてやる。其代り十圓貸すんぜ」

「貸すよ」と小野さんは笑ながら答へた。

錐は穴を穿つ道具である。繩は物を括る手段である。淺井君は破談を申し込む器械である。錐でなくては松板を潛り拔け樣と企てるものはない。繩でなくては榮螺を取り卷く覺悟はつかぬ。淺井君にして始めて此談判を、風呂に行く氣で、引き受ける事が出來る。小野さんは才人である。よく道具を用ゐるの法を

心得てゐる。
只破談を申し込むのと、破談を申し込みながら、申し込んだ後を奇麗に片づけるのとは別才である。落葉を振ふものは必ずしも庭を掃く人とは限らない。淺井君は假令內裏拜觀の際でも落葉を振ひおとす事を敢てする無遠慮な男である。と共に、假令內裏拜觀の際でも一塵を掃ふ事を解せざる程に無責任の男である。淺井君は浮ぶ術を心得ずして、水に潛る度胸者である。否潛るときに、浮ぶ術が必要であると考へ付けぬ豪傑である。只引受ける。遣つて見樣と云ふ氣で、何でも引き受ける。夫丈である。善惡、理非、輕重、結果を度外に置いて事物を考へ得るならば、淺井君は他意なき善人である。
夫程の事を知らぬ小野さんではない。知つて依賴するのは只破談を申し込めば夫で構はんと見限を付けたからである。先方で苦狀を云へば逃げる氣である。逃げられなくても、そのうち向ふから泣寐入にせねばならぬ樣な準備をとゝのへてある。小野さんは明日藤尾と大森へ遊びに行く約束がある。——大森から歸つたあとならば大抵な事が露見しても、藤尾と關係を絕つ譯には行かぬだらう。そこで井上へは約束通り物質的の補助をする。
かう思ひ定めて居る小野さんは、淺井君が快よく依賴に應じた時、先づ片荷丈卸したなと思つた。
「かう日が照ると、麥の香が鼻の先へ浮いてくる樣だね」と小野さんの話頭は漸く自然に觸れた。
「香がするかの。僕には一向にほはんが」と淺井君は丸い鼻をふん〳〵と云はしたが、
「時に君は矢張あのハムレットの家へ行くのか」と聞く。
「甲野の家かい。まだ行つてゐる。今日も是から行くんだ」と何氣なく云ふ。

「此間京都へ行つたさうぢやな。もう歸つたか。ちと麥の香でも嗅いで來たか知らんて。——つまらんのう、あんな人間は。何だか陰氣くさい顏ばかりして居るぢやないか」

「さうさね」

「あゝ云ふ人間は早く死んで呉れる方が好え。大分財産があるか」

「ある樣だね」

「あの親類の人はどうした。學校で時々顏を見たが」

「宗近かい」

「さう〳〵。あの男の所へ二三日中に行かうと思つとる」

小野さんは突然留つた。

「何しに」

「口を頼みにさ。出來る丈運動して置かんと駄目だからな」

「だつて、宗近だつて外交官の試驗に及第しないで困つてる所だよ。頼んだつて仕樣がない」

「なに構はん。話に行つて見る」

小野さんは眼を地面の上へ卸して、二三間は無言で來た。

「君、先生の所へは何時行つてくれる」

「今夜か明日の朝行つてやる」

「さうか」

麥畑を折れると、杉の木陰のだら〳〵坂になる。二人は前後して坂を下りた。言葉を交す程の遑もない。下り切つて疎な杉垣を、肩を竝べて通り越すとき、小野さんは云つた。――
「君もし宗近へ行つたらね。井上先生の事は話さずに置いて呉れ玉へ」
「話しやせん」
「いえ、本當に」
「ハヽヽ大變恥かんどるの。構はんぢやないか」
「少し困る事があるんだから、是非……」
「好し、話しやせん」
小野さんは甚だ心元なく思つた。半分程は今賴んだ事を取り返したく思つた。
四つ角で淺井君に別れた小野さんは、安からぬ胸を運んで甲野の邸迄來る。藤尾の部屋へ這入つて十五分程過ぎた頃、宗近君の姿は甲野さんの書齋の戶口に立つた。
「おい」
甲野さんは故の椅子に、故の通りに腰を掛けて、故の如くに幾何模樣を圖案してゐる。丸に三つ鱗はとくに出來上つた。
おいと呼ばれた時、首を上げる。驚いたと云はんよりは、激したと云はんよりは、臆したと云はんよりは、樣子振つたと云はんよりは寧ろ遙かに簡單な上げ方である。從つて哲學的である。
「君か」と云ふ。

宗近君はつか〳〵と洋卓の角迄進んで來たが、いきなり太い眉に八の字を寄せて、

「こりや空氣が惡い。毒だ。少し開け樣」と上下の栓釘を拔き放つて、眞中の圓鈕を握るや否や、正面の佛蘭西窓を、床を掃ふ如く、一文字に開いた。室の中には、庭前に芽ぐむ芝生の綠と共に、廣い春が吹き込んで來る。

「かうすると大變陽氣になる。あゝ好い心持だ。庭の芝が大分色づいて來た」

宗近君は再び洋卓迄戻つて、始めて腰を卸した。今先方謎の女が坐つてゐた椅子の上である。

「何をしてゐるね」

「うん？」と云つて鉛筆の進行を留めた甲野さんは

「どうだ。中々旨いだらう」と模樣で一杯になつた紙片を、宗近君の方へ、洋卓の上を滑らせる。

「何だこりや。恐ろしい澤山書いたね」

「もう一時間以上書いてゐる」

「僕が來なければ晚迄書いてゐるんだらう。くだらない」

甲野さんは何とも云はなかつた。

「是が哲學と何か關係でもあるのかい」

「有つても好い」

「萬有世界の哲學的象徵とでも云ふんだらう。よく一人の頭でこんなに竝べられたもんだね。紺屋の上繪師と哲學者と云ふ論文でも書く氣ぢやないか」

甲野さんは今度も何とも云はなかつた。
「何だか、どうも相變らず愚圖々々してゐるね。いつ見ても煮え切らない」
「今日は特別煮え切らない」
「天氣の所爲ぢやないか、ハヽヽヽ」
「天氣の所爲より、生きてる所爲だよ」
「さうさね、煮え切つてぴん／＼してゐるものは澤山ない樣だ。御互も、かうやつて三十年近くも、しくしくして……」
「何時迄も浮世の鍋の中で、煮え切れずに居るのさ」
甲野さんは茲に至つて始めて笑つた。
「時に甲野さん、今日は報告旁少々談判に來たんだがね」
「六つかしい來樣だ」
「近いうち洋行をするよ」
「洋行を」
「うん歐羅巴へ行くのさ」
「行くのはいゝが、親父見た樣に、煮え切つちや不可ない」
「なんとも云へないが、印度洋さへ越せば大抵大丈夫だらう」
甲野さんはハヽヽと笑つた。

「實は最近の好機に於て外交官の試驗に及第したんだから、此通り早速頭を刈つてね、矢つ張、最近の好機に於て出掛けなくつちやならない。塵事多忙だ。中々丸や三角を並べちやゐられない」

「そいや御目出たい」と云つた甲野さんは洋卓越に相手の頭を熟ら觀察した。然し別段批評も加へなかつた。質問も起さなかつた。宗近君の方でも進んで說明の勞を取らなかつた。從つて頭は夫限になる。

「まづ此所迄が報告だ、甲野さん」と云ふ。

「うちの母に逢つたかい」と甲野さんが聞く。

「まだ逢はない。今日は此方の玄關から、上つたから、日本間の方は丸で通らない」

成程宗近君は靴の儘である。甲野さんは椅子の脊に倚りかゝつて、此樂天家の頭と、更紗模樣の襟飾と――襟飾は例に因つて襟の途中迄浮き出してゐる。――それから親讓の脊廣とを眤と眺めて居る。

「何を見てゐるんだ」

「いや」と云つた儘矢つ張眺めて居る。

「御叔母さんに話して來やうか」

今度はいやとも何とも云はずに眺めて居る。宗近君は椅子から腰を浮かしかゝる。

「廢すが好い」

洋卓の向側から一句を明瞭に云ひ切つた。

徐に椅子を離れた長髮の人は右の手で額を搔き上げながら、左の手に椅子の肩を抑へた儘、亡き父の肖像畫の方に顏を向けた。

「母に話す位なら、あの肖像に話してくれ」
親讓りの脊廣を着た男は、丸い眼を据ゑて、室の中に聳える、漆の樣な髮の主を見守つた。次に丸い眼を据ゑて、壁の上にある故人の肖像を見守つた。最後に漆の髮の主と、故人の肖像とを見較べた。見較べて仕舞つた時、聳えたる人は瘠せた肩を動かして、宗近君の頭の上から云ふ。——
「父は死んで居る。然し活きた母よりも慥かだよ。慥かだよ」
椅子に倚る人の顏は、此言葉と共に、自から又畫像の方に向つた。向つたなり暫くは動かない。活きた眼は上から見下して居る。
しばらくして、椅子に倚る人が云ふ。——
「御叔父さんも氣の毒な事をしたなあ」
立つ人は答へた。——
「あの眼は活きてゐる。まだ活きてゐる」
言ひ終つて、部屋の中を歩き出した。
「庭へ出樣、部屋の中は陰氣で不可ない」
席を立つた宗近君は、横から來て甲野さんの手を取るや否や、明け放つた佛蘭西窓を拔けて二段の石階を芝生へ下る。足が柔かい地に着いた時、
「一體どうしたんだ」と宗近君が聞いた。
芝生は南に走る事十間餘にして、高樫の生垣に盡くる。幅は半ばに足らぬ。繁き植込に遮ぎられた奧は、

五坪程の池を隔てゝ、張出の新座敷には、藤尾の机が据ゑてある。

二人は緩き歩調に、芝生を突き當つた。歸りには二三間迂回て、植込の陰を書齋の方へ戻つて來た。双方共無言である。足並は偶然にも揃つてゐる。植込が眞中で開いて、二三の敷石に、池の方へ人を誘ふ曲り角迄來た時、突然新座敷で、雉子の鳴く樣に、けたゝましく笑ふ聲がした。二人の足は申し合せた如くぴたりと留まる。眼は一時に同じ方角へ走る。

四尺の空地を池の縁に細長く餘して、眞直に水に落つる池の向側に、横から伸す淺葱櫻の長い枝を軒のあたりに翳して小野さんと藤尾が此方を向いて笑ひながら椽鼻に立つてゐる。

不規則なる春の雜樹を左右に、櫻の枝を上に、温む水に根を抽で、這ひ上がる蓮の浮葉を下に、——二人の活人畫は包まれて立つ。仕切る構が自然の景物の粋をあつめて成るが爲めに、——枠の形が趣きを損なはぬ程に正しくて、又眼を亂さぬ程に不規則なるが爲めに、——飛石に、水に、椽に、間隔の適度なるが爲めに——高きに失はず、低きに過ぎざる恰好の地位にある爲めに——最後に、一息の短かきに、吐く幻影と、忽然に現はれたる爲めに——二人の視線は水の向の二人にあつまつた。と共に、水の向の二人の視線も、水の此方の二人に落ちた。見合す四人は、互に互を釘付にして立つ。際どき瞬間である。はつと思ふ刹那を一番早く飛び超えたものが勝になる。

女はちらりと白足袋の片方を後へ引いた。代赭に染めた古代模樣の鮮かに春を寂びたる帶の間から、するすると蜿蜒るものを、引き千切れと許り鋭どく拔き出した。纖き蛇の膨れたる頭を掌に握つて、黄金の色を細長く空に振れば、深紅の光は發矢と尾より迸しる。——次の瞬間には、小野さんの胸を左右に、燦

爛たる金鎖が動かぬ稻妻の如く懸つて居た。

「ホヽヽ一番あなたに能く似合ふ事」

藤尾の癇聲は鈍い水を敲いて、鋭どく二人の耳に跳ね返つて來た。

「藤……」と動き出さうとする宗近君の横腹を突かぬ許に、甲野さんは前へ押した。宗近君の眼から活人畫が消える。追ひかぶさる樣に、後から乘し懸つて來た甲野さんの顏が、親しき友の耳のあたり迄着いたとき、

「默つて……」と小聲に云ひながら、烟に卷かれた人を植込の影へ引いて行く。

肩に手を掛けて押す樣に石段を上つて、書齋に引き返した甲野さんは、無言の儘、扉に似たる佛蘭西窓を左右からどたりと立て切つた。上下の栓釘を式の如く鎖す。次に入口の戸に向ふ。かねて差し込んである鍵をかちやりと廻すと、錠は苦もなく卸りた。

「何をするんだ」

「部屋を立て切つた。人が這入つて來ない樣に」

「何故」

「何故でも好い」

「全體どうしたんだ。大變顏色が惡い」

「なに大丈夫。まあ掛け給へ」と最前の椅子を机に近く引きずつて來る。宗近君は小供の如く命令に服した。甲野さんは相手を落ち付けた後、靜かに、用ひ慣れた安樂椅子に腰を卸す。體は机に向つた儘であ

る。

「宗近さん」と壁を向いて呼んだが、やがて首丈ぐるりと回して、正面から、

「藤尾は駄目だよ」と云ふ。落ち付いた調子のうちに、何となく温い曖昧があつた。凡ての枝を緑に返す用意の爲めに、寂びたる中を人知れず通ふ春の脈は、甲野さんの同情である。

「さうか」

腕を組んだ宗近君は是丈答へた。あとから、

「糸公もさう云つた」と沈んで付けた。

「君より、君の妹の方が眼がある。藤尾は駄目だ。飛び上りものだ」

かちやりと入口の圓鈕を捩つたものがある。戸は開かない。今度はとん／＼と外から敲く。宗近君は振り向いた。甲野さんは眼さへ動かさない。

「打ち遣つて置け」と冷やかに云ふ。

入口の扉に口を着けた樣にホヽヽと高く笑つたものがある。足音は日本間の方へ馳けながら遠退いて行く。二人は顔を見合はした。

「藤尾だ」と甲野さんが云ふ。

「さうか」と宗近君が又答へた。

あとは靜かになる。机の上の置時計がきち／＼と鳴る。

「金時計も廢せ」

「うん。廢さう」

甲野さんは首を壁に向けた儘、宗近君は腕を拱いた儘、――時計はきち〳〵と鳴る。日本間の方で大勢が一度に笑つた。

「宗近さん」と欽吾は又首を向け直した。「藤尾に嫌はれたよ。默つてる方がいゝ」

「うん默つて居る」

「藤尾には君の樣な人格は解らない。淺薄な跳ね返りものだ。小野に遣つて仕舞へ」

「此通り頭が出來た」

宗近君は節太の手を胸から拔いて、刈り立ての頭の天邊をとんと敲いた。

甲野さんは眼尻に笑の波を、あるか、なきかに寄せて重々しく首肯いた。あとから云ふ。

「頭が出來れば、藤尾なんぞは要らないだらう」

宗近君は輕くうふんと云つたのみである。

「それで漸く安心した」と甲野さんは、くつろいだ片足を上げて、殘る膝頭の上へ載せる。宗近君は卷烟草を燻らし始めた。吹く烟のなかから、

「是からだ」と獨語の樣に云ふ。

「是からだ。僕も是からだ」と甲野さんも獨語の樣に答へた。

「君も是からか。どう是からなんだ」と宗近君は烟草の烟を押し開いて、元氣づいた顏を近寄せた。

「本來の無一物から出直すんだから是からさ」

指の股に敷島を挾んだ儘、持つて行く口のある事さへ忘れて、呆氣に取られた宗近君は、

「本來の無一物から出直すとは」と自ら自らの頭腦を疑ふ如く問ひ返した。甲野さんは尋常の調子で、落ち付き拂つた答をする。——

「僕は此家も、財産も、みんな藤尾にやつて仕舞つた」

「やつて仕舞つた？　何時」

「もう少し先。其紋盡しを書いてゐる時だ」

「そりや……」

「丁度その丸に三つ鱗を描いてる時だ。——其模樣が一番よく出來てゐる」

「遣つて仕舞ふつてさう容易く……」

「何要るものか。あればある程累だ」

「御叔母さんは承知したのかい」

「承知しない」

「承知しないものを……夫ぢや御叔母さんが困るだらう」

「遣らない方が困るんだ」

「だつて御叔母さんは始終君が無暗な事をしやしまいかと思つて心配して居るんぢやないか」

「僕の母は僞物だよ。君等がみんな欺かれてゐるんだ。母ぢやない謎だ。澆季の文明の特産物だ」

「そりや、あんまり……」

「君は本當の母でないから僕が僻んでゐると思つてゐるんだらう。それならそれで好いさ」
「然し……」
「君は僕を信用しないか」
「無論信用するさ」
「僕の方が母より高いよ。賢いよ。理由が分つてゐるよ。さうして僕の方が母より善人だよ」
宗近君は默つて居る。甲野さんは續けた。――
「母の家を出て呉れるなと云ふのは、出て呉れと云ふ意味なんだ。財産を取れと云ふのは寄こせと云ふ意味なんだ。世話をして貰ひたいと云ふのは、世話になるのが厭だと云ふ意味なんだ。――だから僕は表向母の意志に忤つて、内實は母の希望通にしてやるのさ。――見給へ、僕が家を出たあとは、母が僕がわるくつて出た樣に云ふから、世間もさう信じるから――僕は夫丈の犧牲を敢てして、母や妹の爲めに計つてやるんだ」
宗近君は突然椅子を立つて、机の角迄來ると片肘を上に突いて、甲野さんの顏を掩ひかぶす樣に覗き込みながら、
「貴樣、氣が狂つたか」と云つた。
「氣違は頭から承知の上だ。――今迄でも蔭ぢや、馬鹿の氣違のと呼びつゞけに呼ばれて居たんだ」
此時宗近君の大きな丸い眼から涙がぼた〱と机の上のレオパルヂに落ちた。
「なぜ默つて居たんだ。向を出して仕舞へば好いのに……」

「向を出したつて、向の性格は墮落する許だ」

「向を出さない迄も、此方が出るには當るまい」

「此方が出なければ、此方の性格が墮落する許だ」

「何故財産をみんな遣つたのか」

「要らないもの」

「一寸僕に相談して呉れゝば好かつたのに」

「要らないものを遣るのに相談の必要もなにもないからさ」

宗近君はふうんと云つた。

「僕に要らない金の爲めに、義理のある母や妹を墮落させた所が手柄にもならない」

「ぢや愈家を出る氣だね」

「出る。居れば兩方が墮落する」

「出て何處へ行く」

「何處だか分らない」

宗近君は机の上にあるレオパルヂを無意味に取つて、脊皮を竪に、勾配のついた欅の角でとん／＼と輕く敲きながら、少し沈吟の體であつたが、やがて、

「僕のうちへ來ないか」と云ふ。

「君のうちへ行つたつて仕方がない」

「厭かい」
「厭ぢやないが、仕方がない」
宗近君は眤と甲野さんを見た。
「甲野さん。頼むから來て呉れ。僕や阿父の爲はとにかく、糸公の爲めに來て遣つてくれ」
「糸公の爲めに？」
「糸公は君の知己だよ。御叔母さんや藤尾さんが君を誤解しても、僕が君を見損なつても、日本中が悉く君に迫害を加へても、糸公丈は慥かだよ。糸公は學問も才氣もないが、よく君の價値を解してゐる。君の胸の中を知り拔いてゐる。糸公は僕の妹だが、えらい女だ。尊い女だ。糸公は金が一文もなくつても墮落する氣遣のない女だ。――甲野さん、糸公を貰つてやつてくれ。家を出ても好い。山の中へ這入つても好い。何所へ行つてどう流浪しても構はない。何でも好いから糸公を連れて行つて遣つてくれ。――僕は責任を以て糸公に受合つて來たんだ。君が云ふ事を聞いて呉れないと妹に合す顏がない。たつた一人の妹を殺さなくつちやならない。糸公は尊い女だ、誠のある女だ、正直だよ、君の爲なら何でもするよ。殺すのは勿體ない」
宗近君は骨張つた甲野さんの肩を椅子の上で振り動かした。

十八

小夜子は婆さんから菓子の袋を受取つた。底を立てゝ出雲燒の皿に移すと、眞中にある靑い鳳凰の模樣

が和製のビスケットで隱れた。黄色な縁は大分殘つてゐる。揃へて渡す二本の竹箸を、落さぬ樣に茶の間から座敷へ持つて出た。座敷には淺井君が先生を相手に、京都以來の舊歡を暖めてゐる。時は朝である。日影はじり〳〵と椽に逼つてくる。

「御孃さんは、東京を御存じでしたな」と問ひかけた。

菓子皿を主客の間に置いて、やさしい肩を後へ引く序に、

「えゝ」と小聲に答へて、立ち兼ねた。

「是は東京で育つたのだよ」と先生が足らぬ所を補つて異れる。

「さうでしたな。――大變大きくなりましたな」と突然別問題に飛び移つた。

小夜子は淋しい笑顏を俯向て、今度は答さへも控えた。淺井君は遠慮のない顏をして小夜子を眺めて居る。是から此女の結婚問題を壞すんだなと思ひながら平氣に眺めてゐる。淺井君の結婚問題に關する意見は大道易者の如く容易である。女の未來や生涯の幸福に就てはあまり同情を表して居らん。只頼まれたから頼まれたなりに事を運べば好いものと心得て居る。さうしてそれが尤も法學士的で、法學士的は最も實際的で、實際的は最上の方法だと心得てゐる。淺井君は尤も想像力の少ない男で、しかも想像力の少ないのを却つて不足だと思つた事のない男である。想像力は理知の活動とは全然別作用で、理知の活動は却つて想像力の爲めに常に阻害せらるゝものと信じてゐる。想像力を待つて、始めて、全き人性に戻らざる好處置が、知慧分別の純作用以外に活きてくる場合があらう抔とは法科の教室で、どの先生からも聞いた事がない。從つて淺井君は一向知らない。只斷はれば濟むと思つてゐる。淋しい小夜子の運命が、夫子の

一言でどう變化するだらうかとは淺井君の夢にだも考へ得ざる問題である。

淺井君が無意味に小夜子を眺めてゐるうちに、孤堂先生は變な咳を二つ三つ塞いた。小夜子は心元なく父の方を向く。

「御藥はもう上がつたんですか」

「朝の分はもう飮んだよ」

「御寒い事は御座んせんか」

「寒くはないが、少し……」

先生は右の手頸へ左の指を三本懸けた。小夜子は淺井の居る事も忘れて、脈をはかる先生の顏許見詰めてゐる。先生の顏は髯と共に日毎に細長く瘠せこけて來る。

「どうですか」と氣遣し氣に聞く。

「少し、早い樣だ。矢つ張り熱が除れない」と額に少し皺が寄つた。先生が熱度を計つて、地烈たさうに不愉快な顏をするたびに小夜子は悲しくなる。夕立を野中に避けて、賴と思ふ一本杉を難有しと前を見れば稻妻がさす。怖いと云ふよりも、年を取つた人に氣の毒である。行き屆かぬ世話から出る癇癪なら、機嫌の取りやうもある。氣で勝てぬ病氣の爲なら孝行の盡し樣がない。苟且の風邪と、常人は思ひ、自分も苦にしなかつた昨日今日の咳を、蔭へ廻つて聞いて見ると、醫者は性質が善くないと云ふ。二三日で熱が退かないと云つて焦慮る樣な輕い病症ではあるまい。知らなければ心配する。云はねば氣で通す。其上癇を起す。此調子で進んで行くと、一年の後には神經が赤裸になつて、空氣に觸れても飛び上がるかも知れ

ない。――昨夜小夜子は眼を合せなかつた。
「羽織でも召して居らしつたら好いでせう」
孤堂先生は返事をせずに、
「驗温器があるかい。一つ計つて見様」と云ふ。小夜子は茶の間へ立つ。
「どうかなすつたんですか」と淺井君が無雜作に尋ねた。
「いえ、ちつと風邪を引いてね」
「はあ、さうですか。――もう若葉が大分出ましたな」と云つた。先生の病氣に對しては丸で同情も頓着もなかつた。病氣の源因と、經過と、容體を精しく聞いて貰はうと思つて居た先生は當が外れた。
「おい、無いかね。どうした」と次の間を向いて、常よりは大きな聲を出す。序に咳が二つ出た。
「はい、只今」と小さい聲が答へた。が驗温器を持つて出る様子がない。先生は淺井君の方を向いて
「はあ、さうかい」と氣のない返事をした。
淺井君は詰らなくなる。早く用を片付けて歸らうと思ふ。
「先生小野は一向駄目ですな、ハイカラに許なつて。御孃さんと結婚する氣はないですよ」とぱた〳〵と順序なく並べた。
孤堂先生の窪んだ眼は一度に鋭どくなつた。やがて鋭どいものが一面に廣がつて顏中苦々敷なる。
「廢した方が好えですな」
置き失くした驗温器を捜がしてゐた、次の間の小夜子は、長火鉢の二番目の抽出を二寸程拔いた儘、は

たりと引く手を留めた。
先生の苦々しい顔は一層こまやかになる。想像力のない淺井君は頓と結果を豫想し得ない。
「小野は近頃非常なハイカラになりました。あんな所へ行くのは御孃さんの損です」
苦々敷顔はとう／＼持ち切れなくなつた。
「君は小野の惡口を云ひに來たのかね」
「ハヽヽ、先生本當ですよ」
淺井君は妙な所で高笑をした。
「餘計な御世話だ。輕薄な」と鋭どく跳ね付けた。先生の聲は漸く尋常を離れる。淺井君は始めて驚ろいた。しばらく默つてゐる。
「おい驗溫器はまだか。何を愚圖々々してゐる」
次の間の返事は聞えなかつた。ことりとも云はぬうちに、片寄せた障子に影がさす。腰板の外から細い白木の筒がそつと出る。疊の上で受取つた先生はほんと云はして筒を拔いた。取り出した驗溫器を日に翳して二三度やけに振りながら、
「何だつて、そんな餘計な事を云ふんだ」と度盛を透して見る。先生の精神は半ば驗溫器にある。淺井君は此間に元氣を回復した。
「實は頼まれたんです」
「頼まれた？誰に」

「小野に頼まれたんです」

「小野に頼まれた？」

先生は脇の下へ験温器を持つて行く事を忘れた。茫然としてゐる。

「あゝ云ふ男だものだから、自分で先生の所へ来て断はり切れないんです。それで僕に頼んだです」

「ふうん。もつと精しく話すがいゝ」

「二三日中に是非こちらへ御返事をしなければならないからと云ひますから、僕が代理に遣つて来たんです」

「だから、どう云ふ理由で断はるんだか、夫を精しく話したら好いぢやないか」

襖の蔭で小夜子が洟をかんだ。つゝましき音ではあるが、一重隔てゝすぐ向に居る人のそれと受け取れる。鴨居に近く聞えたのは、襖越に立つて居るらしい。浅井君の耳にはどんな感じを与へたか知らぬ。

「理由はですな。博士にならなければならないから、どうも結婚なんぞして居られないと云ふんです」

「ぢや博士の称号の方が、小夜より大事だと云ふんだね」

「さう云ふ譯でもないでせうが、博士になつて置かんと将来非常な不利益ですからな」

「よし分つた。理由はそれぎりかい」

「それに確然たる契約のない事だからと云ふんです」

「契約とは法律上有効の契約といふ意味だな。證文のやりとりの事だね」

「證文でもないですが――其代り長い間御世話になつたから、其御禮としては物質的の補助をしたいと

云ふんです」

「月々金でも呉れると云ふのかい」

「さうです」

「おい小夜や、一寸御出。小夜や――小夜や」と聲は次第に高くなる。返事は遂にない。

小夜子は襖の蔭に蹲踞た儘、動かずに居る。先生は仕方なしに淺井君の方へ向き直つた。

「君は妻君があるかい」

「ないです。貰ひたいが、自分の口が大事ですからな」

「妻君がなければ參考の爲めに聞いて置くがいゝ。――人の娘は玩具ぢやないぜ。博士の稱號と小夜と引き替にされて堪るものか。考へて見るがいゝ。如何な貧乏人の娘でも活物だよ。私から云へば大事な娘だ。人一人殺しても博士になる氣かと小野に聞いてくれ。それから、さう云つて呉れ。井上孤堂は法律上の契約よりも德義上の契約を重んずる人間だつて。――月々金を貢いでやる？貢いで呉れと誰が頼んだ。小野の世話をしたのは、泣き付いて來て可愛想だから、好意づくでした事だ。何だ物質的の補助をするなんて、失禮千萬な。――小夜や、用があるから一寸出て御出。おい居ないのか」

小夜子は襖の蔭で啜り泣をしてゐる。先生は頻りに咳く。淺井君は面喰つた。

斯う怒られ樣とは思はなかつた。又斯う怒られる譯がない。自分の云ふ事は事理明白である。世間に立つて成功するには誰の目にも博士號は大切である。曖昧な約束をやめて呉れと云ふのも左程不義理とは受取れない。世話をして貰ひつ放しでは不都合かも知れないが、して貰つた丈の事を物質的に返すと云ひ出

せば、喜んで此方の義務心を滿足させ可き筈である。夫れを突然怒り出す。――そこで淺井君は面喰つた。
「先生さう怒つちや困ります。惡ければ又小野に逢つて話して見ますから」と云つた。是は本氣の沙汰である。
しばらく默つて居た先生は、稍落ち付いた調子で、
「君は結婚を極めて容易事の樣に考へてゐるが、そんなものぢやない」と口惜さうに云ふ。
先生の云ふ主意は分らんが、先生の樣子には流石の淺井君も少し心を動かした。然し結婚は便宜によつて約束を取り結び、便宜によつて約束を破棄する丈で差支ないと信じてゐる淺井君は、別に返事もしなかつた。
「君は女の心を知らないから、そんな使に來たんだらう」
淺井君は矢つ張默つてゐる。
「人情を知らないから平氣でそんな事を云ふんだらう。小野の方が破談になれば小夜は明日から何處へでも行けるだらうと思つて、云ふんだらう。五年以來夫だと思ひ込んで居た人から、特別の理由もないのに、急に斷はられて、平氣ですぐ他家へ嫁に行く樣な女があるものか。あるかも知れないが小夜はそんな輕薄な女ぢやない。そんな輕薄に育て上げた積ぢやない。――君はさう輕卒に破談の取次をして、小夜の生涯を誤まらして、それで好い心持なのか」
先生の窪んだ眼が滲染で來た。頻りに咳が出る。淺井君は成程それが事實ならと感心した。漸く氣の毒になつてくる。

「ぢや、まあ御待ちなさい、先生。もう一遍小野に話して見ますから。僕は只頼まれたから來たんで、そんな精しい事情は知らんのですから」
「いや、話して呉れないでも好い。厭だと云ふものに無理に貰つてもらひたくはない。然し本人が來て自家に譯を話すが好い」
「然し御孃さんが、さう云ふ御考だと……」
「小夜の考位小野には分つてゐる筈だ」と先生は平手で頰を打つ樣に、ぴしやりと云つた。
「ですがな、それだと小野も困るでせうから、もう一遍……」
「小野にさう云つて呉れ。井上孤堂はいくら娘が可愛くつても、厭だと云ふ人に頭を下げて貰つてもらふ樣な卑劣な男ではないつて。――小夜や、おい、居ないか」
襖の向側で、袖らしいものが唐紙の裾に中る音がした。
「さう返事をして差支ないだらうね」
答は更になかつた。やゝあつて、わつと云ふ顏を袖の中に埋めた聲がした。
「先生もう一遍小野に話しませう」
「話さないでも好い。自家に來て斷はれと云つて呉れ」
「兎に角……さう小野に云ひませう」
淺井君は遂に立つた。玄關迄送つて來た先生に頭を下げた時、先生は
「娘なんぞ持つもんぢやないな」と云つた。表へ出た淺井君はほつと息をつく。今迄こんな感じを經驗

した事はない。横町を出て蕎麥屋の行燈を右に通へ出て、電車のある所迄來ると突然飛び乘つた。
突然電車に乘つた淺井君は約一時間餘の後、ぶらりと宗近家の門からあらはれた。つゞいて車が一挺出る。一挺は小野の下宿へ向ふ。一挺は孤堂先生の家に去る。五十分程後れて、玄關の松の根際に梶棒を上げた一挺は、黑い幌を卸した儘、甲野の屋敷を指して馳ける。小說は此三挺の使命を順次に述べなければならぬ。
宗近君の車が、小野さんの下宿の前で、車輪の音を留めた時、小野さんは丁度午飯を濟ました許である。膳が出てゐる。飯櫃も引かれずにある。主人公は机の前へ座を移して、口から吹く濃き烟を眺めながら考へてゐる。今日は藤尾と大森へ行く約束がある。約束だから行かなければならぬ。然し是非行かねばならぬとなると、何となく氣が咎める。不安である。約束さへしなければ、もう少しは太平であつたらう。飯もう一杯位は食へたかも知れぬ。賽は固より自分で投げた。一六の目は明かに出た。ルビコンは渡らねばならぬ。然し事もなげに河を横切つた該撒は英雄である。通例の人はいざと云ふ間際になつてから又思ひ返す。小野さんは思ひ返す度に、必ず廢せばよかつたと後悔する。乘り掛けた船に片足を入れた時、船頭が出ますよと棹を取り直すと、待つて呉れと云ひたくなる。誰か陸から來て引つ張つて呉れゝば好いと思ふ。乘り掛けた許ならまだ陸へ戻る機會があるからである。約束も履行せんうちは岸を離れぬ舟と同じく、まだ絕體絕命と云ふ場合ではない。メレヂスの小說にこんな話がある。――ある男とある女が謀し合せて、停車場で落ち合ふ手筈をする。手筈が順に行つて、滊笛がひゆうと鳴れば二人の名譽はそれぎりになる。二人の運命がいざと云ふ間際迄逼つた時女は遂に停車場へ來なかつた。男は待ち惚の顏を箱馬車の

中に入れて、空しく家へ歸つて來た。あとで聞くと朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束の期を誤まらしたのだと云ふ。――藤尾と約束をした小野さんは、斯んな風に約束を破る事が出來たら、却つて仕合かも知れぬと思ひつゝ烟草の烟を眺めて居る。それに淺井の返事がまだ來ない。諾と云へばどつちへ轉んでも幸である。否と聞くならば、退つ引きならぬ瀨戸際迄あらかじめ押して置いて、振り返つてから、臨機應變に難關を切り拔けて行く積の計畫だから、一刻も早く大森へ行つて仕舞へば濟む。否と云ふ返事を待つ必要は無論ない。ないが、決行する間際になると氣掛りになる。頭で拵へ上げた計畫を人情が崩しにかゝる。想像力が實行させぬ樣に引き戻す。小野さんは詩人丈に尤も想像力に富んでゐる。

想像力に富んで居ればこそ、自分で斷はりに行く氣になれなかつた。先生の顏と小夜子の顏と、部屋の模樣と、暮しの有樣とを眼のあたりに見て、眼のあたりに見たものを未來に延長して想像の鏡に思ひ浮べて眺めると二た通になる。自分が此鏡のなかに織り込まれて居るときに、春である、暖である、恐く幸福である。鏡の面から自分の影を拭き消すと闇になる、暮になる。凡てが悲慘になる。此一團の精神から、自分の魂丈を切り離す談判をするのは、小さき竈に立つべき烟を豫想しながら薪を奪ふと一般である。忍びない。人は眼を閉つて苦い物を呑む。こんな絡んだ緣をふつりと切るのに想像の眼を開いてゐては出來ぬ。そこで小野さんは眼の閉れた淺井君を頼んだ。頼んだ後は、想像を殺して仕舞へば濟む。と覺束ないが決心丈はした。然し犬一疋でも殺すのは容易な事ではない。持つて生れた心の作用を、不都合な所丈黑く塗つて、消し切りに消すのは、古來から幾千萬人の試みた窮策で、幾千萬人が等しく失敗した陋策である。人間の心は原稿紙とは違ふ。小野さんが此決心をした其晩から想像力は復活した。――

瘠せた頰を描く。落ち込んだ眼を描く。縺れた髪を描く。虫の樣な氣息を描く。――さうして想像は一轉する。

血を描く。物凄き夜と風と雨とを描く。寒き灯火を描く。白張の提灯を描く。――慄然して想像はとまる。

想像のとまつた時、急に約束を思ひ出す。約束の履行から出る快からぬ結果を思ひ出す。結果は又も想像の力で曲々の波瀾を起す。――良心を質に取られる。一生涯受け出す事が出來ぬ。利に利がつもる。脊中が重くなる、痛くなる、さうして腰が曲る。寢覺がわるい。社會が後指を指す。

惘然として烟草の烟を眺めてゐる。恩賜の時計は一秒毎に約束の履行を促がす。橇の上に力なき身を託した樣なものである。手を拱ぬいて居れば自然と約束の淵へ滑り込む。「時」の橇程正確に滑るものはない。

「矢つ張り行く事にするか。後暗い行さへなければ行つても差支ない筈だ。それさへ愼めば取り返しはつく。小夜子の方は淺井の返事次第で、どうにかしやう」

烟草の烟が、未來の影を朦朧と罩め盡す迄濃く搖曳た時、宗近君の頑丈な姿が、凡ての想像を拂つて、現實界にあらはれた。

何時の間にどう下女が案内をしたか知らなかつた。宗近君はぬつと這入つた。

「大分狼藉だね」と云ひながら紅溜の膳を廊下へ出す。黑塗の飯櫃を出す。土瓶迄運び出して置いて、

「どうだい」と部屋の眞中に腰を卸した。

「どうも失敬です」と主人は恐縮の體で向き直る。折よく下女が來て湯沸と共に膳椀を引いて行く。

心を二六時に委ねて、隻手を動かす事を敢てせざるものは、自から約束を踐まねばならぬ運命を有つ。安からぬ胸を秒毎に重ねて、じりじりと怖い所へ行く。突然と横合から飛び出した宗近君は、滑るべく餘儀なくせられたる人を、半途に遮つた。遮ぎられた人は邪魔に逢ふと同時に、一刻の安きを故の位地に貪る事が出來る。

約束は履行すべきものと極つてゐる。然し履行すべき條件を奪つたものは自分ではない。自分から進んで違約したのと、邪魔が降つて來て、守る事が出來なかつたのとは心持が違ふ。約束が劍呑になつて來た時、自分に責任がない樣に、人が履行を妨げて呉れるのは嬉しい。何故行かないと良心に責められたなら行く積の義務心はあつたが、宗近君に邪魔をされたから仕方がないと答へる。

小野さんは寧ろ好意を以て宗近君を迎へた。然し此一點の好意は、不幸にして面白からぬ感情の爲に四方から深く鎖されて居る。

宗近君と藤尾とは遠い緣續である。自分が藤尾を陷いれるにしても、藤尾が自分を陷いれるにしても、二人の間に取り返しのつかぬ關係が出來さうな際どい約束を、素知らぬ顏で結んだのみか、今實行にとりかゝらうと云ふ矢先に、突然飛び込まれたのは、迷惑は措置いて、大いに氣が咎める。無關係のものなら夫でも好い。突然飛び込んだものは、人もあらうに、相手の親類である。

たゞの親類ならまだしもである。兼てから藤尾に心のある宗近君である。外國で死んだ人が、是こそ娘の婿とどうから許して居た宗近君である。昨日迄二人の關係を知らずに、昔の望を其儘に繋いでゐた宗近

君である。偸まれた金の行先も知らずに、空金庫を護つてゐた宗近君である。

祕密の雲は、春を射る金鎖の稻妻で、半劈れた。眠つてゐた眼を醒しかけた金鎖のあとへ、淺井君が行つて井上の事でも喋舌たら——困る。氣の毒とは只先方へ對して云ふ言葉である。氣が咎めるとは、其上に此方から濟まぬ事をした場合に用ゐる。困るとなると、もう一層上手に出て、利害が直接に吾身の上に跳ね返つて來る時に使ふ。小野さんは宗近君の顏を見て大いに困つた。

宗近君の來訪に對して歡迎の意を表する一點好意の核は、氣の毒の輪で尻こそばゆく取り卷かれてゐる。其上には氣が咎める輪が氣味わるさうに重なつてゐる。一番外には困る輪が黑墨を流した樣に際限なく未來に連なつてゐる。さうして宗近君は此未來を司どる主人公の樣に見えた。

「昨日は失敬した」と宗近君が云ふ。小野さんは赤くなつて下を向いた。あとから金時計が出るだらうと、心元なく烟草へ火を移す。宗近君はそんな氣色も見えぬ。

「小野さん、さつき淺井が來てね。其事でわざ〳〵遣つて來た」とすぱりと云ふ。

小野さんの神經は一度にぴりゝと動いた。すこし、してから烟草の烟が陰氣にむうつと鼻から出る。

「小野さん、敵が來たと思つちや不可ない」

「いゝえ決して……」と云つた時に小野さんは又ぎくりとした。

「僕は當つ擦り抔を云つて、人の弱點に乘ずる樣な人間ぢやない。此通り頭が出來た。そんな暇は藥にしたくつてもない。あつても僕のうちの家風に背く……」

宗近君の意味は通じた。只頭の出來た由來が分らなかつた。然し問ひ返す程の勇氣がないから默つてゐる

る。

「そんな卑しい人間と思はれちや、急がしい所をわざ〳〵來た甲斐がない。君だつて教育のある事理の分つた男だ。僕をさう云ふ男と見て取つたが最後、僕の云ふ事は君に對して全然無效になる譯だ」

小野さんはまだ默つてゐる。

「僕はいくら閑人だつて、君に輕蔑され樣と思つて車を飛ばして來やしない。――兎に角淺井の云ふ通なんだらうね」

「淺井がどう云ひましたか」

「小野さん、眞面目だよ。いゝかね。人間は年に一度位眞面目にならなくつちやならない場合がある。上皮許で生きてゐちや、相手にする張合がない。又相手にされても詰るまい。僕は君を相手にする積で來たんだよ。好いかね、分つたかい」

「えゝ、分りました」と小野さんは大人しく答へた。

「分つたら君を對等の人間と見て云ふがね。君はなんだか始終不安ぢやないか。少しも泰然として居ない樣だが」

「さうかも――知れないです」と小野さんは術なげながら、正直に白狀した。

「さう君が平たく云ふと、甚だ御氣の毒だが、全く事實だらう」

「えゝ」

「他人が不安であらうと、泰然として居なからうと、上皮許で生きてゐる輕薄な社會では構つた事ぢや

ない。他人所か自分自身が不安でゐながら得意がつてゐる連中も澤山ある。僕もその一人かも知れない。知れない所ぢやない、慥かに其一人だらう」

小野さんは此時始めて積極的に相手を遮ぎつた。

「貴所は羨しいです。實は貴所の樣になれたら結構だと思つて、始終考へてる位です。そんな所へ行くと僕は詰らない人間に違ないです」

愛嬌に調子を合せるとは思へない。上皮の文明は破れた。中から本音が出る。悄然として誠を帶びた聲である。

「小野さん、其所に氣が付いて居るのかね」

宗近君の言葉には何だか曖昧があつた。

「居るです」と答へた。しばらくして又、

「居るです」と答へた。下を向く。宗近君は顏を前へ出した。相手は下を向いた儘、

「僕の性質は弱いです」と云つた。

「どうして」

「生れ付きだから仕方がないです」

是も下を向いた儘云ふ。

宗近君は猶と顏を寄せる。片膝を立てる。膝の上に肱を乘せる。肱で前へ出した顏を支へる。さうして云ふ。

「君は學問も僕より出來る。頭も僕より好い。僕は君を尊敬してゐるから救ひに來た」
「救ひに……」と顔を上げた時、宗近君は鼻の先に居た。顔を押し付ける様にして云ふ。――
「かう云ふ危うい時に、生れ付きを敲き直して置かないと、生涯不安で仕舞ふよ。いくら勉強しても、いくら學者になつても取り返しは付かない。此所だよ、小野さん、眞面目になるのは。世の中に眞面目は、どんなものか一生知らずに濟んで仕舞ふ人間が幾何もある。皮丈で生きて居る人間は、土丈で出來てゐる人形とさう違はない。眞面目がなければだが、あるのに人形になるのは勿體ない。眞面目になつた後は心持がいゝものだよ。君にさう云ふ經驗があるかい」
小野さんは首を垂れた。
「なければ、一つなつて見給へ、今だ。こんな事は生涯に二度とは來ない。此機をはづすと、もう駄目だ。生涯眞面目の味を知らずに死んで仕舞ふ。死ぬ迄むく犬の様にうろ〳〵して不安許だ。人間は眞面目になる機會が重なれば重なる程出來上つてくる。人間らしい氣持がしてくる。――法螺ぢやない。自分で經驗して見ないうちは分らない。僕は此通り學問もない、勉強もしない、落第もする、ごろ〳〵して居る。それでも君より平氣だ。うちの妹なんぞは神經が鈍いからだと思つてゐる。成程神經も鈍いだらう。――然しさう無神經なら今日でも、かう遣つて車で馳け付けやしない。さうぢやないか、小野さん」
宗近君はにこりと笑つた。小野さんは笑はなかつた。
「僕が君より平氣なのは、學問の爲でも、勉強の爲でも、何でもない。時々眞面目になるからさ。なるからと云ふより、なれるからと云つた方が適當だらう。眞面目になれる程、自信力の出る事はない。眞面

目になれる程、腰が据る事はない。眞面目になれる程、精神の存在を自覺する事はない。天地の前に自分が儼存して居ると云ふ觀念は、眞面目になつて始めて得られる自覺だ。眞面目とはね、君、眞劍勝負の意味だよ。遣つ付ける意味だよ。遣つ付けなくつちや居られない意味だよ。人間全體が活動する意味だよ。口が巧者に働いたり、手が小器用に働いたりするのは、いくら働いたつて眞面目ぢやない。頭の中を遺憾なく世の中へ敲きつけて始めて眞面目になつた氣持になる。安心する。實を云ふと僕の妹も昨日眞面目になつた。甲野も昨日眞面目になつた。僕は昨日も、今日も眞面目だ。君も此際一度眞面目になれ。人一人眞面目になると當人が助かる許ぢやない。世の中が助かる。――どうだね、小野さん、僕の云ふ事は分らないかね」

「いえ、分つたです」

「眞面目だよ」

「眞面目に分つたです」

「そんなら好い」

「難有いです」

「そこでと、――あの淺井と云ふ男は、丸で人間として通用しない男だから、あれの云ふ事を一々眞に受けちや大變だが――本來を云ふと淺井が來て是々だと、あれが僕に話した通を君の前で箇條がきにしてでも述べる所だね。さうして、君の云ふ所と照し合せた上で事實を判斷するのが順當かも知れない。いくら頭の悪い僕でもその位な事は知つてる。然し眞面目になると、ならないとは大問題だ。契約があつたの、

滑つたの轉んだの。嫁があつちやあ博士になれないの、博士にならなくつちや外聞が惡いのつて、丸で小供見た樣な事は、どつちがどつちだつて構はないだらう、なあ君」
「えゝ構はないです」
「要するに眞面目な處置は、どう付ければ好いのかね。そこが君の遣る所だ。邪魔でなければ相談にならう。奔走しても好い」
悄然として項垂て居た小野さんは、此時居ずまひを正した。顏を上げて宗近君を眞向に見る。眸は例になく確乎と坐つて居た。
「眞面目な處置は、出來る丈早く、小夜子と結婚するのです。小夜子を捨てゝは濟まんです。孤堂先生にも濟まんです。僕が惡かつたです。斷はつたのは全く僕が惡かつたです。君に對しても濟まんです」
「僕に濟まん？まあ夫や好い、後で分る事だから」
「全く濟まんです。――斷はらなければ好かつたです。斷はらなければ――淺井はもう斷はつて仕舞つたんでせうね」
「そりや君が頼んだ通り斷はつたさうだ。然し井上さんは君自身に來て斷はれと云ふさうだ」
「ぢや、行きます。是から、すぐ行つて謝罪つて來ます」
「だがね、今僕の阿父を井上さんの所へ遣つて置いたから」
「阿父さんを？」
「うん、淺井の話によると、何でも大變怒つてるさうだ。それから御孃さんはひどく泣いてると云ふか

らね。僕が君のうちへ來て相談をしてゐるうちに、何か事でも起ると困るから慰問かた〴〵つなぎに遣つて置いた」

「どうも色々御親切に」と小野さんは疊に近く頭を下げた。

「なに老人はどうせ遊んでゐるんだから、御役にさへ立てば喜んで何でもして吳れる。それで、かうして置いたんだがね、――もし談判が調へば、車で御孃さんを呼びにやるから此方へ寄こして吳れつて。――來たら、僕の居る前で、御孃さんに未來の細君だと君の口から明言してやれ」

「やります。此方から行つても好いです」

「いや、此所へ呼ぶのはまだ外にも用があるからだ。それが濟んだら三人で甲野へ行くんだよ。さうして藤尾さんの前で、もう一遍君が明言するんだ」

小野さんは少しく痺んで見えた。宗近君はすぐ付ける。

「何、僕が君の妻君を藤尾さんに紹介してもいゝ」

「さう云ふ必要があるでせうか」

「君は眞面目になるんだらう。――僕の前で奇麗に藤尾さんとの關係を絶つて見せるがいゝ。其證據に小夜子さんを連れて行くのさ」

「連れて行つても好いですが、あんまり面當になるから――成るべくなら隱便にした方が……」

「面當は僕も嫌だが、藤尾さんを助ける爲だから仕方がない。あんな性格は尋常の手段ぢや直せつこない」

「然し……」

「君が面目ないと云ふのかね。かう云ふ羽目になつて、面目ないの、極りが悪いのと云つて愚圖々々してゐる樣ぢや矢つ張り上皮の活動だ。君は今眞面目になると云つた許ぢやないか。眞面目と云ふのはね、僕に云はせると、つまり實行の二字に歸着するのだ。口丈で眞面目になるのは、口丈が眞面目になるので、人間が眞面目になつたんぢやない。君と云ふ一個の人間が眞面目になつたと主張するなら、主張する丈の證據を實地に見せなけりや何にもならない。……」

「ぢや遣りませう。どんな大勢の中でも構はない、遣りませう」

「宜ろしい」

「所で、みんな打ち明けて仕舞ひますが。——實は今日大森へ行く約束があるんです」

「大森へ。誰と」

「その——今の人とです」

「藤尾さんとかね。何時に」

「三時に停車場で出合ふ筈になつてるるんですが」

「三時と——今何時か知らん」

ぱちりと宗近君の胴衣の中程で音がした。

「もう二時だ。君はどうせ行くまい」

「廢すです」

「藤尾さん一人で大森へ行く事は大丈夫ないね。打ち遣つて置いたら歸つてくるだらう。三時過になれば」

「一分でも後れたら、待ち合す氣遣ありません。すぐ歸るでせう」

「丁度好い。――何だか、降つて來たな。雨が降つても行く約束かい」

「えゝ」

「此雨は――中々歇みさうもない。――兎に角手紙で小夜子さんを呼ばう。阿父が待ち兼て心配して居るに違ない」

春に似合はぬ強い雨が斜めに降る。空の底は計られぬ程深い。深いなかから、とめどもなく千筋を引いて落ちてくる。火鉢が欲しい位の寒である。

手紙は點滴の響の裡に認められた。使が幌の色を、打つ雨に搖かして、一散に去つた時、敍述は移る。最前宗近家の門を出た第二の車は既に孤堂先生の僑居に在つて、應分の使命をつくしつゝある。

孤堂先生は熱が出て寐た。祕藏の義董の幅に背いて横へた額際を、小夜子が氷嚢で冷してゐる。蹲踞る枕元に、泣き腫した眼を赤くして、氷嚢の括目に寄る皺を勘定して居るかと思はれる。容易に顏を上げない。宗近の阿父さんは、鐵線模樣の臥衾を二尺ばかり離れて、どつしりと尻を据ゑてゐる。厚い膝頭が坐布團から喰み出して輕く疊を抑へた所は、血が退いて肉が落ちた孤堂先生の顏に比べると威風堂々たるものである。

宗近老人の聲は相變らず大きい。孤堂先生の聲は常よりは高い。對話は此兩人の間に進行しつゝある。

「實はさう云ふ次第で突然參上致したので、御不快の所を甚だ恐縮であるが、取り急ぐ事と、どうか惡しからず」
「いや、甚だ失禮の體たらくで、私こそ恐縮で。起きて御挨拶を申し上げなければならんのだが……」
「どう致して、其儘の方が御話がし易くて結句私の都合になります。ハヽヽ」
「洵に御親切にわざ／＼御尋ね下すつて難有い」
「なに、昔なら武士は相見互と云ふ所で。ハヽヽ私抔もいつ何時御世話にならんとも限らん。然し久し振で東京へ御移では嘸御不自由で御困りだらう」
「二十年目になります」
「二十年目。そりあ／＼。二た昔ですな。御親類は」
「無いと同然で。久しい間、音信不通にして居つたものですからな」
「成程。それぢや、全く小野氏丈が御力ですな。そりや、どうも、怪しからん事になつたもので」
「馬鹿を見ました」
「いや然し、どうにか、なりませう。さう御心配なさらずとも」
「心配は致しません。たゞ馬鹿を見た丈で。先刻よく娘にも因果を含めて申し聞かして置きました」
「然し折角是迄御丹精になつたものを、さう思ひ切りよく御斷念になるのも惜いから、どうか此所は一と先づ私共に御任せ下さい。悴も出來る丈骨を折つて見たいと申して居りましたから」
「御好意は實に辱ない。然し先方で斷はる以上は、娘も參りたくもなからうし、參ると申しても私が遣

れん樣な始末で……」
小夜子は氷嚢をそつと上げて、額の露を丁寧に手拭でふいた。
「冷やすのは少し休めて見やう。――なあ小夜行かんでも好いな」
小夜子は氷嚢を盆へ載せた。兩手を疊の上へ突いて、盆の上へ蔽ひかぶせる樣に首を出す。氷嚢へほたりほたりと涙が垂れる。孤堂先生は枕に着けた胡麻鹽頭を
「好いな」と云ひ乍ら半分程後へ捩ぢ向けた。ほたりと氷嚢へ垂れる所が見えた。
「御尤で。御尤で……」と宗近老人は取り敢へず二遍つゞけざまに述べる。孤堂先生の首は故の位地に復した。潤んだ眼をひからして凝と老人を見守つてゐる。やがて
「然しそれが爲めに小野が藤尾さんとか云ふ婦人と結婚でもしたら、御子息には御氣の毒ですな」と云つた。
「いや――そりや――御心配には及ばんです。悴は貰はん事にしました。多分――いや貰はんです。貰ふと云つても私が不承知です。悴の嫌ふ樣な婦人は、悴が貰ひたいと申しても私が許しません」
「小夜や、宗近さんの阿父さんも、あゝ仰しやる。同じ事だらう」
「私は――參らんでも――宜しう御座います」と小夜子が枕の後で切れ〲に云つた。雨の音の强いなかで漸く聞き取れる。
「いや、さうなつちや困る。私がわざ〲飛んで來た甲斐がない。小野氏にも段々事情のある事だらうから、まあ悴の通知次第で、どうか、先刻御話を申した樣に御聞濟を願ひたい。――自分で悴の事を彼是

申すのは異なものだが、悴は事理の分つた奴で、決して後で御迷惑になる樣な取計は致しますまい。御破談になつた方が御爲だと思へば其方を御勸めして來るでせう。――始めて御目に懸つたのだがどうか私を御信用下さい。――もう何とか云つて來る時分だが、生憎の雨で……」

雨を衝く一輛の車は輪を鳴らして、格子の前で留つた。がらりと明く途端に、ぐちやりと濡れた草鞋を沓脫へ踏み込んだものがある。――敍述は第三の車の使命に移る。

第三の車が糸子を載せた儘、甲野の門に轔々の響を送りつゝ馳けて來る間に、甲野さんは書齋を片付始めた。机の抽出を一つ宛拔いて、何時となく溜つた往復の書類を裂いては捨て、裂いては捨る。床の上は千切れた半切で膝の所丈が堆くなつた。甲野さんは亂るゝ反故屑を踏み付けて立つた。今度は抽出から一枚、二枚と細字に認めた控を取り出す。中には五六頁纏めて綴ぢ込んだのもある。大抵は西洋紙である。又西洋字である。甲野さんは一と目見て、すぐ机の上へ重ねる。中には半行も讀まずに置き易へるのもある。しばらくすると、重なるものは小一尺の高迄來た。抽出は大抵空になる。甲野さんは上下へ手を掛けて、總體を煖爐の傍迄持つて來たが、やがて、無言の儘拋げ込んだ。重なるものは主人公の手を離るゝと共に一面に崩れた。

葡萄の葉を青銅に鑄た灰皿が洋卓の上にある。灰皿の上に燐寸がある。甲野さんは手を延ばして燐寸の箱を取つた。取りながら横に振ると、あたじけない五六本の音がする。今度は机へ歸る。レオパルヂの隣にあつた黃表子の日記を持つて煖爐の前迄戾つて來た。親指を抑へにして小口を雨の樣に飛ばして見ると、黑い印氣と鼠の鉛筆が、ちら、ちら、ちらと黃色い表紙迄來て留つた。何を書いたものやら一向要領を得

ない。昨夕寝る前に書き込んだ、

入レ道無言客。出レ家有髮僧。

の一聯が、最後の頁の最後の句である事丈を記憶してゐる。甲野さんは思ひ切つて日記を散らばつた紙の上へ乘せた。屈んだ。煖爐敷の前でしゆつと云ふ音がする。亂れた紙は、靜なるうちに、懈怠い伸をしながら、下から暖められて來る。きな臭い烟が、紙と紙の隙間を這ひ上つて出た。すると紙は下層の方から動き出した。

「うん、まだ書く事があつた」

と甲野さんは膝を立てながら、日記を烟のなかから救ひ出す。紙は茶に變る。ほうと音がすると煖爐のうちは一面の火になつた。

「おや、どうしたの」

戸口に立つた母は不審さうに煖爐の中を見詰て居る。甲野さんは聲に應じて體を斜めに開く。袂の先に火を受けて母と向き合つた。

「寒いから部屋を煖めます」と云つたなり、上から煖爐の中を見下した。火は薄い水飴の色に燃える。藍と紫が折々は思ひ出した樣に交つて烟突の裏へ上つて行く。

「まあ御あたんなさい」

折から風に誘はれた雨が四五筋、窓硝子に當つて碎けた。

「降り出しましたね」

母は返事をせずに三足程部屋の中に進んで來た。すかす樣に欽吾を見て、

「寒ければ、石炭を燒かせ樣か」と云つた。

めら〳〵と燃えた火は、搖ぐ紫の舌の立ち騰る後から、ぱつと一度に消えた。煖爐の中は眞黑である。

「もう澤山です。もう消えました」

云ひ終つて欽吾は、煖爐に背中を向けた。時に亡父の眼玉が壁の上からぴかりと落ちて來た。雨の音がざあつとする。

「おや〳〵、手紙が大變散らばつて――みんな要らないのかい」

欽吾は床の上を眺めた。裂き棄てた書面は見事に亂れてゐる。或は二三行、或は五六行、甚しいのは一行の半分で引き千切つたのがある。

「みんな要りません」

「それぢや、ちつと片付樣。紙屑籠は何處にあるの」

欽吾は答へなかつた。母は机の下を覗き込む。西洋流の籃製の屑籠が、足掛の向に仄に見える。母は屈んで手を伸した。紺緞子の帶が、窓からさす明をまともに受けた。

欽吾は腕を右へ眞直に、日蔽のかゝつた椅子の脊頸を握つた。瘠せた肩を斜にして、ずる〳〵と机の傍迄引いて來た。

母は机の奧から屑籠を引き摺り出した。手紙の斷片を一つ一つ床から拾つて籠の中へ入れる。捩ぢ曲げたのを丹念に引き延ばして見る。「いづれ拜眉の上……」と云ふのを投げ込む。「……御免蒙り度候。尤

も事情の許す場合には御……」と云ふのを投げ込む。「……は到底辛抱致しかね……」と云ふのを裏返して見る。

欽吾は尻眼に母をじろりと眺めた。机の角に引き寄せた椅子の脊に、うんと腕の力を入れた。ひらりと紺足袋が白い日蔽の上に揃つた。揃つた紺足袋はすぐ机の上に飛び上る。

「おや、何をするの」と母は手紙の斷片を持つた儘、下から仰向いた。眼と眼の間に怖の色が明かに讀まれた。

「額を卸します」と上から落ち付いて云ふ。

「額を？」

「一寸御待ち」

怖は愕と變じた。欽吾は鍍金の枠に右の手を懸けた。

「何ですか」と右の手は矢張枠に懸つてゐる。

「額を外して何にする氣だい」

「持つて行くんです」

「何所へ」

「家を出るから額丈持つて行くんです」

「出るなんて、まあ。――出るにしても、もつと緩くり外したら宜さゝうなもんぢやないか」

「悪いですか」

「悪くはないよ。御前が欲しければ持つて行くが、いゝけれども。何もそんなに急がなくつても好いん

だらう」

「だつて今外さなくつちや、時間がありません」

母は變な顔をして呆然として立つた。欽吾は兩手を額に掛ける。

「出るつて、御前本當に出る氣なのかい」

「出る氣です」

欽吾は後ろ向に答へた。

「何時」

「是から、出るんです」

欽吾は兩手で一度上へ搖り上げた額を、折釘から外して、下へさげた。細い糸一本で額は壁とつながつてゐる。手を放すと、糸が切れて落ちさうだ。兩手で恭しく捧げた儘である。母は下から云ふ。

「こんな雨の降るのに」

「雨が降つても構はないです」

「せめて藤尾に暇乞でもして行つてやつて御呉れな」

「藤尾は居ないでせう」

「だから待つて御呉れと云ふのだあね。藪から棒に出るなんて、御母さんを困せる樣なもんぢやないか」

「困らせる積ぢやありません」

「御前が其氣でなくつても、世間と云ふものがあります。出るなら出る樣にして出て呉れないと、御母さんが恥を掻きます」

「世間が……」と云ひかけて額を持ちながら、首丈後へ向けた時、細長く切れた欽吾の眼は一度に母に落ちた。やがて母から遠退て戶口に至つてはたと動かなくなつた。――母は氣味惡さうに振返る。

「おや」

天から降つた樣に、靜かに立つて居た糸子は、ゆるやかに頭を下げた。鷹揚に膨ました廂髮が故に歸ると、糸子は机の傍迄步を移して來る。白足袋が兩方揃つた時、

「御迎に參りました」と眞直に欽吾を見上げた。

「鋏を取つて下さい」と欽吾は上から賴む。顎で差圖をした、レオパルヂの傍に、鋏がある。――ぷつりと云ふ音と共に額は壁を離れた。鋏はかちやりと床の上に落ちた。兩手に額を捧げた欽吾は、机の上でくるりと正面に向き直つた。

「兄が欽吾さんを連れて來いと申しましたから參りました」

欽吾は捧げた額を眼八分から、そろり／＼と下の方へ移す。

「受取つて下さい」

糸子は確と受取つた。欽吾は机から飛び下りる。

「行きませう。――車で來たんですか」

「えゝ」

「此額が乘りますか」

「乘ります」

「ぢやあ」と再び額を受取つて、戸口の方へ行く。糸子も行く。母は呼びとめた。

「少し御待ちよ。——糸子さんも少し待つて頂戴。何が氣に入らないで、親の家を出るんだか知らないが、少しは私の心持にもなつて見て呉れないと、私が世間へ對して面目がないぢやないか」

「世間はどうでも構はないです」

「そんな聞譯のない事を云つて、——頑是ない小供見た樣に」

「小供なら結構です。小供になれれば結構です」

「又そんな。——折角、小供から大人になつたんぢやないか。是迄に丹精するのは、一と通りや二た通りの事ぢやないよ、御前。少しは考へて御覽な」

「考へたから出るんです」

「どうして、まあ、そんな無理を云ふんだらうね。——それも是もみんな私の不行屆から起つた事だから、今更泣いたつて、口說たつて仕方がないけれども、——私は——亡くなつた阿父さんに——」

「阿父さんは大丈夫です。何とも云やしません」

「云やしませんたつて——何も、さう、意地にかゝつて私を苛めなくつても宜ささうなもんぢやないか」

甲野さんは額を提げた儘、何とも返事をしなくなつた。糸子は大人しく傍に着いてゐる。雨は部屋を取り卷いて吹き寄せて來る。遠い所から風が音を輳めてくる。ざあつと云ふ高い響である。又廣い響である。

響の裡に甲野さんは黙然として立つてゐる。糸子も黙然として立つてゐる。
「少しは分つたかい」と母が聞いた。
甲野さんは依然として黙してゐる。
「是程云つても、まだ分らないのかね」
甲野さんは矢張口を開かない。
「糸子さん、かう云ふ體たらくなんですから。どうぞ御宅へ御歸りになつたら、阿父さんや兄さんに御覧の通りを御話して下さい。——まことに、こんな所をあなた方に御見せ申すのは、何とも蚊とも面目次第も御座いません」
「御叔母さん。欽吾さんは出たいのですから、素直に出して御上げなすつたら好いでせう。無理に引つ張つても何にもならないと思ひます」
「あなた迄夫ぢや仕方がありませんね。——それは失禮ながら、まだ御若いから、さう云ふ奥底のない御考も出るんでせうが。——いくら出たいたつて、山の中の一軒家に住んでゐる人間ぢやなし、さう今が今思ひ立つて、今出られちや、出る當人より、殘つたものが困りまさあね」
「何故」
「だつて人の口は五月蝿ぢやありませんか」
「人が何と云つたつて——それが何故惡いんでせう」
「だつて御互に世間に顔出しが出來ればこそ、かうやつて今日を送つて居るんぢやありませんか。自分

より世間の義理の方が大事でさあね」
「だつて、こんなに出たいと仰やるんですもの。御可哀想ぢやありませんか」
「そこが義理ですよ」
「それが義理なの。詰らないのね」
「詰らなかありませんやね」
「だつて欽吾さんは、どうなつても構はない……」
「構はなかないんです。夫が矢つ張欽吾の爲になるんです」
「欽吾さんより御叔母さんの爲になるんぢやないの」
「世の中への義理ですよ」
「分らないわ、私には。——出たいものは世間が何と云つたつて出たいんですもの。それが御叔母さんの迷惑になる筈はないわ」
「だつて、こんな雨が降つて……」
「雨が降つても、御叔母さんは濡れないんだから構はないぢやありませんか」
汽車のない時の事であつた。山の男と海の男が喧嘩をした。山の男が魚を鹽辛いものだと云ふ。海の男が魚に鹽氣があるものかと云ふ。喧嘩は何時迄立つても鎭まらなかつた。教育と名くる汽車がかゝつて、理性の階段を自由に上下する方便が開けないと、御互の考は御互に分らない。ある時は俗社會の鹽漬になり過ぎて、只見てさへも冥眩しさうな人間でないと、人間として通用しない事がある。夫は嘘だ僞だと說

いて聞かしても中々承知しない。何處迄も鹽漬趣味を主張する。――謎の女と糸子の應對は、どこ迄行つても並行する丈で一點には集まらない。山の男と海の男が魚に對して根本的の觀念を異にする如く、謎の女と糸子とは、人間に對して冒頭から考が違ふ。

海と山とを心得た甲野さんは默つて二人を見下してゐる。糸子の云ふ所は辯護の出來ぬ程簡單である。母の主張は愛想のつきる程愚にして且俗である。此二人の問答を前に控へて、甲野さんは阿爺の額を抱いた儘立つて居る。別段退屈した氣色も見えない。焦慮たさうな樣子もない。困つたと云ふ風情もない。二人の問答が、日暮迄續けば、日暮迄額を持つて、同じ姿勢で、立つてゐるだらうと思はれる。

所へ、雨の中の掛聲がした。車が玄關で留つた。玄關から足音が近付いて來た。眞先に宗近君があらはれた。

「やあ、まだ行かないのか」と甲野さんに聞く。

「うん」と答へたぎりである。

「御叔母さんも此所か。丁度好い」と腰を掛ける。後から小野さんが這入つて來る。小野さんの影を一寸も出ない樣に小夜子が付いてくる。

「御叔母さん、雨の降るのに大入ですよ。――小夜子さん、是が僕の妹です」

活躍の兒は一句にして挨拶と紹介を兼る。宗近君は忙しい。甲野さんは依然として額を支へて立つた儘である。小野さんも手持無沙汰に席に着かぬ。小夜子と糸子は徒らに丁寧な頭を下げた。打ち解けた言葉は無論交す機會がない。

「雨の降るのに、まあ能く……」
母は是丈の愛嬌を一面に振り蒔いた。
「能く降りますね」と宗近君はすぐ答へた。
「小野さんは……」と母が云ひ懸けた時、宗近君がまた遮つた。
「小野さんは今日藤尾さんと大森へ行く約束があるんださうですね。所が行かれなくなつて……」
「さう――でも、藤尾はさつき出ましたよ」
「まだ歸らないですか」と宗近君は平氣に聞いた。母は少しく不快な顏をする。
「どうして大森所ぢやない」と獨語の樣に云つたが、一寸振り返つて、
「みんな掛けないか。立つてると草臥るぜ。もう直藤尾さんも歸るだらう」と注意を與へた。
「さあ、どうぞ」と母が云ふ。
「小野さん、掛け給へ。小夜子さんも、どうです。――甲野さん何だい、それは……」
「父の肖像を卸しまして、あなた。持つて出るとか申して」
「甲野さん、少し待ち給へ。もう藤尾さんが歸つて來るから」
甲野さんは別に返事もしなかつた。
「少し私が持ちませう」と糸子が低い聲で云ふ。
「なに……」と甲野さんは提げて居た額を床の上へ卸して壁へ立て掛けた。小夜子は俯向きながら、そつと額の方を見る。

「なんぞ藤尾に、御用でも御有なさるんですか」
是は母の言葉であつた。
「えゝ、あるんです」
是は宗近の答であつた。
あとは――雨が降る。誰も何とも云はない。此時一輛の車はクレオパトラの怒を乘せて韋駄天の如く新橋から馳けて來る。
宗近君は胴衣の上で、ぱちりと云はした。
「三時二十分」
何とも應へるものがない。車は千筋の雨を、黑い幌に彈いて一散に飛んで來る。クレオパトラの怒は布團の上で躍り上る。
「御叔母さん、京都の話でも、しませうかね」
降る雨の地に落ちぬ間を追ひ越せと、乘る怒は車夫の脊を鞭つて馳けつける。横に煽る風を眞向に切つて、齒を逆に捩ると、甲野の門内に敷き詰めた砂利が、玄關先迄長く二行に碎けて來た。
濃い紫の絹紐に、怒をあつめて、幌を潛るときに颯とふるはしたクレオパトラは、突然と玄關に飛び上がつた。
「二十五分」
と宗近君が云ひ切らぬうちに、怒の權化は、辱しめられたる女王の如く、書齋の眞中に突つ立つた。六人

の目は悉く紫の絹紐にあつまる。
「やあ、御歸り」と宗近君が烟草を啣へながら云ふ。藤尾は一言の挨拶すら返す事を屑とせぬ。高い脊を高く反らして、屹と部屋のなかを見廻した。見廻した眼は、最後に小野さんに至つて、ぐさりと刺さつた。小夜子は脊廣の肩にかくれた。宗近君はぬつと立つた。呑み掛けの烟草を、青葡萄の灰皿に放り込む。
「藤尾さん。小野さんは新橋へ行かなかつたよ」
「あなたに用はありません。――小野さん。何故入らつしやらなかつたんです」
「行つては濟まん事になりました」
小野さんの句切りは例になく明瞭であつた。稻妻ははた〱とクレオパトラの眸から飛ぶ。何を猪子才なと小野さんの額を射た。
「約束を守らなければ、說明が要ります」
「約束を守ると大變な事になるから、小野さんはやめたんだよ」と宗近君が云ふ。
「默つて居らつしやい。――小野さん、何故入らつしやらなかつたんです」
宗近君は二三歩大股に歩いて來た。
「僕が紹介してやらう」と一足小野さんを横へ押し退けると、後から小さい小夜子が出た。
「藤尾さん、是が小野さんの妻君だ」
藤尾の表情は忽然として憎惡となつた。憎惡は次第に嫉妬となつた。嫉妬の最も深く刻み込まれた時、ぴたりと化石した。

「まだ妻君ぢやない。ないが早晩妻君になる人だ。五年前からの約束ださうだ」

小夜子は泣き腫らした眼を俯せた儘、細い首を下げる。藤尾は白い拳を握つた儘、動かない。

「嘘です、嘘です」と二遍云つた。「小野さんは私の夫です。私の未來の夫です。あなたは何を云ふんです。失禮な」と云つた。

「僕は只好意上事實を報知する迄さ。序に小夜子さんを紹介し樣と思つて」

「わたしを侮辱する氣ですね」

化石した表情の裏で急に血管が破裂した。紫色の血は再度の怒を滿面に注ぐ。

「好意だよ。好意だよ。誤解しちや困る」と宗近君は寧ろ平然としてゐる。――小野さんは漸く口を開いた。――

「宗近君の云ふ所は一々本當です。是は私の未來の妻に違ありません。――藤尾さん、今日迄の私は全く輕薄な人間です。あなたにも濟みません。小夜子にも濟みません。宗近君にも濟みません。今日から改めます。眞面目な人間になります。どうか許して下さい。新橋へ行けばあなたの爲にも、私の爲にも惡いです。だから行かなかつたです。許して下さい」

藤尾の表情は三たび變つた。破裂した血管の血は眞白に吸收されて、侮蔑の色のみが深刻に殘つた。假面の形は急に崩れる。

「ホヽヽヽ」

歇私的里性の笑は窓外の雨を衝いて高く迸つた。同時に握る拳を厚板の奥に差し込む途端にぬら〳〵と

長い鎖を引き出した。深紅の尾は怪しき光を帯びて、右へ左へ搖く。

「ぢあ、是はあなたには不用なんですね。よう御座んす。――宗近さん、あなたに上げませう。さあ」

白い手は腕をあらはに、すらりと延びた。時計は赭黒い宗近君の掌に確と落ちた。宗近君は一歩を煖爐に近く大股に開いた。やつと云ふ掛聲と共に赭黒い拳が空に躍る。時計は大理石の角で碎けた。

「藤尾さん、僕は時計が欲しい爲に、こんな酔興な邪魔をしたんぢやない。小野さん、僕は人の思をかけた女が欲しいから、こんな悪戯をしたんぢやない。かう壞して仕舞へば僕の精神は君等に分るだらう。是も第一義の活動の一部分だ。なあ甲野さん」

「さうだ」

呆然として立つた藤尾の顔は急に筋肉が働かなくなつた。手が硬くなつた。足が硬くなつた。中心を失つた石像の様に椅子を蹴返して、床の上に倒れた。

十九

凝る雲の底を拔いて、小一日空を傾けた雨は、大地の髓に浸み込む迄降つて歇んだ。春は茲に盡きる。梅に、櫻に、桃に、李に、且つ散り、且つ散つて、殘る紅も亦夢の様に散つて仕舞つた。春に誇るものは悉く亡ぶ。我の女は虚榮の毒を仰いで斃れた。花に相手を失つた風は、徒らに亡き人の部屋に薫り初める。

藤尾は北を枕に寐る。薄く掛けた友禪の小夜着には片輪車を、浮世らしからぬ恰好に、染め拔いた。上

には半分程色づいた蔦が一面に這ひかゝる。淋しき模樣である。動く氣色もない。敷布團は厚い郡内を二枚重ねたらしい。塵さへ立たぬ敷布を滑かに敷き詰めた下から、粗い格子の黄と焦茶が一本宛見える。變らぬものは黑髮である。紫の絹紐は取つて捨てた。有る丈は、有るに任せて枕に亂した。今日迄の浮世と思ふ母は、櫛の齒も入れてやらぬと見える。亂るゝ髮は、純白な敷布にこぼれて、小夜着の襟の天鵞絨に連なる。其中に仰向けた顏がある。昨日の肉を其儘に、只色が違ふ。眉は依然として濃い。眼は先母が眠らした。眠る迄は丹念に撫つたのである。――顏より外は見えぬ。

敷布の上に時計がある。濃に刻んだ七子は無慘に潰れて仕舞つた。鎖丈は慥である。ぐる〳〵と兩蓋の緣を卷いて、黃金の光を五分毎に曲折する眞中に、柘榴珠が、へしやげた蓋の眼の如く乘つてゐる。

逆に立てたのは二枚折の銀屛である。一面に冴へ返る月の色の方六尺のなかに、會釋もなく緣靑を使つて、柔婉なる莖を亂るゝ許に描いた。不規則にぎざ〳〵を疊む鋸葉を描いた。緣靑の盡きる莖の頭には、薄い瓣を掌程の大さに描いた。莖を彈けば、ひら〳〵と落つる許に輕く描た。吉野紙を縮まして幾重の襞を、絞りに疊み込んだ樣に描いた。色は赤に描いた。紫に描いた。凡てが銀の中から生へる。銀の中に咲く。落つるも銀の中と思はせる程に描いた。――花は虞美人草である。落款は抱一である。

屛風の陰に用ひ慣れた寄木の小机を置く。高岡塗の蒔繪の硯筥は書物と共に違棚に移した。机の上には油を注した瓦器を供へて、晝ながらの燈火を一本の燈心に點ける。燈心は新らしい。瓦器の丈を餘りて、三寸を尾に引く先は、油さへ含まず白くすらりと延びてゐる。

外には白磁の香爐がある。線香の袋が蒼ざめた赤い色を机の角に出してゐる。灰の中に立てた五六本は、

一點の紅から煙となつて消えて行く。香は佛に似て居る。色は流るゝ藍である。根本から濃く立ち騰るうちに右に搖き左へ搖く。搖く度に幅が廣くなる。幅が廣くなるうちに色が薄くなる。薄くなる帶のなかに濃い筋がゆるやかに流れて、仕舞には廣い幅も、帶も、濃い筋も行方知れずになる。時に燃え盡した灰がぱたりと、棒の儘倒れる。

違棚の高岡塗は沈んだ小豆色に古木の幹を青く盛り上げて、寒紅梅の數點を螺鈿擬に鏤り出した。裏は黒地に鶯が一羽飛んでゐる。並ぶ蘆雁の高蒔繪の中には昨日迄、深き光を暗き底に放つ柘榴珠が收めてあつた。兩蓋に隙間なく七子を盛る金側時計が收めてあつた。高蒔繪の上には一卷の書物が載せてある。四隅を金に立ち切つた箔の小口丈が鮮かに見える。間から紫の栞の房が長く垂れて居る。栞を差し込んだ頁の上から七行目に「埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、斯くありてこそ」の一句がある。色鉛筆で細い筋を入れてある。

凡てが美くしい。美くしいものゝなかに横はる人の顏も美くしい。驕る眼は長へに閉ぢた。驕る眼を眠つた藤尾の眉は、額は、黒髮は、天女の如く美くしい。

「御線香が切れやしないかしら」と母は次の間から立ちかゝる。

「今上げて來ました」と欽吾が云ふ。膝を正しく組み合はして、手を拱いてゐる。

「一さんも上げて遣つて下さい」

「私も今上げて來た」

線香の香は藤尾の部屋から、思ひ出した樣に吹いてくる。燃え切つた灰は、棒の儘で、はたり／＼と香

爐の中に倒れつゝある。銀屏は知らぬ間に薫る。

「小野さんは、未だ來ないんですか」と母が云ふ。

「もう來るでせう。今呼びに遣りました」と欽吾が云ふ。

部屋はわざと立て切つた。隔の襖丈は明けてある。片輪車の友禪の裾丈が見える。あとは芭蕉布の唐紙で萬事を隱す。幽冥を仕切る縁は黑である。一寸幅に鴨居から敷居迄眞直に貫いてゐる。母は襖の此方に坐りながら、折々は、見えぬ所を覗き込む樣に、首を傾けて脊を反らす。冷かな足よりも冷かな顏の方が氣にかゝる。覗く度に黑い縁は、すつきりと友禪の小夜着を斜に斷ち切つてゐる。寫せば其儘の模樣畫になる。

「御叔母さん、飛んだ事になつて、御氣の毒だが、仕方がない。御諦めなさい」

「斯んな事にならうとは……」

「泣いたつて、今更仕樣がない。因果だ」

「本當に殘念な事をしました」と眼を拭ふ。

「あんまり泣くと却つて供養にならない。それより後の始末が大事ですよ。かうなつちや、是非甲野さんに居てもらふより仕方がないんだから、其氣になつて遣らないと、あなたが困る許だ」

母はわつと泣き出した。過去を顧みる涙は抑へ易い。卒然として未來に於けるわが運命を自覺した時の涙は發作的に來る。

「どうしたら好いか――夫を思ふと――一さん」

切れ〴〵の言葉が、涙と洟の間から出た。
「御叔母さん、失禮ながら、ちつと平生の考へ方が惡かつた」
「私の不行屆から、藤尾はこんな事になる。欽吾には見放される……」
「だからね。さう泣いたつて仕樣がないから……」
「……洵に面目次第も御座いません」
「だから是から少し考へ直すさ。ねえ、甲野さん、さうしたら好いだらう」
「みんな私が惡いんでせうね」と母は始めて欽吾に向つた。腕組をしてゐた人は漸く口を開く。――
「僞の子だとか、本當の子だとか區別しなければ好いんです。平たく當り前にして下されば好いんです。遠慮なんぞなさらなければ好いんです。なんでもない事を六づかしく考へなければ好いんです」
甲野さんは句を切つた。母は下を向いて答へない。或は理解出來ないからかと思ふ。甲野さんは再び口を開いた。――
「あなたは藤尾に家も財産も遣りたかつたのでせう。だから遣らうと私が云ふのに、いつ迄も私を疑つて信用なさらないのが惡いんです。あなたは私が家に居るのを面白く思つて御出でなかつたでせう。だから私が家を出ると云ふのに、面當の爲めだとか、何とか惡く考へるのが不可ないです。あなたは小野さんを藤尾の養子にしたかつたんでせう。私が不承知を云ふだらうと思つて、私を京都へ遊びに遣つて、其留守中に小野と藤尾の關係を一日〳〵と深くして仕舞つたのでせう。さう云ふ策略が不可ないです。私を京都へ遊びにやるんでも私の病氣を癒す爲に遣つたんだと、私にも人にも仰しやるでせう。さう云ふ嘘が惡

いんです。――さう云ふ所さへ考へ直して下されば別に家を出る必要はないのです。何時迄も御世話をしても好いのです」
甲野さんは是丈でやめる。母は俯向いた儘、しばらく考へてゐたが、遂に低い聲で答へた。――
「さう云はれて見ると、全く私が惡かつたよ。――是から御前さんがたの意見を聞いて、どうとも惡い所は直す積だから……」
「夫で結構です。ねえ甲野さん。君にも御母さんだ。家に居て面倒を見て上げるがいゝ。糸公にもよく話して置くから」
「うん」と甲野さんは答へた限である。
闌春の黄昏が絶えんとする時、小野さんは蒼白い額を抑へて來た。藍色の燈は二ツ・銀屏を數へて立ち盡つた。
二日して葬式は濟んだ。葬式の濟んだ夜、甲野さんは日記を書き込んだ。――
「悲劇は遂に來た。來るべき悲劇はとうから豫想して居た。豫想した悲劇を、爲すがまゝの發展に任せて、隻手をだに下さゞるは、業深き人の所爲に對して、隻手の無能なるを知るが故である。悲劇の偉大なるを知るが故である。悲劇の偉大なる勢力を味はゝしめて、三世に跨がる業を根柢から洗はんが爲である。不親切な爲ではない。隻手を擧ぐれば隻手を失ひ、一目を搖かせば一目を眇す。手と目とを害うて、しかも第二者の業は依然として變らぬ。のみか時々に刻々に深くなる。手を袖に、眼を閉づるは恐るゝのではない。手と目より偉大なる自然の制裁を親切に感受して、石火の一拶に本來の面目に逢着せしむるの微意に外な

らぬ。
悲劇は喜劇より偉大である。之を說明して死は萬障を封ずるが故に偉大だと云ふものがある。取り返しが付かぬ運命の底に陷て、出て來ぬから偉大だと云ふのは、流るゝ水が逝いて歸らぬ故に偉大だと云ふと一般である。運命は單に最終結を告ぐるが爲にのみ偉大にはならぬ。忽然として生を變じて死となすが故に偉大なのである。忘れたる死を不用意の際に點出するから偉大なのである。巫山戯たるものが急に襟を正すから偉大なのである。襟を正して道義の必要を今更の如く感ずるから偉大なのである。人生の第一義は道義にありとの命題を腦裏に樹立するが故に偉大なのである。道義の運行は悲劇に際會して始めて澁滯せざるが故に偉大なのである。道義の實踐はこれを人に望む事切なるにも拘はらず、われの尤も難しとする所である。悲劇は個人をして此實踐を敢てせしむるが爲に偉大である。道義の實踐は他人に尤も便宜にして、自己に尤も不利益である。人々力を茲に致すとき、一般の幸福を促がして、社會を眞正の文明に導くが故に、悲劇は偉大である。
問題は無數にある。粟か米か、是は喜劇である。工か商か、是も喜劇である。あの女かこの女か、是も喜劇である。綴織か繻珍か、是も喜劇である。英語か獨乙語か、是も喜劇である。凡てが喜劇である。最後に一つの問題が殘る。――生か死か。是が悲劇である。
十年は三千六百日である。普通の人が朝から晚に至つて身心を勞する問題は皆喜劇である。三千六百日を通して喜劇を演ずるものは遂に悲劇を忘れる。如何にして生を解せんかの問題に煩悶して、死の一字を念頭に置かなくなる。この生とあの生との取捨に忙がしきが故に生と死との最大問題を閑却する。

死を忘るゝものは贅澤になる。一浮も生中である。一沈も生中である。一擧手も一投足も悉く生中にあるが故に、如何に踴るも、如何に狂ふも、如何に巫山戲るも、大丈夫生中を出づる氣遣なしと思ふ。贅澤は高じて大膽となる。大膽は道義を蹂躪して大自在に跳梁する。

萬人は悉く生死の大問題より出立する。此問題を解決して死を捨てると云ふ。生を好むと云ふ。是に於て萬人は生に向つて進んだ。只死を捨てると云ふに於て、萬人は一致するが故に、死を捨てるべき必要の條件たる道義を、相互に守るべく默契した。去れども、萬人は日に日に生に向つて進むが故に、日に日に死に背いて遠ざかるが故に、大自在に跳梁して毫も生中を脱するの虞なしと自信するが故に、――道義は不必要となる。

道義に重を置かざる萬人は、道義を犠牲にしてあらゆる喜劇を演じて得意である。巫山戲る。騒ぐ。欺く。嘲弄する。馬鹿にする。踏む。蹴る。――悉く萬人が喜劇より受くる快樂である。此快樂は生に向つて進むに從つて分化發展するが故に――此快樂は道義を犠牲にして始めて享受し得るが故に――喜劇の進歩は底止する所を知らずして、道義の觀念は日を追ふて下る。

道義の觀念が極度に衰へて、生を欲する萬人の社會を滿足に維持しがたき時、悲劇は突然として起る。是に於て萬人の眼は悉く自己の出立點に向ふ。始めて生の隣に死が住む事を知る。妄りに踴り狂ふとき、人をして生の境を踏み外して、死の圜内に入らしむる事を知る。人もわれも尤も忌み嫌へる死は、遂に忘る可からざる永劫の陷穽なる事を知る。陷穽の周圍に朽ちかゝる道義の繩は妄りに飛び超ゆべからざるを知る。繩は新たに張らねばならぬを知る。第二義以下の活動の無意味なる事を知る。而して始めて悲劇の

偉大なるを悟る。……」

二ケ月後甲野さんは此一節を抄錄して倫敦の宗近君に送つた。宗近君の返事にはかうあつた。――

「此所では喜劇ばかり流行る」

坑夫

四一、二、一――四一、四、六

さつきから松原を通つてるんだが、松原と云ふものは繪で見たよりも餘つ程長いもんだ。何時迄行つても松ばかり生えて居て一向要領を得ない。此方がいくら歩行たつて松の方で發展して呉れなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つた儘松と睨めつ子をしてゐる方が增しだ。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通し無茶苦茶に北の方へ歩いて來たら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇の御神樂堂へ上つて一寸寐た。何でも八幡樣らしい。寒くて目が覺めたら、まだ夜は明け離れて居なかつた。夫からのべつ平押しに此處迄遣つて來た樣なもの丶、かう矢鱈に松ばかり並んで居ては歩く精がない。

足は大分重くなつて居る。膨ら脛に小さい鐵の才槌を縛り附けた樣に足掻に骨が折れる。袷の尻は無論端折つてある。其の上洋袴下さへ穿いて居ないのだから不斷なら競走でも出來る。が、かう松ばかりぢや所詮敵はない。

掛茶屋がある。葭簀の影から見ると粘土のへつゝいに、錆た茶釜が掛かつて居る。床几が二尺許り往來へ食み出した上から、二三足草鞋がぶら下がつて、袢天だか、どてらだか分らない着物を着た男が脊中を此方へ向けて腰を掛けてゐる。

休まうかな、廢さうかなと、通り掛りに横目で覗き込んで見たら、例の袢天とどてらの中を行く男が突然此方を向いた。煙草の脂で黑くなつた齒を、厚い唇の間から出して笑つてゐる。是はと少し氣味が悪く

なり掛ける途端に、向ふの顔は急に眞面目になつた。今迄茶店の婆さんと去る面白い話をして居て、何の氣もつかずに、つい其の儘の顔を往來へ向けた時に、不図自分の面相に出つ喰したものと見える。ともかく向ふが眞面目になつたので漸く安心した。安心したと思ふ間もなく又氣味が惡くなつた。男に眞面目になつた顔を眞面目な場所に据ゑた儘、白眼の運動が氣に掛かる程の勢で自分の口から鼻、鼻から額とぢりぢり頭の上へ登つて行く。鳥打帽の廂を跨いで、腦天迄屆いたと思ふ頃又白眼がぢり〳〵下へ降つて來た。今度は顔を素通りにして胸から臍のあたり迄來ると一寸留まつた。臍の所には蟇口がある。三十二錢這入つてゐる。白い眼は久留米絣の上から此の蟇口を睨めた儘、木綿の兵兒帶を乘り越してやつと股倉へ出た。股倉から下にあるものは空脛許りだ。いくら見たつて、見られる樣なものは食ッ附いちや居ない。たゞ不斷より少々重たくなつてゐる。白い眼は其の重たくなつてゐる所を、わざつと、ぢり〳〵見て、とうとう親指の痕が黒くついた俎下駄の臺迄降つて行つた。

かう書くと、何だか、長く一所に立つてゐて、さあ御覽下さいと云はない許りに振舞つた樣に思はれるがさうぢやない。實は白い眼の運動が始まるや否や急に茶店へ休むのが厭になつたから、すた〳〵歩き出した積である。にも拘らず、此の積が少々覺束なかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵へて、俎下駄を捩る間際には、もう白い眼の運動は濟んでゐた。殘念ながら向ふは早いものである。ぢり〳〵見るんだから定めし手間が掛かるだらうと思つたら大間違ひ。ぢり〳〵には相違ない、何處迄も落附いてゐる。がそれで滅法早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてる眼があるものだと思つた位である。夫れにしても、あゝ緩くり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだらうか。さ

んざつ馬鹿にされて、さあ御歸り、用はないからと云ふ段になつて、もう御免蒙りますと立ち上つた樣なものだ。此方は馬鹿氣て居る。彼方は得意である。
歩き出してから五六間の間は變に腹が立つた。然し不愉快は五六間ですぐ消えて仕舞つた。と思ふと又足が重くなつた。——此の足だもの。何しろ鐵の才槌を雙方の足へ縛り附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出來ない筈だ。あの白い眼にぢりぢり遣られたのも、満更持前の半間から許り來たとも云へまい。
かう思ひ直して見ると下らない。
其の上こんな事を氣にして居られる身分ぢやない。一旦飛び出したからは、もうどうあつても家へ戻る了簡はない。東京にさへ居り切れない身體だ。たとひ田舍でも落ち付く氣はない。休むと後から追つ掛けられる。昨日迄のいさくさが頭の中を切つて廻つた日にはどんな田舍だつて遣り切れない。だから只歩くのである。けれども別段に目的もない歩き方だから、顏の先一間四方がぼうとして、何だか焼け損なつた寫眞の樣に曇つてゐる。しかも此の曇つたものが、いつ晴れると云ふ的もなく、只漠然と際限もなく行手に廣がつてゐる。苟くも自分が生きてゐる間は五十年でも六十年でも、いくら歩いても走ても依然として廣がつてゐるに違ひない。あゝ、詰らない。歩くのは居たゝまれないから歩くので、此のぼんやりした前途を拔出す爲に歩くのではない。拔け出さうとしたつて拔け出せないのは知れ切つてゐる。
東京を立つた昨夜の九時から、かう諦はつけては居るが、さて歩き出して見ると、歩きながら氣が氣でない。足も重い、松が厭きる程行列してゐる。然し足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何の爲に歩いて居るんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きて居られない程の苦痛は滅多にない。

其のみならず歩けば歩く程到底抜ける事の出來ない曇つた世界の中へ段々深く潛り込んで行く樣な氣がする。振り返ると日の照つてゐる東京はもう代が違つて居る。手を出しても足を伸ばしても、此の世では屆かない。丸で娑婆が違ふ。其の癖暖かな朗かな東京は、依然として眼先にあり／＼と寫つて居る。おういと日蔭から呼びたくなる位明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。此の漠々のうちへ――命のあらん限り廣がつてゐる此の漠々のうちへ――自分はふら／＼這ひ込むのだから心細い。

此曇つた世界が曇つたなりはびこつて、定業の盡きる迄行く手を塞いで居てはたまらない　留まつた片足を不安の念に驅られて一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏み込んだ譯になる。不安に追ひ懸けられ、不安に引つ張られて、已を得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒が明く筈がない。生涯片付かない不安の中を歩いて行くんだ。とてもの事に曇つたものが、一層段々暗くなつて吳れゝばいゝ。暗くなつた所を又暗い方へと踏み出して行つたら、遠からず世界が闇になつて、自分の眼で自分の身體が見えなくなるだらう。さうなれば氣樂なものだ。

意地の惡い事に自分の行く路は明るくもなつて吳れず、と云つて暗くもなつて吳れない。どこ迄も半陰半晴の姿で、どこ迄も片付かぬ不安が立て罩めて居る。是では生甲斐がない。去ればと云つて死に切れない。何でも人の居ない所へ行つて、たつた一人で住んで居たい。それが出來なければ一層の事……

不思議な事に一層の事と觀念して見たが別にどきんともしなかつた。今迄東京に居た時分一層の事と無分別を起しかけた事も度々あるが、其の度々にどきんとしない事はなかつた。後からぞつとして、まあ善かつたと思はない事もなかつた。所が今度は天からどきんともぞつともしない。どきんとでもぞつとでも

勝手にするが善いと云ふ位に、不安の念が胸一杯に廣がつてゐたんだらう。其上一層の事を斷行するのが今が今ではないと云ふ安心がどこかにあるらしい。明日になるか明後日になるか、ことに由つたら一週間も掛るか、まかり間違へば無期限に延ばしても差支ないと高を括つてゐたせゐかも知れない。華嚴の瀑にしても淺間の噴火口にしても道程はまだ大分ある位は知らぬ間に感じてゐたんだらう。行き着いて愈とならなければ誰がどきんとするものぢやない。從つて一層の事を斷行して見樣と云ふ氣にもなる。此の一面に曇つた世界が苦痛であつて、此の苦痛をどきんとしない程度に於て免れる望があると思へば重い足も前に出し甲斐がある。先づ此の位の決心であつたらしい。然し是れはあとから考へた心理狀態の解剖である。其の當時はたゞ暗い所へ出ればいゝ。何でも暗い所へ行かなければならないと、只管暗い所を目的に歩き出した許りである。今考へると馬鹿々々しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを貴てもの慰藉と心得る樣になつて來る。但し目指す死は必ず遠方になければならないと云ふ事も事實だらうと思ふ。少くとも自分はさう考へる。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云ふ因果である。

只暗い所へ行きたい、行かなくつちやならないと思ひながら、雲を摑む樣な料簡で歩いて來ると、後からおい／＼呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根があるのは不思議なものだ。自分は何の氣もなく振り向いた。應ずる爲と云ふ意識さへ持たなかつたのは事實である。然し振り向いて見て始めて氣が付いた。自分は先つきの茶店から未だ二十間とは離れて居ない。其の茶店の前の往來へ、例の袢天とどてらの合の子が出て、脂だらけの齒をあらはに曝しながら頻に自分を呼んでゐる。

昨夕東京を立つてから、まだ人間に口を利いた事がない。人から言葉を掛けられ樣抔とは夢にも豫期し

て居なかつた。言葉を掛けられる資格抔は丸で無いものと自信し切つて居た。所へ突然呼び懸けられたのだから――粗末な歯並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをして居るのだから、ほんやり振り返つた時の心持が、自然と判然すると共に、自分の足は何時の間にか、其の男の方へ動き出した。實を云ふと此の男の顔も服装も、動作もあんまり氣に入つちや居ない。ことにさつき白い眼でぢろ〱遣られた時なぞは、何となく嫌悪の念が胸の裡に萌し掛けた位である。夫れがものゝ二十間とも歩かないうちに以前の感情は何處かへ消えて仕舞つて、打つて變つた一種の温味を帯びた心持で後歸りをしたのは何故だか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つて居た。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反對の見當に取つて返す事になる。暗い所から一歩立ち退いた意味になる。所が此立退が何となく嬉しかつた。其の後色々經驗をして見たが、こんな矛盾は到る所に轉がつてゐる。決して自分ばかりぢやあるまいと思ふ。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考へて居る。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらへるのと云つて得意がつてゐる。讀者もあの性格がかうだの、あゝだのと分つた樣な事を云つてるが、ありや、みんな嘘をかいて樂しんだり、嘘を讀んで嬉しがつてるんだらう。本當の事を云ふと性格なんて纏つたものはありやしない。本當の事が小説家抔にかけるものぢやなし、書いたつて、小説になる氣づかひはあるまい。本當の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手古ずる位纏まらない物體だ。然し自分丈がどうあつても纏まらなく出來上つてるから、他人も自分同樣締りのない人間に違ないと早合點をして居るのかも知れない。夫れでは失禮に當る。

兎に角引き返して目倉縞の傍迄行くと、どてらは左も馴れ〱しい聲で

「若い衆さん」
と云ひながら、大きな顎を心持襟の中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めて居る。自分は好加減な所で、茶色の足を二本立てた儘、
「何か用ですか」
と叮嚀に聞いた。是れが平生ならこんなどてらから若い衆さんなんて云はれて快よく返辭をする自分ぢやない。返辭をするにしてもうんとか何だとかで濟したらうと思ふ。所が此の時に限つて、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間の樣な氣持がした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんぢや、決してない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見做した樣な語氣で、
「御前さん、働く了簡はないかね」
と云つた。自分は今が今迄暗い所へ行くより外に用のない身と覺悟して居たんだから、藪から棒に働く了簡はないかねと聞かれた時には、何と答へて善いか、薩張り譯が分らずに、空脛を突つ張つた儘、馬鹿見た樣な口を開けて、ぼんやり相手を眺めて居た。
「御前さん、働く了簡はないかね。どうせ働かなくつちやならないんだらう」
とどてらが又問ひ返した。問ひ返された時分には此方の腹も、どうか、かうか、受け答の出來る位に眼前の事況を會得する樣になつた。
「働いても善いですが」
是は自分の答である。然し此答が苟くも口に出て來る程に、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やつと

片附いたと云ふものは、單純ながら一順の過程を通つて居る。

自分は何處へ行くんだか分らないが、なにしろ人の居ない處へ行く氣でゐた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に對して憫然な感がある。と云ふものはいくらどてらでも人間である。人間の居ない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、事程左樣に人間の引力が強いと云ふ事を證據立てると同時に、自分の所志にもう背かねばならぬ程に自分は薄弱なものであつたと云ふ事をも證據立てゝ居る。手短に云ふと、自分は暗い所へ行く氣でゐるんだが、實の所は已を得ず行くんで、何か引つかゝりが出來れば、得たり賢しと普通の娑婆に留まる了簡なんだらうと思はれる、幸ひに、どてらが向ふから引つかゝつて呉れたんで、何の氣なしに足が後向きに歩き出して仕舞つたのだ。云はゞ自分の大目的に申し譯のない裏切りを一寸して見た譯になる。だからどてらが働く氣はないかねと出て呉れずに、御前さん野にするかね、夫とも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人の居ない所が怖くなつてぞつとしたに違ひない。夫ほどの娑婆氣が、戻り掛ける途端にもう萌して居たのである。さうしてどてらに呼ばれゝば呼ばれる程、どてらの方へ近寄れば近寄る程、此の娑婆氣は一歩毎に増長したものと見える。最後に空脛を二本、棒の樣にどてらの眞向ふに突つ立てた時は、此の娑婆氣が最高潮に達した瞬間である。其の瞬間に働く氣はないかねと來た。御粗末などてらだが非常に旨く自分の心理狀態を利用した勸誘である。だし拔けの質問に一時はぼんやりした樣なものゝ、ぼんやりから覺めて見れば、自分はいつか娑婆の人間になつてゐる。娑婆の人間である以上は食はなければならない。食ふには働かなくつちや駄目だ。

「働いても、いゝですが」
答は何の苦もなく自分の口から滑り出して仕舞つた。するとどてらは左樣だらう其の筈さと云ふ樣な顔附をした。自分は不思議にも此の顔附を尤もだと首肯した。
「働いても、いゝですが、全體どんな事をするんですか」
と自分はこゝで再び聞き直して見た。
「大變儲かるんだが、やつて見る氣はあるかい。儲かる事は受合なんだ」
どてらは上機嫌の體で、にこ〳〵笑ひながら、自分の返事を待つてゐる。どうせどてらの笑ふんだから愛嬌にもなんにもなつちや居ない。元來笑ふ丈損になる樣に出來上がつてる顔だ。所が其笑ひ方が妙になつかしく思はれて
「えゝ遣つて見ませう」
と受けて仕舞つた。
「遣つて見る？そいつあ結構だ。君儲かるよ」
「そんなに儲けなくつても、いゝですが……」
「え？」
どてらは此時妙な聲を出した。
「全體どんな仕事なんですか」
「遣るなら話すが、遣るだらうね、お前さん。話した後で厭だなんて云はれちや困るが。屹度遣るだら

うね」

　いゝどてらは無暗に念を押す。自分はそこで、

「遣る氣です」

と答へた。然し此の答は前の樣に自然天然には出なかつた。云はゞいきみ出した答である。大抵の事なら遣つて退けるが、萬一の場合には逃げを張る氣と見えた。だから遣りますと云はずに遣る氣ですと云つたんだらう。――かう自分の事を人の事の樣に書くのは何となく變だが、元來人間は締りのないものだからはつきりした事はいくら自分の身の上だつて、斯うだとは云ひ切れない。況して過去の事になると自分も人も區別はありやしない。凡てがだらうに變化して仕舞ふ。無責任だと云はれるかも知れないが本當だから仕方がない。これからさきも危しい所はいつでも此の式で行く積りだ。

　そこでいゝどてらは略話が纏つたものと呑み込んで

「ぢや、まあ御這入り。緩くり御茶でも呑んで話すから」

と云ふ。別に異存もないから、茶店に這入つていゝどてらの隣りに腰を卸したら、口のゆがんだ四十許りの神さんが妙な臭ひのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思ひ出した樣に腹が減つて來た。減つて來たのか、減つてゐたのに氣が附いたのか分らない。蟇口には三十二錢這入つてゐる、何か食はうかしらと考へてゐると

「君、煙草を呑むかい」

と、いゝどてらが「朝日」の袋を横から差し出した。中々御世辭がいゝ。袋の角が裂けてるのは仕方がないが、

何だか薄穢なく垢づいた上に、びしやりと押し潰されて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてる様に思はれる。袖のないどてらだから、入れ所に窮して腹掛の隱しへでも捩ぢ込んで置くものと見える。
「難有う、澤山です」
と斷ると、どてらは別に失望の體もなく、自分でかたまつたうちの一本を、爪垢のたまつた指先で引つ張り出した。果せる哉煙草は皺だらけになつて、太刀の様に反つて居る。それでも破けた所もないと見えて、すぱ〳〵吸ふと鼻から煙が出る。際どい所で煙草の用を足してるから不思議だ。
「御前さん、幾年になんなさる」
どてらは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりする様だが、何で區別するんだか要領を得ない。今迄の所で察して見ると、儲かるときには君になつて、不斷の時には御前さんに復する様にも見える。何でも儲かる事が大分氣になつてるらしい。
「十九です」
と答へた。實際其の時は十九に違なかつたのである。
「まだ若いんだね」
と口のゆがんだ神さんが、後向になつて盆を拭きながら云つた。後向きだから、どんな顏附をして居るか見えない。獨り言だかどてらに話しかけてるんだか、夫とも自分を相手にする氣なんだか分らなかつた。
「さうさ、十九ぢや若いもんだ。働き盛りだ」
と、どうしても働かなくつちやならない様な語氣である。自分はだまつて床几を離れた。

正面に駄菓子を載せる臺があつて、縁の毀れた菓子箱の傍に、大きな皿がある。上に青い布巾がかゝつて居る下から、丸い揚饅頭が食み出してゐる。自分は此の饅頭が喰ひたくなつたから、腰を浮かして菓子臺の前まで來たのだが、傍へ來て、つら〳〵饅頭の皿を覗き込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留まるや否や足音にパッと四方に散つたんで、おやと思ひながら、氣を落ち附けて少しく揚饅頭を物色してゐると、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せた樣に、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて來た。黄色い油切た皮の上に、黒いぼち〳〵が出鱈目に出來る。手を出さうかなと思ふ矢先へもつて來て、急に黒い斑點か、晴夜の星宿の如く、縱横に行列するんだから、少し辟易して仕舞つて、ぼんやり皿を見下して居た。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日揚げた許りだから」

かみさんは、何時の間にか盆を拭いて仕舞つて、菓子臺の向側に立つて居る。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思つたか、いきなり、節太の手を皿の上に翳して、

「まあ、大變な蠅だ事」

と云ひながら、翳した手を竪に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げ樣」

神さんは忽ち棚の上から木皿を一枚卸して、長い竹の箸で、饅頭をぽん〳〵〳〵と七つ程挾み込んで、

「此方がいゝでせう」

と木皿を、自分の腰を掛けて居た床几の上へ持つて行つた。自分は仕方がないから又故の席へ歸つて、木

皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで來てゐる。自分は蠅と饅頭と木皿を眺めながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云つて見た。是はあながち「朝日」の御禮の爲許りではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食ふだらうか食はないだらうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、濟まない」

と云ひながら、何の苦もなく一番上の奴を取つて頰張つちまつた。唇の厚い口をもごつかせてゐる所を觀察すると、滿更でもなさゝうに見えた。そこで自分も思ひ切つて、此方側の下から、比較的奇麗なのを摘み出して、あんぐり遣つた。油の味が舌の上へ流れ出したと思ふ間もなく、其の中から苦い餡が卒然として味覺を冒して來た。然し此の際だから別に仕損つたとも思はなかつた。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑へ呑み下して仕舞つたら、自然と手が又木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらは此の時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移つてゐる。自分に比較すると大變速力が早い。さうして食つてる間は口を利かない。働く事も儲かる事も丸で忘れてゐるらしい。從つて七つの饅頭は呼吸を二三度するうちに無くなつて仕舞つた。しかも自分はたつた二つしか食はない。殘る五つは瞬く間にどてらの爲にしてやられたのである。

如何に逡巡をする程の汚ならしいものでも、一度皮切りをやると、あとは夫程神經に障らずに食へるものだ。是れはあとで山へ行つてしみ〴〵經驗した事で、今では何でもない陳腐の眞理になつて仕舞つたが、

其の時は饅頭を食ひながら少々呆れた位後が食ひ度なつた。それに腹は減つてゐる。其の上相手がどてらである。此のどてらが事もなげに、砂のついた饅頭をぱくつく所を見ると、多少は競爭の氣味にもなつて神經などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云ふ心持になる。そこで自分はとう〳〵神さんにたのんで饅頭の御代りを貰つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云はずに、木皿が床几の上に乘るや否や、自分の方で先づ一つ頰張つた。するとどてらも「や、濟まない」とも何とも云はずに、だまつて一つ頰張つた。次に自分が又一つ頰張る。次にどてらが又一つ頰張る。互違に頰張りつ子をして六つ目迄來た時、たつた一つ殘つた。是が幸ひ自分の番に當つて居るので、どてらが手を出さないうちに、自分が頰張つて仕舞つた。それから又御代りを貰つた。

「君大分遣るね」

とどてらが云つた。自分は大分遣る氣も何もなかつたが、云はれて見ると大分遣るに違ない。然し是は初手にどてらの方で自分の食ひ度ないものを、むしや〳〵食つて見せて、自分の食慾を誘致した結果が與つて力ある樣だ。所がどてらの方では全然此方の責任で大分遣つてる樣な口氣であつた。だから自分は何だかどてらに對して辯解して見たい氣がしたが、辯解する言葉が一寸出て來なかつた。只雲を攫む樣にどてらにも責任があるんだらうと思ふ丈で、どこが責任なんだか分らなかつたから默つて居た。すると

「君、揚饅頭が餘つ程好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな譯はない。と云

つて現に三皿迄代へて食ふものを嫌だとは無論云はれない。だから今度も默つて居た。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅は名代の御饅だから、みんなが旨がつて食るだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてる樣な氣がした。そこで益默つて仕舞つた。默つて聞いてると、

「旨い事此の上なしだ」

とどてらが云つてる。本當なんだか御世辭なんだか一寸見當が附かなかつた。兎に角饅頭はどうでも構はないから、肝心の勞働問題を聞糺して見樣と思つて、

「先刻の御話ですがね。實は僕も色々の事情があつて、働いて飯を食はなくつちやならない身分なんですが、一體どんな事をやるんですか」

と此方から口を切つて見た。どてらは正面の菓子臺を眺めてゐたが、此時急に顏丈自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘ぢやない、本當に儲かる話なんだから是非遣り給へ」

と、又ぞろ自分を君呼はりにして、しきりに儲けさせたがつてゐる。此方へ向き直つて、自分を誘ひ出さうと力める顏附を見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張てゐる。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形に出來上つた皺が深く映つてゐる。此の樣子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いゝです。然し働く事は働くです。神聖な勞働なら何でもやるです」

どてらの頰の邊には、はてなと云ふ景色が一寸見えたが、やがて、かの弓形の皺を左右に開いて、脂だらけの齒を遠慮なく剝き出して、さうして一種特別な笑ひ方をした。あとから考へるとどてらには神聖な勞働と云ふ意味が通じなかつたらしい。苟も人間たるものが金儲の意味さへ知らないで、小六づかしい口巧者な事を云ふから、氣の毒だと云ふのでどてらは笑つたのである。自分は今が今迄死ぬ氣でゐた。死なない迄も人間の居ない所へ行く氣でゐた。それが出來損つたから、生きる爲に働く氣になつた迄である。儲かるとか儲からないとか云ふ問題は、てんで頭の中にはない。今ない許りぢやない、東京にゐて親の厄介になつてる時分からなかつた。どころぢやない儲主義は大いに輕蔑してゐた。日本中どこへ行つても其の位な考へは誰にもあるだらう位に信じてゐた。だからどてらがさつきから儲かる〳〵と云ふのを聞くたんびに何の爲だらうと不思議に思つてゐた。無論癪には障らない。癪に障る樣な身分でもなし、境遇でもないから、一向平氣ではゐたが、是が人間に對する至大の甘言で、勸誘の方法として、尤も利目のあるものだとは夢にも想ひ至らなかつた。そこで、どてらから笑はれちまつた。笑はれてさへ一向通じなかつた。今考へると馬鹿々々しい。

一種特別な笑ひ方をしたどてらは、其の笑ひの收まりかけに、

「お前さん、全體今迄働いた事があんなさるのかね」

と少し眞面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日自宅を逃げ出した許りである。自分の經驗で働いた試しは擊劍の稽古と野球の練習位なもので、稼いで食た事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。然し是から働かなくつちあならない身分です」

「さうだらう。働いた事がなくつちや……ぢや、君、まだ儲けた事もないんだね」
と當り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、默つてると、茶店のかみさんが、菓子臺の後から、
「働くからにや、儲けなくつちやあね」
と云ひながら、立ち上がつた。どてらが、
「全くだ。儲けやうつたつて、今時さう儲け口が轉がつてるもんぢやない」
と幾分か自分に對して恩に被せる樣に答へるのを、
「さうさ」
と幾分かさけすむ樣に聞き流して、裏へ出て行つた。此さうさが妙に氣になつて、ことによると、まだ其の後があるかも知れないと思つた所爲か、何氣なく後姿を見送つてゐると、大きな黑松の根方の處へ行つて、立小便をし始めたから、急に顏を背けて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、
「私だから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨い話をするんだ。是が外のものだつたら、受合つてたゞぢや話しつこない旨い口なんだからね」
と又恩に被せる。自分は、面倒くさいから大人しく、
「難有いです」
と四角張つて答へて置いた。
「實はかう云ふ口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云ふ。自分は默つて聞いてゐた。

「實はかう云ふ口なんだがね。銅山へ行つて仕事をするんだが、私が周旋さへすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんぢやないか」

自分は何か返事を促される樣な氣がしたけれども、どうもどてらの調子に載せられて、さうですとは答へる譯に行かなかつた。坑夫と云へば鑛山の穴の中で働く勞働者に違ない。世の中に勞働者の種類は大分あるだらうが、其のうちで尤も苦しくつて、尤も下等なものが坑夫だと許考へてゐた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云はれたのだから、調子を合す所の騷ぎぢやない、おやと思ふ位内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだ／＼坑夫より下等な種屬があると云ふのは、大晦日の後にまだ澤山日が餘つてると云ふのと同じ事で、自分には殆ど想像がつかなかつた。實を云ふとどてらがこんな事を饒舌るのは、自分を若年と侮つて、好い加減に人を瞞すのではないかと考へた。所が相手は存外眞面目である。

「何しろ、取附からすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら樂なもんさ。忽ちのうちに金がうんと溜つちまつて、好な事が出來らあね。なに銀行もあるんだから、預け樣と思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めつから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向を持つて行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足した儘の顏をして、

「さうとも、今からすぐ坑夫になつて置きあ四五年立つうちにや、唸る程溜る許りだ。――何しろ十九だ。――働き盛りだ。――今のうち儲けなくつちや損だ」

と一句、一句間を置いて獨り言の樣に述べてゐる。

要するに此のかみさんも是非坑夫になれと云はぬ許りの口占で、全然どてらと同意見を持つてる樣に思はれた。無論夫でよろしい。又夫でなくつても一向構はない。妙な事に此の時程大人しい氣分になれた事は自分が生れて以來始めてゞあつた。相手がどんな間違を主張しても自分は只はい〳〵と云つて聞いて居たらうと思ふ。實を云ふと過去一年間に於て仕出かした不都合やら義理やら人情やら煩悶やらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなく茲所迄落ちて來たのだから、昨日迄の自分の事を考へると、どうしたつて、こんなに溫和しくなれる譯がないのだが、實際此の時は人に逆ふ樣な氣分は藥にしたくつても出て來なかつた。さうして又それを矛盾とも不思議とも考へなかつた。恐らく考へる餘裕がなかつたんだらう。人間のうちで纏つたものは身體丈である。身體が纏つてるもんだから、心も同樣に片附いたものだと思つて、昨日と今日と丸で反對の事をしながらも、矢張り故の通りの自分だと平氣で濟ましてゐるものが大分ある。のみならず一旦責任問題が持ち上がつて、自分の反覆を詰られた時ですら、いや私の心は記憶がある許りで、實はばら〳〵なんですからと答へるものがないのは何故だらう。かう云ふ矛盾を屢經驗した自分ですら、無理と思ひながらも、聊か責任を感ずる樣だ。して見ると人間は中々重寶に社會の犧牲になる樣に出來上つたものだ。

同時に自分のばら〳〵な魂がふら〳〵不規則に活動する現狀を目擊して、自分を他人扱ひに觀察した贔屓目なしの眞相から割り出して考へると、人間程的にならないものはない。約束とか契とか云ふものは自分の魂を自覺した人にはとても出來ない話だ。又其の約束を楯にとつて相手をぎゆ〳〵押し附けるなんて蠻行は野暮の至りである。大抵の約束を實行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があ

るにも拘らず、其の無理を強て壓しかくして、知らぬ顔で遣つて退ける迄である。決して魂の自由行動ぢやない。はやくから、こゝに氣が附いたなら、無暗に人を恨んだり、悶えたり、苦しまぎれに自宅を飛び出したりしなくつても濟んだかも知れない。たとひ飛び出しても此の茶店迄來て、どてらと神さんに對する自分の態度が、昨日迄の自分とは打つて變つた所を、他人扱ひに落ち着き拂つて比較する丈の餘裕があつたら、少しは悟れたらう。

惜い事に當時の自分には自分に對する研究心と云ふものが丸でなかつた。只口惜しくつて、苦しくつて悲しくつて、腹立たしくつて、さうして氣の毒で、濟まなくつて、世の中が厭になつて、人間が棄て切れないで、居ても立つても、居たゝまれないで、無茶苦茶に歩いて、どてらに引つ掛つて、揚饅頭を喰つた許りである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、只眼前の心より外に心と云ふものが丸でなくなつちまつて、平生から繋續の取れない魂がいとゞふわつき出して、實際あるんだか、ないんだか頗る明瞭でない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢の樣に、朦朧と一團の妖氛となつて、虛空遙に際限もなく立て罩めてる樣な心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、何故坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲ける事許を目的に働く人間ぢやないとか、儲けさへすりや何處がいゝんだとか、何とか蚊とか理窟を捏ねて、出來る丈自己を主張しなければ勘辨しない所を、只大人しく控へて居た。口丈大人しいのではない、腹の中から丸で抵抗する氣が出なかつたのである。

何でも此の時の自分は、單に働けばいゝと云ふ事丈を考へて居たらしい。苟しくも働きさへすれば、—

――苟しくも此のふわ〳〵の魂が五體のうちに、うろつきながらも居られさへすれば、――要するに死に切れないものを、强て殺して仕舞ふほどの無理を冒さない以上は、坑夫以上だらうが、坑夫以下だらうが、儲からうが、儲かるまいが、頓と問題にならなかつたものと見える。口働く口さへ出來れば夫で結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果に就て、如何に自分の意見と相容れぬ法螺を吹かれても、又其の法螺が、單に自分を誘致する爲にする打算的の法螺であつても、又其の法螺に乘る以上は理知の人間として自分の人格に尠からぬ汚點を貽す恐れがあつても、丸で氣にならなかつたんだらう。こんな時には複雜な人間が非常に單純になるもんだ。

其の上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云ふ決心で自宅を飛出したのである。夫れが第二には死なゝくつても好いから人の居ない所へ行きたいと移つて來た。それが又何時の間にか移つて、第三にはともかくも働かうと變化しちまつた。所で、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいゝ、一歩進めて云へば第一に緣故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心變りがした樣なものゝ、變りつゝ進んで來た、心の狀態には、有耶無耶の間に緣を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、故の所を慕ひつゝ押されて行くのである。單に働くと云ふ決心が、第二を振り切る程突飛でもなかつたし、第一と交涉を絕つ程遠くにも居なかつたと見える。働きながら、人の居ない所にゐて、尤も死に近い狀態で作業が出來れば、最後の決心は意の如くに運びながら、幾分か當初の目的にも叶ふ譯になる。坑夫と云へば名前の示す如く、坑の中で、日の目を見ない家業である。娑婆に居ながら　娑婆から下へ潛り込んで、暗い所で、鑛塊土塊を相手に、浮世の聲を聞かないで濟む。定めて

陰氣だらう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごて〳〵ゐるが、自分程坑夫に適したものは決してないに違ない。坑夫は自分に取つて天職である。――と茲所迄明瞭には無論考へなかつたが、只坑夫と聞いた時、何となく陰氣な心持ちがして、其の陰氣が又何となく嬉しかつた。今思ひ出して見ると、矢つ張りどうあつても他人の事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてかう云つた。

「僕は一生懸命に働く積ですが、坑夫にして呉れるでせうか」

するとどてらは中々鷹揚な態度で、

「すぐ坑夫になるのは中々六づかしいんだが、私が周旋さへすりや屹度出來る」

と云ふから自分もそんなものかなと考へて、暫く默つてゐると、茶店のかみさんが又口を出した。

「長藏さんが口を利きさへすりや、坑夫は受合だ」

自分は此の時始めてどてらの名前が長藏だと云ふ事を知つた。夫から一所に汽車に乘つたり、下りたりする時に、自分も此の男を捕へて二三度長藏さんと呼んだ事がある。然し長藏とはどう書くのか今以て知らない。こゝに書いたのは勿論當字である。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思ひも寄らない見當に向けた、云はば自分の生活狀態に一轉化を與へた人の名前を口で覺えて居ながら、筆に書けないのは異な事だ。

偖此の長藏さんと、茶店のかみさんが屹度坑夫になれると受合ふから、自分もなれるんだらうと思つて、

「ぢや、どうか何分願ひます」

と賴んだ。然し此の茶店に腰を掛けてゐるものが、どうして、何處へ行つて、どんな手續で坑夫になるんだか其の邊は薩張り分らなかつた。
何しろ先方で此の位勸めるものだから、何分願ひますと云つたら、長藏さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに默つてゐた。すると長藏さんは、勢ひよくどてらの尻を床几から立てゝ、
「それぢや是から、すぐに出掛け樣。御前さん、支度はいゝかい。忘れもののない樣によく氣をつけて」
と云つた。自分はうちを出る時、着のみ着の儘で出たのだから、身體より外に忘れ物のある筈がない。そこで、
「何にも無いです」
と立ち上がつたが、神さんと顏を見合せて氣が附いた。肝心の揚饅頭の代を忘れてゐる。長藏さんは平氣な面をして、もう半分程葭簀の外に出て往來を眺めてゐた。自分は懷中から三十二錢入りの蟇口を出して饅頭三皿の代を拂つて、序だから茶代として五錢やつた。饅頭の代はとう〳〵忘れちまつて思ひ出せない。たゞ其の時かみさんが、
「坑夫になつて、うんと溜めて歸りに又御寄」
と云つたのを記憶してゐる。其の後坑夫はやめたが、遂に此の茶店へは寄る機會がなかつた。それから長藏さんに尾いて、例の飽き〳〵した松原へ出て、一本筋を足の甲迄埃を上げて、やつて來ると、さつきの長たらしいのに引き易へて今度は存外早く片附いちまつた。何時の間にやら松がなくなつたら、板橋街道

の樣な希知な宿の入口に出て來た。矢ッ張り板橋街道の樣に我多馬車が通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返つて、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗つても好いです」

と答へた。さうしたら今度は

「乗らなくつても可いかい」

と反對の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつても可いです」

と答へた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云つたから、

「どうでも可いです」

と答へた。其の内に馬車は遠くへ行つて仕舞つた。

「ぢや、歩く事にしやう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向ふを見ると、今通つた馬車の埃が日光にまぶれて、往來が濁つた樣に黄色く見える。そのうちに人通りが段々多くなる。町並が次第に立派になる。仕舞には牛込

の神樂坂位な繁昌する所へ出た。こゝいらの店付や人の樣子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長藏さんの樣なのは殆ど見當らない。自分は長藏さんに、

「此所は何と云ふ所です」

と聞いたら、長藏さんは、

「此所？此所を知らないのかい」

と驚いた樣子であつたが、笑ひもせずすぐ敎へて呉れた。それで所の名は分つたがこゝにはわざと云はない。自分が此の繁華な町の名を知らなかつたのを餘程不思議に感じたと見えて、長藏さんは、

「お前さん、一體生れは何處だい」

と聞き出した。考へると、今迄長藏さんが自分の過去や經歷について、ついぞ一と口も自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所爲としては、少しく無頓着過ぎる樣にも思はれたが、此の男は全くそんな事に冷淡な性であつた事が後で分つた。此の時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。其の證據には自分が、

「東京です」

と答へたら、

「さうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張る樣にして、ある橫町を曲つた。

實を云ふと自分は相當の地位を有つたものゝ子である。込み入つた事情があつて、耐へ切れずに生家を

飛び出した様なもの丶、あながち親に對する不平や面當許りの無分別ぢやない。何となく世間が厭になつた結果として、わが生家迄面白くなくなつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見てゐられなくなつてゐた。是は大變だと氣がついて、根氣に心を取り直さうとしたが、遲かつた。踏み答へて見樣と百方に焦慮れば焦慮る程厭になる。揚句の果は踏張の栓が一度にどつと拔けて、堪忍の陣立が總崩れとなつた。其の晩にとう〳〵生家を飛び出して仕舞つたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がゐる。さうして其少女の傍に又一人の少女がゐる。此の二人の少女の周圍に親がある。親類がある。世間が萬遍なく取り捲いてゐる。所が第一の少女が自分に對して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因緣で自分も丸くなつたり、四角になつたりしなくつちやならなくなる。然し自分はさう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に對して濟まない約束を以て生れて來た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく辨別て居た。が濟まないと思へば思ふ程丸くなつたり四角になつたりする。仕舞には形態ばかりぢやない組織迄變る樣になつて來た。夫を第二の少女が恨めしさうに見てゐる。親も親類も見てゐる。世間も見てゐる。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲つたりくねつたりする所を、どうかして隱さうと力めたが、何しろ第一の少女の方で少しも已めて呉れないで、無暗に伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隱し終せる段ぢやない。親にも親類にも目附かつて仕舞つた。怪しからんと云ふ事になつた。怪しかるとは自分でも思つて居なかつたが、段々聞き糾して見ると、怪しからん意味が大分違つてる。そこで色々辯解して見たが中々聞いて呉れない。親の癖に自分の云ふ事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の

少女の傍に居たら、此の先どうなるか分らない、ことに因ると實際辯解の出來ない樣な怪しからん事が出來するかも知れないと考へ出した。がどうしても離れる事が出來ない。しかも第二の少女に對しては氣の毒である、濟まん事になつたと云ふ念が日々烈しくなる。――こんな具合で三方四方から、兩立しない感情が攻め寄せて來て、五色の絲のこんがらかつた樣に、此方を引くと、彼方の筋が詰る、彼方をゆるめると此方が釣れると云ふ按排で、亂れた頭はどうあつても解けない。色々に工夫を積んで自分に愛想の盡きる程ひねくつて見たが、到底思ふ樣に纒まらないと云ふ一點張に落ちて來た時に――やつと氣がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるより外に道はない譯だ。今迄は自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいゝ樣な解決があるだらうと、只管に外のみを當にしてゐた。つまり往來で人と行き合つた時、此方は突ッ立つた儘、向ふが泥濘へ避けてくれる工面ばかりしてゐたのだ。此方が動かない今の儘の此方で、夫で相手の方丈を思ふ通りに動かさうと云ふ出來ない相談を持ち懸けてゐたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に寫る自分の影を氣にしたつて、どうなるもんぢやない。世間の掟といふ鏡が容易に動かせないとすると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分は此の入り組んだ關係の中から、自分丈をふいと煙にして仕舞はうと決心した。然し本當に煙にするには自殺するより外に致し方がない。そこで度々自殺をしかけて見た。所が仕掛るたんびにどきんとして已めて仕舞つた。自殺はいくら稽古をしても上手にならないものだと云ふ事を漸く悟つた。自殺が急に出來なければ自滅するのが好からうとなつた。然し自分は前に云ふ通り相當の身分のある親を持つ

て朝夕に事を缺かぬ身分であるから生家に居ては自滅しやうがない。どうしても逃亡が必要である。逃亡をしても此關係を忘れる事は出來まいとも考へた。又忘れる事が出來るだらうとも考へた。要するに、して見なければ分らないと考へた。たとひ煩悶が逃亡に附き纒つて來るにしても夫は自分の事である。あとに殘つた人は自分の逃亡の爲に助かるに違ひないと考へた。のみならず逃亡をしたつて、何時迄も逃亡てる譯ぢやない。急に自滅がしにくいから、まづ其一着として逃亡て見るんである。だから逃亡て見ても矢張り過去に追はれて苦しい樣なら、其の時徐に自滅の計を廻らしても遲くはない。それでも駄目と極まれば其時こそ屹度自殺して見せる。――かう書くと自分は如何にも下らない人間になつて仕舞ふが、事實を露骨に云ふと是丈の事に過ぎないんだから仕方がない。又かう書けばこそ下らなくなるが、其の當時のぼんやりした意氣込を、ぼんやりした意氣込の儘に敍したなら、是でも小說の主人公になる資格は十分あるんだらうと考へる。

それでなくつても實際其の當時の、二人の少女の有樣やら、日毎に變る局面の轉換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やら蚊やらを、そつくり其の儘書き立てたら、大分面白い續きものが出來るんだが、そんな筆もなし時もないから、まあ已めにして、折角の坑夫事件丈けを話す事にする。

兎に角かう云ふ譯で自分は愈となつて出奔したんだから、固より生きながら葬られる覺悟でもあり、又自ら葬つて仕舞ふ了簡でもあつたが、遉に親の名前や過去の歷史はいくら棄鉢になつても長藏さんには話し度なかつた。長藏さん許りぢやない、凡ての人間に話し度なかつた。凡ての人間は愚か、自分にさへ出

來る事なら語り度ない程情ない心持でひよろ〳〵してゐた。だから長藏さんが人を周旋する男にも似合ず、自分の身元に就て一言も聞き糺さなかつたのは、變と思ひながらも、内々嬉しかつた。本當を云ふと、當時の自分はまだ嘘を突く事を能く練習して居なかつたし、胡魔化すと云ふ事は大變な惡事の樣に考へてゐたんだから、聞かれたら定めし困つたらうと思ふ。

そこで長藏さんに尾いて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎になつて、所々は田圃の片割れが細く透て見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅丈であるなと氣が附たら、又急に横町を曲らせられて、又賑かな所へ出された。その突當りが停車場であつた。汽車に乘らなくつては坑夫になる手續きが濟まないんだと云ふ事を此時漸く知つた。實は鑛山の出張所でも此の町にあつて、まづそこへ連れて行かれて、其處から又役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つてゐた。

そこで停車場へ這入る五六間手前になつてから、

「長藏さん、汽車に乘るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分が此の男を長藏さんと云つたのは此の時が始めてゞある。長藏さんは一寸振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる樣子もなく、すぐ、

「あゝ、乘るんだよ」

と答へたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場の入口に立て考へ出した。あの男は一體自分と一所に汽車へ乘つて先方迄行く氣なんだらうか、夫にしては餘り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にかう叮嚀な世話を燒くのは可笑し

い。ことによると彼奴は詐欺師かも知れない。自分は下らん事に今更の如くはつと氣が附いて急に汽車へ乘るのが厭になつて來た。一層の事又停車場を飛び出さうかしらと思つて、今迄プラットフォームの方を向いて居た足を、入口の見當に向け易へた。然しまだ歩き出す程の決心も附かなかつたと見えて、茫然として、停車場前の茶屋の赤い暖簾を眺めて居ると、いきなり大きな聲を出して遠くから呼びとめられた。自分は此聲を聞くと共に、其所有者は長藏さんであつて、松原以來の聲であると云ふ事を悟つた。振り返ると、長藏さんは遠方から顔丈斜に出して、しきりに此方を見て、首を竪に振つてゐる。何でも身體は便所の塀にかくれてゐるらしい。折角呼ぶものだからと思つて、自分は長藏さんの顔を目的に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乘る前に一寸用を足したら善からう」

と云ふ。自分は夫には及ばんから、一應辭退して見たが、中々承知しさうもないから、そこで長藏さんと相竝んで、きたない話だが、小便を垂れた。其の時自分の考へは又變つた。自分は身體より外に何にも持つて居ない。取られ様にも騙られ様にも、名譽も財產もないんだから初手から見込の立たない代物である。昨日の自分と今日の自分とを混同して、長藏さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給の差し抑を苦にする樣なものであつた。長藏さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風體を見て一目騙るべからずと看破するには教育も何も要つたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだらうと思ひ出した。夫れなら夫れで構はない。給料のうちを幾分か遣れば濟む事だ抔と考へながら用を足した。——實は自分が此丈の結論に到着する爲には、僅かの時間内だが是程の手數と推論とを要したのである。此位骨を折つてすら、まだ長藏さんのボン引きなる事を所謂ボン引きなる純

粋の意味に於て會得する事が出來なかつたのは、年が十九だつたからである。
年の若いのは實に損なもので、こんなにボン引きの近所迄どうか、かうか、漕ぎ附けながら、夫でも、もしや好意づくの世話ずきから起つた親切ぢやあるまいかと思つて、飛んだ氣兼をしたのは可笑しかつた。
實は二人して、用を足して、のそ〳〵三等待合所の入口迄來た時、自分は比較的威儀を正して長藏さんに、こんな事を云つたんである。
「あなたに、わざ〳〵先方迄連れて行つて頂いては恐縮ですから、もう是れで澤山です」
すると長藏さんは返事もせずに變な顔をして、默つて自分の方を見て居るから、是は禮の云ひ樣がわるいのかとも思つて、
「色々御世話になつて難有いです。是から先はもう僕一人で遣りますから、どうか御構ひなく―
と云つて、頻に頭を下げた。すると、
「一人で遣れるものかね」
と長藏さんが云つた。此の時丈は御前さんを省いた樣である。
「なに遣れます」
と答へたら、
「どうして―
と聞き返されたんで、少し面喰つたが、
「今貴方に伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともぐ〳〵述べ立てると、

「御前さん、私の名前位で、すぐ坑夫になれると思つてるのは大間違ひだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんぢやないよ」

と跳附けられちまつた。仕方がないから

「でも御氣の毒ですから」

と言譯旁挨拶をすると、

「なに遠慮しないでもいゝ、先方迄送つてあげるから心配しないがいゝ。――袖摩り合ふも何とかの因緣だ。ハ、、、、」

と笑つた。そこで自分は最後に、

「どうも濟みません」

と禮を述べて置いた。

夫から二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けてゐると、段々停車場へ人が寄つてくる。大抵は田舍者である。中には長藏さんの樣な袢天袈どてらを着た上に、天秤棒さへ荷いだのがある。さうかと思ふと光澤のある前掛を締めて、中折帽を妙に凹ました江戸ッ子流の商人もある。其他の何やら蚊やらでベンチの四方が足音と人聲でざわついて來た時に、切符口の戸がかたりと開いた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がつて、みんな鐵網の前へ集つてくる。此の時長藏さんの態度は落ちつき拂つたものであつた。例の太刀の如く反つ繰返つた「朝日」を厚い脣の間に啣へながら、あの角張つた顏を三が二程自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持つて居なさるかい」

と聞た。又自分の未熟な所を發表する樣だが、實を云ふと汽車賃の事は今が今迄自分の考へには毫も上らなかつたのである。汽車に乘るんだなと思ひながら、幾何金を拂ふものか、又金を拂ふ必要があるものか、頓と思ひ至らなかつたのは愚の至である。愚はどこ迄も承認するが此の質問に出逢ふ迄は無賃で乘れるかの如き心持で平氣でゐたのは事實である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長藏さんにさへ食つ附いてさへ居れば、どうか爲て吳れるんだらうと云ふ依賴心が妙に潛んでゐたんだらう。但し自分ぢや決してさう思つて居なかつた。今でもさうだとは自分の事ながら申しにくい。けれども、斯う云ふ安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場へ來て汽車賃の汽の字も考へずに居られるもんぢやない。其の癖こんなに依賴して居る長藏さんに對して、もう御世話にならなくつても、好う御座いますの、是から一人で行きますのと平に同行を斷つたのは、どう云ふ了簡だらう。自分は斯う云ふ場合に度々出逢つてから、仕舞には自分で一つの理論を立てた。――病氣に潛伏期がある如く、吾々の思想や、感情にも潛伏期がある。此の潛伏期の間には自分で其の思想を有ちながら、其の感情に制せられながら、ちつとも自覺しない。又此の思想や感情が外界の因緣で意識の表面へ出て來る機會がないと、生涯其の思想や感情の支配を受けながら、自分は決してそんな影響を蒙つた覺がないと主張する。其の證據は此の通りと、どし／＼反對の行爲言動をして見せる。が其の行爲言動が、傍から見ると矛盾になつてゐる。自分でもはてなと思ふ事がある。はてなと氣が附かないでも飛んだ苦しみを受ける場合が起つてくる。自分が前に云つた少女に苦しめられたのも、元はと云へば、矢つ張り此の潛伏者を自覺し得なかつたからである。

此の正體の知れないものが、少しも自分の心を冒さない先に、劇藥でも注射して、悉く殺し盡す事が出來たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに濟んだらうに、所がさう思ふ樣に行かんのは、人にも自分にも氣の毒の至りである。

それで、自分が長藏さんから「御前さん汽車賃を持つて居なさるか」と問はれた時に、自分ははつと思つて、少からず狼狽た。三十二錢のうちで饅頭の代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫にならうなんて呑込顏に受合つたんだから、自分は少し圖迂々々しい人間であつたんだと氣がついたら、急に頰邊が熱くなつた。其の時分の事を考へると自分ながら可愛らしい。是れが今だつたら、たとひ電車の中で借金の催促をされ樣とも、只困る丈で、決して赤面はしない。ましてほん引きの長藏さん抔に對して、神聖なる羞恥の血色を見せるなんて勿體ない事は、夢にも遣る氣遣ひはありやしない。

自分はどう云ふものか、長藏さんに對して汽車賃はありますと答へたかつた。然し實際がないんだから噓を吐く譯には行かない。噓を吐きつ放にして濟ませられるなら、思ひ切つて、噓を吐く事にしたらうが、とにかく今切符を買ふと云ふ間際で、吐けばすぐ露現して仕舞ふんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答るのが如何にも苦痛である。どうも子供だから、しかも滿更の子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣の附いた、煩悶をしてゐる、つまらん常識がある樣な、ない樣な子供だから、猶々不都合だつた。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云ひにくかつたもんだから、

「少しあります」

と答へた。それも響の物に應ずる如く、停滯なく出ればよかつたが、何しろ勿體なくも頰邊を赤くしたあ

とで、甚だ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。
「少しつて、御前さん、若干持つてるい」
と長藏さんが聞き返した。長藏さんは自分が頰邊を赤くしても、恐縮しても、丸で頓着しない。たゞいくら持つてるか聞きたい樣子であつた。所が生憎肝心の自分にはいくらあるか判然しない。何しろ〆て三十二錢のうち、饅頭を三皿食つて、茶代を五錢やつたんだから、殘る所は澤山ぢやない。あつても無くつても同じ位なものだ。
「ほんの僅かです。とても足りさうもないです」
と正直な所を云ふと、
「足りない所は、私が足して上げるから、構はない。何しろ有る丈御出し」
と、思つたよりは平氣である。自分は此の際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、如何にも體裁がわるいと考へた上に、有るものを無いと隱す樣に取られては厭だから、懷から例の蟇口を取り出して、蟇口ごと長藏さんに渡した。此の蟇口は鰐の皮で拵へた頗る上等なもので、親父から貰ふ時も、是れは高價な品である と云ふ講釋を篤と聽かされた贅澤物である。長藏さんは蟇口を受け取つて、ちよつと眺めて居たが、
「ふゝん、安くないね」
と云つたなり中味も改めずに腹掛の隱しへ入れちまつた。中味を改めない所はよかつたが、
「ぢや、私が切符を買つて來て上げるから、ちやんと茲處に待つて居なくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすた〳〵行つて仕舞つた。見てゐると人込の中へ這入つたなり振り返りもしないで切符を買ふ番のくるのを待つてゐる。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方迄の長藏さんは始終自分の傍に食つ附いて居て、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶ位であつたのに、蟇口を受け取つて、切符を買ふ時は丸で自分を忘れて居る樣に見受けられた。あんまり人が多くつて、此方へ眼をつける暇がなかつたんだらう。之に反して自分は一生懸命に長藏さんの後姿を見守つて、札を買ふ順番が一人々々に廻つて來るたんびに長藏さんが段々切符口へ近附いて行くのを、遠くから妙な神經を起して眺めてゐた。蟇口は立派だが中を開けられたら銅貨が出る許りだ。開けて見て、何だ是つぱかりしか持つてゐないのかと長藏さんが驚くに違ない。どうも氣の毒である。いくら足し前をするんだらう抔と入らざる事を苦に病んで居ると、やがて長藏さんは平生の顔付で歸つて來た。

「さあ、是れが御前さんの分だ」

と云ひながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云はない。極りが惡かつたから、自分も只

「難有う」

と受取つたぎり賃錢の事は口へ出さなかつた。蟇口の事もそれなりにして置いた。長藏さんの方でも蟇口の事はそれつきり云はなかつた。從つて蟇口はつひに長藏さんに遣つた事になる。

それから、とう〳〵二人して汽車へ乘つた。汽車の中では別に是と云ふ出來事もなかつた。只自分の隣りに腫物だらけの、腐爛目の、痘痕のある男が乘つたので、急に心持が惡くなつて向ふ側へ席を移した。

どうも當時の狀態を今からよく考へて見ると餘つ程可笑しい。生家を逃亡て、坑夫に迄、なり下る決心なんだから、大抵の事に辟易しさうもないもんだが矢張り醜ないもの丶傍へは寄りつき度なかつた。あの按排では自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら萬事かう几帳面に段落を附けるかと思ふと、さうでないから困る。第一長藏さんや茶店のかみさんに逢つた時なんぞは平生の自分にも似ず、喁の音も出さずに心から大人しくしてゐた。議論も主張も氣慨も何もあつたもんぢやありやしない。尤も是れは大分餓じい時であつたから、少しは差引いて勘定を立るのが至當だが、決して空腹の爲ばかりとは思へない。どうも矛盾――又矛盾が出たから廢さう。

自分は自分の生活中尤も色彩の多い當時の冒險を暇さへあれば考へ出して見る癖がある。考へ出す度に、昔の自分の事だから遠慮なく嚴密なる解剖の刀を揮つて、縱橫十文字に自分の心緒を切りさいなんで見るが、其の結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔しだから忘れちまつたんだ抔と云つては不可ない。此の位切實な經驗は自分の生涯中に二度とありやしない。二十以下の無分別から出た無茶だから、其の筋道が入り亂れて要領を得んのだと評しては猶不可ない。經驗の當時こそ入り亂れて滅多矢鱈に盲動するが、其の盲動に立ち至る迄の經過は、落ち着いた今日の頭腦の批判を待たなければとても分らないものだ。此の鑛山行だつて、昔の夢の今日だから、此の位人に解る樣に書く事が出來る。色氣がなくなつたから、あらひざらひ書き立てる勇氣があると云ふ許りぢやない。其時の自分を今の眼の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する餘裕がなければ、たとひ是程にだつて到底書けるものぢやない。俗人は其の時其の場合に書いた經驗が一番正しいと思ふが、大間違である。刻下の事情と云ふものは、轉瞬の客

氣に驅られて、飛んでもない誤謬を傳へ勝ちのものである。自分の鑛山行抔も其の時其の儘の心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、氣取つた、僞りの多いものが出來上つたらう。到底、かうやつて人の前へ御覽下さいと出された義理ぢやない。

自分が腐爛目の難を避けて、向ふ側に席を移すと、長藏さんは一目一寸自分と腐爛目を見たなりで、矢張り元の所へ腰を掛けた儘動かなかつた。長藏さんの神經が自分より餘程剛健なのには少からず驚嘆した。のみならず、平氣な顏で腐爛目と話し出したに至つて、少しく愛想が盡きた。

「又山行きかね」

「あゝ又一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長藏さんは此の時何か返事をしかけたんだらうが不圖自分と顏を見合せたものだから、其の儘厚い唇を閉ぢて横を向いて仕舞つた。其の顏について廻つて、腐爛目は、

「又大分儲かるね」

と云つた。自分は此言葉を聞くや否や忽ち窓の外へ顏を出した。さうして窓から唾液をした。すると其唾液が汽車の風で自分の顏へ飛んで來た。何だか不愉快だつた。前の腰掛で知らない男が二人辯じてゐる。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそ〳〵がかい」

「なに强盜がよ。それで以て、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」
「それで、主人が、泥棒だからつてんで贋錢を遣つて歸したとするんだ」
「うんそれから」
「後で泥棒が贋錢と氣がついて、あすこの亭主は贋錢使だ〳〵つて方々振て歩くんだ。常公の前だが、何方が罪が重いと思ふ」
「何方たあ」
「其の亭主と泥棒がよ」
「さうさなあ」
と相手は解決に苦しんでゐる。自分は眠くなつたから、窓の所へ頭を持たしてうと〳〵した。寐ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の經過が苦痛になるものは寐るに限る。死んでも恐らく同じ事だらう。然し死ぬのは、やさしい樣で中々容易でない。先づ凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が輕便である。柔道をやる人が、時々朋友に咽喉を締めて貰ふ事がある。夏の日永のだるい時抔は、絶息した儘五分も道場に死んで居て、それから活を入れさせると、生れ代る樣な好い氣分になる――但し人の話だが。――自分は、もしや死につきりに死んぢまやしないかと云ふ神經の爲に、ついぞ此の荒療治を頼んだ事がない。睡眠は是程の效驗もあるまいが、其代り生き戻り損ふ危險も伴つてゐないから、心配のあるもの、煩悶の多いもの、苦痛に堪へぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取つては、至大なる自然の賚である。其の自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて來た。難有いと

禮を云ふ閑もないうちに、うつとりとしちまつて、生きてる以上は是非共其の經過を自覺しなければならない時間を、丸潰しに潰してゐた。所が眼が覺めた。後から考へて見たら、汽車の動いてる最中に寐込んだもんだから、汽車の留つた爲に、眠りが調子を失つて何處かへ飛んで行つたのである。自分は眠つて居ると、時間の經過丈は忘れてるが、空間の運動には依然として反應を呈する能力がある樣だ。だから本當に煩悶を忘れる爲には矢張り本當に死なゝくつては駄目だ。但し煩悶がなくなつた時分には、又生き返り度なるに極つてるから、正直に理想を云ふと、死んだり生きたり互違にするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽輕な冗談を云つてる樣だが決してそんな浮いた了見ぢやない。本氣に眞面目を話してる積である。其の證據には此の理想は只今過去を回想して、面白半分興に乘じて、好い加減に附け加へたんぢやない。實際汽車が留つて、不意に眼が覺めた時、この通りに出て來たのである。馬鹿氣た感じだから滑稽の樣に思はれるけれども其の時は正直にこんな馬鹿氣た感じが起つたんだから仕方がない。此の感じが滑稽に近ければ近い程、自分は當時の自分を可愛想に思ふのである。こんな常識をはづれた希望を、眞面目に抱かねばならぬ程、其の時の自分は情ない境遇に居つたんだと云ふ事が判然するからである。

　自分が不圖眼を開けると、汽車はもう留つてゐた。汽車が留まつたなと云ふ考へよりも、自分は汽車に乘つて居たんだなと云ふ考へが第一に起つた。起つたと思ふが早いか、長藏さんが居るんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかつたんだ、生家を出奔したんだ、何うしたんだ、かうしたんだと丸で十二三のたんだ、がむら／＼と塊まつて、頭の底から一度に湧いて來た。其の速い事と云つたら、言語に絕すると云はうか、

電光石火と評しやうか、實に恐ろしい位だつた。ある人が、溺れかゝつた其の刹那に、自分の過去の一生を、細大漏らさずあり〳〵と、眼の前に見た事があると云ふ話を其の後聞いたが、自分の此の時の經驗に因つて考へると、これは決して嘘ぢやなからうと思ふ。要するに其の位早く、自分は自分の實世界に於ける立場と境遇とを自覺したのである。自覺すると同時に、急に厭な心持になつた。只厭では、とても形容が出來ないんだが、去ればと云つて、別に敍述し樣もない心持ちだからたゞの厭でとめて置く。自分と同じ樣な心持ちを經驗した人ならば、只是丈で、成程あれだなと、直覺づくだらう。又經驗した事がないならば、それこそ幸福だ。決して知るに及ばない。

其の内同じ車室に乘つてゐたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入つて來る。何處へ陣取らうかと云ふ眼附できよろ〳〵するのと、忘れものはないかと云ふ顏附きでうろ〳〵するのと、それから何の用もないのに姿勢を更へて窓へ首を出したり、欠伸をしたりするのと、が一度に合併して、凡て動搖の狀態に世の中を崩し始めて來た、自分は自分の周圍のものが、悉く活動しかけるのを自覺してゐた。自覺すると共に、自分は普通の人間と違つて、みんなが活動する時分でさへ、他に釣り込まれて氣分が動いて來ない樣な仲間外れだと考へた。袖が觸れ違つて、膝を突き合せてゐながらも、魂丈は丸で緣も由緒もない、他界から迷ひ込んだ幽靈の樣な氣持であつた。今迄は、どうか、かうか、人並に調子を取つて來たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽氣になつて上へ騰る。自分は急に陰氣になつて下へ降る、到底交際は出來ないんだと思ふと、脊中と胸の厚さがしゆうと減つて、臟腑が薄つ片な一枚の紙の樣に壓しつけられる。途端に魂丈が地面の下へ拔け出しちまつた。洵に申譯のない、御恥づかしい心持ちをふらつかせ

て、凹んでゐた。
所へ長藏さんが、立つて來て、
「御前さん、まだ眼が覺めないかね。此處から降りるんだよ」
と注意して呉れた。それで漸く成程と氣が附いて立ち上つた。魂が地の底へ拔け出して行く途中でも、手足に血が通つてるうちは、呼ぶと返つて來るから可笑しなものだ。然し是れがもう少し烈しくなると、中中思ふ樣に魂が身體に寄りついて呉れない。其の後臺灣沖で難船した時抔は、殆ど魂に愛想を盡かされて、非常な難義をした事がある。何にでも上には上があるもんだ。是れが行き留りだの、突き當りだのと思つて、安心してかゝると、飛んだ目に逢ふ。然し此の時は此の心持が自分に取つて尤も新しくて、しかも甚だ苦い經驗であつた。
長藏さんのどてらの尻を嗅ぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿の通りへ出た。一本筋の通りだが存外廣い、許りではない、心持の判然する程眞直である。自分は此の廣い往還の眞中に立つて遙か向ふの宿外れを見下した。其の時一種妙な心持になつた。此の心持ちも自分の生涯中にあつて新らしいものであるから、序に此處に書いて置く。自分は肺の底が拔けて魂が逃げ出しさうな所を、漸く呼びとめて、多少人間らしい了簡になつて、宿の中へ顏を出した許りであるから、魂が吸く息につれて、やつと胎内に舞ひ戻つた丈で、まだふわ〳〵してゐる。少しも落ち附いてゐない。だから此の世にゐても、此の汽車から降りても、此の停車場から出ても、又此の宿の眞中に立つても、云はゞ魂がいや〳〵ながら、義理に働いてくれた樣なもので、決して本氣の沙汰で、自分の仕事として引き受けた專門の職責とは心得られなかつた

位、鈍い意識の所有者であつた。そこで、ふらついてゐる、氣の遠くなつてゐる、凡てに興味を失つた、かなつぼ眼を開いて見ると、今迄は汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られてゐた眼界が、はつと云ふ間に、一本筋の往還を沿うて、十丁許り飛んで行つた。しかも其の突當りに滴る程の山が、自分の眼を遮りながらも、邪魔にならぬ距離を有つて、どろんとしたわが眸を翠の裡に吸寄せてゐる。――そこで何んとなく今云つた樣な心持になつちまつたのである。

第一には大道砥の如しと、成語にもなつてる位で、平たい眞直な道は蟠まりのない爽なものである。もつと分り安く云ふと、眼を迷附せない。心配せずに此方へ御出と誘ふ樣に出來上つてるから、少しも遠慮や氣兼をする必要がない。許りぢやない。御出と云ふから一本筋の後を食ッ附いて行くと、何處迄も行ける。奇體な事に眼が横町へ曲り度ない。道が眞直に續いてゐればゐる程、眼も眞直に行かなくつては、窮屈で且不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つたものと自分は堅く信じてゐる。夫れから左右の家並を見ると、――是は瓦葺も藁葺もあるんだが――瓦葺だらうが、藁葺だらうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行く程次第々々に屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金で勾配を纒められる爲に向ふのはづれから此方迄突き通されてる樣に、行儀よく、斜に一筋を引つ張つて、何處迄も進んでゐる。さうして進めば進む程、地面に近寄つてくる。自分の立つてゐる左右の二階屋抔は――宿屋の樣に覺えてゐるが――見上げる程の高さであるのに、宿外れの軒を透して見ると、指の股に這入ると思れる位低い。其途中に暖簾が風に動いてゐたり、腰障子に大きな蛤がかいてあつたりして、多少の變化は無論あるけれども、軒並丈を遠く迄追つ掛けて行くと、一里が半秒で眼の中に飛び込んで來る。夫程

明瞭である。
前に云つた通り自分の魂は二日醉の體たらくで、何處迄もとろんとしてゐた。所へ停車場を出るや否や斷りなしに此の明瞭な――盲目にさへ明瞭な此景色にぶつかつたのである。魂の方では驚かなくつちやならない。又實際驚いたには違ひないが、今迄あやふやに不精々々に徘徊して居た惰性を一變して屹となるには、多少の時間がかゝる。自分の前に云つた一種妙な心持ちと云ふのは、魂が寐返りを打たないさき、景色が如何にも明瞭であるなと心附いたあと、――其の際どい中間に起つた心持ちである。此の景色は斯樣に暢達して、斯樣に明白で、今迄の自分の情緒とは、丸で似つかない、景氣のいゝものであつたが、自身の魂がおやと思つて、本氣に此の外界に對ひ出したが最後、いくら明かでも、いくら暢びりしてゐても、全く實世界の事實となつて仕舞ふ。實世界の事實となると如何な御光でも難有味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂がある特殊の狀態に居た爲――明かな外界を明かなりと感受する程の能力は持ちながら、是れは實感であると自覺する程作用が鋭くなかつた爲――此の眞直な道、此の眞直な軒を、事實に等しい明かな夢と見たのである。此の世でなければ見る事の出來ない明瞭な程度と、これに伴ふ爽涼した快感を以て、他界の幻影に接したと同樣の心持になつたのである。自分は大きな往來の眞中に立つてゐる。其往來は飽迄も長くつて、飽迄も一本筋に通つて居る。歩いて行けば其外迄行かれる。慥に此宿を通り拔る事は出來る。左右の家は觸れば觸る事が出來る。二階へ上れば上る事が出來る。出來ると云ふ事はちやんと心得てゐながらも、出來ると云ふ觀念を全く遺失して、單に切實なる感能の印象丈を眸のなかに受けながら立つてゐた。

自分は學者でないから、かう云ふ心持ちは何と云ふんだか分らない。殘念な事に名前を知らないのでついかう長くかいて仕舞つた。學問のある人から見たら、そんな事をと笑はれるかも知れないが仕方がない。其の後是れに似た心持は時々經驗した事がある。然し此の時程強く起つた事は曾てない。だから、ひよつとすると何かの參考になりはすまいかと思つて、わざ／＼此處に書いたのである。但し此心持ちは起ると忽ち消えて仕舞つた。

見ると日はもう傾きかけてゐる。初夏の日永の頃だから、日差から判斷して見ると、まだ四時過ぎ、恐らく五時にはなるまい。山に近い所爲か、天氣は思つた程よくないが、現に日が出てゐる位だから惡いとは云はれない。自分は斜かけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺めた時、あれが西の方だと思つた。東京を出て北へ北へと走つた積だが、汽車から降りて見ると、丸で方角がわからなくなつてゐた。此の町を眞直に町の通つてるなりに、下ると、突き當りが山で、其の山は方角から推すと、矢張り北であるから、自分と長藏さんは相變らず、北の方へ行くんだと思つた。

其の山は距離から云ふと大分ある樣に思はれた。高さも決して低くはない。色は眞蒼で、横から日の差す所丈が光る所爲か、陰の方は蒼い底が黑ずんで見えた。尤も是れは日の加減と云ふよりも杉檜の多い爲かも知れない。ともかくも蓊鬱として、奧深い樣子であつた。自分は傾きかけた太陽から、眼を移して此の蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だらうか、又は續きが奧の方にあるんだらうかと考へた。長藏さんと竝んで、段々山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向ふに見える山の奧の又其の奧が果しもなく續いてゐて、さうして其山々は悉く北へ北へと連なつてゐるとしか思はれなかつた。是れは自分達が山の方へ

歩いて行くけれど、只行く丈で中々麓へ足が屆かないから、山の方で奥へ〳〵と引き込んでいく樣な氣がする結果とも云はれるし。日が段々傾いて陰の方は蒼い山の上皮と、蒼い空の下層とが、雙方で本分を忘れて、好い加減に他の領分を犯し合つてるんで、眺める自分の眼にも、山と空の區劃が判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云ふ意識を忘却して、矢張り山の續きとして空を見るからだとも云はれる。さうして其の空は大變廣い。さうして際限なく北へ延びてゐる。さうして自分と長藏さんは北へ行くんである。

自分は昨夕東京を出て、千住の大橋迄來て、袷の尻を端折つたなり、松原へかゝつても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乘つても、空脛の儘で押し通して來た。それでも暑い位であつた。所が此の町へ這入つてから何だか空脛では寒い氣持がする。寒いと云ふよりも淋しいんだらう。長藏さんと默つて足丈を動かしてゐると、丸で秋の中を通り拔けてる樣である。そこで自分は又空腹になつた。度々空腹になつた事許りを書くのは如何はしい事で、且此の際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。實際自分は空腹になつた。家を出てから、只歩く丈で、人間の食ふものを食はないから、忽ち空腹になつちまふ。どんなに氣分がわるくつても、煩悶があつても、魂が逃げ出しさうでも、腹丈は十分減るものである。いや、さう云ふよりも、魂を落附ける爲には飯を供へなくつちや不可ないと云ひ換へるのが適當かも知れない。品の惡い話だが、自分は長藏さんと竝んで往來の眞中を歩きながら、左右に眼をくばつて、兩側の飲食店を覗き込む樣にして長い町を下つて行つた。所が此の町には飲食店が大分ある。旅屋とか料理屋とか云ふ上等なものは駄目としても、自分と長藏さんが這入つて然るべきやたいち流のがあすこにも此處にも見え

る。然し長藏さんは毫も支度をしさうにない。最前の我多馬車の時の樣に「御前さん夕食を食ふかね」とも聞いて呉れない。其の癖自分と同じ樣に、きよろ〳〵兩側に眼を配つて何だか發見したい樣な氣色がありありと見える。自分は今に長藏さんが恰好な所を見附けて、晩食をしたゝめに自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下つて行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れる程ひもじくは無かつた。胃の中にはまだ先刻の饅頭が多少殘つてる樣にも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。たゞ汽車を下りるや否や滅り込みさうな精神が、眞直な往來の眞中に抛り出されて、おやと眼を覺したら、山里の空氣がひやりと、夕日の間から皮膚を冒して來たんで、心機一轉の結果として茲に何か食つて見たくなつたんである。從つて食はなければ食はないでも濟む。長藏さん何か食はして呉れませんかと云ふ程苦しくもなかつた。然し何だか口が淋しいと見えて、しきりに繩暖簾や、お煮〆や、御中食所が氣にかゝる。相手の長藏さんが又申し合せた樣に右左と覗き込むので、此方は益食意地が張つてくる。自分は此の長い町を通りながら、自分等に適當と思ふ程度の一膳めし屋を遂に九軒迄勘定した。數へて九軒目に至つたら、左しもに長い宿はとう〳〵御仕舞になり掛けて、もう一町も行けば宿外れへ出拔けさうである。甚だ心細かつた。時に不圖右側を見ると、又酒めしと云ふ看板に逢着した。すると自分の心のうちに是れが最後だなと云ふ感じが起つた。それが爲か煤けた軒の腰障子に、肉太に認めた酒めし、御肴と云ふ文字が尤も劇烈な印象を以て自分の頭に映じて來た。其映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴の字でもあり〳〵見える。此の樣子では、いくら毫碌しても此の五字丈は、そつくり其の儘、紙の上に書く事が出來るだらう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみ〴〵見てゐると、不思議な事に長藏さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけてゐる。自分は流石頑强の長藏さんも今度こそ食ひに這入るに違なからうと思つた。所が這入らない。其の代りぴたりと留つた。見ると腰障子の奧の方では何だか赤いものが動いてゐる。長藏さんの顏色を窺ふと、何でも此の赤いものを見詰めてゐるらしい。此の赤いものは無論人間である。が長藏さんが何故立ち留つて此の赤い人間を覗き込むのか、頓と自分には分らなかつた。人間には違ないが、只薄暗く赤い許りで、顏附抔は無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かた〴〵立ち留つてゐると、やがて障子の奧から赤毛布が飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だらうと云ふ人があるかも知れないが、實際此の男は赤毛布で身を堅めて居た。其の代り下には手織の單衣一枚丈しきや着てゐないんだから、つまり〆て見ると自分と大した相違はない事になる。尤も單衣一枚で凌いでゐると云ふ事は、あとからの發見で、障子の影から飛び出した時には只赤い許りであつた。

すると長藏さんは、いきなり、此の赤い男の側へつか〳〵遣つて行つて、

「お前さん、働く氣はないかね」

と云つた。自分が長藏さんに捕まつた時に聞かされた、第一の質問は矢張り「働く氣はないかね」であつたから、自分はおや又働かせる氣かなと思つて、少からぬ興味の念に驅られながら二人を見物してゐた。其の時此の長藏さんは、誰を見ても手頃な若い衆とさへ鑑定すれば、働く氣はないかねと持ち掛ける男だと云ふ事を判然と覺つた。つまり長藏さんは働かせる事を商賣にするんで、決して自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推擧した譯ではなかつた。大方どこで、どんな人に、幾人逢はうとも、販行で

押した樣な口調で御前さん働く氣はないかねを根氣よく繰返し得る男なんだらう。考へると、よくこんな商賣を厭きもせず、長の歳月遣られたものだ。長藏さんだつて、天性御前さん働く氣はないかねに適した譯でもあるまい。矢つ張り何かの事情已を得ず御前さんを復習してゐるんだらう。かう思へば、まことに罪のない男である。要するに藝がないから外の事は出來ないんだが、外の事が出來ないんだと意識して煩悶する氣色もなく、自分でなくつちや御前さんをやり得る人間は天下廣しと雖も二人と有るまいと云ふ程の平氣な顏で、やつてゐる。

其の當時自分に是丈の長藏觀があつたら大分面白かつたらうが、何しろ魂に逃げだされ損なつてゐる最中だつたから、中々そんな餘裕は出て來なかつた。此の長藏觀は當時の自分を他人と見做して、若い時の回想を紙の上に寫す只今、始めて序の節に浮かんだのである。だから矢ッ張り紙の上丈で消えてなくなるんだらう。然し其の時其の砌りの長藏觀と比較して見ると大分違つてる樣だ。——

自分は長藏さんと赤毛布の立談を聞きながら、自分は長藏さんから毫も人格を認められてゐなかつたと云ふ事を見出した。——尤も人格は此際少し可笑しい。苟くも東京を出奔して坑夫に迄なり下がるものが人格を云々するのは變挺な矛盾である。夫は自分も承知してゐる。現に今筆を執つて人格と書き出したら、何となく馬鹿氣てゐて、思はず噴き出しさうになつた位である。自分の過去を顧みて噴き出しさうになる今の身分を、昔と比べて見ると實に結構の至りであるが、其の時は中々噴き出す所の騷ぎではなかつた。——長藏さんは明かに自分の人格を認めてゐなかつた。

と云ふのは彼れは此の酒、めし、御肴の裏から飛び出した若い男を捕まへて、第二世の自分である如く、

全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云へば、同じ熱心の程度を以て、同じく、坑夫になれと勸誘してゐる。それを自分は何故だか少々怪しからん樣に考へた。其の意味を今から說明して見ると、ざつとこんな譯なんだらう。――

坑夫は長藏さんの云ふ如く頗る結構な家業だとは、常識を質に入れた當時の自分にも尤もと思ひ樣がなかつた。先牛から馬、馬から坑夫といふ位の順だから、坑夫になるのは不名譽だと心得てゐた。自慢にやならないと覺つてゐた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思の外突然居酒屋の入口から赤毛布になつて、あらはれ樣とも別段神經を惱ます程の大事件ぢやない位は分りきつてる。然し此の赤毛布の取扱方が全然自分と同樣であると、同樣であると云ふ點に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般な人間であると云ふ氣になつちまう。取扱方の同樣なのを延き伸ばして行くと、つまり取り扱はれるものが同樣だからと云ふ妙な結論に到着してくる。自分はふら／＼と其處へ到着してゐたと見える。長藏さんが働かないと談判してゐるのは赤毛布で、赤毛布は卽はち自分である。何だか他人が赤毛布を着て立つてる樣には思はれない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、さうして長藏さんから坑夫になれと談じつけられてゐる。そこで、どうも情なくなつちまつた。自分が直接に長藏さんと應對してゐる間は、人格も何も忘れてゐるんだが、自分が赤毛布になつて、君儲かるんだぜと說得されてゐる體裁を、自分が傍へ立つて見た日には方なしである。自分は果してこんなものかと、少しく興を醒まして赤毛布を、つら／＼觀察してゐた。

所が不思議にも此の赤毛布が又自分と同じ樣な返事をする。被つてる赤毛布ばかりぢやない、心底から、

此の若い男は自分と同じ人間だつた。そこで自分はつく〴〵詰まらないなと感じた。其の上もう一つ詰らない事が重なつたのは、長藏さんが、にく〳〵しい程公平で、自分の方が赤毛布よりも坑夫に適してゐると云ふ所を少しも見せない。全く器械的にやつてゐる。先口だから、もう少し此方を贔屓にしたら好からうと思ふ位であつた。——是れで見ると人間の虛榮心はどこ迄も拔けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云ふ切齒詰つた時でさへ自分は是れ程の虛榮心を有つてゐた。泥棒に義理があつたり、乞食に禮式があるのも全く此の格なんだらう。——然し此の虛榮心の方は、自分卽ち赤毛布であると云ふことを自覺して、大に詰らなくなつたよりも、餘程詰らなさ加減が少かつた。

自分が大に詰らなくなつて、ぼんやり立つてゐると、二人の談判は見る間に片附いて仕舞つた。是れは必ずしも長藏さんが事程左樣に上手だからと云ふ譯ではない。赤毛布の方が事程左樣に馬鹿だつたからである。自分は此の男を一槪に馬鹿と云ふが、あながち、自分に比較して輕蔑する氣ぢや決してない。自分の當時は、長藏さんの話をはい〳〵聞く點に於て、すぐ坑夫にならうと承知する點に於て、其の他色々の點に於て、全く此の若い男と同等卽ち馬鹿であつたのである。もし強ひて違ふ所を詮議したら赤毛布を被つてゐるのと絣を着てゐるとの差違位なものだらう。だから馬鹿と云ふのは、自分と同じく氣の毒な人と云ふ意味で、馬鹿のうちに少し位は同情の意を寓した積である。

で、馬鹿が二人長藏さんに尾いて一所に銅山迄引つ張られる事になつた。然るに自分が赤毛布と肩を竝べて歩き出した時、不圖氣が附いて見ると、さつきの詰まらない心持ちがもう消えてゐた。どうも人間の了見程出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心してゐると、既にない。ないから大丈夫と

思つてると、いや有る。有る樣で、ない樣で其の正體はどこ迄行つても捕まらない。其の後去る溫泉場で退屈だから、宿の本を借りて讀んで見たら色々下らない御經の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得なりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟な法螺だらうが、不可得と云ふのは、こんな事を云ふんぢやなからうかと思ふ。尤もある人が自分の話を聞いて、いや夫は念と云ふもので心ぢやないと反對した事がある。自分は孰れでも御隨意だから默つてゐた。こんな議論は全く餘計な事だが、何故云ひ度なるかといふと、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解してゐないものが大分ある。心は固形體だから、去年も今年も蟲さへ食なければ大抵同じもんだらう位に考へてゐるには弱らせられる。さうして、さう云ふ呑氣な料簡で、人を自由に取り扱ふの、教育するの、思ふ樣にして見せるのと騷いでゐるから驚いちまふ。水だつて流れりや返つて來やしない。愚圖々々して居りや蒸發しちまふ。
兎に角此の際は、赤毛布と並んで步き出した時、もう先刻の詰らない考へが蒸發してゐたと云ふ事丈を記憶して置いて貰へばいゝ。――さうして吾ながら驚いたのは、どうも赤毛布と並んで步くのが愉快になつて來た。尤も此の男は茨城か何かの田舍もので、鼻から逃げる妙な發音をする。芋の事を芋と訓じたのは是から先きの逸話に屬するが、步き出したてから、あんまり難有い音聲ではなかつた。其の上顏が人並に出來てゐなかつた。此の男に比べると角張つた顋の、厚唇の長藏さん抔は威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舍を突つ走つたのみで、未だ曾て東京の地を踏んだことがない。さうして、赤い毛布が妙に臭い。それにも拘らず自分は此の山里で、銅山行きの味方を得た樣な心持ちがして嬉しかつた。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴があつて欲い。一人で零落れるのは二人で零落れる

のよりも淋しいもんだ。さう明らさまに申しては失禮に當るが、自分は此男に就て何一つ好いてる所はなかつたけれども、只一所に零落てくれると云ふ點丈が難有いので夫れが爲大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見た位に、近しい仲となつて仕舞つた。是れから推して考へると、川で死ぬ時は、屹度船頭の一人や二人を引き擦り込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行く樣な事があつたなら、人の居ない地獄よりも、必ず鬼の居る地獄を擇ぶだらう。

さう云ふ譯で、忽ち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて來たら、又空腹を覺え出した。よく空腹を覺える樣だが、是れは前段の續きで決して新しい空腹ではない。順序を云ふと、第一に精神が稀薄になつて、尤も刻下感に乏しい時に汽車を下りたんで、次に眞直な往來を眞直に突き當りの山迄見下したもんだから漸く正氣づいたのは前申した通りである。それが機緣になつて、今度は食氣が附いて、それから人格を認められてゐない事を認識して、甚だ詰らなくなつて、詰らなくなつたと思つたら坑夫の同類が出來て、少しく頽勢を挽回したと云ふ次第になる。だに因つて又空腹に立ち戻つたと說明したら善く吞み込めるだらう。偖空腹にはなつたが、最後の一膳飯屋はもう通り越してる。宿は既に盡きかゝつた。行く手は暗い山道である。到底願は叶ひさうもない。それに赤毛布は今食つた許りの腹だから、勇ましくどんどん歩く。どうも、降參しちまつた。そこで思ひ切つて、最後の手段として長藏さんに話しかけて見た。

「長藏さん、是からあの山を越すんですか」

「あの取附の山かい。あれを越しちや大變だ。是れから左へ切れるんさ」

と云つたなり又すた〳〵歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだ餘ッ程あるんですか、僕は少し腹が減つたんだが」
と、とう〳〵空腹の由を自白した。すると長藏さんは
「さうかい、芋でも食ふべい」
と、云ひながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束した樣に、そこん所に芋屋があつたもんだ。之を大袈裟に云へば天佑である。今でも此の時の上出來に行つた有樣を囘顧すると、可笑しい許ぢやない、嬉しい。尤も東京の芋屋の樣に奇麗ぢやなかつた。殆ど名狀しがたい位に眞黑になつた芋屋で、芋屋と云へば芋屋だが、芋專門ぢやない。と云つて芋の外に何を賣つてるんだつたか、今は忘れちまつた。食ふ方に氣を取られ過ぎた所爲かとも思ふ。
やがて長藏さんは兩手に芋を載せて、眞黑な家から、のそりと出て來た。入れ物がないもんだから、兩手を前へ出して
「さあ、食つた」
と云ふ。自分は眼前に芋を突き附けられながら、たゞ
「難有う」
と禮を述べて、芋を眺めてゐた。どの芋にしやうかと考へた譯ではない。そんな選擇を許す樣な芋ではなかつた。赤くつて、黑くつて、瘠せてゐて、濕つぽさうで、夫で所々皮が剝げて、剝げた中から綠青を吹いた樣な味が出てゐる。どれに打つかつたつて大同小異である。そんなら一目慘澹たる此芋の光景に辟易して、手を出さなかつたかと云ふと、さうでもない。自分の胃の狀況から察すると、芋中の穢多とも云は

るべき此の御薩を快よく賞翫する食欲は十分有つた樣に思ふ。然し「さあ、食つた」と突き附けられた時は、何だかおびえた樣な氣分で、おいきたと手を出し損なつた。是れは大方「さあ、食つた」の云ひ方が惡かつたんだらう。

自分が芋を取らないのを見て、長藏さんは、少々もどかしいと云ふ眼附で、再び

「さあ」

と、例の顎で芋を指しながら、前へ出した手頸を、食へと云ふ相圖に一寸動かした。よく考へて見ると、兩手が芋で塞つてるんで、自分がどうかして遣らないと、長藏さんは、いくら芋が食ひ度ても、口へ持つて行く事が出來ないんであつた。じれたのも尤もである。そこで自分は漸く氣がついて、二の腕で、變な曲線を描いて、右の手を芋迄持つて行かうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころ〳〵と往來の中へ落ちた。是はすぐさま赤毛布が拾つた。拾つたと思つたら、

「此芋は好芋だ。おれが貰はう」

と云つた。夫で此の男は芋を芋と發音すると云ふ事が分つた。

自分は此時長藏さんから、最初に三本、あとから一本締て五本、前後二回に受取つたと記憶してゐる。さうしてそれを懷かしげに食ひながら、愈宿外れ迄來ると又一事件起つた。

宿の外れには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れてゐる。自分はもう町が盡きるんだなとは思ひながら、つい芋に心を奪はれて、橋の上へ乘つかゝる迄は川があるとも氣がつかなかつた。所が急に水の音がするんで、おやと思ふと橋へ出てゐる。川がある。水が流れてゐる。――何だか馬鹿氣た話だが、事

實に尤も近い敍述をやらうとすると、まあ、かう書くのが一番適切だらう、かう書いて置く。決して小説家の弄ぶ樣な法螺七分の形容ではない。是が形容でないとすると其の時の自分が如何に芋を旨がつたかゞおのづから分明になる。倩水音に驚いて、欄干から下を見ると、音のするのは尤もで、川の中に大きな石が大分ある。さうして其の形狀が如何にも不作法に出來上つて、恰も水の通り道の邪魔になる樣に寢たり、突つ立つたりしてゐる。それへ水がやけに打つかる。しかも其の水には勾配がついてゐる。山から落ちた勢ひを濟し崩しに持ち越して、追つ懸けられる樣に跳つて來る。だから川と云ふ樣なもの丶、實は幅の廣い瀑を月賦に引き延ばした位なものである。從つて水の少い割には大變烈しい。鼻つ端の強い江戸ッ子の樣に無暗矢鱈に突つかゝつて來る。さうして白い泡を噴たり、青い飴の樣になつたり、曲つたり、くねつたりして下へ流れて行く。どうも非常に八釜しい。時に日は段々暮れてくる。仰向いて見たが、日向は何處にも見えない。只日の落ちた方角がぼうつと明るくなつて、其の明かるい空を脊負つてる山丈が目立つて蒼黑くなつて來た。時は五月だけれども寒いもんだ。此の水音丈でも夏とは思はれない。況して入日を脊中から浴びて、正面は陰になつた山の色と來たら、――ありや全體何と云ふ色だらう。只形容する丈なら紫でも黑でも蒼でも構はないんだが、あの色の氣持を書かうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ來て、どつと壓つ被さるんぢやあるまいかと感じた。それで寒いんだらう。實際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方悉く、あの山の樣な氣味のわるい色になつて、自分も長藏さんも茨城縣も、全く世界一色の内に裹まれて仕舞ふに違ないと云ふ事を、夫とはなく意識して、一二時間後に起る全體の色を、一二時間前に、入日の方の局部の色として認めたから、局部か

ら全體を喚かされて、今にあの山の色が廣がるんだなと、どつかで蟲が知らせた爲に、山の方が動き出して頭の上へ壓つ被さるんぢやあるまいかと云ふ氣を起したんだなと――自分は今机の前で解剖して見た。閑があると兎角餘計な事がしたくなつて困る。其の時は只寒い許りであつた。傍に居る茨城縣の毛布が羨ましくなつて來た位であつた。

　すると橋の向ふから――向たつて突き當りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。――實際自分はかう突然人家が盡きて仕舞はうとは、自分が自分の足で橋板を踏む迄も思ひも寄らなかつたのである。――其淋しい山の方から、小僧が一人やつて來た。年は十三四位で、冷飯草履を穿いて居る。顏は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り拔けてる石ころ路を、たつた一人して此方へひよこ〳〵歩いて來る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下闇の一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隱したりする樣な仕掛に出來てるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、一寸驚いた。自分は四本目の芋を口へ宛がつたなり、顎を動かす事を忘れて、此の小僧を少時の間眺めてゐた。尤も少時と云つたつて、僅か二十秒位なものである。芋は夫れからすぐに食ひ始めたに違ひない。

　小僧の方では、自分等を見て、驚いたか驚かないか、其の邊はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近附いて來た。五六間の此方から見ると頭の丸い、顏の丸い、鼻の丸い、いづれも丸く出來上つた小僧である。品質から云ふと赤毛布よりもずつと上製である。自分等が三人並んで橋向ふの小路を塞いでゐるのを、頓と苦にならない樣子で通り拔け樣とする。頗る平氣な態度であつた。すると長藏さんが、又、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆した氣色もなく

「なんだ」

と答へた。ぴたりと踏み留つた。其の度胸には自分も少々驚いた。さすが此の日暮に山から一人で降りて來るがものはある。自分抔が此の小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を拔けるのが聊か苦になつたものだ。中中えらいと感心してゐると、長藏さんは、

「芋を食はないかね」

と云ひながら、食ひ殘しを、氣前よく、二本、小僧の鼻の前に出した。すると小僧は忽ち二本とも引つたくる樣に受け取つて、難有うとも何とも云はず、すぐ其の一本を食ひ始めた。此の手つ取り早い行動を熟視した自分は、成程山から一人で下りてくる丈あつて自分とは少々譯が違ふなと、又感心しちまつた。夫とも知らぬ小僧は無我無心に芋を食つてゐる。しかも頰張た奴を、唾液も交ぜずに、無暗に呑み下すので、咽喉が、ぐい〳〵と鳴る樣に思はれた。もう少し落ち附いて食ふ方が樂だらうと心配するにも拘らず、當人は、傍で見る程苦しくはないと云はんばかりにぐい〳〵食ふ。芋だから無論堅いもんぢやない。いくら鵜呑にしたつて咽喉に傷の出來つ子はあるまいが、其の代り咽喉が一杯に塞がつて、芋が食道を通り越す迄は呼息の詰る恐れがある。夫を小僧は一向苦にしない。今咽喉がぐいと動いたかと思ふと、又ぐいと動く。後の芋が、前の芋を追つ懸けてぐい〳〵胃の腑へ落ち込んで行く樣だ。二本の芋は、隨分大きな奴だつたが、之れが爲忽ち見る間に無くなつて仕舞つた。さうして、小僧は遂に何等の異狀もなかつた。自分

等三人は何にも云はずに、三方から、此の小僧の芋を食ふ所を見て居たが、三人共、食つて仕舞ふ迄、一句も言葉を交はさなかつた。自分は腹の中で少しは可笑しいと思つた。然し何となく憐れだつた。是れは單に同情の念ばかりではない。自分が空腹になつて、長藏さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓じい記憶は氣の毒な程近くにあるのに、此の小僧の食ひ方は、自分より二三層倍餓じさうに見えたからである。そこへ持つて來て、長藏さんが、

「旨まかつたか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先から難有うと禮を述べた位だから、食つたあとの小僧は無論何とか云ふだらうと思つて居たら、小僧は生憎何とも云はない。默つて立つてる。さうして暮れかゝる山の方を見た。後から分つたが此小僧は全く野生で、丸で禮を云ふ事を知らないんだつた。それが分つてからは左程にも思はなかつたが、此の時は何だ顏に似合はない無愛嬌な奴だなと思つた。然し其の丸い顏を半分傾けて、高い山の黑ずんで行く天邊を妙に眺めた時は、又可愛想になつた。夫から又少し物騷になつた。何故物騷になつたんだかは一寸疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿とが、何か深い因緣で互に持ち合つてるのかも知れない。詩だの文章だのと云ふものは、あんまり讀んだ事がないが、恐らくこんな因緣に勿體をつけて書くもんぢやないかしら。さうすると妙な所で詩を拾つたり、文章に打つかつたりするもんだ。自分は此永年方々を流浪してあるいて、折々こんな因緣に出つ食はして我ながら變に感じた事が時々ある。――然しそれも落ちついて考へると、大概解けるに違ない。此の小僧なんか矢つ張り子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで來たが化け損なつた所位だらう。それ以上は餘計な事だから考へ

ずに置く。何しろ小僧は妙な顏をして、黒い山の天邊を眺めてゐた。
すると長藏さんが又聞き出した。
「御前、何處へ行くかね」
小僧は忽ち黒い山から眼を離して、
「何處へも行きあしねえ」
と答へた。顏に似合はず頗る無愛想である。長藏さんは平氣なもんで、
「ぢや何處へ歸るかね」
と、聞き直した。小僧も平氣なもんで、
「何處へも歸りやしねえ」
と云つてる。自分は此の問答を聞きながら、益々物騷な感じがした。此の小僧は宿無に違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、さうして、こんなに度胸の据つた宿無を、今迄曾て想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、只の宿無に附屬する憐れとか氣の毒とかの念慮よりも、物騷の方が自然勢力を得た次第である。尤も長藏さんにはそんな感じは少しも起らなかつたらしい。長藏さんは、此小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさへすれば、それで澤山だつたんだらう。どこへも行かない、又どこへも歸らない小僧に向つて、
「ぢや、おいらと一所に御出。御金を儲けさしてやるから」
と云ふと、小僧は考へもせず、すぐ、

「うん」
と承知した。赤毛布と云ひ、小僧と云ひ、實に面白い樣に早く話が纒まつて仕舞ふには驚いた。人間も此位簡單に出來て居たら、御互に世話はなからう。然しさう云ふ自分が此の赤毛布にも此の小僧にも遜らない尤も世話のかゝらない一人であつたんだから妙なもんだ。自分は此の小僧の安受合を見て、少からず驚くと共に、天下には自分の樣に右へでも左へでも誘はれ次第、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものが大分あるんだと云ふ事に氣が附いた。東京に居るときは、目眩い程人が動いてるても、動きながら、みんな根が生えてるんで、たま／＼根が拔けて動き出したのは、天下廣しと雖も、自分丈であらう位で、千住から尻を端折つて歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、此の宿で、はからずも赤毛布を手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちに又此の小僧を手に入れた。さうして二人とも自分よりは遙に根が拔けてゐる。かう續々同志が出來てくると、行く先は山だらうが、河だらうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日の午後九時迄は申し分のない坊ちやんとして生活してゐた。煩悶も坊ちやんとしての煩悶であつたのは勿論だが、煩悶の極試みた此の驅落も、矢つ張り坊ちやんとしての驅落であつた。去ればこそ、此の驅落に對して、不相當に勿體ぶつた意味をつけて、難有がらない迄も、一生の大事件の樣に考へてゐた。生死の分れ路の樣に考へてゐた。と云ふものは坊ちやんの眼で見渡した世の中には、驅落をしたものは一人もない。――たまにあれば新聞にある許りである。所が新聞では驅落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出る丈で、云はゞあぶり出しの驅落だから、食べたつて身にはならない。恰も別世界から、電話がかゝつた樣なもので、はあ、はあ、と聞いて

る分の事である。だから本當の意味で切實な驅落をするのは自分丈だと云ふ有難味がつけ加はつてくる。尤も自分はたゞ煩悶して、たゞ驅落をした迄で、詩とか美文とか云ふものを、あんまり讀んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立てゝ、それから自分で此の小説の中を縱横に飛び廻つて、大いに苦しがつたり又大いに悲しがつたりして、さうして同時に自分の慘狀を局外から自分と觀察して、どうも詩的だ抔と感心する程なませた考へは少しもなかつた。自分が自分の驅落に不相當な有難味を附けたと云ふのは、自分の不經驗からして、左程大袈裟に考へないでも濟む事を、さも仰山に買ひ被つて、獨りでどぎまぎしてゐた事實を指すのである。然るに此のどぎまぎが赤毛布に逢ひ、小僧に逢つて、兩人の平然たる態度を見ると共に、何時の間にやら薄らいだのは、矢張經驗の賜である。白狀すると當時の赤毛布でも當時の小僧でも、當時の自分より餘つ程偉かつた樣だ。

かう手もなく赤毛布がかゝる。小僧がかゝる。さう云ふ自分も、たわいもなく攻め落された事實を綜合して考へて見ると、成程長藏さんの商賣も、滿更待ち草臥の骨折損になる譯でもなかつた。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、ぢやなりませうと二つ返事で承知する馬鹿は、天下廣しと雖も、尻端折で夜逃をした自分位と思つてゐた。從つて長藏さんの樣な氣樂な商賣は日本にたつた一人あれば澤山で、しかも其の一人が、まぐれ當りに自分に廻り合せると云ふ運勢を以て生れて來なくつちや、とても商賣にならない筈だ。だから大川端で眼の下三尺の鯉を釣るよりも餘つ程の根氣仕事だと、始めから腰を据ゑてかゝるのが當然なんだが、長藏さんは頓とそんな自覺は無川だと云はぬ許りの顏をして、是れが世間尤も普通の商賣であると社會から公認された樣な態度で、わるびれずに往來の男を捉まへる。すると其の捉まへられ

た男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云ふ。何となく是れが世間尤も普通の商賣ぢやあるまいかと疑念を起す樣に成功する。これ程成功する商賣なら、日本に一人ぢや迚も間に合はない、幾人あつても差支ないと云ふ氣になる。――當人は無論さう思つてるんだらう。自分もさう思つた。

此の呑氣な長藏さんと、更に呑氣な小僧に赤毛布と、それから見樣見眞似で、大いに呑氣になりかけた自分と、都合四人で橋向ふの小路を左へ切れた。是から川に沿つて登りになるんだから、氣を附けるが好いと云ふ注意を受けた。自分は今芋を食つた許だから、もう空腹ぢやない。足は昨夕から歩き續けで草臥れてはゐるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、成るべく氣を附けて、長藏さんと赤毛布の後を跟けて行つた。路があまり廣くないので四人は一行に竝べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいから是れも一足後れて、自分と摺々位になつて食つ附いてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのとの兩方で、口を利くのが厭になつた。長藏さんも橋を渡つてから以後頓と御前さんを使はなくなつた。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、餘り多辯ではなかつたが、どう云ふものかこゝに至つて益無口となつちまつた。小僧の無口は更に甚だしかつた。穿いてゐる冷飯草履がぴちや／＼鳴る許りである。

かう、みんな默つて仕舞うと、山路は靜かなものである。ことに夜だから猶淋しい。夜と云つたつて、まだ日が落ちた許りだから、歩いてる道丈はどうか、かうか分る。左手を落ちて行く水が、氣の所爲か、少しづゝ光つて見える。尤もきら／＼光るんぢやない。なんだか、どす黑く動く所が光る樣に見える丈だ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然と白くなつてゐる。さうして其の聲がさあ／＼と絕え間なくする。中

中八釜しい。それで中々淋しい。

其の中細い道が少し宛、上りになる樣な氣持がしだした。上り丈なら此の位な事はさう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹する。岩の根が川の底から續いて來て、急に地面の上へ出たり、引つ込んだりするんだらう。此の凸凹に下駄を突つ掛ける。烈しいときは内臟が飛び上がる樣になる。大分難義になつて來た。長藏さんと赤毛布は山路に馴れてゐると見えて、よくも見えない木下闇を、すた〳〵調子よくあるいて行く。是れは仕方がないが、小僧が――此の小僧は實際物騷である。冷飯草履をぴしや〳〵云はして、暗い凸凹を平氣に飛び越して行く。しかも全く無言である。晝間なら左程にも思はないんだが、此の際だから、薄暗い中でぴしやり〳〵と草履の尻の鳴るのが氣になる。何だか蝙蝠と一所に歩いてる樣だ。

其のうち路が段々登りになる。川はいつしか遠くなる。呼息が切れる。凸凹は益烈しくなる。耳がぐわあんと鳴つて來た。是れが驅落でなくつて、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺の仕損ひから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛くつても、誰に難題を持ち掛ける譯にも行かない。相手は誰だと云へば、自分より外に誰も居やしない。よし居たつて、こだわる丈の勇氣はない。其の上先方は相手になつてくれない程平氣である。すた〳〵歩いて行く。口さへ利かない。丸で取附端がない。已を得ず呼吸を切らして、耳をぐわあんと鳴らして、默つて後から神妙に尾いて行く。神妙と云ふ字は子供の時から覺えてゐたんだが、神妙の意味を悟つたのは此の時が始めてゞある。尤も是れが悟り始めの悟り仕舞だと笑ひ話にもなるが、一度悟り出したら、其の悟りが大分長い事續いて、つひに鑛山の中で絕高頂に達して仕舞つた。神妙の極に達すると、出るべき淚さへ遠慮して出ない樣になる。淚

がこぼれる程だと譬に云ふが、涙が出る位なら安心なものだ。涙が出るうちは笑ふ事も出來るに極つてる。不思議な事に是程神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙氣を出さないのみか、人からは横着者の樣に思はれてゐる。其時御世話になつた長藏さんから見たら、定めし增長した野郎だと思ふ事だらう。が又今の朋友から評すると、昔は氣の毒だつたと云つて吳れるかも知れない。增長したにしても氣の毒だつたにしても構はない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の狀態である。人間はかう出來てるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶる〳〵悸へて居ろつたつて出來ない相談である。病氣で熱の出た時、牛肉を食はなかつたから、もう生涯ロースの鍋へ箸を着けちやならんぞと云ふ命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪しからん樣に持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が當り前で、忘れない方が噓である。かう云ふと詭辯の樣に聞えるが、詭辯でもなんでもない。正直正銘の所を云ふんである。一體人間は、自分を四角張つた不變體の樣に思ひ込み過ぎて困る樣に思ふ。周圍の狀況なんて事を眼中に置かないで、平押に他人を壓し附けたがる事が大分ある。他人なら理窟も立つが、自分で自分をきゆ〳〵云ふ目に逢はせて嬉しがつてるのは聞えない樣だ。さう一本調子にしやうとすると、立體世界を逃げて、平面國へでも行かなければならない始末が出來てくる。無暗に他人の不信とか不義とか變心とかを咎めて、萬事萬端向ふがわるい樣に噪ぎ立てるのは、みんな平面國に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。御嬢さん、坊つちやん、學者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り惡くつて、困るもんだ。自分もあの時驅落をしずに、可愛らしい坊つちやんとして大人しく成人したなら、——自分の心の始終動いてゐるのも知らずに、

動かないもんだ、變らないもんだ、變つちや大變だ、罪惡だ抔とよく〳〵思つて、年を取つたら――只學問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に滿足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、又内省が出來る程の心機轉換の活作用に見參しなかつたならば――あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流轉と、あらゆる漂泊と、困憊と、懊惱と、得喪と、利害とより得た此の經驗と、最後に此の經驗を尤も公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら――難有い事に自分は此の至大なる賚を有つてる、――凡て是等がなかつたならば、自分はこんな思ひ切つた事を云やしない。いくら思ひ切つた事を云つたつて自慢にやならない。たゞ此の通りだから此の通りだと云ふ迄である。其代り昔し神妙なものが、今横着になる位だから、今の横着がいつ何時又神妙にならんとは限らない。――拔けさうな足を棒の樣に立てゝ聞くと、ぐわんと鳴つてる耳の中へ、遠くからさあ〳〵水音が這入つてくる。自分は益神妙になつた。

此の狀態で大分來た。何里だか見當のつかない程來た。夜道だから平生よりは、只でさへ長く思はれる上へ持つてきて、凸凹の登りを膨つ脛が腫れて、膝頭の骨と骨が擦れ合つて、股が地面へ落ちさうに歩くんだから、長いの、長くないのつて――夫れでも、生きてる證據には、どうか、かうか、長藏さんの尻を五六間と離れずに、遣つて來た。是はたゞ神妙に自己を沒却した諦の體たらくから生じた結果ではない。五六間以上後れると、長藏さんが、振り返つて五六歩宛は待合してくれるから、仕方なしに追ひ附くと、追ひ附かない先に向ふは又歩き出すんで、已を得ずだら〳〵、ちび〳〵に自己を奮興させた成行に過ぎない。夫にしても長藏さんは、よく後が見えたもんだ。ことに夜中である。右も左も黑い木が空を見事に突

つ切つて、頭の上は細く上迄開てるなと、仰向いた時、始めて勘づく位な暗い路である。星明りと云ふけれど、あまり便にやならない。提燈なんか無論持ち合せ樣筈がない。自分の方から云ふと、先へ行く赤毛布が目標である。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思はれる。明るいうちから、あの毛布、あの毛布と御題目の樣に見詰めて覘を附けて來たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らない所を、自分丈にはちやんと赤毛布に見えるんだらう。信心の功德なんてえのは大方こんな所から出るに違ない。自分はかう云ふ譯で、どうにか目標丈は附けて置いた樣なもの丶、長藏さんに至つては、どの位あとから自分が跟いてくるか分り樣がない。所をちやんと五六間以上になると留まつて呉れる。留まつてくれるんだか、留まる方が向ふの勝手なんだか、判然しないが、兎に角留まることは慥だつた。到底素人にや出來ない藝である。自分は苦しいうちにも、是れが長藏さんの商賣に必要な藝で、長藏さんは此の藝を長い間練習して、此れ迄に仕上げたんだなと、少からず感心した。赤毛布は長藏さんと竝んでるるんだから、長藏さんさへ留まれば屹度とまる。長藏さんが步き出せば必ず步き出す。丸で人形の樣に活動する男であつた。や丶ともすると後れ勝ちの自分よりは此の赤毛布の方が遙に取り扱ひ易かつたに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後になるんだらうと思つて、草臥れたら勵ましてやらう位の了簡があつたんだが、かの冷飯草履をぴしやり〱と鳴らしながら凸凹路を飛び跳ねて進行する有樣を目擊してから、こりや敵はないと覺悟をしたのは、餘程前の事である。それでも暫らくの間はぴしやり〱が自分の袖と擦れ〱位になつて、登つて來たが、今ぢやもう自分の近所には影さへなくなつた。竝んで步くうちは、あまり小僧の癖に活潑にあるくんで——活潑丈ならい丶

が、活潑の上に非常に沈默なんで――、隨分物騷な心持ちだつた。もし笑ふなら、極めて小さくつて、非常に活潑で、さうして口を利かない動物を想像して見ると分る。滅多にありやしない。こんな動物と一所に夜山越をしたとすると、誰だつて物騷な氣持になる。自分は此の時此の小僧の事を今考へても、妙な感じが出て來る。さつき蝙蝠の樣だと云つたが、全く蝙蝠だ。長藏さんと赤毛布がゐたから、好い樣なものの、蝙蝠とたつた二人限だつたら――正直な所降參する。

　すると長藏さんが、暗闇の中で急に、

「おゝい」

と聲を揚げた。淋しい夜道で、急に人聲を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見ると一寸異な感じのするものだ。それも普通の話し聲なら、まだ好いが、おゝいと人を呼ぶ奴は氣味がよくない。山路で、黑闇で、人つ子一人通らなくつて、御負に蝙蝠なんぞと道伴になつて、いとゞ物騷な處に乘じて、長藏さんが事ありげに聲を揚げたんである。事のあるべき筈でない時で、しかも事がありかねまじき場所でおゝいと來たんだから、突然と豫期が合體して、自分の頭に妙な響を與へた。此の聲が自分を呼んだんなら、何か起つたなとびくんとする丈で濟むんだが、五六間後から行く自分の注意を惹く爲とは受取れない程大きかつた。且聲の傳はつて行く方角が違ふ。此方を向いた聲ぢやない。おゝいと右左りに當つたが、立ち木に遮られて、細い道を向ふの方へ遠く逃げのびて、遙の先でおゝいと云ふ反響があつた。反響は慥にあつたが、返事はない樣だ。すると長藏さんは、前より一層大きな聲を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考へると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとほけてるるが其の時は中々とほけちやるなかつた。自分は此の聲を聞くと同時に蝙蝠が隱れたんだなと氣がついた。先へ行つたと思ふのが當り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべき筈だのに、隱れたんだとすぐ胸先へ浮んで來たのは、餘つ程蝙蝠に祟られてるたに違ない。此の祟は翌朝になつて太陽が出たらすつかり消えて仕舞つて、自分で自分を何て馬鹿だらうと思つた位だが、實際小僧やあの呼び聲を聞いた時は、一寸烈敷來た。

所が又反響が例の如く向ふへ延びて、突き當りがないもんだから、人魂の尻尾の樣に、幽かに消えて、其の反動が、有らん限りの木も山も谷もしんと靜まつた時、――何とも返事がない。此の反響が心細く繼續ながら消えて行く間、消えてから、凡ての世界がしんと靜まり返るまで、長藏さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇に鼻を突き合せて默つて立つてるた。あんまり好い心持ぢやなかつた。やがて、長藏さんが、

「少し急いだら、追つ附くべえ。御前さん好いかね」

と云つた。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元來此の場に臨んで急ぐなんて生意氣な事が出來る筈がないんだが、そこが妙なもので、急ぐ氣も、急ぐ力もない癖に受合つちまつた。定めし變な顏をして受合つたんだらうが、受合つたら急げても、急げないでも無茶苦茶に急いで仕舞つた。此の間はどこをどんな具合に通つたか、まあ斷然知らないと云つた方が穩當だらう。やがて長藏さんがぴたりと留つたんで、不圖氣がついた。すると一つ家の前へ出て居る。ランプが點いてるる。ランプの灯が往來へ映つてるる。はつと嬉しかつた。赤毛布がありく見える。さうして小僧もるる。小僧の影が往來を横に切つて向ふの谷へ折れ込んでるる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があらうとは丸で思ひがけなかつたし、其の上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこ迄急ぐんだかあても希望もなく遣つて來て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしい樣に眼に這入つて來たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだとつく〴〵感心した。ランプがこんなに難有かつた事は今日迄まだ嘗てない。後から聞いたら小僧は此のランプの灯迄拔け掛をして、そこで自分達を待つてたんださうだ。おゝいと云ふ聲も小僧やあと云ふ聲も聞えたんだが返事をしなかつたと云ふ話しだ。偉い奴だ。

同勢は是れで漸く揃つたが、此の先どうなる事だらうと思ひながら、相變らず神妙にしてゐると、長藏さんは自分達を路傍に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入つて行つた。仕方がないから家と云ふが、實の所は、家ぢや勿體ない。牛さへゐれば牛小屋で馬さへ嘶けば馬小屋だ。何でも草鞋を賣る所らしい。壁と草鞋とランプの外に何にもないから、自分はさう鑑定した。間口は一間ばかりで、入口の雨戸が半分程閉てゝある。殘る半分は夜つぴて明けて置くんぢやないかしら。ことによると、敷居の溝に食ひ込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁葺で、其の藁が古くなつて、雨に腐やけた所爲か、崩れかゝつて漠然としてゐる。夜と屋根の繼目が分らない程、ぶくついて見える。其の中へ長藏さんは這入つて行つた。なんだか穴の中へでも潛り込んで行つた樣な心持だつた。さうして話してゐる。三人は表に待つてゐる。自分の顏は見えないが、赤毛布と小僧の顏は、小屋の中から斜に差してくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫なものである。此男はたとひ地震がゆつて、梁が落ちて來ても、親の死目に逢ふか、逢はないかと云ふ大事な場合でも、いつでも、こんな顏をしてゐるに違ない。小僧は空を見て

ゐる。まだ物騒だ。
所へ長藏さんがあらはれた。然し往來へは出て來ない。敷居の上へ足を乘せて、此方を向いて立つた股倉から、ランプの灯丈が細長く出て來る。ランプの位置がいつの間にか低くなつたと見える。長藏さんの顏は無論よく分らない。
「御前さん、是れから山越をするのは大變だから、今夜は此處へ泊つて行かう。みんな這入るがいゝ」
自分は此の言葉を聞くと等しく、今迄の神妙が急に破裂して、身體がぐたりとなつた。此の牛小屋で一夜を明す事が、夫程の慰藉を自分に與へ樣とは、牛小屋を見た今が今迄、頓と氣がつかなかつた。矢張り神妙の結果泊る所が見附つても、泊る氣が起らなかつたんだらう。かうなると人間程御し易いものはない。無理でも何でもはい／＼畏まつて聞いて、さうして少しも不平を起さないのみか大に嬉しがる。當時を思ひ出す度に、自分は尤も馴良な又尤も勵精な人間であつたなと云ふ自信が伴つてくる。兵隊はあゝでなくつちや不可ない杯と考へる事さへある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと云ふ事も悟つた。――かう書いて見たが、讀み直すと何だか六づかしくつて解らない。實を云ふと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなに六づかしくなつちまつた。例へば酒を飲む權利はないと自信して、酒の德を、あれどもなきが如くに見做す事さへ出來れば、德利が前に並んでも、酒は飲むものだとさへ氣がつかずに居る位な所である。御互が泥棒にならずに濟むのも、つまりを云へば幼少の時から、人工的に此種の境界に馴らされてるからの事だらう。が一方から云ふと、こんな境界は人性の一部分を痲痺さした結果として出來上るもんだから、圖に乘つてきゆ／＼押して行く

と、人間がみんな馬鹿になつちまふ。まあ泥棒さへしなければ好いとして、その他の精神器械は殘らず相應に働く事が出來る樣にしてやるのが何よりの功德だと愚考する。自分が當時の自分の儘で、のべつに今日迄生きてゐたならば、如何に順良だつて、如何に勵精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具だらう。人間であるからは、たまには怒るがいゝ。反抗するがいゝ。怒る樣に、反抗する樣に出來てるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身體の毒である。それを迷惑だと云ふなら、怒らせない樣に、反抗させない樣に、御膳立をするが至當ぢやないか。

自分は當時種々の狀況で、萬事長藏さんの云ふ通りはい〳〵云つてゐたし、又そのはい〳〵を自然と思ひもするが、其の代り、今の樣な身分に居るからは、たとひ百の長藏さんが、七日七晩引つ張りつゞけに引つ張つたつて一寸も動きやしない。今の自分には此の方が自然だからである。さうしてかう變るのが人間の人間たる所だと思つてる。分り易い樣に長藏さんを引合に出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間每に變つて居る。變るのが當然で、變るうちには矛盾が出て來る筈だから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云ふ意味になる。矛盾だらけの仕舞は、性格があつてもなくつても同じ事に歸着する。嘘だと思ふなら、試驗して見るがいゝ。他人を試驗するなんて罪な事をしないで、先づ吾身で吾身を試驗して見るがいゝ。坑夫に迄零落ないでも分る事だ。神さまなんかに聞いて見たつて、以上分ッ子ない。此の理窟がわかる神さまは自分の腹のなかにゐるばかりだ。抔と、學問もない癖に、學者めいた事を云つては濟まない。こんな景氣のいゝタンカを切る所存は毛頭なかつたんだが、實を云ふと斯う云ふ仔細である。

自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る〱と苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦い顔をして謝罪つてゐた。自分ながら、どうも困つたもんだ、是ぢや普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくつちや信用を落して路頭に迷ふ様な仕儀になると、ひそかに心配してゐたが、色々の境遇に身を置いて、前に述べた通りの試驗をして見ると、改良も何も入つたものぢやない。是れが自分の本色なんで、人間らしい所は外にありやしない。それから人も試驗して見た。所が矢つ張り自分と同じ樣に出來てゐる。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれて然るべき人間なんだから可笑しくなる。要するに御腹が減つて飯が食ひ度なつて、御腹が張ると眠くなつて、窮して濫して、達して道を行つて、惚れて一所になつて、愛想が盡きて夫婦別れをする迄の事だから、悉く臨機應變の沙汰である。人間の特色はこれより外にありやしない。と、かう感服してゐるんだから、一寸言つて見た迄である。然し世の中には學者だの坊主だの教育家だのと云ふ六づかしい仲間が大分居て、それ〲專門に研究してゐる事だから、自分丈、譯の分つた樣に辯じ立てゝは善くない。

そこで元氣のいゝ今の氣焔をやめて、再びもとの神妙な態度に復して、山の中の話をする。長藏さんが敷居の上に立つて、往來を向きながら、此處へ泊つて行かうと云ひ出した時、こんな破屋でも泊る事が出來るんだつたと、始めて意識したよりも、凡ての家と云ふものが元來泊る爲に建てゝあるんだなと、漸く氣が附いた位、泊る事は豫期してゐなかつた。それでゐて身體は蒟蒻の樣に疲れ切つてゐる。平生なら泊りたい、泊りたいで凡ての內臟が張切れさうになる筈だのに、沒自我の坑夫行、卽ち自滅の前座としての墮落と諦めを附けた上の疲勞だから、いくら身體に泊る必要があつても、身體の方から魂へ宛てゝ宿泊の件

を請求してゐなかつた。所へ泊ると命令が天から逆に魂に下つたんで、魂は一寸まごついたかたちで、取り敢ず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがつたから、魂も成程難有いと、始めて長藏さんの好意を感謝した。と云ふ譯になる。何となく落語じみて巫山戲てゐるが、實際此の時の心の狀態は、かう譬を借りて來ないと說明が出來ない。

自分は長藏さんの言葉を聞くや否や、急に神經が弛んで、立ち切れない足を引き摺つて、第一番に戶口の方に近寄つた。赤毛布はのそ〳〵這入つてくる。小僧は飛んで來た。飛んだんぢやあるまいが、草履の尻が勢よく踵へあたるんで、ぴしや〳〵云ふ音が飛ぶ樣に思はれた。

這入つて見るとぷんと臭つた。何の臭だか更に分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧も此の臭に感じたなと氣が附いた。長藏さんと赤毛布は丸で無頓着であつた。土間から上へあがる段になつて、雜巾でもと思つたが、小僧は委細構はず、草履を脫いで上がつちまつた。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足である。ひどい奴だと眺めてゐると、長藏さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。夫で氣味がわるいが、ほこりも拂はず上がつた。疊の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧は其の上へころりと轉がつてゐる。自分は尻丈卸して、障子——障子は二枚あつた——其の障子の影へ胡坐をかいた。此の障子は入口に立てゝあるから、振り向くと、長藏さんと赤毛布が草鞋を脫いでゐる。二人共腰から手拭を出して、ばた〳〵足をはたいてゐる。さうして、すぐ上がつて來た。足を洗ふのが面倒だと見える。所へ主人が次の間から茶と煙草盆を持つて來た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云ふと頗る尋常に聞えるが、其の實名ばかりで、一々說明すると、大變な誤解をしてゐたんだねと呆れ返るもの許りである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持つて來たには違ひない。さうして長藏さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、其の樣子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事は丸で聞きもしない。まるで眼中にない譯でもあるまいが、さつき長藏さんが一人で談判に這入つた時に、殘らず聞いて仕舞つたんだらう。それとも長藏さんはたび／＼こんな呑氣屋を銅山へ連れて行くんで、自然其の往き還りには此の主人の厄介になりつけてゐるから、別段氣にも留めないのかも知れない。

自分は、長藏さんと主人との話を聞きながら、居眠を始めた。いつから始めたか知らない。馬を賣損つて、どうとかしたと云ふ所から、段々判然しなくなつて、自然と長藏さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、破屋迄も消えた時、こくりと眠が覺めた。氣がつくと頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡げると甚だ重い。主人は矢つ張馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてゐるうちに、又氣が遠くなつた。氣が遠くなつたのを、遠いまゝにして打遣つて置くと、忽然ぱつと眼があいた。薄暗い部屋の中に、影の樣な長藏さんと亭主が膝を突き合せてゐる。丁度、借がどうとかしてハ、ハ、と亭主が笑つた所だつた。此亭主は額が長くつて、斜に頭の天邊迄引込んでるから、横から見ると切通しの坂位な勾配がある。さうして上になればなる程毛が生えてゐる。其の毛は五分位なのと一寸位なのとが交つて、不規則にしかも疎にもぢや／＼してゐる。自分が居眠りからはつと驚いて、急に眼を開ける

と、第一に此頭が眸の底に映つた。ランプが煤だらけで暗いものだから、此頭も煤だらけになつて映つて來た。其の癖距離は近い。だから映つた影は明瞭である。自分は此の明瞭で且つ朦朧なる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄嗟に不圖見たんである。此の時はあまり好い心持ではなかつた。それが爲、居眠りもしばらく見合せる樣な氣になつて、部屋中を見廻すと、向ふの隅に小僧が倒れてゐる。こちらの横に茨城縣が長く伸びてゐる。毛布の下から大きな足が見える。突當りが壁で、壁の隅に穴が開いて、穴の奥が眞黑である。上は一面の屋根裏で、寒い程黑くなつてる所へ、油煙とともにランプの灯があたるから、よく見て居ると、藁葺の裏側が震へる樣に思はれた。

それから又眠くなつた。又頭が落ちる。重いから上げると又落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながら段々うつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛に正氣へ立ち戻つたが、三囘四囘と重なるにつけて、眼丈開けても氣は判然しない。ぼんやりと世界に歸つて、又ぞろすぐと不覺に陷つちまふ。夫から例の如く首が落ちる。微に生きてる樣な氣になる。かと思ふと又一切空に這入る。仕舞には、とう〳〵、いくら首がのめつて來ても、動じなくなつた。或はのめつたなり、頭の重みで横に打つ倒れちまつたのかも知れない。兎に角安々と夜明迄寢て、眼が覺めた時は、もう居眠りはしてゐなかつた。通例の如く身體全體を疊の上に附けて長くなつてゐた。さうして涎を垂れてゐる。――自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金の話を聞いて、又居眠りの續を復習してるうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰を聞かなかつたんだから、眼が覺めて、夜が明けて、世の中が土臺から陰と陽に引ツ繰り返つてるのを見るや否や、眼をあいて涎を垂れて、横になつた儘、ぢ

つとしてゐた。自覺があつて死んでたらこんなだらう。生きてるけれども動く氣にならなかつた。昨夜の事は一から十迄よく覺えてゐる。然し昨夜の一から十迄が自然と延びて今日迄持ち越したとは受け取れない。自分の經驗は凡てが新しくつて、かつ痛切であるが、其の新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云ふよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出來て、截然と區別がついた樣だ。太陽が出ると引き込む丈の差で、かう心に連續がなくなつては不思議な位自分で自分が當にならなくなる。要するに人世は夢の樣なもんだ。と一寸考へたもんだから、涎も拭かずに沈んでゐると、長藏さんが、うゝんと伸をして、寐たまゝ握り拳を耳の上迄持ち上げた。握り拳がぬつと眞直に疊の上を擦つて、腕のあり丈出た所で、勢がゆるんで、ぐにやりとした。又寐るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹んだ頰つぺたをぼり〳〵搔き出した。起きてるのかも知れない。其のうち、むにや〳〵何か云ふんで、矢つ張り眼が覺めてゐないなと氣が附いた時、小僧がむくりと飛び起きた。是は眞正の意味に於て飛起きたんだから、どしんと音がして、根太が拔けさうに響いた。すると、さすが長藏さんだけあつて、むにや〳〵を已めて、すぐ疊に附いた方の肩を、肘の高さ迄上げた。眼をぱちつかせてゐる。

かうなると、自分も何時迄沈んで居たつて際限がないから、起き上つた。長藏さんも全く起きた。小僧は立ち上がつた。寐てゐるものは赤毛布ばかりである。是は又呑氣なもんで、依然として毛布から大きな足を出してぐう〳〵鼾聲をかいて寐てゐる。それを長藏さんが起す。――

「御前さん。おい御前さん。もう起きないと御午迄に銅山へ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寐てゐる。仕方がないから長藏さんは毛布の肩へ手を掛て、

「おい、おい」
と揺り始めたんで、已を得ず、毛布の方でも「おい」と同じ樣な返事をして、中途半端に立ち上つた。是でみんな起きた樣なものゝ、自分は顏も洗はず、飯も食はず、どうして好いか迷つてゐると、長藏さんが、
「ぢや、そろ〳〵出掛やう」
と云つて、眞先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつゞいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。かうなると自分も何とか片をつけなくつちやならないから、一番あとから下駄を突掛けて、長藏さんと赤毛布が草鞋の紐を結ぶのを、不景氣な懷手をして待つてゐた。

土間へ下りた以上は、顏を洗はないのかの、朝飯を食はないのかのと、當然の事を聞くのが、さも贅澤の沙汰の樣に思はれて、頓と質問して見る氣にならない。習慣の結果、必要とまで見做されてゐるものが、急に餘計な事になつちまふのは可笑しい樣だが、其後此の顚倒事件を布衍して考へて見たら、こんな、例は澤山ある。つまり世の中では大勢のやつてる事が當然になつて、一人丈でやる事が餘計の樣に思はれるんだから、當然にならうと思つたら味方を大勢拵へて、左も當然であるかの容子で不當な事を遣るに限る。遣つては見ないが屹度成功するだらう。相手が長藏さんと赤毛布でさへ自分には是れ程の變化を來たしたんでも分る。

すると長藏さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顏を上げた。さうして自分を見た。さうして、こんな事を云ふ。
「御前さん、飯は食はなくつても好いだらうね」

飯を食はなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まり樣がないから、自分はたゞ、

「好いです」

と答へて置いた。すると長藏さんは、

「食ひたいかね」

と云つて、にやく\笑つた。是れは自分の顏に飯が食ひたい樣な根性が幾分かあらはれた爲か、又は十九年來の豫期に反して起きたなり飯拔きの出立に、自然不平の色が出てゐた爲だらう。それでなければ草鞋の紐を結んで仕舞つてから、こんな事を聞く譯がない。現に長藏さんは、赤毛布にも小僧にも此の質問を呈出しなかつたんでも分る。今考へると、一寸兩人にも同じ事を聞いて見れば善かつた樣な氣もする。朝飯を食はないで五里十里と歩き出すものは宿無しか、又は準宿無しでなくつちやならない。目が醒めて、夜が明けてるのに、汁の煙も、漬物の香も、一向連想に乘つて來ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、其の日其の日の魂の供養をする呑氣屋で、世の中にあしたと云ふものがないのを當り前と考へる程に、不幸な又幸な人間である。自分は十九年來始めて、斯う云ふ人間と一つ所に泊つて、是れから又一所に歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の顏色を伺つて見ると少しも朝飯を豫期してる樣子がないんで、雙方共朝飯を食ひ慣けてゐない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺り落ちてゐたと云ふ事が分つた。然し分つたと云ふ許りで別に悲しくもなかつた。涙は無論出なかつた。たゞ長藏さんが、此の朝飯の經驗に乏しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食ひたいかね」と尋ねて呉れなかつたのを、今では殘念に思つてる。食つた事が少いから、今迄

の習慣性で「食はないでも好い」と答へるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云ふ意外の望に奬勵されて「食ひたい」と答へるか。——つまらん事だが何方か聞いて見たい。

長藏さんは土間へ立つて、一寸後ろを振り返つたが、

「熊さん、ぢや行つてくる。色々御世話樣」

と輕く力足を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奧で寐てゐる。覗いて見ると、昨夕うつゝに氣味をわるくした、もぢやくの頭が布團の下から出てゐる。此の亭主は敷蒲團を上へ掛けて寐る流儀と見える。長藏さんが、此もぢやくの頭に話しかけると、頭は、むくりと疊を離れた。さうして熊さんの顏が出た。此顏は昨夜見た程妙でもなかつた。然し額がさかに瘠けて、腦天迄長くなつてる事は、今朝でも爭はれない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構申さなかつた」

と云つた。成程何にも構はない。自分丈布團をかけてゐる。

「寒かなかつたかね」

とも云つた。氣樂なもんだ。長藏さんは

「いゝえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後から、熊さんが欠伸交りに、

「ぢや、又歸りに御寄り」

と云つた。

夫れから長藏さんが往來へ出る。自分も一足後れて、小僧と赤毛布の尻を追つ懸けて出た。みんな大急ぎに急ぐ。かう云ふ道中には慣れ切つたもの許りと見える。何でも長藏さんの云ふ所によると、是れから山越をするんだが、午迄には銅山へ着かなくつちやならないから急ぐんださうだ。何故午迄に着かなくつちやならないんだか、譯が分らないが、聞いて見る勇氣がなかつたから、默つて食つ附いて行つた。すると成程登になつて來た。昨夕あれ程登つた積だのに、まだ登るんだから嘘の樣でもあるが實際見渡して見ると四方は山ばかりだ。山の中に山があつて、其山の中に又山があるんだから馬鹿々々しい程奥へ這入る譯になる。この模樣では銅山のある所は、定めし淋しいだらう。呼息を急いて登りながらも心細かつた。此處迄來る以上は、都へ歸るのは大變だと思ふと、何の醉興で來たんだか淺間しくなる。と云つて都に居り度ないから出奔したんだから、おいそれと歸りにくい所へ這入つて、親類の目に懸からない樣に、朽果てゝ仕舞ふのは寧ろ本望である。自分は高い坂へ來ると、呼息を繼ぎながら、一寸留つては四方の山を見廻した。すると其の山がどれも是も、黑ずんで、凄い程木を被つてゐる上に、雲がかゝつて見る間に、遠くなつて仕舞ふ。遠くなると云ふより、薄くなると云ふ方が適當かも知れない。薄くなつた揚句は、次第次第に、深い奥へ引き込んで、今迄は影の樣に映つてたものが、影さへ見せなくなる。さうかと思ふと、雲の方で山の鼻面を通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲き返してるうちに、薄く山の影が出てくる。其の影の端が段々濃くなつて、木の色が明かになる頃は先刻の雲がもう隣りの峰へ流れてゐる。すると又後からすぐに別の雲が來て、折角見え出した山の色をぼうとさせる。仕舞には、どこにどんな山があるか一向見當が附かなくなる。立ちながら眺めると、木も山も谷も滅茶々々になつて浮き出して來る。

頭の上の空さへ、際限もない高い所から手の屆く邊まで落ちかゝつた。長藏さんは、

「こりや、雨だね」

と、歩きながら獨言を云つた。誰も答へたものはない。四人とも雲の中を、雲に吹かれる樣な、取り捲かれる樣な、又埋められる樣な有樣で登つて行つた。自分には此の雲が非常に嬉しかつた。此の雲のお蔭で自分は世の中から隱したい身體を十分に隱すことが出來た。さうして、さのみ苦しい思ひもしずに其の中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉ぢ籠められた樣な窮屈も覺えない上に、人目にかゝらん德は十分ある。生きながら葬られると云ふのは全く此の事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だから此の雲は全く難有い。難有いといふ感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほつと一息した。今考へると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云はれても仕方がない。仕方がないが、斯う云ふ自分が、時と場合によれば、翌が日にも、亦雲が戀しくならんとも限らない。それを思ふと何だか變だ。吾が身で吾が身が保證出來ない樣な、又吾が身が吾が身でない樣な氣持がする。

然し此の時の雲は全く嬉しかつた。四人が離れたり、かたまつたり、隔てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色は未だに忘れられない。小僧が雲から出たり這入つたりする。茨城の毛布が赤くなつたり白くなつたりする。長藏さんの、どてらが、わづか五六間の距離で濃くなつたり薄くなつたりする。さうして誰も口を利かない。さうして、無暗に急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後になり先になり、殖もせず減もせず、四つの儘、引かれて合ふ樣に、彈かれて離れる樣に、又どうしても四つでなくてはならない樣に、雲の中をひたすら歩いた時の景色は未だに忘れられない。

自分は雲に埋まつてゐる。殘る三人も埋まつてゐる。天下が雲になつたんだから、世の中は自分共にたつた四人である。さうして其の三人が三人ながら、宿無である。顔も洗はず朝飯も食はずに、雲の中を迷つて歩く連中である。此の連中と道伴になつて登り一里、降り二里を足の續く限り雲に吹かれて來たら、雨になつた。時計がないんで何時だか分らない。空模樣で判斷すると、朝とも云はれるし、午過とも云はれるし、又夕方と云つても差支ない。自分の精神と同じ樣に世界もぼんやりしてゐるが、只一寸眼に附いたのは、雨の間から微かに見える山の色であつた。其色が今迄のとは打つて變つてゐる。何時の間にか木が拔けて、空坊主になつたり、ところ斑の禿頭と化けちまつたんで、丹砂の樣に赤く見える。今迄の雲で自分と世間を一筆に抹殺して、此處迄ふらつきながら、手足丈を急がして來た許りだから、此の赤い山が不圖眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒めた氣分になつた。色彩の刺激が、自分にかう強く應へ樣とは思ひ掛けなかつた。――實を云ふと自分は色盲ぢやないかと思ふ位、色には無頓着な性質である。――そこで此の赤い山が、比較的烈しく自分の視神經を冒すと同時に、自分は愈銅山に近づいたなと思つた。蟲が知らせたと云へば、蟲が知らせたとも云へるが、實は此山の色を見て、すぐ銅を連想したんだらう。兎に角、自分が愈到着したなと直覺的に――世の中で直覺的と云ふのは大概此の位なものだと思ふが――所謂直覺的に事實を感得した時に、長藏さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言ひたい樣な事を云つた。それから十五分程したら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り拔けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦つて視覺を慥めたい位驚いた。それも昔の宿とか里

とか云ふ舊幕時代に緣のある樣な町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、凡てが苔の生えない、新しづくめの上に、白粉をつけた新しい女迄ゐるんだから、全く夢の樣な氣持で、不審が顏に出る暇もないうちに通り越しちまつた。すると橋へ出た。長藏さんは橋の上へ立つて、一寸水の色を見たが、

「是れが入口だよ。愈着いたんだから、其の積でゐなくつちや、不可ない」

と注意を與へた。然し自分には、どんな積でゐなくつちや不可ないんだか、些とも分らなかつたから、默つて橋の上へ立つて、入口から奥の方を見てゐた。左が山である。右も山である。さうして、所々に家が見える。矢つ張り木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。是も新しい。古ぼけて禿げてるのは山ばかりだつた。何だか又現實世界に引き摺り込まれる樣な氣がして、少しく失望した。長藏さんは自分が默つて橋の向を覗き込んでるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

と又聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭に答へたが、内心あまり好くはなかつた。何故だかしらないが、長藏さんは只自分に丈懸念がある樣子であつた。赤毛布と小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭から此の兩人は過去の因果で、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定してゐる樣な景色があり〳〵と見えた。して見ると不信用なのは自分丈で、大分長藏さんから此奴は危ないなと睨まれてゐたのかも知れな

い。好い面の皮だ。
それから四人揃つて、橋を渡つて行くと、右手に見える家には中々立派なのがある。其の中で一番いかめしい奴を指して、あれが所長の家だと長藏さんが教へて呉れた。序に左の方を見乍ら
「此方がシキだよ、御前さん、好いかね」
と云ふ。自分はシキと云ふ言葉を此の時始めて聞いた。餘つ程聞き返さうかと思つたが、大方これがシキなんだらうと思つて默つてゐた。あとから自分も此のシキと云ふ言葉を明瞭に理解しなければならない身分になつたが、矢つ張始めにぼんやり考へ附いた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れて愈シキの方へ這入る事になつた。鐵軌に付いて段々上つて行くと、其處此處に粗末な小さい家が澤山ある。是れは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。此の小屋はどれも六疊と三疊二間で、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分の樣な一人ものは這入り度たつて這入れないんだつた。かう云ふ小屋の間を縫つて、飽きずに上つて行くと、今度は石崖の下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。さうして、其の長屋が澤山ある。始めは僅か二三軒かと思つたら、登るに從つて續々あらはれて來た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下にあるんだから位地にも變りはないが、向丈は各々違つてる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅澤は言つてゐられない。やつとの思ひで、ならした地面へ否應なしに、方角のお構なく建てゝ仕舞つたんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思ふと、いつの間にか其の長屋の前へ出て來る。あれ

は、すぐ頭の上だがと心待ちに待つてゐると、急に路が外れて遠くへ持つてかれて仕舞ふ。丸で見當が附かない。其の上此の細長い家から顏が出てゐる。家から顏が出てゐるのが珍らしい事もないんだが、其の顏がたゞの顏ぢやない。どれも、これも、出來てゐない上に、色が惡い。その惡さ加減が又、尋常でない。青くつて、黑くつて、しかも茶色で、到底都會に居ては想像のつかない色だから困る。病院の患者杯とは丸で比較にならない。自分が山路を登りながら、始めて此の顏を見た時は、シキと云ふ意味をよく了解しない癖に、成程シキだなと感じた。然しいくらシキでも、かう云ふ顏は澤山あるまいと思つて、登つて行くと、長屋を通るたんびに顏が出て居て、其顏がみんな同じである。仕舞にはシキとは恐ろしい所だと思ふ迄、いやな顏を澤山見せられて、又自分の顏を澤山見られて――長屋から出てゐる顏は屹度自分等を見てゐた。一種獰惡な眼附で見てゐた。――とう／＼午後の一時に飯場へ着いた。

何故飯場と云ふんだか分らない。焚き出しをするから、さう云ふ名を附けたものかも知れない。自分は其の後飯場の意味をある坑夫に尋ねて、篦棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云つてるんでえ、とひどく剣突を食つた事がある。凡て此の社會に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用してゐるんだから、滅多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答へる閑もなし、調べるのは大馬鹿となつてるんだから至極簡單で且つ全く實際的なものである。

さう云ふ譯で飯場の意味は今以て分らないが、兎に角崖の下に散在してゐる長屋を指すものと思へばいい。其の長屋へ漸く到着した。多くある長屋のうちで、何故此の飯場を選んだかは、長藏さんの一人極だから、自分には說明しにくい。が、此の飯場は長藏さんの專門御得意の取引先と云ふ譯でもなかつたらし

い。長藏さんは自分を此の飯場へ押しつけるや否や、何時の間にか、赤毛布と小僧を連れて外の飯場へ出て行つて仕舞つた。それで二人は外の飯場の飯を食ふ樣になつたんだなと後から氣が附いた。二人の消息は其後一向聞かなかつた。銅山のなかでもついぞ顏を合せた事がない。考へると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降つて來た小僧と落ち合つて、夏の夜を後になり先になつて、崩れさうな藁屋根の下で一所に寐た明日は、雲の中を半日かゝつて、目指す飯場へ漸く着いたと思ふと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまふ。是れでは小說にならない。然し世の中には纏まりさうで、纏らない、云はゞ出來損ひの小說めいた事が大分ある。長い年月を隔てゝ振り返つて見ると、却つて此のだらしなく尾を蒼穹の奧に隱して仕舞つた經歷の方が興味の多いやうに思はれる。振り返つて思ひ出す程の過去は、みんな夢で、その夢らしい所に追懷の趣があるんだから、過去の事實それ自身に何處かぼんやりした、曖昧な點がないと此の夢幻の趣を助ける事が出來ない。從つて十分に發展して來て因果の豫期を滿足させる事柄よりも、此赤毛布流に、頭も尻も祕密の中に流れ込んで只途中丈が眼の前に浮んでくる一夜半日の畫の方が面白い。小說になりさうで、丸で小說にならない所が、世間臭くなくつて好い心持だ。只に赤毛布ばかりぢやない。小僧もさうである。長藏さんもさうである。松原の茶店の神さんもさうである。もつと大きく云へば此一篇の「坑夫」そのものが矢張さうである。纏まりのつかない事實を事實の儘に記す丈である。小說の樣に拵へたものぢやないから、小說の樣に面白くはない。其の代り小說よりも神祕的である。凡て運命が脚色した自然の事實は、人間の構想で作り上げた小說よりも無法則である。だから神祕である。と自分は常に思つてる。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分等が飯場に到着した時は無論二人とも一所であつた。此處で長藏さんが愈坑夫志願の談判を始めた。談判と云ふと面倒な樣だが、其實極めて簡單なものであつた。たゞ、此の男は坑夫になりたいと云ふから、どうか使つてくれと云つた許りである。自分の姓名も出生地も身元も閲歴も何にも話さなかつた。勿論話し度たつて、知らないんだから、話せ樣もないんだが、かう迄手つ取早く片附る了簡とは思はなかつた。自分は中學校へ入學した時の經驗から、いくら坑夫だつて、それ相應の手續がなくつちや採用されないもんだと許り思つてゐた。大方身元引受人とか保證人とか云ふものが證文へ判でも捺すんだらう、其の時は長藏さんにでも賴んで見樣位にまで、先廻りをして考へてゐた。所が案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭は――飯場頭だか何だか其の時は無論知らなかつた。眉毛の太くつて蒼髯の痕の濃い逞しい四十恰好の男だつた。――其の男が長藏さんの話を一通り聞くや否や、

「さうかい、夫ぢや置いて御出」

と左も無雜作に云つちまつた。丁度炭屋が土竈を臺所へ擔ぎ込んだ時の樣に思はれた。人間が遙々山越をして坑夫になりに來たんだとは認めてゐない。そこで自分は少々腹の中で此飯場頭を恨んだが、是れは自分の間違であつた。其譯は今直に分る。

飯場頭と云ふのは一の飯場を預かる坑夫の隊長で、此の長家の組合に這入る坑夫は、萬事此の人の了簡次第でどうでもなる。だから甚だ勢力がある。此の飯場頭と一分時間に談判を結了した長藏さんは、

「ぢや、よろしくお賴みまうします」

と云つたなり、赤毛布と小僧を連れて出て行つた。又歸つてくる事と思つたが、其の後一向影も形も見せないんで、全く、置去にされたと云ふ事が分つた。考へるとひどい男だ。此處迄引つ張つて來るときには、いゝ何の蚊のと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶もしない。それにしてもぽん引の手數料はいつ何時何處で取つたものか、是は今以て分らない。

かう云ふ次第で飯場頭からは、土釜の炭俵の如く認定される、長藏さんからは小包の樣に抛け込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然としてゐると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。其の顏附が變つてゐる。人を炭俵の樣に取扱ふ男とは、どうしても受取れない。全く東京邊で朝晩出逢ふ、萬事を心得た苦勞人の顏である。

「あなたは生れ落ちてからの勞働者とも見えない樣だが……」

飯場掛の言葉を此處迄聞いた時、自分は急に泣き度なつた。散ざつぱらお前さんで、厭になる程遣られた揚句の果、もう到底御前さん以上には浮ばれないものと覺悟をしてゐた矢先に、突然あなたの昔に歸つたから、思ひがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつかしさと、夫から過去の記憶――自分はつい一昨日迄は立派にあなたで通つて來た――それや是やが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて來た上に、相手の調子が如何にも鄭寧で親切だから――つい泣きたくなつた。自分は其の後色々な目に逢つて、幾度となく泣きたくなつた事はあるが、擦れ枯しの今日から見れば、大抵は泣くに當らない事が多い。然し此の時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思ふ。苦しい、つらい、口惜しい、心細い涙は經驗で消す事が出來る。難有涙もこぼさずに濟む。たゞ墮落した自己が、依然として昔

の自己であると他から認識された時の嬉し涙は死ぬ迄附いて廻るものに違ない。人間はかやうに手前勘の強いものである。此の涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分の爲に書生を置いて、書生の爲に置いてやつた樣な心持になつてると同じ事ぢやないかしら。

かう云ふ譯で、飯場掛りの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、實は泣かなかつた。悄然とはしてゐたが、氣は張つてゐる。何處からか知らないが、抵抗心が出て來た。たゞ思ふ樣に口が利けないから、默つて向ふの云ふ事を聞いてゐた。すると飯場掛りは嬉しい程親切な口調で、かう云つた。――

「……まあどうして、斯んな所へ御出なすつたんだか、今の男が連れて來る位だから大概私にも樣子は知れてはゐるが――どうです、もう一遍考へて見ちやあ。乾度取ッ附坑夫になれて、金がうんと儲かるてえ樣な旨い話でもしたんでせう。それがさ、實際遣つて見ると到底話の十が一にも行かないんだから詰らないです。第一坑夫と一口に云ひますがね。中々たゞの人に出來る仕事ぢやない、ことにあなたの樣に學校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつこありませんよ。……」

飯場頭は此處迄來て、眤と自分の顏を見た。何とか云はなくつちやならない。幸ひ此の時はもう泣きたい所を通り越して、口が利ける樣になつてゐた。そこで自分はかう云つた。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲しかないです。何も儲けるためにやつて來た譯ぢやないんですから、――夫や知つてるです、僕だつて知つてるです……」

と、此の時知つてるですを二遍繰り返した事を今だに記憶してゐる。甚だ穩かならぬ生意氣な、もの〻云ひ樣だつた。若いうちは、たつた今迄悄氣てゐても、相手次第ですぐ附け上つちまう。まことに赤面の至

りである。然も其の知つてるですが、何を知つてるのかと思ふと、今自分を連て來た男、卽ち長藏さんは、一種の周旋屋であつて、凡ての周旋屋に共通な法螺吹きであると云ふ眞相をよく自覺して居ると云ふ意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞着されて來たんぢやない、萬事承知の上の坑夫志願だ抔と說明して見たつて今更どうなるものぢやない。所が年が若いと虛榮心の强いもので――今でも弱いとは云はないが――しきりに辯解に取り掛つたのは實に冷汗の出る程の愚であつた。幸ひ相手が、かう云ふ家業に似合はぬ篤實な男で、かつ自分の不經驗を氣の毒に思ふの餘り、此の生意氣を生意氣と知りながら大目に見て呉れたもんだから、打やされずに濟んだ。まことに難有い。此の飯場に住み込んだあとで、頭の勢力の廣大なるに驚くにつれて、僕は知つてるですを思ひ出しては獨り赧い顏をしてゐた。序に云ふが此の頭の名は原駒吉である。今以て自分は好い名だと思つてる。

原さんは別に厭な顏附もせずに、默つて自分の言譯を聞いて居たが、やがて頭を振り出した。其の頭は大きな五分刈で額の所が面摺の樣に拔き上がつてゐる。

「そりや物數奇と云ふもんでさあ。折角來たから是非遣るつたつて、何も家を出る時から坑夫になると思ひ詰めた譯でもないんでせう。云はゞ一時の出來心なんだからね。遣つて見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてるんだから、廢すが好うがせう。現に書生さんで此處へ來て十日と辛抱したものあ、有りやしませんぜ。え？そりや來る。幾人も來る。來る事は來るが、みんな驚いて逃げ出しちまいまさあ。全く普通のものゝ出來る業ぢやありませんよ。惡い事は云はないから御歸んなさい。なに坑夫をしなくつたつて、口過丈なら骨は折れませんやあ」

原さんは茲に至つて、胡坐を崩して尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しさうな按排である。大いに困つた。困つた結果、坑夫と云ふ事から氣を離して、自分丈を檢査して見ると、――何だか急に寒くなつた。袷はさつきの雨で濡れてゐる。洋袴下は穿いてゐない。東京の五月も此山の奥へ來ると丸で二月か三月の氣候である。坂を登つてゐる間こそ體溫で左程にも思はなかつた。原さんに拒絕される迄は氣が張つてゐたから、好かつた。然し飯場へ來て休息した上に、坑夫になる見込が殆ど切れたとなると、情ないのが寒いのと合併して急に顏へ出した。其の時の自分の顏色は定めし見るに堪へん程醜いもんだつたらう。此の時自分は又何となく、今しがた自分を置去にして、挨拶もせずに出て行つた長藏さんが戀しくなつた。長藏さんがゐたら、何とか盡力して坑夫にしてくれるだらう。よし坑夫にしてくれない迄も、どうにか片をつけて呉れるだらう。汽車賃を出して呉れた位だから、方角のわかる所迄位は送り出して呉れさうなものだ。蟇口を長藏さんに取られてから、懷中には一文もない。歸るにしても、歸る途中で腹が減つて山の中で行倒になる迄だ。いつその事今から長藏さんを追掛けて見樣か。飯場々々を探して歩いたら逢へない事もないだらう。逢つて是々だと泣き附いたら、今迄の交際もある事だから、好い智慧を貸してくれまいものでもない。然し別れ際に挨拶さへしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で實はこんな閑な事を、非常に忙しく、ぐる〳〵考へてゐた。好な原さんが前にゐるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなつた長藏さん許りを相談相手の樣に思ひ込んだのは、どう云ふ理由だらう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云ふ場合に、敵は敵、味方は味方と板行で押した樣に考へないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露はしたり、片方づかない樣に心を自由に活動させなく

つてはいけない。
弱輩な自分には此の機合がまだ呑み込めなかつたもんだから、原さんの前に立つて顫へながら、へどもどしてゐると、原さんも氣の毒になつたと見えて、
「あなたさへ歸る氣なら、及ばずながら相談にならうぢやありませんか」
と向ふから口を掛て呉れた。かう切つて出られた時に、自分ははつと有難く感じた。ばかりなら當り前だがはつと氣が附いた。――自分の相談相手は自分の志望を拒絶する此原さんを除いて、外にないんだと氣が附いた。氣がつくと同時に又口が利けなくなつた。是非坑夫にして呉れとも、歸るから旅費を貸してくれとも言ひかねて、矢つ張り立ちすくんでゐた。氣が附いても何にもならない、たゞ右の手で拳骨を拵へて寒い鼻の下を擦つた樣に記憶してゐる。自分は其の前寄席へ行つて、よく噺家がこんな手眞似をするのを見た事があるが、自分で其の通りを實行したのは、是れが初めてゞある。此の手眞似を見てゐた原さんが、今度はかう云つた。
「失禮ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」
旅費は無論ない。一厘たりとも金氣は肌に着いてゐない。のたれ死を覺悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。況して慢性の自滅で滿足する今の自分には、たとひ白銅一箇の草鞋錢でも大切である。歸ると事がきまりさへすれば、頭を地に摺り附けても、原さんから旅費を惠んで貰つたらう。實際かうなると廉恥も品格もあつたもんぢやない。どんな不體裁な貰ひ方でもする。――大抵の人がさうなるだらう。又さうなつて然るべきである。――然し決して褒められた始末ぢやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、

たゞ人間の正體を、事實なりに書くんで、書いて得意がるのとは譯が違ふ。人間の生地は是だから、是で差支ない抔と主張するのは、練羊羹の生地は小豆だから、羊羹の代りに生小豆を噛んでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分は此の時の有様を思ひ出す度に、なんで、あんな、さもしい料簡になつたものかと、吾ながら愛想が盡きる。斯う云ふ下卑た料簡を起さずに、一生を暮す事の出來る人は、經驗の足りない人かも知れないが、幸な人である。又自分等よりも遙に高尚な人である。生小豆のまづさ加減を知らないで、生涯練羊羹ばかり味はつてる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭から僅かの合力を仰ぐ所であつた。それをやつとの事で喰ひ止めたのは、折角の好意で調へてくれる金も、二三日木賃宿で夜露を凌げば、すぐ無くなつて、無くなつた曉には、又當途もなく流れ出さなければならないと、冥々のうちに自覺したからである。自分は屑よく涙金を斷つた。斷つた表向は律義にも見える。自分もさう考へるが、よく／＼詮索すると、慾の天秤に懸けた、利害の判斷から出てる事は慥である。其證據には補助を斷ると同時に、自分は、こんな事を云ひ出した。

「其の代り坑夫に使つて下さい。折角來たんだから、僕はどうしても遣つて見る氣なんですから」

「隨分醉興ですね」

と原さんは首を傾けて、自分を見詰めてゐたが、やがて溜息の樣な聲を出して、

「ぢや、どうしても歸る氣はないんですね」

と云つた。

「歸るつたつて、歸る所がないんです」
「家なんかないんです。坑夫になれなければ乞食でもするより仕方がないです」
「だつて……」
こんな押問答を二三度重ねてゐる中に、口を利くのが大變樂になつて來た。是れは思ひ切つて、無理な言葉を、出惡いと知りながら、我慢して使つた結果、おのづと拍子に乘つて來た勢ひに違ないんだから、まあ器械的の變化と見傚しても差支なからうが、妙なもので、其器械的の變化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして來た。自分の言ひたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言ひ度ない事迄も調子づいてべら〳〵饒舌る。舌はかほどに器械的なものである。——此の器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分は段々大膽になつて來た。——
いや、大膽になつたから饒舌れたんだらう、君の云ふ事は顚倒ぢやないかと遣り込める氣なら、さうして置いてもいゝ。いゝが、夫はあまり陳腐で且時々嘘になる。嘘と陳腐で滿足しないものは自分の言分を尤もと首肯だらう。
自分は大膽になつた。大膽になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んで遣らうと決心した。また饒舌つて居れば必ず坑夫になれるに違ないと自覺して來た。一昨日家を飛び出す間際迄は、夢にも坑夫にならうと云ふ分別は出なかつた。ばかりではない、坑夫になる爲の驅落と事が極まつてゐたならば、何となく恥づかしくなつて、まあ一週間よく考へた上にと、出奔の時期を曖昧に延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊だか分らない坑掘になり下る目的の逃亡とは、何不足なく

生育つた自分の頭には影さへ射さなかつたらう。所が原さんの前で寒い奥齒を噛しめながら、せう事なしの押問答をしてゐるうちに、自分はどうあつても坑夫になるべき運命、否天職を帶びてる樣な氣がし出した。此の山と此の雲と此の雨を凌いで來たからには、是非共坑夫にならなければ濟まない。萬一採用されない曉には自分に對して面目がない。――讀者は笑ふだらう。然し自分は當時の心情を眞面目に書いてるんだから、人が見て可笑しければ可笑しい程、其の時の自分に對して氣の毒になる。

妙な意地だか、負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖くつて、歸り切れなかつた爲だか、――其の邊は自分にも曖昧だが、兎に角自分は、尤も熱心な語調で原さんを口說いた。

「……左樣云はずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだ遣つて見ない事なんだから――折角山を越して遠方をわざ〳〵來た甲斐に、一日でも二日でも、いゝですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。其の上で、到底役に立たないと事が極れば歸ります。屹度歸ります。僕だつて、それだけの仕事が出來ないのに、押を強く御厄介になつてる氣はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神さんが云つた通りを其儘圖に乘つて述べ立てた。後から考へると、是れは寧ろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聽する文句ではなかつた。そこで原さんは少し笑ひ出した。

「夫程お望みなら仕方がない。何も御緣だ。まあやつて御覽なさるが好い。其の代り苦しいですよ」

と原さんは何氣なく裏の赤い山を覗く樣に見上げた。大方天氣模樣でも見たんだらう。自分も原さんと一所に山の方へ眼を移した。雨は上がつたが、暗く曇つてゐる。薄氣味の惡い程怪しい山の中の空合だ。此

の一瞬時に、自分の願が叶つて、自分はまづ山の中の人となつた。此の時「其の代り苦しいですよ」と云つた原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、漸くの思ひで刻下の志を遂げると、すぐ反動が來て、却て志を遂げた事が急に恨めしくなる場合がある。自分が望み通り此處へ落ち附ける口頭の辭令を受け取つた時の感じは聊か之に類してゐる。

「ぢやね」――原さんは語調を改めて話し出した。――「ぢやね。何しろ明日の朝シキへ這入つて御覽なさい。案内を一人附けて上げるから。――それからと――さうだ、其の前に話して置かなくつちやなりませんがね。一口に坑夫と云ふと、譯もない仕事の樣に思はれませうが、中々外で聞いてる樣な生容易い業ぢやないんで。まあ取つ附けから坑夫になるなあ」と云つて自分の顏を眺めて居たが、やがて、

「其の體格ぢや、ちつと六づかしいかも知れませんね。坑夫でなくつても、好うがすかい」

と氣の毒さうに聞いた。坑夫になる迄には相當の階級と練習を積まなくつちやならないと云ふ事が茲で始めて分つた。成程長藏さんが坑夫々々と、さも名譽らしく坑夫を振り廻した筈だ。

「坑夫の外に何かあるんですか。こゝに居るものは、みんな坑夫ぢやないんですか」

と念の爲に聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした樣子もなく、すぐ其の所以を說明して吳れた。

「銅山にはね、一萬人も這入つてゝね。それが掘子に、シチウに、山市に、坑夫と、かう四つに分れてるんでさあ。掘子つてえな、一人前の坑夫に使へねえ奴がなるんで、まあ坑夫の下働ですね。シチウは早く云ふとシキの內の大工見た樣なものかね。夫から山市だが、こいつは、たゞ石塊をこつ〳〵缺いてる丈で、重に子供――さつきも一人來たでせう。あゝ云ふのが當分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、

こんなものですよ。それで坑夫となると請負仕事だから、間が好いと日に一圓にも二圓にも當る事もあるが、掘子は日當で年が年中三十五錢で辛抱しなければならない。しかも其のうち五分は親方が取つちまつて、病氣でもしやうもんなら手當が半分だから十七錢五厘ですね。それで蒲團の損料が一枚三錢――寒いときは是非二枚要るから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜は別ですよ。――どうですもし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる氣はありますかね」

實の所はなりますと勢ひよく出る元氣はなかつたが、此處迄來れば、今更どうしたつて否だと斷られた義理のもんぢやない。そこで、出來る丈景氣よく、

「なります」

と答へてしまつた。原さんには此の答が斷然たる決心の樣に受けとれたか、それとも、瘠我慢の附景氣の如く響いたか、其邊は確と分らないが、何しろ此の一言を聞いた原さんは、機嫌よく、

「ぢやまあ、御上がんなさい。さうして、あした人を附けて上げるから、まあシキへ這入つて御覽なさるがいゝ。何しろ一萬人も居て、こんなに組々に分れてゐるんだから、飯場を一つでも預かつてると、毎日毎日何だ蚊だつて、うるさい事ばかりでね。折角賴むから置いてやる、すぐ逃げる。――一日に二三人は屹度逃げますよ。さうかと云つて、大人しくしてゐるかと思ふと、病氣になつて、死んぢまう奴が出て來て――どうも始末に行かねえもんでさあ。葬ひ許りでも日に五六組無い事あ、滅多にないからね。――まあ遣る氣なら本氣に遣つて御覽なさい。腰を掛けてちや、足が草臥るだらう。此方へ御上り」

此の逐一を聞いてゐた自分はたとひ、掘子だらうが、山市だらうが一生懸命に働かなくつちあ、原さん

に對して濟まない仕儀になつて來た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になる樣な不都合は決して爲まいと極めた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。
そこで原さんの云ふ通り、足を拭いて尻を卸してゐるうちに、奥の方から婆さんが出て來て、——此の婆さんの出樣が甚だ突然で、一寸驚いたが、
「此方へ御出なさい」
と云ふから、好加減に御辭儀をして、後から尾いて行つた。小作な婆さんで、後姿の華奢な割合には、びんぴん跳ねる樣に活潑な歩き方をする。幅の狹い茶色の帶をちよつきり結にむすんで、なけなしの髮を顛窩へ片附て其心棒に鉛色の簪を刺してゐる。さうして襷掛であつた。何でも臺所か——臺所がなければ、——奥の方で、用事の眞つ最中に、案内の爲呼び出されたから、かう急がしさうに尻を振るんだらう。夫とも山育だからかしら。いや、飯場だから優長にしちやゐられない所以だらう。して見ると、今日から飯場の飯を食ひ出す以上は自分だつて安閑としちやゐられない。萬事此の婆さんの型で行かなくつちやなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、流石に草臥た手足が急になる、まいで充滿して、頭と胸の組織が一寸變つた樣な氣分になつた。其の勢ひで廣い階子段を、案内に應じて、すとん〳〵と景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺許り出るや否や、此の決心が、ぐうと退避だ。胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。疊數は何十枚だか知らないが遙の突き當り迄敷き詰めてあつて、其の間には一重の仕切りさへ見えない。丁度柔道の道場か、浪花節の席亭の樣な恰好で、しかも廣さは倍も三倍もある。だから、唯駄々ッ廣い感じ許りで、疊の上でも丸で野原へ出たとしき

や思へない。夫丈でも驚く價値は十分あるが、其の廣い原の中に大きな圍爐裏が二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人宛かたまつてゐる。自分の決心が退避いだと云ふのは、卑怯な話だが、全く此の人間にあつたらしい。平生から強がつて居たには居たが、若輩の事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多に首を出した事はない。晴の場所となると、只でさへもじ〳〵する。所へもつて來て、突然坑夫の團體に生擒れたんだから、此の黒い塊を見るが早いか、聊か辟易ぢまつた。それも、たゞの人間ならいゝ。と云つちや意味がよく通じない。――たゞの人間が、坑夫になつてるなら差支ない。所が自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、此塊の各部分が、申し合せた樣に、此方を向いた。其の顏が――實は其の顏で全く畏縮して仕舞つた。と云ふのは其の顏がたゞの顏ぢやない。たゞの人間の顏ぢやない。純然たる坑夫の顏であつた。さう云ふより別に形容し樣がない。坑夫の顏はどんなだらうと云ふ好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。夫れでも是非說明して見ろと云ふなら、ざつと話すが、――頰骨が段々高く聳えてくる。顎が競り出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺の樣に引ッ込んで、眼球を遠慮なく、奥の方へ吸ひ附けちまふ。小鼻が落ちる。――要するに肉と云ふ肉がみんな退却して、骨と云ふ骨が悉く吶喊展開するとでも評したら好からう。顏の骨だか、骨の顏だか分らない位に、稜々たるものである。劇しい勞役の結果早く年を取るんだとも解釋は出來るが、たゞ天然自然に年を取つたつて、あゝなるもんぢやない。丸味とか、溫味とか、優味とか云ふものは藥にしたくつても、探し出せない。まあ一口に云ふと獰猛だ。不思議にも此の獰猛な相が一列一體の共有性になつて居ると見えて、圍爐裏の傍の黒いものが等しく自分の方を向くと、またゝく間に獰猛な顏が十四五揃つた。向ふの圍爐裏を取捲いてる連中も同じ顏に違

ひない。さつき坂を上がつてくるとき、長屋の窓から自分を見下してゐた顔も全く是である。して見ると組々の長屋に住んでゐる總勢一萬人の顏は悉く獰猛なんだらう。自分は全く退避んだ。
此の時婆さんが後を振り返つて、
「此方へ御出でなさい」
と、もどかしさうに云ふから、度胸を据ゑて、獰猛の方へ近附いて行つた。漸く圍爐裏の傍迄來ると、婆さんが、今度は、
「まあ此處へ御坐んなさい」
と差しづをしたが、唯好加減な所へ坐れと云ふ丈で、別に設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊りを避けて、たつた一人疊の上へ坐つた。此の間獰猛な眼は、始終自分に食つ附いてゐる。遠慮も何もありやしない。さうして誰も口を利くものがない。取附端を見出す迄は、團體の中へ交り込む譯にも行かず、ぽつねんと獨り坊ッちで離れてゐるのは、獰猛の目標となる許だし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介する段ぢやない、器械的に「此處へ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てゝ階子段を降りて行つて仕舞つた。廣い寄席の眞中にたつた一人取り殘されて、樂屋の出方一同から、冷かされてる樣なものだ、手持無沙汰は無論である。殊更今の自分に取つては心細い。のみならず袷一枚で甚だ寒い。寒いのは、此の五月の空に、かん〱炭を燒いて獰猛共が圍爐裏へあたつてるんでも分る。自分は仕方がないから、てれ隱しに襯衣の鈕をはづして腋の下へ手を入れたり、膝を立てゝ、足の親指を抓つて見たり、或は腿の所を兩手で揉んで見たり、色々遣つてゐた。かう云ふ時に、落付いた顏をして――顏ばかりぢや不

可ない、心から落ち付いて、平氣で坐つてる修業をして置かないと、大きな損だ。然し、十九や、そこいらでは到底覺束ない藝だから、自分は已を得ず、前記の通り色々馬鹿な眞似をしてゐると、突然、

「おい」

と呼んだものがある、自分は此の時丁度下を向いて鳴海絞の兵兒帶を締め直してゐたが、此の聲を聞くや否や、電氣仕掛の顏の樣に、首筋が急に釣つた。見ると先きの顏揃で、眼がみんな此方を向いて、光つてる。「おい」と云ふ聲は、どの顏から出たものか分らないが、どの顏から出たにしても大した變りはない。どの顏も獰猛で、よく見ると其の獰猛のうちに、輕侮と、嘲弄と、好奇の念が判然と彫り附けてあつたのは、首を上げる途端に發明した事實で、發明するや否や、非常に不愉快に感じた事實である。自分は仕方がないから、首を上げた儘、「おい」の聲がもう一遍出るのを待つてゐた。此の間が約何秒かゝつたか知らないが、兎に角猶豫期の狀態で一定の姿勢に居つたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄ますねえ」

と云つたものがある。此の聲はさつきの「おい」よりも少し皺枯てゐたから、大方別人だらうと鑑定した。然し返答をするべき性質の言葉でないから――字で書くと普通のねえの樣に見えるが、實はなよの命令を倶利加羅流に崩したんだから、甚だ下等である。――それで矢つ張り默つてた。たゞ内心では大いに驚いた。自分が此處へ來て言葉を交したものは原さんと婆さん丈けであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思つたよりも叮嚀であつた。所が原さんは飯場頭である。頭ですら是れだから、平の坑夫は無論さう野卑ぢやあるまいと思ひ込んでゐた。だから、此の惡口が藪から棒に飛んで來た時には、こいつはと退

避む前に、まづおやつと毒氣を拔かれた。此處で一層の事毒突返したなら、袋叩きに逢ふか、又は平等の交際が出來るか、どつちか早く片が附いたかも知れないが、自分は何にも口答へをしなかつた。もとく東京生れだから、此の際何とか受ける位は心得てるたんだらう。それにも拘はらず、兄に類似した言語は無論、尋常の竹箆返しさへ控へたのは、——相手にならないと先方を輕蔑した爲だらうか——或は怖くつて何とも云ふ度胸がなかつたんだらうか。自分は前の方だと云ひたい。然し事實はどうも後の方らしい。兎も角も兩方交つてたと云ふのが一番穩の樣に思はれる。世の中には輕蔑しながらも怖いものが澤山もある。矛盾にやならない。

それは何方にしたつて構はないが、自分が此の惡口を聞いたなり、大人しく聞き流す料簡と見て取つた坑夫共は、面白さうにどつと笑つた。此方が大人なしければ大人なしい程、此の笑は高く響いたに違ない。銅山を出れば、世間が相手にして呉れない返報に、たまく普通の人間が銅山の中へ迷ひ込んで來たのを、是幸ひと嘲弄するのである。自分から云へば、此の坑夫共が社會に對する恨みを、吾身一人で引き受けた譯になる。銅山へ這入る迄は、自分こそ社會に立てない身體だと思ひ詰めてゐた。そこで飯場へ上つて見ると、自分の樣な人間は仲間にしてやらないと云はん許りの取扱ひである。自分は普通の社會と坑夫の社會の間に立つて、立派に板挾みとなつた。だから此の十四五人の笑ひ聲が、ほてる程自分の顏の正面に起つた時は、悲しいと云ふよりは、恥づかしいと云ふよりは、手持無沙汰と云ふよりは、情ない程不人情な奴が揃つてると思つた。無教育は始めから知れてる。教育がなければ豫期出來ない程の無理な注文はしない積だが、なんぼ坑夫だつて、親の胎内から持つて生れた儘の、人間らしい所はあるだらう位に

心得てゐたんだから、此の寸法に合はない笑聲を聞くや否や、畜生奴と思つた。俗語に云ふ怒つた時の畜生奴ぢやない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では經驗の結果、人間と畜生の距離が大分詰つてゐるから、此の位の事をと、鈍い神經の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使つてゐない新しい柔かい頭へ此のわる笑がじんと來たんだから、切なかつた。自分ながら思ひ出す度に、まことに痛はしい樣な、いぢらしい樣な、其の時の神經系統を其の儘眞綿に包んで大事に仕舞つて置いてやりたい樣な氣がする。

此惡意に充ちた笑が漸く下火になると、

「御前は何處だ」

と云ふ質問が出た。此の質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つてゐたから、聲の出所は判然分つた。淺黄色の手拭染みた三尺帶を腰骨の上へ引き廻して、後向きの胡坐の儘、斜に顏丈此方へ見せてゐる。其片眼は生れ附きの赤んべんで、御負に結膜が一面に充血してゐる。

「僕は東京です」

と答へたら、赤んべんが、肉のない頰を凹まして、愚弄の笑ひを洩らしながら、三軒置いて隣りの坑夫を一寸眼でしやくつた。すると此の相圖を受けた、願人坊主が、入れ替つてこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生ッ坊だな。大方女郎買でもして仕損つたんだらう。太え奴だ。全體此頃の書生ッ坊の風儀が惡くつて不可ねえ。そんな奴に辛抱が出來るもんか、早く歸れ。そんな瘠つこけた腕で出來る稼業ぢやねえ」

自分はだまつてゐた。あんまり默つてゐたので張合が拔けた所爲か、わい／＼冷かすのが少し靜まつた。其の時一人の坑夫――是れは尋常な顏である。世間へ出しても普通に通用する位に眼鼻立が調つてゐた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黑い塊を見る度に、人數やら、着物やら、獰猛の度合やらを段々腹に疊み込んでゐたが、最初は總體の顏が總體に骨と眼で出來た上に獸慾の脂が浮いてゐる所ばかり眼に着いて、どれも、これも差別がない樣に思はれた。それが二度三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の區別が出來るに連れて、此の坑夫丈が一際目立つて見える樣になつた。年はまだ三十にはなるまい。體格は倔強である。眉毛と鼻の根と落ち合ふ所が、一段奧へ引つ込んで、始終鼻眼鏡で壓し附けてる樣に見える。其處に癇癪が拘泥してゐるさうだが、之が爲に獰猛の度は却て減ずると云つても好い樣な特徴であつた。

――此坑夫が始めて此時口を利いた。――

「何故斯んな所へ來た。來たつて仕方がないぜ。儲かる所ぢやない。こゝに居る奴あ、みんな食詰もの許りだ。早く歸るが好からう。歸つて新聞配達でもするがいゝ。おれも元は是で學校へも通つたもんだが、放蕩の結果とう／＼、シキの飯を食ふ樣になつちまつた。おれの樣になつたが最後もう駄目だ。歸らつたつて、歸れなくなる。だから今のうちに東京へ歸つて新聞配達をしろ。書生はとても一月と辛抱は出來ないよ。惡い事は云はねえから歸れ。分つたらう」

是れは比較的眞面目な忠告であつた。此の忠告の最中は、さすがの獰惡派も大人しく交つ返しもせずに聞いてゐた。其の惰性で忠告が濟んだあとも、一時は靜であつた。尤も是れは此の坑夫に多少の勢力があるんで、其の勢力に對しての遠慮かも知れないと勘づいた。其の時自分は何となく心の底で愉快だつた。

此の坑夫だつて、外の坑夫だつて、人相にこそ少しの變化はあれ、矢つ張り一つ穴でこつ／＼鑛塊を缺いてる分の事だらう。さう藝に巧拙のある筈はない。して見ると、此の男の勢力は全く字が讀めて、物が解つて、分別があつて——一口に云ふと教育を受けた所爲に違ない。自分は今こんなに馬鹿にされてる。殆ど最下等の勞働者にさへ齒されない人非人として、多勢の侮辱を受けてる。然し一度此の社會に首を突込んで、獰猛組の一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、此の男位の勢力を得る事は出來るかも知れない。出來るだらう。出來るに極つてると迄感じた。だから、いくら誰が何と云つても歸るまい、屹度此の社會で一人前以上になつて成功して見せる。——隨分思ひ切つて詰らない考へを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶つてる樣だ。そこで此の坑夫の忠告には謹んで耳を傾けてるたが、別段先方の注文通りに、では歸りませうと云ふ返事もしなかつた。そのうち一旦靜まりかけた愚弄の舌が又動き出した。

「居る氣なら置いてやるが、此處にや、夫々掟があるから呑み込んで置かなくつちや迷惑だぜ」

と一人が云ふから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分もあるぢやねえか」

と、大變な大きな聲を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。實はあまり我味々々云ふから、默つて居樣かしらんとも思つたけれども、萬一掟を破つて、あとで苛い目に逢ふのが怖いから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫が、すぐ、返事をした。

「仕樣のねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫にならうなんて料簡違えだ。早く歸れ」

「親分も兄弟分も居るから、だから、儲けやうたつて、さう旨かあ行かねえ。歸れ」

「儲かるもんか歸るが好い」

「歸れ」

「歸れ」

しきりに歸れと云ふ。しかも實際自分の爲を思つて歸れと云ふんぢやない。仲間入をさせて遣らないから出て行けと云ふんである。嘸儲けたいだらうが、さうは問屋で卸さない、こちとら丈で儲ける仕事なんだから、諦めて早く歸れと云ふんである。從つて何處へ歸れとも云はない。川の底でも、穴の中でも構はない勝手な所へ歸れと云ふんである。自分は默つてゐた。

此の形勢が此の儘で續いたら、どんな事にたち至つたか思ひ遣られる。敵は此の圍爐裏の周圍許にや居ない。さつき一寸話した通り、向ふの方にも大きな輪になつて、黑く塊つてゐる。こつちの團體丈ですら持ち扱つてゐる所へ、彼方の群勢が加勢したら大事である。自分は愚弄されながらも、時々横目を使つて未來の敵――かうなると、どれもこれも人間でさへあれば、敵と認定して仕舞ふ。――遠方には居るが、そろそろ押し寄せて來さうな未來の敵を、見てゐた。斯樣に自分の心が、左右前後と離れ離れになつて、しか

も獨立が出來ないものだから、物の後を追掛け、追ん廻はしてゐる程辛い事はない。なんでも敵に逢たら敵を呑むに限る。呑む事が出來なければ呑まれて仕舞ふが好い。もし兩方共困難ならぶつりと緣を截つて獨立自尊の態度で敵を見てゐるがいゝ。敵と融合する事も出來ず、敵の勢力範圍外に心を持つてく事も出來ず、しかも敵の尻を嗅がなければならないとなると、甚だしき損となる。從つて尤も下等である。自分はかう云ふ場合にたび／＼遭遇して、色々な活路を研究して見たが、研究した程に、心が云ふ事を聞かない。だから茲に申す三策は、みんな釋迦の空說法である。もし講釋をしないでも知れ切つてる陳說なら、猶更言ふ丈が野暮になる。どうも正式の學問をしないと、かう云ふ所へ來て、取捨の區別が附かなくつて困る。

自分が四方八方に氣を配つて、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入つてゐると、

「御膳を御上がんなさい」

と云ふ婆さんの聲が聞えた。何時の間に婆さんが上がつて來たんだか、自分の魂が鳩の卵の樣に小さくなつて、萎縮した眞最中だつたから、御膳の聲が耳に入る迄は丸で氣が附かなかつた。見ると剝げた御膳の上に緣の缺けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃も乘つてゐる。箸は赤と黃に塗り分けてあるが、黃色い方の漆が半分程落ちて木地が全く出てゐる。御菜には糸蒟蒻が一皿附いてゐた。自分は伏目になつて此御膳の光景を見渡した時、大いに食ひたくなつた。實は今朝から水一滴も口へ入れてゐない。胃は全く空である。もし空でなければ、昨日食つた揚饅頭と薩摩芋がある許りである。飯の氣を離れる事約二晝夜になるんだから、如何に魂が萎縮してゐる此の際でも、御櫃の影を見るや否や食慾は猛然として咽喉元迄詰め寄せて來た。そこで、冷かしも、交ぜつ返しも氣に掛ける暇なく、見榮も糸瓜も棒に振つて、いきなり、お

櫃からしやくつて茶碗へ一杯盛り上げた。其の手數さへ面倒な位待ち遠しい程であつたが、例の剝箸を取り上げて、茶碗から飯をすくひ出さうとする段になつて――おやと驚いた。些ともすくへない。指の股に力を入れて箸をうんと底迄突つ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、矢張り駄目だ。飯はつる〳〵と箸の先から落ちて、決して茶碗の緣を離れ樣としない。十九年來未だ曾てない經驗だから、あまりの不思議に、此の仕損を二三度繰り返して見た上で、はてなと箸を休めて考へた。恐らく狐に撮まれた樣な風であつたんだらう。見てゐた坑夫共は又ぞろ、どつと笑ひ出した。自分は此の聲を聞くや否や、いきなり茶碗を口へ附けた。さうして光澤のない飯を一口搔き込んだ。すると笑ひ聲よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上丈へ魂が宿つたと思ふ位に變な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。此の壁土が唾液に和けて、口一杯に廣がつた時の心持は云ふに云はれなかつた。

「面あ見ろ。いゝ樣だ」

と一人が云ふと、

「御祭日でもねえのに、銀米の氣で居やがらあ。だから歸れつて教えてやるのに」

と他のものが云ふ。

「南京米の味も知らねえで、坑夫にならうなんて、頭つから料簡違だ」

と又一人が云つた。

自分は嘲弄のうちに、術なく此の南京米を呑み下した。一口で已め樣と思つたが、折角盛り込んだものを、食つて仕舞はないと、又冷かされるから、熊の膽を呑む氣になつて、茶碗に盛つた丈は奇麗に腹の中

へ入れた。全く食慾の爲ではない。昨日食つた揚饅頭や、ふかし芋の方が、どの位御馳走であつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れて是が始てゞある。

茶碗に盛つた丈は、かう云ふ譯で、どうにか、かうにか片附たが、二杯目は我慢にも盛ふ氣にならなかつたから、糸蒟蒻丈を食つて箸を置く事にした。此の位辛抱して無理に厭なものを口に入れてさへ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。其の時は隨分つらい事と思つたが、其後日に三度宛は、必ず此の南京米に對はなくつちやならない身分となつたんで、流石の壁土も慣れるに連れて、所謂銀米と同じく、人類の食ひ得べきもの、否食つて然るべき滋味と心得る樣になつてからは、剝膳に向つて逡巡した當時が却て恥づかしい氣持になつた。坑夫共の冷かしたのも萬更無理ではない。今となると、こんな無經驗な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病む所に遇り合はせて、現狀を目擊したら、ことに因ると、自分でさへ、笑ふかも知れない。冷かさない迄も、善意に笑ふ丈の價値は十分あると思ふ。人は色々に變化するもんだ。

南京米の事許り書いて濟まないから、もう已めにするが、此の時自分の失敗に對する冷評は、自然の儘にして抛つて置いたなら、何處まで續いたか分らない。所へ急に金盥を叩き合せる樣な音がした。一度ではない。二度三度と聞いてるうちに、ぢやん〱、ぢやららんと時を句切つて、拍子を取りながら叩き立てゝ來る。すると今度は木唄の聲が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知つてる限りでは、まあ木唄と云ふのが一番近い樣に思はれる。此時冷評は一時に已んだ。ひつそりと靜まり返る山の空氣に、ぢやん〱、ぢやららんが鳴り渡る間を、一種異樣に唄ひ囃して何物か近づいて來た。

「ジャンボーだ」

と一人が膝頭を打たない許に、大きな聲を出すと、

「ジャンボーだ。ジャンボーだ」

と大勢口々に云ひながら、黒い塊がばら〳〵になつて、窓の方へ立つて行つた。自分は何がジャンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、氣分が急に暢達した所爲か、自分もジャンボーを見度と云ふ餘裕が出來て、餘裕につれて元氣も出來た。つく〴〵考へるに、人間の心は水の樣なもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲をとつて暮らしてゐると云つても差支なからう。夫れで、みんなが立ち盡したあとから、自分も立つた。さうして矢つ張り窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がつてゐる上から脊伸をして見下すと、斜に曲つてる向の石垣の角から、紺の筒袖を着た男が二人出た。あとから又二人出た。是れはいづれも金盥を壓しつぶして薄つ片にした樣なものを兩手に一枚宛持つて居る。はゝあ、あれを叩くんだと思ふ拍子に、二人は兩手をぢや〳〵んと打ち合はした。其の不調和な音が切つ立つた石垣に突き當つて、後の禿山に響いて、まだ已まないうちに、ぢやらんと又一組が後から鳴らし立てゝ現れた。たと思ふと又現れる。今度は金盥を持つてゐない。其の代り木唄ーーさつきは木唄と云つた。然し此の時、彼等の揚げた聲は、木唄と云はんよりは寧ろ浪花節で吶喊する樣な稀代な調子であつた。

「おい金公は居ねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴つた。後向だから顏は見えない。すると、

「うん金公に見せて遣れ」

とすぐ應じた者がある。此の言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりと此方を向いた。自分は又何か云はれる事と覺悟して仕方なしに、今迄の態度で立つてゐると、不思議にも振り返つた眼は自分の方に着いて居ない。廣い部屋の片隅に遠く走つた樣子だから、何物がゐる事かと、自分も後を追つ懸けて、首を捻ぢ向けると、――寐てゐる。薄い布團をかけて一人寐てゐる。

「おい金州」

と一人が大きな聲を出したが、寐て居るものは返事をしない。

「おい金しう起きろやい」

と怒鳴つける樣に呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人許窓を離れてとう〱迎に出掛た。被つてる布團を手荒にめくると、細帶をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云ふ聲も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支へられて立ち上つた。さうして此方を向いた。其の時、其の刹那、其の顏を一目見た許りで自分は思はず慄とした。是れは只保養に寐てゐた人ではない。全くの病人である。しかも自分丈で起居の出來ない樣な重體の病人である。年は五十に近い。髯は幾日も剃らないと見えてぼう〱と延びた儘である。如何な獰猛も、かう憔悴ると憐れになる。憐れになり過ぎて、逆に又怖くなる。自分が此の顏を一目見た時の感じは憐れの極全く怖かつた。

病人は二人に支へられながら、釣れる樣に、利ない足を運ばして、窓の方へ近寄つてくる。此の有樣を見てゐた、窓際の多人數は、さも面白さうに囃し立てる。

「よう、金しう早く來いよ。今ジヤンボーが通る所だ。早く來て見ろよ」
「己あジヤンボーなんか見たかねえよ」
と病人は、無體に引き摺られながら、氣のない聲で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。忽ち窓の障子の角迄摩し附けられて仕舞つた。
ぢや〳〵ん、ぢやららんとジヤンボーは知らん顏で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ盡きないのかと、又脊延びをして見下した時、自分は再び慄とした。金盥と金盥の間に、四角な早桶が挾まつて、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾で包んで、細い杉丸太を通した兩端を、水でも一荷賴まれた樣に、容赦なく擔いでゐる。其擔いでゐるもの迄も、此方から見ると、例の唄を陽氣にうたつてる樣に思はれる。――自分は此の時始めてジヤンボーの意味を理解した。生涯如何なる事があつても、決して忘れられない程痛切に理解した。ジヤンボーは葬式である。坑夫、シチウ、掘子、山市に限つて執行される、又執行されなければならない一種の葬式である。御經の文句を浪花節に唄つて、金盥の潰れる程に音樂を入れて、一荷の水と同じ樣に棺桶をぶらつかせて――最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否と云ふのを抑へ附ける許りにして迄見せてやる葬式である。まことに無邪氣の極で、又冷刻の極である。
「金しう、どうだ、見えたか、面白いだらう」
と云つてる。病人は、
「うん、見えたから、床ん所迄連れてつて、寢かして呉れよ。後生だから」
と賴んでゐる。さつきの二人は再び病人を中へ挾んで、

「よつしよい〳〵」

と云ひながら、刻み足に、布團の敷いてある所迄連れて行つた。

此の時曇つた空が、粉になつて落ちて來たかと思はれる樣な雨が降り出した。ジャンボーは此の雨の中を敲き立てゝ町の方へ下つて行く。大勢は

「又雨だ」

と云ひながら、窓を立て切つて、各々圍爐裏の傍へ歸る。此の混雜紛に自分も何時の間にか獰猛の仲間入りをして、火の近所迄寄る事が出來た。是れは偶然の結果でもあり、又故意の所作でもあつた。と云ふものは火の氣がなくつては甚だ寒い。袷一枚では迚も凌ぎ兼ねる程の山の中だ。それに雨さへ降り出した。雨と云へば雨、霧と云へば霧と云はれる位な微かな粒であるが、四方の禿山を罩め盡した上に、筒拔けの空を塗り潰して、しとゞと落ちて來るんだから、家の中に坐つて居てさへ、糠よりも小さい濕り氣が、毛穴から腹の底へ沁み込む樣な心持である。火の氣がなくつては到底遣り切れるものぢやない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、暖かながら圍爐裏のほとぼりを顔に受けてゐると、今度は存外にも度外視されて、思つたよりも調戯れずに濟んだ。是れは此方から進んで獰猛の仲間入りをした爲、向ふでも普通の獰猛として取扱ふべき奴だと勘辨してくれたのか、それとも先刻のジャンボーで不意に氣が變つた成行として、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、又は冷笑の種が盡きたか、或は毒突のに飽きたんだか、――何しろ自分が席を改めてから、自分の氣は比較的樂になつた。さうして圍爐裏の傍の話は矢つ張りジャンボーで持ち切つてゐた。色々な聲がこんな事を云ふ。――

「あのジャンボーは何處から出たんだらう」
「何處から出たつて御ジャンボーだ」
「ことによると黑市組かも知れねえ。見當がさうだ」
「全體ジャンボーになつたら何處へ行くもんだらう」
「御寺よ。極つてらあ」
「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」
「さうよ、そりや寺限で留りつ子ねえ譯だ。何處へ行くに違えねえ」
「だからよ。其行く先はどんな所だらうてえんだ。矢張こんな所かしら」
「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」
「己もさう思つてる。行くとなりや、どうも外へ行く譯がねえからな」
「いくら地獄だつて極樂だつて、矢つ張り飯は食ふんだらう」
「女もゐるだらうか」
「女のゐねえ國が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いてゐると滅茶々々である。それで始めのうちは冗談だと思つた。笑つても差支ないものと心得て、口の端をむづゝかせながら、一寸樣子を見渡した位であつた。所が笑ひたいのは自分丈で、圍爐裏を取り捲いてゐる顏はいづれも、彫り附けた樣に堅くなつてゐる。彼等は眞劍の眞面目で未來と云ふ大問題を論じてゐるたんである。實に嘘としか受け取れない程の熱心が、各々の眉の間に

見えた。自分は此の時、此の有樣を一瞥して、さつきの笑ひたかつた念慮を忽ちのうちに一變した。こんな向ふ見ずの無鐵砲な人間が――カンテラを提げて、シキの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡でゐる人間が――人間の器械で、器械の獸とも云ふべき此の獰猛組が、かほどに未來の事を氣にしてゐる樣とは、まことに豫想外であつた。して見ると、世間には、未來の保護をしてくれる宗教といふものが入用の筈だ。實際自分が眼を上げて、圍爐裏のぐるりに胡坐をかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮が手傳つて、七分方出來上つた笑ひを急に崩したと云ふ自覺は無論なかつた。只寄席を聞いてゐる積で眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門樣が大勢居て、是はと威儀を正さなければならない氣持であつた。一口に云ふと、自分は此の時始めて、眞面目な宗教心の種を見て、半獸半人の前にも嚴格の念を起したんだらう。其の癖自分は未だに宗教心と云ふものを持つてゐない。

此時さつきの病人が、向ふの隅でううんと唸り出した。其唸り聲には無論特別の意味はない、單に普通の病人の唸り聲に過ぎんのだが、ジヤンボーの未來に屈託してゐる連中には、一種のあやしい響の樣に思はれたんだらう。みんな眼と眼を見合した。

「金公苦しいのか」

と一人が大きな聲で聞た。病人は、ただ、

「ううん」

と云ふ。唸つてるのか、返事をしてるのか判然しない。すると又一人の坑夫が、

「そんなに噂の事ばかり氣にするなよ。どうせ取られちまつたんだ。今更唸つたつてどうなるもんか。

質に入れた嚊だ。受出さなけりや流れるなあ當り前だ」
と、矢つ張り圍爐裏の傍へ坐つた儘、大きな聲で慰めてゐる。慰めてゐるんだか、惡口を吐いてゐるんだか疑はしい位である。坑夫から云ふと、何方も同じ事なんだらう。病人はたゞううんと挨拶——挨拶にもならない聲を微かに出す許りであつた。そこで大勢は懸合にならない慰藉を已めて、圍爐裏の周圍丈で舌の用を辨じてゐた。然し話題はまだ金さんを離れない。
「なあに、病氣せへしなけりや、金公だつて嚊を取られずに濟むんだあな。元を云やあ、矢つ張り自分が惡いからよ」
と一人が、金さんの病氣をさも罪惡の樣に評するや否や、
「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、其の金が返せねえから、嚊を抵當に取られちまつたんだから、正直の所文句の附け樣がねえ」
と贊成したものがある。
「若干で抵當に入れたんだ」
と聞くと、向側から、
「五兩だ」
と誰だか、簡潔に敎へた。
「それで市の野郎が長屋へ下がつて、金しうと入れ代つた譯か。ハヽヽヽ」
自分は圍爐裏の側に坐つてるのが苦痛であつた。春中の方がぞく／＼する程寒いのに、腋の下から汗が

出る。

「金しうも早く癒つて、嚊を受け出したら好からう」

「又、市と入れ代りか。世話あねえ」

夫よりか、うんと稼いで、もつと價に踏める抵當でも取つた方が、氣が利いてらあ」

「違ねえ」

と一人が云ひ出すのを相圖に、みんなどつと笑つた。自分は此笑の中に包まれながら、どうしても笑ひ切れずに下を向いて仕舞つた。見ると膝を並べて畏まつてゐた。馬鹿らしいと氣が附いて、胡坐に組み直して見た。然し腹の中は決して胡坐をかく程悠長ではなかつた。

其の内段々日暮に近くなつて來る。時間が移る許りぢやない。天氣の具合と、山が圍んでる所爲で早く暗くなる。默つて聞いてゐると、雨垂の音もしない樣だから、ことによると、雨はもう歇んだのかも知れない。然し此の暗さでは、矢つ張り降つてると云ふ方が當るだらう。窓は固り締め切つてある。戸外の模樣は分り樣がない。然し暗くつて濕ッぽい空氣が障子の紙を透して、一面に圍爐裏の周圍を襲つて來た。並んでる十四五人の顔が次第々々に濛然する。同時に圍爐裏の眞中に山の樣にくべた炭の色が、ほてり返つて、少し宛赤く浮き出す樣に思はれた。丸で、自分は坑の底へ滅入込んで行く、火は之に反して坑から段々競り上がつて來る、――ざつと、そんな氣分がした。時にぱつと部屋中が明るくなつた。見ると電氣燈が點いた。

「飯でも食ふべえ」

と一人が云ふと、みんな忘れものを思ひ出した樣に、

「飯を食つて、又交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降つてるのか」

「どうだか、表へ出て仰向て見な」

抔と、口々に罵り乍ら、立つて、階子段を下りて行つた。自分は廣い部屋にたつた一人殘された。自分の外にゐるものは病人の金さん許りである。此の金さんが矢つ張り微な聲を出して唸つてる樣だ。自分は圍爐裏の前に手を翳して胡坐を組みながら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出てゐない。足も引つ込ましてゐる。金さんの身體は一枚の布團の中で、小さく平つたくなつてゐる。氣の毒な程小さく平つたく見えた。其の内唸り聲も、どうにか、かうにか已んだ樣だから、又顏の向を易へて、圍爐裏の中を見詰めた。所がなんだか金さんが氣に掛かつて堪らないから、又横を向いた。すると金さんは矢つ張り一枚の布團の中で、小さく平つたくなつてゐる。さうして、森としてゐる。生きてるのか、死んでるのか、たゞ森としてゐる。唸られるのも、あんまり氣味の好いもんぢやないが、かう靜かにしてゐられると猶心配になる。心配の極は怖くなつて、一寸立ち懸けたが、まあ大丈夫だらう、人間はさう急に死ぬもんぢやないと、度胸を据ゑてまた尻を落ち附けた。

所へ二三人、下からどや〳〵と階子段を上がつて來た。もう飯を濟ましたんだらうか、それにしては非常に早いがと、心持上がり段の方を眺めてゐると、思も寄らないものが、現れた。——黑か紺か色の判然

しない筒服を着てる。足は職人の穿く様な細い股引で、色は矢張り同じ紺である。それでカンテラを提げてる。のみならず二人が二人とも泥だらけになつて、濡れてる。さうして、口を利かない。突つ立つた儘自分の方をぎろりと見た。丸で強盗としきあ思へない。やがて、カンテラを抛り出すと、釦を外して、筒袖を脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある廣袖を、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、矢つ張り無言の儘、二人してずしり〱と降りて行つた。すると又上がつて來た。今度のも濡れてる。泥だらけである。カンテラを抛り出す。着物を着換へる。ずしん〱と降りて行く。と又上がつて來る。かう云ふ風に入代り、入代りして、何でも餘程來た。いづれも底の方から眼球を光らして、一遍丈は屹度自分を見た。中には、

「手前は新前だな」

と云つたものもある。自分は只、

「えゝ」

と答へて置いた。幸ひ今度はさつきの様に無暗には冷やかされずに、まあ無難に濟んだ。上がつて來るものも、來るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯ふ暇がなかつたんだらう。其の代り一人に一度宛は必ず睨まれた。さうかうしてる内に、上がつて來るものが漸く絶えたから、自分は漸く寛容だ思ひをして、圍爐裏の炭の赤くなつたのを見詰めて、色々考へ出した。勿論纏まり様のない。且考へれば考へる程馬鹿になる考へだが、火を見詰てると、炭の中にさう云ふ妄想がちら〱ちら〱燃えてくるんだから仕方がない。とう〱自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣に煽られながら、無暗に踊ををどつてる

樣な變な心持になつた時に、突然、
「草臥れたらうから、もう御休みなさい」
と云はれた。
見ると、さつきの婆さんが、立つてゐる。矢張襷掛の儘である。何時の間に上がつて來たものか、些とも氣が附かなかつた。自分の魂が遠慮なく火の中を馳け廻つて、艶子さんになつたり、澄江さんになつたり、親爺になつたり、金さんになつたり、――被布やら、厢髪やら、赤毛布やら、唸り聲やら、揚饅頭やら、華嚴の瀧やら――幾多無數の幻影が、圍爐裏の中に躍り狂つて、立ち騰る火の氣の裏に追つ追れつ、日向に浮ぶ塵と思はれる迄夥しく出て來た最中に、はつと氣が附いたんだから、眼の前にゐる婆さんが、不思議な位變であつた。然し寐ろと云ふ注意丈は明かに耳に聞えたに違ないから、自分はたゞ、
「えゝ」
と答へた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、
「布團は、あすこに這入つてるから、獨で出して御掛けなさい。一枚三錢づゝだ。寒いから二枚は入るでせう」
と聞くから、又
「えゝ」
と答へたら、婆さんは、夫れ限何にも云はずに、降りて行つた。是れで、自分は寐てもいゝと云ふ許可を得たから、正式に横になつても劍突を食ふ恐れはあるまいと思つて、婆さんの指圖通り戸棚を明けて見る

と、あつた。布團が澤山あつた。然しいづれも薄汚いもの許りである。自宅で敷いてゐたのとは丸で比較にならない。自分に一番上に乘つてるのを二枚、そつと卸した。さうして、電氣燈の光で見た。地は淺黄である。模樣は白である。其の上に垢が一面に塗り附けてあるから、六分方色變りがして、白い所抔は、通例なら我慢の出來にくい程どろんと、化けてゐる。其の上頗る堅い。搗き立ての伸し餅を、金巾に包んだ樣に、綿は綿でかたまつて、表布とは丸で緣故がない程の、こち〳〵したものである。

自分は此布團を疊の上へ平く敷いた。それから殘る一枚を平く掛けた。さうして、襯衣丈になつて、其の間に潛り込んだ。濕つぽい中を割り込んで、兩足をうんと伸ばしたら踵が疊の上へ出たから、又心持引つ込ました。延ばす時も曲げる時も、不斷の樣に輕くしなやかには行かない。みしりと音がする程、關節が窮屈に硬張つて、動きたがらない。じつとして、布團の中に膝頭を横たへてゐると、倦怠のを通り越して重い。腿から下を切り取つて、其の代りに筋金入りの義足を附けられた樣に重い。丸で感覺のある二本の棒である。自分は冷たくつて重たい足を苦に病んで、頭を布團の中に突つ込んだ。せめて頭丈でも暖にしたら、足の方でも折れ合つて呉れるだらうとの、果敢ない望みから出た窮策であつた。

然し流石に疲れてゐる。寒さよりも、足よりも、布團の臭ひよりも、煩悶よりも、厭世よりも――疲れてゐる。實に死ぬ方が樂な程疲れ切つてゐた。それで、横になるとすぐ――疊から足を引つ込まして、頭を布團に入れる丈けの所作を仕遂げたと思ふが早いか、眠て仕舞つた。ぐう〳〵正體なく眠て仕舞つた。

是から先きは自分の事ながら到底書けない。……

すると、突然針で脊中を刺された。夢に刺されたのか、起きてゐて、刺されたのか、感じは頗る曖昧で

あつた。だからそれ丈の事ならば、針だらうが刺だらうが、頓着はなかつたらう。正氣の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覺の床の下に埋めてしまふ分の事である。所がさうは行かなかつた。と云ふものは、刺されたなと思ひながらも、針の事を忘れる程にうつとりなると、又一つ、ちくりと遣られた。

今度は大きな眼を開いた。所へ又ちくりと來た。おやと驚く途端に又ちくりと刺した。是れは大變だと漸く氣が附きかけに、飛び上る程劇しく股の邊を遣られた。自分は此の時始めて、普通の人間に歸つた。さうして身體中至る所がちく〳〵してゐるのを發見した。そこでそつと襯衣の間から手を入れて、脊中を撫でゝ見ると、一面にざら〳〵する。最初指先が肌に觸れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹つたんだと思つた。所が指を肌に着けた儘、二三寸引いて見ると、何だか、ばら〳〵と落ちた。是れは只事でないと忽ち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら圍爐裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押へた、米粒程のものを、檢査して見ると、異樣の蟲であつた。實は此の時分には、まだ南京蟲を見た事がないんだから、果して是れがさうだとは斷言出來なかつたが――何だか直覺的に南京蟲らしいと思つた。かう云ふ下卑た所に直覺の二字を濫用しては濟まんが、外に言葉がないから、已を得ず高尚な術語を使つた。偖其の蟲を檢査してゐるうちに、非常に惡らしくなつて來た。圍爐裏の縁へ乘せて、ぴちりと親指の爪で壓し潰したら、云ふに云はれぬ青臭い蟲であつた。此の青臭い臭氣を嗅ぐと、何となく好い心持になる。――自分はこんな醜い事を眞面目にかゝねばならぬ程狂違染みてゐた。實を云ふと、此の青臭い臭氣を嗅ぐ迄は、恨を霽らした樣な氣がしなかつたのである。それだから捕つては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の

爪を鼻へあてがつて嗅いでゐた。すると鼻の奥へ詰つて來た。今にも涙が出さうになる。非常に情ない。それだのに、爪を嗅ぐと愉快である。此の時二階下で大勢が一度にどつと笑ふ聲がした。自分は急に蟲を潰すのを已めた。廣間を見渡すと誰もゐない。金さん丈が、平たくなつて靜かに寐てゐる。頭も足も見えない。其の外にたつた一人ゐた。尤も始めて氣が附いた時は人間とは思はなかつた。向ふの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿の樣なものを白く渡して、其の幅のなかに包まつてゐたから、何だか氣味が惡かつた。然しよく見ると、白い中から黑いものが斜に出てゐる。さうして夫が人間の毬栗頭であつた。——廣い部屋には、自分と此の二人を除いて、誰もゐない。たゞ電氣燈がかん〳〵點いてゐる。大變靜かだ、と思ふと又下座敷でわつと笑つた。さつきの連中か、又は作業を濟まして歸つて來たものが、大勢寄つて巫山戲散らしてゐるに違ない。自分は茫乎して布團のある所迄歸つて來た。さうして裸體になつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帶を締めて、一番仕舞に敷いてある布團を叮嚀に疊んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時だか、夜は到底まだ明けさうにしない。腕組をして立つて考へてゐると、足の甲が又むづ〳〵する。自分は堪へ切れずに、

「えつ畜生」

と云ひながら二三度小踴をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦つて、左の足の甲で右の上を擦つて、是れでもかと齒軋をした。しかし表へ飛び出す譯にも行かず、寐る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固りない。先き毒突かれた事を思ひ出すと、南京蟲より餘つ程厭だ。夜が明ければいゝ、夜が明ければいゝと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。すると其

處に柱があつた。自分は立ちながら、此柱に倚つ掛つた。脊中を附けて腰を浮かして、足の裏で身體を持たしてゐると、兩足がずる／＼疊の目を滑つて段々遠くへ行つちまふ。夫れから又眞直に立つ。又ずるずる滑る。又立つ。まづ斯んな事をしてゐた。幸ひ南京蟲は出て來なかつた。下では時々どつと笑ふ。

居ても立つてもと云ふのは喩だが、其の居ても立つてもを、實際に經驗したのは此の時である。だから坐るとも立つとも方の附かない運動をして、中途半端に紛らかしてゐた。所が其の運動をいつ迄根氣に遣つたものか覺えてゐない。いとゞ疲れてゐる上に、猶手足を疲らして、いかな南京蟲でも應へない程疲れ切つたんで、始めて寐たもんだらう。夜が明けたら、自分が摺り落ちた柱の下に、足だけ延ばして、脊を丸く蹲踞つてゐた。

是れ程苦しめられた南京蟲も、二日三日と過つにつれて、段々痛くなくなつたのは妙である。其の實、一箇月許りしたら、いくら南京蟲が居やうと、丸で米粒でも、ぞろ／＼轉がつてる位に思つて、夜はいつでも、ぐつすり安眠した。尤も南京蟲の方でも口數を積むに從つて遠慮してくるさうである。其證據には新來のお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛めるが、少し辛抱してゐると、向ふから、愛想をつかして、あまり寄り附かなくなるもんだと云ふ。毎日食つてる人間の肉は自然鼻につくからだとも教へたものがあるし、いや肉の方に夫丈の品格が出來て、シキ臭くなるから、蟲も恐れ入るんだとも說明したものがある。さうして見ると此處の南京蟲と坑夫とは、性質が能く似てゐる。恐らく坑夫許りぢやあるまい、一般の人類の傾向と、此南京蟲とは矢張り同樣の心理に支配されてるんだらう。だから此解釋は人間と蟲けらを概括する所に面白味があつて、哲學者の喜びさうな、美しいものであるが、自分の考へを云ふと全く

さうぢやないらしい。蟲の方で氣兼をしたり、贅澤を云つたりするんぢやなくつて、食はれる人間の方で習慣の結果、無神經になるんだらうと思ふ。蟲は依然として食つてるが、食はれても平氣でゐるに違ない。尤も食はれて感じないのも、食はれなくつて感じないのも、趣こそ違へ、結果は同じ事であるから、是は實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の辯は、どうでもいゝとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れてゐた。下ではもうがや／＼云つてゐる。嬉しかつた。窓から首を出して見ると、又雨だ。尤も判然とは降つてゐない。雲の濃いのが糸になり損なつて、なつた丈が、細く地へ落ちる氣色だ。だから無暗に濛々とはしてゐない。次第々々に雨の方に片附いて、片附に從つて糸の間が透いて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏しい、潤のない山である。これが夏の日に照り附けられたら、山の奥でも嘸暑からうと思はれる程赤く禿げてぐるりと自分を取り捲いてゐる。さうして殘らず雨に濡れてゐる。潤ひ氣のないものが、濡れてゐるんだから、土器に霧を吹いた樣に、いくら濡れても濡れ足りない。其の癖寒い氣持がする。それで自分は首を引つ込め樣としたら、一寸眼についた。――手拭を被つて、藁を腰に當てゝ、筒服を着た男が二三人、向ふの石垣の下にあらはれた。丁度昨日ジャンボーの通つた路を逆に歩いて來る。遠くから見ると、如何にもしよぼ／＼して氣の毒な程憐れである。自分も今朝からあゝなるんだなと、不圖氣が附いて見ると、人事とは思はれない程、向へ行く手拭の影――雨に濡れた手拭の影が情なかつた。すると雨の間から又古帽子が出て來た。其の後から又筒袖姿があらはれた。何でも朝の番に當つた坑夫がシキへ這入る時間に相違ない。自分は漸く窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度

にどや／＼と階子段を上つて來る。來たなと思つたが仕方がないから懷手をして、柱にもたれてゐた。五六人は見る間に、同じ出立に着更へて下りて行つた。後から又上がつてくる。又筒袖になつて下りて行く。とう／＼飯場にゐる當番は悉く出拂つた樣だ。

から飯場中活動して來ると、自分も安閑としちや居られない。と云つて誰も顏を御洗ひなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云ひに來て呉れない。いかな坊つちやんも、あまり手持無沙汰過ぎて困つちまつたから、思ひ切つて、のこ／＼下りて行つた。心は無論落附いちやゐないが、態度丈は丸で宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客の樣であつた。いくら恐縮しても自分には、是れより以外の態度が出來ないんだから仕くの生息子である。下て見ると例の婆さんが、襷がけをして、草鞋を一足ぶら下げて奥から驅けて來た所へ、ぱつたり出逢つた。

「顏は何處で洗ふんですか」

と聞くと、婆さんは、一寸自分を見たなりで

「あつち」

と云ひ捨てゝ門口の方へ行つた。丸で相手にしちや居ない。自分にはあつちの見當がわからなかつたが、兎に角婆さんの出て來た方角だらうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな臺所へ出た。眞中に四斗樽を輪切にした樣なお櫃が据ゑてある。あの中に南京米の炊いたのが一杯詰つてゐるのかと思つたら、――何しろ自分が三度々々一箇月食つても食ひ切れない程の南京米なんだから、食はない前からうんざりしちまつた。――顏を洗ふ所も見附けた。臺所を下て長い流の前へ立つて、冷たい水で、申し譯の爲に頰邊を

撫でゝ置いた。かうなると叮嚀に顔なんか洗ふのは馬鹿々々しくなる。これが一歩進むと、顔は洗はなくつても宜いものと度胸が坐つてくるんだらう。昨日の赤毛布や小僧は全くかう云ふ順序を踏んで進化したものに違ない。

顔は漸く自力で洗つた。飯はどうなる事かと、又のそ〳〵臺所へ上つた。所へ幸ひ婆さんが表から歸つて來て膳立てをしてくれた。難有い事に味噌汁が付いてゐたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、さく〳〵と掻き込だんで、今度は壁土の味を嚙み分ないで濟んだ。すると婆さんが、

「御飯が濟んだら、初さんがシキへ連れて行くつて待つてるから、早く御出なさい」

と、箸も置かない先から急き立てる。實はもう一杯位食はないと身體が持つまいと思つてた所だが、かう催促されて見ると、無論御代りなんか盛う必要はない。自分は、

「はあ、さうですか」

と立ち上がつた。表へ出て見ると、成程上り口に一人掛けてゐる。自分の顔を見て、

「御前か、シキへ行くなあ」

と、石でも打つ缺く樣な勢ひで聞いた。

「えゝ」

と素直に答たら、

「ぢや、一所に來ねえ」

と云ふ。

「此服裝でも好いんですか」

と叮嚀に聞き返すと、

「不可ねえ、不可ねえ。そんな服裝で這入るもんか。此處へ親分とこから一枚借りて來てやつたから、此服を着るがいゝ」

と云ひながら、例の筒袖を抛り出した。

「そいつが上だ。こいつが股引だ。そら」

と又股引を抛げつけた。取りあげて見ると、じめ〳〵する。所々に泥が着いてゐる。地は小倉らしい。自分もとう〳〵此御仕着を着る始末になつたんだなと思ひながら、絣を脱いで上下とも紺揃になつた。一寸見ると內閣の小使の樣だが、心持から云ふと、小使を拜命した時よりも遙に不景氣であつた。是で支度は出來たものと思込んで土間へ下ると、

「おつと待つた」

と、初さんが又勇み肌の聲を掛けた。

「是を尻の所へ當てるんだ」

初さんが出して呉れたものを見ると、三斗俵坊つちの樣な藁布團に紐を附けた變挺なものだ。自分は初さんの云ふ通り、是を臀部へ縛り附けた。

「それが、アテシコだ。好しか。夫から鑿だ。こいつを腰ん所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取つて見ると、長さ一尺四五寸もあらうと云ふ鐵の棒で、先が少し尖つてゐる。

是を腰へ差す。

「序に是も差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。確り受け取らねえと怪我をする」

成程重い。こんな槌を差して能く坑の中が歩けるもんだと思ふ。

「どうだ重いか」

「えゝ」

「それでも輕いうちだ。重いのになると五斤ある。――いゝか、差せたか、そこで一寸腰を振つて見な。大丈夫か。大丈夫なら是を提げるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待つたり。カンテラの前に一つ草鞋を穿いちまいねえ」

草鞋の新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ら下げてたのは、大方是れだらう。自分は素足の上へ草鞋を穿いた。緒を踵へ通してぐつと引くと、

「鈍癡だなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指の股を寛めろい」

と叱られた。叱られながら、どうにか、かうにか穿いて仕舞ふ。

「さあ、是れで愈御仕舞だ」

と初さんは饅頭笠とカンテラを渡した。饅頭笠と云ふのか筍笠といふのか知らないが、何でも懲役人の被る樣な笠であつた。其の笠を神妙に被る。それからカンテラを提げた。此のカンテラは提げる樣に出來てゐる。恰好は二合入りの石油鑵とも云ふべきもので、そこへ油を注す口と、心を出す孔が開いてる上に、

細長い管が食つ附いて、其の管の先が一寸横へ曲がると、すぐ膨らんだかゝぷカップになる。此のかゝぷカップへ親指を突つ込で、其の親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を濟ます甚だ實用的のものである。

「かう、穿めるんだ」

と初さんが、勝栗の樣な親指を、かんてらカンテラの孔の中へ突込んだ。旨い具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、かんてらカンテラを柱時計の振子の樣に、二三度振つて見せた。中々落ちない。そこで自分も、同じ樣に、調子をとつて搖して見たが矢つ張り落ちなかつた。

「左樣だ。中々器用だ。ぢや行くぜ、いゝか」

「えゝ、好ござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。雨が降つてゐる。一番先へ笠へあたつた。仰向いて、空模樣を見やうとしたら、顎と、口と、鼻へほつ〳〵とあたつた。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身體中じめ〳〵して、肌へ拔けた濕氣が、皮膚の活氣で蒸し返される。然し雨の方が寒いんで、身體のほとぼりが段々冷めて行く樣な心持であつたが、坂へかゝると初さんが無暗に急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を彈き出す勢ひで、とう〳〵いゝシキの入口迄來た。

入口はまづ汽車の隧道の大きいものと云つて宜しい。蒲鉾形の天邊は二間位の高さはあるだらう。中から軌道が出て來る所も汽車の隧道に似てゐる。是れは電車が通ふ路なんださうだ。自分は入口の前に立つて、奥の方を透かして見た。奥は暗かつた。

「どうだ此處が地獄の入口だ。這入るか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄の語氣を帶びてゐる。さつき飯場を出て、此處まで來る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日のだ」

「新來だ」

と口々に罵つてゐたが、其の樣子を見ると單に山の中に閉ぢ込められて物珍らしさの好奇心とは思へなかつた。其の言葉の奥底には屹度愚弄の意味がある。之を布衍して云ふと、一つには貴樣もとう／＼斯んな所へ轉げ込んで來た、いゝ氣味だ、樣あ見ろと云ふ事になる。もう一つは、御氣の毒だが來たつて駄目だよ。そんな脂つこい身體で何が勤まるものかと云ふ事にもなる。だから「昨日のだ」「新來だ」と騒ぐうちには、自分が彼等と同樣の苦痛を嘗めなければならない程墮落したのを快く感ずると共に、到底此の苦痛には堪へがたい奴だとの輕蔑さへ加はつてゐる。彼等は他人を彼等と同程度に引き摺り落して喝采するのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足の下迄蹴落して、墮落は同程度だが、墮落に堪へる力は彼等の方が却て上だとの自信をほのめかして滿足するらしい。自分は途上「昨日のだ」と聞くたんびに、懲役笠で顏を半分隱しながら通り抜けて、シキの入口迄來た。そこで初さんが又愚弄したんだから、自分は少しむつとして、

「這入れますとも。電車さへ通つてるぢやありませんか」

と答へた。すると初さんが、

「なに這入れる？豪義な事を云ふない」
と云つた。こゝで「這入れません」と恐れ入つたら、「それ見ろ」と直こなされるに極つてる。どつちへ轉んでも駄目なんだから別に後悔もしなかつた。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も續いて這入つた。這入つて見ると、思つたよりも急に暗くなる。何だか足元がおつかなくなり出したには降參した。雨が降つてゐても外は明かるいものだ。其の上軌道の上はとにかく、兩側は頗る泥つてる。それだのに初さんは中つ腹でずん／＼行く。自分も負けない氣でずん／＼行く。

「シキの中で大人しくしねえと、すのこの中へ抛り込まれるから、用心しなくつちあ不可ねえ」
と云ひながら初さんは突然暗い中で立ち留つた。初さんの腰には鑿がある。五斤の槌がある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」
と返事をした。

「よしか、分つたか。生きて出る料簡なら生意氣にシキなんかへ這入らねえ方が増しだ」
是れは向ふむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は獨り言の樣に話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑の中は反響が強いので、初さんの言葉がわん／＼／＼と自分の耳へ跳ねつ返つて來る。果して初さんの言ふ通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。實は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫にならうと云ふ氣も起して見たんだが、本當に死ぬなら――こんな怖い商賣なら――殺されるんなら――すのこの中へ抛げ込まれるなら――すのことは全體どんなもんだらうと思ひ出した。

「すのことは何んなもんですか」

「なに？」

と初さんが後を振り向いた。

「すのことは何んなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。――鑛を拋り込んで、纒めて下へ降げる穴だ。鑛と一所に拋り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つて又ずん〳〵行く。

自分は一寸立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月の樣に見える。這入るときは、是れがシキならと思つた。聞いた程でもないと思つた。所が初さんに威嚇かされてから、如何な平凡な隧道も、大いに容子が變つて來た。懲役笠をたゝく冷たい雨が戀しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月の樣に見える。小さい月の樣に見える程奥へ這入つたなと、振り返つて始めて氣が附いた。いくら曇つてゐても矢つ張り外が懷かしい。眞黑な天井が上から抑へ附けてるのは心持のわるいものだ。しかも此天井が段々低くなつて來る樣に感ぜられる。と思ふと、軌道を横へ切れて、右へ曲つた。だら〳〵坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても眞暗だ。小さい月の樣な浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分は段々下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ觸つて見ると、雨が降つた樣に濡れてゐる。

「どうだ、尾いて來るか」

と、初さんが聞いた。
「えゝ」
と大人なしく答へたら、
「もう少しで地獄の三丁目へ來る」
と云つたなり、又二人とも無言になつた。此の時行く手の方に一點の燈が見えた。暗闇の中の黒猫の片眼の樣に光つてる。カンテラの灯なら散らつく筈だが、些とも動かない。距離もよく分らない。方角も眞直ぢやないが、兎に角見える。もし坑の中が一本道だとすれば、此の燈を目懸けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方是が地獄の三丁目なんだらうと思つて、這入つて行つた。すると、だら／＼坂が漸く盡きた。路は平らに向ふへ廻り込む。其の突き當りに例の燈が點いてゐる。先つきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦々の所まで來た。距離も間近くなつた。
「愈三丁目へ着いた」
と、初さんが云ふ。着いて見ると、坑が四五疊程の大さに廣がつて、其處に交番位な小屋がある。さうして其の中に電氣燈が點いてゐる。洋服を着た役人が二人程、椅子の對ひ合せに洋卓を隔てゝ腰を掛けてゐた。表には第一見張所とあつた。是は坑夫の出入だの勞働の時間だのを檢査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、其の當時には何の爲の設備だか知らなかつたもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顏を揃へて無言の儘、見張所の前に立つてゐたのを不審に思つた。是は時間を待ち合はして交替する爲である。自分は腰に鑿と槌を差してカンテラさへ提げては居るが、坑夫志願といふんで、いゝシキの樣子が見に

這入つた丈だから、まだ見習にさへ採用されてゐないと云ふ譯で、待ち合はす必要もないものと見えて、すぐ此溜を通り越した。其時初さんが見張所の硝子窓へ首を突つ込んで、一寸役人に斷つたが、役人は別に自分の方を見向もしなかつた。其代り立つてゐた坑夫はみんな見た。然し役人の前を憚つてだらう、全く一言も口を利いたものはなかつた。

溜を出るや否や坑の樣子が突然變つた。今迄は立つてあるいても、脊延びをしても屆きさうにもしなかつた天井が急に落ちて來て、眞直に歩くと時々頭へ觸る樣な氣持がする。是れがもの丶二寸も低からうものなら、岩へ打つかつて眉間から血が出るに違ないと思ふと、松原をあるく樣に、有つ丈の脊で、野風雜にや遣つて行けない。おつかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食つ附いて行つた。尤もカンテラは先き點けた。

すると三尺許り前にゐる初さんが急に四ん這ひになつた。おや、滑つて轉んだ。と思つて、後から突つ掛かりさうな所を、ぐつと足を踏ん張つた。この位にして喰ひ留めないと、坂だから、前へのめる恐がある。心持腰から上を反らす樣にして、初さんの起きるのを待ち合はしてゐると、初さんは中々起きない。矢つ張り這つてゐる。

「何うか、爲ましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。――はてな――怪我でもしやしないかしら――もう一遍聞いて見樣か――すると初さんはのこ〳〵歩き出した。

「何ともなかつたですか」

「這ふんだ」

「え？」

「這ふのだてえ事よ」

と初さんの聲は段々遠くなつて仕舞ふ。その聲で自分は不審を打つた。いくら向ふむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潛つて仕舞ふ。聲が細いんぢやない。當り前の初さんの聲が袋のなかに閉ぢ込められた樣に曖昧になる。こりや只事ぢやないと氣が附いたから、透して見ると漸く分つた。今迄は尋常に歩けた坑が、こゝで忽ち狹くなつて、這はなくつちや拔られなくなつてゐる。其狹い入口から、初さんの足が二本出て居る。初さんは今胴を入れた許りである。やがて出てゐた足が一本這入つた。見てゐるうちに又一本這入つた。是で自分も四つん這ひにならなくつちや仕方がないと諦めを附けた。「這ふんだ」と初さんの敎へたのも決して無理ぢやないんだから、敎へられた通り這つた。所が右にはカンテラを提げてゐる。左の手の平丈を惜氣もなく氷の樣な泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突いた時は、寒さが二の腕を傳はつて肩口から心臟へ飛び込んだ樣な氣持がした。それでカンテラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれ／＼になつて、甚だ不便である。どうしたもんだらうと、此の姿勢の儘じつとしてゐた。さうして、右の手で宙に釣つてゐるカンテラを見た　所へぽたりと天井からしづくが垂れた。カンテラの灯がじいと鳴つた、油煙が顎から頰へかゝる。眼へも這入つた。それでも此の灯を見詰めてゐた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云ふ音がする。坑夫が作業をしてゐるに違ないが、どの位距離があるんだか、どの見當にあたるんだか、一向分らない。東西南北のある浮世の音ぢや

ない。自分は此の姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。只時々しづくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが氣にかゝる。初さんは先へ行つて仕舞つた。頼はカンテラ一つである。其のカンテラがじいと鳴つて水の爲に消えさうになる。かと思ふと又明かるくなる。まあ宜かつたと安心する時分に、又ぽたりと落ちて來る。じいと鳴る。消えさうになる。非常に心細い。實は今迄も、しづくは始終垂れてゐたんだが、灯が腰から下にあるんで、一向氣がつかなかつたんだらう。灯が耳の近くへ來て、じいと云ふ音が聞える樣になつてから急に神經が起つて來た。だから這ふ方は猶遲くなる。しかもまだ三足しか歩いちやゐない。所へ突然初さんの聲がした。

「やい、好い加減に出て來ねえか。何を愚圖々々してゐるんだ。――早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんは慥に日が暮れちまうと云つた。

自分は這ひながら、咽喉佛の角を尖らす程に顎を突き出して、初さんの方を見た。すると一間許り向ふに熊の穴見た樣なものがあつて、其の穴から、初さんの顏が――顏らしいものが出てゐる。自分があまり手間取るんで、初さんが屈んで此方を覗き込んでる所であつた。此の一間をどうして拔け出したか、今ぢや善く覺えてゐない。何しろ出來る丈早く穴迄來て、首丈出すと、もう初さんは顏を引つ込まして穴の外に立つてゐる。其の足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉しやと狹い所を潛り拔けた。

「何をしてゐたんだ」

「あんまり狹いもんだから」

「狹いんで驚いちや、シキへは一足だつて踏ん込めつ子はねえ。陸の樣に地面はねえ所だ位は、どんな

頓珍漢だつて知つてる筈だ」

初さんは慥に坑の中は陸の様に地面のない所だと云つた。此の人は時々思ひ掛けない事を云ふから、今度も慥にと但し書をつけて、其の確實な事を保證して置くんである。自分は何か云ひ譯をするたんびに、初さんから容赦なく遣つ附けられるんで、大抵は默つてゐたが、此の時はつい、

「でもカンテラが消えさうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差し附けて、徐に自分の顏を檢査し始めた。さうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてゞすか」

「何うしてでも好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんは此時大きな聲を出して笑つた。自分は喫驚して稀有な顏をしてゐた。

「冗談ぢやねえ。何が這入てると思ふ。種油だよ、しづく位で消てたまるもんか」

自分は是でやつと安心した。

「安心したか。ハヽヽ」

と初さんが又笑つた。初さんが笑ふたんびに、坑の中がみんな響き出す。其の響が收まると前よりも倍靜

かになる。所へかあん、かあんと何處かで鑿と槌を使つてる音が傳はつて來る。

「聞えるか」

と、初さんが顋で相圖をした。

「聞えます」

と耳を峙てゝゐると、忽ち催促を受けた。

「さあ行かう。今度あ後れない樣に跟いて來な」

初さんは中々機嫌がいゝ。是れは自分が一も二もなく初さんに遣られてゐる所爲だらうと思つた。いくら手苛く極めつけられても、初さんの機嫌がいゝうちは結構であつた。かうなると得になる事が卽ち結構といふ意味になる。自分は是れ程墮落して、おめ／＼初さんの尻を嗅で行つたら、路が左の方に曲り込んで又峻しい坂になつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後も向かず聲を掛けた。其の時自分は何となく東京の車夫を思ひ出して苦しいうちにも可笑しかつた。が初さんはそれとも氣が附かず下り出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になつてゐる。四五間づゝに折れてはゐるが、勘定したら愛宕樣の高さ位はあるだらう。是は一生懸命になつて、一所に降りた。降りた時にほつと息を吐くと、其息が何となく苦かつた。然し是は深い坑のなかで、空氣の流通が惡いからと許り考へた。實は此時既に身體も冐されてゐたんである。此苦い息で二三十間來ると又模樣が變つた。

今度は初さんが仰向けに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れる樣な藝をしなければ通れない程、坑の幅も高さも逼つて來たのである。

「斯うして拔けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると拔けて見えなくなつた。流石熟練の功はえらいもんだと思ひながら、自分も先づ足丈前へ出して、草鞋で探を入れた。所が全く宙に浮いてる樣で足掛りが些ともない。何でも穴の向ふは、がつくり落か、それでなくても、餘程勾配の急な坂に違ないと見當を附けた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をする許り、又足を無暗に出せば引つ繰り返る丈と覺つたから、足を棒の樣に前へ寐かして、さうして後へ手を突いた。所が此所作が甚だ不味かつたので、手を突くと同時に、尻もべつたり突いて仕舞つた。ぴちやりと云つた。アテシコを傳はつて臀部へ少々感じがあつた。夫ほど強く尻餅を搗いたと見える。自分はしまつたと思ひながらも直兩足を前の方へ出した。するりと一尺ばかり振ら下げたが、まだ何處へも屆かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出す樣に足を伸ばした。すると腿の所迄摺り落ちて、草鞋の裏が漸く堅いものに乘つた。自分は念の爲此の堅いものをぴちや〱足の裏で敲いて見た。大丈夫なら手を離して此の堅いものゝ上へ立たうと云ふ料簡であつた。

「何で足ばかり、ばた〱やつてるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久地のねえ」

と、下から初さんの聲がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を拔けて眞直に立つた。

「丸で傘の化物の樣だよ」

と初さんが、自分の顔を見て云つた。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑ふ氣にもならなかつた。たゞ

「左樣ですか」

と眞面目に答へた。妙な事に此の返事が面白かつたと見えて、初さんは、又大きな聲を出して笑つた。さうして、此の時から態度が變つて、前よりは幾分か親切になつた。偶然の事がどんな拍子で他の氣に入らないとも限らない。却て、氣に入つてやらうと思つて仕出かす藝術は大抵駄目な樣だ。天巧を奪ふ樣な御世辭使は未だ曾て見た事がない。自分も我が身が可愛さに、其の後色々人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨い結果が出て來ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖いもんだ。用意をして置いた挨拶で、此の傘の化物に對する返事位に成功した場合は殆どない。骨を折つて失敗するのは愚だと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしてゐる。たゞ困るのは演説と文章である。あいつは骨を折つて準備をしないと失敗する。其の代りいくら骨を折つても矢張り失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折つた失敗は、人の氣に入らないでも、自分の弱點が出ないから、まあ準備をしてからやる事にしてゐる。いつかは初さんの氣に入つた樣な演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされさうで不可ないから、未だに遣らずにゐる。——それは此處には餘計な事だから、此の位で已めて又初さんの話を續けて行く。

其の時初さんは、笑ひながら、下から、自分に向つて、

「おい、さう眞面目くさらねえで、早く下りて來ねえな。日は短えやな」

と云つた。坑の中でカンテラを點けた、初さんは慥に日は短えやなと云つた。
自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所迄行くと、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間續いてゐる。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。さうして又段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稻妻の樣に歩いて、段々を——さあ何町降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑の中の事であるから自分には非常に長く思はれた。漸く段々を降り切つて、大分浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六疊の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り廣げたもので、上と下がすぼまつて、腹の所が膨らんでゐるから、丸で酒甕の中へでも落込んだ有樣である。あとから分つた話だが、是れは作事場と云ふんで、技師の鑑定で、此處には鑛脈があるとなると、そこを掘り擴げて作事場にするんである。だから通り路よりは自然廣い譯で、此の作事場を坑夫が三人一組で、請負仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で濟む事もあり、高が五日位と踏んだ作事に半月以上食ひ込む事もある。かう云ふ譯で、シキのなかに路が出來て、路のはたに銅脈さへ見附かれば、御構なくそこ丈を掘り拔いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、又一條でもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも條路が出來て、方々に作事場が建つ。その作事を仕舞ふと、又銅脈を見附けては掘り拔いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、又暗い坑だらけである。丁度蟻が地面を縱横に拔いて歩く樣なものだらう。又は書蠹が本を食ふと見立てゝも差し支ない。つまり人間が土の中で、銅を食つて、食ひ盡すと、又銅を探し出して食ひにゆくんで無暗に路が澤山出來て仕舞つたんである。だから、いくらシキの中を通つても、たゞ通る丈で作事場へ出なければ坑夫には逢はない。かあん〳〵といふ音はするが、

音丈では極めて淋しいものである。自分は初さんに連れられて、シキへ這入つたが、たゞシキの樣子を見るのが第一の目的であつた爲か、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしてゐる所は、此の段々の下へ來て、初めて見た。——稻妻形に段々を下りるときは、無暗に下りる許りで、いくら下りても盡きないのみか、人つ子一人に逢はないものだから、甚だ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかつた。

見ると丸太の上に腰をかけてゐる。數は三人だつた。丸太は四つや丸太で、軌道の枕木位なものだから、隨分の重さである。どうして、此處迄運んで來たか到底想像がつかない。是は天井の陷落を防ぐ爲、少し廣い所になると突つかい棒に張る爲に、シチウが必要な作事場へ置いて行くんださうだ。其の上に二人腰を掛けて、殘る一人が屈んで丸太へ向いてゐる。さうして三人の間には小さな木の壺がある。伏せてある。一人が此の壺を上から抑へてゐる。三人が妙な叫び聲を出した。抑へた壺を忽ち擧げた。下から賽が出た。——所へ自分と初さんが這入つた。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが土の壁に突き刺してある。暗い灯が、ぎろりと光る三人の眼球を照らした。光つたものは實際眼球丈である。坑は固より暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黑く燃えて煙を吹いて居る所は、濁つた液體が動いてる樣に見えた。濁つた先が黑くなつて、煙と變化するや否や、此の煙が暗いものゝ中に吸ひ込まれて仕舞ふ。だから坑の中がぼうとしてゐる。さうして動いてゐる。

カンテラは三人の頭の上に刺さつてゐた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭丈である。所

が三人共頭が黑いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集つてゐたから、猶更變であつたが、自分が這入るや否や、三つの頭は忽ち離れた。其の間から、壺が見えたんである。壺の下から賽が見えたんである。壺と、賽と、三人の異な叫び聲を聞いた自分は、次に三人の顏を見たんである。能くはわからない顏であつた。一人の男は頰骨の一點と、小鼻の片傍丈が、灯に映つた。次の男は額と眉の半分に光が落ちた。殘る一人は總體にぼんやりしてゐる。只自分の持つてゐた、カンテラを四五尺手前から眞向に浴びた丈である。――三人は此の姿勢で、ぎろりと眼を据ゑた。自分の方に。

漸く人間に逢つて、やれ嬉しやと思つた自分は、此の三對の眼球を見るや否や、思はずぴたりと立ち留つた。

「手前は……」

と云ひ掛けて、一人が言葉を切つた。殘る二人はまだ口を開かない。自分も立ち留まつたなり、答へなかつた。――答へられなかつた。すると

「新めえだ」

と、初さんが、威勢のいゝ返事をしてくれた。本當の所を白狀すると、三人の眼球が光つて、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍にゐる事も忘れて、唯おやつと思つた。立すくむと云ふのはこれだらう。立ちすくんで、硬くこわ張り掛けた所へ「新めえだ」と云ふ聲がした。此の聲が自分の左の耳の、つい後から出て、向ふへ通り拔けた時、成程初さんが附いてたなと思ひ出した。それが爲、こわ張りかけた手足も、中途で故へ引き返した。自分は一歩傍へ退いた。初さんに前へ出てもらふ積であつた。初さんは注文通り

出た。

「相變らず遣つてるな」

とカンテラを提げた儘、上から三人の眞中に轉がつてる、壺と賽を眺めた。

「どうだ仲間入は」

「まあよさう。今日は案内だから」

と初さんは取り合はなかつた。やがて、四つや丸太の上へうんとこしよと腰を卸して、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむ迄恐ろしかつた、自分は急に嬉しくなつて元氣が出て來た。初さんの側へ腰を卸ろす。アテシコの利目は、こゝで始めて分つた。旨い具合に尻が乘つて、柔らかに局部へ應へる。且冷えないで、結構だ。實はさつきから、眼が少し眩らんで――眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い氣持ではなかつたが、かう尻を掛けて落ちつくと、大きに樂になる。四人が色々な話をしてゐる。

「廣本へは新らしい玉が來たが知つてるか」

「うん、知つてる」

「まだ買はねえか」

「買はねえ、お前は」

「おれか。おれは――ハ、、、」

と笑つた。是れは這入つて來た時、顏中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。其の證據には、笑つても笑はなくつても、顏の輪廓が殆ど同じである。

「隨分手廻しがいゝな」

と初さんも聊か笑つてる。

「シキへ這入ると、何時死ぬか分らねえからな。だれだつて、さうだらう」

と云ふ答があつた。此の時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。其の語調には妙に咏歎の意が寓してあつた。自分はあまり突然の樣に感じた。

さうしてるうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前は何處から來た」

「東京です」

「此處へ來て儲やうたつて駄目だぜ」

と他のが、すぐ教へてくれた。自分は長藏さんに逢ふや否や儲かる〲を何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場へ着くが早いか、今度は反對に、儲からない〲で立てつゞけに責められるんで、大いに辟易した。然し地の底ではよもやそんな話も出まいと思つて此處迄降りて來たが、人に逢へば又儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿々々しいんで何とか答辯を仕樣かとも考へたが、滅多な事を云へば擲り附けられる丈だから、まあやめにして置いた。去ればと云つて返事をしなければ又遣り附けられる。そこで、か

う云つた。
「何故儲からないんです」
「此の銅山には神樣がゐる。いくら金を蓄めて出樣としたつて駄目だ。金は必ず戾つてくる」
「何の神樣ですか」
と聞いて見たら、
「達磨だ」
と云つて、四人ながら面白さうに笑つた。自分は默つてゐた。すると四人は自分を措いて頻に達磨の話を始めた。約十分餘りも續いたらう。其の間自分は外の事を考へてゐた。色々考へたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、眞暗な坑のなかに屈んでる所を、艶子さんと澄江さんに見せたらばと云ふ問題であつた。氣の毒がるだらうか、泣くだらうか、それとも淺間しいと云つて愛想を盡かすだらうかと疑つて見たが、是は難なく氣の毒がつて、泣くに違ないと結論して仕舞つた。それで一目位は此の姿を二人に見せたい樣な氣がした。それから昨夜圍爐裏の傍で散々馬鹿にされた事を思ひ出して、あの有樣を二人に見せたらばと考へた。所が今度は正反對で、二人共傍にゐてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意氣地のない、大いに苛められてゐる自分の風體と、ハイカラの女を二人描き出したら、甚だ氣恥づかしくなつて腋の下から汗が出さうになつた。是で見ると、坑夫に墮落すると云ふ事實其の物は左程苦にならぬのみか、少しは得意の氣味で、たゞ坑夫になりたての幅の利かない所丈を、女に見せたくなかつた譯になる。自分の器量を下げる所は、誰にも隱したいが、ことに女には隱した

い。女は自分を頼る程の弱いものだから、頼られる丈に、自分は器量のある男だと云ふ證據を何處迄も見せたいものと思はれる。結婚前の男はことに此の感じが深い樣だ。人間はいくら窮した場合でも、時々は芝居氣を出す。自分がアテシコを臀に敷いて、深い坑のなかで、カンテラを提げた儘、休んだ時の考へは、全く芝居じみてゐた。ある意味から云ふと、是が苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云ふべき芝居は全く此處から發達したものと思ふ。自分は發達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落膽しながら得意がつて居た。

所へ突然肺臓を打ち拔かれたと思ふ位の大きな音がした。其の音は自分の足の下で起つたのか、頭の上で起つたのか、尻を懸けた丸太も、黒い天井も一度に躍り上つたから、分からない。自分の頸と手と足が一度に動いた。緣側に脛をぶらさげて、膝頭を丁と叩くと、膝から下がぴくんと跳ねる事がある。此の時自分の身體の動き方は全く是れに似てゐる。然し是れよりも倍以上劇烈に來た樣な氣がした。身體ばかりぢやない、精神が其通りである。一人芝居の眞最中でとんぼ返りを打つて、忽ち我れに歸つた。音はまだつゞいてゐる。落雷を土中に埋めて、自由の響きを束縛した樣に、澁つて、焦つて、陰に籠つて、抑へられて、岩に中つて、包まれて、激して、跳ね返されて、出端を失つて、ごうと吼えてゐる。

「驚いちや不可ねえ」

と初さんが云つた。さうして立ち上がつた。自分も立ち上がつた。三人の坑夫も立ち上がつた。

「もう少しだ。遣つちまうかな」

と、鑿を取り上げた。初さんと自分は作事場を來る。所へ煙が出た。煙硝の臭が、眼へも鼻へも口へも遣

入つた。噎せつぽくつて苦しいから、後を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。實は先の音が耳に應へた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ないと迄思ひ詰めた位だのに、初さんは益深く這入る氣色だから、氣味が惡いとは思つたが、何しろ自由行動のとれる身體ではなし、精神は無論獨立の氣象を具へてゐないんだから、いかに先輩だつて逃げていゝ時分には、逃げてくれるだらうと安心して、後を附けて出ると、むつとする程の煙が向ふから吹いて來たんで、こりや迂濶深入は出來ないわと云ふ腹もあつて、かた〲後を向く途端に、さつきの連中がもう、煙の中でかあん、かあん、鑛を叩いてゐるのが聞えたんで、それぢや矢つ張安心なのかと、不審のあまり此の質問を起して見たんである。すると初さんは、煙の中で、咳を二つ三つしながら、

「驚かなくつてもいゝ、ダイナマイトだ」

と敎へてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえか、知れねえが、シキへ這入つた以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから」

自分は默つてゐた。初さんは煙の中を押し分ける樣にずん〲潛つて行く。滿更苦しくない事もないんだらうが、一つは新參の自分に對して、景氣を見せる爲ぢやないかと思つた。それとも煙は坑から坑へ拔

け切つて、陸の上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんで何時迄も煙が這つてる様に感じたり噎ぽく思つたのかも知れない。さうすると自分の方が惡くなる。
いづれにしても苦い所を我慢して尾いて行つた。又胎内潜りの様な穴を拔けて、三四間宛の段々を、右へ左へ折れ盡すと、路が二股になつてゐる。その條路の突き當りで、カラカランと云ふ音がした。深い井戸へ石片を抛げ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙に深い樣に思はれた。と云ふものは、落ちて行く間に、側へ當つて鳴る音が、冴えてゐる。許りか、餘程長くつゞく。最後のカラランは底の底から出て、出るには餘程手間がかゝる。けれども一本道を、眞直に上へ拔ける丈で、外に逃道がないから、どんなに暇取ても、屹度出てくる。途中で消えさうになると、壁の反響が手傳つて、底で出た丈の響は、いかに微な遠くであつても、洩らす所なく上迄送り出す。――ざつと斯んな音である。カラララン。
カカラアン。……
初さんが留つた。
「聞えるか」
「聞えます」
「スノコへ鑛を落してる」
「はあ……」
「序だからスノコを見せて遣らう」
と、急に思ひ附いた樣な調子で、勢ひよく初さんが、一足後へ引いて草鞋の踵を向け直した。自分が耳の

方へ氣を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も續いて暗いなかへ這入る。

折れた路は僅か四尺程で行き當る。所を又右へ廻り込むと、一間許り先が急に薄明るく、縦にも横にも廣がつてゐる。其の中に黒い影が二つあつた。自分達が其の傍迄近附いた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後へ拔く拍子に、大きな箕を、斜に抛げ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云ふ音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。廣さは疊二疊敷位はあるだらう。箕に入れたばらの鑛を、掘子が抛げ込んだ許りである。突き當りの壁は突立つてゐる。微なカンテラに照らされて、色さへしつかり分らない上が、一面に濡れて、濡れた所丈がきら〱光つてゐる。

「覗いて見ろ」

初さんが云つた。穴の手前が三尺許り板で張り詰めてある。自分は板の三分の一程迄踏み出した。

「もつと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇した。是れでさへ踏板が外れゝば、何處迄落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云ふ時、土の上へ飛び退く手間が一尺丈遲くなる。一尺は何でもない様だが、此處では平地の十間にも當る。自分は何分にも躊躇した。

「出ろやい。吝な野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云はれた。是れは初さんの聲ではなかつた。黒い影の一人が云つたんだらう。自分は振り返つて見なかつた。然し依然として足は前へ出なかつた。只眼丈が、露で光つた薄暗い向ふの壁を傳はつて、下の方へ、次第に落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は眞暗だ。眞暗だから何處迄視線

に這入るんだか分らない。たゞ深いと思へば際限もなく深い。落ちや大變だと神經を起すと、後から脊中を突かれる樣な氣がする。足は依然として故の位地を持ち應へてゐた。すると、

「おい邪魔だ。一寸退きな」

と聲を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重さうに俵を抱へて立つてゐる。俵の大きさは米俵の半分位しかない。然し兩手で底を受けて、幾分か腰で支へながら、うんと氣合を入れてゐる所は、全く重さうだ。自分は此の體を見て、すぐ傍へ避けた。さうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退ける程の距離迄退いた。掘子は、俵で眼先がつかへてゐるから定めし劍呑がるだらうと思ひの外、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。緣から二尺許り手前迄出て、足を揃へたから、もう留まるだらうと見てゐると、又出した。餘る所は一尺しきあない。其の一尺へ又五寸程切り込んだ。さうして行儀よく右左を揃へた。さうして、うんと云つた。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめつたと思ふ途端に、重い俵は、とんぼ返りを打つて、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突つ立つてゐる。落た俵はしばらく音沙汰もない。と思ふと遠くでどさつと云つた。俵は底迄落切つたと見える。

「どうだ、あの藝が出來るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「さうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入つてた。すると初さんも掘子もみんな笑ひ出した。自分は笑はれても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入つてた。其の時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要るもんだ。遣つて見ねえうちは、馬鹿にや出來ねえ。お前が掘子になるにしたつて、おつかながつて、手先許りで抛け込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちゝまつて、肝心の穴へは這入りやしねえ。さうして、鑛の重みで引つ張り込まれるから、却つて劍呑だ。あゝ思ひ切つて胸から突き出してかゝらにや……」

と云ひ掛けると、外の男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハヽヽヽ」

と笑つた。

後戻をして元の路へ出て、半町程行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は眞直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫ふ樣に突き當つた所で、初さんが留まつた。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。實は餘程前から下りられない。然し中途で降參したら、落第するに極つてるから、我慢に我慢を重ねて、此處迄來た樣なものゝ、內心では其の內もうどん底へ行き着くだらう位の目算はあつた。そこへ持つて來て、相手がぴたりと留まつて、一段落附けた上、偖改めて、まだ下りる氣かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程は決して一丁や二丁でないと云ふ意味になる。——自分は暗い乍ら初さんの顏を見て考へた。御免蒙らうかしらと考へた。かう云ふ時の出處進退は、全く相手の思はく一つで極る。如何な馬鹿でも、如何な利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顏色で判斷する方が早く片が附く。つまり自分の性格よりも周圍の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下

落する場合である。平生築き上げたと自信してゐる性格が、滅茶苦茶に崩れる場合のうちで尤も顯著なる例である。――自分の無性格論は此處からも出てゐる。

前申す通り自分は初さんの顏を見た。すると、下り樣ぢやないかと云ふ親密な情合も見えない。下りなくつちや御前の爲にならないと云ふ忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云ふ威嚇もあらはれてゐない。下りたからうと焦らす氣色は無論ない。たゞ下りられまいと云ふ侮蔑の色で持ち切つてゐる。それは何ともなかつた。然し其の色の裏面には落第と云ふ切實な問題が潛んでゐる。此の場合に於ける落第は、名譽より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならない。

「下りませう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の樣子であつたが、

「ぢや、下り樣。其代り少し危ないよ」

と穩かに同意の意を表した。成程危ない筈だ。九十度の角度で切つ立つた、屏風の樣な穴を眞直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてる。勾配も何にもない。此方の壁にぴつたり食つ附いて、棒を空にぶら下た樣に、覗くと端が見えかねる。どこ迄續いてるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、丸で分らない。

「ぢや、己が先へ下るからね。氣を附けて來給へ」

と初さんが云つた。初さんが是れ程叮嚀な言葉を使はうとは思ひも寄らなかつた。大方神妙に下りませうと出たんで、幾分か憐愍の念を起したんだらう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の

方へ尻を向けた。さうして屈んだ。と思ふと、足から段々這入つて行く。仕舞には顔丈が殘つた。やがて其の顔も消えた。顔が出てゐる間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の先迄が、づぼりと穴へはまつた時は、流石に心配なのと心細いのとで、凝としてゐられなくつて、足をつま立てる樣にして、上から見下した。初さんは下りて行く。黒い頭とカンテラの灯丈が見える。其の時自分は氣味の惡いうちにも、かう考へた。初さんの姿が見えるうちに下りて仕舞はないと、下り損なふかも知れない。面目ない事が出來する。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんの樣に、膝を地に附けて、手で摺り下りながら、草鞋の底で段々を探つた。

兩手で第一段目を握つて、足を好加減な所へ掛けると、脊中が海老の樣に曲つた。それから、徐々足を伸ばし出した。眞直に立つと、カンテラの灯が胸の所へ來る。じつとしてゐると燻されて仕舞ふ、仕方がないから、片足下げる。手も之に應じて握り更へなくつちやならない。抑さうとすると、指で提げてるカンテラが、飛んだ所で、始末の惡い樣に動く。滅多に振ると、着物が燒けさうになる。大事を取ると壁へ打つかつて灯が揉み潰されさうになる。親指へカップを差し込んで、振子の樣に動かした時は、甚だ輕便な器械だと思つたが、かうなると非常に邪魔になる。其の上梯子の幅は狹い。段と段の間が頗る長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて來て恐怖が手傳ふ。さうして握り直すたんびに、段木がぬら〳〵する。鼻を押しつける樣にして、乏しい灯で透かして見ると、へな土が一面に粘いてゐる。上り下りの草鞋で踏付たものと思はれる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗いた。よせば善かつたが、つい覗いた。すると急にぐら〳〵と頭が廻つて、かたく握つた手がゆるんで來た。是は死ぬかも

知れない。死んぢや大變だと、噛りついたなり、いきなり眼を閉つた。石鹸球の大きなのが、ぐる〳〵散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本當を云ふと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶつた眼の前に湧いて出る石鹸球の中に、初さんが居る譯がない。然し現にゐる。さうして降りて行く。如何にも不思議であつた。今考へると、目舞のする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐら〳〵と咄嗟て、死ぬ方が怖くなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。但しさう云ふ事が學理上あり得るものか、どうか知らない。其の當時は夢中である。坑は暗い、命は惜しい、頭は亂れてゐる。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだか滅茶苦茶であつた。が不思議な事に、眼を開けるや否や又下を見た。すると矢張り初さんが降りてゐる。しかも切つ立つた壁の向ふ側を降りてゐる樣だ。今度は二度目の所爲か、落ちる程眩暈もしなかつたんで、よくよく眸を据ゑて見ると、正に向ふ側を降りて行く。はてなと思つた。所へカンテラが又じいと鳴つた。保證つきの燈火だが、かうなると又心細い。初さんはずん〳〵行く樣だ。自分も此に至れば、全速力で降りるのが得策だと考へ付いた。そこでぬる〳〵する段木を握り更へ、握り更へて漸く三間ばかり下がると足が土の上へ落ちた。踏んで見たが矢ッ張り土だ。念の爲、手を離さずに足元の樣子を見ると、梯子は全く盡きてゐる。踏んで居る土も幅一尺で切れてゐる。あとは筒拔の穴だ。其代り今度は向側に別の梯子が附いてゐる。手を延ばすと屆く樣に懸けてある。仕方がないから、自分は又此の梯子へ移つた。さうして出來る丈早く降りた。長さは前のと同樣である。すると又逆の方向に、依然として梯子が懸けてある。ど

つも是非に及ばない。又移つた。漸との思ひで是れも片付けると、新しい梯子は故の如く向側に懸つてゐる。殆ど際限がない。自分が六つめの梯子迄來た時は、手が怠くなつて、足が悸へ出して、妙な息が出て來た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えてゐる。見れば見る程眞闇だ。自分のカンテラへはじいじいと點滴が垂れる。草鞋の中へは清水がしみ込んで來る。

しばらく休んでゐたら、手が拔けさうになつた。下り出すと足を踏み外しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめつて逆さに頭を割る許りだと思ふと、どうか、かうか、段々を下り切る力が、どつかから出て來る。あの力の出所は到底分らない。然し此の時は一度に出ないで、少し宛、腕と腹と足へ浸染み出す樣に來たから、自分でも、ちやんと自覺してゐた。丁度試驗の前の晩徹夜をして、疲勞の結果、うつとりして急に眼が覺めると、又五六頁は讀めると同じ具合だと思ふ。かう云ふ勉强に限つて、何を讀んだか分らない癖に、とにかく讀む事は讀み通すものだが、それと同じく自分も慥に降りたとは斷言しにくいが、何しろ降りた事は慥である。下讀をする書物の内容は忘れても、頁の數は覺えてゐる如く、梯子段の數丈は明かに記憶してゐた。丁度十五あつた。十五下り盡しても、まだ初さんが見えないには驚いた。然し幸ひ一本道だつたから、どぎまぎしながらも、細い穴を這ひ出すと、漸く初さんが居た。しかも、例の樣に無敵な文句は竝べずに、

「どうだ苦しかつたか」

と聞いて呉れた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答へた。次に初さんが、
「もう少しだ我慢しちや、どうだ」
と奨勵した。次に自分は、
「又梯子があるんですか」
と聞いた。すると初さんが、
「ハ丶丶丶もう梯子はないよ。大丈夫だ」
と好意的の笑を洩らした。そこで自分も我慢の爲序だと觀念して、又初さんの尻に附いて行くと、又下りる。さうして下りるに從つて路へ水が溜つて來た。ぴちや〱と云ふ音がする。カンテラの灯で照らして見ると、下谷邊の溝渠が溢れた樣に、薄鼠になつてだぶ〱してゐる。其泥水が又馬鹿に冷たい。指の股が切られる樣である。けれども一面の水だから、折角水を拔いた足を、又無慘にも水の中へ落さなくつちやならない。片足を揚げると、五位鷺の樣に其の儘で立つてゐたくなる。夫でも仕方なしに草鞋の裏を着けるとぴちやりと云ふが早いか、水際から、魚の鰭の樣な波が立つ。其の片側がカンテラの灯できら〱と光るかと思ふと、すぐ落ち附いて故に歸る。折角平になつた上を又ぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。かう云ふ風にして、奥へ奥へと這入つて行くと、水は段々深くなる。此處を潜り拔けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合はれない行先を宛にして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつてた水が急に脛迄來た。此の次にはと、辛抱して、右に折れると、がつくり落ちがして膝迄漬かつちまふ。かうなると、動くたんびにざぶ〱云ふ。膝で切る波が渦を捲いて流れる。其渦が段々股の方へ押し寄せてくる。全く

危險だと思つた。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑のなかが、一杯になりやしないかと思ふと急に腰から腹の中迄が冷たくなつて來た。然るに初さんは辟易した體もなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後から聞いて見たが、初さんは別に返事もしずに、依然として、ざぶり〳〵と水を押し分けて行く。自分の考へる所によると、いくら銅山でも水に漬かつてゐては、仕事が出來る筈がない。かうどぶ附く以上は、何か變事でもあるか、又は廢坑へでも連れ込まれたに違ひない。いづれにしても災難だと、不安の念に冒されながら、もう一遍初さんに聞かうかしらと思つてゐるうち、水はとう〳〵腰迄來て仕舞つた。

「まだ這入るんですか」

と、自分は堪らなくなつたから、後から初さんを呼び留めた。此の聲は普通の質問の聲ではない。吾身を思ふの餘り、命が口から飛び出した樣なものである。だから、いざと云ふ間際には單音の叫聲となつてあらはれる所を、まだ初さんの手前を憚る丈の餘裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を變した迄である。此の聲を聞きつけた時は、流石の初さんも水の中で留まつたなり、振り返つた。カンテラを高く差し上げる。眸を据ゑると、初さんの眉の間に八の字が寄つて來た。しかも口元は笑つてゐる。

「どうした。降參したか」

「いえ、此の水が……」

と自分は、腰の邊を、物凄さうに眺めた。初さんは毫も感心しない。矢つ張りにこ〳〵してゐる。出水の

往來を、通行人が尻をまくつて面白さうに渉る時の樣に見えた。自分も是で疑ひは晴れたが、根が臆病だから、念の爲、もう一度、

「大丈夫でせうか」

を繰返した。此時初さんは益愉快さうな顔附だつたが、やがて眞面目になつて、

「八番坑だ。是れがどん底だ。水位あるなあ當前だ。そんなに、おつかながるにや當らねえ。まあ好いから此方へ來ねえ」

と中々承知しないから、仕方なしに、股迄濡らして附いて行つた。たゞさへ暗い坑の中だから、思ひ切つた喩を云へば、頭から暗闇に濡れてると形容しても差支ない。其の上本當の水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の惡い所が、倍惡くなる。其の上水は踝から段々競り上がつて來る。今では腰迄漬かつてゐる。しかも動くたんびに、波が立つから、實際の水際以上迄が濡れてくる。さうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身體が腹迄冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹迄冷えて、二重に冷え切つて、不知案内の所を海鼠の樣に附いて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞の樣に深く開いてる中から、水が流れて來る。さうして其の中でかあん〳〵と云ふ音がする。作事場に違ひない。初さんは、穴の前に立つた儘、

「そうら。此んな底でも働いてるものがあるぜ。眞似が出來るか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸る迄、屈んで洞の中を覗き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく――明るくと云ふが、締りのない、取り留めのつかない、微な灯を無理に廣い間へ使つて、引つ張り足りないか

ら、折角の光が暗闇に壓倒されて、茫然と濁つてゐる體であつた。其の中に一段と黑いものが、斜めに岩へ吸ひ附いてゐる邊から、かあん〱と云ふ音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返つたものが、纒まつて穴の口から出て來る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入つて見るか」

と云ふ、自分はぞつと寒氣がした。

「這入らないでも好いです」

と答へた。すると初さんが、

「ぢや止めにして置かう。然し止めるなあ今日丈だよ」

と但し書を附けて、一應自分の顏を篤と見た。自分は案の定釣り出された。

「明日つから、此處で働くんでせうか。働くとすれば、何時間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が濟むんですか」

「さうさなあ」

と考へてゐた初さんは、

「一晝夜に三囘の交替だからな」

と說明してくれた。一晝夜に三囘の交替なら一何切八時間になる。自分は黑い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいゝ」

初さんは突然慰めて呉れた。氣の毒になつたんだらう。
「だつて八時間は働かなくつちやならないんでせう」
「そりや極まりの時間丈は働かせられるのは知れ切つてらあ。だが心配しなくつてもいゝ」
「何うしてですか」
「好いてえ事よ」
と初さんは歩き出した。自分も默つて歩き出した。二三歩水をざぶ〳〵云はせた時、初さんは急に振り返つた。
「新前は大抵二番坑か三番坑で働くんだ。餘つ程樣子が分らなくつちや、此處迄下りちや來られねえ」
と云ひながら、にや〳〵と笑つた。自分もにや〳〵と笑つた。
「安心したか」
と初さんが又聞いた。仕方がないから、
「えゝ」
と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶ〳〵動く水が、急に膝迄減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝迄落ちた。それで平らに續いてゐる。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉しかつた。それから先は、とん〳〵拍子に嬉しくなつて、曲れば曲る程地面が乾いて來る。仕舞にはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る氣があるかと尋ねたが、是れは諸方のスノコから落ちて來た鑛を聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び

出す仕掛を云ふんだと聞いて、頭から御免蒙つた。いくら面白く運轉する器械でも、明日の自分に用のない所は見る氣にならなかつた。器械を見ないとすると是れで、まあ坑内の模樣を一應見物した譯になる。そこで案内の初さんが歸るんだと云ふ通知を與へてくれた。腰きり水に漬かるのは、如何な初さんも一度で澤山だと見えて、歸りには比較的濡れないで濟む路を通つてくれた。それでも十間程は脹ら脛迄水が押し寄せた。此の十間を通るときに、樣子を知らない自分は又例の所へ來たなと感附いて、往きに臍の近所が氷りつきさうであつた事を思ひ出しつゝ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鶍の嘴と善い方へばかり、食ひ違つて、行けば行くほど、水が淺くなる。足が輕くなる。遂には又乾いた路へ出て仕舞つた。初さんに、

「もう濟んだでせうか」

と聞いて見ると、初さんは只笑つてゐた。其の時は自分も愉快だつたが、しばらくすると、例の梯子の下へ出た。水は胸迄位我慢するが此の梯子には、――せめて歸り路丈でも好いから、遁れたかつたが、矢つ張り丁度其の下へ出て來た。自分は蜀の棧道と云ふ事を人から聞いて覺えてゐた。此の梯子は、棧道を逆に釣るして、未練なく傾斜の角度を拔きにしたものである。自分は其處へ來ると急に足が出なくなつた。突然脚氣に罹つた樣な心持になると、思はず、腰を後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思ふ讀者もあるかもしれないが、さうぢやない。さう云ふ氣分が起つたんで、強ひて形容すれば、疝氣に引つ張られたとでも敍したら善からう。何しろ腰が伸せない。尤も是れは逆棧道の祟りだと一概に斷言する氣でもない、さつきから案内の初さんの方で、大分御機嫌が好いので、相手の寛大な御情

に附け上つて、奮發の箍が次第々々に緩んだのも慥な事實である。何しろ、歩けなくなつた。此の腰附を見てゐた初さんは、

「どうだ歩けさうもねえな。丸で屁つぴり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて來るから」

と云つたぎり、暗い所を潛つて、何處へか出て行つた。

あとは云ふ迄もなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。アテシコはかう云ふときに非常な便利になる。御蔭で、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚れたりする憂ひがない丈、慘憺なうちにも、まだ嬉しい所があつた。さうして、硬く曲つた脊中を壁へ倚たせた。是れより以上は横のものを竪にする氣もなかつた。たゞ其の儘の姿勢で向ふの壁を見詰めてゐた。身體が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身體が怠けるのか、とにかく、雙方相び合つて、生死の間に彷徨してゐたと見えて、しばらくは萬事が不明瞭であつた。始めは、どうか一尺立方でもいゝから、明かるい空氣が吸つて見たい樣な氣がしたが、段々心が昏くなる。と坑のなかの暗いのも忘れて仕舞ふ。どつちがどつちだか分らなくなつて朦朧のうちに合體渾和して來た。然し決して寐たんぢやない。しんとして、意識が稀薄になつた迄である。然し其の稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆氣であるから、いくら不透明でも正氣は失はない。丁度差し向ひの代りに、電話で話しをする位の程度――もしくは是れよりも少しく不明瞭な程度である。斯樣に水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈し過ぎて困る自分には――東京にも田舍にも居り終せない自分には――煩悶の解熱劑を頓服しなければならない自分には――神經纖維の端の端迄寄つて來た過度の刺激を散らさなければならない自分には――必要であり、願望であり、理想である。長藏さんに

引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、慥に上等の天國である。もし驅落が自滅の第一着なら、此の境界は自滅の——第何着か知らないが、兎に角終局地を去る事遠からざる停車場である。自分は初さんに置いて行かれた少時の休憩時間内に、圖らずも此の自滅の手前迄、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思ふ。正直に云へば嬉しかつた。然し嬉しいと云ふ自覺は十倍の水に溶き交ぜられた正氣の中に遊離してゐるんだから、外の娑婆氣と同じく、劇烈には來ない。矢つ張り稀薄である。けれど自覺は慥にあつた。正氣を失はないものが、嬉しいと云ふ自覺だけを取り落す譯がない。自分の精神狀態は活動の區域を狹められた片輪の心的現象とは違ふ。一般の活動を恣にする自由の天地は故の如くに存在して、活動其の物の強度が減却して來たのみだから、平常の我と此の時の我との差はたゞ濃淡の差である。其の最も淡い生涯の中に、淡い喜びがあつた。

もし此狀態が一時間續いたら、自分は一時間の間滿足してゐたらう。一日續いたら一日の間滿足したに違ない。もし百年續いたにしても、矢張嬉しかつたらう。所が——此處で又新しい心の活作用に現參した。

といふのは生憎、此の狀態が自分の希望通同じ所に留つてゐてくれなかつた。動いて來た。油の盡きかかつたランプの灯の樣に動いて來た。意識を數字であらはすと、平生十のものが、今は五になつて留まつてゐた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零にならなければならない。自分は此の經過に連れて淡くなりつゝ變化する嬉しさを自覺してゐた。此の經過に連れて淡く變化する自覺の度に於て自覺してゐた。嬉しさは何處迄行つても嬉しいに違ない。だから理窟から云ふと、意識がどこ迄降つて行かうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、滿足するより外に道はない筈である。所が段々

と競り卸して來て、愈零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した。こいつは死ぬぞと云ふ考へが躍り出した。すぐに續いて、死んぢや大變だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、豁と眼を開いた。足の先が切れさうである。膝から腰迄が血が通つて氷りついてゐる。腹は氷でも詰めた樣である。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思ふと、「死ぬぞ、死んぢや大變だ」迄が順々につながつて來て、そこで、ぷつりと切れてゐる。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向轉換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた譯になるから、二つのものは全く離れてゐる。それで全く續いてゐる。續いてゐる證據には、眼を開いて、身の周圍を見た時に、「死ぬぞ……」と云ふ聲が、まだ耳に殘つてゐた。慥かに殘つてゐた。自分は聲だの耳だのと云ふ字を使ふが、外には形容しやうがないからである。形容所ではない、實際に「死ぬぞ……」と注意して呉れた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論ゐる筈はなし。と云つて、神——神は大嫌だ。矢つ張り自分が自分の心に、あわてゝ思ひ浮べた迄であらうが、夫程人間が死ぬのを苦に病んでゐやうとは夢にも思ひ浮べなかつた。これだから自殺抔は出來ない筈である。かう云ふ時は、魂の段取が平生と違ふから、自分で自分の本能に支配されながら、丸で自覺しないものだ。氣を附けべき事と思ふ。此の例なども、解釋のしやうでは、神が助けて呉れたともなる。自分の影身に附き添つてゐる——まあ戀人が多い樣だが——さう云ふ人々の魂が救つたんだともなる。年の若い割に、自分が此の聲を艶子さんとも澄江さんとも解釋しなかつたのは、己惚の強い割には感心である。自分は生れつき夫程詩的でなかつたんだらう。

　そこへ初さんがひよつくり歸つて來た。初さんを見るが早いか、自分の意識は愈明瞭になつた。是れ

から例の逆棧道を登らなくつちやならない事も、明日から、鑿と槌でかあん〳〵遣らなくつちやならない事も、南京米も、南京蟲も、ジヤンボーも達磨も一時に殘らず分つて仕舞ひ、さうして最後に自分の墮落が尤も明かに分つた。

「些たあ氣分は好いか」

「え〻少しは好い樣です」

「ぢや、そろ〳〵登つて遣らう」

と云ふから、禮を云つて立つてゐると、初さんは景氣よく段木を捕へて片足踏ん掛けながら、

「登りは少し骨が折れるよ。其の積で尾いて來ねえ」

と振り返つて、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になつて、下から見上ると、初さんは登つて行く。猿の樣に登つて行く。そろ〳〵登つて呉れる樣子も何もありやしない。早くしないと又置いてきぼりを食ふ恐れがある。自分も思ひ切つて登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちに成程と感心した。初さんの云ふ通り非常に骨が折れる。全く疲れてゐる許りぢやない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か脊の重みを梯子に託する事が出來る。然し上りになると、全く反對で、稍ともすると、身體が後へ反れる。反れた重みは、兩手で持ち應へなければならないから、二の腕から肩へかけて一段毎に餘分の税がか〻る。のみならず、手の平と五本の指で、此の〆高を握らなければならない。それが前に云つた通りぬる〳〵する。梯子を一つ片附けるのは容易の事ではない。しかも夫が十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさへすれば眞暗闇に逆落しになる。離すま

いとすれば肩が抜ける許りだ。自分は七番目の梯子の途中で火焔の樣な息を吹きながら、つく〴〵勞働の困難を感じた。さうして熱い涙で眼が一杯になつた。

二三度上瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覺はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さへ慥には分らない。手の甲で擦らうと思ふが、生憎兩方とも塞がつてゐる。自分は口惜くなつた。何故こんな猿の眞似をする樣に零落たのかと思つた。倒れさうになる身體を、出來る丈前の方にのめらして、梯子に倚れる丈倚れて考へた。休んだと註釋する方が適當かも知れない。たゞ中途で留まつたと云ひ切つても宜しい。何しろ動かなくなつた。又動けなくなつた。凝として立つてゐた。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ淸水が沁み込むのも、全く氣が附かなかつた。從つて何分過つたのか頓と感じに乘らない。すると又熱い涙が出て來た。心が存外慥かであるのに、眼丈が霞んでくる。いくら瞬をしても駄目だ。湯の中に眸を漬けてる樣だ。くしや〳〵する。焦心たくなる。癇が起る。奮興の度が烈しくなる。さうして、身體は思ふ樣に利かない。自分は齒を食ひ締つて、兩手で握つた段木を二三度搖り動かした。無論動きやしない。一層の事、手を離しちまはうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ碎ける方が、早く片が附いていゝ。とむら〳〵と死ぬ氣が起つた。――梯子の下では、死んぢや大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ來ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ氣になつたのは、自分の生涯に於ける心理推移の現象のうちで、尤も記憶すべき事實である。自分は心理學者でないから、かう云ふ變化を、どう說明したら適切であるか知らないけれども、心理學者は却て、實際の經驗に乏しい樣にも思ふから、杜撰ながら、一應自分の愚見丈を述べて、參考にしたい。

アテシコを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覺悟であつた。から心に落ち附きが有る。刺激が少い。さう云ふ狀態で壁へ倚りかゝつてゐると、其の狀態がなだらかに進行するから、自然の勢ひとして段々氣が遠くなる。魂が沈んで行く。かう云ふ場合に於ける精神運動の方向は、いつも極まつたもので、必ず積極から出立して次第に消極に近づく徑路を取るのが普通である。所が其の普通の徑路を行き盡くして、もう是れがどん詰だと云ふ間際になると、魂が割れて二樣の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢ひで、此どん底迄流れ込んで仕舞ふ。すると夫限死ぬ。でなければ、大切の手前迄行つて、急に反對の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると命が忽ち確實になる。自分が梯子の下で經驗したのは此の第二に當る。だから死に近づきながら好い心持に、三途の此方側迄行つたものが、順路をてく〳〵引き返す手數を省いて、急に、娑婆の眞中に出現したんである。自分は之を死を轉じて活に歸す經驗と名づけてゐる。

所が梯子の中途では、全く之と反對の現象に逢つた。自分は初さんの後を追つ懸けて登らなければならない。其の初さんは、とつくに見えなくなつて仕舞つた。心は焦る、氣は揉める、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。――萬事が痛切である。自覺の強度が次第々々に劇しくなる許りである。だから此の場合に於ける精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める狀態である。偖て其の狀態がいつ迄も進行して、奮興の極度に達すると、矢張り二樣の作用が出る譯だが、とくに面白いと思ふのは其一つ、――卽ち積極の頂點からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現はれる奇特である。平たく云ふと、生きてる事實が明瞭になり切つた途端に、命を棄て樣と決心する現象を云ふん

である。自分は之を活上より死に入る作用と名けてゐる。此の作用は矛盾の如く思はれるが實際から云ふと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行はれるものである。論より證據發奮して死ぬものは奇麗に死ぬが、いぢけて殺されるものは、どうも旨く死に切れない樣だ。人の身の上は兎に角、かう云ふ自分が好い證據である。梯子の途中で、えゝ忌々しい、死んじまへと思つた時は、手を離すのが怖くも何ともなかつた。無論例の如くどきん抔とは決してしなかつた。所がいざ死なうとして、手を離しかけた時に、又妙な精神作用を承當した。

自分は元來が小說的の人間ぢやないんだが、まだ年が若かつたから、今迄浮氣に自殺を計畫した時は、いつでも花々しく遣つて見せたいと云ふ念があつた。短銃でも九寸五分でも立派に――つまり人が賞めてくれる樣に死んで見度と考へてゐた。出來るならば、華厳の瀑迄でも出向きたい抔と思つた事もある。然しどうしても便所や物置で首を縊るのは下等だと斷念してゐた。其虛榮心が、此の際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。詰り出す丈の餘地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心は如何に眞面目であつたにしても、左程差し逼つてはゐなかつたんだらう。然し此の位斷乎として、現に梯子段から手を離しかけた、最中に首を出す位だから、相手も中々淺い勢力を張つてゐたに違ない。尤も是れは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔もあるまいから、普通の人間としては別に怪しむ可き願望とも思はないが、何しろ此の際の自分には、ちと贅澤過ぎた樣だ。然し此の贅澤心の爲に、自分は發作性の急往生を思ひとまつて、不束ながら今日迄生きてゐる。全く今はの際にも弱點を引張つてゐた御蔭である。

話すとかうなる。――愈死んぢまへと思つて、體を心持後へ引いて、手の握をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、此處で死んだつて冴えない。待て待て、出てから華嚴の瀑へ行けと云ふ號令――號令は變だが、全く號令のやうなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊つた。曇つた眼が、急に明かるくなつた。カンテラが燃えてゐる。仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中迄續いてゐる。是非共登らなければならない。もし途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で、誰も人のゐない所で、日の目も見ないで、鑛と同じ樣にころげ落ちて、それつきり忘れられるのは――案内の初さんにさへ忘れられるのは――よし見附かつても半獸半人の坑夫共に輕蔑されるのは無念である。是非共登り切つちまはなければならない。カンテラは燃えてゐる。梯子は續いてゐる。梯子の先には坑が續いてゐる。坑の先には太陽が照り渡つてゐる。廣い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。――どうあつても登らなければならない。

左の手を頭の上迄伸ばした。ぬらつく段木を指の痕のつく程強く握つた。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カンテラの灯は暗い中を竪に動いて行く。坑は層一層と明かるくなる。踏み棄てゝ去る段々は次第々々に暗い中に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ當る。熱い息である。さうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴つた。梯子はまだ盡きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカンテラを翻へすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかゝつて、手の運動の止まる所へ落ち附いた時に、又眞直に油煙を立てる。又翻へす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉つて、登る。灯も見えない、壁も見えない。たゞ暗

い。手と足が動いてゐる。動く手も動く足も見えない。手障足障丈で生きて行く。生きて登つて行く。生きると云ふのは登る事で、登ると云ふのは生きる事であつた。それでも――梯子はまだある。

それから先は殆ど夢中だ。自分で登つたのか、天佑で登つたのか殆ど判然しない。たゞ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云ふ事を覺つた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて來たか。途中で死にやしねえかと思つて、――あんまり長えから。見に行かうかと思つたが、一人ぢや氣味がわるいからな。だけども、好く上がつて來たな。えらいや」

と待ちかねて、もぢ〳〵してゐた初さんが大いに喜んで呉れた。何でも梯子の上で餘つ程心配してゐたらしい。自分はたゞ、

「少し氣分が惡るかつたから途中で休んでゐました」

と答へた。

「氣分が惡い？そいつあ困つたらう。途中つて、梯子の途中か」

「えゝ、まあさうです」

「ふうん。ぢや明日は作業も出來めえ」

此の一言を聞いた時、自分は糞でも食へと思つた。誰が土龍の眞似なんかするものかと思つた。是れでも美しい女に惚れられたんだと思つた。坑を出れば、すぐ華厳の瀑迄行くんだと思つた。さうして立派に死ぬんだと思つた。最後に半時も斯んな獸を相手にして居られるものかと思つた。そこで、自分は初さんに向つて、簡單に、

「宜ければ上がりませう」

と云つた。初さんは怪訝な顔をした。

「上がる？元氣だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、此の明盲目め。人を見損なやがつて」と云ひたかつた。然し口丈は叮嚀に、一言、

「えゝ」

と返事をして置いた。初さんはまだ愚圖々々してゐる。驚いたと云ふよりも、矢張り馬鹿にした愚圖つき方である。

「おい大丈夫かい。冗談ぢやねえ。顏色が惡いぜ」

「ぢや僕が先へ行きませう」

と自分はむつとして歩き出した。

「不可ねえ、不可ねえ。先へ行つちや不可ねえ、後から尾いて來ねえ」

「さうですか」

「當前だあな。人つけ。誰が案内を置き去にして、先へ行く奴があるかい。何でい」

と初さんは、自分を拂ひ退けない許りにして、先へ出た。出たと思ふと急に速力を增した。腰を折つたり、四つに這つたり、脊中を横つ丁にしたり、頭丈曲げたり、坑の恰好次第で色々に變化する。さうして非常に急ぐ。丸で土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間の樣である。畜生中つ腹で急ぎやがるなと、

此方も負けない氣で歩き出したが、そこへ行くと、いくら氣許り張つてゐても駄目だ。五つ六つ角を曲つて、下りたり上つたり、我多つかせてゐるうちに、初さんは見えなくなつた。と思ふと、何とかして、何とか、てゝゝゝと云ふ歌を唄ふ。初さんの姿が見えないのに、初さんの聲丈は、坑の四方へ反響して、籠つた樣に打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つ附いて遣るから今に見てゐろと云ふ勢で、根限り這つたり屈んだりしたが、殘念な事には初さんの歌が段々遠くへ行つて仕舞ふ。そこで自分は追ひ附く事は一先づ斷念して、初さんのてゝゝゝを道案内にして進む事にした。當分は夫で大概の見當が附いたが、仕舞には其のてゝゝゝも怪しくなつて、とう〳〵丸で聞えなくなつた時には、流石に茫然とした。一本道なら初さんなんどを頼りにしなくつても、自力で日の當る所迄歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒した坑だから、丸で土蜘蛛の根據地見た樣に色々な穴が、飛んでもない所に開いてゐる。滅多な穴へ這入るとまた腰きり水に漬る所か、でなければ、例の逆さの棧道へ出さうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考へた。往きには八番坑迄下りて行つたんだから歸りには是非共電車の通る所まで登らなければならない。どんな穴でも上りならば好いとする。其代り下りなら引返して、又出直す事にする。さうして迂路ついてゐたら、どこかの作事場へ出るだらう。出たら坑夫に聞くとしやう。かう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷つて居た。非常に氣が急いて息が切れたが、滅茶々々に歩いた爲に足の冷たいの丈は癒つた。然し中々出られない。何だか同じ路を往つたり來たりする樣な案排で、あんまり、もどかしいものだから、壁へ頭を打けて割つちま

いたくなつた。どつちを割るんだと云へば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだらう位の癇癪が起つた。どうも歩けば歩く程天井が邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋の底で踏む段々が邪魔になる。坑總體が自分を閉ぢ込めて、いつ迄立つても出して呉れないのが尤も邪魔になる。此の邪魔ものゝ一局部へ頭を擲きつけて、責めて罅でも入らしてやらうと——やらない迄も時々思ふのは、早く華厳の瀑へ行きたいからであつた。さうかうしてゐるうちに、向ふから一人の掘子が來た。ばらの銅をスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕を抱いてよち〱カンテラを搖りながら近づいた。此の灯を見附た時は、嬉しくつて胸がどきりと飛び上がつた。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近寄るがものはない、向ふでも此方へ歩いて來る。二つのカンテラが一間許りの距離に近寄つた時、待ち受けた樣に、自分は掘子の顏を見た。すると其顏が非常な蒼ん藏であつた。此坑のなかですら、只事とは受取れない蒼ん藏である。明海へ出して、青い空の下で見たら、大變な蒼ん藏に違ない。それで口を利くのが厭になつた。こんな奴の癖に人に調戯たり、嬲つたり、辱しめたりするのかと思つたら、猶々道を聞くのが厭になつた。死んだつて一人で出て見せると云ふ氣になつた。手前共に口を聞く樣な安つぽい男ぢやないと、腹の中で慥に申し渡して擦れ違つた。向ふは何にも知らないから、是れは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カンテラは一つになつた。氣は益焦慮つて來た。けれども中々出ない。たゞ道は何處迄もある。右にも左にもある。自分は右にも這入つた、又左にも這入つた、又眞直にも歩いて見た。然し出られない。愈出られないのかと、少しく途方に暮れてゐる鼻の先で、かあん〱と鳴り出した。五六歩で突き當つて、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫がしきりに槌を振り上げて鑿を敲いてゐる。敲くたんびに鑛が壁

から落ちて來る。其の傍に俵がある。是はさつきスハコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もう一杯詰つてゐる。掘子が來て擔いで行く許りだ。自分は今度こそこいつに聞いて遣らうと思つた。が肝心の本人が一生懸命にかあん／＼鳴らしてゐる。おまけに顏もよく見えない。丁度いゝから少し休んで行かうと云ふ氣が起つた。幸ひ俵がある。此の上へ尻を卸せば、持つて來いの腰掛になる。自分はどさつとアテシコを俵の上に落した。すると突然かあん／＼が已んだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿を持つた儘である。

「何を爲やがるんでい」

鋭い聲が穴一杯に響いた。自分の耳には敲き込まれる樣に響いた。高い影は大股に歩いて來る。見ると、足の長い、胸の張つた、體格の逞しい男であつた。顏は脊の割に小さい。其輪廓が稍判然する所迄來て、男は留まつた。さうして自分を見下した。口を結んでゐる。二重瞼の大きな眼を見張つてゐる。鼻筋が眞直に通つてゐる。色が赭黑い。たゞの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴樣は新前だな」

「さうです」

自分の腰は此の時既に俵を離れてゐた。何となく、向ふから近附いてくる坑夫が恐ろしかつた。今迄一萬餘人の坑夫を畜生の樣に輕蔑してゐたのに、――誓つて死んで仕舞はうと覺悟をしてゐたのに、――大股に歩いて來た坑夫が忽ち恐ろしくなつた。然し、

「何でこんな所を迷子ついてるんだ」

と聞き返された時には、稍安心した。自分の樣子を見て、故意に俵の上へ腰を卸したんでないと見極めた

語調である。

「實は昨夕飯場へ着いて、樣子を見に坑へ這入つた許です」

「一人でか」

「いゝえ、飯場頭から人を附けて呉れたんですが……」

「さうだらう、一人で這入れる所ぢやねえ。どうした其の案內は」

「先へ出ちまいました」

「先へ出た？手前を置き去りにしてか」

「まあ、さうです」

「太え野郎だ。よし〳〵今に己が送り出してやるから待つてろ」

と云つたなり、又鑿と槌をかあん〳〵鳴らし始めた。自分は命令の通り待つてゐた。此の男に逢つたら、もう一人で出る氣がなくなつた。死んでも一人で出て見せると威張つた決心が、急に何處へか行つて仕舞つた。自分は此變化に氣が附いてゐた。それでも別に恥かしいとも思はなかつた。人に公言した事でないから構はないと思つた。其の後人に公言した爲に、遣らないでも濟む事、遣つてはならない事を每度遣つた。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その內かあん〳〵が已んだ。坑夫は又自分の前まで來て、胡坐をかきながら、

「一寸待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さ

つてゐた。坑夫は旨さうに腹の底迄吸つた煙を、鼻から吹き出してゐる間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でほんと拂いた。小さい火球が雁首から勢ひよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落ちてじゆうと消えた。坑夫は殻になつた煙管をぷつと吹く。羅宇の中に籠つた煙が、一度に雁首から出た。坑夫は其時始めて口を利いた。

「御前は何處だ。斯んな所へ全體何しに來た。身體つきは　すらりとしてゐる樣だが。今迄働いた事はねえんだらう。どうして來た」

「實は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」

と迄は云つたが、坑夫には愛想が盡きたから、もう、歸るんだとは云はなかつた。死ぬんだとは猶更云はなかつた。然し今迄の樣に、腹の内で畜生あつかひにして、口先許り叮嚀にしてゐたのとは大分趣が違ふ。自分はたゞ洗ひ攫ひ自分の思はくを話して仕舞はない丈で、話した丈は眞面目に話したんである。すこしも裏表はない。腹から叮嚀に答へた。坑夫はしばらくの間默つて雁首を眺めてゐた。それから又煙草を詰めた。煙が鼻から出だした眞最中に口を開いた。

自分が其の時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使つた漢語である。――彼れは坑夫抔の夢にも知り樣筈がない漢語を安々と、恰も家庭の間で昨日迄常住坐臥使つてゐたかの如く、使つた。自分は其の時の有樣をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張つたなり、自分の顏を熟視した儘、心持頸を前の方に出して、胡坐の膝へ片手を逆に突いて、左の肩を少し聳して、右の指で煙管を握つて、薄い

唇の間から奇麗な齒を時々あらはして、――こんな事を云つた。句の順序や、單語の使ひ方は、慥かな記憶を其の儘寫したものである。たゞ語聲丈はどうしやうもない。――

「龜の甲より年の功と云ふことがあるだらう。こんな賤しい商賣はしてゐるが、まあ年長者の云ふ事だから、參考に聞くがいゝ。青年は情の時代だ。おれも覺がある。情の時代には失敗するもんだ。君もさうだらう。己もさうだ。誰でも左樣に極つてる。だから、察してゐる。君の事情と己の事情とは、どの位違ふか知らないが、何しろ察してゐる。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだらう。聞いて相談になれる身體なら聞きもするが、シキから出られない人間ぢや聞いたつて、仕方なし、君も話して呉れない方がいゝ。おれも……」

と云ひ掛けた時、自分は此男の眼附が多少異樣にかゞやいてゐたと云ふ事に氣がついた。何だか大變感じてゐる。之が當人の云ふ如くシキを出られない爲か、又は今云ひ掛けたおれもの後へ出て來る話の爲か、一寸分り惡いが、何しろ妙な眼だつた。しかも此の眼が鋭く自分を見詰めてゐる。さうして其の鋭いうちに、懷舊と云ふのか、沈吟と云ふのか、何だか、人を引き附けるなつかしみがあつた。此の黑い坑の中で、人氣は此の坑夫丈で、此の坑夫は今や眼丈である。自分の精神の全部はたちまち此の眼球に吸ひ附けられた。さうして彼の云ふ事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は學校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。所が二十三の時に、ある女と親しくなつて――詳しい話はしないが、それが基で容易ならん罪を犯した。罪を犯して氣が附いて見ると、もう社會に容れられない身體になつてゐた。もとより醉興でした事ぢやない、已を得ない事情から、已を得な

い罪を犯したんだが、社會は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪は決して見逃さない。おれは正しい人間だ、曲つた事が嫌だから、つまりは罪を犯す樣にもなつたんだが、さて犯した以上は、どうする事も出來ない。學問も棄てなければならない。功名も拋たなければならない。萬事が駄目だ。口惜しいけれども仕方がない。其の上制裁の手に捕へられなければならない。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云ふ言語を使用した。）然し自分が悪い覺がないのに、無暗に罪を着るなあ、どうしても己の性質として出來ない。そこで突つ走つた。逃げられる丈逃げて、此處迄來て、とう〳〵シキの中へ潜り込んだ。それから六年といふもの、つひに日光を見た事がない。毎日々々坑の中でかんかん敲いてゐる許りだ。丸六年敲いた。來年になればもうシキを出たつて構はない、七年目だからな。然し出ない、又出られない。制裁の手には捕まらないが、出ない。かうなりや出たつて仕方がない。娑婆へ歸れたつて、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだらう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪から棒の質問に、用意の返事を持ち合せなかつたから、はつと思つた。自分の腹ん中にあるのは、昔處ろではない。一二年前から一昨日迄持ち越した現在に等しい過去である。自分は一層の事自分の心事を此男の前に打ち明けて仕舞はうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮る如くに、話の續きを始めた。

「六年此處に住んでゐるうちに人間の汚ない所は大抵見悉した。でも出る氣にならない。いくら腹が立

つても、いくら嘔吐を催しさうでも、出る氣にならない。然し社會には、——日の當る社會には——此處よりまだ苦しい所がある。それを思ふと、辛抱も出來る。たゞ暗くつて狹い所だと思へばそれで濟む。身體も今ぢや銅臭くなつて、一日もカンテラの油を嗅がなくつちや居られなくなつた。然し——然しそりやおれの事だ。君の事ぢやない。君がさうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて來ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日で突ッつき殺されてしまふ。それが氣の毒だ。いかにも可哀想だ。理想も何にもない鑿と槌より外に使ふ術を知らない野郎なら、それで結構だが。然し君の樣な——君は學校へ行つたらう。——何處へ行つた。——えゝ？まあ何處でもいゝ。それに若いよ。シキへ抛り込まれるには若過るよ。こゝは人間の屑が抛り込まれる所だ。全く人間の墓所だ。生きて葬られる所だ。一度踏ん込んだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陷穽だ。そんな事とは知らずに、大方ポン引の言ひなり次第になつて、引張られて來たんだらう。それを君の爲に悲しむんだ。人一人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が淺い。墮落した奴はそれ丈害をする。他人に迷惑を掛ける。——實はおれも其の一人だ。が、かうなつちや墮落してるより外に道はない。いくら泣いたつて、悔んだつて墮落してるより外に道はない。だから君は今のうち早く歸るがいゝ。君が墮落すれば、君の爲にならない許りぢやない。——君は親があるか……」

自分はたゞ一言あると答へた。

「あれば猶更だ。それから君は日本人だらう……」

自分は默つてゐた。

「日本人なら、日本の爲になる樣な職業に就いたら宜からう。學問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く歸るがよからう。東京なら東京へ歸るさ。さうして正當な――君に適當な――日本の損にならない樣な事をやるさ。何と云つても此處は不可ない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから歸れ。分つたらう。おれは山中組にゐる。山中組へ來て安さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて來るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉は是で終つた。坑夫の數は一萬人と聞いてゐた。其一萬人は悉く理非人情を解しない畜類の發達した化物とのみ思ひ詰めた此の時、此の人に逢つたのは全くの小說である。夏の土用に雪が降つたよりも、坑の中で安さんに說諭された方が、餘程の奇蹟の樣に思はれた。大晦日を越すとお正月が來る位は承知してゐたが、地獄で佛と云ふ諺も記憶してゐたが、窮まれば通ずといふ熟語も習つた事もあるが、困つた時は誰か來て助けて呉れさうなものだ位に思つて、芝居氣を起しては困つてゐた事も度々あるが、――此の時は丸で違ふ。眞から一萬人を畜生と思ひ込んで、其の畜生が又悉く自分の敵だと考へ詰めた最强度の斷案を、忘るべからざる痛忿の焰で、胸に燒き附けた折柄だから、猶更此の安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に飜へし得る程の力を以て、自分の耳に應へた。

しばらくは二人して默つてゐた。安さんは一應云ふ丈の事を云つて仕舞つたんだから、口を利かない筈であるが、自分は先方に對して、何とか返事をする義務がある。義務とかいては安さんに濟まない。心底から感謝の意を表した上で、自分の考へも少し聞いてもらひたいのは山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも强ひて言葉を出さうとすると、口へ出ないで鼻へ拔けさうになる。夫れを我

慢すると、唇の兩端がむづ〳〵して、小鼻がぴく付いて來る。やがて鼻と口を塞かれた感動が、出端を失つて、眼の中にたまつて來た。睫が重くなる。瞼が熱くなる。大に困つた。安さんも妙な顏をしてゐる。二人ともばつが惡くなつて、差し向ひで胡坐をかいた儘、默つてゐた。其の時次の作事場で鑛を敲く音がかあん〳〵鳴つた。今考へると、自分と安さんが默然と顏を見合せてゐた場所は、地面の下何百尺位な深さだか、それを正確に知つて置きたかつた。都會でも、こんな奇遇は少い。銅山の中では有らう筈がない。日の照らない坑の底で、世から、人から、歷史から、太陽からも、忘れられた二人が、難有い誨を垂れて、尊とい淚を流した舞臺があらうとは、胡坐をかいて、默然と互に顏を見守つてゐた本人より外に知るものはあるまい。

安さんは又煙草を呑み出した。ぷかり〳〵と煙が出た。其の煙が濃く出ては暗がりに消え、濃く出ては暗がりに消える間に、自分は漸く聲が自由になつた。

「難有いです。成程あなたの仰やる通り人間のゐる所ぢやないでせう。僕もあなたに逢ふ迄は、今日限り銅山を出樣かと思つてたんです。……」

流石山を出て死ぬ積だつたとは云ひかねたから、玆處で一寸句を切つたら、

「そりや猶更だ。早速歸るがいゝ」

と、安さんが勢ひをつけて呉れた。自分は矢つ張り默つてゐた。すると、

「だから旅費はおれが拵へてやるから」

と云ふ。自分は先きから旅費々々と聞かされるのを、只善意に解釋してゐたが、左ればと云つて毫も貰ふ

氣は起らなかつた。昨日飯場頭の合力を斷つた時の料簡と同じかと云ふと、其とも違ふ。昨日は是非貰ひたかつた、地平へ手を突いて迄貰ひたかつた。然し草鞋錢を貰ふよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂きたい所を、無理に斷つたんである。安さんの旅費は始めから貰ひたくない。好意を空しくすると云ふ點から見れば、貰はなければ濟まないし、坑夫を已めるとすれば貰ふ方が便利だが、それにも拘らず貰ひたくなかつた。是は今から考へると、全く向ふの人格に對して、貰つては恥づべき事だ、こちらの人格が下がるといふ念から萌したものらしい。先方が如何にも立派だから、此方も出來る丈立派にしたい、立派にしなければ、自分の體面を損ふ虞がある。向ふの好意を享けて、相當の滿足を先方に與へるのは、此方も悦ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫りに自己の利得のみを標準に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分は此の尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云ふ事實上の證明を與へるに忍びなかつた。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗なものである。自分は、

「旅費は頂きません」

と斷つた。

此の時安さんは、煙草を二三ぶく吸して、煙管を筒へ入れかけてゐたが、自分の顏をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云つたんで、自分は非常に氣の毒になつた。もし遣るから貰つて置けとでも強ひられたなら屹度受けたに違ない。其の後氣をつけて、人が金を貰ふ所を見てゐると、始めは一應辭退して、後では大抵懷へ入れる樣だが、是は全く此の心理狀態の發達した形式に過ぎないんだらうと思ふ。幸ひ安さんがえらい男で、

「こりや失敬した」と云つて呉れたんで、自分は此の形式に陥らずに濟んだのは難有かつた。
安さんはすぐさま旅費の件を撤回して
「だが東京へは歸るだらうね」
と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍つた際だから、ことによれば、旅費丈でも溜めた上、歸る事にしやうと云ふ腹もあつたんで、
「よく考へて見ませう。いづれ其の中又御相談に參りますから」
と答へた。
「さうか。それぢや、兎に角路の分る所迄送つてやらう」
と煙草入を股引へ差し込んで、上から筒服の胴を被せた。自分はカンテラを提げて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑は存外登り安かつた。例の段々を四五遍通り抜けて、二度程四つん這ひになつたら、可成天井の高い、眞直に立つて歩ける樣な路へ出た。それをだら〳〵と廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電氣燈の見える所で留つた。
「ぢや、是で別れ樣。あれが見張所だ。あすこの前を右へ附いて上がると、軌道の敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくつちやあ出られない。晩には歸る。五時過ならゐるから、暇があつたら來るがいゝ。氣を附けて行き玉へ。左樣なら」
安さんの影は忽ち暗い中へ這入つた。振り向いて、一口禮を云つた時は、もうカンテラが角を曲つてゐた。自分は一人でシキの入口を出た。ふら〳〵長屋迄歸つて來る。途中で色々考へた。あの安さんと云ふ

男が、順當に社會の中で伸びて行つたら、今頃は何に成つてゐるか知らないが、どうしたつて坑夫より出世してゐるに違ない。社會が安さんを殺したのか、安さんが社會に對して濟まない事をしたのか――あんな男らしい、すつきりした人が、さう無暗に亂暴を働く譯がないから、ことによると、安さんが惡いんでなくつて、社會が惡いのかも知れない。自分は若年であつたから、社會とはどんなものか、其の當時明瞭に分らなかつたが、何しろ、安さんを追ひ出す樣な社會だから碌なもんぢやなからうと考へた。安さんを贔屓にする所爲か、どうも安さんが逃げなければならない罪を犯したとは思はれない。社會の方で安さんを殺したとして仕舞はなければ氣が濟まない。其の癖今云ふ通り社會とは何者だか要領を得ない。たゞ人間だと思つてゐた。其の人間が何故安さんの樣な好い人を殺したのか猶更分らなかつた。だから社會が惡いんだと斷定はして見たが、一向社會が憎らしくならなかつた。唯安さんが可哀想であつた。出來るなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺しに此處まで來たんである。厭になれば歸つても差支ない。安さんは人間から殺されて、仕方なしに此處に生てゐるんである。歸らうたつて、歸る所はない。どうしても安さんの方が氣の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、成程墮落に違ない。けれども其の墮落がたゞ身分の墮落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味してゐる樣だから痛ましい。安さんも達磨に金を注ぎ込むのかしら、坑の中で一六勝負をやるのかしら、ジャンボーを病人に見せて調戯いかしら、女房を抵當に――まさか、そんな事もあるまい。昨日着き立ての自分を見て愚弄しないものゝないうちで、安さん丈は暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めて吳れた。安さんは坑夫の仕事はしてゐる

が、心迄の坑夫ぢやない。夫れでも堕落したと云つた。しかも此の堕落から生涯出る事が出來ないと云つた。堕落の底に死んで活きてるんだと云つた。それ程堕落したと自覺してゐながら、生きて働いてゐる。生きてかん／＼敲いてゐる。生きて――自分を救はうとしてゐる。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

かう決心をして、何でも構はないから、一先坑夫になつた上として、出來る丈急ぎ足で歸つて來ると、長屋の半丁許手前に初さんが石へ腰を掛けて待つてゐる。雨は歇んだ。空はまだ曇つて居るが、濡れる氣遣はない。山から風が吹いて來る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの餘り、疲れた足を擦りながら、いそ／＼近附いてくると、初さんは奇怪な顏をして、

「やあ出て來たな。よく路が分つたな」

と云つた。自分が案内に附けられながら、他を置き去りにして、何とかして何とか、てゝゝゝと云ふ唄をうたつて、大いに焦して置いて、他が大迷つきに、迷ついて、穴の角へ頭を打つ附けて割つて見樣と迄思つた揚句、やつとの事で安さんの御情で出て來れば、「よく路が分つたな」と空とぼけてゐる。其の癖親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、一所に連れて歸らうと云ふ目算である。自分は石へ腰を掛けて薄笑ひをしてゐる此の案内の頭の上へ唾液を吐きかけてやらうかと思つた。然し自分は死ぬのを斷念したばかりである。當分は此所に留まらなくつちやならない身體である。唾液を吐きかければ、喧嘩になる丈である。喧嘩をすれば負る丈である。負た上にスノコの中へ打ち込れては折角死ぬのを斷念した甲斐がない。そこで、斯う云ふ答をした。

「どうか、かうか出て來ました」
すると初さんは猶更不思議な顏をして、
「へえ。感心だね。一人で出て來たのか」
と聞いた。其の時自分は年の割にはうまくやつた。旨くやつたと云ふ位だから、たゞ自分の損にならないやうにと云ふ丈で、それより以外に賞める價値のある所作ぢやないが、兎に角十九にしては、中々複雜な曲者だと思ふ。と云ふのは、かう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先迄出たんである。所をとう〱云はずに仕舞つたのが自慢なのだ。隨分くだらない自慢だが譯を話せば、こんな料簡であつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。此の安さんがわざ〱第一見張所の傍迄見ず知らずの自分を親切に連れて來て呉れたと云ふ事が知れ渡れば、此の案內者は面目を失ふに極つてゐる。責任のある自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出して仕舞つたと分る以上は――しかもそれが惡意から出たと明瞭に證據だてられる以上は、此奴は親方に對して濟ましちやゐられない。となると後で屹度敵を打つだらう。無責任が露見るのは痛快だが――自分は決して寬大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。――そこ迄は痛快だが、敵打は大に迷惑する。實の所自分は此の迷惑の念に制せられた。それで、
「えゝ、色々路を聞いて出て來ました」
と大人しい返事をして置いた。
初さんは半分失望した樣な、半分安心した樣な顏附をしたが、やがて石から腰を上げて、
「親方の所へ行かう」

と又歩き出した。自分は默つて尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁程上ると、石垣で二方の角を取つて平した地面の上に二階建がある。家は左程見苦しくもないが、家の外には木も庭もない。相變らず二階の窓から惡魔が首を出してゐる。入口迄來て、初さんが外から聲を掛けると、窓をがらりと明けて、飯場頭が顏を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着た儘である。

「歸つたか。御苦勞だつた。まあ彼方へ行つて休みねえ」

と云ふが早いか初さんは消えてなくなつた。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つた儘、談話をした。

「どうです」

「大概見て來ました」

「何處迄降りました」

「八番坑迄降りました」

「八番坑迄。そりや大變だ。隨分ひどかつたでせう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで――矢つ張り居る積です」

「矢つ張り」

と繰り返したなり、飯場頭は眤と自分の顏を見てゐた。自分も默つて立つてゐた。二階からは依然として、

首が出てゐる。おまけに二つ許り殖えた。此の顔を見ると、厭で厭で堪らない。飯場へ歸つてから、此の顔に取り巻かれる事を思ひ出すと、ぞつとする。それでも居る氣である。どんな辛抱をしても居る氣である。然し「矢つ張り居る積です」と斷然答へて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかつた。こんな奴と一所に置いて呉れと、手を合せて拜まなければ始末がつかない樣になり下がつたのかと思ふと、身體も魂も鹽を懸けた海鼠の樣にたわいなくなつた。其の時飯場頭は漸く口を利いた。奇麗さつぱりと利いた。

「ぢや置く事にしやう。だが規則だから、醫者に一遍見て貰つてね。健康の證明書を持つて來なくつちや不可ない。――今日と――今日は、もう遲いから、明日の朝、行つて見て貰つたらよからう。――診察場かい。診察場は是れから南の方だ。上がつて來る時、見えたらう。あの青いペンキ塗りの家だ。ぢや今日は疲れたらうから、飯場へ歸つて緩くり御休み」

と云つて窓を閉てた。窓を閉てる前に自分は一寸頭を下げて、飯場へ引返した。緩くり御休みと云つて呉れた飯場頭の親切は難有いが、緩くり寐られる位なら、こんなに苦しみはしない。起きてゐれば獰猛組、寐れば南京蟲に責められる許だ。たま〳〵飯の蓋を取れば咽喉へ通らない壁土が出て來る。――然し居る。居ると極めた以上は、どうしても居て見せる。少くとも安さんが生きてるうちは居る。シキの人間がみんな南京蟲になつても、安さんさへ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考へである。かう考へながら半丁程の路を降りて飯場へ歸つて、二階へ上がつた。上がると案のじやう大勢圍爐裏の傍に待ち構へてゐる。自分はくさ〳〵したが、出來る丈何喰はぬ顔をして、邪魔にならない樣な所へ坐つた。すると始まつ

た。皮肉だか、冷評だか、罵詈だか、滑稽だか、のべつに始まつた。一々覺えてゐる。生涯忘れられない程に、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覺えてゐる。然し一々繰返す必要はない。先づ大體昨日と同じ事と思へば好い。自分は急に安さんに逢ひたくなつた。例の夕食を我慢して二杯食つて、みんなの眼につかない樣にそつと飯場を拔け出した。

山中組はジャンボーの通つた石垣の間を拔けて、だら〳〵坂の降り際を、右へ上ると斜に頭の上に被さつてゐる大きな樅の奥にある。夕暮の門口を覗いたら、一人の掘子がカンテラの燈で筒服の掃除をしてゐた。中は存外靜かである。

「安さんは、もうお歸りになりましたか」

と叮嚀に聞くと、掘子は顏を上げて一寸自分を見た儘、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて來たよ」

と呼び出しにかゝるや否や、安さんは待つてたと云はん許りに足音をさせて出て來た。

「やあ來たな。さあ上れ」

見ると安さんは唐棧の着物に豆絞か何にかの三尺を締めて立つてゐる。丸で東京の馬丁の樣な服裝である。是れには少し驚いた。安さんも自分の樣子を眺めて首を傾けて、

「成程東京を走つた儘の服裝だね。おれも昔はさう云ふ着物を着たこともあつたつけ。今ぢや是れだ」

と兩袖の裄を引つ張つて見せる。

「何と見える。車引かな」

と云ふから、自分は遠慮してにや〳〵笑つてゐた。安さんは、
「ハヽヽ根性は是れよりまだ墮落してるんだ。驚いちや不可ない」
自分は何と答へてい〻か分らないから、矢張りにや〳〵笑つて立つてゐた。此の時分は手持無沙汰でさへあればにや〳〵して濟ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙か世馴れてゐる。此の體を見て、
「さつきから來るだらうと思つて待つてゐた。さあ上れ」
と向ふから始末をつけて呉れた。此の人は世馴れた知識を應用して、世馴れない人を救ける方の側だと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけてゐたから特別に感心したんだらう。そこで安さんの云ふ通り長屋へ上つて見た。部屋は矢つ張り廣いが、自分の泊つた所程でもない。電氣燈は點いてゐる。圍爐裏もある。たゞ人數が少い。しめて五六人しかゐない。しかも、それが向ふに塊つてゐるから、此方はたつた二人である。そこで又話を始めた。
「何時歸る」
「歸らない事にしました」
安さんは馬鹿だなあと云はない許りの顔をして呆れてゐる。
「あなたの仰しやつた事は、よく分つてゐます。然し僕だつて、醉興に此處迄來た譯ぢやないんですから、歸るつたつて歸る所はありません」
「ぢや矢つ張り世の中へ顔が出せない樣な事でもしたのか」
と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向ふの方がぎよつとしたらしい。

「さうでもないんですが――世の中へ顔が出したくないんです」

と答へると、自分の態度と、自分の顔附と、自分の語勢を注意してゐた安さんが急に噴き出した。

「冗談云つちや不可ねえ。そんな醉狂があるもんか。世の中へ顔が出し度ないた何の事だ。贅澤ぢやねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえ位だ」

「代れゝば代つて上げたいと思ひます」

と至極眞面目に云ふと、安さんは、又噴き出した。

「どうも手の附け様がないね。考へて御覧な。世の中へ顔が出し度ないものがさ、此シキへ顔が出したくなれるかい」

「些とも出したくはありません。仕方がないから――仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責られました」

安さんは又笑ひ出した。

「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまへて。よし〱おれが今に敵を打つてやるから。其の代り歸るんだぜ」

自分は此の時大變心丈夫になつた。猶々留まる氣になつた。あんな獰猛も此方さへ強くなりや些とも恐ろしかないんだ、十把一束に罵倒する位の勇氣が段々出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取つてくれないでも好いから、どうか歸さずに當分置いて貰へまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、氣の毒さうな顔をして、呆れ返つてゐたが、

「それぢや、居るさ。――何も頼むの頼まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、居にくいですから」

「折角さう云ふんなら、當分にするが可い。長く居ちや不可ない」

自分は謹んで安さんの旨を領した。實際自分も其の考へでゐたんだから、是は決して御交際の挨拶ではなかつた。それから色々な話をしたがシキの中の述懐と大した變りはなかつた。たゞ安さんの兄さんが高等官になつて長崎にゐると云ふ事を聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだらうと思ふにつけ、自分と自分の親と結びつけて考へ出したら何となく悲しくなつた。歸る時に安さんが出口迄送つて來て、相談でもあるなら何時でも來るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出てゐる。路は存外明るい。其の代り大變寒い。袷を通して、襯衣を通して、蒲鉾形の月の光が肌迄浸み込んで來る樣だ。兩袖を胸の前へ合せて、其の中へ鼻から下を突込んで肩を出來る丈け聳やかして歩行き出した。身體はいぢけてゐるが腹の中はさつきより大分暖かになつた。何の當分のうちだ。馴れゝばさう苦にする事はない。何しろ一萬餘人もかたまつて、毎日々々一所に働いて、一所に飯を食つて、一所に寐てゐるんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前に墮落する事は出來るに違ない。――此時自分の頭の中には、墮落の二字が此通りに出て來た。然したゞ此場合に都合のいゝ文字として湧いて出た迄で、墮落の内容を明かに代表してゐなかつたから、別に恐ろしいとも思はなかつた。それで、比較的元氣づいて飯場へ歸つて來た。五六間手前迄來ると、何だか

わい〳〵云つてゐる。外は淋しい月である。自分は内の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、暫らく立つてゐた。さうしたら、どうも這入るのが厭になつた。月を浴びて外に立つてゐるのも、つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらひたくなつた。一歩引き返して見たが、あんまりだと氣を取り直して、のそ〳〵長屋へ這入つた。横手に廣い間があつて、上り口からは障子で立て切つてある。電氣燈が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎは正に此中から出る。自分は下駄を脱いで、足音のしない様に、障子の傍を通つて、二階へ上がつた。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もゐない。

たゞ金さんが平たく煎餅の様になつて寐てゐる。夫れから例の帆木綿にくるまつて、ぶら下がつてる男もゐる。然し兩方とも極めて靜かだ。居ても居ないと同じく、部屋は漠然としてたゞ廣いものだ。自分は部屋の眞中迄來て立ちながら考へた。床を敷いて寐たものだらうか、但しは着のみ着の儘で、ごろりと横になるか、又は昨夕の通り柱へ倚れて夜を明さうか。ごろ寐は寒い、柱へ倚り懸るのは苦しい。どうかして布團を敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てゝゐるから、南京蟲がゐても寐られるかも知れない。それに蒲團の奇麗なのを選つたらよからう。殊更日によつて、南京蟲の數が違はないとも限るまい。と色々な理窟をつけて布團を出して、そうつと潛り込んだ。

此の晩の經驗を記憶の儘、こゝに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿だと吹聽する事になるばかりで、外に何の利益も興味もないから已める。一口に云ふと、昨夜と同じ樣な苦しみを、昨夜以上に受けて、寐るが早いか、すぐ飛び起きちまつた。起きた後で、あれ程南京蟲に螫されながら、何故性懲もな

く又布團を引つ張り出して寐たもんだらうと後悔した。考へると、全くの自業自得で、しかも常識のあるものなら誰でも避けられる、又避けなければならない自業自得だから、我れながら淺ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭になつて、布團の上へ胡坐をかいた儘、考へ込んでゐると、又猛烈にちくりと螫された。臀と股と膝頭が一時に飛び上がつた。自分は五位鷺の樣に布團の上に立つた。さうして、四圍を見廻した。さうして泣き出した。仕方がないから、紺の兵兒帶を解いて、四つに折つて、裸の身體中所嫌はず、ぴしやぴしや敲き始めた。それから着物を着た。さうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚りかゝつた。家が戀しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六疊の間が戀しくなつた。戸棚に這入つてる更紗の布團と、黑天鵞絨の半襟の掛かつた中形の搔捲が戀しくなつた。三十分でも好いから、あの布團を敷いて、あの搔捲を懸けて、暖たかにして樂々寐て見たい、今頃は誰があの部屋へ寐てゐるだらうか。それとも自分が居なくなつてから後は、机を据ゑたまんま、空ん胴にしてあるかしらん。さうすると、あの布團も搔捲も、疊んだなり戸棚に仕舞つてあるに違ない。勿體ないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京蟲に食はれないで仕合せだ。今頃は熟睡してゐるだらう。羨ましい。――夫れとも寐られないで、のつそつして居るかしらん。父は寐られないと癇癪を起して、夜中に灰吹をほん〳〵敲くのが癖だ。煙草を呑むんだと云ふが、煙草は假託で、實は、腹立紛れに敲き附けるんぢやないかと思ふ。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦々しい倅だと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の餘り眼を覺まして敲いてるか。どつちにしても氣の毒だ。然し此方ぢや夫程にも思つてゐないから、先方でもさう苦にしちや居まい。母は寐られないと手水に起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧を卸すのを忘れ

て、翌朝よく父に叱られてゐる。昨夜も今夜も屹度叱られるに違ない。澄江さんはぐう〳〵寐てゐる――どうしても寐てゐる。自分の居る前では、丸くなつたり、四角になつたり色々な藝をして、人を釣つてるが、居なくなれば、すぐに忘れて、平生の通り御膳をたべて、能く寐る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今迄見た新聞小説には決して出て來ないから、始めは不思議に思つたが、ちやんと證據があるんだから確かである。かう云ふ女に戀着しなければならないのは、餘ッ程の因果だ。隨分憎らしいと思ふが、憎らしいと思ひながらも矢ッ張惚れ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちら〳〵する。怪しからない顔だ。艶子さんは起きてる。さうして泣いてるだらう。甚だ氣の毒だ。然し此方で惚れた覺もなければ、又惚れられる樣な惡戯をした事がないんだから、いくら起きてゐても、泣いて呉れても仕方がない。氣の毒がる事は、いくらでも氣の毒がるが仕方がない。構はない事にする。――そこで最後には、外の事はどうともするから、たゞ安々と樂寐がさせて貰ひたい。不斷の白い飯も蟲唾が走る樣に食ひたいが、それよりか南京蟲のゐない床へ這入りたい。三十分でも好いからぐつすり寐て見たい。其の後でなら腹でも切る。……

かう考へてゐると又夜が明けた。考へてゐる途中で何時か寐たものと見えて、眼が覺めた時は、何にも考へてゐなかつた。それからあとは、のそ〳〵下へ降りて行つて、顔を洗つて、南京米を食ふ。萬事昨日の通りだから、省いて仕舞ふ。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山を登つて來る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いてゐるから道も家も間違へ樣がない。飯場を出て二丁ばかり行くと、すぐ道端にある。木造ではあるが中々立派な建築で、廣さも可成だけに、獰猛組とは丸で不釣合である。

野蠻人が病氣をするんでさへ既に不思議な位だのに、病氣に罹つたものを治療してやる爲の器械と藥品と醫者と建物を具へ附けたんだから、世の中は妙だと云ふ感じがすぐに起る。丸で泥棒が金を出し合つて、小學校を建てゝ子弟を通學させてる樣なもんだ。文明と蒙昧の兩極端が此のペンキ塗の青い家の中で出逢つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧が益〻蒙昧になつてくる。下手に食ひ違つた結果が起るもんだ。と考へながら歩いて來ると、又鬼共が窓から首を出して眺めてゐる。折角の考へも此の氣味のわるい顏を見上げると忽ち崩れて仕舞ふ。あの顏のなかに安さんの樣なのが、たつた一つでもあれば、生き返る程嬉しいだらうに、どれもこれも申し合せた樣に獰猛の極致を盡してゐる。あれぢや、どうしたつて病院の必要がある筈がないと迄思つた。

天氣丈は好都合にすつかり晴れた。赤土を曬た樣な山の壁へ日が當る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。其の上照る日をいくらでも吸ひ込んで行く。景色は晴れがましいうちに濕とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、眞蒼な色が笑み割れさうに濃く重なつてゐる。風は全く落ちた。昨夕と今朝とでは殆ど十五度以上も違ふ樣である。道傍に、たつた一つ蒲公英が咲いてゐる。勿體ない程奇麗な色だ。是も獰猛とは丸で釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ〲に五六間續いてゐる突き當りに、診察室と云ふ札が懸つて、手前の右手に控所と書いてある。今云つた一間幅の廊下を横切て、控所へ這入ると、下は矢張り和土で、ベンチが二脚程竝べてある。小さい硝子窓には受附と楷書で貼り附けてある。自分は此の窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片を出すと、窓の中に腰を掛けてゐた二十二三の若い男が、其の紙片を受取つて、

ありもしない眉へ八の字を寄せて、六づかしさうに篤と眺めた上、
「こりや御前か」
と、左も横風に云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、かう自分を輕蔑するんだか不平に堪へない。それで單に、
「えゝ」
と出來る丈愛嬌のない返事をした。受附は、それぢや、まだ挨拶が足りないと云はん許りに、しばらくは自分を睨めてゐたが、こつちも夫つ切り口を結んで立つてゐたもんだから、
「少し待つてゐろ」
と、ぴしやりと硝子戸を締て出て行つた。草履の音がする。あんなにばた〳〵云はせなくつても好さゝうなもんだと思つた。
自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなか〳〵歸つて來ない。ぼんやりしてゐると、眼の前にジヤンボーが出て來た。金さんがよつしよい〳〵と擔がれて來る所が見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何の爲に藥を盛つて、患者を施療するのか、ほとんど意義をなさない。こんな體裁のいゝ僞善はない。病人はいぢめる丈いぢめる。ジヤンボーは囃したい丈囃す。其の代り醫者にかけてやると云ふのか。鄭重の至りである。
「おい、彼方へ廻れ」
と突然受附の聲がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高に突立つて、自分を眼下に睥睨してゐる。自分

は控所を出た。右へ折れて、廊下傳ひに診察場へ上がつたら、藥の臭がぷんとした。此の臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んで此處の土になつたら不思議なものだ。かう云ふのを運命といふんだらう。運命の二字は昔から知つてたが、たゞ字を知つてる丈で意味は分らなかつた。意味は分つても、納得が六づかしかつた。西洋人が筍を想像する樣に定義丈を心得て滿足してゐた。けれども人間の一大事たる死と云ふ實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでゐるシキとを結び附けて、二三日前迄不足なく生ひ立つた坊つちやんを突然宙に釣るして、此の二つの間に置いたとすると、坊つちやんは始めて成程と首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云ふ事が分る。すると今迄只の山であつたものが、たゞの山でなくなる。たゞの土であつたものが唯の土でなくなる。青い許りと思つた空が、青い丈では濟まなくなる。此の病院の、此の診察場の、此の藥品の、此の臭ひ迄が夢の樣な不思議になる。元來此の椅子に腰を掛けてゐる本人からしてが、何物だか殆ど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見える丈で、どんな意味のある世界か薩張り見當がつかない。自分は、診察場と藥局とをかねた此の一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、藥瓶と、窓と、窓の外の山とを見廻した。尤も明瞭な視覺で見廻したが、凡てがたゞ一幅の畫と見える丈で、其の他には何物をも認める事が出來なかつた。

そこへ戸を開けて、醫者があらはれた。其の顏を見ると、矢つ張り坑夫の類型である。黑のモーニングに縞の洋袴を着て、襟の外へ顎を突き出して、

「御前か、健康診斷をして貰ふのは」

と云つた。此の語勢には、馬に對しても、犬に對しても、足非腹の内で云ふべき程の敬意が籠つてゐた。

「えゝ」
と自分は椅子を離れた。
「職業は何だ」
「職業つて別に何にもないんです」
「職業がない。ぢや、今迄何をして生きてゐたのか」
「たゞ親の厄介になつてゐました」
「親の厄介になつてゐた。親の厄介になつて、ごろ〳〵してゐたのか」
「まあ、さうです」
「ぢや、ごろつきだな」
自分は答をしなかつた。
「裸になれ」
自分は裸になつた。醫者は聽診器で胸と脊中を一寸視た上、いきなり自分の鼻を撮んだ。
「息をして見ろ」
息が口から出る。醫者は口の所へ手を宛てがつた。
「今度口を塞ぐんだ」
醫者は鼻の下へ手を宛てた。
「どうでせう。坑夫になれますか」

「駄目だ」
「何處か惡いですか」
「今書いてやる」
醫者は四角な紙片へ、何か書いて抛り出す樣に自分に渡した。見ると氣管支炎とある。氣管支炎と云へば肺病の下地である。肺病になれば助かり樣がない。成程さつき藥の臭を嗅で死ぬんだなと蟲が知らせたのも無理はない。今度は愈死ぬ事になりさうだ。是から先二三週間もしたら、金さんの樣によつしよい／＼でジャンボーを見せられて、其揚句には自分がとう／＼ジャンボーになつて、それから思ふ存分囃し立てられて、敲き立てられて、――尤も新參だから囃して呉れるものも、敲いて呉れるものも、ないかも知れないが――とゞの詰りは、――どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつても宜ろしい。生きて動いてゐる今ですら分らない。たゞ世界がのべつ、のつぺらぼうに續いてゐるうちに、あざやかな色が幾通りも並んでる許りである。坑夫は世の中で、尤も穢ないものと感じてゐたが、斯樣に萬物を色の變化と見ると、穢ないも穢なくないもある段ぢやない。どうでも構はないから、どうとも勝手にするがいゝ、自分が懷手をしてゐたら運命が何とか始末をつけて呉れるだらう。死んでもいゝ、生きてもいゝ。華嚴の瀑へ行くのは面倒になつた。東京へ歸る？何の必要があつて歸る。どうせ二三度咳をせくうちの命だ。此處迄運命が吹き附けて呉れたもんだから、運命に吹き拂はれる迄は、此處にゐるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順當な譯だ。此處に居て、たゞ墮落の修業さへすれば、死ぬ迄は持てるだらう。肺病患者にほかの修業は六づかしいかも知れないが、墮落の修業なら――ふと往きに眼

に附いた蒲公英に出逢つた。さつきは勿體ない程美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。何故之が美しかつたんだらうと、しばらく立ち留まつて、見てゐたが、矢つ張り美しくない。それから又あるき出した。だら〳〵坂を登ると、自然と顔が仰向になる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖を突いて、自分を見下してゐる。さつき迄はあれ程厭に見えた顔が丸で土細工の人形の首の樣に思はれる。醜くも、怖くも、憎らしくもない。たゞの顔である。日本一の美人の顔がたゞの顔である如く、坑夫の顔もたゞの顔である。さう云ふ自分も骨と肉で出來たたゞの人間である。意味も何もない。

自分はかう云ふ狀態で、無人の境を行く樣な心持で、親方の家迄やつて來た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子をあけて出た。かう云ふ娘がこんな所に居やう筈がないんだから、平生ならはつと驚く譯だが、此の時は丸で何の感じもなかつた。たゞ器械の樣に挨拶をすると、娘は片手を障子へ掛けた儘、奧を振り向いて、

「御父さん。御客」

と云つた。自分は此の時、これが飯場頭の娘だなと合點したが、たゞ合點した迄で、娘がまだ其處に立つてゐるのに、娘の事は忘れて仕舞つた。所へ親方が出て來た。

「どうしたい」

「行つて來ました」

「健康診斷を貰つて來たかい。どれ」

自分は右の手に握つてゐた診斷書を、つい忘れて、おや何處へやつたらうかと、始めて氣が附いた。

「持つてるぢやないか」
と親方が云ふ。成程持つてゐたから、皺を伸して親方に渡した。
「氣管支炎。病氣ぢやないか」
「えゝ駄目です」
「そりや困つたな。どうするい」
「矢つ張り置いて下さい」
「そいつあ、無理ぢやないか」
「ですが、もう歸れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいゝですから。何でもしますから」
「何でもするつたつて、病氣ぢや仕方がないぢやないか。困つたな。然し折角だから、まあ考へて見樣。明日迄には大概樣子が分るだらうから又來て見るがいゝ」
自分は石のやうになつて、飯場へ歸つて來た。
其の晩は平氣で圍爐裏の側に胡坐をかいてゐた。坑夫共が何と云つても相手にしなかつた。相手にする料簡も出なかつた。いくら騷いでも、愚弄ても、よしんば踏んだり蹴たりしても、彼等は自分と共に一枚の板に彫り附けられた一團の像の樣に思はれた。寐るときは布團は敷かなかつた。やはり圍爐裏の傍に胡坐をかいて居た。みんな寐着いてから、自分も其場へ假寐をした。圍爐裏へ炭を繼ぐものがないので、火の氣が段々弱くなつて、寒さが次第に増して來たら、眼が覺めた。襟の所がぞく／＼する。それから起き

て表へ出て空を見たら、星が一杯あつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだらうと思つて、又内へ這入つた。金さんは相變らず平たくなつて寐てゐる。金さんはいつジヤンボーになるんだらう。自分と金さんとどつちが早く死ぬだらう。安さんは六年此のシキに這入つてると聞いたが、この先何年鑛を敲くだらう。矢つ張り仕舞には金さんの樣に平たくなつて、飯場の片隅に寐るんだらう。さうして死ぬだらう。——自分は火のない圍爐裏の傍に坐つて、夜明迄考へつゞけてゐた。その考へはあとから、あとから、仕切りなしに出て來たが、何れも干枯びてゐた。涙も、情も、色も香もなかつた。怖い事も、恐ろしい事も、未練も、心殘りもなかつた。

夜が明けてから例の如く飯を濟まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいゝ聲をして、

「來たか、丁度好い口が出來た。實はあれから色々探したがどうも思はしい所がないんでね、——少し困つたんだが。とう／＼旨い口を見附た。飯場の帳附だがね。是や無ければ、なくつても濟む。現に今迄は婆さんが遣つてた位だが、折角の御頼みだから。どうだね夫ならどうか、おれの方で周旋が出來樣と思ふが」

「はあ難有いです。何でも遣ります。帳附と云ふと、どんな事をするんですか」

「なあに譯はない。たゞ帳面をつける丈さ。飯場にあゝ多勢ゐる奴が、やゝ草鞋だ、やゝ豆だ、ヒジキだつて、毎日色々なものを買ふからね。そいつを一々帳面へ書き込んどいて貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、たゞ誰が何をいくら取つたと云ふ事が分る樣にして置いてくれゝば夫れで結構だ。さうすると此方で其の帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡す樣にする。——なに力業ぢやないから、誰

でも出來る仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合だからね。君がやつて呉れると此方も大變便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりませう」

「給金は少くつて、まことに御氣の毒だ。月に四圓だが。――食料を別にして」

「それで澤山です」

と答へた。然し別段に嬉しいとも思はなかつた。漸く安心したと迄は固り行かなかつた。自分の鑛山に於ける地位は是でやつと極つた。

翌日から自分は臺所の片隅に陣取つて、かたの如く帳附を始めた。すると今迄あの位人を輕蔑してゐた坑夫の態度ががらりと變つて、却て向ふから御世辭を取る樣になつた。自分も早速墮落の稽古を始めた。南京米も食つた。南京蟲にも食はれた。町からは毎日々々ポン引が椋鳥を引張つて來る。子供も毎日連れられてくる。自分は四圓の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。然し其の後東京へ歸らうと思つてからは斷然已めにした。自分は此の帳附を五箇月間無事に勤めた。さうして東京へ歸つた。――自分が坑夫に就ての經驗は是れ丈である。さうしてみんな事實である。其の證據には小說になつてゐないんでも分る。

昭和三年四月五日印刷
昭和三年四月十五日發行

漱石全集第四卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

（大森製本）